



（岡山製本）

大正三年六月七日印刷
大正三年六月十日發行

有朋堂文庫
娘節用・女房氣質（非賣品）

編輯兼發行者　東京市神田區錦町一丁目十九番地　三浦理

印刷者　東京市本所區番場町四番地　平井登

印刷所　東京市本所區番場町四番地　凸版印刷株式會社分工場

發行所　東京市神田區錦町一丁目十九番地　有朋堂書店

以前こがね屋の番頭たりしもみ助といひしもののよし。さすれば澤山に言分あらん。其方へ引渡し申すべし。勝手次第になすべし」とありければ、奈久四郎は打悅び、その罪を責めんとなせしを、母おぬかの、いろ〳〵と詫びけるゆゑ、其儘放ちやりければ、鼠の逃ぐるが如く、行方も知らずなりにける。かくて是より、又たらふく屋の世話にて、以前にませし店を開き、彼の五萬兩の金をもつて、また〳〵金貸を始めけるに、次第に利潤を得て 忽ち大の分限となりけるゆゑ、あらためて此度は、半澤六郎の 媒 となり、かのたらふく屋はまた里となり、お雪を送りければ、奈久四郎は始て不審晴れ、且その心の賢なるに恥ぢ、是よりはお雪をいと大切になし、夫婦いと中好く暮しけるゆゑ、子寶多く、行末長く榮えけるとなん。もつとも母のおぬかも、最健かになり、百年の壽命をたもちけるとかや。まことに目出たき事なるぞがし。めでたし〳〵。

當世男女之鏡　敎草女房形氣　終

て喜び勇みつゝ其日は御暇申して歸りけるが、其方家内の者、殿へ直々御願を上げしとは、いかなる間違にやと、更に合點ゆかずも、夢路を辿る思にて、秩父の御屋敷を下りぬ。然るにたらふく屋太利右衛門は、奈久四郎のおてこを離縁なすと聞き、さらばとて、お出入屋敷にて日頃懇意になす事ゆゑ、半澤の許に至り、こがね屋の零落を訴へ、これかれ歎願なせしに、さいはひ今年は殊の外豐作にてある事ゆゑ、半澤こゝろよく請合ひ、委細を殿へ申上し處、豫て又内意により、お雪よりも内奏ありし事ゆゑ、殿にも不便に思召し、よきに計へとの事ゆゑ、奈久四郎を呼出し、かくは言渡せしなり。尤も其段豫て半澤方より内通のありければ、太利右衛門は、此日秩父の御門前に至り、奈久四郎の下りを待受け、その悦を述べけるに、奈久四郎は、唯有難涙にくれつゝも、厚く禮をのべて、天へも上る心地にて、急ぎわが家へ歸り、かくと母おぬかに語りけるにぞ、おぬかは呆るゝ事半時ばかり、是も唯有難涙にくれ居たり。然るにその夜、秩父の御屋敷より、彼の五萬兩の金を送りけるに、狹き家ゆゑ、置所もなきまでなれば、あたり近所の者は、つひに目なれぬ千兩箱を、山の如くに積上ぐるゆゑ、誰も來よ、彼も來よと、その見物あたかも山の如く、其時警固の役人、一人の男を高手小手に縛め連來り、「今この金を運ぶ途中にて、千兩箱をひとつ奪取り、逃去らんとするものあるゆゑ、急ぎ召捕り鞠問せしに、

所ながら暇請なしつゝ、さも悲しげに涙を浮めつゝ、かの屠所の羊にあらねども、力なげにも引かれゆき、秩父の御屋敷に至りけるが、いと薄暗き所に、暫く待たせられ、この上は如何なる憂目に逢ふ事やと、念佛稱へてその沙汰を待つに、暫くありて、此方へと茶坊主の案内にて、此度は最廣やかなる所にいたりしに、正面には御家老半澤六郎立出で、「これは〳〵黄金屋奈久四郎、いと久々にて逢ひました。其方の父とは兄弟同樣親しくなせしが、その中大に打絶えたり。尤も其方も豫て知つての通り、十萬兩の御借入は、其頃打續いて御知行所の違作といひ、且其方の代となりては、形の如き亂暴にて、殿の御印を据られし證文を失ひ、剰へ番頭籾助、さま〳〵の虚言をかまへ、彼是もつて不都合の事のみなりし故、其儘一錢の御下金もなかりしが、此度其方方親類、たらふく屋太利右衛門の願といひ、且は其方の家内の者、殿へお直に、家再興の願もつともの事と思召すにより、此度五萬兩御下金となり、殘五萬兩は相應の利分を添へて、更めて御借入となり、新に證文渡す間、かならず粗末になさゞるやう致さるべし。且是までの利分滯りゆゑ、是亦あらためて、月々五十人扶持を下さる程に、有難く御請をなし、いつなんどきにても、金子を持運ぶべし」と言渡され、奈久四郎はあまりの嬉しさに腰さへ立たず、えゝとばかりに閉口なして居たりしが、やう〳〵の事にて顏を上げ、有難き由御請なし

背負ひ、出でて行くにぞ、奈久四郎は、今更手に持ちし物を捥取られし思にて、茫然として居たりしが、さりとてこの夜中何所へ行くやと、後を追うて出でて見るに、豫て合圖やしたりけん、何所よりか倶梨迦羅の吉五郎出來り、彼の包を請取り、ふたり手に手を取交し、何所をさしてや走行くを、奈久四郎は能くも認めて、呆果てて居たりしが、是非もなければわが家へ歸り、溜息つきて居たりける。この先吉五郎は間もなく召捕られ、おてこはさま〴〵の難儀をなして、末つひに倒死をなしたるとなん。これ天罰の然らしむる業にして、いまだ其巨細を說きたけれど、丁數既に限あれば、このまゝにして止みつ。善には善の報あり、惡には惡の報あり、それらはわが言ふまでもなく、皆子供衆の知り給へども、猶も心掛け給へかしといふ。

九段

奈久四郎は、かゝる踏付の目に遭へど、素より意氣地なければ、たゞ心の内にてふづくむのみなりしが、それより五六日目にあたり、一人の足輕、家主に案內さして入來り、「これより、秩父の御屋敷へ急の御召なり。早く來れ」とさも權柄に陳べけるにぞ、奈久四郎は、是ぞ彼の謀判の事なるべしト思へば大に驚き、もじ〳〵なしてありけるを、彼の足輕は腹立ちて、罵り罵り引立つるにぞ、よんどころなく支度をなして、是が此世の名殘とおもへば、母おぬかにも餘

れば、いたく驚きけるが、何か樣子のある事ならんと、まづ急ぎ呼入れ、いと懇に待遇しける。

八　段

其時太利右衛門の妻おためも出來り、何か愛想をいひつゝ、當時の樣子を聞かれ、奈久四郎はさすがに面目なく、暫時さし俯向いて居たりしが、かくては果てじと思切つて、豫ておてこの敎の通り、母の大病ゆゑ無心の由をのべ、「さすれば、私の首も繫ります」とは、前後揃はぬ口上ゆゑ、太利右衛門は合點ゆかずと、猶も彼是うら問へば、奈久四郎は挨拶に困り、その實を打明け、おてこを離縁のよしを語りければ、太利右衛門暫く考へ居たりしが、心中大に悅び、さらばとて、こゝろよくも請合ひ、傍なる小簞笥より、ぞく〳〵と二十兩取出し、外に十兩は、母への土產にせよかしとは、さすがに大家の旦那風。奈久四郎は何にも言はずさし俯向いて居たりしが、やう〳〵の事かの金を押戴き、夜も早次第にふけ渡るゆゑ、その夜はいとあわたゞしくも歸りける。然るにおてこはまだ寢もやらず、目ぼしきものは何くれとなく取集め、一風呂敷となし居たるが、奈久四郎の、いとほこりがにも、かの二十兩を渡せば、たちまち滿面に笑を含みつゝ、「それでもお前男なり、能くもこの金借りてお出だ。私もやう〳〵支度出來たり、ちと夜は更けたれど、善は急げ、これから直樣お暇せん」と、かの風呂敷包をしつかりと

でお出。それにつけても、さういふ罪のある亭主を持つて居ては、今にもひよんな連坐に遭ひます。それより今の間に暇を貰ひませう。尤も昔なら二百とか三百兩とかいふ處だが、錏さへ一文もない人に、それではとても出來ぬえから、大負にして二十兩貰ひたい。それが不承知なれば、訴人して、お前の首へ、ひよんな物でもつけて上げん」と巧みにたくみし嘘の皮なれども、愚の奈久四郎は仰天なして膽を潰し、只茫然と途方に暮れて居たりしが、おてこは猶も得たりと、入智惠なすやうは、「母の大病ゆゑと泣付かば、たらふく屋などにては、譯もなく貸してくれんに、明日とはいはず今宵すぐ、是より行き、借りて來ねえ。はやく〳〵」とせりたてられ、奈久四郎は、腹のへりしも何所へやら、口よりまた大變の出來りしと、うろ〳〵なして居たりしが、餘儀もなければ、ぶら〳〵と出掛けて、早くもたらふく屋の門まで來りしが、さすがにその身の零落れしに恥ぢてや這入りかねつゝ、裏手の水口へ廻り、思案をなして歎息の餘り、其所に寢て居たる斑犬に、何かよまひごとをならべ居たる折しも、たらふく屋の主人太利右衛門は、家内の見廻り、いざやねまらんと、勝手の口まで來し處、誰やらん、はなしの聲の聞えけるゆゑ、不審をなしつゝ雪洞出してよく〳〵見るに、夜目にて能くは判らねど、絶えて久しき奈久四郎に能く似たるゆゑ、それかあらぬかと聲をかくるに、奈久四郎に相違なけ

敎草女房形氣 二十五編下之卷

七　段

ある黄昏の頃、役所歸りの奈久四郎は、辨當腹にいとひもじく、はや足に歸來りしに、おてこはぐでんぐ〵に醉倒れ、枕元に貧乏徳利をいくつか竝べ、さも苦しげなる母の大病も打捨てお き、さも心よげに寢て居たりしが、やうやう〵に眼を覺し、頻に水を呑み居たり。奈久四郎は苦き顏して、夕飼の支度を急げば、おてこはぶつてうづら、「なに、夕飯が喰ひたい。お前も呆れたあんぽんたん、何所から米の錢が出る。私も腹が減るゆゑに、據なく酒を呑んで怺へて居た。それよりはお前の留守に、大變が出來たぞえ。よもやお前も忘れもしめえ、しかも私を請出す時、福田屋徳助さんの所へ、千兩の家質を置き、五百兩借りたとは、其時慥にお前の話。ところが今となつて顯れたのは、期月が來たゆゑ、よく〵穿鑿した處が、彼は皆番頭籾助のしやらくにて、沽券はまつかな僞物にて、謀判の由。尤もお前の名前ゆゑ、このまゝ公事に致しますとの事。さすれば、物言はずお前の大變。それ故、さまぐ〵に詫言して、今日の處は歸しました。なれども斷る姿となつては、今更せんなく、どうで徒でも濟むまいから、その積

せ、悪だくみをすゝめける。

菊、はや絆切れて程經たる事ゆゑ、いかにともせん術なく、餘儀もなければ、それより又野邊送の支度をなし、一片の烟となしにける。嗚呼憐むべし。所謂親の罪子に報ふといへるは、これをやいふべし。

六段

さるほどに、玉の助の野邊送は濟みぬれど、かの諺にもいふ如く、惡事千里を走るのならひにて、誰いふともなく、おてこはわづかの金に眼がくれ、母おぬかを縊らんとせしその手の逸れて、かはいわが子を殺せしとなん、天の罰こそ怖しきなんどと、とり〴〵の評判ゆゑ、その事おてこの耳に入り、やすからぬ事には思へど、人の口には戸もたゝず、さすがの惡女も痛く恥らひけるが、更にせん術なかりける。然るに吉五郎も名うての惡黨、舊惡のある上にも、よからぬ事のみに世を送るゆゑ、めあかしどもの此程は、附覘ふよしを聞き、さらば急ぎて巣をかへんと、行がけの駄賃に、猶もおてこをたらし、路用の算段させんものと、そのあらましを程よく口にまかせて語りけるに、おてこもかの惡評をうけ、とつおいつ、胸に思案の折からなれば、今は足手がらみもなし、同じく共に高飛せんと、彼の事どもを落なく語れば、吉五郎もその大膽なるを心に怖れながらも、さもあらば、かく〳〵なして、金をとゝのへよかしと、何か耳に口寄

入れ、うんと言ひたる途端の拍子、ふつと斷れたる細帶の、手先は狂ひて、傍に寢て居たりし、玉の助の脾腹のあたりを強く撲てば、なんぞ圖らん、玉の助は、眼口より鮮血を出して、のたうちまはして苦しみしが、もろくも息の絶えけるにぞ、鬼神を欺くおてこなれども、かはいわが子を、行違ひとはいひながら、わが手に殺し、なんぞ驚かざらん、なにもかも打忘れ、藻脱の殻に取付いて、撫でつ摩りつ、歸らぬ事を小車の、しどのはしがき搔口說き、噎入り〳〵正體なくも歎き居たり。

五　段

おぬかは能々天の助にやよりけん、やゝ息吹返し、かゝる騷とも知らず、猶も「どろばう〳〵」と、夢中に騷ぐにぞ、あたりの人は何事やらんと馳來り、見れども更に盜人らしきものなく、おてこの樣子、おぬかの有樣、更に合點ゆかず、おの〳〵けゞんの顏にて眺め居たる處へ、奈久四郎も歸來り、是も亦肝を消して、更に合點ゆかず。その時おてこは、やう〳〵顏を上げ、「いかにして玉の助は死せし」といふにぞ、皆々はじめて驚き、「さすれば大變なり、まづ誰彼は醫師を呼來よ。また誰は艾を買來れ」と人鬼はなく、彼是長屋の者の立騷ぐにぞ、おぬかの事を、さいはひに誰不審するものなかりし折しも、醫者の來り、早速に脈を診し處、六日の菖蒲十日の

四　段

おてこはさすがに女の事、かゝる場所へ踏込みし事なかりしが、千金は湯水の如く、さも富貴に見えけるゆゑ、膽を消しつゝ、かの場所を覗き見るに、黄金白銀を塵芥の如く取扱ふ有樣、なるほど一當あてなば、濡手で粟の摑取り、資本が肝腎なりと思ひ、歎息なして居たりしが、ふと思ひけるに、いまだ母おぬかの、三兩持居る事を思出し、今一番、これを捲上げて資本にさせんと、そのあらましを、吉五郎に話しおき、取つてかへせし處、玉の助も能く寢入り居たるに、母のおぬかも、同じくすや／＼睡り居るにぞ、是幸ひなり、在所は慥に見て置きたるぞと、盜出さんと寢息をよく／＼考へつゝ、先刻仕舞ひ置きし、蒲團の下へ手を差入れ、かの金包をうま／＼と探しあて、引出さんとする時、おぬかは年寄の事、敏くも目を覺しけるが、おてことは知らず、膽を消し、おもはずも聲を立て、「どろばう／＼」と二聲三聲こゝを先途と喚くにぞ、さすがのおてこもあわてふためき、おぬかの上に馬乘となり、わが顏見せじと、目を押へ居たりしが、さそくの思案にくれながら、いつその事ひと思に、押片付けんと、手早くもわが細帶を解き、おぬかの首をクル／＼と卷締め、力に任して締つくるにぞ、おぬかはあれよの聲さへ立たず、七轉八倒なして苦しむに、人や見ん、早く押片付けんと、猶も一世の力を拳に

おてこは猫の鼠を捕りし如く、勇みよろこびつゝ、一刻も早く吉五郎にこの金を渡し、喜ぶ顔を見て樂しまんと、いつも居る所へ尋行きしが、居らざれば、またほかを彼方此方と探せど、更に出合はず。然るに丁度好き所にて、吉五郎の友だちに遇ひけるゆゑ、吉五郎の行先を問ふに、よくも知りて、「さらばとよ、吉公は、いかにしてたんさんをきめこみしにや、櫻判をみつよつ懷中にして、好い金張のある故に、鰕で鯛を釣る積にや、出かけて行きしが、かはいや今頃は、四月八日のお釋迦さん、丸裸體となりて、壺でも振つて居るならん。しかしさういふ身共は、一錢の手段も盡きて、かくの浪々。なんとおてこさん、いかほどか貸してはくれまいか。大方吉公の彼の金も、お前の算段ならん」ト星を指されて、おてこは笑ひながらも、「好い氣なかんだ。人聞が悪い。止してもおくれ」といひつゝも立別れ、急ぎかの所へ至り、吉五郎を呼出し、樣子を聞くに、案の如く薄資本ゆゑ、忽ち利を失ひしといふゆゑ、かの金を取出し、さもほこりがに渡しぬれば、吉五郎は手を合して拜みつゝ、今一番これを資本に大金儲けんと、心を入れて張掛しに、なんぞかゝる不義の財に利のあるべき、こひめは鶍の嘴と喰違ひ、瞬く間に、また打負け、唯茫然と胸の邊にふたつの玉をこしらへ、脚爐を股へ押入れて、恨めしげにも、場所の方をば眺め居たり。

見た事もない。何であらふ筈がない。奈久四郎の歸るを待ちて、兎もかくも相談なし給へ」ト聞くよりおてこは眼を剝出し、「おゝ、金といふものは見た事もなからうが、たつた五兩の包金、慥に知つて居るゆゑに、皆ともといふ處だけれど、格別の勘辨をもつて、半分に足らぬ二兩ばかりの眼くされ金、かはい子にくれても罸もあたるめえ。なんぼ死慾が張るとても、そんな心ゆゑ、年を取つて難儀もする。この老耄奴、出さずば出さずに置くがよい。なにそのまゝに捨てておかんや」と鬼神羅刹の如く、髮を逆立て、滿面に朱を濺ぎし有樣は、さも悽じきに、おぬかは身の毛もよだつおもひにて、おてこの顏を見かへす事のならざりしが、かくいふからは、貰ひたる金を見しゆゑに、かくはいふならんト思へば、餘儀もなく〳〵金を包のまゝ取出し、二兩取分け、「是は私が悪かつたが、折角嫁の方より內々にて送りしゆゑ」トいひつゝほろりと一雫。おてこはせゝら笑ひながら、「嫁とは私の外にはない筈。そして、いみ〳〵しい、泣く程此金が惜しいものか。寶は世界をまはるゆゑ、調法もするし、仕舞つておくなら、石瓦も同じ事。思切の悪いにも程がある」ト口小言さへだら〳〵に、ひつたくるやう彼の金を取上げ、巾著の中へ押入れ、につことなしつゝ、そのまゝまたも出でて行く。

三　段

かはりし優しさ。おぬかは更に合點ゆかねど、素より正直の生れなれば、人も亦しかなりと思へば、これは慥に、お雪の使おこしたるを知り、さすがにそれに心恥かしく思ひ、急にかくいふにや、又は日頃信心をなす阿彌陀樣のお蔭にて、邪見の角も折れて、かゝる優しき心となりしにやと思へば、そゞろに嬉しく、「はい有難う。今日は昨日より餘程好いやうなれば、勿體ない、摩つて貰うては罰があたります。おや玉坊は晝寢かえ。風でもひいてはなりませぬ。是を著せて、其所へ寐かすが好い」と最垢染みたる搔巻にて、おのれは古布子ひとつとなり、更に寒がる氣色なきは、かの諺にもいふ如く、孫の可愛さは又別にして、堪らぬものにやありぬべし。おてこは折よしと膝すりよせ、「今も家主の太六さんの所で見て來たが、御番所羽織にするとて、麴町の岩城桝屋より取寄せしに、縞柄の氣に入らぬゆゑ、拂物にしたいが、お前の所の奈久四郎さんはどうだと、おかみさんの話、尤も直段は半分にて、代物は極の上物、幸ひ羽織も荒布のやうになりたれば、お貰ひ申したいとは言つたけれど、差當つてお金の工面も出來ず、折角の掘出し物を、他へ遣るのも殘念だ。なんとお金があるならば、二兩ばかり、うちで歸るまで、貸してはおくれまいか」とたくみにかけし金のわな。おぬかは心中に驚くといへど、胸撫下してそしらぬ顏、「おゝ、それは好い拂物ゆゑ惜しい事だが、お金といふものは、近頃私は

敎草女房形氣　二十五編上之卷

初　段

さても奈久四郎の妻おてこは、思はずも立聞なして、母の方へ、先妻たるお雪より、おくちを使となして送越したる黄金のありけるを、慥に知るよりは、かの餓鬼道の食物を見るごとく、いたくも打悅び、かの密夫の吉五郎が、打續きたる不仕合を救ひやらんと思ひける。すべて浮草の流の末は、かゝるならずものの果を好み、殊の外身を入れけるゆゑ、なにとぞ荒立てずして金を奪取り、一刻も早く吉五郎の悅ぶ顏見んものをと、さまざまの工夫を凝しける。

二　段

然るに、おてこ思ふやう、母おぬかとても年こそ寄れ、なかなかにさるものなれば、貸してくれろと言ひかくるとも、直ぐすなほに出す事にはあらず、騙すにしかじと心を定め、いつに變りていとにこやかにも笑ひかけて、今歸りし如く、跫音高くも、おぬかの枕元に行き「今日は如何だ。おやおやちつとは好ささうな顏付。それは何より嬉しい事。それでは何ぞ食べたいものはないか。なんなりと遠慮なくおいひ。どれどれちつと摩つて上げやう」とは日頃に打つて

○教草女房形氣　廿五編　結局

二十六編よりの御披露

是は此度、世にも珍敷咄の次第ト、其頃専ら賣歩行しよし、一書に見えたる中往昔のことになん、兄弟姉妹ありけるが、其心大に賢愚の違ありて、亦貧福に差別、行跡の善悪、雪と炭との如く、一世の盛衰、最面白くして、喜怒哀樂の人情、細なれば、教草にもなるべき事の多ければ、實説を其儘掲出したるは、又一入御眼前も替りて、よからんと思へばなり。御求御覽あれかしと、俗々敷も次編の御披露旁、此編の序文に換へるものは、未口嘴も青々しき

鶴亭秀賀述

かの側へ行きけるは、如何なる心入にや。なほ次の卷に說わくるを、發兌の時を待ち得て知り給へかしといふ。めでたし〳〵。

がらに、おてこの身の上より、慳貪邪見の振舞を始め、又不義のしだらのある事までを殘りなく語りきかすれば、おくちも呆れはてつゝ、「さればこそ、さすが時めき榮えたる御身上も、わづかの内に斯くまで零落れ給ひしも、實は若旦那のお心得違にて、そんな者に卷込まれ、あなたを粗末になし給ふ御罰にや御座りませう」とは、おくちの口よりは、ちと出過の樣には聞ゆれど、大事と思ふ主を見限られしを、悔しく思ひての故なるべし。

九段

斯くておくちは、見ること聞くこと哀ならずといふ事なく、げに世は塞翁の馬にして、有爲天變の浮世ぞと嘆息なしてありけるが、歸りには太良福屋へも寄る筈なれば、あまり遲なはらぬ内と、名殘惜くも暇を乞へば、おぬかは何ととゞむる由もなく、絕入るばかりに咽入れば、おくちも立ちかねて居たりしが、まごまごなして在るうちに、おてこの歸來りなば、間の惡からんと、漸くに思切りて立上り、またを約して歸りける。爰に又おてこは、吉五郎に他事ならぬ打續きての不仕合ゆゑ、是非とも三四兩の金を働きくれよ、さもなければ駈落と聞いて、おてこも、と胸をつき、當もなけれど、其内には工風をなして見んものをと、約束なして先刻歸來りけるが、二人の話を委細に聞取り、腹中大に悅び、何か點頭きつゝにやにや笑ひかけ、おぬ

如何なりと、お雪樣には思召しますれど、不圖した事より、當時の御有樣を委しく御存じありましてからは、朝晩の物さへ召上らず、御心配を遊ばす故、私が一生の智慧をふるひまして、昔勤めしものと僞りて參らば、今のお嫁御樣の前を憚る事も御座りませぬとおすゝめ申して、今日は御病氣見舞のお使に上りました」と、彼の小間物屋より委しく聞きたる事などを語りつつ、おぬかの口に合ふ物ばかりを、重詰となしたるを土産として差出し、其上金子五兩を取出し、「これは餘り失禮ながら、せめては召上りたき物を取つてあがるやうにと、あなたさまの御心入、お請け遊ばせ」と渡しければ、おぬかは、世にありし時の千金にも優して嬉しく、押戴き、折角の心入れゆゑ、道ならねど貰つておきまする。そしてお雪は、其後秩父樣の奧へ上りしと風の便に聞きましたが、矢張お屋敷にまめで居る事かえ。此方でも彼の事一日も忘れる隙はないけれど、思ふにまかせぬ事ばかり、疎遠にするのを憎しとも思はず、能く深切な今日の見舞、私や嬉しいにつけても亦悲しくなつた。どうで儘ならぬ此浮世、いつそ死にたくなつたわいの」ト身を慄はして泣居るを、おくちは慰めかねつゝ後に廻り、「サヽ其樣におむつがりましては、却つて御病氣の障、幸ひお嫁御樣のお留守の御樣子、少しなりとも彼方樣の御代に、お肩を揉んで上げませう」とひねりかゝれば、おぬかは勿體なしと否みながらも、是よりは又涙な

一人の女、彼方此方とまごつきながら、小腰を屈め、「ハイ鳥渡お頼み申します、黄金屋様のお假住居は此方で御座りますか。私は以前御恩を受けた者で御座います」トいふ聲は、どことやら聞馴れし様おもへば、おぬかは少し床を這出でて、「何方様か存じませぬが、黄金屋は此方で御座います。御用ならお上りなさいまし」トいふ聲は、覺えあるおぬかの聲音なれば、此方は嬉しく、「そんなら御免遊ばせ」と上りけるが、廣くもあらぬ家の事故、屏風の立てし處は、病間ならんと、供に持たせし包を持つて側へ行き見るに、おぬかは有りしに事變り、貧苦に煩ひ病苦に責められ、たゞさへ面痩せしそが上にも、窶れにやつれし其有様、實に見るかげも無きみそぼらしさ。それに引かへ、また片方は、さすが大家に勤むることゆゑ、低き役とはいへど、見様見眞似の上品造、これまた見違へる程にありければ、互に顔見合し、膽を消すばかりなりしが、漸くに、おぬか「オヤおぬしは、お雪の附人おくちであつたか」おくち「まことにお久しぶりで御座います」といひつゝ、互に先立つものは涙にて、暫し詞もなかりける。

八段

おぬか其後とも更に咽入りてありけるを、おくちは、「お道理様や」と背撫摩りつゝ、さていふやう、「表立ちて御離縁といふ譯でも御座りませねど、一旦夫に見限られし者より、使立てるも

わつとばかりに泣伏すにぞ、清吉は其譯を知らざれば、よしなき事を話せしと、大に後悔をなじつゝ、立端を失ひて居たりける。これ如何なるものぞや、次に說解くるを讀みて知るべし。

七[illegible]段

其後おてこの思ふやう、餘りにおぬかの憎ければ、此時を幸ひに締殺さんとなしたるに、思の外の騷となりし故、餘儀なく其場は濟したれど、何もかも委細に知りたる上は、生して置いても氣がかりなり、さりながら斯る騷をなせし上は、直になせば必ず我所爲と知るゝは必定なれば、折を見合せ、今度は毒藥一服用ゐてやらんものをと、根締を極めてぞ、知らぬ顏して居たりけるは、實におそろしき心根なり。或日の事になん、彼の倶梨迦羅龍の吉五郎は、此節打續きたる不仕合にや、腹掛股引さへもなく、玉紬の五本天縞なる、最早八ッ時といへる、いと垢染みし袷一ッを著て朝湯に入り、寒を忘れしといふ形にて、濡手拭を肩にかけながら、「伊達の薄著も貧からおこる」と、鼻唄ながらに入來り、「大分今朝は早かつたのう。オイてこじるし、賴む事があるから、顏をかしてくんな」と言ひすてて出行くは、餘りに二人の評判高ければ、さすが家にては然る淫の振舞もならざれば、中宿をこしらへたるなるべし。おてこは「アイ」と言ひつゝ玉之助を抱き、「また貸してくれろか、困つたもんだ」と獨語ちつゝ出でて行く。後へ引違へて

出し、彼のお實の家を心ざし、一生懸命に漸く逃行きけるが、小間物屋へ上るや否や、最早よしと思ふにや、ウンとばかりに正氣を失ひ倒伏せば、何事にやと、小間物屋にては大に驚き、それ水よ氣付よと介抱なせば、漸くおぬかは元に復し、それより斯様々々云々なりと、委細を語れば、おてこの無法を皆々憎むといへど、斯くて其儘打捨てもおかれねば、清吉は長屋の者二三人を頼み、仲人となりおてこの心を宥め、仲直をさして、漸くおぬかを送歸しければ、一旦は無事に濟みにける。

六　段

然るに此小間物屋の清吉といへるは、至つて口前の好き男なるゆゑ、多くの屋敷へお出入なして躍歩くに、何方にても清吉々々とて可愛がられけるが、或日秩父の屋敷へ行き、多く商なして、それより部屋方の相手に、例の剽輕話をなす序に、「私どもの近所なる黄金屋にて、中氣の藥鶴齢湯と、髪のくせ直菊の露と取違へてより、嫁姑の大喧嘩となりし其仲人となり、誠に困りました」と、少しは尾鰭をつけて人の笑になるやうに話しければ、皆々大笑をなすその中に、一人の部屋方其話を聞くより、何か心にあたりけん、清吉を密に招き、猶も其委しき事を問ふにぞ、清吉もまさかに隱立もならざれば、斯様々々云々なりと語りければ、其部屋方は

しみを受ける道理、此處がおじつ婆アさんの言はれし通り、眼を睡つてお念佛申して濟さうか、いや、他事ならぬ此一條、と彼の文を碎くるばかりに握りつめつゝ、打案じて居る其折しも、裏口よりづつと歸り來りし嫁のおてこ、それと見るより、おぬかは序あしゝと彼の文を急ぎ後へかくし、そしらぬ顏して居らんとすれど、鏡臺の引出拔きてあること故、おてこは早くも見つけ、「こりや大變の物を取られしと、玉の助を傍に寢かし置き、けんそをかへて母の側へ行き、「是母ア、今お前が見て居た文を一寸お見せ」ト優しくいひて油斷をなさしつゝ、瘦衰へしおぬかの細腕を捻上げつゝ、彼の文を手早く奪ひかへし、口にて散々に裂捨て、最早よしと莞爾と笑ひつゝ、「サアこゝなどろばう婆ア奴。人の入物を探して何を盜んだ、白狀しろ。モウ斯うなつては親とはいはさぬ、畜生奴」と、夜具の上より馬乘となり、此時を幸ひ人知れず締殺してくれんと、細帶を手早く解きて、おぬかの首をぐる〳〵卷となし、一世の力を出して締殺さんとするに、未だおぬかの運や强かりけん、さして古きといふにもあらぬ細帶の、フツリと斷るゝ途端の拍子に、不思議に傍にすや〳〵寢て居たりし玉の助の、怖き夢をや結びけん、魂消るばかりに叫立つるにぞ、さすが邪見の夜叉女も、思はず手元をゆるめて、急ぎ玉の助を抱き上ぐる、其隙に、おぬかは急ぎ逃出し、危き命を助りて、ぶらり〳〵と蹶けつ轉びつ、夢中に裏口より逃

五段

跡におぬかは、能々考へ見るに、更に合點ゆかす。昨夜奈久四郎の買つて來ておてこに渡した時、不承々々に鏡臺の引出へ入れたれば、若や癖直と間違へはせざるにやと、這出しながら何の心もなく鏡臺の引出を拔見るに、案の如く中風の妙藥といへる振出藥のありけるにぞ、さすがのおぬかも、おてこのいきなり次第を怒りつゝ取出さんとするに、傍に文のありければ、思はず披き見るに、おてこより彼の倶梨迦羅龍の吉五郎方へ送る文にて、此頃も話したる通り、二人の中を婆ァに見付られしゆゑ、好き隙もあらば締殺せし上、奈久四郎をも人知らず亡きものとなし、誰憚らず夫婦になりたしなど、細々したゝめてあるを、おぬかは拾讀なしつゝ大に怒り、おのれ賣女奴、おろかしき亭主と見下げ、大金出して請出されし大恩を忘れ、奈久四郎を殺して彼の吉五郎と夫婦にならんとは、以ての外のたくみなり、是さへあれば、如何なる奈久四郎も膽を潰して眼の覺めんか、いや／＼現在重り合ひて居る處を見附けしゆゑ、告知らしてさへ知らぬ顏して居る位の彼の奈久四郎、矢張いひくろめられて居たる處は、猶々私一人憎

をしへ草
女房かた氣
第廿四編
下の巻

山東京山作

歌川国貞画



山田屋はん

おぬか「それでもお前の處の息子さんは辛抱人で、能く商賣に精が出るから何よりサ」お實「それにや、世話のやけない奴サ。オヤ何かふきこぼれるが、七輪にかけてある物は何だえ」と聞かれておぬかは、先涙を浮め、「お實さん、何でも實の子でなくては好けないもので、私が今度是程の煩に、お醫者様は勿論、買藥一服呑ましてくれない處が、昨夕も奈久四郎がお役所で聞いたからとて、中氣の藥を買つて來てくれたのサ。それをお賴み申すの百遍も言つて、漸くおてこが仕かけてくれたのサ」と聞いて、お實は捨てゝもおかれず、彼の藥を茶碗に移し量見んとするに、其匂何とやらんをかしければ、急ぎ包紙を見るに、こは如何に、中氣の藥にあらずして、菊の露といへる髪の毛の癖直にありければ、お實はをかしさ抑隱し、「こりやおぬかさん、お藥ではない、菊の露といふ髪の癖直だよ」と聞いて、おぬかは膽を潰し、「おや〳〵さうかえ。尤も毒にもなるまいが、とんでもない物を奈久四郎奴買つて來あがつた」と口惜泣に泣き居たるを、お實は何といふべき詞さへなければ、「全體あの癖直は、小野様とかいふお醫者様から出る故、降出になつて居るから、大方間違へなすつたのであらう。どれお暇にしませう」と、をかしさ怺へてお實は歸りゆく。

たりしが、おぬかの心を休めさせんとて、「成程、それは餘り情ない仕方ゆゑ、お前の腹立も無理ではないが、此中も伊勢十樣のお座の時にも、老いては子に從がへと阿彌陀樣が仰やつたとのお談義、成程、年を取つては我子にも手を置かねばならぬ、何でもかでもそんな腹の立つ時は、お念佛をさへ申して居れば、腹もたゝんといへば、お前も其積で、一遍も餘計にお念佛を申して、彼の世へのお土產を、たんとこしらへるが好い。其内にはお前でも私でも、お迎が來て目出度彼の世へ行くであらうわサ。とは言ふものの私なんぞも、嫁の事では年中修羅を燃すのサ。聞いておくれよ、此間もお寺參に出かけやうとすると、おつな目付をして私の形を見て居たが、彼の淸吉にいふには、內の母アは六十七十になつても、まだ色氣があると見えて、著飾つて行くといふから、聞けば聞腹で默つても居られないから、あゝあるとも〳〵、是でも色男の二三人もあるから、有丈の著物を著散すのサと言ふと、マア減らない口といふものは、さうサ、お前の著物は、縞でも小紋でも、皆むかし物の無意氣なものばつかりだから、遺物分に貰つても仕方がないから、何でも著飾したてて、著て〳〵著枯して襤褸にするが好い、その時分にや此子の弟が出來るから、お產襤褸にでも仕樣といふから、私も口惜くつて〳〵堪らないから、食い付いてでもやらうと思つたが、此處がお念佛の申處だと、ヤッとの事辛抱して居たのサ」

吹居たるにぞ、おぬかは何にもいはず、ほろりと飜す一雫、見つけられじと、そと拭ひつゝ、餘りといへば情なしと、袖を銜へて泣居たる其處へ、豫ておぬかとは中好なる、同じ長屋に住む小間物屋清吉のお袋お實といへる婆さん、念佛稱へながら入來り、「おてこさん、今朝は餘程寒いぢやないか。玉坊さんはおねんねかえ。此節は肝腎のお守が病氣で、お困りであらう」と捨臺詞をいひつゝ、おぬかの傍へ行き、「どうだ、今日も矢張同じ事かえ」と問ひつゝ、袂より燒たての甘藷を取出し、「こりやをかしな物だが、あんまり暖かさうだから取つて來た」と差出すは、豫ておぬかには食物を碌々あてがはぬ事を知るゆゑなるべし。おぬかは是を押戴きつつ、先一ツ二ツを食して腹をとゝのへけるにつけても、兎に角むかしの事の忍ばれて、猶々袖を絞りける。

四　段

然るにおてこは、此お實とは痛く中あしければ、顏を見るより物をもいはず、玉の助を抱きて裏口より立出で、豫て中よきおきやんといへる圍女の所へ遊に行き、少しばかりの錢を取らして玉の助を近所の子供に預けおき、何事をかべらべら話して居たりける。おぬかは是幸と、お實に對ひ、かやうかやう云々なりと、おてこの非道を話して咽入れば、お實も暫しは貰泣して居

おぬかは、隨分達者の生れなりしが、年さへ多く重ねたるゆゑにや、不圖せし事と打臥せしが、段々に重りゆき、終には半身痲痺れ、起居も自由になりがたく、全く中風の樣子なれど、おてこは勿論、奈久四郎とても打捨ておき、早く死ねよかしと、言はぬばかりにあひしらひ、醫者にもかけず、買藥一服も呑まさぬにぞ、おぬかは口惜しき事におもへども、是ぞ前世の約束ならんと觀念なしつゝ、かゝる邪見の嫁の手にかゝり、若や下の掃除をさせるやうな事のありもせば、それこそ殺さるゝも知れざれば、未だ雪隱へも一人通の出來る內に、早く命を縮め給へかしと、旦暮神佛へ祈るといへど、更に其驗はなく、惡しくもならず善くもならず、橫になりたる儘なれど、もと中風のくせとして、食物は更に味かはらず、三度の食も待つばかりなれど、おてこの顏色を見て言出しかねて居るを、態とおてこは己等のみ食べ終り、そしらぬ顏してありけるにぞ、餘儀なくおぬかは聲をかけ、「おてこや、お飯が濟んだら、氣の毒だが私にもおくれ」と、さも言憎き樣子なるを、おてこは憎々しげにも睨まへつゝ、「ヘン呆れもけへる。死にかゝりのくせに、三度の飯を三度食はうとは餘り押が重てえ。此高い米を食潰されちや堪るもんぢやねへ。一度やそこいらは我慢をするが好い。それにお氣の毒だが、今朝は有りたけ食べて、お晝焚の積だから、お前の食べるやうな餘計な御膳は一粒もないよ」と言放して、烟草輪に

二　段

去程におてこは、愚しき亭主ゆゑ、母の口より不義のしだら顯れけれど、「病氣ゆゑ斯る跡形なき事を口走るに違なし」といはれければ、おぬかは其口惜しき事、何にたとふる物なけれど、素より心よき生れなれば、それなりけりに打捨置きけれど、おてこは是よりおぬかを憎む事以前に倍し、能き隙もあらば人知らず亡きものにせんと思ひたちぬれど、また能々思ひまはすに、其身は糠袋一ッ縫ふ術さへ知らざれば、今殺しては損なりと、虫を押へて居たりける。痛しい哉、母おぬかは、煮焚の世話より孫の守、又少しにても暇あれば、やつと針の目を通しつゝ、張替物を仕立直し、又其間には賃糸取りて、少しなりとも家の助になれかしと、二重になりし腰を延しつゝ、身を粉に碎くをそしらぬ顔に、おてこは始終ぬらくらとしながら、頭は日毎の樣に髪結の手にかけ、湯は三介に流を賴み、かく貧窮の中となりても更に構はず、垢染みし著物を著ながら塗立て、長屋中をそゝり歩き、此所の内儀さん、かしこの亭主、誰彼の差別もなく、噂話をなし歩くにぞ、近所の者も、餘りに好くは言はぬなるべし。

三　段

張仲景といへる人の著したる醫書に、人は病の器なりとあり、實に宜なるかな。奈久四郎の母

敎草女房形氣　二十四編上之卷

初　段

黄金屋の母おぬかは、他事ならぬ嫁の身に不義の行あるにより、餘儀なく悴奈久四郎に其趣を語りぬれど、奈久四郎は豫ておてこの舌頭に迷はされある事ゆゑ、更に母のいふ事を取合はず、全く氣の狂ひしゆゑ、さる跡形なき事をいふとの挨拶ゆゑ、さすがのおぬかも我子の愚しきに呆果てて居たるその處へ、委細は立聞なして樣子を知り、計成れりと思へば、更に少しも憚る心なく、さも慳貪に門の格子を明放しておてこは歸來り、おぬかを尻目にかけつゝ、「アヽ好い心持になつた」ト獨語ちつゝ、鏡臺の引出より百目掛の蠟燭を取出し、煥々と明を照し、最早寢る前となりて、白い物をベタ／＼塗立つるは、總て泥水上の癖なるべし。奈久四郎は横になりて烟草燻らせつゝ、のろくもにや／＼として見て居たりし折しも、傍に寢かしてありし彼の玉之助は、ふと眼をさまし、泣出しければ、奈久四郎は母に指圖なし、遊ばして來いと追出しやれば、おぬかも餘儀なく肌に抱き、「ねん／＼ころ／＼」の聲も曇りて暗き夜を、父なき孤兒をあやすが如く、外面の方を幾度となく、賺し歩きて居たりける。


愚丈
貞婦
於雪
老母
於奴嘉
義女



〇敎草女房形氣

二十四編

上之卷

花扇の歎大方ならず、髪を下して尼となり、朝暮佛に仕ふるそのいとまには、姑に孝行を竭すこと尤深切なれば、泥中の蓮葉と稱讃して、専ら其頃評判せしと言へり。夫程までになくとも、巻中に説くおてこの行狀、同じ遊女たりしと雖、花扇に競べて、何とか評せん、實に人面獸心ともいふべし。乍併天の照々たる、奚さる者の末榮ふべき、終に非業の終を遂ぐるに至る。开は次編に説くを讀み得て、孝貞の二字の貴きを知り給へかしといふ。

鶴亭秀賀識

于時慶應元乙丑稿成

同二丙寅歳初春發兌

往昔新吉原なる扇屋のかゝへに、花扇といへる遊女あり、容儀の衆に勝れたるのみならず、心ざまやさしく、殊に諸藝に秀で、就中歌道に名を得たる故、引手數多の客の裡に、さる有德なる町人の子息、深く馴染んで通ひ詰むる者ありけるが、花扇は怡ばず、時としては意見を加へ皈しけるを、息子は猶々その深切になづんで、居續してのみありければ、その母案じ過し、或時花扇の方へ文送りける、その文にいはく「一方ならぬえにしあればこそ、其方へのみ通ひ詰むる事、更にあしくは思ひはべらねど、從來病身の生れなれば、日夜酒宴にのみ長じては、終に病の種ともなり、また妾にも、外に子といふものあらざれば、迈には歸して、母の心をも慰めさせ給へかし」ト申送りければ、花扇は、なんと書くべきことさへ知らず、たゞ一首の歌を詠みてかへしける。その歌に、

うき身には何とわくべき契りてし人の情と人のなげきは

かくなん一首の裡に、千萬無量の思を籠めたれば、その母も、花扇の心中賢なるを知り、急ぎ身請を倣して、宿の渾家として遣しけるに、息子はほどなく、病に染んで死しければ、

り來りけるに、母と良人との話聲するにぞ、臑に疵持つおてこは、何事にやと家へも入らず、格子によりて其様子を聞居たり。めでたし〳〵。二十四編引續き賣り出し申候。

き居たる者あり。剛氣のおてこは是を見咎め、「まア誰だえ。人の家を覗込んで、をかしな腰付をしやアがる。おいらの家は女湯ぢやアないよ」トさも憎〳〵しく、憎まれ口を言捨てて行きすぎんとするを、彼の者はつか〳〵と立寄りて、おてこの裳裾をしつかと捉へけるにぞ、おてこは喫驚なしけるが、さすがは事になれたる者ゆゑ、我顔見せじとのまうけなるべし、持つたる提灯の火を吹消して其手を拂ひ、駈出さんとすれば、かの男は頰冠を取りて、「これさ、おてこさん、女湯ぢやねへとは、あんまり情ないお見立」といへば、おてこは吹出し、「如何かお前の後つきに似て居たゆゑ、からかつてやつたのさ。時に吉さん、氣味の惡い、何を覗いて居たのだえ」「何もねへもんだ、今日の樣子が氣にかゝるから、どんな鹽梅式だかと立聞と出かけたのさ」おてこ「なに、あんな事をかまふものか、お前にも似合はねへ氣の小い事を言ふ人だよ。だが此所で話をして居ちや、どうも中の字だから、明日晝の内に來ておくれ。ちつと話したい事があるから」吉五郎「なんだか、お袋の前へきまりかたが、惡いけれども、面の皮千枚張と出かけやう。それぢや話は明日の事としやうが、お前は何所の湯へ行くのだ。湯か、それぢや一所ともいかねへ」おてこ「アヽそれぢや明日は屹度だよ。さうして浮氣をして歩かずに、今夜は直にお歸りよ。オヽ寒くなつた。ドレ一風呂暖らう」と立別れ、おてこは湯へ行きしが、暫時ありて我家へ歸

にて、今日ありし仕末を殘らず語りけるを、奈久四郎は是を聞きもはてず莞爾と笑ひ、「それはそれは困つたものだが、夫よりはお前の病氣には困り果てるよ。成程其樣子では、隨分錢を投げてやりかねもしまい」と、とつてもつかぬ挨拶に、おぬかも拍子ぬけしながら、おぬか「おいらは何にも病氣は無い筈だが」奈久四郎「其無いといふのが、病氣だわな」おぬか「それぢや如何も仕方がない。併し子供に錢はやつたのさ。それが惡いのかえ。お前も些としつかりするが好い。勿論お雪もそれなりに離緣もせず、預けてあるゆゑ、彼が嫁には相違はないけれども、今の傾城どのも子まで出來て見りや、知らんものはお前の女房だと思つて居る。その者が不義があつては、御前の面汚になる。それゆゑ私も氣を揉むけれど、今それを言立てて出すが厭なら、彼の吉とかいふ奴を翌から寄付けないが好い」と、涙ながらに意見を加へけれども、おろかしき奈久四郎は是を受付けず、吹出して、「お前もそれが病の故だから仕方はないけれども、人の大事とするそんな事は、成丈言はぬ樣にするが好い。もしやおてこの耳へでも入つて見なせえ、それこそ大變だ」とは、餘りにのろま過ぎたる挨拶なり。

[illegible]十[illegible]一[illegible]段[illegible]

それより先おてこは湯へ行かんと立出でしに、折しも宵闇の事にして、誰とも分ねど我家を覗

いから、たんとお上り。その譯は、あの倶梨迦羅の吉さんが、お前に何か賴む事があるとて今朝來た處が、出た後へゆゑ力を落して、それぢや此酒肴は此所で片付けやうとて始めたから、其初穗を取つて置いたのさ。そりやさうと母アの讒言を、此間は餘程ろうもんをしたねえ。今日も吉さんが酒を始めると、子供の樣に何か食べたがつて、側にばかり附添いて居るから、うるさく思つてか吉さんが、お寺參のお賽錢にするが好いとて、お錢をいくらか遣ると、不承不承に取つて外へふら〳〵出たから、そつと覗いて見ると、子供呼集め、其お錢を投げてやつて遊んで居るから、呆果てて物がいはれない位だけれど、あんまり外聞が惡いから、叱散して家へ呼入れたら、其時の怒り立てた面がほんに見せたかつた。勿論そりや隣の金坊にでも、向ふの角さんにでも聞いて御覽、まるで狂氣の沙汰サ。尤もそれを止めたから、如何な事をいふかも知れぬ、其積で」とおのが惡事のあらはれやせんと、口から出まかせにしやべり散すも、豫ておろかしき亭主と知ればなるべし。

[illegible]十[illegible]段

母のおぬかは、斯くとはいかで知りぬべき、外事ならぬおてこのしだら、年寄がひに見捨にはならじと思ふにぞ、其夜おてこの湯へ行きしあとにて、密に奈久四郎を片隅へ招き、いと小聲

猶怒りて泣きたつるにぞ、たとへにも言ふ如く、泣く子と地頭には勝たれぬといひ、酒盛も果てたるにや、ひつそりなせし様子故、怖々我家へ歸りけるに、こは如何に、おてこ吉五郎は、二人の裾へかり衣にあらで重ねし八重褄や、重きが上のさよとも言はず、誰憚らぬ（八字省略）有様なりしが、さすがのおてこも飛退きて、さも間の惡き面持なれば、吉五郎も堪りかね、急ぎ三尺締直し、「ア、醉つた〳〵」と、間の惡さうに立上り、斯る者の癖とはいへど、暇乞さへなさばこそ、鼻唄ながらに裏口より、逃ぐるが如くかへり行く。

九段

さればおてこも何とやらん、母おぬかの手前うしろめたく、よしなき所を見付け出されたりとは思へど、素より一夜流れの川竹に育てば、あながちこれを苦勞ともなさず、腹の中にて括りを爲してありけるうちに、例と違ひ奈久四郎は、いと早く役所も退けたりとて歸り來にければ、おてこは出迎などして、今日に限り、脱棄てたる羽織を直に疊みなどして、ちやほやなすを、奈久四郎はいかでか悟るべき、涎流してありけるにぞ、おてこは急ぎ殘りし酒の燗をなし、喰荒したる肴を小皿へ寄せて、是を持出し、奈久四郎にすゝめければ、目を細くして飲食ひながら、奈久四郎「大層今日は御馳走だが、如何したのだ」おてこ進出で、「是は家で取つたのではな

え。ノウ母ア」といひつゝ、隱袋より最前の剩錢を引出し、五六十文ある鐚をおぬかにやり、吉五郎「母ア、是でお前は燒芋でも買つて來て食ふが好い。其代り今酒も直に仕舞ふから、それまでは何卒、其子を遊ばして來てくんな」ト追立てられ、餘儀なく又々玉の助を抱きて外へ出行きけるが、おぬかは流石大枚の身上に組立てる程の者ゆゑ、今わづかばかりの端錢は、見るも穢らはしと、心中大に怒れども、是とても皆我生みなせし奈久四郎の愚より、かくなり下りては、餘儀もなしと觀念なして、外へ出づるや否や、口惜しさの溜淚を一度に浮めつゝ、思はず知らず大地へ投げつくれば、かくとは知らず邊の童、「ヤア玉さんの處のお婆さんが、錢を投げてくれるから、皆が來て拾ひねえ」と、友呼びたつる小雀の聲に、群々集りて、瞬く間に拾ひとりて、喜び勇み歸りゆくを、おてこは子供の呼立つる聲に、何事と櫺子窓よりそつと見て、心の中に首肯きつゝ、また元の座に歸り、是よりは誰に憚る關もなしと、さいつおさへつ大騷となりけるに、二人ともはや十分の醉を發しければ、謠ふやら舞ふやら大騷をなしてありけるにぞ、おぬかは其騷を聞き、心の中には呆れはてつ、餘儀なく近所を彼方此方と遊び歩くに、玉の助は頻に泣きたつるゆゑ、連歸らんとは思へども、また小言いはれることの苦しければ、なるたけ賺して寢かしつけんと、出もせぬわが乳房をふくませけるに、吸へども／＼響き來ぬ故、猶

八　段

かくて酒も肴も來りければ、吉五郎は火鉢の側にて大胡坐をかいて飲始むると、おてこも昔取つたる杵柄にて、歌澤節の小唄を彈出せば、吉五郎は粋な聲にて一ツ二ツ語りかける折しも、おぬかは歸り來り「これおてこ、玉坊は寝たから連れて來たが、此處に寝かして置かうか」おてこ「エエ、もう寝たとえ、呆れも返らア。自分が樂がしたいから、無理往生に寝かしつけたのであらう。今にも起きると世話だから負つてお出よ。氣の利かねへ。酒でも始まると、おかぶで言種をこせへては、歸つて來るよ。意地の汚ねえ」と、さもはしたなく罵るを、さすが吉五郎は氣の毒とや思ひけん、「まア母ア、熱い處を一杯やらかして、寒さを凌ぎなせえ」おぬか「ハイ有難う御座いますが、私は嫌ひで御座いますから、お前さん方たんとお上りなさい」といひつゝ、玉の助を下に寝かさんとするを、おてこは見て、また眼を剝出し、「何故お前はそんなに情が剛からう。玉坊を下に寝かしたとて寝て居るものか、べらばうな。大概に知れさうなものだ。マアお酒の始つて居るお座敷に、年寄は大の禁物だから、お向ふのお婆さんの處へでも往つて、死んで往く先の相談でもして來なせへ。サア吉さん、お燗がよくなつたから、置注にするよ」吉五郎「これは〳〵、おきつぎとは王子に御苦勞で御座います、などと洒落てもお前にや分るめ

を致したから、據なし風見の瓢簞見たやうに、ぶらり〳〵とねいけいでも探すが外には、些とも用の無へからだサ。なんと男はよく生れてえものサ」と頤へ手をあつれば、おてこは其手を拂ひ、「ヘン、あきれがお禮であぎれがかゝとだよ、面白くもねへ。朝ッぱなから請賃もなく、惚氣のお施主につくものかねえ」とつんと顔反向けて、煙草輪に吹き居たりけるを、吉五郎は脇の下へ手を入れてくすぐりつゝ、腹掛のかくしより態と音さしつゝ、櫻判一ッをやつと取出し、「ヤレ〳〵あぶない事な。既での事に眞實に怒られる處を、日頃信心する神佛のお蔭で笑顔を拜んだから、仲直りやら請賃やらに、五べい奢りかけやう」と彼金をおてこに渡せば、おてこは是を恥づる色なく請取りて、「今朝ちつと加減が惡くつてまだ御膳前だから、御馳走にならうよ。併しお氣の毒だねえ。其代りたんと惚けてお話しよ、請けてあげるから。これ母ア、此子を負つて、ちよいと使に往つておくれ。あの横町の伊勢屋でお酒と、あの向横丁の魚傳で、何か見繕つて買つて來ておくれ。兩方とも此お金でつりを取つて來るんだよ。落しちやア好けねへから、財布でも持つてお出よ。アヽ年寄をつかふは、子供をつかふより骨が折れる」と、あたかも小女にでも使ふが如くにこき廻されて、餘儀もなければおぬかは涙をおしかくし、玉の助を抱きながらも出でて行く。

しなせえ。玉坊が寝やァしねへわナ。早くお前はお役所へ行くが好い、まさか相手の無い喧嘩も出來ねへから、母ァも默つて居るだらう。ほんに〳〵足手もきかねへくせに、口の達者なにやァおそれるよ」とおぬかを睨みつくれば、奈久四郎も同じく母を睨みつけつゝ、奈久四郎「實におてこのいふ通り、間にも合はねへくせに口の達者にやおそれるぜ。これ母ァ、お前の役は何にもありやしねへ。水を汲んだり飯を焚いたり、流元をする其外にや、此玉坊の守より外に用のない體だから、成丈泣かさないやうにしねえ。やれ〳〵大に遲くなつた。おてこ、そんなら往つて來るぜ。玉坊ちやん、父ちやんはお役所へ往くから、溫順くお留守をするのだぜ」と嘗めたり乾かしたりしてあやし居るを、おてこは同じく睨みつけ、「さァ好加減にして早く往きなせえ、そんな事で女房子供や老耄婆さんが過されるかえ。呆れた頓馬だ」と叱りつけられ、奈久四郎は靑菜に鹽のしほ〳〵と、急ぎ役所へ出でて行く。

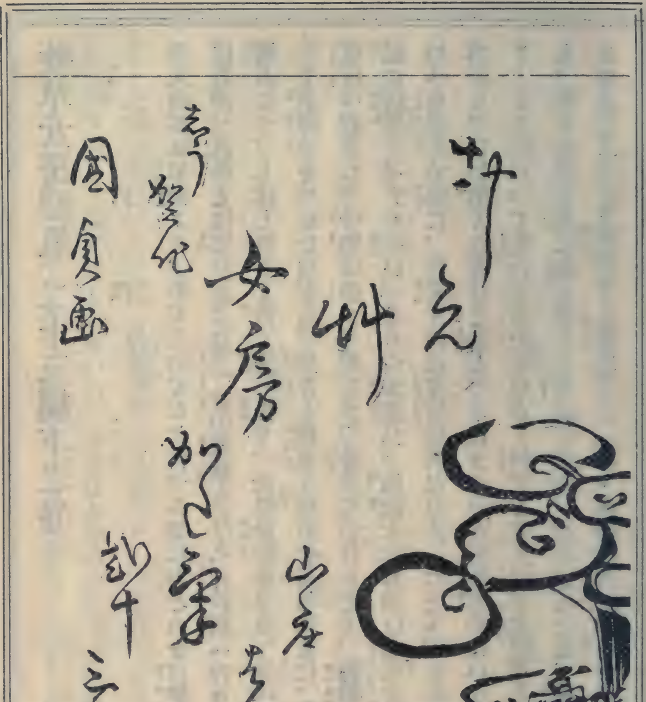
七　段

かゝる處へ近所のいさみ、倶梨迦羅の吉五郎といへる者、ぶらり〳〵と入來れば、おてこは急に笑顔をつくり、「吉さんお早いね、今日はお休みか」吉五郎「知れた事よ、寒いに仕事に出たとて、いくらの事があるものか。せめて冬の内は遊んでお出と、彼奴めが工面をして、當分の小遣

敎草女房形氣 二十三編下之卷

六段

奈久四郎は最前より、おてこのどなりたつる聲におどろき目覺めけるゆゑ、むく〳〵と起出でけるが、以前とは違ひ、母に唯一言の挨拶もなく、井戸端へ行きて顏を洗ひ來て、如何なる神を祈るにや、しばし拜みて直ぐ膳へ坐り、母に給仕をさせて食べ終り、火鉢の側にどつさり坐込んで小楊子をつかひながら、悠々と烟草くゆらせ居るゆゑに、おぬかは怺えかね、「さあ早くお役所へ行きな。今朝は曇つて居るから分らないけれども、餘程遲い」と聞くより、奈久四郎は眼に稜立て「ナニ遲い。そりや大變だ。何故またお前は起してくれねへのだ。何にも役にたゝねへ食潰しの癖に、朝起すのは年寄のあたりめへだ」おぬか「ナニ、起さねへことはない、暗いうちから、口の酢くなるほど起しても起きないから仕方がないのさ」奈久四郎「そりやまた知れた事サ。なんぼだつて暗いうちから起きて何するもんだ。大概起すにも程がおらァ。此間拔婆ァめ」と、貧すれば自然に詞までも下々にうつり、さもはしたなく罵りてあるにぞ、其聲に目覺しけるゆゑ、おてこも餘儀なく起出でて、「エ、何の事だえ、聞きたくもねへ親子喧嘩、好加減に止



之助のワッと泣出すをしほとして、又乳房をふくませながら、横になるより早く高鼾なるにぞ、おぬかは何のいらへもなく、はふり落つる涙を呑込み〳〵、嫁の邪見を悲みつゝ、又取出す糸車の、糸より細き今日の暮を、苦々しくも思ふなるべし。

是も皆前世からの約束ならんと諦めけるが、頃しも霜降月の末つ方なれば、雪模様の風身にしみじみと辛けれど、少しなりとも家の爲なりと、寢かぬる老の癖とはいへど、まだ暗きより起出でて、釜の下を焚付けながら、糸車を取出して賃糸を取り居たるに、はや夜も明けはなれければ、おてこを怖々起しぬれど、何しに起出でべく、玉の助を捨置き、向ふの方へ寢反うつて高鼾なるにぞ、無理にも起しかねて居たりしが、今度は奈久四郎を搖りつゝ、おぬか「サア奈久坊起きなよ。今に五ッになるわな。今日はお役所も早出ぢやと昨夕も言つたぢやねへか。もつとも私はしつかり聞きもしなかつたが、おてこにお前の話すを聞いて居た。サア起きな〳〵」と搖覺せど、若きものの癖として夜更なすゆゑ、朝は死んだやうに寢入りこんで更に答はなし。其時おてこは我名をいはれて、さすがは意地張、ふと眼を覺し、おてこ「なに、おてこが如何したとえ、やかましい。年をとるとそんなにも世話のやきたいものかねえ、おもしろくもねへ。それに奈久坊とは誰の事だえ、外聞の悪い。とんだ坊でこんな孫までも出來て、何時までも子供の樣に、奈久坊起きな〳〵も無へもんだ。おきなに千歳三番叟が聞いて呆れラア。寢るだけ寢りや好い時分にや起きるから打遣つて、お前は矢張貧乏車にくッついて居て、お汁の實の錢でも取るが好い」と小言だら〳〵、餘儀なく起出でんとするにも、わざと荒けなくするゆゑ、案の如く玉

りし頃やうくに起出づると、奈久四郎はまさかに汲んでやらうとも言兼ねて、「これおてこ、今おいらが手洗つかつたから、序に水を汲んで來た。サア此處に置くぜ。コレ母ア、まだ飯は出來ないかえ。今朝は大分遲くなつた、早くきりくしてくんねえな。ナニ飯は疾に出來たが、冷めると惡いからお汁を煮ずに置いたとえ。べらばうな、夫だから何時でも暖い飯を食しやアしねへ、大概程のあつたものだ」と小言ながらに食事を仕舞ひ、いそくなして出でてゆくを、おてこは見むきもなさず、おてこ「サア玉坊、お前にも焚冷のお飯をやらう」と引たくるやうに抱きとり、乳房哺せながら、がくりく居睡り居たるに、さすがのおぬかも呆れはて、なんと言葉もなかりけり。

〇第五十八段

さあるほどに、母のおぬかは是より老樂に暮さんと思ふ内に、肝腎要の心棒たる奈久四郎の一心足らず、古今の馬鹿を盡し、氣にいりの嫁お雪を追出し、おてこを引入れけるにぞ、樣々に意見をなせど、奈久四郎は何とて用ふべき、猶々阿呆の働なすにぞ、自業自得とはいひながら、さすが大枚の身上も破滅して、今はかゝるしまなき樣となりしを、明暮見るにつけても、良人爲右衞門の早く死せしを羨みつゝ、成程長命すれば恥多しとは此事なるべし、さりながら

折しもあれ、或人のすゝむるやう、「今しかぐの處にて、金子貸付の役所を取立つるにつき、百兩の金さへ出さば、直に三百兩にはなるべし」と、枯木にもあんころ餅の生るやうなる山師とかいへる者にたらしこまれ、奈久四郎は精一杯の工面をなして百兩の金を出しけるに、何ぞさる事のありぬべき、その金は水金となり、消えて跡なくなりぬれば、奈久四郎は狂氣の如く騷散して、其世話人を責めはたれど、素より證文なしたる金にもあらざれば、公沙汰にもならざれば、今更せん術なく打捨置きけるに、豫て家作を質入になしたる事ゆゑ、「はや期月來れば金を返すか、家作を渡すか、いづれともせよ」と嚴しく掛合ひけるにぞ、餘儀もなく〳〵奈久四郎は、馴れし我家を人手に渡し、本所なるはかくら町といへるいと場末へ引込み、今は夫婦に親一人となりしが、泣暮しの其内にも、生落ちたるは玉の如き男子なりければ、是を玉之助と名け、其寵愛更にたとふるに物なく、又おてこも斯る暮となり果てたれど、又子の可愛きは別にして、據なく見かぎりかねて鍋を下げてくらしけるが、奈久四郎も或人の世話にて、某の會所に筆採る役の明ありとて是へ住込み、僅の給金に身を縛られ、朝出でては夕に歸りける故、おてこはお山の大將にて、かゝる中となりても猶々我儘は增すばかりにて、玉之助も產落したといふばかり、乳を吞しては母おぬかに負はせながら勝手元を働かせ、其身は高く日の上

ことに其日の小遣にも困るやうになりしかど、未だ此所彼所に貸付ありし金もあれば、毎日籾助にそれをはたらせ、漸くそれにて暮をつけながらも、奈久四郎は目の覺めずや、猶々馬鹿を盡しけるが、今は多くの人もいらぬ事なりと、皆暇を出して、籾助と飯炊下女となしにける。然るに籾助の圍置くおひきは、此程尻の暖るにしたがひ、男望の出來り、邊近き處に住む松五郎といへる勇と姦通なしてありけるが、今となりてはなか〳〵籾助の離るべき様子もなければとて、親と相談の上出奔をなしければ、籾助は血眼となりて其行方を尋ねけれども、更に其行方知れざれば、今はこゝらが好き見切場なりと、十分に貸先をはたりてそれを懐になし、生出でし親里なる上總國へ、是も同じく出奔なしにける。

四段

さる程に、奈久四郎は急に眼の覺めたる如く、此上は如何して暮さばやと思ふ處に、此程よりおてこは酢き物を好みなどして、てつきり懐姙の様子なれば、かゝる中となりても奈久四郎は大に悦び、急ぎ醫師を呼迎へて見せしむるに、いよ〳〵それに相違なき由なれば、指折り數へて待つうちに、はや五月にもなりぬれば、産婆を頼み、岩田帶をなしけるが、斯く身上の廻惡しくなりては、たとへ出産なすとも差問勝にありぬべし、何卒急に金儲をなさんと思ひついたる

は悅び勇み立歸り、此事を知らして、それより綺羅に支度をなさせ、矢張おくちを部屋方として、お雪を畠山の御奧へ上げにけるが、お雪は死せんとまでに思ひつめたるを、太利右衛門の如何に說きふせてや、斯く早速に御奉公には出でしと思ふ人あるべけれど、そは後々の卷を繙けば、自然に分る事あるべし。

三段

爰に又黃金屋奈久四郎は、おてこの色香に深くも迷ひ、貞心深きお雪を追出しけるが、是ぞといへる落度もなければ離緣もなしかね、それなりけりに打棄てて、後へ直におてこを引入れにける。此おてこは前にも說くが如く、籾助の圍置くおひきの姉にて、廓にあるうちにも我儘者の名題高く、舞鶴といふ者はなく、てこづるとのみ呼びたる程の者なれば、今はますく我儘の增長して、母のおぬかを見ることとお針さんを待遇ふ如く、あつてないがしらになしけれど、奈久四郎はそれらに少しも心付かず、またなき妻を得たりと、明暮酒盛にのみ日を送り、そが上今日は一丁目、明日は二丁目と、一ッ芝居も二度三度づつ行き、それにても猶厭かずやありけん、此所の寄席、彼所の定席と、酒吞む隙には寄席步をなし、揚句の果には名ある藝人を家へ呼寄せ、酒盛の相手となしけるゆゑ、いとどまはりし身上の、次第々々にほし減立ちて、今はま

先刻より眼覺めけるに、お雪の樣子たゞならじと思へば、そつと間の襖より透し見て大に驚き、急ぎ立出でとゞめんとは思へど、死せんとするを人にとゞめられ、空しくやむは間の惡きものと聞く、尤も刃物は手許にあらざれば氣遣なしと、敏くも分別なして立出です。時々咳などして、態と目覺めてあることを知らするにぞ、案の如くお雪は驚きつゝ、斯く支度はなしたれども、如何なさんとためらふ中に、はや何時しか夜も明けはなれけるにぞ、若や又おくちに斯る樣見られてはならじと、急ぎ死支度を脱棄て、其夜隙あらば死せんとぞ、知らぬ顏して居たりける。さるほどにおくちは、お雪の始末腹にすゑかね、其日太利右衞門夫婦に昨夜の危かりし趣を委細に語りければ、夫婦の者も殊の外駭きける中にも、太利右衞門は何やら腹に思案を定めつゝ、「先お雪を呼べよ」と何氣なくいへば、おくちは畏りて立行き、急ぎお雪を連來れば、太利右衞門は何事なるにや、お雪の耳に口を寄せつゝ、いと長々と囁けば、お雪は涙ながらに莞爾と笑ひ、「まことに段々の御意見の趣有難う存じます。左樣なればどんな悲しい辛い事も怺へますれば、あなたがたの思召次第になして給へ」とありければ、夫婦の悅比ふるに物なく、太利右衞門は急ぎ著物を著替へ、小僧を一人連れてお出入の屋敷なる畠山樣へ行き、奥家老に委細を賴みけるに、「幸ひ此節御無人故、直に上げられよ」とありければ、太利右衞門

母上の知り給ふ事にもあらず、是も皆わが宿世あしき故ならん、さりながら斯くて此家に長々居んも如何なり、さりとては親里へは、何面目に歸らるべき、とてもかくても惜からぬ命を、斯く存命へてある故に、かくは物をも思へ、いつそひと思に死せんものをと、心せまくも女氣に、覺悟極めて見は見ても、心殘は越後に在す父母上、せめて此世のお名殘に、餘所ながらも御暇乞したし、イヤさる弱き心にては、なか／＼死する事もかなはじ、一刻も早く死せんものをと、心で心を取直し、今宵にも隙あらば、せめては一筆書遺し置かんと、其夜はいと早くより床に、おくちの寢入るを待つてそつと起出で、兩親始め又太利右衞門夫婦、おくちへも是迄の禮をかずかず述べて、漸と書終り、いでや此間に刃に伏し、火宅をのがれ彼の世へ旅立たんト、手早く著替る白無垢も、五ツ重のいつかまた、かへり來る日も夏の夜の、短く終る玉の緒ト、玉なす涙呑込み／＼、豫て用意の懷劍を、取出さんと彼方此方探すに、如何にやしけん、更に行方の知れざるにぞ、コハ又如何にしてや死せんと、とつおいつ思案をなして居たりける。

二[illegible]段

附人のおくちは、お雪の此程よりの樣子たゞならずと思へば、手許にある其刃物を皆取隱し置きしに、虫の知らせに、今宵は何とやらん胸安からずして、眠らんとすれば怖き夢を見るにぞ、

敎草女房形氣　二十三編上之卷

初　段

さある程に、黄金屋の嫁お雪は、身に過れる事はなけれど、人の心の飛鳥川、はやくも秋風のたちそめてや、僅の事に節をつけ、里方へ預けられしに、是とても生さぬ中の取親なれば、萬につけて心遣も多く、唯頼に思ふは彼の氣に入りのおくちのみにてありけるが、追々噂を聞くに、黄金屋方にてははやお雪を離縁せしとて、誰に憚る者もなく、圍ひおきたるおてこを呼寄せ、それなりに後の妻とせし由を聞き、お雪は先胸潰れつゝも思ふやう、さもあらば故なく我身を斯く追出し給ひしも、彼の女を入れ給ばんとの御心なりしか、若しさもあらば、斯樣々々云々と、唯一言知らせ給ひなば、殿御に妾は當然、何しに妾の邪魔なさん、聞えぬお方と奈久四郎を疎んで見たり又思ひつゞけて見る時は、こはおてこの、家になほらんと粉助を抱込み、二人して焚付け、斯る仕末とはなせしなるべし、エヽ情なき二人のたくみ、一旦家と定めたる彼の黄金屋、今更少しの落度あればとて、追出されては何處へ歸りゆかるべき、頼少き此身なる事は、豫て母上にも知り給ひけんに、なぜまた詫して呼戻して下されぬ、イヤ思ふまい、勿體ない、何

急速に毫を捨てて、「次編著くを止めよ」ト叱られて、僕一句も出でばこそ、再應翁の顔を視る絆も能はず、唯々と答へて、總身より汗を出して居たりしが、言はで止みなんも口惜しと、腹中にて、その言譯を拵へし折しも、又予を呼覺すものあり。此度は又いかなる人ぞと、恐る〳〵首をあげて見れば、是なん錦橋堂の主人なれば、始て夢なりし絆を覺り、胸を撫で〳〵、「定めて今日の光來は、次編の御催促ならんが、此通り荒増筋書出來做したり」と視すれば、錦橋堂苦笑して、「イヤ某の參れるは、催促に非ず。全體子が編める處の書、都て道行なが〳〵として、肝心肝文の處を後廻しとなす故に、看官に御退屈の出來べし。以來は其意して編みねかし」ト聞いて予も覺悟ことあれば、大に謝して、錦橋堂の歸れる後に、また毫を取つて草稿なし、彌〳〵嫁が姑をいびるの一段を著して、女房形氣の二十三編とはなしぬ。

鶴亭主人誌

換序

終日傘好めかして机に向ひ、女房形氣の二十三編稿せんと、種々に工夫を做せど、いかにせん下手の勘考休息に似て、如意輪樣の祈子の如く、頰杖なして竟粘々、間睡ところに、秀賀々々と呼覺すものあり。何方樣ぢやト天窓を上げて視れば、珍しや去年遠行ありし、山東庵のあるじ京山翁にありぬれば、驚怖仰天、魂消しッゝも、僕倩思ふ樣、是は翁の種を蒔置かれし、教草に接穗なさんと、斯くまでに想を擬せど、趣向に竭きたるを憐み、其筋を敎へんとて、現れられしと思へば、卒然に平身低頭して、其來意を訪ふに、翁は對話もなく、持つたる扇子にて、予が面上を打ち、罵ッて曰く、「鮑魚の肆に入る時は、臭を忘る。汝無學文盲の癖として、名利を好み、稗官たらん緈を望むと雖、寔の稗官たる緈を不得、無闇に人の糟粕をなめて、一員の作者たりと思ひ、末世に汚名を殘すを知らず。就中予が女房形氣は、既に題號する如く、教草の近道にして、巻中盡く勸善美意を含む。然るを汝、そもそれ等に酙酌を不用、出傍題を並べて、好しと思ふにや、不義不孝の者を、巻中の主とする緈、是何の謂ぞや。剩趣向に竭きたる折なれば、我が靈于粤現はれて、

ど、そは二十三編に委しく記せば、次の巻を御求御覧を願ふになん。めでたし〳〵。

のなしたる事なれば、籾助はおくちをも共に、お雪を追立てけるにぞ、樣子は知らねど、餘儀なくも太良福屋へ連歸られけるにぞ、太利右衛門夫婦は驚きつゝ、何故と問ふをも待たず、籾助いふやう、「主人奈久四郎申しまするには、外樣ならぬ此方樣よりの御誘にて、お雪は今日淺房へ參りし由なれば、彼是申す譯も御座りませねど、母の大病ゆゑ、私留守には、たとへ誰人よりの御誘なりとて、氣儘に出歩くやうにては、以來とも召使の者の示しも出來ませぬ故、先二三日の間、御迷惑でもお預け申す」との事ゆゑ、夫婦は驚くといへども、其結構も大方は悟れば、何事もいはず、委細畏りましたと、請なして籾助を返し、まづお爲に言含めて、お雪を奥へ伴はせける。

十一段

かくて籾助は立歸りて、奈久四郎に太良福屋の首尾を話しければ、奈久四郎は大に悦び、それより直におてこを呼寄せけるゆゑ、母のおぬかは痛く心をいため、おてこを追出してお雪を呼返せよといへど、奈久四郎は更に聞入れず。それなりけりに後の妻となしければ、下女下男もいつしか御新造さん〳〵と呼びけるを、太良福屋の方にては聞出し、大に怒るといへど、もとめても離縁をなさんと思ふ處ゆゑ、先それなりに打置きけるが、只哀なるはお雪の身の上なれ

さんより、任すから好きやうにとのお賴ゆゑ、どうもお前の難儀を見ては居られず、餘儀なく御相談をいたしますが」といふ尾について、お爲もいろ〳〵と賺して、離緣を取るがいゝとすすむるにぞ、始終涙にくれ居たるが、そつと拭ひつゝ、お雪「まことに何から何まで御親切な御意見はお嬉しう存じまするなれども、奈久四郎とても若い者、そりや些との道樂はあるにもいたせ、それを女の方より見限りましては如何も濟みませぬ。それに身上の惡くなりましたも、みんな私のみゝたぶゆゑ、たとへ袖乞を致すやうになりまするも、夫までの運と諦めます故、御心配なく、やツぱり彼處に置いて下さいまし」と年に似合はぬしつかりとせし答には、夫婦も何といふべき詞もなく、却つて言出して恥入りて、それより外の話に移して、樣々の馳走をなしつゝ、其夕暮に、小僧手代に送らして、何くはぬ顏に歸しける。

十　段

奈久四郎は、お雪の出行きしあとへ歸り來て此事を聞くより、腹の中にては大に悅び、番頭籾助に何やらん囁きつゝ、お雪の歸りを待居たる處へ、片影たつて其夕方、お雪は歸來て、里より送り來りし者をねぎらひて歸さんとする時、奈久四郎は出來りてお雪を家へ入れず、直に又太良福屋へ歸れといふにぞ、お雪は其故を知らず、夢に夢見る心地ながらに詫入るを、豫て手筈

拶などくだ〳〵しくありて後、おためはおぬかに言ふやう、「今日はあんまり暑くもなければ、朝の間に淺房の觀音樣へ參りたく、それにつきてはお雪をも同道いたしたく、少しの間貸しくれよ」との賴に、母のおぬかは大に悦び、「今日はあやにく奈久四郎の留守なれど、歸り來らば我等の宜きに言置かんほどに、連れ行きてゆつくり遊山をさして」といふも、少しは氣晴にもならんかと思へばなり。さりながらお雪は、夫の留守にゆるしもなく出行かんは心よからねど、用ありさうなるお爲の素振といひ、又母の許の出でし上は、辭するに詞なければ、心ならずも支度をとゝのへ、母のおぬかの藥の世話など、能々腰元に言含めおきて、おくちを我代として殘しおき、太良福屋の女房お爲に誘はれて出行きけるに、お爲は淺房へは行かず我家へ歸るにぞ、不審ながらにお雪はしたがひ行くに、豫て期したる事なれば、太利右衛門は待構へながら、それと見るより種々の馳走を出して待遇せし上に、太利右衛門「お雪さん、さぞ不審に思ひなさらうが、今日お爲を呼びに上げたも譯のある事。夫も外ではない、奈久四郎さんの事。聞けば此間は論の外なる道樂になられた樣子、また身上なども大分いたんだとの噂を委細に聞きましたが、それでは如何も末の見極がつかない故に、お爲とも相談の上、今日は僞をもつてお呼び申した譯サ。なんと足元の明るい內に身の覺悟をしないと、末に困ります。わたしもお前の父

四郎もせん方なく、如何になしたら出行かんと、頻に厭風の立ちけるも、彼の舞鶴のおてこが糸を引くゆゑにて、心にもなき折檻の邪見に、お雪を夜となく晝となく窘めさいなみけるは、あはれ無慘の事どもなり。

九　段

お雪の附人たるおくちは、此有樣を見て大に心を痛め、「かくては末の遂げがたければ、お里へ相談ありて、兎も角もなし給へ」とすゝめけれども、お雪は道を辨へし女なれば、却つておくちに意見をなして、更に氣を揉む樣子のなきに、おくちは堪らず、或日何やら用ありて、里方なる太良福屋へ使に行きし折から、女房のお爲に内々にて、此程奈久四郎の不身持より、お雪の毎日々々窘めらるゝ事より、又舞鶴を請出せし事、或は段々身上の悪くなりし樣子等を、斯樣々々云々と、見聞くまゝに尾鰭をつけて話しけるにぞ、お爲は驚きながらも、是を感違して思ふやう、こはお雪の、とても辛抱ならずと思へども、さすがは假親の事なれば、かくとも打付にいひかねて、おくちに其概略を話して、かくは言ひおこせしならんと思へば、おくちには好きにいひてかへせし上に、夫太利右衛門に相談なし、其翌日、お爲は下女と小僧を連れて、朝まだきに黄金屋へ行き、おぬかの病氣をいたみつゝ、少しばかりの土産を差出し、時候の挨

御座いましたか、さつぱり存じませんで居りました」とあやまりつゝ、脱捨てありし羽織をたたみながら、おくちに言付け搔巻を取寄せ、横になり居し奈久四郎の腹のあたりへ掛けんとするを、奈久四郎は取つて捨て、いつになく物をも言はず枕をお雪に投付けながら、奈久四郎「これお雪、此暑いに其樣な物をかけて如何するのだえ。おかたじけな、蒸殺す積か、好い量見だ。そして何かといへば人を使ふが、おいらにやそれが氣に入らねへ。なんぼ田舍大盡の娘でも、そんなに高くとまつたもんぢやァねへ。おいらの家なんどでは尻を捲つて働かなくつてはいかねへ。それともそれが厭なら、二三日まァ里へ遊に行くがいゝ」とは出て行けがしの詞なり。お雪は淚をそと拭ひながら、「まことに何事も足らはぬわたくし、どうぞ惡い處はお叱り遊ばして下さいまし。只今あなたに見放されましては、實に參る所もない此身、お氣に入らぬは御尤ながら、不便と思召してお側に置いて下さいまし」と、いとしとやかにあやまり居るを、何がな節つけ追出さんと思ふゆゑ、横に車のねぢけ言、奈久四郎「此所を出されりや參る所が無いとは、そりや誰にあてつけた詞だえ。おぬしの家は越後の國では一二と呼ぶ大盡の事、又江戸のお里は名に負ふ太良福屋太利右衛門さん、そんな嫌みからみは措いて貰ひたい」とさもなき事にもとげ〳〵しく言へど、心は柳のお雪、少しも是に逆はず、猶あやまつてあること故、さすがの奈久

らず。夫をおぬしは恨みもせず、老ぼれた私を優しくしてくれる心の中が、かはい相でなりませぬ。それに此様子では、折角積上げた身上も、今にだいなしにして仕舞ふは知れてある事、それを見るのが嫌な程に、「薬をやめて死にたい」との老のくりごとも無理ならねど、お雪はわざと勵さんために、いろ〳〵と宥め賺してありける内に、母はいつしかすや〳〵と眠れる様子に、搔巻打著、せわが部屋へ來て、かの附人なるおくちと何やら話してありけるが、涙もろきは女の常、濕りがちにて五月雨の、晴れぬ胸をや語合ふらん。

八段

さてしも奈久四郎は、浅くも番頭籾助に謀られ、おほくの黄金を捨てて舞鶴を請出しけるに、さすがは數多の客を取扱ひ、かゆい處へ手の屆くやうにて、一ツとして氣に入らずといふ事なければ、是にくらべては、お雪は田舎者にて氣轉の利かぬ者なりとて、頻に厭風の立ちけるは、是ぞ身を滅すの種なりと、後にぞ思合されにける。奈久四郎は我家ながら、此程は母おぬかの例ならぬをも打置きて、二三日家へ歸らざりし事故、何となく敷居の高ければ、藏口よりそつと歸來て我部屋に入り、そしらぬ顔して寐て居たりしを、お雪は知らで我部屋に、おくちと何やら話してありしが、奈久四郎の咳なせしに驚きて周てて馳行き、お雪「おや、何時お歸りで

七段

母のお糠は、是等の事を見聞くにつけて心を痛め、手をかへ品をかへ意見をなせど、糠に鎹、馬の耳に風、更に奈久四郎は聞入れなく、以前に倍して夜泊日泊の繁くなるにぞ、この程はそれを氣に病みてや、持病の癪のおこりけるにぞ、朝夕の食もすゝまず、床に就きてのみありければ、嫁のお雪はいたく心をいため、何から何まで行居かずといふ事なく看護をなしける故、おぬかは又なき嫁といつくしみけるほどに、お雪も更に隔心なく仕へければ、さて餘所目にも美しく、世間の嫁達、お雪の行には能々心をつけて見給へかし。お雪「母さん、お藥が煖りましたから、お上りなさいませんか」母おぬか「誰にか言付くれば好いに、お前があたゝめておくれか。誠に私はあやかりものだのう」ト戴きながら、其藥を一口呑んで苦きにやしがむる顔を、お雪は見てとり、「今日のお藥はちつと加減をすると、もち庵樣が仰やつたとの事、お呑憎くとも我慢をしてお上りなさいまし。そしてお口取には、かうがの粟の水飴を取らしておきました」と差出すを、母は何ともいはず涙ながらに是を食べ、藥を呑み終り、おぬか「これお雪や、私はいつそ明日よりお藥は止しませうよ」お雪は不審顔、「そりや何故で御座ります」おぬか「あの奈久四郎といふ不孝者が、ほんに〳〵此程の道樂は、實に箸にも棒にもかゝらず、一晩でも家には居

教草女房形氣 二十二編下之巻

六　段

番頭籾助は謀をもて、再び奈久四郎に夜泊日泊を始めさせ、おのがまゝに金錢を掠め、其上日々おひきの方へのみ通ひけるを、奈久四郎更に心もつかず、古今の忠臣と思ひけるこそおろかなれ。舞鶴は幼名のおてこと名を呼びかへ、今はまことの氣儘暮に、朝は四ツ頃ならでは起出でず、やつと起きれば、下女連れて湯へ行きけるに、何所から何所までも手前に洗ふといふことなく、相撲の如く投出して、それではいかぬ、これでもと、小言だら〳〵に、上りても、背中を拭けとは、餘り贅澤過ぎた仕方なり。夫より内へ歸れば、下男も少しは料理を心得ありとて、給金も並より一兩二歩高ければ、氣轉も利きて、朝飯の菜も器用に膳立なしてありけるを、いきなり食べ終れば、入來る女髪結のおたぼに日髪を結はせ、おしまひを仕上げる頃は、はや九ツ過にて、丁度其時分には奈久四郎も來りて、是より酒盛を始めけると、例の野幇間共の大勢集り、果は亂酒となりければ、花見橋より藝者の來ぬ日も稀なれば、其物入廓へ遊びに行きし折とは違もなく、實に罰知らずと、心ある人は嘯きぬ。


教草女房形気
廿一編
鶴亭秀賀作
梅蝶楼国貞画
錦耕堂蔵板

に利發の生なれば、是を少しも憂とせず、彼の古き發句にも、

とらずともやはり野におけ蓮華草

といへる如く、花の色香の美しとて、根引をなして我家へ連來るとも、いかで野にある如き眺のあらん、終には目かれのなすべきに、其時こそは悟り給はめ、又さもなければとて、然する時は外を內なる放蕩もいつしか止みて、お年を召したる母上のお心もやすまらんに、早くも左樣なれかしと思ひけるが、只不思議なるは、かくまでに粋な母上にはあらざるに、かゝる指圖を爲し給ふとは、何か樣子のある事かと、是のみ苦勞に思ひける。

五　段

さる程に番頭籾助は、委細を奈久四郎に呑込ませて地面を書入れ、質物として七百兩といふ金子を借入れ、其外店の有金をも浚ひて懐として彼の廓へ行き、舞鶴屋の亭主に委細を語らひ、舞鶴を五百兩にて身請なしけるが、こゝに不思議なるは、其親里をたゞすに、我が圍置くおひきの姉にありければ、大に喜び、幸ひはや町に近きれうぼう町といへるに、好き空家のあるを購ひて、是へ舞鶴を住はせ、男女をつけ置きて、何不自由なきやうに取賄ひければ、奈久四郎は深くも其働を賞しける。

り奈久四郎の物ゆゑ、如何なつても構はぬが、聞けば此間も勘定して見れば、見世の者にも大分使込があるとの事にて、二人三人駈落したとの話。それといふも、元は奈久四郎の家に居ない故から起ること故、たとへ一箱や二箱のお金はいつても、彼にさへ氣の適つた女なら、どうぞ請出してやりたいが、私が指圖で其樣ことをさせては、第一お雪の里へ濟まぬこと故、おぬしが心付いた積で奈久四郎の腹をきゝ、其上大儀ながら、廓の方も掛合をして貰ひたいとの粹なお指圖、なんと若旦那、左樣いたせば手活の花、手折り次第の野梅とは、又格別の匂が御座りますぞえ」と事をたくみの計とは夢にも知らぬ奈久四郎、悦ぶ事大方ならずといへど、さすが家にはお雪あり、殊には此程は多分の金は手許にあらず、それは如何にといひけるを、籾助すり寄り、「其事は少しも御苦勞なさいますな」と何かひそ〳〵囁けば、奈久四郎は滿面に笑をふくみつゝ、忽ち籾助に謀られて、「何分賴む」と雀躍をしてよろこびぬ。

四　段

お雪は先刻湯より上り來て部屋へ入らんとするに、いつになく番頭籾助の、奈久四郎と何やらん密々話して居りけるゆゑ、控へて內へは入らず、其話の果てるを待ちつゝも、思はず此一段を聞取りけるが、これ大體の女房なりせば、角を生して恨み歎くべきに、貞心深き性といひ、殊

ぞ半分は番頭籾助の使捨てたるなれど、彼の逐電せしものに罪きせて、其場は體よく遁れたれど、遁れ難きは彼のはや町のおひきの方を、見付出されし一條、こはいかにして好けんと、日夜工夫を凝しける。

三　段

かくても奈久四郎は更に遊はやまず、一晩家に居れば、二晩は廓へ行きけるが、さすがに慾は知りにけん、朝は何時にても疾く歸りて、それ〳〵に心を配りけるゆゑ、母のおぬかも、妻のお雪も大に悅び、これではさのみ障にならじと思ひけるが、それにひきかへ籾助は、是では更にまゝならねば、ろく〳〵おひきの方へ行く事もならざれば、猶々工夫にあぐみける。或日奈久四郎は只一人、お雪の湯へ行きしを幸、かの舞鶴の方より來りし文を取出して讀みながら、一人にや〳〵してある處へ、籾助は折好しと、おのが名に負ふ揉手なしつゝ入來れば、奈久四郎は周章て文を後へかくし、そしらぬ顏して、「何か用向でもあるのか」籾助「へゝゝ、是は若旦那、今朝は大分お早いお目覺、まだ四ツには餘程お早う御座います。なに別段かはつた事でも御座りませぬが、昨晩お袋樣の私を召しまして、極內々でのお賴ゆゑ」奈久四郎「そりや、おれに意見でも言へとの事か」籾助「どう致しまして、おふくろ樣の仰やいますには、此身上は素よ

らの主人だものを、其前でそんな事されちやア惡いと、横目で知らせど、おひきは最前よりの酒盛に十分醉ひし事といひ、又かゝる者のくせとして、人中を構はざれば、只籾助をだまさんとのみ思詰めける事ゆゑ、さまぐ\のいやらしき事など仕懸けけるを、奈久四郎は見ても居られず、二人の者に眴して、未だ雨は全くやまざれど、構はずこゝを立出でて、心ざす方へぞ行きにける。後に籾助は、やつと生きたる心地して、ほつと溜息吐きながら、おひきに委細を語りつゝ、その間の惡かりしと言ひて、是より更めて酒酌交し、其夕方に歸りける。

二　段

奈久四郎はさすが放蕩なれど、番頭籾助の圍女を圖らず出見して、俄に心付き、其次の日よりはとほ出もなさで見世へ出で、貸金の利金の勘定を始めけるにぞ、籾助も臑に疵、此奴惡事の破口と思へど、そしらぬ顏して、同じく帳合を調べけるに、未だ籾助の運や強かりけん、手代の内に負目のある者四五人言合せて、其夜駈落なしけるゆゑ、奈久四郎は驚きつゝ、それぐ\に人をかけて探しけれど、更に行方の知れざれば、餘儀なくそれなりに打棄てて、猶々夢の覺めたる如く、諸帳面を調上げしに、行方の知れぬ金二萬兩餘もありければ、奈久四郎は唯途方に暮るゝばかりなりけるが、素より公事にするとも詮なき事ゆゑ、餘儀なく思ひ諦めけるが、是

には十八九の顔好き女と、四十ばかりの男と酒呑居たりしかば、奈久四郎も間の悪く、「是は粗相をいたしました。私は家主の善兵衛さんの所と取違ひました。御免なさい」と立出でんとする時、能々見るに其男は、我家の番頭籾助なれば、奈久四郎「おや、誰かと思へば、そこに居るは籾助ぢやないか」と聞かれて、さすがの籾助びつくり仰天、「これは〱、何方様かと存じまして失禮を致しました。先此方へお上りなさいまし。もしお連樣にも此方へお入りなさいまし。これおひきさん、お茶でも上げておくれ」と言置きて、居堪らざればそこ〱に裏口より逃出さんとするを、おひきは早くも見て取り、駈出して是を引止め、此人を籾助の主人と知らざれば、「不審なしつゝ遠慮もなく、おひき「おや、まあをかしな、なぜ其樣にこそ〱と逃げるのだえ。今日はお前用の無い筈で、母に留守を頼まれたのぢやアないか。頼み甲斐の無へ。ねえもし貴方、それに此所は此人の家で御座いますものを」と言はれて奈久四郎も、こは籾助の妾宅ならんとおもへば、挨拶の仕樣もなく、さすがは心中に呆果てつゝ、手を拱いて居たりしかば、籾助も詞なく、只平伏して居たりしかば、おひき「さあ旦那、ちつと浮々おしな。それに子子が涌くから、其お盃を干して其お方にお差しな。いやはや、年のいかぬ者は、世話がやけてならぬ」と味な眼をして立寄りくすぐりけるを、籾助堪らず、心の中には、えゝ見別の悪い、是はおい

敎草女房形氣　二十二編上之卷

初　段

さてしも、鎌倉雪の下米町に名も高き黄金屋の息子奈久四郎は、お雪といへる妻を迎へてよりは、暫し辛抱なしけるに、又もや古き病の發り、彼の舞鶴屋の舞鶴に現をぬかして通ひつむるにぞ、店を預る番頭始め、手代小者に至るまで、身分不相應なる引負なして使ひ散せば、今は早數多の寶の數盡きて、次第々々に下り坂、油斷に戻る世帶の車は廻りかねてぞ見えにける。さりながら多くのお出入屋敷へ御用も達しある事故に、いまだ奈久四郎は目も覺めず、外を内なる放埒に、あたら月日を送りける。かくて或日の事になん、今日は御船村前の梅垣宗匠の花見橋なる萬八にて、百韻の開きありしを忘れ居たりとて、廓より直にかの枳殼と帮間の撥八を連れて、八ッ下りより出掛けしが、裏前通をブラリ〳〵とはや町へ來かゝりし折しも、夏の癖とて、いつ雲を運出してや、一天俄にかき曇り、にはかに降來る夕立に、奈久四郎等は驚きつつ、此はや町の新道に知邊のありければ、それへ行きて雨宿せんと、二人を連れて駈出し、漸くに其家へ行き、格子明けるも遲しと飛込んで見れば、こは如何、わが行く方とは家異にして、家

菩薩みるへきも
心ハ夜叉あききおん
きもにあ譬のうれ
ぬどろし嘶を
こゝに委くしく
おへぎさの本に云
うし則

一なにはえにのよしあしと
だにあらぬ身もみをつくしの
ふしのかしえのことあ

文久元年辛酉麥秋稿成
同　二年壬戌孟春発市

鶴亭秀賀




印の阿古屋祐成の契りをとゞめし大磯の
虎の類ひあり遊女白拍子なりしかど
良人のためには身命をもすてゝ節義を
まもりしものにて其他にも挙て
かぞへがたし然れども今の遊女には
行ひさらに雲泥の
ちがひ
ありて
就中
この物語の
うち
の
舞鶴がごときは類ハ

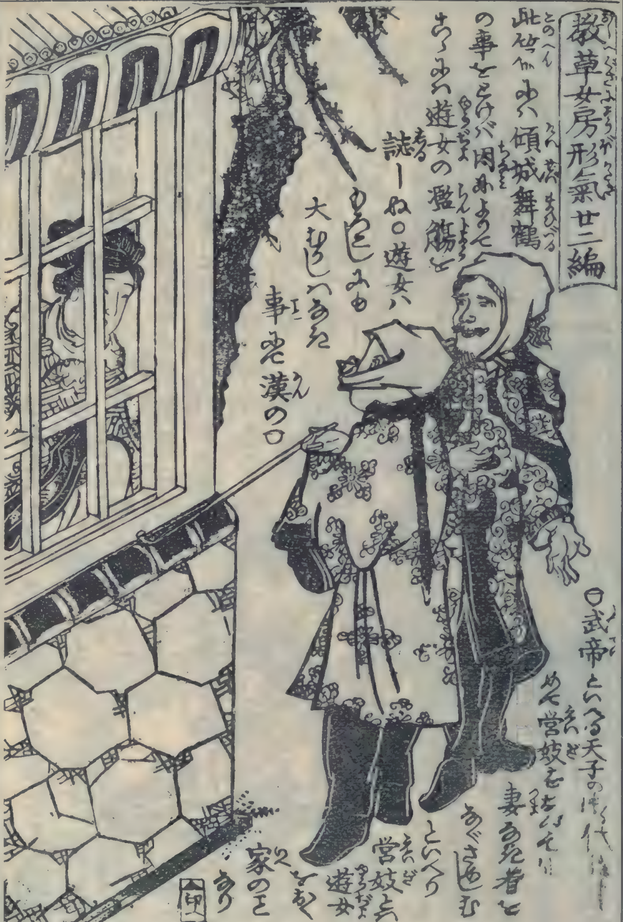

むかしハ妓女の輩も郢曲をうたひ
箏琵琶を弾ぜしよしふるき
書に見へたり
されバ古の
白拍子ハ
今いふ藝子の
類なりけん欤
白拍子の始ハ兼好法師の
徒然草に
磯の禅師又其
むすめ静より
始まると
あれど
何れと是非を云
とにかく異にて
その趣ちがへり
かの景清の妻
となりし
印
○是ハ縁としの
遊女
化粧すがた
の図を我友
柳園の蔵する所
なるを
得てこゝに縮図す

〈評分〉又遊女を傾城といふ事ハ媚を賣るが故にひとたびゑめバ城を傾けふたゝび笑バ国を傾るといふ故事によりて或ハ其ことを傾国の媚ありといへり亦我朝にも遊女ハいと古くよりあることにて既に萬葉集に遊行婦女の哥あれど時代遙かにして其事跡分明ならざれ盛衰記平家物語などに鳥羽院の御時島の千歳和哥の前とて二人の遊女ありしが舞の上手なりしとぞ是なん白拍子の始めにして遊女の濫觴といひつべし白拍子と言ふハ近世の〈哥〉

〈哥〉舞妓の類にて



〈哥〉さばかりなれど遊女〈哥〉ことは既に古今集に延喜帝の御宇に江口の里に白女と言し遊女ありて能き哥をよみしと有れバその起原のふるきを云おしはかりつべし遊女と云ふ今の遊女


教草女房形氣廿二編
此竹が史ハ傾城舞鶴
の事をとけバ因みよつて
あら〳〵遊女の濫觴を
誌しぬ○遊女ハ
むかしみな
大むかしへあれ
事老漢の○
武帝といへる天子の代に
はじめて營妓を設けて
妻なき者に
あぐさ過む
といへり
營妓を
遊女とも
家の主
なり

になる小僧の早吉といへるもの、割込にて見物なしてありけるが、思はず互に顔見合せて、小僧早吉「これは番頭さん、お早う御座いました。私は今しがた參りました」番頭籾助「お早いもないもんだ。手前は使に來たのであらうに、早く歸れば好い。まア此方へ來い」と呼寄せていろいろの物など食はせ、其上に一分やりて、籾助「さア早吉、手前は歸るが好いぜ、おいらは若旦那を探しに來たのだから、まだちと手間が取れる。併し此所で逢つた事は誰にもいふな」と口止して歸しける。此の如く、身分不相應に店の者まで奢りちらす故、たとへ黄金屋の身上、如何程なりとも堪るべからず。是肝腎の亭主の一心おろかなる故にて、親の丹精して組立てし家を破滅させ、剰へ彼の大磯の舞鶴を受出して、貞女たるお雪を追出しけるに、此舞鶴は名におふ難物の惡たれ女にて、おのれ嫁の身として、姑をいびりさいなむ事などは、二十二編に説きたれば、出板の時を待ちて、御もとめ御覽を乞ひ願ひ侍るになん。めでたし〳〵〳〵。

巾著を出して帶へ挾み、手拭提げて出行くは、向ふ橫丁の湯屋なるべし。

十　二　段

かくて暫くありて歸り來り、通の方に對ひて鏡臺を据ゑ、髮を撫でつけなどして、それより肌を脫ぎ、胸まで白粉をつける時、乳を見るに、未だ島田に髷は結へど、定めて年は二十歲の上を五ツ六ツも超え、子供も一人や二人は產みし樣なるに、恥しとも思はず、眉毛を剃らぬは、凡てかゝる者の常にして、賣物に花を飾るの故なりかし。然る處へ、彼の黃金屋の番頭籾助は、今日も若旦那を探して來んとこしらへ置き、おひきを連れて芝居へ行かんと入來りければ、おひきは周章て化粧を仕舞ひ、此間籾助にねだりて岩城桝屋より買ひし縮緬の養老絞に、紫縮緬の丸帶とは、ちと華美な拵なり。籾助は、莞爾としながら、「遲くなつたから、船より駕籠で走らす積に今言付けて來た。それぢや母ア、お土產をどんと取つて來るから、おとなしく留守をしてくんなせえ」と言置きながら、折しも來りし駕籠に打乘り、三枚にて走らせにける。

十　三　段

さても籾助は、春若町なる例の茶屋へ行きけるに、素より主人の金を掠めて遣ふ事ゆゑ、きびきびと切よく、飽まで贅澤をなして見物なし居たるに、ふと見れば囚の八番に、今年まだ十三

にさせ、三度の食も据膳にて食べながら、飯の剛し柔しと、何時でも膳にさへ向へば小言をならべ、こき使はるゝも、此おひきの庇で其日を送る故なれば、母は朝も疾く起きて飯の支度とゝのへ、掃除も濟みて、それより烟草盆に火を入れておひきの枕元へ持行き、母「さあもう起きても好いよ。これおひき、今朝はお店の都合次第で、旦那が芝居へ行くから、支度をして居ろとお言ひぢやないか。最う五ッも疾うに鳴つたよ」おひき「あいよ、知つて居るよ」母「知つて居るなら、早く起きるが好いわな」おひき「それでも如何したのか、今朝は眠くつて起きられない。後生だから最些と寢して置いておくれ。そしてお前お腹が空いたら先へお上りな」と寢反うつて又睡らんとするにぞ、さすがは血を分けし親子ゆゑ、今少し寢さしたしとは思へど、若し旦那と頼む人の來りなば、間の惡からんと、さあ眼覺に一服呑んで起きるが好い。今朝は朝顔のどんなに好い花が咲いたらう。それにお前は外へ行くのじやなし、芝居に行くのだものを」と無理に引起しければ、不承々々に起出でて、床も仕舞はず、火鉢のはたに坐りこんで、散々烟草を呑み、それより眼を摩り〳〵楊子箱を取出し、兩房の楊子にて齒を磨きながら、昨夜藥師の緣日にて買來りし朝顏の鉢植を眺めて居る處へ、母は嗽茶碗に汲立の水を持來るを、御苦勞とも言はずに嗽をすまし、其上手拭までを取寄せて、それより直に朝飯を仕舞ひ、小引出より

うから」おくち「なに、かまひませう。ねんねえ見たやうでも、赤坊さん見たやうでも、外に聞人は御座いません。ほんに其ねんねえで思出しましたが、此間もお里へ參つた時、彼方の御夫婦樣の仰やるには、未だねんねへの沙汰はないかと仰やいましたが、何卒はやくお出來なさるとよろしう御座います。すれば若旦那も、お内にばつかり入らつしやる樣になりますから。それには此本の中にも御座いましたが、京山の家では孕藥を賣るさうで御座いますが、それでもお服みなされば好い。オヤ草艸紙に足利絹といふが御座いますよ」お雪「されば、其本はどんなにか面白からう」「オヽ其絹で思出しました、昨日岩城桝屋から、どんなに好い新形の反物をいろ／＼致しましたから、明日御覽なさいまし」としめやかに語りけるこそ睦しけれ。

十一段　話横道になる

此所は淺ふさはや町の新道、いと淸かなる家のみならぶ其がなかに、二間間口の格子造、入口に四尺の切庭ありて、沓脱の石は慥にねぶかはなるべし。尤も二階附にて雪隱もありて、手廣くはあらねど狹くもあらず、親子二人の女孀も、かの花咲くの譬にもれず、母は五十の上を二ツ三ツも越えしと見えて、額に皺の浪立てゝ、腰は梓と曲れども、まだいと健なるがんじよう造、娘はおひきとて、顏容は揃へども、糠袋一ツ縫ふ術も知らず、褌の洗濯までを親

見れば、「お屋敷の旦那方のお交際にて遊びに參り、金子差閊へ候まゝ、母さんに内證にて、用簞笥の下の引出にある金子百兩、此方へ渡してくれよ」との賴みの文なれば、心よく百兩の金を渡し、枳殼を歸し、又母の居間へ來れば、おぬか「枳殼さんは何しに來なすつたえ」お雪「矢張若旦那のお使にお出なさいましたが、お屋敷のお交際ゆゑ、母さんにお案じなさらない樣に申しておけとの事で御座います」おぬか「それでも、馬鹿も家のある事は知つて居ると見える。ハ、、ハ、、」折しも暮六ツの鐘ゴオン〱〱。

十　段

お雪の里より、附人として來るおくちといへるは、至つて氣立の好きものにて、殊の外の主思ひなるが、此程は奈久四郎の遊にはまり宿に居らねば、お雪の心を察して、共に苦勞をなしける。おくち「あなたえ、今夜もまた若旦那はお歸がないと見えます。今うつのは四ッで御座いますから、最うお寢ませんか。それにあなたはお癇の性で、お寢付が惡くお出なさるから、此間お使に參りました途中で求めて參つた草艸紙、是をお枕元で讀みますから、聞きながらお寢なさいませんか」お雪「さうかえ、それは嬉しいけれど、本を讀みながらおぬしに寢かしつけて貰つては、なんだかねんねえ見たやうでをかしいから、其本を私に貸しておくれ。讀みながら臥ら

ちと休息をするが好い。併し奈久四郎の馬鹿が、何を恍惚けたのか知らないが、お前の來ない内でもこんな事はなかつたに、二三日は内へ歸らぬ樣子、大方お屋敷の旦那方のお交際であらうから、お前もさみしくとも我慢をしておくれ」といふも、子の身持の惡かりしを隱さんとの心なれど、嫁の身にとりては、今迄はこんな事もなかりしに、我が身の來しよりこんな身持となりしと、姑のあてし言葉かと、あらぬ事までに氣を廻すは、嫁の辛さの辛抱どころにて、お雪は少し顏を赤めつゝ、お雪「殿方のお交際にいらつしやるは、當然で御座いますから、私は寂しくとも構ひませんけれど、お年をめしたあなたのお案じなさるがお氣の毒で御座います。是も私がこんな田舍者で御座いますゆゑ、お氣に入らぬのも御無理とは存じませぬ」母おぬか「なに、勿體ない、お主みたやうな嫁さんは、金の草鞋で探しても、又とある事ではない。それを澤山さうに思ふと、奈久四郎に罰があたります」折から下女のおひえ「御新造さん、枳殼さんが内々でお目にかゝりたいとて、お店にお出なさるさうで御座いますが、お逢ひなさいますか」お雪「母さん、如何いたしませう」母おぬか「なに、枳殼さんなら、大方奈久四郎の使であらうから、おぬしお目にかゝつて、早く奈久四郎に歸れといつて貰うがいゝよ」お雪「かしこまりました」と立つて行き、挨拶かはりて、「何御用」ときけば、案の如く奈久四郎の使にて文を持來れり。披き

お内儀さん〳〵とぞ尊みにける。いまだ其名を書落せしが、越後に生れしゆゑか、または色の白きによるか、お雪とぞ呼びなしけるが、女は言葉の早くぬけるものにて、一ト月二タ月たつうちに、誰が見ても、田舍生れとは思はれざりしとかや。

九　段

しかるに、奈久四郎は物厭をする性にて、かくまで氣に入りしお雪をすておき、又もや此所彼所と浮れ歩き、夜泊日泊を始め、外を內なる遊興に、多くの寶を打棄てけるが、今日で丁度三日三晩家へは歸らず。母のおぬかはいたく氣をもみ、嫁の手前も如何なりと、內々にて番頭の籾助を迎へに出しけるに、是も身分不相應なる圍者ありければ、其所へ行きて一日遊び、夕方にはぶらりと歸り、「今日は一日彼所此所と心あたりをお尋ね申しても知れませぬが、それとも私には隱すかも知れませぬ故、明日は手段をかへて又まゐります」と出傍題も、正直なおぬかは眞とおもひ、一人くよ〳〵案じ過して居る處へ、入違に嫁のお雪入來り、しばし世間の話などして、母の機嫌をとる。お雪「母さん、ちとお隙ならお肩を揉みませう」母おぬか「いや、私は一日斯うして樂をして居るゆゑ、肩ははりません。お主こそ一日働くから、嘸くたびれるであらう。

八　段

黄金屋の母おぬかは意見もなせど、奈久四郎の斯くの如きの身持なれば、店の者にも引負横領する者もありと聞けど、それを詮議せんにも、先肝腎の主人の身持より直さずば役に立たじと、番頭籾助に相談なして、彼嫁を急ぐべしと太良福屋へ申入れ、見合の日を取極めおき、不承知をいふ奈久四郎を、無理無體にすゝめて見合に連行きけるに、田舎娘と思ひの外に、是やまことに天津少女とも言ひつべきあざやかなる美人にて、笑へば百の媚ありて、ぞつとする程美しければ、母は素より奈久四郎も、只氣をも潰すほどなる故、早速承知をなしければ、彼方も奈久四郎の男振好く、其上厄介はなし、金はあり、否といふべき筋なければ、雙方全く相談とゝのひ、吉日をえらみて、婚姻めでたく調ひけるに、夫婦のなからひ至つて睦ましく、是より奈久四郎は外へ出づるといふ事なく、岡目にはちと見憎きまでに氣に入りし樣子なれば、母のおぬかも心にかなひ、奈久四郎に優りて可愛がりけるも宜なりかし。未だ年は十七歳の半元服なれど、心の氣轉の働く事なかく年寄も及ばず、尤も詞は少しをかしけれども、さすがは大盡の娘なれば、糸竹の道は更なり、香、茶の湯、花むすぶ事までに秀で、其外とても藝の道は、何一ッとして知らずといふ事なく、其上兩親の躾嚴しかりしかば、縫針の道はおろか、すゝぎ洗

教草女房形氣　二十一編下之卷

七　段

「サア出陣とせう」撥八「これは御尤、然れば拙者は先陣に進み御注進申さん。根殼子氏は殿をして來給へ」「それぢや大將直で御座いますか」奈久四郎「さればサ、西月樓にて、もそつと女軍勢を驅集める事としやう」と、是より彼の二人を連れて西月樓へ行きけるに、追々に聞付けて入來りし末社都合八人となりければ、いざ押出さんと、河岸より船にて大磯の廓へ行きけるに、濱口巴屋といへるは、兼ていきつけの茶屋なれば、亭主、内儀さん、娘分、若い者を始め、料理番、飯焚まで出迎へて、黄金屋大盡の御出とて持囃され、此所にて又酒宴を催し、見番藝者を三組揚げて惣纒頭をうち、暫し大騒となる内に、舞鶴屋のお職舞鶴といへる馴染も來りければ、其同勢にて又舞鶴屋へ行き、此所にても、やりて、立番、若い者、不寢番、風呂番、料理番、飯焚、水汲までに行渡をつけ、金銀は地より湧出づる物とばかり思ひて育ちし奈久四郎の全盛なる遊には、いかほどづつの散財なるや、今にも黄金の罰あたるべし。そは二十二編に綴れば、出板を待ちて讀み給ふべし。

喜の餘り朱料とて遣すを見れば、樒か櫻の三ッ四ッあると見えたり。斯くて奈久四郎はいつもの如く、酒を言付ければ、程なく腰元の運出し、これより二人差向にて、酒宴を始めたる處へ、またこ一人の幇間撥八といふ者の入來りて、いよ〳〵文珠の智惠にて、觀音の御陣へ攻入る評議となれり。

六　段

奈久四郎は、それよりおのれの居間へ來て、猫股新道なる清元延羽根といへるに教りし、落人を、甲外の鼻唄に謠ひながら、亂箱より烟草入を取出し、提物の珊瑚樹と金水晶とを取替へなどして、娯み居たる處へ下女のおむき、「若旦那樣、枳殼庵とやらいふお方がお出なさいました」「此方へお通し申せ」といふは、俳諧の宗匠幇間半分にて、年中かゝる有徳の町人のみへ入込み、仕著を貰ひ、いつでも行丈の合ふといふ事なく、今日の出出は、お召縮緬の九ツ頃、下著は華美な唐更紗のお化、帶は筑前の眞物なれど、青竹色の一本獨鈷は、さる大家にて福引に出せし籤に當りしを締めて、羽織は或所の御隱居さんの遺物に貰ひし郡内の碁盤縞、小さき小太刀をきめて、扇ぱちく〳〵入來るは、醫者ともつかず、茶道ともつかず、誠に半可の人品なり。奈久四郎、「和尚まことに久振だが、如何したよ」枳殼「いや、申譯のなき大御無音、其後は貴顏拜面を得ず、何時も御機嫌能く御座りけん、珍重恐悅めでたく大慶」奈久四郎「これさ、そんな消息往來は止して、商賣往來の話にするが好い。あの何時か小僧に持たせて上げた卷は、まだ點が出來ずか」枳殼「成程、延引致して恐入りましたが、やうやく今日持參」と恭しく紫の縮緬の袱紗より、運座の卷を取出すを、奈久四郎内々にて是を披き見て、莞爾として居たるは、我句に

五　段

さるほどに、母のおぬかは是をいたく歎きて、或日我居間へ奈久四郎を招き、老の癖とてまづ涙を浮め、「これ奈久四郎、御前もう年頃なれば、遊女狂もちつとは無理とは思はぬが、此間の様に、家にといふは只の一日も居た事のないやうでは、店の者の手前もあり、又私の案じる事も何様であらう。今の身持では、お父さんと私と夜の目も寝ずに仕出した身上も、直に無くして仕舞ふであらうとて、番頭の籾助も心配して、嫁を貰ふが好いといふから、疾から探して居ても、長し短しで、如何も思ふ様な嫁が無くて居たが、恰度お父さんの田舎の大盡に好い娘御があつて、此節此鎌倉へ來て、親類の太良福屋太利右衛門さんの處にお出の由、幸ひ似合しい縁ゆゑ、昨日籾助に言込ませしゆゑ、いづれ近々見あひをして、おめでたく引取るやうにならうが、此節の様では、譬へ嫁が來ても辛抱が出來ませぬ」と意見をされて、奈久四郎心の内には、成程身持の事は惡けれど、そんな田舎者を嚊アにする事は厭と思へど、まさかに厭とも言兼ねて、只うぢ〳〵として居たれば、母のお糠は、まだ子供氣の失せずして、恥かしく思ふならめと、嫁の話は暫くおきぬ。

は驗證の利益著き御神なれば、無理な願も納受ましくてや、いつしか妻のお糠は胎りて、安々と男の子を生みけるが、今年爲右衛門は五十二歳、おぬかは四十五歳の初產なり。されば夫婦のよろこび言ふもなかくおろかにて、是を奈久四郎と名づけて、乳母よ守よと召抱へ、爲右衛門の日頃の儉約にも似ず、奈久四郎の事とだにいへば、金銀のかゝるを惜まず、いふがまゝに育てけるが、奈久四郎は人となるに從つて、賢からずといへど、親の光に包れて、お坊さんくとて持囃さるゝを好き事として、人を見る事何れも奴僕の如く輕しめて、上見ね鷲に育ち、成人するに從つて我儘氣隨になりけるが、十七歳の春父爲右衛門は、ふと風邪の心地と打臥せしが、年寄の事なれば、さして重きとも思はぬ病にて、幾日もあらずみまかりぬれば、家内はいともしめやかに、力落してひつそりと、濕りがちなる五月雨の、空かきわけて杜鵑、啼くのみなるに、奈久四郎は一向平氣にて、はや此頃は稽古所歩き、茶屋這入、または廓へも度々通ひけるが、間もなくおのれの家督となりしかば、大に悅び、金銀を湯水の如くつかひける故、襟元に附くは浮世のならひ、それ相應の者までも、旦那々々とそやすにぞ、奈久四郎はたまにも家には居らず、大名氣取となりて、遊の馬鹿を盡しける。是ぞ諺にいふ如く、親は苦をする、子は樂をする、孫は如何と、心ある者は、眉打顰むるも多かりしとかや。

時、夫婦諸共に死に失せけるが、素より子といふ者もあらざれば、親類の者打寄りて、後の取片付などを爲しけるに、爲助は力を落し、わが恩人を死したりとて、親身にかけて後の世話をなしけるが、どうせ他人に賣る家なりと親類の勸にまかせ、三十兩にて此跡を引受け、家名もあらためて黄金屋爲右衛門と名乘りて、以前の如く米屋を爲しけるに、總て外々より安く賣りけるに、人の心は汚きものにて、黄金屋の米は搗も白く、炊くと殖え、一句宛も安いと評判高く繁昌なしけるが、段々お屋敷方の搗入御用も承るやうになりければ、是では店の狹きとて、三間間口の上に又三間建續ぎて、今は米町にも一二と呼ばるゝ程の大店となり、番頭小僧も多く抱へ、地面も買込みて家附地主となり、土藏も四ッ五ッ建竝べて、諸方の御勝手ハ金子の御用も達すやうになりけり。僅此家を買ひしより二十年の内に、斯くの如くの分限となりけるが、如何なる仔細ありてや、俄に米屋をやめて、金貸にぞなりける。

四　段

然るに、爲右衛門は如何なる緣にや、子といふもののあらざれば、朝夕是を深く歎きて、斯くまで黄金を溜むるとも、我死せば誰にや讓るべきと、是より初乳山の聖天を祈り、何卒一ッ子を授け給へ、然る上は、其者の身上を潰すとも厭はじト、一心不亂に祈誓をなしけるが、さすが

へる米屋へ這入り、米搗となりけるに、こは素よりの馴れたる業といひ、且は力の飽くまで强ければ、竝の者より臼數も餘計に搗きて、其上に色も白くして、米に光澤あれば、主人角兵衞悅びて、殊には同國の者と聞き、殊の外に可愛がられ、爲助も此所なら辛抱して見んと、夜晝の差別なく働きけるが、素より酒も烟草も呑まず、女郎買ふ術も知らざれば、少しの金も貯りけるゆゑ、角兵衞は其正直と辛抱のよきを見て、おのれ店請人となりて大道の搗屋を始めさせけるに、最屓にする旦那場澤山出來て、次第に手廣くなりにける。

三　段

角兵衞は是を聞きて大に悅び、一人住にてはさぞ不自由ならんと、我方に勤め居るお糠といへる女は、至つての稼人なれば、是を爲助の方へ女房に遣しけるに、夫婦中もよく、爲助每日外にて稼げば、おぬかは内にて人の著物のあらひ洗濯を爲し、又木綿の物なれば、如何か斯うかまろめけるゆゑ、是も段々得意場殖え、夜も八ツ七ツまでづつ夜業を爲せば、爲助其傍にて俵を解して、是をつたに切りて賣代なし、夫婦諸共に少しの油斷なく稼ぎけるゆゑ、爰に十年暮すうちに、五十兩ばかりの小金溜りけるは、實に人間の一心にて、身より絞出せし膏なりかし。爰に爲助を世話なせし越後屋角兵衞は、如何なる不運の人なるや、一年疫癘の痛く流行し

子分になりて、先酒屋の御用といへる者に入れられける。

て一分に賣りて、其者は何處へ行きしか知れざれど、今更せん術なく、宿の親方といへる者の

二　段

さるほどに爲右衛門は、始の名は爲助とて、かの人宿へ賣られ、酒屋の御用となりけるが、田舍より駈出の事なれば、此所彼所よりの誂も數多きに覺えきれず、裏店住居の内儀さん達に、年中叱られては頭を掻きける。「オイ伊勢屋さん、さつきさう言つた酢は如何した。又忘れたのか」と、どなられて、詫して此方へ來ると、井戸端に居た大家さんのおさんが聲かけて、「先刻の御神酒は如何した」といはれて詫すれば、おさんは膨れ頰して、「おいらの處では、三日はお神酒を上げた餘を酒鹽にするのだから、それではお晝の間には合はない。おへないおしなだ」と言へる女こそ、信濃の者にやありぬべし。爲助は越後の者なれば、それを心にかけるにあらねど、是ではとても、うだつは上らじと、彼の親方の許へ行き、暇を願ひてくれよと賴めば、散々叱られし上に、今度は湯屋の木拾に入れられけるに、素より無筆の事なれば、「木拾入るべからす、家主」といへる札をも讀む事ならねば、大家に叱らるゝ事每日にて、是ではとても辛抱して三介になる事も難かるべしとて、又湯屋を暇を貰ひ、今度は雪の下なる米町の越後屋角兵衛とい

敎草女房形氣 二十一編上之卷

山東京山遺稿
鶴亭秀賀補綴

發端

昔鎌倉雪の下米町といへる處に、黄金屋爲右衞門といふ金貸ありけるが、主人爲右衞門の素姓を尋づるに、元は越後の國なる小まへの百姓の息子なりしに、土一升金一升の鎌倉こそ金を貯るに好き所なりとて二十二歳の冬、一稼せんと此東へ來りしに、頼みに思ひし國者は店者なるが、引負ありて暇になりしと聞き、頼む樹の下雨降りて、餘儀なく先彌九郎町に宿取りて、日毎に此所彼所と歩き見るに、行く所も〳〵押返す如きの人通りに肝を潰し、田舍の鎭守お祭にても、此樣に人は出ぬものをと、魂消た顔を見てとるばい人、ぽん引といへる者袖を引き、「これ兄さん、お前のお國は越後であらうな。私も越後の柏崎生れ、兎角に國者は戀しいもの。何と私の出入塲で奉公人を尋ねて居るが、行く氣はないか」と優しく詞をかけられて、地獄で佛に逢ひたる如く喜び、「よき奉公の口あらば」と頼みければ、ぽん引も喜び、軈て人宿へ連行き

宣王も亦聖主なれば、はやくも心をひるがへして、皇后と吉甫を大に賞し、是より淫酒をたちて、其過をあらため給ふにより、萬臣鼓腹して悦び、姜皇后の賢女なりしを讃めたりしとかや。寔に難有意とも言ひつべし。こゝに夫とは表裏にて、愚の亭主を尻にしき、己が氣隨に樂を極め、家藏までも失はせ、其身は娵にありながら、姑たるべき親をいびり、邪見非道に倣せしといふ、女房の譚の筆を起しぬるが、これ教草の第一とすべき事にて、譬へば面は菩薩の如くなるとも、心は夜叉とも言ひつべく、かの甘口な菓子ならねども、みめより意の美しき人を、寔の美人とは言ふぞかし。されば賢女の行と、惡女の行との差別を、人に知らせんため、こゝへは賢女の傳をあげて、些勸善の意を含むのみ。
腰ばかりたとへ柳のほそくともこゝろのふとき人のおそろし

鶴亭主人

むかし唐土周の代に、宣王といへる天子ありて、姜夫人といへる美人を愛し給ふ事大方ならず、皇后となして、常に側をはなたず、晝夜淫酒にふけりて、あさまつりごとを怠り給ふゆゑ、群臣これを歎き、諫め奉れども、更に聞入れ給はず。しかるに尹吉甫といへる忠臣、これを深く憂ひ、斯くては、自然天下の人氣に背き、つひには國家亂るべしとて、死をおそれず一書をつゞりて、御前へいでて、その表をたてまつりけるに、宣王御酒宴の半にてありけるが、大に怒らせ給ひて、表を大地へ投棄て給ふを、皇后あはれに思ひ、侍女にとりあげさせて、披き見給ふに、姜皇后のあるゆゑに、政事を怠り、武を忘れ、晝夜淫酒にのみ耽り給ふが、今にも國の亡ぶる時こそ思ひあたり給ふらめ、願はくは、姜皇后を殺して、その愁を拂ひ給へ、とありけるを、なみ〳〵の女なりせば、いかにや怒るべきに、姜皇后は賢女なれば、却て尹吉甫を賞し、みづから釵をぬき捨て、衣裳をぬぎ、王の前にひざまづきて、其表を讀み、これ吉甫が諫尤なり、皆妾のあやまちにて、王の咎ならず、早く妾を殺して、以後淫酒をつゝしみ、國を他人に奪はれ給ふな、ト涙と共に諫め給へば、

故人京山翁、教草を培ひて稗史の鉢植とせられしに、言葉の花美しく、實所さへも多ければ、年々歳々に其蔓繁茂して、既に二十の巻を重ねたりしに、惜哉翁は遠行有りて、于粤根を斷たんとするを、錦橋堂の主人遺憾に思ひ、翁の男京水子に托して幸に遺草を得て、僕に補綴せよといへど、是ぞ花を襤褸に包むの所爲なれば、固辭なすを、書肆笑つて、不知や、驥の尾に附く時は、蒼蠅も千里を行くとの一言に、忽地はたと手を拍つて、筆を嘗むる絆とはなれど、謾に淸流を汚すの譏、遁るゝに所なからんかし。

萬延二辛酉春開鐫　　鶴亭秀賀誌

一生お花の先祖を弔ひけるとなん。されば慈悲は德の基なりといふぞかし。めでたし〳〵〳〵。

藏は、お花が慈悲にいよ〳〵感じて僧となり、長谷寺の内に庵を結びて、

京山遺稿

左門を始め、残る方なく使を出しける。

十段

かくて晝過には、其所彼所の禮を濟して、金太郎、鎗箱にて我家に立歸れば、皆々出迎へてことぶき、箱右衛門、お花が成行を物語り、また今宵かをると夫婦の盃をするに、疾く定めたる事なぞ委しく告ぐれば、金太郎、お花の心底をいよ〳〵愛でけるゆゑ、急ぎ熊藏をもて望月家へ敵打の事を達しければ、望月家より金太郎方へ、直と使者を以て莫大の禮物を賜りて、門人山中氏を家來に貰はれ、お花は中屋敷に引取りて、子を貰はせて家名を立てさするとなれば、有難く御請をして、その如くにはなりし。時しも重忠殿よりは、坂田氏を貰ひに來れば、是も悦び、直樣赴きける。夕鴉の聲さへ、かさね〴〵の悦び啼、カア〳〵〳〵。

十一段

さてかをるの母は、縁の結ばる事をかをるに語りければ、俄に病も癒え、悦ぶ時しも、お花がおこせし文を見て、足元から鳥の立つ悦に、夕方より道具を先に、かをるを駕籠にて送らせ、千秋萬歳の盃を取交しければ、一家一類及び因縁ある者は殘らず來りて、莫大の饗應、酒に浮れて四海波、風に腹鼓を打つて壽きけるは、是偏に長谷の利益なる事を尊ぶべし。彼の井原垣

郎を呼入れ、詞をあらため言渡すやう、「其方、過ぎし頃武者修業の節、越後の山道にて山賊を打ちて國の禍を拂ひし事を、右幕下君へ我殿より達しければ、其方を御譜代弓頭役に新規召出さるゝ旨御達しあれば、有難く御請の御禮廻の衣服、供の用意、鎗、箱まで我とゝのへおく、急ぎ彼所へ御禮をのぶべし」と達せられて、金太郎夢の如くの立身に、且驚き且悦びて頭を下げ、「まことに冥加にかなひし上の御取立、是も全く其方の御蔭、子々孫々忘れ侍らず。今朝望月の家臣薄田段五兵衛の妻の敵井原垣藏を、彼の娘に打たせたる事、宜しく御披露賴上げる」と言置き、間もなく鎗、箱を揃へて、玄關より出行きぬ。

九　段

お花は家に歸るが否や、佛壇に誓く回向して、翠の髪をふつつりと切りて尼になり、それを文に封じて、今出川の長橋亙の妻の方へ送り、また本家金有屋方へも委しく事の次第を文に書きて遣しければ、箱右衛門始め皆々入來りて、敵打濟みたる喜、又尼になりて親の菩提を弔ひ、又今宵かをると金太郎と盃さする事の計なぞ、殊にめで居たる處へ、金吾、左門の方より戻りて、金太郎の立身を云々と物語れば、箱右衛門始め皆々悦び、さらば今宵はかをると祝言旁、立身の祝も手厚くせんと、箱右衛門の指圖にて言付け、一類及び重忠殿の身内の者は楠

用意の一腰に身を堅め、金太郎は黒羽二重の小袖に緞子の小袴を穿き、紫呉羅の野羽織に、淺黄の紐を胸高く結びて、由井が濱邊に赴きける。

八段

金吾、熊藏は、井原垣藏を引連れて由井が濱に來れば、疾く兩人の至るを見るより、金吾、金太郎に告ぐるやう、「かく垣藏は引連れたるが、兩人の侍は、夜前の中に逃げぬ」「彼等には構なし。いざ〳〵」とお花に眴すれば、お花、垣藏に對ひて、「親の敵思知らさん。いざ立上れ」と身構すれば、垣藏お花が前へ蹲踞りて、大小を投出し、「イザ存分に恨を晴し給へ」とあやまり入りたる其姿を見て、怒の切先も挫けたるゆゑ、刀の背にて首を三度撲ち、髻を根元より切取りつゝ、懐より母の位牌を取出して、泣きみ笑ひみ回向をなしける。金太郎其心根を推量すれば、「いかに各、親の仇打取りてめでたし〳〵。其死骸片付けさせよ」といひつゝ、お花を促して立歸らんとする處へ、劍術の師匠楠左門、早馬にて來りて、遠目よりこれを見て、「出來したり〳〵。金太郎悅事あり、急ぎ我方へ來れ」と言捨てて、また馬を引返しければ、お花に山中をつけて家に歸しける。程なく金太郎は金吾を伴ひて、楠左門方へ赴きければ、表に鎗、箱、若黨など居たるゆゑ、是はやんごとなき客ありと中の口より上りければ、左門座敷に居て金太

し」と座敷へ燈を照して、彼の二人を見れば、先頃金太郎に鞘を當てて喧嘩をしかけたる二人なれば、金太郎二人に對ひて、「貴殿等はいつ〳〵の日、我に追まくられて逃げたる覺あらん。武士として言語道斷の卑怯者、いづれの御家來にてあるや」といへば、二人は一句も出でず、俯きてのみ居たる。金太郎重ねていふ樣、「そはさておき、垣藏を打つ上は二人に科なし。大小なきものを打つは死人を打つも同じ事なるが、未だ賣らぬこそ幸なれ、此大小をもて垣藏に渡し、妙節の娘に立合ふやう言はれよ」と言聞かせば、金吾の連れし侍のいふやう、「仰御尤に候へども、垣藏は何をかくさん大磯の某の許に、酒色の價の爲に引止められたればこそ、斯く大小も賣拂ひ申すなり」といへば、「然らば我、其酒色の價を惠み、門人兩人に持たしてやれば、其所より往來の無き中、未明に由井が濱へ貴殿等も同道して、朋友とあれば、彼が助太刀をするとも苦しからず。必ず未練なきやう、金吾、熊藏、屹度言傳へよ。我はお花を引連れて夜明に彼所へ赴くなり」と、誠に仁あり義ある詞を感じて、さすがの惡漢も金太郎を拜して、二人の門人を引連れ、大磯へと出行きける。

七段

さるほどにお花は此事を聞くより、天を拜し地を拜して、其翌朝凜々しく衣服をあらためて、

能く聞かれよ。我はそも富田金太郎の門人坂田金吾といふ者なり。今主人の物語にては、矢張垣藏を尋ぬるとありては、定めて妙節の由緣の者でありたるか」といふに、善兵衛、久七も打驚きて、「さてはあなたは金太郎樣の御門人とあるからには、此上よろしく計ひ給へ」と賴みければ、金吾かの侍にいひけるやう、「貴殿、垣藏の身内になくとも、垣藏の出でるまでは、拙者と共に來り給へ」と直に町駕籠を傭ひて是に乘せ、「久七も善兵衛も共に來れ」とあれば、皆々宿を立出でる。時しも建長寺の六ツの鐘、ゴン。

六　段

富田金太郎方へ山中熊藏立戻りて言ひけるやう、「私今日、朝比奈の切通の所にて、此脇指を賣拂ふ者ある處を、折しも通りかゝりて立聞いたせしに、其包みたる風呂敷の隅に井原氏と記してあるに、目のつくも天の網と、段々に責問ひて、僞言はゞ打果さんと、既に鍔元を寛げければ、明かに敵の所在知れたり」といふ折しも、表にて人聲かまびすしければ、熊藏走り出でて見れば、坂田金吾駕籠の内より彼の侍を引連れて、直樣金太郎の前へ赴き、云々と語れば、金太郎殊に喜びて言ふやう、「只今山中氏も」云々なりと語り聞せば、金吾驚きて、「世に不思議もあるものなれども、かゝる事は不思議の不思議なり。さらば先二人の者をお聞糺しあるべ

も彼を押へねば叶はぬ事が御座います」「そは慥の事ありてか」「イヤもう慥にも、きつとした見知人も、今幸此所に參合せて居りまする」「オ、然らば心得たり。手前達は却つて邪魔なり、拙者直に捕押へてくれん」と首肯きつゝ、奥に入りて彼の侍の側へ行き、「私お拂の刀直樣此所にて買求めし値段、如何ほど差上げべきや」といへば、「御鑑定を持ちて相當に遣されよ」といふ折しも、右の手を、やつといふ聲もろともに捻上げて、「それ主人」と聲をかければ、善兵衞、久七立掛りて大小をもぎ取り、兩手を捉へて善兵衞いひけるやう、「あなたは井原垣藏殿の在家を御存じならん。それを明かに敎へ給へ」といひければ、「コハ慮外千萬、我其樣な者を見知る事なし」「イヤ、さうありては、此方から申すべし。昨夜大磯の舞鶴屋にて、垣藏殿と一座をなされて御存じないとは、如何なり」と此一言の星を打れて、「さては、それを知る上は、何をか包まん。垣藏は家を駈落してより、只僅の知邊の方を今日一日と歩き、此程は彼に連れられて舞鶴屋に上りしが、三人の懐遣果せしゆゑ、餘儀なく垣藏、此刀を賣つて來いと賴まれたれども、拙者身内の者ではなし、ほんの遊友達なれば、彼が事につきて我を斯く輕しむるは如何の事」と彼の侍にいひければ、かの侍大音にいふやう、「あら、天なるかな、命なるかな。我その垣藏を探す爲、此所彼所を彷徨ひしに、圖らずも今垣藏の所在を聞きぬ。此所の家内の者も

二人に挨拶して、「拂物とあらば、少しお見せ下され」といはれて、「以前の侍小氣味惡くや思ひけん、「イヤ、なか〳〵貴方衆の御覽なさるゝ様な品では御座らぬ、眞の犬威なれば、持主の手前も如何。平に御免下され」と持歸らんとすれば、後の侍、「これはけしからぬ。前に拂物と御座れば、拙者此所にて金子をお渡し申す。いかほどで御座る」といふ折しも、女房奥より出でて、善兵衛を呼びけるゆゑ、奥へ行きて見れば、屋守の久七娘を連れて、先に裏口より來り居て、善兵衛に對ひていふ様、「今店へ刀を拂ひに來たる侍は、かの妙節殿を殺せし垣藏と諸共に、舞鶴屋に昨夜居たものと此娘が見付けていへば、どうか逃さぬ様に捕へてたも。わしも力になります」と腕まくりするを見て、「さればこそ、だましておさゆるにしくはなし」と、また店へ走り出でて、二人の侍に對ひて、「コハお二人とも先此方へお上り下され。表は人立ありて見苦しき。イヤ何も兎や角申すは表向、金子御入用とあらば此處で買ひまする。又あなたもお望みとあらば、些の口錢にて直様上げまするが私の渡世、先々此方へ」と彼の刀を持ちて奥へ這入れば、賣主も少し心落著きて這入る。後の侍、善兵衛を小陰へ招きて密に言ふやう、「拙者いさゝか訊ねる事あれば、どうか彼の侍の宿元を聞きて貰ひたし」といふに、善兵衛聲を潛めて、「私はいやで

る刀なれども、そを明かにいはぬは、心にお花の敵を尋ぬるがゆゑ、此侍に對ひて、「旦那、あなたは御酒でも上つた節、犬でもお慰みなされましたな」といはれて、彼の侍煙草をはたきて、「イヤ、それは我物ではない」「あなたお求めなされましたのか」「イヤ、もとめたものでもなし、心やすき人に頼まれて拂ひますのだ」「シテ此持主は、如何なるお人で御座います」「イヤ、名乘る程の者でもない。いかにも目は恐しいものだ。其刀は貴樣が言はつしやる如く、驗にかけたが、見事に二人まで仕止めた業物、たゞ値打は其處ばかりさね」「ハテナ、左樣で御座いますか」「値段は幾らに買はつさる」「さればで御座います、凡て道具を買ふにも賣るにも、其御當人のお宿の知れませねば買はれませぬ。外に此位な物を欲がる者より頼まれて居りますから、隨分値段も好くお引取申しませうが、此御當人樣のお宿へ上りまして、値段を申上げませう。コレ小僧、おれが煙草入を奥より持つて來い。そして雪駄を出せ」といふを聞きて、「聊不正の品でないゆゑ、此所で値をつけて下され。チト買物の都合もある。モシそれが出來ずば、先へ返して仕舞はん。其袋へ入れて下され」と逃支度をするを見るより、善兵衛取逃さぬ樣に少し威しかけて、「イヤ、此間縣主樣よりお觸のある品に似寄の品ゆゑ、縣主樣へ御目にかけねば、後で私の身に難儀がかゝります」と、それよりせりあひになりし處へ、表に佇みし侍入來りて、

敎草女房形氣 二十編下之卷

四 段

去程に又、妙節が殺されたる長屋の屋守久七は、大磯の廓の奉公人の口入をするものから、今日も此所彼所の出代を濟して歸らんとせし時、仲の町にて我娘に出會ひければ、「其方は昨夜歸らぬが、何所へ泊りし」と聞きけるゆゑ、娘抱持ちし三味線を見せて、「舞鶴屋の龜年さんの新造さんが、雪は巴の替唄を教へて下さんすと言はさんしたから、昨夜行きて泊り、今朝髮も結うてもらひました。時に父さん、いつぞや長屋内の妙節さんの所へ無心に來た怖いお侍が、彼所に居ました」といへば、久七驚きて、「アノ怖い侍といふのは、定めてそれこそ」と俄に屈託の面持にて、あたりを見れば人の往來も多ければ、急ぎ娘を引連れて我家へかへりける。これお花の敵の手がかりの始なり。

五 段

襲にお花を引取りし小道具屋の善兵衛の店前へ、一人の侍腰をかけて、粗末なる刀を袋より出して、「是を求めくれよ」といふ。善兵衛、中子から切先を驗め見るに、正しく人をあやめた

正しく見たるは男の姿」「イヤそれは其筈」云々の手だてよりといへば、お花かの團扇を持來りて、「此團扇は、どうしてお手に這入りました」と聞けば、お春「されば、此團扇の不思議をお聞き下され。娘の病氣平癒を祈りに長谷寺へ參詣して、始めてお通夜を致せし夜こ、夢幻に觀音樣、お手に持ちし此團扇を、大事に持たば、娘の病氣平癒ありと下されけるゆゑ、七日の間御堂へ持ちてお通夜をせしに、ふと此包のとりかはりて、中を見れば二ッの位牌あり、風呂敷の端の印は、娘の緣談ありし名前なれば、是ぞ長谷の御利益にて、もしや緣も結ばれんかと、夫にかくしてお雛さんの家に至りて、云々と語れば、箱右衛門殿もお逢ひなされて、それより此所へ」と語る折しも、每日稽古の若殿ばら打連れて來るが故、箱右衛門はお春を連れて、又我家にぞ急ぎ歸りける。

門「ソレ、それが矢張かくすのぢや」といふ迄を、片蔭にてお花は疾くより聞居たりしが、忍ぶに餘りて其場へ轉出で、涙を拭ひて箱右衛門に對ひ、「其隱事を私が、さつぱりと言開きます。定めて私の身をも、親御樣始めおひな樣も、疑はしく思さんが、今のお詞を聞きますからには、何もかも打明けて、こなたの娘御かをる樣と金太郎樣の媒人は私がいたします。チト私に仔細あれば、私への義理に、金太郎樣父御樣へ僞もて、妾かなんぞの樣にいへど、私はなかなか夫を以て樂む樣な心の無いは、神佛が御存じで御座ります」と猶涙にくれければ、箱右衛門聲をひそめて、「そは我も知る事よ」「シテ何方より私が身の大事をば」「されば、其方の母御が殺されしは、私が地面の家なるものを、家守久七の知せに聞けども、今日迄は金太郎の妾とばかり思ひしに、昨夜長谷寺にて取換りし此包の中を見てからは、さてはと心の疑晴れぬ」といふを聞きて、金太郎「斯く事の明かに知るゝ上は、何をか包まん。義に依つて表向ばかり此お花どのを妾にしてより、或夜心を引きて見んと、酒に醉ひたる振にて戲言を言ひかけければ、肌身放さぬ父母の位牌を出して泣詫ぶれば、コハ天晴の魂と感じて、夫より我も勵みがつきて、熊藏、金吾を南と北へ、敵の在家を探しに出しぬ。まことは昨夜、長谷に籠りしは此お花」といへば、傍にうつむきし、かをるの母お春は驚き、顏を擡げて言ひけるやう、「コハ夢であつたか、

證」「さればよ、今此方より委しき話を聞きて、我も涙にくれておひなが歸を待ちしが、なかなかおひなが應對にては濟むまじくと我來りぬ。手前、昨夜長谷寺へ通夜を致したか」「イヤ、その覺は、オヽ御座ります」「ハテ、したでもない、せぬでもない、挨拶、手前如何程僞るとも、著類の紋の目標は、言ひくるめる事あるまいが、其處で此方の話を聞かつせえ。こなたの娘御、いつぞや手前に逢うてより、夫を一生の縁と思ひ定めて、侍く事に樂まれしが、ふと内々妻の定る事が知れて、さては叶はぬ縁と諦めよと、此お袋樣が意見なされし處、口にはハイといひながら、それより日に〱病重りて、お宿に下りて寢て御座れば、親の心は誰も同じ事で、何卒病氣平癒の爲とて、長谷寺へ七日の内火の物斷で籠らせられ、既に昨日が滿ずる日に、其方と二人御堂の内にて肩を竝べて通夜をする事、盡きぬ縁かと悅び給ひて、今朝早くお出がありて、此詳しき御物語。それにつきて不思議の事は、此風呂敷包の中を明けて見てより、チト心あたりがあれば、斯く人もなき處ゆゑ、手前の胸も打明けてくれよ。又其處らに居らるゝ若き女も、てまへの親なら何もかくす事には及ぶまい。此方とても娘を嫁せば親同然、こゝらの處を能く聞分けて、わが胸の安心をさせてくれ金太郎」と涙と共に言ひければ、さしもの金太郎も涙を浮めて、「こは勿體ない。あなた方に何を隱す事があらん」といふを待たずに、箱右衛

金太郎にはさつぱり譯が分らねば、「そは又如何した譯で御座る」「如何したも無いものさ。其お心があればこそ、長谷寺へ昨夜お通夜をなさつたを、私は能く存じて居ります」イヤそれは人違といはんとせしが、昨夜お花長谷寺へ籠りたるなれば、若し敵の手がかりもあらん、お花我紋の付きたる著類羽織を著たるゆゑ、それを見付けて我なりと思ふも道理、兎も角も能く事を聞糺さんと、詞を濁らせて答ふるやう、「いかにもそれを見られては面目なし」「ナニ面目もなきどころか、さうなれば父さんも御安心、なんぼ物堅きお生れなるとも、私が兎や角おすゝめ申すを、一人で長谷の觀音樣を媒人とは聞えませぬ。何も私は水を注すではなし、如何か彼の子と御緣が結ばれば、私の嬉しさいかばかりか。いよ〳〵そのお氣ならば、事を急ぎてお貰ひなされぬか」「イヤ、夫には少し仔細がありて」「オヽ其仔細はといふは」とお花が這入りし方へ指をさして、「彼の事ならん。そは如何でも身の振方を付けられるもの、さつぱりとした御返事を」と言はれて、一句も出でざる處へ、箱右衛門風呂敷包を持ち、かのお春を連れて入來り、「コレおひな、事は分つた。其方は早く宿へ歸れ。我金太郎にいふことあり」と指圖にまかせて、おひなは入りかはりて戻りけり。箱右衛門、金太郎に對ひていふやう、「此御方をよもや見忘れはせまいな」「されば、いつぞや本家にてお目にかゝりました、今出川の御家中長橋互樣の御内

の子に與へたる物なり。それが如何して、やごとなき女の手に渡りたるぞ。是不思議の又不思議なり」と驚くを見て、金太郎も腕を組みて、「さて〳〵奇なる事かな」と、其團扇二本を手に取りてお花にいふやう、「此團扇に畫きたる二人の面、日外途中にて我に無禮をせし侍の面に能く似たり」といへば、お花は殘りし一本を手に持ちて、「さういへば、此一本の畫にかきたる面、かの井原垣藏に能く似た面差。それといひ是といひ、不思議かさなる長谷の御堂。さては此三本の團扇再び我手に這入るはめでたき例、是につけてもどうか彼の巡禮に邂逅ひたいもの」と語る内に、金太郎團扇を包みし風呂敷にある名前を見付けて、小首をかたげ、「此風呂敷の端に、今出川内長橋氏とあるが、こは日外、身共に娘をくれんといひし亙殿の苗字なり」と聞いて、お花は迫いたる顏にて、「エヽ、そんなら此風呂敷の主は御存樣か」「ハテ聲が高い。誰やら表に案内がある。誰ぞ取次がぬか」と目顏で知らせて、其品々取片付ける。其處へ下女が來りて、「御本家のおひな樣が入らつしやいました」「オヽ左樣か、此方へ」といふ間もなく、おひなは何か心せわしく入來り、金太郎に物語もしたき樣子なれども、側にお花の居るを見て憚るやうなれば、お花は其色を悟りて其座を去りしが、心せかれて朝飯さへ食べず、屈託に困じける。さてお雛は金太郎に對ひて、「あなた如何しても、かをるさんとの御縁はきれませぬ」といへども、


お花


初段
二段

がりを透して此方を窺ひ見る様子なれば、身の一大事なくば、共に身の上を語合うて、互の憂をも晴さんものを、佛に祈る願言さへ、心に忍ぶ大事の身なれは、夜の明白みて此姿を見られては妨ともならんと、其夜は薄暗きに、お花は御堂の内を出でける時、挨拶をせんとせしが、いや待て、姿は男に變へ俏せども、詞はいかで俏さるべしと、物さへ言はで下向せしが、道にてふと心付きたる事ありて、御堂へ馳來りしに、其女ははや失せけるゆゑ、心も心ならず坂を上りつ下りつして周章つる仔細は、お花が片時放さぬ風呂敷包の中は父母の位牌にて、所定めず敵を打ちたる所に、其首を會向にせんとする程なれば、疎にはせぬ處、不思議と取代れば、定めて彼方にもさぞかし尋ねつらん、とはいへ今更如何せん、先家に歸りて、金太郎殿に此由を物語りて、此包の内をも開き見たしと、急ぎ稽古場へ歸りけり。

三段

お花は密に金太郎に見え、云々の事を告ぐれば、殊に驚きて、「先兎も角も其風呂敷包の中を見るべし、若し心當の者ありもやせん」と其包を開かすれば、お花は包を開きて、暫く躊躇ひ居しが、はたと手を拍ちて、「コハ眞に不思議の事あり。是此包の内には三本の團扇あり、此團扇は過ぎし頃、わが貰ひたる團扇なれども、なまめける俳優の面を畫ける故、ふと門へ來る巡禮

敎草女房形氣 二十編上之卷

初　段

さる程にお花は、金太郎及び二人の門人と、本意なく高砂の家を去り、稽古場に立戻りて樣々に考へけれども、敵井原垣藏の手がかりなければ、お花は殊に心を惱め、「此上は神佛へ念じて其在家をもとむるには、さしづめ靈驗あらたかなる此長谷寺の觀音を信ずべし」といへば、金太郎「それこそよかるべし。大儀ながら山中氏は北の方、坂田氏は南の方と、手を分けて尋ぬべし。やはか遠くは未だ行くまじ」といひければ、兩人も委細畏みしと、間もなく身繕して南北へと立出でけり。

二　段

さてお花は、深く心をめぐらして、金太郎の著類羽織を借受けて、深編笠に袴を穿きて男の姿にて、晝は鎌倉の町々の人立の中を彷徨ひ歩きて、垣藏のありかを尋ね、夜に入つては長谷の御堂へ籠る事はや七日にて、今日までの宿願なればとて、其夜は此處に信心し通夜してけるに、其傍に、年の頃三十越えし屋敷方の妻と見ゆるが、一心に觀音の御名を稱へて居たりしが、暗

昔隋の時、王舜といふ孝女、その父いとこなる者の爲に殺されけるとき、王舜わづか七歳にて、妹ふたりあり、一人は王粲といひて五歳なり、一人は王璠と言ひて二歳なり。この三人みなしごとなりて、由緣の家に養はれて、王舜ふたりの妹を深く慈みて、養ひ育てしかば、年頃になりて、夫々よき緣に付くべきやう言勸めけれども、更に聞入なくて、終に此三人のわか娘、親の敵を取れり。是は、女ながらも三人なり。本文のお花が身は一人なり。仇討の因によつて、これを玆に誌す。

口序

思ふ事言はぬ時は、腹ふくるゝといへば、お氣の毒ながら、例の藥の御披露。京傳店の、讀書丸、男大腎藥、女はらみ藥、其外品々、直段も是までお耳にたこの入る程、お聞きあきもあるべきと存じますれど、御見物様方のお耳にたこのいるのと、私の念に念のいるのと、何卒お差引下さるべく、其代に此卷は、本文讀つゞきの、折角おもしろくなつた所にて、さて御披露となれば、「エ、又藥か」とお邪魔にならぬやうに、こゝの端書の所を、板元より貰ひまして、記します。何卒御試しの上、品々御求めくださるべく、めでたく〳〵、と書くところなれども、私が藥の御披露は、耳にたこのはいりたるゆゑ、みゝたこ〳〵。

敵の住家は宿札が慥なる證據、垣藏は他出せしや。事によりては其方を人質となし、垣藏が歸る迄此所にあらん」一曲齋少しも騒がず打笑ひ、「いやはや、何もかも大間違、先茶でも上りて心を落付けてお聞きなされ。こりや權介、茶が出來たら皆樣へ上げ申せ」「はい〳〵」と盆に四ツ載せて持來る。一曲齋は心靜に寢道具片付け、居直りて、「右申す如く拙者は隱居、此家を買取り、一昨日引移りしが、隱居なれば、宿札も入らぬ事と、井原垣藏と記したる以前の宿札取除けんとは存じたなれど、引移りの取込に紛れ、忘れたるは年の癖。又昨日碁を打ちて居たるは拙者が甥、引越の手傳に參り、一晩泊りて昨晩歸り申した」金太郎「然らば垣藏が立退きたる所知り給はん」「いや更に知りませぬ。其譯は、此賣居をもとむる時、家主申すは、垣藏といふ浪人、店賃滯り夜逃いたしたとの事」と聞くに、一ツも手がかりなく、主人に粗忽を詫びて、四人すご〳〵立去りけり。此敵打は二十編に記し、引續き賣出し申候。めでたし〳〵。

安政五午仲夏　　九十歳　京山

賤の身も杖ゆるされてつくも髪うれしきものは命なりけり

二十一段

かくて四人、時刻好しとて立出で、熊藏を案內として、垣藏が門に至りて打叩きければ、內より答へて門を開きたるは年寄の下部、四人の出立を見て驚き逃入りたるを見て、四人馳入りしに、座敷の眞中、後には小屛風、夜は明けたれどまだ枕元には行燈、夜著引被りて大鼾。言合せたる如く助太刀三人は側に立竝び、お花は枕元に鍔元寛げて立ちながら聲高く、「やい井原垣藏、母の敵覺あらん。立上りて勝負せよ。かくいふは妙節が娘花なり。起きよ〳〵」と足踏みならせば、夜著跳除けてむくと起きたる顏を見れば、胡麻鹽の合總六十餘の老人なり。お花はびつくり人違、呆れて物も言はざりけり。此、老人も、三人が凛々しき出立にて立竝びたるを見て、いよ〳〵驚きしが、臆したる色も見えずお花に對ひ、「母の敵覺あらんと申さるゝが、更々覺なし。わしは高砂一曲齋と申して能役者の隱居、人違も事による。朝がけの寐込へ踏込みたるは仔細あらん」金太差寄り、「身共は富田金太郎と申して劍術指南の者、此お花と申すは身共の門人、井原垣藏と申すは此お花が母の敵、是に居る兩人は內弟子。これなる熊藏、昨日此處を通り、井原垣藏とある宿札を見て、豫て尋ねし敵の家と差覗き見れば、いかさま其許と碁を打ち居たる男の面體、熊藏委しくお花に語りしに、其面體敵に違なしと申す故、打たせんとて斯くの仕合、

へも頼みて、お花が敵井原垣藏が行方を尋ねけるに、或日稽古の休日とて、山中熊藏、玉池の稻荷へ參詣に行きて夕方に歸り、金太郎に對ひ、「今日玉池の歸途留井を通りしに、植木屋の竝に、二間間口の竹格子の門柱に、井原垣藏と書きたる宿札、是ぞお花が母の敵と家を差覗き、見れば六十ばかりの親父と、二十七八に見ゆる面付逞しき男と碁を打ちて居たるは、慥に井原垣藏ならん」といふを、お花も傍より、「其男は眉毛太く鼻高、色白く口大きくはなかりしか」熊藏「いかにも其通り」お花「然らば彌垣藏に違なし。金太郎樣何卒打たせて下さりませ」「いふには及ばぬ。我も御身に敵を打たせ、疑受けし親の目をも覺させたし」お花是を聞きて部屋へ入り、大脇指持來り、「是は父の遺物、家に傳へし鄕の義弘覺えの業物、直樣彼所へ馳行き垣藏を切伏せ、母の恨を晴したし。助太刀なされて下さりませ」金太「心のせくは尤ながら、此所よりは一里半、案内知らざる夜の勝負は危し〳〵。今宵能々支度をとゝのへ、寐込に踏込まば袋の鼠、首取るは最易し」と、金太郎、熊藏、金吾支度なし、お花には、金太郎が鎖帷子を著せ、額には南蠻鐵を縫込めたる鉢卷、支度の品々取竝べ、おの〳〵刀に寐刃を合せ、燭臺照して飯を食ひ、頭を取りたる鹽鰯を肴となし、盃を取りて門出を祝ひ、一番鷄の聲を待ちけり。敵は一人、助太刀は手利三人、お花が勇む隼の雉を目がけし如くなり。

口から言はれずば、己が言付けて追出さん」金太郎は頭を下げて聞居たる心の中に、知らぬ事とはいひながら、母の敵を打たんとする孝心の娘を、狐とは情なし、それと委しく語りては、人に漏れて敵打の妨ともなるべし、さりながら、心にもなき不孝者と思はるゝが口惜しく、思はず涙一雫。箱右衛門冷笑ひ、「其涙をお花に見せよ、悦ぶであろ。親が見ては愛想が盡る。いよ〳〵お花めは己が追出すぞ」金太郎「いかに其義は御免なされまし。お花を宿に置くは譯ある事、其譯はやがて知れ申さん」箱右衛門打笑ひ、「あゝ聞えた。お花懐胎になりしな。其子が嫁の腹に出來たなら、里の二親も嘸かしの喜、碌でもなき腹に出來ては噂もならぬ」金太郎「いえ〳〵、懐胎にはなりませぬ」「懐胎にならずば追出して仕舞へ」といふを、側に聞くお雛も敵打と知らざれば、女心に不便と思ひ、樣々とりなして暇をやるはやめる樣、詫言は濟みたれども、いふに言はれぬ金太郎が心の中、辛さ悲しさ口惜しさ、胸一杯に差迫り、打萎れてぞ歸りける。

二十段

去程に金太郎は、敵打のお花を狐に譬へられ、義の爲にする事を、不孝者と親にいはれて情なく、一日も早くお花に敵を打たせ、親の目をも覺させんと、日頃信ずる神をも祈り、熊藏、金吾

した」と外の話に移し、やがて歸りゆきぬ。おひなは言はざれども、供に連れたる下女が饒舌りしより、箱右衛門が耳に入り、おひなに尋ねけるゆゑ、せん方なく云々の由委しく語りければ、箱右衛門おひなに知らさず、金太郎を呼びにやりけり。

十九段

金太郎使と共に、箱右衛門に對ひ、「あわたゞしきお使、何事で御座ります」箱右衛門何時になき顔付にて、「呼びたるは外でもない。いつぞやの縁談、汝が好む武家の娘、心立はおひなが請合、器量はよし、支度はよし、先からも望むとあれば、立派にして嫁に取らんと親は嬉しく思ひしに、われが申すには、私今年二十三歳、劍術のみにもあらず、武藝の修業最中、妻を持ち子など出來ては、おのづから武藝の妨などと口賢く申して、まだ一月も經たぬ内、お花とやら申す妾を抱へたる由、今日おひなが見たを、おひなは言はぬが、供に連れたるおさんがしやべり散し、おれが耳にも入りたるなり。定めて今迄お花を圍者にしておき、鼻毛を延したるゆゑ、嫁を厭がり、武藝の妨などと、心にもなき僞を申して、親の心に背く不孝者奴、何時其樣な心になりしぞ。是皆お花狐にばかされしゆゑなり。此後何樣な馬鹿をつくすも知れぬ、狐めを叩出して仕舞へ。それも徒は出まい。手切五十兩もやらば嬉しがりて出行かん。われが

義經に靜、義仲に巴の例もあり。拙者は彼の善兵衛に掛合ひ、此娘を引取り、お寢間の塵を拂はせん。敵打の娘を見棄て給はゞ、臆病の名を取り給はん」と勸めければ、其すゝめに任せけり。そも〳〵此お花は、役者繪團扇さへ手に觸れず巡禮にやりたる程なれど、妾の据膳は、敵打の手段なるべし。

十八段

かくて金太郎、お花を内弟子に置きけるに、木竹にあらねば枕の塵をも拂はせ、年增の下女をも召抱へてつかはせ、稽古濟みて人なき時は、晝も稽古場に出し、内弟子二人も心を盡して教へければ、親の敵を打たんと思ふ一心ゆゑ、僅二月ばかりにて、腕前餘程固りけり。さて或日物參の歸りがけとて、金太が弟錢藏が妻おひな來りし時、金太は稽古場、下女は物にとりかゝり居たるゆゑ、お花茶を運びたるを、おひな見れば美しき娘、人柄下女とは見えず、名を聞けば花といふ。何時より此所に居ると聞けば、「はい」とばかり、恥ぢたる樣にて勝手へ入りぬ。おひな、物堅き金太郎も、妾にや置きつらんと思ふも道理なり。金太稽古場より來りて、挨拶して後、おひな「今茶を運びたるを見れば、年頃と申し美しき娘、私にはおかくしあるな」といはれ、敵打の娘とは明して言はれず、「彼は寢間の伽に置きました。父上には御沙汰なし〳〵」「心得ま

私今は戸網町にて、小道具屋善兵衞と申す者の方に居り候。然るに母の敵井原垣藏が首取りて母に手向けたく、それにつけては劍術稽古致したく存候處、藥師參詣の歸り、貴方樣三人相手のお働き、遙の傍より見て居たる人々賞め候得ば、彼は其筈、劍術の師匠と申したる者候ゆゑ、お後を慕ひ參りました。何卒内弟子に差置かれ、朝夕の稽古なされて下さりませ」金太郎「御身女と申し、殊更年もゆかざるに、母の敵を討たんとは、さすがは武士の娘、感心いたす。指南はいかにも承知いたした。さりながら、身共未だ妻もなき男世帶、女の内弟子は置きがたし。稽古は勝手に參られよ」お花は差俯きて詞なく、袖に泪をかくしけるが、顏を上げて金太郎を恨めしげに見やり、「此鎌倉には劍術に名高き先生數多あれば、稽古のみならば貴方には限るまじ、内弟子に居りまして、お寢間の伽をも致しなば、情も深くなり、親の敵の後見も御心をふくめ給ひ、本望遂げけんと思詰めて、身の一大事も打明けて賴みしに、かよひ稽古とは御心淺き挨拶、敵打は思ひとゞまり、尼となりて母の菩提を弔ふべし」と、敵持つゆゑ常に用意と見えて、九寸五分懷より取出し、髻きらんとするを、金太も内弟子も差寄りて押止めけり。

十七段

此時内弟子の熊藏申しけるは、「此娘を取立て、親の敵を打たせなば、此稽古場の名を揚げん。

十六段

かくて金太郎宿へ歸り、馬鹿者に出會ひしと内弟子の山中熊藏、坂田金吾へ話し、眞劒の勝負の氣合など教へて居たる時、玄關へお賴み申しますの聲、金吾立出で、立歸り、「珍しい女が參りました。年は十七八、しかも美しく、供もなく只一人、私は浪人者の娘花と申す者、先生を武士とお見掛申し、願ありて參り候、何卒御逢ひ下されませ、と申します」金太「いかさま、珍しい女ぢや。武士と見かけてと申すからは仔細あらん。是へ連れて御座れ。これ熊藏、燭臺を點け給へ」この娘來り座敷に入り、金太郎を見て兩手を突き、うや〳〵しく禮をなし、「私は花と申すもの、父親は望月殿の家來薄田段五兵衛、ゆゑありて浪人いたして後相果て、母は尼となりて妙節と申します。私は兄弟もなく一人身。それにつけてお願ありてわざ〳〵參りました」金太「願とは如何なる譯ぞ」「私身に取りての一大事、何卒御人拂下されませ」金太「いや〳〵、是に居るは我腹心の内弟子、我等も同じ事」「左樣あらば申上げん。此鎌倉の根岸と申す所に、母、私、下女一人、下男一人にて住ひ居り候處、私留守の夜、以前は同じ家中の者、親の勘當をうけし井原垣藏忍入り、母を手にかけ金子を奪ひしを、忠義の下部脇差にて立向ひ、深手を負ひし處へ私立歸り、手負の口より、母を殺したるは井原垣藏と慥に聞き候。母相果ててより日柄たち、

箱へ入れてやりしは、宿下のかをる御殿へ歸る時の土産にならんとの心なり。これは此おひな御奉公したのみにあらず、氣の利きたるなりけり。この文薫が兩親、薫も見て喜ぶ事、くだ〱しければ、袷にのみあらはせり。此縁談いかになるやらん、此次二十編を見て知るべし。

十五段

此日暮れて金太郎稽古出張の宿へ歸途、物見歸と見えて若侍、いづれも酒機嫌鼻謠も聲をかしく、金太郎それと見て除けて行く刀の鞘へ、かつきと當てたるを其儘行過ぎしに、かの侍聲かけ、「ヤイ待て。二本差しながら鞘當の挨拶もなく、武士の作法を知らぬ奴、無禮の挨拶詫びて行け」金太郎立止り、「そりや此方から申す事、鞘當はお身からぢや」「それには何ぞ證據があるか」「いやはや、法外なる難題。鞘當は石と鎌、何ぞ證據のあるべきぞ。戲けた事を」「なに、戲けとは慮外者奴」ト持ちたる兩大のかさにて撲たんとするを、金太郎が鐵骨の扇にて打落され、柄に手をかくるを、踏違へてひはらを衝てられ、其儘礑と倒れけり。立並びたる二人の侍、抜連れて切りかくる。金太郎も抜合せ、丁々發矢と飛鳥の働き、劍の稲妻切捲られて逃去りけり。金太郎刀を納め、塵打拂ひ、徐々と立去りけり。

ひそ〳〵話し、互ににこ〳〵打笑み、軈て盃を納めて歸りけり。さて客の馳走の殘にて、親子四人水入らずの酒盛に、おひな、箱右衞門に對ひ、「先程薰が母、私へ密に申すは、金太郎殿の事、豫て半澤六郎殿より委しく〳〵聞きて、兩親とも好き緣組なれば　かをるを嫁にあげたく存じ、宿下の內申入れ、見合もと存じた處、昨日花屋敷にてはからずお目にかゝりしゆゑ、今日娘を連れて參りしも、有樣は箱右衞門樣へも金太郎殿へも、餘所ながらかをるをお目にかけ、私へ下話せんとて參りしに、金太郎殿へもお目にかゝりしは、見合をいたしたも同じ事、めでたく相談出來る樣頼むと申しました。里は今出川の家中二百石の御用人、かをるはあなたも隙見なされた通り、心立は私が請合。あなた何と思召す」箱右衞門此挨拶はなく、「これ金太郎、聞く通りぢや。おのし何と思やる」「はい、好き緣では御座りますれど、私今年二十三歲、劍術のみにはあらず武藝の修業最中妻を持ち候へば、子も出來、おのづから武藝修業の妨、一兩年たゞば兎も角も、今厄介持ちますは迷惑で御座ります」お雛かたはらより金太郎に對ひ、「かをるは御奉公の御年がまだ二年ある由母はなし、御年明けてめでたく婚禮致すやう、今より印を取替して置くは如何で御座ります」金太「そりや父上の思召次第」と、下話の相談極りければ、此明る日かをるが母へ、おひなより緣談の返事やる時、交魚一籠、上酒五升の切手、鮨折三ツの切手、文

どして居る處へ、金持の事なれば、吸物、硯蓋、刺身、取肴。錢藏も挨拶に出で、箱右衛門も嫁にもと思ひし娘なれば、隙見をなしけり。

十　三　段

此日此時、金太郎來りしと聞きて、おひな心の中に、金太郎に美しきかをるを見せなば、厭とはいふまじ、又かをるにも母にも、金太が男振を見せたし、丁度好き見合なりと、側に居たる錢藏に囁きければ、金太郎を連來り、かをるが母に對ひ、「是は私兄金太郎と申して、町人を厭がり、只今は」斯樣々々と概略を話しければ、かをるが母「やれ〳〵、左樣で御座りますか。半澤六郎殿の話にて、金太郎さんの事は委しく存じ居ります。武者修業なされし時、山賊五人仕止めたる事、又は日頃のお身持と申し、此鎌倉の廣い中で、劔術は若手の四天王と人々の噂、私良人もお目にかゝりたいと申します。始めてのお盃は良人へよい土産。おほゝゝ」と酒も少し廻りし樣子、金太郎は物堅いに似合はず、人をそらさぬ男ゆゑ、程よく待遇ひ、暫く爰にありて奥へ入りけり。

十　四　段

さて薫が母膝すり寄せ、おひなに對ひ、何やらん密々話せば、おひな首肯き、おひなも何やら

く話し、心に思ふ事を語りければ、大に悦び、「金太を呼びにやれ」と言ふを、おひな「先兄様へ下話してからの事になされませ」と通番頭の女房を呼び、委しく語りて、金太郎方へ遣しけり。

十一段

程近き所ゆゑ、頓て立歸りければ、箱右衛門「どうぢや、金太は悦んだか」「いえ〳〵、貴方方の思召とは大違、いかなる縁談なりとも、先一二年は女房持たぬとおつしやるゆゑ、いろ〳〵おすすめ申したれど、言ふは徒事、其話は止せと少しお腹立の樣子ゆゑ、歸りました」といふを聞きて、箱右衛門「いやはや、石部金吉にも困るなア」おひな「左樣さ、惜しい縁組で御座ります」

十二段

かくて此明る日の四ツ半頃、昨日おひなが供に連れたる年增の下女奥へ來り、おひなに對ひ、「もしあなた、昨日花屋敷でお遇ひなされましたお内儀さん、お娘御を連れてお出なされました」おひな「宿下ぢやゆゑ、彼地此地歩く序であらう。宿下の娘を連れて歩くは母の自慢ぢや」といひながら立出で、掛物、花も活けてある座敷へ入れけり。さて互に昨日思はず遇ひたる事、今又かをるが手土產の禮をのべ、お雛勝手へ立ち、馳走の用意申付け、もとの座敷へ歸り、かをるが兩座の芝居見たる話、又はおひなが勸めた中、相部屋の女中嫁入して子持になりし話な

お花は毎日涙の乾く隙なく、三七日を過しけるに、善兵衛が計ひにて此家を仕舞はせ、お花を引取り、厚く世話を爲しけり。

十　段

話ふたみちに岐る。それはさておき、金有屋の嫁おひなは、いぢめられたる姑のおしやく、髪結の才三と不義をなし、金太郎が手にかゝりたるは、おひなが心では、鬼に瘤を取られたる思、毎日胸のもや〳〵したるも忘れ、さして心づかひする人もなければ、今日は長谷寺の觀音へ參詣なし、序なれば、花屋敷の秋草を彼所此所見廻りけるに、遙の腰掛より名を呼びて招くゆゑ、立寄り見れば、おひなが以前勤めたる時、薫とて七ツばかりの兒髷のお小姓、いつかお振袖、宿下して母に連れられ、此所にありしなり。おひな同じ腰掛によりて互に久振の話して立別れ、宿へ歸る道々お雛思ふやう、金太郎殿は金有屋の家督なれど町人を嫌ひ、今では劍術の師匠樣、其弟の錢藏殿は、私がつれあひ、弟に妻がありて、兄樣に妻の無いを餘所目に見るは道ならず、かをるは丁度好い嫁盛、親御は今出川の御用人、武士を好む金太郎殿嫁に嫌とはいふまい、かをるが氣立も知れてある事、男はよし、金に不足はなし、姑はなし、緣があれば かをる も仕合、兩爲ぢや、と道々考へたる事、宿へ歸り直樣錢藏へも話し、主人箱右衛門へも、かをるが事委し

敎草女房形氣　十九編下之卷

八　段

さてお花は善兵衛方へ至り、品々馳走にあひ、淨瑠璃の始まる頃、町の拍子木四ツを打ちければ、母を案じ歸らんといふを、駕籠にて送るゆゑと皆々止めけれども、孝心の娘ゆゑ、淨瑠璃にも心をとめず、駕籠も斷り、送りの男を賴み、連れたる下女を從へて立歸り、門口より男を返し、立寄りければ門口開けてあり。お花訝しく內に入れば、黑闇に人のうなる聲あり。お花いよ〳〵訝しく、連れたる下女が持ちたる提灯取りて照し見れば、忠義の下部袖介、深手と見えて血に染りたる顏を上げ、「お花樣か」「おゝ袖介」と喫驚仰天、愕く胸を打叩き、「何故の此手傷」袖介苦しき息の下、「井原垣藏が忍入り、妙齡樣を切殺し、金盜んで逃げる處を、此脇差でと思ひしに、えゝ口惜しい」とのつけに反りて息絕えけり。お花は奥へ駈入り、母の死骸に取付きて、悲み歎く繰言は、いとも哀れに血の泪、くだ〳〵しければ記さず。

九　段

かくて此兩人は、惹る非業の死をなしたるゆゑ、所の作法濟みて、兩人とも野邊に送りしに、

事親切に世話をする男なり。さてお花俄に支度して、土産物など有合にまかせて取繕ひ、「およ皆さんへ、能う言うてくれ」「はい〳〵。是袖介、五ッ頃には歸るぞ、氣をつけてくれ」と下女を連れ、善兵衛に伴ひ立出でける。これぞ親子の一世の別、後にぞ思ひ知られける。

ませうぞ。よしや有りても親さへ見捨てた此方、誰が金を貸さうぞ。臭い物身知らずぢやなア」垣藏むつとして、「臭い物とは過言であらう」妙節「いや、過言でない。親が押籠置きしを、夜中に庭の塀を越して大溝へ落ちて氣絶して、前町の者に助けられしを、わしが連合の情にて内分に濟ませた其時、臭い物まで著替へさせてやつた、身知らずとは其事ぢや、覺があらう。金の無心はとても出來ぬ事、外に用はあるまい。親不孝の顏見るも厭ぢや。さあ〳〵歸らしやれ」垣藏詞なく妙節を睨付け、四邊を見廻し、「覺えて居ろ」と立去りけり。

七段

此日夕方小道具屋善兵衛といふ者妙節方へ來り、妙節に申しけるは、「私母本卦がへりの内祝ゆゑ、片付きました娘も呼びました處、久振にてお花さまにもお目にかゝりたいと申します。晩には咄家もまゐります。それゆゑ私わざ〳〵お迎に參りました。お歸にはお駕籠にてお歸し申します。お宿にばかり御座るお花樣、少しはお慰にもなりませう。私方なれば苦しうは御座りますまい」妙節是を聞き、「やれ〳〵母御は六十一かえ、本封返の祝おめでたい。娘御もお出とあれば、お花、善兵衛殿と一所に行きやれ」といふ。この善兵衛といふ小道具屋は、昔妙節が屋敷へ久しく出入して、妙節が夫の世話になりたるを、其恩返とて、妙節が夫浪人以來、萬

「もし、昨日逢ひました勘當が參りました」と聞いて、お花は納戸へ入る。「井原垣藏で御座ります」と刀を提げてつか〳〵入りけり。井原垣藏年は二十五六、男振好く、口前は利口氣なれど、見掛とは違うて愚者、身持一ツとして宜しからず、親の意見も言盡し、親さへ見捨てる勘當の天竺浪人、妙節が夫は、此垣藏が親と同役なりしゆゑ、垣藏童の頃可愛がりし故、今日も尋ね來りしなりけり。

六　段

互の挨拶ありて、垣藏妙節に對ひ、「今日お尋ね申したるは、あなたを見掛けてのお願。その譯と申すは、私は此度星の井の家中、陪臣ながら千七百石の人の用人に抱へられ、百二十石にありつきしところ、身の廻何やかやに差支へ候ゆゑ、何卒此暮まで金子二十兩御貸し下されまし。暮には取前にて間違なくお返し申します」妙節は打笑ひ、「噓も吐き樣にて實らしいが、此妙節は實にせぬ。何故といふに、むづかしき手紙は節用を出し、手蹟は見苦しく、算盤は九々を覺えたるのみ。劍術は目錄が濟んだばかり、百二十石に誰が抱へるものか。又例の酒過して飮んだと見える。話を聞くも酒臭い」「はてさ、其樣に情なく言はぬものぢや。浪人してもちと宛は貸金もする此方樣」妙節手を振り、「金の事はいうても徒ぢや。浪人の女暮、何しに貸金し

母の話を娘お花、繼物しながら聞きて針をとゞめ、「左樣に仰やるあなたをも、野暮な達ぢやと笑ひませう」「いかさま左樣ぢや」と、母も娘も打笑ひけり。京山今年九十になりて、若かりし七十年の昔を思ふに、役者贔屓して、其役者の宿へ駈込みたる馬鹿娘度々ありしが、近年は左樣なる馬鹿娘あるを聞かず。世の中の娘達賢くなりしと見えたり。されども彼が書きたる手紙を人に貰へば大事になし、母の文は枕紙につかふ。町人の娘は論ずるに足らず、武家の娘御、又はやごとなき邊へ宮仕し給ふ女中など、華美に贔屓するを見れば、平常の心も推量られて、人柄見られて、若い中はありもすべけれど、胡麻鹽の椎茸などには似合しからず。兎にも角にも華美な贔屓は愼み給へかし。

五　段

妙節が今召使ふ年寄の下部袖介といふは、昔屋敷にありし時より、今以て召使ふ忠義の者なり。ある日使に出で歸り、其用を言ひて後妙節に對ひ、「昨日あなたが尋ねて來ねば好いがとおつしやりました勘當息子の井原垣藏樣、今道で逢ひました」妙節「惡い奴に逢うたな。此所へ引越したを知つて」「居りませう。尋ねて往くと申されました」「何樣な姿ぢや」「いやはや、以前とは變果て、氣の毒な形で御座ります」と、噂したる其明る日の晝過、袖介勝手より來り妙節に對ひ、

お花「役者繪ぢやから三本ながら遣しました」母「そりや何故に」お花「さればで御座ります。此夏の中彼の三本を私がつかひますと、心ある人が見まして、俳優を贔屓いたして、手に觸れるかと思はれますが口惜しう御座ります。それで折角の土産ながら、其儘三本取らせました。あなたとても世を捨てたお身の上、役者繪などがお身に近くありましては、心ある者の思はくも惡いでは御座りませぬか」といふを、さすがの母も、「いかさま是はわしが過、そもじが心得感心いたした。それでこそわしが娘ぢや。世の中の女中を見るに、芝居を好かぬは一人もない。女の慰は少きゆゑ尤な事なれど、それぐ\に贔屓の役者ありて、同じ心の友達と其好惡を言爭ひ、顔に紅葉を散すもあれど、まだ十五六の子供なら許すべし、二十歳を越えたる女中達、殊更賢き御邊宮仕をなし、御祝儀の日は眉をもたてる女中、私は誰が贔屓といふ詞は聞きよけれど、私は誰に惚れましたといふに同じ。木竹にあらねば其美しき男振に、よしや心に染まるとも、華美なる贔屓は愼むべし。恥を知らぬに至りては、贔屓の書きたる扇を自慢らしく人中でつかひ、其紋處の釵を頭に戴き、賢き御邊へも憚らず。斯る無禮は咎め給はざるは、世の中に數多あるならひなる故なり。おのしが今巡禮にやりたる團扇は、今贔屓の大役者どもなり。それをおのしは捨てるやうにやりたるを、贔屓する娘達の爲には、狂氣かと笑ふべし」と、

三　段

それはさておき、彼の家主久七が娘今年七ツばかり、妙節方へ常々遊びに來りしが、性質もよくて心賢くて愛らしきゆゑ、妙節もお花も可愛がり、折ふしは髪などもお花が結うてやり、物など折々取らせければ、久七夫婦喜び、後にはお花に手本貰ひて、此娘晝頃までは妙節方にて手習をなしけり。されば久七方より、お花へ折々は物を送りて禮を爲しけり。さて或日久七が女房觀音へ參詣の歸り、お花への土産とて、まだ珍しき撫子の鉢植、今年新板の役者繪の團扇三本持來り、娘の世話になる禮やら、芝居の替目大入の話、娘が踊の師匠にお浚のある話、其日にはお花樣お連れ申しませうと、べら〳〵饒舌りて歸りゆく。お花貰ひたる役者繪の團扇一ぺん見て、母には見せもせず、傍に置きたる時、門口にお花と同じ年頃の娘の巡禮は、其母と見ゆる二人哀れな聲で、「補陀落や」二くさりうたひ、「御報謝下さりませ」と差出す柄杓へ、お花一錢取らせければ、押戴きて立去りし娘を、お花「これ〳〵、是を其方にやるぞ」と今貰ひたる役者繪の團扇、其儘三本取らせければ、娘打笑み母も喜び、數々禮をのべて立去りけり。

四　段

母妙節傍に是を見て、お花に對ひ、「今貰うたる團扇、巡禮にやるは好いが、一本でよからうに」

なり。浪人なれど金子は餘程貯へありし故、下女一人に屋敷にて召使ひたる忠義の下部袖介を召使ひ、上下四人の暮。妙節は賢女なる故、昔の花も何所にか殘りしが、操正しく、孀の家ながら取締よく、いかさま由緒ある果とぞ見えける。

二　段

妙節が娘お花は、身持正しき母の育てたりとはいひながら、夏の暑き日も門へ出でて涼みたる事なく、冬の寒きには下女の手にかけず、炬燵程よくして母にあたらせ、昨日讀みたる曾我物語の話をしながら、母を慰めて肩を揉む。朝夕の飯時にも母の給仕は下女にさせず、是は左樣にもあるべきに、母の湯巻は下女に洗はせず、狹けれど湯殿もあれば、何時洗ふやら人にも見せず。かく孝行娘なれば、此程母が煩ひ、風邪が纏れてむづかしく、醫者の藥もはか〴〵しく驗なく、食もすゝまず、お花が歎、此上は神佛のお力と、やう〳〵母のすや〳〵と寢入るを見て、裏の井戸にて水を浴びる事毎晩、しかも雫も凍る冬の夜、其孝心に神佛の利益ありて、思の外に病すら〳〵と本服を見て、お花が嬉しさいはん方なし。されど水を浴びし事は、母さへ知らざりけり。これをこそ誠の孝心といふべけれ。

おひなは鬼に瘤を取られたる思ひ、心晴々としてひとしほ顔も美しく、夫婦中好く、おしやくが氣に入りの惡玉下女才三を執持ちたるおとげも追出したれば、おひなが才覺にて奥の暮取締よく、是ぞと記すべき事なかりしゆゑ、金有屋の事は爰に筆をやすませ、是より孝行娘お花が事に筆を起す。かの金有屋箱右衛門、此鎌倉に地面澤山持ちたる中に、根岸といふ所にも地ありて、此所に別莊を作りしに、貸店もあれば、別莊の留守居旁家主の久七とて、此所より程近き大磯の、下部を口入する者を附置きけり。さて五軒ある貸店の内に薬箱持たせて歩く安醫者住ひけるが、程近ければ大磯に病家多きゆゑ、この頃大磯へ引移り、後へ賣するの札を貼置きけるに、其賣するは六疊に四疊半の次の間、臺所、雪隱も庭もあり。此賣するを七兩一分にて求め、引移りしは年頃は五十ばかり、切髪の後家、名を妙節といふ。一人娘今年十六歳、家主久七が目には呼出の突出盛、惜しい娘を箱入にして置く事よと思ふも、大磯に入込みて人口入するゆゑなり。此妙節の夫は、望月殿の家來二百五十石取の用人を勤め、名を薄田段五兵衛とて、武士形氣にて、世の中の人情に疎く、殿樣へ對ひ、さまでもなき事を度々諌言なしければ、御不興を受け、閉門したる其機に附込み、常々中惡しきおてかけの讒言にて長の暇、浪人して後みまかり、妻のお節髪を切りそぎ尼名も妙節とあらため、娘を連れて、此頃此所へ引越しける

敎草女房形氣　十九編上之卷

初段

去程に金有屋箱右衛門の忰金太郎、暗闇の人違とはいひながら、幼き時より育てられ母と呼びたるおしやくを殺し、親殺の繩目に遭はんよりはと、其座にて腹切らんとしたる處、重忠殿の家來半澤六郎が爲に命助かりし事は、此前の十八編を讀みて知るべし。さておしやくを殺したる死骸をおしやくの母に見せ、髮結才三と不義を爲し、三百兩を盜取りし事、又は家內の人々常々お內儀樣といひ、主人の忰も母樣と呼びたれども、本妻の廣めせざりし故、妾なれば不義のみならず、三百兩の盜人なれば、親に代りて忰が手にかけたれば申分あるまじ、おしやくが品々は素より、涙金とて五十兩取らせければ、おしやくが繼母申分なく、死骸を引取りて野邊に送りけり。其明る日金有屋の主人箱右衛門は、箱根の湯治より歸り、云々の由を聞きて驚きけり。さて又金太郎は、町人を嫌ひて弟の錢藏を家督になし、劍術の師匠楠左門が稽古場の出張を預り、師匠より內弟子二人附けて、金太郎此出張に引移りけり。金有屋の弟錢藏が妻おひな、彼のおしやくにいぢめられ、心の安き日なかりしに、金太郎おしやくを手にかければ、

水ぐきはよしあさくともをさな子の
　道に渡らんはしとなれかし

安政五年午卯月二十五日

九十翁　京山

○母の子を育てる事かくの如くなれば、母の恩父にまさると思ふべけれど、然にあらず。六ツ七ツまでは母の手に育てられ、夫より父に養はれ、手習、元服、娵とり、家督をつぐ。たとへその日ぐらしの貧きも、それ相應に一生の身をかためるは、父の恩なり、○萬物の長たる人に生れながら、孝行の孝の字も知らず、親の意見少しも耳にとめず、親のいやがる友達の約束は心に忘れず、親には嘘をつき、友達には義理を立て、不孝同士は中よくて、けふも又くるわがよひ、親は宿にて子を案じ、子は遊里で親を忘却。親は爪に火を點し、子は蠟燭で文を讀む。づるけ者の、朝寢、食好して、米の値段を知らず、親の脛に鰹節かけて齧る世間のむす子、百人よせて、九十人はこれなり。○さて又女は、地にたとへて陰なり、陰は靜なり。されば女の子、大方は物靜なり。靜なれば心やさし。やさしきは孝にちかし。女の子は女同士ゆゑ、おのづから母にしたしみ深し。○こゝにひとりの娘ありて、母に孝を盡し、十八歳にて、母の敵を討ちたる事、この十九編の筋につゞく。その事讀みて知るべし。

○筆のついでに

百八十斛なり、母の食する所の四分の一をもつて、此乳汁に出すと申しければ、如來、母の墓に至り、千拜をなし給へりと記せり。按に、今の赤兒も、三歲になる迄の日數は、千八十日なり。夜晝一合づゝ乳を飮むとして、三歲までには、母の乳一石八斗を飮む。此一ッを以ても、母の恩を知るべし。○さて子を育つるは、乳よりほかになし。よしある御あたりは申すに及ばず、卑き町人でも、ゆたかなる家にては、乳母を抱へて、乳に困る事更になけれども、乳母を抱へる力なき家の母、乳のほそきは、明日くはする米のなきと同じ事なり。此頃は母の顏も見おぼえ、にこ〳〵笑ふあいらしさも、乳ほそければ瘦せほそる。晝はともあれ、夜に入りて寐乳を飮まざれば、いかにしても泣止まず、ふびんさ悲しさせん方なく、雪のちら〳〵寒き夜に、泣く子を懷へ入れて立出で、いつも乳を貰ふ門口、ほと〳〵敲き、「およりましたかえ」といふ聲もひくげに心づかひ、今ねいりつきたる耳には聞きつけず、門口にたゝずむえりへ雪のつめたさ身にしむ悲しさ。ふところでは子に泣かれ、親も涙の夜の鶴、子の泣聲に目をさまし、「おやせさんかえ、今あけるよ」と內から聲かけられた嬉しさ。これみな子ゆゑの闇の夜なり。

教草女房形氣　十九編よみはじめ

○兒を育つるは、毎日心不レ休、米を作るは、粒々皆辛苦。聖人の教に、父を天にたとへ、母を地にたとへたり。頭に冠つける雲の上人も、あたまに手拭かぶる雲介も、一日もなくて叶はぬ米をはじめ、家を作りて住居をなす、材木の類、石瓦、又は身に著る絹木綿の類、人間第一の衣食住、皆地より出づる物なり。又世の中の寶とする錢金も、元は地より生ずる物なり。○そも〳〵萬物に長たる人間も、天にたとへたる父の陽氣の胤、地にたとへたる母の胎内にやどし、母の精氣にて人にこしらへ、十月にてやう〳〵めでたく生みおとす。それすなはち、地に稻の種をおろし、粒々辛苦して、米になるが加し。○さて旱つゞきて、田に水すくなく、辛苦を盡したる稻の、枯れかゝる百姓のなげきは、乳汁細くして、我が子の痩せるを見る母の悲しさと同じ事なり。○法苑珠林といふ佛書に、中陰經といふ佛の經文を引いて曰く、釋迦如來、彌勒菩薩に問ひ給はく、兒生れて母の乳を飲むはいくらぞ。彌勒答へて曰く、乳を飲む事

り。不義をなしたるのみならず、妾の身として大枚の金子を奪ひたるおしやく、親に代りて圖らず打とめたる手柄の金太郎、いかでか切腹には及ぶべき。此場の様子主人重忠殿へ申上げん。死骸の片付勝手次第。こりや家來共、才三が持ちたる二百兩、忠兵衛へ渡してやれ。いかに才三、相手の女うたれたれば容してやるぞ。家來ども此門前より追拂へ」才三「はい〳〵、有難う御座ります」金太郎「不思議に命助りしも貴殿の御情」半澤「危い事であつたなァ。最早夜明に間もあるまい。皆々さらば」「ハイ」と平伏し禮の數々。半澤家來を引連れて、元の口より立去りけり。おしやく此家にありし内、箱右衛門が大恩をものとも思はず、箱右衛門を尻に敷き、こゝろざしよき嫁をいびり、剰へ才三と狂ひたる天罰ゆゑ、刀の錆に身を果せり。人たる道に背けば、遲かれ早かれ天罰ある事かくの如し。畏るべし、愼むべし。

これより後金太郎、女の助太刀を偽して親の敵を討たす事、おひなが義心ある事、十九編に記し出板仕候。めでたし〳〵。

まだ幼年の事ゆゑ」半澤「いかさま、子供なれば何の辨もなく母と申したるを、其儘にして差置きたるは箱右衞門が大きなる過、左傳と申す唐土の書物に、名と器物とは人に貸すべからずとある。母といふ名を浮々と貸しておくを、店を預る番頭の其方達まで捨置くはあやまりなるぞ」と叱られて、忠兵衞、善介、疊へ頭。半澤、金太郎に對ひ、「お身は幼年より武道を好み、劍術には長けたれども、惜しい哉文道に暗きゆゑ、人倫の道に暗し。親の妾とあれば、お身が爲にも召使なり。幼き頃は兎も角も、今の身にておしやくを母と呼びしとて、腹切るは筋違、まだ其上に、手にかけても苦しからぬ罪ある女。こりや家來共、繩付を是へ引け」「かしこまつた」ト用心口より引來り、引据ゑたるは髪結才三、人々これはと驚きけり。

十 七 段

半澤六郎聲あらゝげ、「やい才三、最前の白狀今一度此所で申せ。いはぬと其腕捻上げるぞ」「ハイ〳〵、申します〳〵。旦那の留守を幸ひに、毎晩お内儀さんの部屋へ忍び、今晩申されるは、金太郎が悟りたる樣子、殊更明日は旦那の歸り、最早此家には居られぬから駈落する、是を持てとて二百兩、お内儀さんが百兩、私が金を盜んだでは御座りませぬ、逃げる氣でも御座りません。二百兩はお返し申しました。どうぞ命はお助下さりませ」半澤六郎「皆の者聞きたる如くな

十六段

金太郎、さてこそ早くも捕手の者、縄目の恥受けんよりはと、持ちたる刀取直せば、「やれ待て金太郎、早まるな」と捕手の中より聲かける、顔見て喫驚、金太郎、「ヤ、〳〵、貴殿は半澤六郎殿」「いかにも〳〵。いつぞやお身も聞きし如く、主人重忠殿の手元の金子奪取りたる曲者詮議の爲、夜な〳〵忍んで此鎌倉を尋ぬる處、只今此所を通る折から、此口より忍出でたる曲者、搦捕りて白狀させ、樣子は知れたる此場の有樣。暗がりの人違、切止めたる此女は、御身幼きより母と呼びたるゆゑ、親殺しと心得たる切腹、尤なれど、我思ふ樣、仔細あるゆゑ、切腹をとゞめたり。此家の主人箱右衛門は、身共屋敷へ久しき出入の用達なれば、家内の樣子も豫て知りたり。こりや錢藏、親共へ尋ねべき仔細あり。如何いたした」錢藏「親は旅へ參りて、留守で御座ります」半澤「然らば忠兵衛、汝は久しき此家の手代、身共をも見知りつらん」「はい〳〵、左樣で御座ります」半澤「然らば汝に尋ねん。金太郎が今手にかけし女は、箱右衛門が妾と聞きしが、本妻のひろめ何時致した。大切な事ぢやぞ、僞を申すな。有體に申せ」忠兵衛「是迄本妻のひろめは致しませぬ」半澤「然らば、金太郎が手にかけたるおしやくとやらんは、召使の女、妾ぢやな」「左樣で御座ります。本妻のおよわと申すが相果てます時、遺言によりて妾に致し、二人の子供、其節は

天、「ヤ、〳〵、こりや母人ぢや。こはそも如何に」と呆果てけり。錢藏が妻おひなは、心利きたる女なれば、どろばうといふ聲に跳起き、店の方へ皆來い〳〵と呼ばはりければ、番頭善介はじめ、手代ども馳付け、おしやくが死骸を見て仰天なしけり。金太郎「こりや善介、早く忠兵衞呼びにやれ」と詞の下より、若い手代兩人馳行き、追々に女共まで眼を覺し、大なる騒となりにけり。

十五段

通番頭忠兵衞は、近き所に住居するゆゑ、時を移さず馳付ければ、金太郎云々の由を語り、「暗がりの見違とは申しながら、十歳の頃より母と呼びたるを切伏せ、親殺の名を受けて鎗先に死なんよりは、腹切りて相果つる。お身は此家の長を勤むる身分なれば、わが切腹を見屆けくれよ」と諸肌押脱ぎ、刀を取直しければ、錢藏、善介、忠兵衞、右左より押止め、「御尤ぢやが、死骸の側に落散りたる小判、是には何か樣子もあらん。はやまり給ふな若旦那」「いゝや放せ」錢藏、善介縋附き、「兄じや人、待ちたまへ」「若旦那樣、先々暫く」「いゝや止めるな、放せ〳〵」といふ處へ、開いてありたる用心口より、ばら〳〵と駈入りたる捕手の者共、手に〳〵提灯差上げて、金太郎を取巻きけり。

せ申して、あなたは二周もお出なされませ」箱右衛門「いかさま、兎も角も樣子次第にせん」おしやく「二周と極めてお立なされませ、左樣なれば其積にて御支度を致します。なう錢藏」「左樣さ、緩りと御遊山なされませ」と詞にまかせ、二周と定め支度をなし、通しの駕籠にて、駕籠の者三人、兩掛一ツ、手がはり一人、手代一人、上下七人にて、其日も天氣よく、旅立ちけり。

十四段

去程に箱右衛門旅立ち、日數經て後、旅よりの狀とて飛脚より屆きたるを、おしやく、金太郎、錢藏打寄り披見れば、明日の夕方は宿へ歸るべしとの知らせなり。金太郎店の番頭善介を呼びて手紙を見せ、明日は迎を出すべき事など申付けけり。偖此夜の丑三とも覺しき頃、錢藏が聲として、「どろばう〳〵」といふ大聲に、上の間に打臥し居たる金太郎、むくと跳起き、枕元にある刀提げ立出で見れば、藏の二ッ並びたる板敷の廊下より逃行く人影、さだかには見えざれども、此廊下の突當には用心口の開きある故、其所より盜人入りたるならんと追かけ、拔く手も早業後袈裟。手はきゝたり、刀は業物、乳の下まで切込みければ、きやッと一聲倒れけり。金太郎大聲上げ、「盜人は切止めたるぞ。燈をもて〳〵」と呼ばはる聲に、錢藏手燭を持ちて馳來り、俯伏に倒れたる死骸を見て、怖々差出したるに、金太郎死骸の襟首とりて引起し、燈に照して喫驚仰

十二段

かくて此明る日、金太郎例の如く稽古に至り、楠左門へ、親が出張をこしらへる事ありの儘に語りければ、左門「然らば身共が出張にはあらず、お身が家なり。しかし月に六齋、身ども出席いたさずば、弟子達の受惡しかるべし」金太郎「私も左様に存じます。普請は親共がいたしますれども、矢張あなたの御出張の宿札に仕る心得で御座ります」「いかさまもつとも」と、この事是に極り、箱右衛門が、出入の大工棟梁へ申付けけるが、普請出來ざる内は、金太郎親の許にありけり。

十三段

さて或日箱右衛門、金子の用を勤むる屋敷二三軒へ、十五日の禮に行きて宿へ歸り、錢藏に對ひ、「今日松葉が谷のお屋敷へ參りしに、御家老樣仰やるには、此月の十九日には身共國へ立つが、定めてお身も送るであらう。とてもの事に箱根まで行くまいか、おれは箱根の湯へ一周とゞまる積ぢや、お身も同道せぬかとお勸ゆゑ、お供いたさんと約束した。少の間ぢや、留守を頼むぞ」錢藏「それは好いお連、お出なされませ」おしやく側にありて心に思ふ事あれば、「あなた、日外から腰が痛むと仰やる。幸の事ぢや、一周では湯が驗きますまい、御家老樣を立た

を預けべき人なし、お身は浪人同然の身分、出張を預りくれよと申さるゝゆゑ、未熟の私と辭退いたしましたれど、達ての御頼、然らば親どもへ申しきかせ、お返事をいたしませうと申して置きました、如何返事をいたしませう」箱右衞門「お主は、何と思ふ」「私存じますには、先生六さいの出席はいたされますれども、三百人もある弟子の内にて見立られたるは規模と存じ、出張を預り」箱右衞門「いや〳〵、それは悪い量見。お主には地面の三ツも譲り、別家させんと思ふ。親ども不得心とて斷いやれ」「はい」とはいへど本意なき顔付。おしやく側にありて思ふやう、むづかしき奴追出すにはこれ幸と首肯き、「お前さん、別家と仰やるけれども、夫は何時でもなる事、見立てられたが規模と思ふ此子の心を挫かず、返事をおさせなされ。なんぼ此子がおとなしいとても男の事、氣が反れては自狂になるといふ事も御座ります」箱右衞門「いかさま、それもさうぢや、出張を預れ。併し此家の家督をすべきお主、出張を預れば我家も同じ事、人のこしらへた家に置くはおれが恥ぢや。出張は己がこしらへてやる」金太郎「左樣なれば、猶更先生悅ばれませう」箱右衞門「幸ひ松が谷で一昨年買つた地面の表に空地がある。何かの入用に二百兩もかけたら出來やう。玄關附にして立派にこしらへやれ。番頭二人へも申聞かさう」金太郎「有難う御座ります」これ金太郎、妻を持つ始なりけり。

えて、家事不取締の廉にも相成りますゆゑ、臺所より内へはお入れなされますな。店の側の小座敷にてお結はせなされませ。忠右衞門がお家の風がかはりしと申したも心附きての事で御座りませう。以來は奥へお入れなされますな」箱右衞門「いかさまもつとも、下女と髪結、まゝある事ぢや」と打笑みけり。おしやくは、傍にありて金太郎が詞を聞き、胸にぎつくりせしが、聞かぬ振して、「おさんや、猫にお飯をやりや。何かを嗅いで歩くよ、ひもじいさうだ」と金太郎が話を散すは、憎むべしく。

十一段

さて彼の伊勢より來りたる忠右衞門は、金有屋に廿日ばかり逗留の內、昔の主人の寺詣、又は芝居、角力なんど遊山をなして、是より光る御山の御祭を拜み、豫て願ひたる善光寺へも參詣せんと言ひければ、箱右衞門より、路用の足にせよとて、金十兩つかはしけり。金持は斯くこそあるべけれと、聞く人感心なしけり。爰に又金太郎は、今日も左門方へ稽古に行きけるが、歸來りて箱右衞門に對ひ、「今日先生申されますには、他の屋敷より稽古に參らるゝ門人達の申さるゝには、朝稽古などに出入するに、門番所へ會釋するも面倒なれば、町方へ出張をなされと勸める人多き故、出張を取立てんと思へども、免許皆傳の弟子達はいづれも主人持ゆゑ、出張

じき娘と思ふは、木石にあらざる故なり。然れども、心たゞしき人は、愼深きゆゑ、流の水に影のうつるが如く、よどみとどまる事なきゆゑ、心を濁らし名を汚すいたづらは仕出さず、是唯愼の一ッにあり。聖人の語に、己に克ちて禮にかへるとは、此事なり。男も女も愼の心を忘れべからずと申されしは、もつとも至極なりけり。若い人達、よく〳〵味ひ給ふべし。

十　段

それはさておき、或日髮結才三、金有屋の臺所にて晝飯食べて居る處へ、下女來り、「才三どん、お内儀さんが仰やる、此剃子研いでおくれと」才三「あい」と請取り鬢盥へ入れる。飯食べて仕舞ひ、剃刀研ぎ、鬢盥提げて茶の間へ行き、座敷を見遣り、剃刀を渡しながら、「旦那にお聞き申しておくれ」「あい」と座敷へ來り、「旦那樣、おぐしをなされませぬか」箱右衛門、遙に才三を見て、「今日は何所へも出ぬから明日にせう」才三「ハイ〳〵」と勝手へ歸りけり。此時金太郎、箱右衛門の傍にありけるが、箱右衛門に對ひ、「此程伊勢の忠右衛門逗留の中、私へ申すには、以前勤めました時と違ひ、お家の風が大分變りましたと申しました。今の髮結は、以前の小介とは違ひ、生白けたる小二才、私髮を結はせる時も問はず語りに、口をたゝきて追從輕薄、誰にも世辭を申し、男振もよき故に、女共贔屓いたす樣子、みだらなる事でもありては世間に聞

嫁と姑との中むづかしきは間々あるならひ。人の心は鏡の如く、怒りて對へば怒りて映る、やさしく對へばやさしく映る。姑は他人なれども、嫁となれば親なり。されば、産の親に比ぶれば、可愛がらぬはその筈と諦め、何事も怺へ〳〵て辛抱すれば、寒さを凌げば春が來るよなもの。めでたく子が生るれば、孫のかはいさに鬼婆の心もやさしくなるものぢやと年寄の詞、おひな、篤と勘辨ぢや」「有難う御座ります。お目に餘る事あらば、お叱なされて下さりませ」金太郎「私は此方に二ツ上、年寄ではあるまいし」と打笑みければ、おひなも莞爾と笑顔、二人見合す心の内に、おひなは我夫よりは遙に優る男振、しかのみならず才智賢くして情深く、物事の執成も、夫に優りたるを見るにつけても、取換へて欲しやと心には思へども、愼深き女ゆゑ、色目には出さず。金太郎も、心の内にはおひなが美しきは申すに及ばず、利發を顔に出さず、針業、手蹟も勝れ、少し愚なる錢藏を敬ひて、少しも禮儀を失はず、假にも卑しき詞を用ひず、いかさま、やごとなきあたりの宮仕を久しくなしたる故ならん、我も斯樣なる女を妻に持ちたきものと、心には深く思ひそめつれども、おひなと同じく愼深き故、露ほども色に出さず、差向の部屋を立去りけり。此後おひなに似たる娘ありて、金太郎契を結ぶ事、この次の十九編を讀みて知べし。或人申されけるは、人の心は木石にあらず、業平を見て好い男と思ひ、小町を見て美

前と違ひ取締らず、私が湯へ入りし時おひよんが落したる文といふは合點ゆかず、おひなに尋ねなば、様子知れべしと思ひ、錢藏屋敷へ出でたる留守、部屋へいたりけるに、此時おひなは、十二の女に手本の讀を敎へて居たりしが、足音に振かへり、「おや、御兄さん、なんぞ御用で御座りますか」金太郎「さればさ、古人の語に、瓜田不躡沓、李下不整冠といふ誠もあれば、弟が留守に、お主一人の部屋へ來るは異な事なれど、ちと尋ねたい事がある。こりやおさん、勝手へ行け」「はい」と手本を持ちて立去りけり。おひな「御兄さん、何で御座ります」「不審は尤。今母人がおのしへの意見、物陰にて聞きたるに、おのしが拾ひたる文に、名宛は何とありしぞ」「名宛は御座りませぬ」「名宛のなきを何故に、才三が文と思ふのぢや」「はい、元結の袋の裏に書きました男の筆故、才三が文と思ひました」「いかさま尤。文言は何とあつた。袋の裏なれば長くはあるまい、覺えて居らう。今更おれが詮議する心はない、隱さずに言やれ。お主に聞いたとは口には出すまいぞ」「前後は忘れましたが、其中の文言に、今晩は藥師様ぢやから、例の所にて御待申候と書いてありました」金太郎「其晩、父様は留守であつたか」「はい」「母は藥師へ參詣したか」「如何であつたか、存じませぬ」「よし〳〵、それまで聞けば澤山ぢや。是には限らぬ、何かにつけてお主が朝夕の心遣、それがしが目には見ゆる、心の内も推量いたす、


おやく



るを知りませなんだ」「又言譯するのか。何知らぬ事があるものか。其方は利口じや。惜しい事には猿利口。いつぞやも彼の馬鹿のおひよんが湯殿へ落した才三が文を、私が湯へ入りしあとへ此方が入りし時、おひよんが落した文を、此方が猿利口で私が落した文ぢやと思ひ、おとげに渡して私へ返せといふたは、才三と私が譯でもありさうに惡推量したは、猿利口ぢや。おひよんが口から私の文で御座りますといふたから、私があかりは立ちたれど、嫁の身として姑に大それた惡名をつけんとしたるお猿さん、顔と心は大違、やかましい婆ぢやと、私に毒でも飲ませるだらう」ト烟管で疊たゝきながら、美しかりし女の果、般若の様な顔付。お雛は差うつむき、涙うるませ、心の中に、馬鹿女のおひよんを騙し、文の主になしたるは、おしやくがおとげに申付けたる謀、その身に惡事ありながら、と思へば〳〵口惜しく、たもちかねたる折から、錢藏が聲して、「おひな〳〵」と呼ばれ、これを機會に、涙かくして立去りけり。

作者曰　才三が文の事詳じくは十七編にあり。淨瑠璃なれば三の切といふ悲しき所なり。

九　段

さて此時、金太郎物陰にて、おしやくがおひなへの詞を立聞して思ふやう、彼の才三、馬鹿女の見苦しき面なるおひよんに譯あるべきにあらず、我二年ばかり家にあらざる内、奥の様子以

教草女房形氣　十八編下之卷

八　段

或日嫁のおひな、緣先にある金魚鉢の前につくばひ、赤子子を釵の先へすくひて金魚に與へ、餘念なく見て居たるを、姑のおしやく厠より出でて後に立ちたる故、金魚をおひなと共に見て居たる白歯の下女、それと見て叱られんとて勝手へ行く。おひなは、おしやくが後に立つを知らず、猶赤子子を與へて居たり。姑おしやく後より、「これおひな、いつまでも子供のやうに、何したものぢや」といはれ、振返り、詞もなく部屋へ行かんとするを、おしやく「これ〳〵、此所へ來や」と座に著き、「今見れば、錢藏がお屋敷へ行くとて、部屋で著る物著替へて居るではないか。それにも構はず、金魚へ餌をやるは子供のする事ぢや」「はい、召物は出して置きました」「著る物出すは當然、側に居て支度してやるが女房の役。今日彼の子の出るは お屋敷への勤、慰みではない、此暮をする種蒔ぢや。百姓が野らへ鍬をかたげて出ると同じ事。此方の智慧で其氣のつかぬ事はない筈ぢやが、錢藏は物柔な生れ、尻に敷くのか。それを餘所に見て居ぬぞ」「どうして、私が尻に敷くなどと」「また口返か、久しいもんだ」おひな「召物をお著替なさ

るまじきものにもあらざるに、貰ひし人をかくすは合點ゆかず、年頃といひ男振といひ、もしや母と淫な事ありては親人の恥、家の瑕瑾、しかしわが悪猜かも知れず、猶又試し見んと心にをさめけり。

る、大阪高麗橋の岩城升屋のぢやと自慢してくれたる帶、寢巻に締めますは惜しいもの、古帶あらば下さりませ」「お安い事」と取寄せ、「これは、此間山の手の岩城升屋から買つた子供帶、品が好くて代が安いゆゑ、使い物にと仕立てておいた。何方でも」といふを見れば、一筋は革色琥珀、一筋は八丈縞なり。金太郎は、革色を貰ひ、八丈を殘しけり。

七　段

かくて或日、金太郎稽古より歸り、廻の髪結に髪を結はせけるに、髪結が締めたる平絎の帶、日外おしやくが二筋出したる中の一筋、八端がけの八丈、見覺ある帶なり。さては廻の髪結ゆゑ取らせたるならんと思ひ、「己は久しく旅にありて、此頃歸りしゆゑ知らぬが、おのしいつから此町内を廻る。名は何といふ」「はい、才三郎と申します。去年の秋から御町内を廻り、此方樣ではあごが御座ります故、別してお世話になりまする。有難い事には、旦那樣もお内儀樣も、御目かけられて下されます。貴方樣にも御贔屓を願ひます。おぐしが澤山御座ります故、結馴れませぬから、お心持が悪くば仰やりませ、幾度も結直しませう」金太郎その挨拶はせず、「お主の腰を見れば、粋な帶をしめて居る、町場の内で貰つたのか」「いゝえ、どうして、古著で買ひました」「はァ、左うか」と髪を結はせながら心に思ふやう、帶は見たるに違なし、また遣

んとする處へ、店より手代駈來り、「やれ金太郎樣お歸りで御座ります」と聞きて箱右衛門、中の間へ立出で見れば、麻裃にちどら熨斗目、刀を提げたる人品、「やれ金太郎、先此方へ」と座敷に入れば、大小後に疊に平伏し、「先以て御機嫌能く恐悦至極、皆々も無事にておめでたう存じまする。一昨年の春書置を遺し、金子百兩路用となし、我儘に家出したる不孝をも御許し下され」箱右衛門「これさ、親子の中ぢや、きり口上には及ばぬ。お主が行方さま〲尋ねたれど知れぬ故、書置に任せ、錢藏を家督にひろめ、嫁も取りました」といふ所へ、錢藏嫁を連れて、部屋より來り、母と呼ぶおしやく、通ひ番頭夫婦、店の番頭善介、伊勢の忠右衛門、飼猫までが駈出し、とり〲の挨拶、めでたいとて待受の酒肴、いろ〱さま〲なる事どもは、くだ〱しければ記さず、その大方を推量たまはれかし。

六　段

かくて金太郎、此日より親の許にありしかど、毎日左門方へ通ひ、稽古一日もかゝさず、以前と違ひ、武士形氣にて袴を放さず、身持正しく、物事折目だかにて、親が物言へば手を突きて挨拶するゆゑ、況しておしやくは金太郎に氣が置かれ、惡い奴が歸りしと思ふも、その身に暗きことあるゆゑなり。さて或日の夕暮、金太郎、おしやくに對ひ、「これ母人、旅にて貰ひました

貧の心持珍しく、好い稽古を仕りました」左門、半澤口を揃へ、「三人まで人を切伏せしとは珍しい。何處にての事ぢや。先茶を飲みやれ、冷めるわ」金太郎茶を飲み、「私南部にありし時、越後へ近道の山越ありと聞き、其山へ上りし時、まだ晝中なりしに、一人も行交ふ者なく、熊笹など押分け參りしに、物影より山賊五人道に立塞り、一人が申すには、汝が懐に金ありと見たる故、先へ廻りて待居たり、命惜しくば有たけ渡せと申したるは、私路用として、宿より金子百兩持居るを、彼等知りしと見えたり。私それと心付きたる故、いかにも有たけやらん、命は助けよと弱々しく申しながら、錢の財布を投げたるを金子と思ひ、頭を下げて取る處を、拔打の向袈裟、拔連れて切りかけたる兩人をも切伏せて、殘る二人にも傷を負せたる故逃去りました。五人共に大男、難なく切勝ちましたるも先生の御蔭、有難う存じます」左門「錢の財布にて誑りたるは、當意卽妙」半澤「お手柄〳〵、それが武者修業の骨といふ處ぢや」と賞美なし、猶様々物語して、宿へ歸らんとなしければ、左門「我方より旅へ立たせ、その姿では歸されず」と、麻裃に熨斗目を貸して著替へさせ、若黨、草履取を附けて送らせけり。

五段

爰に又箱右衞門は、朝九ツ半の時計を聞きて、我子金太郎が歸るを待兼ね、左門方へ迎をやら

半澤に申付けられ、毎夜忍歩き、曲者を尋ねるなど話し、歸らんとしたる所へ、左門が内弟子稽古の形にて汗を拭き／＼來り、左門に對ひ、「金太郎、武者修業より歸りしとて、參りました」左門「早く是へと申せ」「今お玄關で、草鞋を解いて居ります」「左樣か、然らばまだ宿へは歸らぬと見ゆる。足のすゝぎをやれ」半澤「彼が歸らば、武者修業の中、何か面白き咄もあらん。聞き申さん」とて、又尻を落付けけり。

四段

かくて金太郎來り、頭を下げて、兩人に挨拶なしければ、左門「やれ／＼息災で立歸り、めでたい／＼、中國迄も參りしか」金太郎「左樣に存じましたる處」かやう／＼と、忠右衛門に逢ひ、勸めにまかせ、據なく昨夕鎌倉へ入りたれども、宿へは未だ立歸らず、其心底の程を語りければ、左門打喜び、半澤も師匠を重んずる禮儀を感心なし、武者修業の樣子を尋ねければ、金太郎「北の國々は大方歩き候て、彼地此方にて仕合もいたし候へども、先生の御蔭にて、御名に疵をつけ候負も致さず、全く御取立の御蔭と有難う存じまする」半澤「お身が腕前にてはさもあらん。武者修業の間、何ぞ面白き話はないか」金太郎「一人旅ゆゑ野宿も度々いたじましたが、珍しい事も御座りませぬが、是は珍しいと存じましたは、生身を三人切りふせました手の中、眞劍の勝

らざれば、武士の行作にあらず」忠右衛門「一々御尤ぢやが、お若いゆゑ氣が變り、お宿へ歸るが嫌さに私を」「いや〳〵、武士の一言僞ならぬ證據を見よ」と、氷の刃すらりと拔きて打合せければ、立場に休みし人々、「そりや拔いたぞ」と立騒ぎしは、さもありなんかし。

二　段

かくて忠右衛門は金太郎に別れ、其日の點燈頃金有屋へ到り、金太郎を連歸りし事、又金太郎が直に宿へ歸らざる心根をも語りければ、子を思ふ親心早く逢ひたく、店の番頭善介に手代を添へ、かの旅籠屋へ迎にやりしかど、同じ挨拶にて歸らざりけり。さて忠右衛門久振とて盃を出し、嫁のお雛へも引合せ、それと聞きて通ひ番頭忠兵衛も來り、金太郎が事を聞きて悦び、忠右衛門それ〴〵へ、伊勢の土産をやる事など、くだ〳〵しければ記さず。

三　段

それはさておき、重忠殿の小姓頭半澤六郎、同じ家中にて劍術の指南をする楠左門方へ、朝早く來りたる其用は、主人重忠殿、左門が指南する家來の仕合を御覽なされんとある内意の用なり。それゆゑ左門も稽古場を外して、一ト間にて用向の話濟みて後、主人の手元の金子五百兩盗みし奴、他所より入りたる者と慥に見ゆる故、他の人の手に捕はれては屋敷の恥なる故、

敎草女房形氣　十八編上之卷

初　段

かくて忠右衛門、金太郎を伴ひ、道を經て鎌倉へ入りし頃は夕暮なりしに、兩人とも駕籠に乘りて來りたれば、鎌倉に入りて駕籠の者は約束の立場茶屋にて歸し、打寛ぎて後、忠右衛門、金太郎に對ひ、「お話を聞けば、書置を遺して武者修業に御出なされて後、二年餘お便もなされざりしに、今お連れ申したなら、親御樣さぞかしのお悅。此所からは程近し、いざ〳〵お出なされませ」金太郎「是までの厄介忝い。打連れて宿へ歸るべけれども、親の許も受けず、我儘に家出を爲したる某、さしつけて宿へ歸りては、親を踏付にするよなもの、子たる者の道にあらず。御身宿へ行き、某を連歸りたる譯を委しく語り、親ども許を受けて後歸るべし。向ふへ見えるは宿屋なり。それがしは彼所に宿り、親どもの許を待つべし。こゝに又一つ御身に頼あり、明日の朝早く劍術の師匠左門殿方へ到り、宿へ歸る事委しく語りたる上、彼の宿屋へ立歸り、親人の許を聞きて後立歸るべし。其譯は、武者修業に出づる時、師匠の執成にて重忠樣の家來分となりて刀を差し、師匠方より旅立ちたれば、宿へ歸らざる前に、師匠方にて草鞋を取

丸人のくらしする隱居の身なれば、鎌倉へ下り、むかしの主人の墓まゐり、又は、鎌倉の見をさめに、遊山をなし、善光寺へも參詣せんとて、兩掛一ツ、奴僕をも連れて、東海道を下る道、ある旅籠屋へ泊り、圖らず、武者修行に出でたる金太郎にあひ、樣子を聞きて、町人が厭ならば、いか程の金子にも事かゝぬお身なれば、よしある武士になる仕方、いくらもあるべしと、意見をいひて、連歸るところまで、十七編にあり。

これらの事を御存じなく、この十八編のみ御覽ありては、文句にわからぬ事あるゆゑに、くだくだしけれど、記しはべる。そも〳〵はかなきくさざうしといへども、その人物に依りて、その人情あり、いかさま、かくあらんと思はるゝ樣にしるさざれば、教のはしにもならず、讀みて面白くもなしと、心には知れど、京山は文才なくて筆まはらず、八十九の年につれて、おのづから趣向も華やかならず、若き先生達には劣れり。されど五十年の作者と、見はやし給へかし。

忠兵衞 六十二三、宿持の通ひ番頭、正直にて家業には賢けれど、世間には疎し。
店番頭善介 出來合の人物なり。
下女お利牙 おしやくが使ふ下女、惡玉女なり。
髮結才三 金有屋の町内を廻る髮結、二十二三歳。役者の誰やらんに能く似たる男なり。金有屋は町内一番の大家なるゆゑ、まはりの髮結、こゝにて一日二度づつの飯を食べる、これを俗には、腮に行くといふ。この才三、姑おしやくとわけあるを、おひなが悟りし事につけ、姑にいぢめらるゝ事、十七編にあり。
半澤六郞 しげたゞといひ、小姓頭なり。
楠 左門 重忠殿の家來、劍術の指南をなし、ほかの屋敷より來りて、稽古する門人もあまたあり、箱右衞門が忰も、この先生の門人なり。
伊勢田屋忠右衞門 伊勢山田の人なり。むかしは金有屋の番頭を、久しく勤めけるに、親の跡を續ぎたる兄はてて、跡目なきゆゑ、伊勢へ歸りて、家督を續ぎ、今は忰も孫もありて、上下八

けれども、かはゆがりし故、いつかおつかさん〳〵と言ひ、つひには番頭まで、おかみさんといふ様になりたるは、おしやく惡智惠ありて、この家をかき廻したる故なり。委しくは十六編にあり。

箱右衛門總領の悴金太郎十六歳の時元服して、屋敷を勤めしに、屋敷にて劍術の稽古を見て、習ひはじめ、二十一歳の時、免許皆傳を受けて、町人を嫌ひ、家督は弟に讓らんと、路用に金百兩持ち、書置を殘し、行方知れざりけり。

次男錢藏兄の書置に依りて、家督となりて、嫁を迎ふ。錢藏は心立すなほにて、おとなしく、毒にも藥にもならぬ男なり。

娵お雛金有屋の身代に比ぶれば、五六段も劣りたる、鶴龜屋といふ古著問屋の娘。八歳の時、踊と下方にて、さる御屋形のお姫様のお小姓に住み、十年の御奉公めで度勤め、十九の時、金有屋の嫁となり、夫錢藏男ぶりも好く、心立もやさしく、夫婦の中はよけれども、姑お酌が氣に入らず、いろ〳〵さま〴〵にいぢめられ、二度まで里へ駈出す事など、十六編にしるせり。

近年のくさざうしは、續き物はやるゆゑ、この女房形氣も、今年十八編にいたれり。初編よりさまぐの女房をしるしたるに、十六十七編に續きては、嫁をいびる姑の事をしるしたれども、十六十七編を讀み給はざる子供衆は、この十八編の筋わからざるゆゑ、十八編に出したる人物の略傳をこゝにしるせり。

金有屋箱右衛門　鎌倉の金持町人、こゝかしこの屋敷方へ、金子の御用を勤めるを家業となす。年は五十七八歳、智惠さかしからず、なみくの人物なり。

妻お酌　はじめは三筋の糸にて世を渡りしに、人の目顏を見て心を悟る、わるがしこき才智あるのみならず、美人なる故、酒の座敷に名を鳴らしけるに、箱右衛門が金持の襟につきて、思はれ、二十一にて、まだ白歯なりし時、箱右衛門糸をやめさせ、圍ひ置き、繼母とふたり住まはせ、白歯と年増の下女、おやぢの飯焚男、何不足なく暮しけるに、箱右衛門が本妻重病の時、おしやく謀をもつて、本妻の看病をなしたる中、本妻身まかりて、ずるくべつたりに妾となり、本妻の產みたる男の子二人、此時いまだ幼かりしゆゑ、おしやくもりそだて、心にはな

翁「さやうかな。骨董集は、醒齋翁の遺稿があるさうぢや。老人の作に、食物沿革考又は和漢印章考、または筆餘筆といふ隨筆もありと聞く。八十八になりて、草ざうしの作でもあるまい。識者のわらひをも厭ひ給はぬか。いたづらにはかなき稗史に筆を費すは、惜しい事ぢや。京傳翁も、骨董集や奇跡考の作がある故に、張三李四の徒をのがれたのぢや」と教諭して歸られけるが、いづくの御人とも知らざれば、厚意を謝する心にて、ありしまゝを記して、口繪に代へはべる。

安政四丁巳春　　八十九歳

京山

生れしと、みづからしるせり。又梨本集を著したるは、元祿十一年つちのえ寅の年なり。この時茂睡七十歳の時なれば、此短册も大かたは、百六七十年前の古筆なり。老人も見給ひつらん、天保十四年卯の夏、池田寛藏が、信濃にありしとて、茂睡が眞跡の詠草を、そのまゝに板刻したる折本を見しが、筆力この掛物の短册に少しも違はず」京山「さやうで御座ります、かくれ家の茂睡と呼ばれたる歌も、あの内にござりました」翁「さやう／＼」トいひつゝ、家僕にいひつけ、包の中より、女扇を一本とりいださせ、「さて老人、おたづね申したしるしに、娘が方へ土産にいたしたい。一筆御勞しくだされ」ト出したるを見れば、途中にてもとめしと見えて、扇やの包のまゝなり。筆とりて、

待だなくに蚊のはつ聲はあな卯月いかにつれなき山ほとゝぎす

「これは昨夜枕上の愚詠でござります」翁「さやうかな」と眼鏡をかけて、扇をとり／＼つら／＼見て、「いかさま、市中では時鳥をまだ聞かれまい。わたしのあたりでは、耳やかましい樣ちや。さて老人、かねて名をきく女裝考は、開板と聞く。發販はまだかな」「近々賣出します」

○安政三辰の卯月、京山このさうしを脱稿、口畫のところへ何をがなと、凭レ案ゐたる所へ、家婢菓子折を持來り、お客樣がお目にかゝりたいとて、此品をといふ。水引にさしはさみたる刺を見れば、兎角齊龜毛とあり。知らぬ名なれば、「どのよな人ぢや」と下女に尋ねければ、「侍と草履取を連れた、人品のよい、隱居らしいお方でござります」「さやうか、こゝへ御案內いたせ」トあないにつれて、書齋の入口、柴の戸を家來に開けさせ、庭に入り、座につきたるを見れば、歲のほど六十三四可、人品容體官士の隱居と見ゆる、剃髮の人なり。互にはじめての挨拶、みやげの禮をも述べけれ。此翁「わしは山の手の者ぢやが、娘が草ざうし好くゆゑ、老人の作をわたしも見ましたが、草ざうしにある、行年を見れば、老人は今年は八十九にならるゝ。それにしてはおすこやかぢや」京山「つれ〴〵草に見えたる、むくいぬの年より御はづかしう御座ります」翁その挨拶はなく、床に掛けたる掛物を見て、「はゝア短册、何か面白さうな」とさし寄り、懷中より眼鏡を取出し、つら〳〵みて、めがねを外し、「さて茂睡の短册は珍しい。茂睡が梨本集を見れば、茂睡は寛永六年つちのえ巳の五月十九日、駿河の府中の御城、三の丸にて

廣庭の稽古場とて頭搔きけり。さて又此明る日は、本陣へ賴みて立振舞の支度をさせる間に、へ、米俵三十八俵積みたるゆゑ、主人の買入ならんと思ひけるに、やがて丈長の紙へ、ふなまはしにて、進上、先生樣、門弟中、と貼付けしは、氣轉の利きたる計ひと、先生も忠右衛門も感心なしけり。

十七段

かくて程なく、三十八人の弟子達打揃ひ來りければ、兩人口を揃へて米俵の禮をのべ、おちつきは鯛の吸物、肴品々取竝べ、酒盛大方濟みて本膳を出し、猶又酒盛になりしに、此宿は繁昌の所にて、飯盛もあれば、藝者五人弟子達が招き、大酒となり、夜を深して皆々立歸りけり。此明る日、金太郎發足の朝、主人預りの百兩を返し、さて見送とて本陣の家内、又は弟子達、其外大勢にて賑しく首途をなしけり。人々の噂に、彼のよな武者修業なら、每月來よかしとは、尤も至極なり。偖これより金太郎立歸りて後、かの才三が事にて、おしやく計らざる最期を爲す事、金太郎名をあげし手柄ありて、鎗一本の主になる事、十八編にしるし、引つゞき出板仕候。めでたしく。

吩咐けて、主人を此所へ招きけり。

十　五　段

本陣の主人來りて段々の樣子を聞き、忠右衛門に對ひ、「私劍術が好で少しばかり使ひますゆゑ、金太郎樣武者修業と聞きてお目にかゝり、お話を聞けば、奥筋にて手に立つ者なく、出羽の山中で盜人五人にお出逢の時、始めて生身を三人切伏せたと聞きて、お弟子になりたくお留め申した明る日、金百兩お預けなされたゆゑ、もしやと思ひお疑ひ申しました處が、朝夕のお身持で疑を晴しました。武者修業も折々見えますが、弟子から著物まで拵へてやるのが多い中に、百兩預ける武者修業、浪人といはるれども尋常人ではあるまいと人々の氣受よく、お弟子も今は三十八人、其内世話役も五人御座りますゆゑ、是等へもお宿へお歸の由、申聞かせませう。兎も角も今四五日は御逗留なされませ」金太郎「いかさま、兩三日立を延し、弟子達へも別の盃、立振舞もいたしたい」と、猶又世話になりし事、忠右衛門も共々禮をのべけり。

十　六　段

かくて此明る日、本陣の召使男女十八人へ二分宛の目錄、主人へ二千疋、女房へ千疋、五人の世話役を招き、五百疋宛禮を遣しければ、「此方からこそお餞別いたすべきに、是は反對なり」

を、三人は卽座に切伏せ、殘る二人に深傷を負せたる事もあり。是より中國を廻り、四國西國にいたり、心にかなふお方あらば、如何樣なる奉公をもして忠節を盡し、行々は鎗一本の主人ともならん望なり」と、鐵骨の扇膝に突き、張肱して言ひければ、忠右衞門にこと笑ひ、「そりや惡い思召、町人がお嫌なら、御身代を二ツにしても、地面を除けて四五萬兩は貴方の物、鎌倉で鎗をたてる讓株、二千兩ならば買はれませう。私お供申すから、お宿へお歸りなされませ」「いや〳〵、金子にて武士になるは侍の本意にあらず」と、聞入る氣色更になかりければ、忠右衞門「然らばお心任せ。何は兎もあれお久振、お盃をいたゞきませう」と申付けおきたる酒肴取寄せて、銚子も一度かはりて、打寛ぎたる時、忠右衞門「若旦那、今のお話を聞けば、あてのある親をすてて不孝の名を取り、あてのなき旦那を探すは、親の讓の金をすてて本堂建立に歩くやうなもの。子供の時お讀みなされた本の中にも、父母在す時は遠く遊ばずとあります。獨身の武者修業、いかほど腕前が強くとも、身體は鐵では御座りますまい。若やお煩の時看病は誰がいたします」「いかさま」と思案の顏に附込み、種々に諫めければ、やう〳〵得心なし、「歸るにしては、此本陣の主人へ、百日餘も世話になりし禮もいうてくれ。また下部どもへも置土産の目錄でも」忠右衞門打喜び、「そりや、私が如何樣にもいたします」と供に連れたる吉藏に

さんが、好い師匠樣ぢやとて、毎日彼の通り稽古いたされます」「然らば女中、此口上書を金太郎樣へ上げて下され。儕は知る人ぢや」と矢立の筆にて鼻紙へ書きしを渡しけり。

十　四　段

やがて下女來り、「先生樣へ上げましたら、稽古を仕舞うたら此所へ御座ると言はれました」「それなれば女中、酒肴有合の物で好い、二人前、此所へ御座つてから出して下され」「はい〳〵」と立去りて後、飯など濟みて後、金太郎來りければ、久振の對面珍しとて互の挨拶、忠右衛門此度鎌倉へ下る由をくはしく語り、「金太郎がかゝる身になりし事を尋ねければ、「いかさま不審は尤。我元服したる年、お出入するお屋敷の殿樣へ、劍術の御指南致さるゝ人の門人となり、修業積りて免許皆傳も濟みて、他流仕合に出でたるも度々なりしが、一度も不覺をとらず、稽古場にても某につゞく者は僅二三人、武藝の交際が身にしみては、侍に手を下げる町人の家督望にあらず、是によりて家督は弟錢藏に讓り、それがしは猶も腕前試の爲、武者修業に出づるにつけては、路用の爲金百兩お貰ひ申すと、親人へ書置をのこし、師匠の許を受けて、內弟子の浪人と言立てて刀を差し、奥筋は大概歩きたれど、手に立つもの一人もなし。それより越後へいたらんとて、出羽の山越をしたる時、懷に金ある事を知りたりとて、山賊五人取卷きし



十三段



こゝに又かせのところに松坂みせ
り金田や忠兵衛といへるもの
六十二をはじめとしてかぞへもやをとなへほそみ
むかしよりなつかしぐさのおもかげまだ
かくなくむかしのりきやうにてあらねどもやう
いせ人の人ちのちかやすそく今みな人のあそび
かまど油のあかりあひ上下十三人のくらし多う
とくれおとなにもせぬまへにをかしをせう
まどもここそこの五ツ六ツおいそのくろまでや
あるうちかおみのこむさあおれたをとげ
するむねのきずおんのすゝきゃう
かくく吉兵衛こそた中に家まする心
あげけをのせかみふくきこそ
ぐりろのみ当日をある本だん
みやどのおくざしきの二ツのふ
おちつきかたふりこそなきう
みよりて又わかれれがひろ
みへにそだちてくけんおやの
ためひもけるが㊀

㊃廿三四ばかりの男あり
よくさりむらひ
小からのまち
くろのめん
付きき
ざしを
さしたる
ひきつけてかる
ろまちとゝえさう
あくつ右六ぬあ
ちらんや
ちとし
つとめさ
かゝあ
やのさう
アまちかは
太郎兵衛が
忠兵のか
いまうして
なれ
まち㊄

いたゞき涙を拭ふ。此時、錢藏が聲として、「何ぞ用か」「いえ、昨日の禮で御座ります」

十三段

話ふたみちにわかる。こゝに又伊勢國松阪にて、伊勢田屋忠右衛門といふは、今年六十二歳、若き時は金有屋箱右衛門店番頭を勤めしが、在所の兄が果てて家督なく、親の許より暇を願ふ故に、伊勢へ歸りし後に、親はてて今は家の主人。紙と油の商賣、上下十二三人の暮なり。今年はおとなしき悴に家督を讓り、孫も今年は五ツなり。足腰の達者なる内、鎌倉の見納め、恩をうけたる昔の主人の墓參かた〴〵、吉藏とて道中になれたるに兩掛持たせ、鎌倉さして下りけるに、或日とある本陣に宿り、奥座敷の二階に落附き、風呂に入りて欄干に倚りて見下しければ、廣庭にて、ぱつし〳〵劍術の仕合をするは、此所の若者共と見えたり。傍の腰掛に、二十三四なる男 振好き武士、小倉の袴、黑の紋付、脇指を差し、刀引付けて居るは、師匠と見えたり。よく〳〵見れば、豈圖らんや、昔勤めた金有屋の惣領金太郎なれば、忠右衛門訝しく、猶も見て居たる時に、奠花の茶を持來りたる女に對ひ、「これ、彼所に居る師匠樣の名は何といふ」「はい、富田金太郎さんと申します」トいふは、氏も名も違なし。忠右衛門「何所に御座る人ぢや」下女「武者修業ぢやとて、わしが處へ御座つてから、最早百日ばかりにもなりませう。彼處此方の息子

たる顔つきいぶかしく存候へども、思ふ事ありし故、くはしく尋ね申さず候。おしやくどの側に居ながら、何とか挨拶あるべきに、聞かぬふりにて俄に座をたゝれたるも訝しく候。物のあたりたる疵ならば、涙ぐむ筈はあるまじく候。箱右衛門どのも錢藏も心だてやさしき人なり、疵をつける折檻はあるまじく候。外に折檻する人はおしやくどのばかりなり。もしや左様な事ならば、里へ對してあまりなる仕方にて候。いつぞや參られたる時、意見致しかへし候へども、いよ〳〵辛抱出來かね候はゞ、里へ駈出しては後の掛合も悪しく候ゆゑ、媒人いたし候董文どの方へまゐり、くはしく話し候へば、此方へ掛合ひ申すべく、其節は兎も角もして取戻し可申候。昨日參りたるは、夢見あしくて案じ候故なり。額の疵の事心にかゝり、昨晩も心一つに案じ、寢付かれ申さず、夜半に酒たべ、父樣に笑はれ申候。何事ありとも、必ず〳〵短氣なる事いたし、兩親に歎きをかけるは不孝にて候。いろ〳〵と案じに堪へかね、番付に事よせ便いたしまゐらせ候。くはしく御返事待入りまゐらせ候。めで度かしく。

なほ〳〵、萬一取戻し候へばお屋敷へ願ひ、當分上げ置き候まゝ、そもじ身分の事、御案じなされまじく候。御覽の後は此文燒捨可申候。

とあり。母の案じる心の中、酌出す涙露落ちて、じの字に濁二雫、實親のありがたさ、文おし

去るべし。さて又、嫁を憎がる、鱆わが足を食ふと同じ事なり。嫁を憎がるは身内を滅すと思ふべし。古き發句に、

我が子ならともにはやらじ夜の雪

といふ此一句にて、嫁のあつかひも悟るべし。かゝる辨なきお雛が姑、剰へ才三といたづらを爲し、終には刀の銹となること、此次の十八編にて知るべし。

十二段

さて此明る日の晝過、お雛が連添ふ錢藏、部屋にて小屏風立廻し、出入する按摩に肩を揉ませて居る、屏風の後にお雛針仕事して居たる所へ下女來り、お里からとて文箱出す。おひな心に、昨日來て用はない筈ぢやがと思ひながら、披き見れば母の筆なり。昨日馳走に逢ひたる禮、人形貰ひたる禮、おしやくへ約束したる大阪の芝居の番付送るといふ文言、外には用の事なく、別に封じたるには内用とあり、披き見れば、小さき文字にて書きたる文なり。是を讀みて返事をしたゝめ、書添に、御内用の事はあとより御返事申すべく、かならず御案じなされまじくと、母の氣安めに申しやりて使をかへし、屏風の後にて再び讀むその文言に、

昨日參り候節、額の疵尋ね候時、棚から物が落ち候とばかりにて、詳しく申さず、涙ぐみ

けれど、「おや〳〵あぶない。目でなくて宜かつたの」おしやくは側で面伏、何をがな紛さんと部屋へ立ち、手遊の人形持來り、「お春坊、お前に上げやうとて取つて置いた」お春「お母さん、是御覽」母「おや、可愛らしい。お禮申しな」「有難う」と膝へ抱きて悅びけり。是よりいつもと違ひ、馳走にも念を入れ、むしり肴も身のところをお雛に取りて、「さアお前もお食べ」と、つひにない事、是里の母に見せる輕薄なりけり。抑〳〵我子に嫁を娶るは、家の血筋を絕さぬ爲、二ツには舅姑の二人年老いて、嫁の介抱受けん爲なり。女親は殊更病氣の時など、撫摩は嫁の役なり。此時の今はに至りて、眞實の心で撫でさすりをするのと、人目の義理でするのと二ツあり、病人の心いづれかよからん。義理でするのは自ら知るゝぞかし。此お母さん何卒全快させたいと思はれて介抱うけなば、いかばかり嬉しからん。嬉しがらするは嫁の人たる道なれども、子供の時讀みたる女今川さへ、心にとめざる嫁多し。此嫁なりとも年頃姑のあたりよく、まことの母のやうに可愛がられた姑を、此病氣で死ねかしとは思ふまじ。さすれば、嫁を嫁にするも敵にするも姑の心にあり。さりながら姑のはりがなくて嫁にいびらるゝもありと聞く。是は嫁に連添ふ男のあやまりなり。女に三ツの誡あり、一ツには子なきを去る、二ツには舅姑に不孝なるを去る、三ツには惡しき病あるを去るといへり。されば連添ふ男、親に不孝ならば早く

十一段

里の母金有屋の勝手へ入り、案内しければ、かのおとげ立出で、「これは能うこそ、さア此方らへ」と座敷へ入りしに、おしやく來り、「やれ〳〵おめづらしい、此方らから人を上げやうと、今朝も錢藏とお噂申して居りました」とは、間に合せの嘘なり。お雛が妹お春お辭儀をするを見て、おしやく「やれ〳〵おとなしい、能くお出だね」母「何處へでもついて出ますには困ります」おしやく「これ杉や、お母さんがお出だと、彼の子にさういひな。ほんに只今はお土産を有難う。甘鯛は彼の子が好物、味噌漬にして食べさせませう」とは、是も間に合ひの詞なり。是より互にありふれたる詞あり。お雛は部屋にて額の膏藥付替へて居たりしが、母と聞きて嬉しけれど、態と直には來らず、緩々膏藥のあとを仕舞ひて此所へ來り、母へは挨拶なく、妹に對ひ、「お春能く來たの、父つさんは御機嫌能いか」「あい、姉さんへ宜しくとさ」おひな笑ひ、「お母さん、若旦那は今客が御座りますから、宜しくと申しました」「あい〳〵。おやお前額を如何しなさつた」ひな「昨日棚から物が落ちまして」と口ではいへど、悲しくて眼に持つ涙、母は心に訝し


高山作
國貞畫
女房形氣 十七編
巻下

今日もづき〳〵痛めども、お念佛申して怺へ居けり。此事まことの母に通じけるや、里の母おつる、お雛が井戸へ落ちた夢を見て心にかゝり、殊更久しく無沙汰もしつればとて、お雛が妹今年七ッなるを連れ、土産の交魚持たせ、下女と男を供に連れ、箱右衛門方へ尋ねけり。

「さア、後の證據ぢや。文の主はおひよんで御座ると、謝罪の一札書きや。それでなければ、私が首へお主が引いた墨が消えぬぞ。さア書け」トせりつめられて、返すべき詞もなんと泣く涙、硯引寄せ磨る墨に、落つる泪を磨りまぜて、筆紙取上げ、あやまりの一札書きて出しければ、おしやく是を見て、「よし〳〵、是で私があかりはたつ。とても事に血判ぢや」といはれて無念さ口惜しさ、額の疵の血を染めて、此場はやう〳〵事濟みけり。おひなが心の内思遣るべし。

十段

そも〳〵此お雛が里は、鶴龜屋萬左衛門とて古著の問屋、上下十二三人の暮にて、土藏も三つある程なれど、金有屋箱右衛門が身代に比ぶれば、松蔭の楢の木なり。其娘なれど、八ツの時から大きなお屋敷にお小姓を勤め、十年の御年期めだたく勤めてお暇を戴き、嫁入の口を尋ねしに、金有屋へ年頃出入する町醫者山井董文の口入にて、里は釣合はぬが、嫁の顔が心につれて美しきを取得にて、嫁入なしたるなり。されば身代の釣合はぬに付けては、お雛が心づかひもある上に、姑が心だては、湯屋の輕石で顔をこすられる思ひ、里へ駈出さんかと思ひしかど、いつぞや母の意見もあり、勤めたお屋敷へも外分惡しと心を取直し、昨日打たれし額の瘡、

てお母さんへお返し申しやと言うたさうだが、書人とは才三が事であらう。昨日とげが私にいふには、八日の朝、此文をおひよんに屆けてくれろと才三が賴んだゆゑ、湯殿で働く時落したを、御新造樣が拾ひしを、とげに、此方がいふには、御新造樣が文を渡した時は、餘り面目なくて、文の譯はなんとも申しませなんだが、彼方へ返せとありしゆゑ、惡猜のあかりをおたてなさりませといふから、今此二人をしたゝか叱つたのぢや。しかし下女が廻の髮結に密通くはさのみの罪にはあらねども、私と才三がいたづらすれば、首が二ッ落ちるはいはずと知れた事、姑の首へ墨を引くお嫁御さん、おそろしいお心だな。コレひよん、文の主は私ぢやといへ」「はい、私で御座ります」「あれ彼の通りぢや。惡猜にも事による。お主は大きなお屋敷で、振袖の御奉公勤めたと聞いたが、岩藤に仕込れて、私を草履で打ちかねまい。惡人めが」と睨めつけられ、お雛あまりの口惜しさに、淚の顏を上げ、「あなた八日の晩に、とげを一人連れて藥師へ參りなされしは、文の文句に合ひますゆゑ、それであなたと思ひました」と星をさゝれて、胸ぎつくり。弱みを見せじと烟管振上げ、「まだ吐すか」と額をかつきり、流るゝ血潮。かゝる手荒き擧動も、昔をあらはす下司育。おひなはあッと口惜淚、懷の紙額へ當て、身を慄はせて泣伏しけり。おしやくは、おとげと顏見合せて打笑しが、硯箱と紙取出し、お雛に差付け、

上るか、とある。櫓櫂屋とは三十天堀の船宿だ。嘸待つて居たらうよ。氣の毒な事は私が分疏をする。明日彼の人が來れば、十二日の晩を約束をして、お前を連れて藥師樣と僞り、櫓櫂屋で逢はせる。それにしては家への祝儀、飲食のものいりもあるけれど、見かけて賴まれたから私がする。其代に御新造さんの拾つた此文の事に付いて、いさくさのある時は、文の主は私で御座りますといふのだよ」おひよん「あい、そんなら十二日の晩には」「あいさ、私が逢せる」おひよん「お內儀さんに知られたら、叱られるであらう」「お內儀さんは野暮ではなし、私が如何でも詫言する」と愚な上にまだ十七、おとげが口先に騙され、眞の事と思ひけり。是皆おしやくが言はせる謀なりけり。

九　段

かくて一日たちて、主人箱右衞門は別莊にて客をなし、息子錢藏は、店の番頭を連れて相撲見に行き、留守なりければ、機會よしと思ひ、おしやくお雛を部屋に呼ぶ。お雛來て見れば、おとげ、おひよんも叱られたと見ゆる樣子にて、さし俯きて居る。おしやく煙管をはたき、「これお雛、八日の朝私が風呂へ入りし後へお前が來て、此文を拾ひおきしを、昨日おとげに渡す時、お前がいふには、元結の包紙へ書いた文ぢやから、書人も大抵知れて居る、おのしが拾うたと

囁きて文を渡しければ、おとげ「そんなら、此文をおひよんに見せて騙し」「をよさ、彼の馬鹿奴、ほんまに思ふは必定ぢや。うまく出來たらおのしへ褒美は是ぢや」と赤い珠の附いたる頭にさしたる鼈甲の釵を見すれば、おとげ打笑みて立去りけり。

八　段

此時中の間にては、物縫女行燈控へ、仕事して居る側には、白歯の下女草艸紙を見て居る。彼のおひよんも見て居たりしを、おとげ手招して女部屋へ連行き、人なき差向にて、「これおひよんどん、お前は餘程あやかりものだよ。これ見な、才三がお前に文をつけた」おひよん、笑ひながら、「嘘ばつかり、何しに私へ」「いや〱、其處が相縁奇縁。昨日の朝中の間で才三がお内儀さんの襟を剃つたを見たらう」「あい、彼から歸る時、此文を私へ見せて、どうぞこれをおひよんさんへ渡しておくれ、お前を見かけて頼む、取持つてくれろといふから、野暮でないと彼の人に見たてられたを否とも言はれず、帯へ挾んで置いた處が、知る通り、昨日は私が湯殿の番、まごつく中に湯殿へ落したから、お前にも文の事はいはなんだ處が、昨日の朝御新造さんが湯殿で拾ひしとて、私にくれなすつた此文、わたしが先ア讀んで聞かさう。今晩は薬師様にて、お首尾もよかるべく存候、日が暮れてから櫓櫂屋にて御待申候、めで度かしく。上書には、

六段

かくて此明る日の夜、彼のおとげ、おひなが部屋へ來り、「どうぞお毛拔をお貸しなすつて下さいまし。今およしが刺をたてましたが、毛拔が惡くて脫けません」「はァ左樣か」と小簞笥の引出より、取出して遣りければ、「有難う」と行かんとするに、四邊に人なきゆゑ呼留め、同じ小簞笥より、彼の文を取出して聲をひそめ、「此文は昨日の朝、お母さんが風呂へお出なされた後へ、私が往つた時拾ひしが、誰にも見せずに仕舞つて置いたのだ。文を書いたは元結の包紙、書人も大體知れてある。おのしが拾うたとて、お母さんへお歸し申しや」といはれて、おとげは探せといはれし心の合紋、何と言葉もなかりければ、「ハイ」と一言懷へ入れて立去りけり。

七段

さて、おとげは直樣おしやくが部屋へ入り、唐紙締めて聲を潛め、「彼物がありました」と文を出せば、手に取りて、「やれ〳〵嬉しや。何所にあつた」されば斯樣々々と、おひなが言ひしまゝを話しければ、さすがのおしやくも喫驚顏、文は帶へ挾み、「其時おのし、何というた」「なんと言ひやうも御座りませぬから、はいとばかりお部屋を出ました」「はてな、是には何とかいひぬけの仕樣がありさうなものぢやな」と袖打重ね暫し考へしが、おとげが耳に口寄せ、しばらく

笑ひながら、「左様で御座ります」と兩人出づる。おかぢ提灯つけて先へ行きながら、傍櫓の船頭へ、「又や、棧橋はお手を取り申せよ。三吉さん、お忘れ物は御座りませんかえ」此時彼のおしやくは、おとげを供につれ此所へ來かゝりしが、善六が騒を見て折惡しと提灯消させ、暗き所にかくれ居たりしが、此二人河岸へ行きしを見て、頭巾ながら櫓櫂屋へ入り、挨拶もなく二階へ上りけり。これより、才三との話は如何ありけん、作者も知らず。

五　段

それはさておき、此夜嫁のおひなは、姑おしやくが、下女のおとげ一人を連れて藥師へとて出でたるを見て、いよ〳〵文の文體に違なしと思ひ、惡い者を拾ひて結句心をいため、引破り捨てんと思ひしが、又思ふやう、是を此儘に密に返しやらば、身のいたづらに恥ぢて辛きあたりも直るならんと、思ひさだめけり。かくとは知らぬおしやく、宵から出でて五ツ過に立歸り、おとげに持たせたる根上松の染付の小鉢を見せ、「おひな、花の物が無かつたから是をお土産に」おひな「おや可愛らしい。有難う御座ります」おしやく「まだお歸はないかい」「はい」「お振舞だから、遲からうによ」トいひながら、部屋へ入りけり。

四段

おかぢ、足早に梯子を下りて、「おや〳〵善六樣、大分春めいたお顏で御座りますね」といひつゝ、善六が連れて來た店の抱に對ひ、「親方さんお久しう、能くお出なされました。これお茶を上げたか」善六「これ嚊衆、聞いて下され」おかぢ「其お話は後で聞きませう、何故お出なさいませんえ。今朝も彼の子の處からお文が來て居ます」と立たんとするを、善六「いやも、其文見るに及ばぬ。これ聞き給へ、今日は旦那の名代に仲間内の無盡に往つた處が、此無盡は始からむづかしいと見た故、旦那が斷れというたを、私がいふには、仲間の事なれば斷るが氣の毒と、私がすゝめて去年の暮が親取、春一度かけて今日が三度目、此三吉を連れて旦那の名代に往つた處が、十九番のきりわけで百兩の當籤、旦那が大悅び。今夜は己が許す、一杯呑んで來いと天下晴れての女郎買、今迄魚文で呑んで居たのさ。ハア、、コレおさん、水を一杯くれ」と茶碗でがぶ〳〵飮み、頭を叩き、「あゝうまい〳〵。さア是からが勝負の關門」おかぢ「屋根にいたしませうね」善六「傍櫓を入れて逸散に、宇治川の先陣佐々木の四郞高綱なり」と踊る。抱の三吉帶を捉へ、「もし、おあぶなう御座ります」善六火繩箱を提げて行く吉に對ひ、「これ、彼所の水離れが四ツかつちりだぞ」「ハイ〳〵」善六ひよろ〳〵立ちながら、「番頭は店の龜鑑、なア三吉」

ら提灯、内から直におこそ頭巾、勝手口より立出でけり。

三段

此所は櫓櫂屋といふ船宿の奥二階、髪結才三年は二十三、芝居でするやうな男振、廣棧の羽織、廣棧の小袖、太織縞の下著、本博多の帶、是は今宵待人よりの仕著なり。火鉢へ鴨の鍋をかけ、船宿の女房と酒飲んで居る。そも〳〵此才三といふは、上總にて家來三四人使ふ程の二番息子なりしに、女狂にて親の勘當を受け、髪結とはなりけるなり。されば、斯樣に身裝を飾れば人柄よく、町内を廻る髪結とは見えず。去年のえびす講の時の茶番に、鬘をかけてお三輪を踊りたる美しさ。それからおしやくが思種、始は三筋の糸なりしゆゑ、捻が戻りて斯る人でなしをしけるなりけり。船宿の女房おかぢ「才さん、昨日つけた白鹿だが飲めるかえ」「道理で好いと思つた。まだ何ぞ來るかへ」「あい、刺身と大平を言付けやした。今彼方がお出なさつてから取りにやりませう」「なに好いやな。私が食べると嬉しがるわな」「おや〳〵、それまで聞けば澤山だよ」といひつゝ、箸を入れて鍋の鴨を挾む處へ、下女梯子の口から、「もし萬福屋の番頭さんがお出なさりました。泥醉さ」女房「今往くよ」と鴨をむしや〳〵食べながら才三が酌で飲み、才三へさして下へ行きけり。

筆にて上るゝトあり。披きみれば、元結を包みたる紙の裏へ、
今晩は薬師様ゆゑ、御首尾も好かるべく存候。日が暮れてから、櫓櫂屋にて御待申候。め
で度かしく。

とあり。今朝中の間にて姑、才三に襟を剃らせたる時、ちらりと見たる事もあり。元結を包みし紙といひ、さては才三が文を最前湯に入りし時こゝへ落したるならん、今日は旦那達二人の留守、帰も遅きとあれば、今宵薬師へ參詣に出るならば彌違なし、此文を落したと心付かば、嘸かし尋ねべし、人にはいはれず苦しからん、さればとて悪い文言ゆゑ、拾ひましたとやられもせず、此所へ置かば、外の者の手に入らんも知れず、仕様もあらんと心にをさめ、帯の絎目の糸を嚙切りて、差込み置きて、風呂に入りけり。

二　段

かくて其夜、夜食濟みて後、おしやく、悪玉下女氣に入りのおとげを呼び、「薬師様へ行くからおのし供をしや。三太を連れるには及ばぬよ」「はい、三太はお店の用で何處へか行きました」「はア左様か。お雛お土産を何ぞおねだり」といふ。お雛心にさてはと思ひ、心ではさげすみながらそしらぬ顔にて、「何ぞ小な鉢植を下さいまし」「あい〳〵」と支度とゝのへ、おとげを供にぶ

教草女房形氣　十七編上之卷

初段

金有屋箱右衛門が忰錢藏、妻のお雛に對ひ、「父さんはお屋敷へお出なさつたか」お雛「はい、今お出なされました」錢藏「己も行かねばならぬ。著る物出して呉れ」「はい」とお雛が取出し、著替へる後へ立廻り、袴腰を當る。おしやくが氣に入りの惡玉下女おとげ、供に持たする風呂敷包拵へる。錢藏支度整ひ、立出でたる後へ、おしやくが風呂から上り來りしを見て、下女のおとげお雛に對ひ、「お風呂へいらつしやりませ」「あい」といひつゝ、「母さん、若旦那も今お屋敷へお出なさりました」おしやく「左樣か、今日は若旦那も歸は遲い。お前も部屋で緩々居睡でもしな」といふ一言も針があるなり。おとげは側から笑顔、「まさかお居睡でも御座りますまい」おしやくは浴衣の儘、煙草輪に吹きながら、下女に背中摩らせて居る。お雛「母さん、御免遊ばせ」と風呂場へ行きて見れば、馬鹿女おひよん今年十七なれど、大柄に太り肥えたる腕に、襷がけの高端折、片手桶で風呂へ水を入れて居る。お雛「あんまり澤山うめるなよ」いひつゝ、帶解かんとしたる時、文めく物落ちてあり。おひよんが出行くを見て、お雛取上げ見れば、男の

はこ右衛門、三筋の糸をやめさせて、圍ひおきしに、本妻うな女、それにばかされしなかに、本妻はてし時、二人のせがれ、いまだ幼かりしゆゑ、介大病の時、よとぎに呼寄せおきしに、抱かたぐ\〲、ずる\〲べつたりのおてかけ、十年ほどたつ中に、誰いふともなく、おかみさんおかみさんと、育てられたる子供等も、おかゝさんといふ。おしやくは今年三十九歳、心きゝたる女ゆゑ、萬事ぬけめなく、何事にも用が辨ずる故、通番頭忠兵衛はじめ、物事の相談するやうなれば、おしやく、おのづから此家の權を握るゆゑ、おしやくが昔を知らぬ嫁のおひな、機嫌氣づまもとりかねて、淚をかくす袖の露、かわくは稀にて、下女を相手の高笑は、姑の留守の日なりけり。さてこの前の十六編の下の卷にて、まはりの髮結才三、なかの間にて、おしやくがえりを剃る時、えりのなかへ文を入れたる、その文のなりゆきを、この十七編の發端とす。

發端

今はむかし、鎌倉にて目ぬきといふ町に、表は五間間口、三間は格子作、家のしるしを鑄つけたる、鐵の大きなる用水、いかめしきにても、金持と見ゆるくらし、かねあり屋はこ右衛門とて、小判に子を生ませて、年々のびる身代。あととりの子息かね太郞、町人を嫌ひ、小判の御用を勤める御屋敷にて、劍術を稽古し、二十二の年、免許になりしが害をなして、家督は弟に書置を殘し、武者修行に出でて、行方知れず。せん方なく、次の忰ぜに藏を家督になし、嫁をたづねけるに、古著問屋の娘、十二の時より、大きな御屋敷にてお小姓を勤め、この時十八、第一きりやうがよいとて、年頃出入する醫者がなかだち、里は古著問屋、身代は釣合はねど、見合をして、親子の心に叶ひ、ひなぢといひしを、今はおひなとて、夫婦のなかはよけれども、ふとした事から、姑の心に叶はず、嫁をいびる事、この前の十六編を見て知らせ給へ。さて、この姑はこ右衛門が妻は、おしやくとて、以前は、三筋のいとにて世を渡り、顏はさまでもなけれど、愛敬はこぼるゝやうにて、その上に才智かしこく、人の心を悟ること、狐のや

情なき人は、櫻の花の枝に竿をかけて、子供のしめしをかける。情はなさけと讀む文字ゆゑ、かゝる事をなさけなしといふ。人を召使ふにも、なさけを忘るべからず。

さてまた、情のほかに、思といふて、おもひといふものあり。おもひは情の妹なり。情より思を生ず。たとへば、花を見て美しと愛するは情なり。一枝ほしとて、手をかけるは、おもひなり。あの人をと心の動くは、情なり。いや〳〵、道ならぬいたづらと謹むは、氣のもちやうなり。されば、氣がつかぬ事しましたといふ事あり。惡いと知りながら、いたづらするは、思といふ文字のおもひがさする業なり。

さて、あるじの心お留守なれば、氣・意・情・思の四ツ、さま〴〵に狂ひて、わるさをなし、つひには、あるじの心を亡し、身を果すに至る。あるじの心、わがすみかとする性をまもりて、心正しければ、召使の氣・意・情・思の四ツ狂ふ事なく、心の明德あきらかなり。嫁をいびるも心の鏡くらき故なり。このくさざうしを見て知るべし。

松うつる。心くもる時は、うつすもの、はつきりとうつらず。これ、天よりうけたる明德の鏡を、ぞんざいに持ちくもらせて、おのれが心をおのれがくらくして、善惡を照し見て、わける事能はず、竟には身を亡すに至るゆゑ、心の鏡は、われに磨きて、くもらすべからず。

さて、心のほかに、(氣)といふものあり。氣は心の召使なり。あるじの心、召使の氣まかせにするを、わがまゝといふ。わがまゝには、あやまり多し。心には惡き事と知りながら、氣まかせにする時は、人の道にはづれるなり。氣まかせにして、朝寝をなし、酒をたらふく飲み、家業に怠り、女に狂ふなど、心のあるじの誤なり。この氣狂ふを、氣ちがひといふ。

さてまた、氣のほかに、(意)といふものあり。意は氣の下役なり。たとへば、酒を飲みたいと思ふは、心なり。けさの肴にてと思ふは、氣なり。いや〳〵、さし身をとりにやらんと思ふは、意なり。意は定まること無く、物に觸れ、事に依りて、かはるものなり。さてまた、意のほかに、(情)といふものあり。情はなさけとよむ文字なり。花を見て、さても美しとて、愛するが情なり。情なければ、木石なり。物に觸れ、事につれて、おもひやるが情のもちまへなれども、

教草女房形氣　十七編

安政三辰之春

八十八歳　京山作

大方の草ざうしには、この所に序文と口繪あるべけれど、それは猫のしつぽにて、ありてもなくともなり。ゆゑに、子供衆の心得ともなりなんとて、澤庵さまが書置かれたる事の、物に見えたるを、早くわかるやうに、短く記せり。されば、京山が申すにはあらず、澤庵さまの教とおもひて見給へかし。

そも〳〵人は、天地陰陽の氣をうけて生るゝ故、天性といふもの備るなり。されば中庸にも、天の命これを性といふとあり。性をうけて生れし後、五臟とゝのひて(心)といふもの出來るなり。心できざる中は、ものいはず、たゞ聲をあげて、泣くばかりなり。赤子を見て知るべし。さてこの心は、身のうちのあるじにて、天よりうけたる明德なり。されば大學にも、明德をあきらかにするにありといへり。明德の心は、鏡の如く、梅をうつせば梅うつり、松をうつせば

月の魂棚から地獄へ歸る思なりけり。話ふたみちにわかる。それはさておき、おひなが嫁に行きたる町内を廻る髪結才三とて二十四五歳、俳優の誰やらに似て男振よく、目さきがきゝて世辭もよきゆゑ、人に可愛がらるゝ男なり。町内のまはりゆゑ、箱右衛門方にて、晝と夕飯たべるは常なりけり。されば、今日も才三、金有屋の臺所で晝飯たべて居る處へ、年増の下女お竹、「これは私が戴いたのだが、お前にやるよ」才三「これは鰺の鹽燒、ありがたい」と、むしやむしや食べる處へ、白歯の下女來り、[illegible]「お内儀さんが、襟を剃つてくれろとおつしやるよ」「はいはい、只今まゐります」ト、膳を片づけ、鬢盥提げて奥へいたり、おしやくが襟を剃るうち、おしやく小な文を後手に、才三が懐中へ入れる。才三も文をおしやくが襟へ入れる。知る人さらになし。才三剃刀を仕舞ひ、何ともいはず鬢盥さげて勝手へ行く。おしやく「さんや、風呂へ行くよ」

これより後おしやく才三が事、嫁のお雛才智ある事、武者修行に出でたる金太郎、金あり屋へ立歸る事など、此次の十七編に記し、引續いて出板仕り候。めでたし〱。

して居りましたれど」かやう〳〵と、姑に辛くあたられる事の數々くはしく語り、「とても辛抱が出來ませぬ」ト、鼻紙出して涙を拭ひければ、母も我子の心根をくみだす樣な涙をかくし、「今更いふではなけれども、此方の店が古著屋ゆゑ、夜具蒲團から何やかや、皆新しくこしらへ、屏風まで持たせてやつたも、先が大家ぢや故、そもじの肩のすぼらぬやうにと、父樣のおほものいり、今水の泡にするもそもじの心一ッ。嫁入して程もなく不緣になりては、八ッの時から御恩を受けたお屋敷の方々へ對しても外聞惡し。生の親に比ぶれば、姑のやかましいは世間のならひ、此方ばかりではないぞや。辛抱するうちには嬰兒でも出來れば、孫の可愛さに風がかはりて浪もたゝず、阿波の鳴戸をやす〳〵と渡るは世間にまゝある事、さりながら、一生連添ふ男が嫌ならせん方なけれど、今聞けば錢藏はすなほな人、男振もよし、夫婦中さへよくば、辛抱の出來ぬ事はあるまい。今おのしの言うた事、父さんに聞かせたら嘸かしのお案じ、今日のお留守は幸ぢや。親に孝行せんと思はゞ、心を切かへ辛抱しや」と口ではいへど、心では嘸辛からんと思ひやり、袖に涙を漏しけり。おひなは、十二年の御奉公に、澤山霜を踏みたれば、母の意見に詞を返さず、辛抱せんと得心なしければ、母は悅び、外の話の中、おひなが好きの玉子燒を誂へ、久振にて母と膳を竝べ、快く夕飯食べしが、別れて歸る時は、七

私はじめ知らぬ詞をつかふのは、お屋敷勤をした事のない私への面あて心で、嘸かしおさげすみであらうな」おひな「なにお前さん、そんな心では御座りませぬ。言馴れましたゆゑ」「又口答か。媒人した叢文どのの話とは大違、此方はおそろしい心立ぢや。其心では、私とは生さぬ中ゆゑ、彼のおとなしい錢藏を瞞し込み、此方より先へ、私が追出さるゝであろ。いつぞや里からよこした鯛、大きいけれどもたッた一枚、潮煮したを一口吸うて私は胸を惡くした。彼の樣な腐れ魚を食べて御座る里の兩親、此方が此所へ來たを仕合者ぢやといふ筈ぢや」と親を譏られ、身に染々と口惜しく、涙拭へばじろ〱見て、「おひな、何で泣くのぢや。私に言はるゝのが口惜しいのか、但し空涙か」と烟管で疊たゝく折しも、主人箱右衞門來りければ、おしやくそしらぬ顔にて、「おひな、お晝飯にしろと、竹にいひな」

十六段

さて此日より三日經ちてお雛里へ來り、下女と男は勝手に殘し、母の部屋へ來りければ、母のお鶴、娘に對ひ、「昨日の返事に、何ぞに假托け呼びによこしてくれろと、おのしの文ゆゑ、田舍の叔母樣をだしにつかひ、久振で逢ひたいと申しますというてやつたが、何ぞ用かへ」「あい」と後の唐紙しめて近くさしより、聲を潛め、「なりたけはお聞かせ申すまいと、今までは隱

せうなア」と頤を出していふ。これを聞き、お雛が心を酌みやりて、主人の女房其返答はせず、「もしあなた、猪口へ子孑が涌きますぞえ」おしやく冷めたをぐつと飲み、盃洗ひて呑口を洗ひ、女房へさし、「これでもう、おめで度お納になされて下さいまし」

十五段

かくてお雛は、水引の事姑の氣に障りたるを取直さんと、朝夕の心づかひ、胸一ッに心を痛めけり。さて又我が一生の男と頼む金有屋のあととりの錢藏、ものやはらかにて酒も飲まず、おとなしけれど、お雛が目には少し足らぬと見ゆるゆゑ、末賴母しからず。彼是につけて、人なき處にては、思案の胸に手をおく事度々なれど、色にも出さゞる胸の苦しさ、思ひやるべし。かくて或日、お雛髪を結はせて後、眞鍮の金盥に手を入れて見れば熱きゆゑ、立廻る下女に聲かけ、「竹や、お水を持つて來ておくれ。そしてまちかねも持つて來や」「はい、おひやは水で御座りますか」「さうさ」竹「まちかねとは、何で御座ります」ひな「糠の事さ」竹「おや〳〵」と軈て持來りけり。おひな手を洗ひて、鏡臺片付けなどしければ、姑おしやく座敷に居りしが、「おひな此所へお出」「はい」と側へいたりければ、おしやく烟管をはたき、「お前は大きな所へ御奉公したを鼻にかけ、おひやだの、まちかねだの、又は便所に行くを、はゞかりに行くなどと、

硯蓋、主人も立出で盃の獻酬。おしやくは昔とつた杵屋の糸の三筋にて、座敷を勤めたるゆゑ、酒は飲む口、おひなは呑まず、此家の主人も下戸なり。おしやくが相手は、主人の女房ばかりなり。此女房は、おしやくと違ひ、由緒ある御邊の御奉公つとめし故、てれて居る嫁のお雛に對ひて、お屋敷の事など尋ね、おしやくにむかひ、「お前はお仕合ぢや。好いお嫁御樣、御標致と申し、お執成、御大家に御勤なされたは詞でも知れるもの、御奉公して見ぬと思遣が御座りませぬ」おしやく「左樣さ、此處へ置いて申すは異なものぢやが、一體發明なゆゑ、能く細かしく氣がつきます。下女達へ水引の結び樣まで敎へてくれます故、私も此子には一目も二目もおきますのさ。しかしお屋敷の癖が失せず、蠟燭は太いものとばかり覺え、指身のお肴を眞中から取るも、御奉公した故で御座りませうけれど、それでは間に合はぬ事が御座ります。これからそろそろ町方の事をならはせねばなりませぬ」と言ひながら、尻目でお雛を見る。おひな心の内に、さては今朝の水引はおしやくが結びしならんと心付きて、胸を痛めけり。おしやくは、又受けたる猪口一口飲みて吸物膳に置き、鼻紙出し口を拭き、主人の女房にむかひ、「噂を聞けば、此子の實家の兩親は、好い處へ嫁に行き、あれは仕合ものぢやといはれるさうで御座りますが、此子の標致では、私共よりもつと好い處の花嫁樣にもなられるを、緣でがな御座りま

て、右の赤い處を上にして一ツ結び、赤きを折かけて、五本を能く揃へて結ぶと、これ見や、此通り水引の結びが十文字の筋かひになる、これが並々の結方ぢや。包む物によりては、樣々の結方がある」「左樣で御座りますか」お雛「下方では、兎角水引のかけ樣が違うてある。大きな恥ぢや。先この水引で結んで見や」と敎へけり。此時姑のおしやく風呂から上り、お雛が後に立つて聞居たるを、おひなは知らず。下女はそれと見て、おしやくが結びたるを譏るゆゑ、氣の毒に思ひけり。立聞したる姑、己が結びたるを譏られて癪に障りしよりぞ、嫁を憎むの始なりけり。これ姑ばかりではなし、嫁も結び樣を譏りたるは、いらざる差出事なり。いかにあるとも姑の儘にさするが、嫁の當然なり。これに類する事もあるべし、嫁に來た當分は、殊更に愼むべし。

十四段

さて此日支度とゝのひて、姑おしやく、嫁のお雛をつれ、下女一人、羽織を著た手代一人、下男に小僧を供に連れて、有田屋といふ親類へ至りけり。大方今日らはと心待したれば、掛物かけたる座敷へ通し、主人の女房俄に著る物著替へて立出で、お雛には始めての挨拶、土產の禮など互の挨拶、彼是する間に、いひ付けおきしと見えて盃持出で、吸物膳、指身、鉢肴、

極りければ、此上は見合とて、雛路が母お屋敷へ至り、老女松尾に逢ひ、ありのまゝに語り、一夜のお暇いたゞき、見合をなしけるに、錢藏も男振よく、附いて來た母も樣子よく見え、雙方申分なく、いよ〳〵相談極り、雛路めで度お暇戴き、吉日を選み、半元服振袖の花嫁、支度も立派にて、めでたく婚禮も濟みけり。これおしやくに虐めらるゝ嫁なり。猶次々を讀みて知るべし。

十三段

かくて夫婦の中もよく、嫁もしとやかにて心優しき故、箱右衛門も悦び、姑のおしやくも心に適ひ、里開もめでたく濟みて後、或日親類へ近付に連行かんと、土產物などこしらへけるに、嫁の雛路今の名はお雛、反物を包みたるを見れば、水引のかけやういくぢなし。おひな下女に對ひ、「是を此儘持たせ行かば、水引の結び樣も知らぬかと、持たせて行く者の恥になるべし。今日參る有田屋のお內方は、濱川樣に久しくお使番を勸めたお方さうな。猶更私までがさげしまるゝ。結直すから、新しい水引を持つて來な」ト取寄せ、結直せといふ。下女「私は結び樣を存じませぬ」「そんなら覺えて居な」と先反物の水引を取り、側にありし讀本に結びて見せながら、「水引の赤き方は陽にかたどる故右になし、白きかたは陰にかたどる故左になし、左をふせ

るまでとて老女に頼み、屋敷におくゆゑ、專ら嫁入の口をたづねけり。

十一段

さて彼の山井董文、此松竹屋へ出入するゆゑ、家督の息子少し風邪氣にて見舞ひければ、松竹屋の妻お鶴、「樣子は、如何で御座ります」「お案じなさるな、此頃のはやり風、二三服上つたら癒ります」と手を洗ひながらいふ。菓子と煮花に尻を落付け、折節の話の中に、主人の女房お鶴、「去年の春宿下りいたした時、あなたにも御目にかゝりし娘の雛路」かやう〳〵と嫁の口を頼みければ、董文「彼の子なれば、標致はよし發明なり、お世話申しても鼻が高い。それに就て耳寄な事が御座る」斯樣々々と、箱右衛門が忰今年十九歳の息子に嫁を尋ぬる事を話し、家内の暮、何やかや詳しく話しけるが、金太郎が武者修業に出し事と、おしやくが以前妾でありし事は語らず、媒人口に、さま〴〵言囃しければ、主人の女房好き口とて悅び、亭主へも聞かせて、とりもちを頼みけり。

十二段

かくて董文、箱右衛門方へ至り、此事を詳しく語りければ、もそつと大きな所から貰ひたしといふを、隱居番頭忠兵衛、「里は、此方より劣りたる方宜からん」と年寄の詞にしたがひ、相談

とあり。此書置を見て箱右衛門大に驚き、隱居番頭忠兵衛、店の番頭善介をも呼付け、書置を見せ、「追手をやりて呼返さん」と言ひければ、忠兵衛書置を見て眼鏡をはづし、「町人がお嫌なら、爲べきやうは幾らもあらんに、いかにお若きとて無分別なるなされ方、兎も角も此鎌倉の口々へ、少しも早く人を出さん。これにつけても早くお嫁御をとお勸め申したれど、何の口も御心にかなはず、お嫁御樣があらば、此樣な事も御座るまいもの。コレ善介どの、抱の太郎吉を呼びにやらしやれ。彼にいひつけ、口々へ人を出さん」箱右衛門「それが宜からう」と俄に追手の者、一口へ二人づつ出しけれども、金太郎が行方更に知れざりけり。

十　段

金太郎が弟の錢藏、今年十九歳なり。兄が書置に任せ家督と定めけるが、金太郎が嫁取の遲かりしに懲りて、此所彼所尋ねける中にも、年頃出入する醫者の山井董文は、流行醫者にて世間手廣きゆゑ、これにも嫁の事を賴みけり。さてまた爰に松竹屋龜右衛門とて、古著の問屋地面二ツある暮しなり。おとなしき息子の妹、八歳の時より御大家の御小姓に上げたるも、母のお鶴、椎茸髱の御奉公したる故なり。此娘雛路とて、花柳の御館のお姫樣附にて、十年の御年季めでたく勤め、御禮奉公も濟みたれど、店の手代四人あれば、何かの心づかひにて、嫁の口あ

指も長く業物を差しけり。此時金太郎二十一歳なりけり。さて、人の心は物に染り易きゆゑに、金太郎も斯の如し。されば、息子達、豊後、長唄、義太夫節、なまなか聲が好きゆゑ、仕馴れたる家業をすてて、一生を過る息子間々あり。若し稽古なさば、家業は八分半、慰は一分半と思ふべし。さすれば、五分々々御無事なるべし。

九　段

かくてある日の朝、金有屋箱右衛門、今起きて顔洗うて居たる處へ下女來り、金太郎が枕元にありしとて、差出したるを見れば、書置の事とあるは、金太郎が筆なり。箱右衛門打驚き、披き見れば、

私事、町人の家督望これなく候。家名は弟錢藏を以て御立下さるべく候。私儀は、劍術修業の爲、武者修業に出で申候。路用の爲金百兩御貰ひ申候。病氣又は身分有付候外は御便いたし申さず候。親の許をうけ申さず、勝手まゝの不孝は、幾重にも御許し願上げ奉り候。

初旅もかへる時あり雁の聲　　金太郎

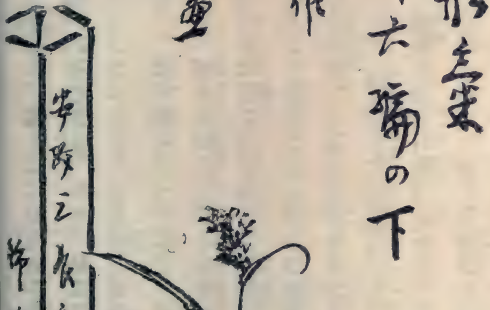
父上様へ

教草女房形氣　十六編下之巻

八段

惣領の金太郎は、十六の春元服なしけるに、親に優りて才智賢く、出入屋敷方の用向にも、親の代に勤め歩く。中にも秩父庄司重忠殿は、金有屋より銀主の用を勤め、家中へ金を用達つゆゑ、金太郎毎日通ひけるに、屋敷内にある劍術の稽古場通路にあるゆゑ、足をとゞめて差覗く事度々なりしゆゑ、或日劍術の師匠楠左門、金太郎を稽古場へ呼入れ申しけるは、「度々稽古を差覗き申さるゝは、劍術お好きと見えたり。御稽古なさるゝか」と尋ねければ、金太郎稽古はせざる由いひければ、「然らば教へ申さん。今日は吉日にて弟子入も御座れば、今日より始め給へ。先かたを教へ申さん。弟子入のしんもんは後での事」といふは、此先生も折々は、金有屋にて金子を間に合すゆゑなりけり。さて金太郎は、此日を始として毎日稽古をなしけるに、始は親へもかくしけるが、親いつか知りしかど、三筋の糸などの稽古と違ひし事なれば、許して稽古させければ、金太郎ます〳〵精を出したる事、既に五年に及びて上達なし、免許もうけ、他流仕合にも二三度歩きたれど、負はとらず、武士づきあひのみするゆゑに、自から武士形氣になり、脇

をしへ草
女房形氣
十六編の下
京山翁作
国さだ画



も家來なり、母と妾とは、鯨と鰯ほどの違なり。然るに、お内儀さんといふをも、母さんとい
ふも、其儘にしておくは、主人箱右衛門がいみじき過なり。是に似たる事、世の中に多し。
子ども衆、よく〳〵分別あれかし。

て、心の儘にせんとの心なり。されば、看病につけて爲る事なす事僞りながら、その爲す事人の道にかなふゆゑに、見る人眞實と思ふはことわりなりけり。或老人の申されしは、「世の中を見るに、長松が使の遲かりし嘘、おさんが飯を焦したる嘘は、その嘘の吐きやう愚なる故、直に嘘と知れるなり。才智ある者の嘘は巧みなるゆゑ、嘘つく奴よりは才智はるかに勝りたる人にあらざれば、實か嘘か、判ちがたし。如何ほど巧に嘘いふとも、心の目をもつて見る時は、鏡に影の映るが如くなり。能々心得べし」と、彼の老人の言はれしは、人の訓ともなる事なり。こゝをもつて案ずれば、かのおしやくが空涙を、此家にて看あらはす人なきは、主人も妻も番頭も、出來合の人と見えたり。さるによりて、後々はおしやくに此家を搔廻され、づる〳〵べつたりの本妻めかし、二人の子供等もいつしか母さんといひ、召使の者ども等もお内儀さんといふ樣になりしは、主人の愚なるゆゑなり。聖人の詞に、名と器物とは人に貸すべからずといへり。召使等、おしやくが勢におされて、お内儀さんといふを、主人が其儘にしておくは、卽ち聖人が、貸すべからずといふ名目をかしたるなり。主人始め番頭等も、家業は仕馴れたるゆゑ、身代は細らせざれども、人倫の道には暗きと見えたり。如何となれば、お内儀さんといへば、兩人の子供が母なり、おしやくさんといへば、あたりまへの妾にて、親の妾は子の爲に

憐むべし、およわ三十三を一期として此夜空しくなりければ、箱右衛門が歎は更なり、年頃情深き女なりければ、惜いお方をとて、出入する按摩までが通夜に來て念佛稱へけり。さて野邊の送も金持なれば人多く、棺輿を出す時も、おしやくは聲を上げて泣きければ、見る人々は、圍れにしてはしほらしやと囁きけり。かくて彼のおよし、野邊送すみたるその夜、およわが遺言の事をくはしく箱右衛門へ語りければ、素より好む處なれば、番頭兩人へも事の由をおよしより言はせ、おしやくへも言聞かせ、母は今まで住居したる處へ隱居さする事に定め、おしやくは居なりのお妾様とぞなりにける。人々これを見て、心立よき故に、金持のお部屋樣となりし筈ぢやと言囃しけれども、それは常の目を持つて見る故なり、才ある人の心の目をもつて見る時は、おしやくは妲己ともいふべき奴なり。如何となれば、およわが大病と聞きて、若死んだならば、齒切のせぬ箱右衛門、大磯通ひなど始めなば、我に秋風の立つ事もあるべし、其時は手切を取りて、乘かへる船もあるべけれど、女房のない金持の妾とならば、何事も心の儘ならん、それにしてはと考へ、まづ我繼母からして瞞し、看病したいと箱右衛門を僞り、およし方へ至り、心にもなき涙を流し、看病するにいたり、穢い物も手にかけるを穢ひとは思はぬふりをするは、唐土の越王が、呉王のたれたる糞を嘗めしと同じ事にて、何時か此家の妾になり

妻およしも、おしやくが取りなしを感心なしけり。

六　段

さるほどに、箱右衛門が妻のおよわ、おしやくが心ざしのしほらしきにめで、其上に人の目顔で心を知るほどの賢しき女なれば、下女等よりは遙に用にたつゆゑ、おしやく〳〵と側を放さず。それゆゑにおしやくは、宿へ歸らず看病なしければ、箱右衛門心の内に悦びけり。かくておしやく此處に居るうち、およわが病段々に差重りしが、亡くなる日の朝、彼のおよしを枕元へ呼び、およわ息の下なる聲にて、「私が病本服は覺束なし。亡き後に子供等二人、繼母の手にかけるは嫌なり。おしやくは年若なれど、何かにつけて心優しき女、私が亡き後は、表向で引取り妾になし、此方の人や子供等の介抱をさせてくれ。おのしも亦わたしに代りて、奥の事萬事頼むぞや」およしは涙おしぬぐひ、「あなたお心弱い事仰やりますな。仰は畏りましたが、三人のお醫者方の御相談で、昨日からのお藥精出して上りませ。昨日私が成田樣でお百度いたした御神籤もよし、お床上のお祝を皆も待つて居りまする」と言ひつゝ、背中撫でながら涙かくせば、病人も潤む涙をたもちかね、枕に落つる一雫、念佛の聲もほのかなりけり。

七　段

大病で何かの取込」「さればで御座ります。其御病氣に就ての御願で御座ります。其仔細と申しますは、今年の春からお内儀さまが、旦那のお世話になる事をお許し下されましたれど、出入はならぬとの事は御尤至極、さりながら、母へとて折々はいろ〳〵の品を下されますは、母も私も常々有難く仇には存じませぬ。其御方様が此度の御病氣、出入はならぬと仰やれたなれども、有難い思召の御恩おくりの爲御看病がいたしたく、旦那へ申したれば、それはおれが口からはいはれぬが、およしに頼めと旦那様のお指圖ゆゑ、さしつけて參上りました。何卒あなたからお内儀樣へよろしくお執成下されまして、御看病の出來ますやうに御願ひ申します」と、涙一滴袖に拭ひていふ。およしは、金の無心とは案に相違な詞、しほらしき女と思ひ、「それはお前、好いお心ざしぢや。今宵も九ツから看病に出るゆゑ、樣子によりお内儀樣にお話し申して、返事は私からいたしませう」「有難う御座ります。よろしく御願ひ申します」と彼是して歸りけり。

五　段

かくておよしが執成にて、箱右衛門が圍はれのおしやく、箱右衛門が妻の看病なしけるに、穢き物も下女等が手にかけず湯殿にて洗ひ、片時も離れず撫摩をなし、今年八ッの錢藏が寝るにも、寝卷を火鉢で暖めて著せかゆるを、母のおよわ病の床より見て心に悦び、かの隱居番頭の

嘸かし疲れたらう。私があとで揉んでおもらひ」「はい〳〵」母「彼の人はまだ歸らぬか」「左樣さ、あの中へ、重忠樣から御用が下つたゆゑ、此方の人は店で帳合調べて居られます。お竹や、御膳を出してくりや」と著る物著かへ、箸を取らんとしたる處へ、小女來り、「あなたへお目に掛りたいとて、若い女中が是を持たせて參りました」と出すは鮨の折なり。「おのし知つた女か」「いゑ〳〵、權助が申しますには、彼は本店樣の圍者ぢやと申しました」「はてな、何も用は無い筈ぢやが、碌な事ではあるまい」と膳を片付けて、「此方へ通しや。母さん、彼方へお出なされまし」「あい〳〵」と按摩が手を取り、一間へ入りけり。

四　段

入來る女を見れば年の程二十一二、かほばせ美しく、唐棧のかはり縞に黑繻子の半襟、革色緞子の帶、じみた裝なり。およし始めての挨拶、土産の禮をもいふ。此女手をつき、「私はしやくと申しまして、御本店樣のお世話になりますもの、さしつけて上りましたは、あなたのお袖に縋り、お賴み申したい事がありてのこと、お聞屆け下さらば有難う御座ります」およしは是を聞きて、大方は金の無心ならんと思ひ、「お目にかゝるはお初なれど、旦那のお世話なさるよし、お名は聞きました。お賴みとは何か知らねど、旦那から聞きもしなされつらん、お內儀さまの



(五) きうかん下おりのハがのむーつけ
あつのまへみかうる見ておや子口をを
そろへ世おくまでのつがひおか
めうこうしるがすゝぞんとむし
ますそのものろてあゝひとくぶまえ
是 京山が作の女房形氣みハ
おへさんのあんどいおそのち
女を主人みて…あるあり
ふうそうハおんがいお三味
まつけいでん…見かうさ
ころくしも…れぐといふ
ほうしふまご…
●おや子か…
つれ…
三味ぢのりとそ
世をつうるしあや
子…
一そなく
おもんなくハ
まるそん…女子
目妙いでくのいと
三味ぢのいるを…
…
…



(三) おしそとん一ツみかくどまるも母ハ…
みーておきやくがさとだいのおまハ…
よきうきうしきさるあ…まるみたこ
おしんがつま…おそきてあんどはけハ
▲さて又そんとおのんがいうとも
ぞて…女…そうくへ
のとめ…ちうづめ
…おきやくが
母へとそ(三)

(四) つゝハ…
おやくハ…
…
のん…
…

かくも
このにおい
のとう
あつまき
まりんが
つまおよ
とち
びんちのおきやく
つのさ
とうあ
けるか
まぶた
…

(六) おめく…
とのハ…
…山井
…

心だて優しき女ゆゑ、折々は貰物の重詰など、おしやくが母へとてつかはしければ、親子は更なり、箱右衞門も悦びけり。

三段

かくて此年の秋の頃、箱右衞門の妻およわ、持病の癪募り打臥しけるが、次第に重くなり、血塊といふ醫者の見立、年來の出入山井董文が力にもかなはず、醫者は二三人にて相談の藥少しも驗なく、七人の下女、又は地面の家主の女房など、入交り立交り晝夜の看病、二人の子供を置きて今死なれてはと、箱右衞門が心遣。隱居番頭の妻およしは年頃といひ、萬事のさばき、側を離れず、十日程は詰切りしが、今日は少し快しとて、粥を盞に一杯喰べしを見て、年增の下女に萬事いひつけ、又後にとて日暮より我家へ歸りけり。此日は日頃出入する人々言合せ、千垢離をとりしが、さしの流れやう宜きゆゑ、御新造樣の御病氣お氣遣は御座りませぬと聞きて、箱右衞門も安心なしけり。さて通番頭の妻およし、宿へ歸りければ、母のお谷按摩とらせながら、「お內儀さんは如何ぢやえ」「今日は大きにお宜う御座ります。御膳もお盞に一ツ食りました」「夫はお嬉しい。もしやの事でもあれば、二人のお子達がかはいさうだ。お心も遺るであろ」「左樣さ。女中達は皆若いゆゑ、夜伽も居睡る人ばかり」「其筈ぢや、長い事ぢやから此方も

儀をおやりなされた禮の心で御座りませう、昨日くれました」「如才のねへ奴だ。此蘇鐵は朝鮮種だ」といふ所へ、おしやくが母歸來り「おや旦那樣、お早く、お屋敷のお振舞で御座りますかえ」おしやく「なにさ母さん、私に悦ばす事があるとて、早くお出なさつたのさ。お前にも聞かせるとて待つてお出なさつたよ」「やれ〳〵夫は有難い」箱右衞門「これおしやく、お袋も聞かつせえ」と、およわが言ひし事有のまゝに語りければ、親子口を揃へ「やれ〳〵まア有難い思召、私共が有難いと思ひます事を、宜しくお噂下さいまし。京山が作の女房形氣には、おへみといふおそろしい嫉妬女、それに似た事も間々ある中に、美しい御心ざし、おしやく有難いではないか」「左樣さ、私も心が晴々といたしました」箱右衞門「併し上手に嫉妬をやくのかも知れぬ」親子顔打見やり「おほゝゝゝゝゝゝ」と、つきもなく笑ふも、三筋の糸で世を渡りし親子なればぞかし。抑此おしやくといふは、目顔で人の心を知る程のわるがしこき女ゆゑ、三筋の糸で世を渡りし頃も名を鳴したるを、箱右衞門に思はれしを幸に金持の襟につき、今に此身にはなりけるなり。されども箱右衞門が心立甘口なる故、もしや宿へ知れて、手切の時はかうしてあゝしてと、心一つに覺悟するも、母は心愚にして、おしやくが相談の相手には足らず、殊更ままましき中なり。然るに、箱右衞門が妻の心を聞きて安堵なしけり。さて又、箱右衞門が妻は、

かし出入をさせては、店の若い者等の示にもなりませぬ故、其處はあなた、お心得なされませ」といふ。箱右衛門は眞綿で首、挨拶も咳に紛らしつゝ、「貴様にさう言はれては一言もない。彼が所へ往けばとて、月に二度か三度ちや」と、十日の懸値は言ひさうな事ぞかし。

二段

かくて箱右衛門は、およわが言ひし事、早くおしやくに聞かせて悦ばせたく、明る朝物に假托けて立出で、おしやくが方へ至りけり。此時おしやくは湯から歸り、髪を撫付け白粉もつけて仕舞ひ、口紅さして居たる處へ、箱右衛門が來りしを振返り見て、「おや、お早う御座りました」箱右衛門「さればさ、お主へ聞かせて悦ばせたい事があつて早く來たのよ」おしやく「おや左うかえ」ト言ひながら、後の戸棚より何時もの座蒲團を出し、火鉢の前へ置き、みだれ筥も取出して置く。箱右衛門蒲團に乘り、紙入、扇、たもとおとし、腰に提げたる根付とけいもみだれ筥へ入れる。おしやくは、箱右衛門が此處へおちつけの煙草盆を置く。箱右衛門、煙草呑みながら、「お袋は如何した」おしやく「湯がすいて居ましたから、おさんを附けて湯へやりました。悦ばすと仰やつたは何で御座りますえ」箱右衛門「今お袋が來たらば話さう」といひつゝ、用簞笥の上に載せてある蘇鐵の鉢植を見て、「藥師で買つたのか」「否々、此間庭を直した時、植木屋の松へ、あなたが祝

敎草女房形氣　十六編上之卷

發端

今は昔、鎌倉にて賑かなる處に、表間口四間半の土藏造、三間は格子戸、店には毎日晝まで來て居る隱居番頭忠兵衞、次の番頭善介、外に手代五人、小僧六人、家業は下質に屋敷方の銀主、主人は金有屋箱右衞門とて四十七八、妻はおよわとて三十三四、子供は、惣領を金太郎とて今年十歳、次は錢藏とて八歳なり。地面も十二三持ちて、住居は元より居附地面なり。妻のおよわ、名につれて病がちなれば、今一人子供も欲しく、閨もさみしく、圍ひおくはおしやくとて、三筋の糸で世を渡りしを、此箱右衞門が引込ませ、母と下女と老人の飯焚男、鰻の蒲燒も通で取らせる程なれば、外の事は推して知るべし。箱右衞門の妻およわ、何時か知りけれども、心優しき女ゆゑ、嫉妬もやかず。或時箱右衞門へ申しけるは、「あなた、此春からおしやくをお世話なさる由、彼は錢藏が七ツの祝の時、二日お呼びなされて私も逢ひました女、お世話なさるを、私や隱居番頭忠兵衞が手前を憚り、おかくしなさるは却つて惡う御座ります。忠兵衞や善介へは、わたくしがおすゝめ申したと言ひますゆゑ、お心遣なくお世話なされませ。し

んせぬか」 京山「いちく御尤至極。それはさておき、あなたがお若き時、見たとおつしやる嫁いびりの女房、くさざうしの種になりそな事、おはなしが聞きたい」と尋ねてきゝし物語を、そのまゝに記して、十六編のさくら木に咲かせはべりぬ。

嘉永七年甲寅仲夏稿成同九年丙辰刻成

八十六歳 京山

○ある人いはく、この所の文句、お嫁御さんたちは、繰返して、よくく味ひ給はゞ、身のお薬となりて、目出度御安産あるべし。おふくろさんも、よくく御覧よ。

房は、書きなさんせぬから、それをすゝめにまゐりました。それにはわたしが若い時見た事がござんす。その話はまづおいて、わたしが思ふには、嫁、姑の中のよきは見よいもの、中がよければ、家も繁昌。その中のよいは、互に堪忍くらべする故ぢや。嫁入した男親は、大方やさしいもの、やかましいは女親。なかのよい夫婦も、おふくろゆゑに三くだり半。よく〳〵聞けば、嫁もわるいが、おふくろもわがまゝから起る事。わがまゝを謹むが堪忍なり。おもひやりする姑の堪忍は、嫁は今年二十一歳、十三まではむちやくちや、それからさきはわづか八年。わたしが五十八年、世を經たる心の樣に嫁をせんと思ふは、猫を捕へて虎になれ、といふよなものぢやと、何事も堪忍なし、さてまた嫁の堪忍は、嫁に來たればこそ母さんなれ、もとはあかの他人、乳のんだ母のやうではない筈、柿の木の枝に桃はならぬとあきらめて、堪忍すれば、互の堪忍うちあひて、なかむつましく、目がねで嫁のえりをぬき、團扇で姑の顏あふぐ、土用見舞のいもとせも、ます〳〵なかがよい子を生み、ならべてめでたく連添ひ、腰のまがりし姑が、嫁にこゝろよく手を引かるゝも、堪忍くらべしとげたる故なり。なんと左樣ぢやござ

よみはじめ

春もやゝけしきとゝのふ、梅も櫻に花をゆづり、藤に牡丹にあやめも過ぎ、長く延びたる草ざうし、女房形氣の十六編、板元のさいそく、けふも空しくかへし、とやせんかくやと女房形氣の種をさがす折しも、柴の戸あけて入來る女房、むかしの花もどこやらに、人がらよくていきなる前帯、會釋して座につき、「わたしは女房形氣七編の口畫にいでたる、村さきしきぶ小路の吉田屋けん五郎が母なり。わたしがおすゝめ申して、七編から書きなさんした大やきもちの女房は、十五編で片づきたれば、これからは、どのよな女房をば書きなさんす。もし案じが無くば、教へ申さんとてわざ〱まゐりました」京山「それは有難う御座ります。年がよりて氣こんも薄く、思案工夫もつくゐの上、困りはてて居りました」としま「いかさま、お年の故かして若い作者衆よりは筆さきが劣りなさんした」京山「いやもう、面目次第も御座りませぬ。さて教へて下さる趣向はな」としま「間違で間男とおもはれ、その男と駈落はしたれども、操を守りて肌をふれざりし女房、又は上手下手にやきもちを焼きし女氣は書きなさんしたが、まだ嫁をいびる女

し、隱居番頭五兵衞、店の番頭太郎介へも聞かせ、此日暮れてより、駕籠にておへみを呼迎へ、いろ〳〵ありて、おへみ、お糸、めで度姉妹の盃をなし、此日より、藏の後なる座敷をおへみが部屋となし、家内睦しく暮しけり。これみなお糸が直なる心のたけにうたれて、おへみが曲りし蛇も迯去りたるなり。娘子達、お糸が心を針に通して、身の褄を合せ給へ。めでたしめでたし〳〵。

おへみが事は、こゝに終る。なほ又教草なる女房あり、十六編に記し、出版仕候。

かくてお糸は宿へ歸りしに、叔母のおみよも今日の悅に來り、悅の客もありて夜も更ける、叔母は泊り、明る朝飯濟みし時、おへみより叔母へとて使來りし文箱披き見れば、御叔母樣と墨で書き、へ妙ゟ、とは血で書きたる文なり。叔母打驚き披き見れば、

わたくし事此度心底相あらため、此後は人に指をさゝれざるやう身持たゞしくいたし候證の爲、人指指を切つて御目にかけ申候。昨晩指を切つたる時、私懐より、青き蛇飛去り申候。わたくしは巳の年、巳の月、巳の日の生れゆゑ、心くね〳〵しかりしに、心あらため候ゆゑ、蛇飛去りたる事と存じ候。お糸どのゝ、正しき女の鏡に照され、心の曇打晴れ申候。何卒わたくし、お糸どのと、姉妹の盃いたし度候。詳しくはお糸どのより御聞とり可被下候。めでたく〳〵。

御叔母さまへ　　へ妙

トあり、まだ生々しき血文なり。小さき袱紗包あり、開き見れば、くるみたる綿も血だらけなる人さし指、根元より切りたるなり。叔母も萬左衞門もお糸も大に驚きけり。扨叔母が訊ねにまかせ、ありし事どもお糸くはしく語り、「よしや胤は兎もあれ、おへみ樣の腹へ宿りし子なれば、此家の血筋なり。傅育てて、萬太郎が嫁にしたし」と言ひければ、叔母も萬左衞門も感心な

し時、一度ならず二度までも、命を取らんとなされし事覺あらん。おそろしいお方とは思ひしが、悋氣の角に鬼となるは、女のならひと諦め居りしに、あなたが玉の一を連れてお行方知れざる故、叔母御様のおゆるしにて、私本店へ移り、始は妾、今本妻となりしは、あなたのお身持が惡かりし故なり。さすれば今、私が女七人つかひますも、あなたのおかげと思ひます。さてまたこのお子を私が娘にして傅育て、ゆく〳〵は萬太が嫁となさば、胤は兎もあれ、あなたのお腹へ宿りしお子様、德若屋のお血筋も殘る事と、彼方此方の氣兼して、苦勞いたすも私が心一ツ。さて又玉の一は、あなたの毒虫と思ふゆゑ、密に私の叔父寺岡平六を賴み、金子二十兩玉の一へ遣してあなたの手を切り、人を賴み、彼が在所へ送らせて遣りました。是も浮名の立たぬ爲なり。そのお子樣がいとしくば、此後は悋氣と色とのお癖をやめ、お身持正しくなされませ。さすれば旦那へも叔母御様へもお執成し申し、本店へお歸し申し、折々は物見遊山、其子の成人をも樂み給へ」と、折々涙を拭きながら、詞優しきお糸が意見、眞綿で首を締めらるゝ、おへみが辛さ恥かしさ、抱く我子の顏の上、落つる涙に泣出され、我を忘れて胸押開け、坊主頭に似合はざる、膨れた乳を含せけり。

十　五　段

せうな」ト星をさゝれて、おへみは喫驚、「そんなら、私がいたづらして、産落したを捨てたりと、何を證據に知りしぞや」唐紙の内より、「その譯私が申しませう」と、さらりと開けて入るを見れば、横櫛のお時なり。おへみは猶更訝る顔付。お時「御合點が行きますまい。早く申せば私は、このお糸さまに頼まれたまはし者、あなたが此處へ御隱居の始、密に私へお逢ひなされてお頼みには、お前は隱居所の長屋に居る人、隱居へ心安くなるは必定、もしや悪い噂があらば知らせよとありし故、玉の一が事を申したれば、それは根のある事なり、併し今は夫婦の縁も切れたる隱居の身分、男妾もあるならひ、餘所へ浮名の立たぬ樣、心をつけてくれよとのお頼み、それゆゑ媒をいたしました。さて又あなたのお腹、大方それと思ひし故、お糸樣へ申したれば、やれ〳〵情なや、能々の悪縁ならん、おろし薬というであらんが、お年の上なれば命危し、お前がすゝめて安産させ、かやう〳〵にして本家の店へ捨てて下され、私が好きやうに言ひなし、知らぬ振して育てますと、私へも御心附の金子を下されてのお頼み。お前は御存じなけれども、お糸樣が蔭での親切、もしおへみさま、仇に思ひなさんすなえ」と聞いて、おへみはまた喫驚。生みし我子を抱きしめ、坊主頭の顔に袖、何と詞もなく涙。お糸は小紋縮緬の膝をすゝめて聲を潜め、今更申すも恨みがましく候へども、私が小糸と申して新道にあり

ん。萬太郎は今年七ッの一人子、妹にしても恥しからぬ面差の美しさ。事によらば萬太郎が嫁にもならん。何卒私に育てさせて下さんせ」と、桃色縮緬の小袖にくるみし嬰兒を、膝に抱きながら言ひければ、萬左衛門も五兵衛も、お糸が詞を實にもとて、赤子は此夜、出入する者の乳ある女に預け、明る日乳母を抱へ、赤子の肌著に菊の模樣ありしゆゑ、名をお菊とつけ、七夜の祝には、彼の叔母も來りて悅び、客も大勢招き、下部にも本膳食はせて賑はしく祝ひけり。

十四段

爰に又、おへみは此事を聞きて、彼のお時、お市共々打寄り、仕濟したりと悅びけり。おへみは、產後もすら〳〵と肥立ち、今日は彼の子の宮詣なり、如何あらん、一目見たやと思ひけるに、勝手よりお市はせ來り、「もし、本店のお糸樣がお出なされました」ト聞いて、おへみは喫驚。お糸立派なる形にて入來り、おへみが前に手を突き、「これまでお尋ね申したけれど、叔母御樣おゆるしなき故、思ふまゝにならず、餘所氣に打過ぎ申せしなり。今日は拾子のお菊が宮詣、愛らしい笑顏、あなたへもお目にかけたく、旦那殿へも叔母樣へも、かくして連れて參りました」ふへみ「捨子の事は聞きました。此子かいの」ト抱取り、顏つく〴〵と打まもり、思はず落す淚の露。お糸「爭はれぬは親子の面差、瓜を二ッ、其子を膝へ抱上げて、あなたお嬉しう御座りま

此裏の手水場へ行く間、此包こゝへ置いておくれ」ト言ひすてて出でて行く。小僧は「あい」と見たばかり。暫くして「おぎやア〳〵」ト赤子の聲は包の中なり。皆々驚き立寄りて見れば、桃色縮緬の小袖を著せ、張文庫へ入れたるなり。此包を預りし小僧も驚き、しか〴〵の由いひければ、裏の雪隱見て來いと、若い者二人、提灯つけて馳出でしが、立歸りて、「人影は見えぬ」といふ。太郎介「さては此店を見かけて捨てしならん」といふ。猶泣止まぬ赤子の聲に、主人の妻以前は圍者小糸、今は本妻のお糸、店へ馳出で、泣く子を抱上げ、あらため見れば、女の子なり。兎も角もまづ奥へとて連行きけり。此捨子を、おへみが産みたる子なりとは、知るもの更になかりけり。

をならべて手習をして居たるに、入口ぐわらりと開けて、嬶と見ゆる女、「もし小僧さん、

十三段

かくて主人萬左衞門、隱居番頭五兵衞を呼びて、捨子を見せ、如何せんといひければ、五兵衞「御苦勞なさるには及ばず、金子十兩もつけなば、貰人幾らもあるべし」といふ。お糸、萬左衞門に對ひ、「此子に著せたる物を見れば、皆新しく縫立てたる物なり。これを思へば、由緒ある人のかくし子にて、世間を憚りて育てがたく、此家を大家と見かけて賴もしく思ひ、店へ捨てたるなら

お市に知れてはならぬ故、おろして仕舞ひたいと私へのお頼み、あいとは請合ひしが、若い身ではなし、四十近くで墮胎藥、命が危い。お前さへ得心して下されば、私が勸めて帶をさせ、めでたく安産させ申すも、お前の心一ッ。お前の爲には御主人樣、活すか殺すか二ッに一ッ、返事を聞かせて下さんせ」お市これを聞きて、先珠數を火鉢の引出へ納めけり。お市にこりと打笑み、「お時さん、お前私を田舍婆と侮り、何も知らぬと思はんしよが、玉の一が入込むのも、お前が糸を引くも、疾うから知つては居るけれど、おへみ樣今では旦那と縁も切れたる孀女の隱居どの、男妾もあるならひと、何事も知らぬ振、しかし此頃のお腹は知れた玉の一がかたまり、もしや墮胎す樣子ならば、止めやうと思うて居た」ト案に相違の挨拶に、さすがのお時も喫驚なし、これより兩人心を合せ、帶も締めさせ、産婆も呼びて、折々腹をさすらせけり。

十　二　段

かくて當る十月に、安々と産聲揚げしは玉の一が胤ながら、黒目勝にて玉の樣なる女の子にぞありける。是より話ふたみちに分る。それはさておき、德若屋萬左衞門が店の番頭になりたるは、彼のお市が悴孝子太郎介なり。此男番頭になりしより、ひとしほ店の取締よく、のらこくな若い者なく、夜に入りて太郎介が帳合すれば、四人の手代算盤とりて相算をなす。小僧三人机

はあぶない〳〵。それのみならず最早四ヶ月、惡くするとお命にかゝはります。腹帶しめて月を待ち、めで度安産なされませ」おへみ涙を拂ひ、「本店から目あかしに附けておく彼のお市、なに安産がなるべきぞ」とひそ〳〵話の差向、お時も溜息詞なく、しばし思案の體なりしが、「もしあなた、毒喰はゞ皿までねぶれぢや。何もかもお市に打明けて、「あの婆を抱込みませう」おへみ「いや〳〵、田舍者の馬鹿律義、得心せまい」お時「馬鹿律義でも田舍者、小判の二枚も握らすれば、味方につくは必定、おさんは猶更の事、あいら二人を味方につければ、人の來ぬ此隱居所、兎も角も私へお任せなされ」ト惡事ながらも親切なるお時が心、後にぞ思ひ知られける。

十一段

かくてお時宿へ歸りしが、夜に入りてわざと五ツ過に來りて見れば、おさんは臺所に苧を績みかけて俯に寢入り居る。かのお市は、中の間の火鉢に寄りて珠數をつまぐり居る、日課なるべし。お時を見て、「大分遲くお出ぢやね」「はい、お前に折入つて話がある故、お夜食が濟みし頃と思ひて參りました」いち「折入つた話とは何だえ」時「外ではない隱居さんの事、お前の耳へ入れるは氣の毒ながら、火がとまつて最早四ヶ月、相手は玉の一。隱居さんの言はつしやるには、

なし。お時は是を見て、心に蔑視みながら、「駈落をする程の事、お前さんに少しは話のない事は御座りますまい。お心あたりがありますかえ」おへみは暫ありて、延紙取りて涙を拭ひ、鼻うちかみ、「餘りといへば恥しい故、お前にも隱して居たれど、此月で丁度四ヶ月火がとまりし故、いつぞや彼を泊めた時、彼にも始めて話したれば、彼がいふには、能々の惡緣、不便なはお腹の嬰兒、とても日の目は見せられまい、隱すにもかくされぬ事なれば、本店へ知れるは必定、お前はお家の娘、憎しみは私にかゝる、一度ならず二度までも重ね〴〵のいたづら事、どのよな憂目にあはんも知れぬと歎いた故、氣休いうておいたれど、駈落したは此事でがな御座んせう」と當の違ひし推量は、かの寺岡が謀にて、玉の一を驚かし、逐電させしとはゆめゆめ知らざる故なりけり。お時は、おへみが孕みしと聞き顏顰め、「やれ〳〵情ない。圓い頭で膨れるお腹、玉の一が逃げたは尤、お前是から如何なさる」おへみ涙を押へ、「恨めしいは玉の一、仕方のないは此お腹、私にばかり苦勞させ、身をかくしたる人でなし。此上はお前ばかりが賴みぢやゆゑ、どうぞ女醫者の處へ連れて往て、お腹の嬰兒の流れる樣に賴みます。さはさりながら最早四ヶ月め、鼻も少しは出來たであらん。不便な事ぢや」とばかりにて、袖を銜へてしのび泣、お時「もつともぢや、お道理ぢや。併しながら流し藥は若い女の事、お前のお年で

いが、玉の一は如何したえ」守の二「さればさ、十日ばかり以前糠屋六兵衛といふ玉の一が叔父の處から人が來て、使と一所に出て行きしが、其後更に沙汰がない故、師匠の使に今糠屋へ往つて尋ねて見たれば、叔父がいふには、彼奴は見屆けぬ奴ゆゑ、疾より出入させぬ故、呼びには猶更やりませぬと、權もほろゝな挨拶。玉の一は覺悟をして駈落したと見えて、雜物は一つも殘さず、使の男に持たせて行きました。使奴も同腹と見えます」お時「おや〳〵、駈落だね」「さうさ」と立ちながら玉の一が話する後より、「玉や〳〵」と竹の管玉を吹出す物賣の爺を、子供が取圍み、吹出す玉を追廻す玉の騒に、玉の一が話も消えて別れけり。

十段

さるほどにおへみは、お時が音信如何ぞと待ちけるに、思ひの外に早く立歸りける故、おへみ「おや、早かつたね、まだ行かぬのかえ」お時「なにさお前さん、道で玉の一が相弟子の守の一に逢ひまして、詳しく樣子を聞きました。いやはや氣の毒な話で御座ります」おへみ「煩つて居るのかえ」時「それなら好いが、玉の一は玉なしで御座ります」へみ「玉なしとは」時「駈落をいたしました」へみ「エヽ」とびつくり膝すりよせ、「何で駈落、仔細があらん。守の一は何というたえ」守の一が話には斯樣々々と、聞きたる儘を物語りければ、おへみは、三十越えたる顔へ袖をあてて詞

より六兵衞夫婦も悅びて、數々禮を述べければ、平六懷より、おへみ、玉の一の手切金二十兩の請取、密通の謝罪證文一札へ、玉の一が拇印、證人六兵衞が印判捺させ、金子を渡して立去りけり。玉の一が縛られると平六が言ひしは、玉の一を追拂はん謀なれど、身に覺ある事ゆゑ、僞とは思はず、在所へ逃行きけり。

九　段

それはさておき、こゝに又彼の嫉妬女おへみは、叔母の爲に頭剃られて別莊へ押込隱居、年も旣に三十五六、玉の一ゆゑ今の身の上、少しは人にも恥しく、こゝろざしも直るべきに、巳の年、巳の月、巳の日に生れたるおへみ、蛇の性を享けたる女ゆゑに、心直ならず、目の寄る處へ玉の一が、それとも知らず呼込まれ、おへみが下女のお市が肩を揉みたるが、再び邂逅ひし惡緣の始りなり。おへみが月代剃りに來る髮結の女房橫櫛のお時が中宿、おへみが隱居して居る地面の內なれば、人目の關も垣根一重、枕の數を重ねしに、此程は十日ばかり玉の一來らざりしゆゑ、おへみははやり風ひいてかと案じるゆゑ、お時、玉の一が居る歲の一が所へ行きて、樣子尋ねんとて立出でけるに、道にて歲の一が弟子頭に行逢ひければ、お時「おや守の一さん、好い處で逢ひました。今お前の內へ行く處だ」守の一「おゝお時さんか、何の用だえ」お時「外ではな

是なる六兵衛が因もあるゆゑ、不便と思ひ助けてやるのぢや。首の落ちる覺があらうな」と言はれて、玉の一胸に釘、一度ならず二度までも、おへみに契りたる惡事の上塗、重忠樣の名に畏れ、さし俯伏いて詞なく、盆に載せたる蟇、膏の汗を流しけり。六兵衛も夫婦顔見合せ、共に驚き恐れけり。平六「こりや六兵衛、お身も能く聞きやれ。身共の姪のお糸、以前は小糸とて、徳若屋萬左衛門が軒の妻でありしが、今では本妻となり、名もお糸と申すが、一昨日身共徳若屋へ參りしに、主人は留守ゆゑ、玉の一が惡事重忠殿のお耳に入り、かやう〳〵と話したれば、お糸大いに驚き、玉の一が捕はれたらば、徳若屋の名も出で、おへみさまの命にもかゝはる事、どうか仕方はあるまいかと言ふ故、此事を玉の一に知らせ、此鎌倉を逃退かせるより外に仕方なし。それならば、おへみさまの手切として、二十兩玉の一へ遣すべし、是を路用にして立退かせくれよとのお糸が賴、密夫の首がつげて、二十兩にありつくは有難いと思へ。さて又身共が組下の足輕段平といふ者、親の墓參として越後の出雲崎へ參る、幸ひの道連、彼に送らせやるよし申付置きたれば、明日の明方段平こゝへ來るべし。こりや六兵衛、玉の一を少しも早く在所へ立退かせよ。此鎌倉にて繩目にあへば、お主も罪は遁れぬぞ。もしまた玉の一を尋ね來る者あらば、宿へ出入をとめたる者ゆゑ、何事も知らぬと申せ」といひければ、玉の一はもと

敎草女房形氣　十五編下之巻

八　段

さるほどに、寺岡平六はお糸が頼によりて、其明る日玉の一が叔父糠屋六兵衛に對ひ、「何うぢや、玉の一を呼びにやりしか」六「はい〳〵、今朝程お使故、直樣呼びにつかはしました。玉の一身の爲になる事との御口上故、寄付けぬ奴ながら、呼びに遣しました。彼が身の爲とは、何事で御座ります」平六「彼が來てから申聞かせるを、側で聞きやれ」と話の處へ、玉の一來りけり。風呂敷包持ちたる八介、「もし御内儀さん、此包は玉の一さんの雜物で御座ります」と側に置きて出でて行く。玉の一「もし叔父さん、いつぞや叔母さんに道で逢つたゆゑ、お頼み申して置きました。夫ゆゑ呼返して下さるので御座りませう。有難う御座ります」六「これ玉の一、こゝの敷居われに跨がすのではないが、われも知つてであらう、重忠樣のお足輕の頭をお勸めなさる寺岡平六樣、何やらわれに御用があるゆゑ呼寄せよの事、夫故に呼付けたのぢや。平六樣卽ち是にお出遊す」と六兵衛が詞の尾につき、「こりや玉の一、身共は寺岡平六ぢや。さて其方は仕合者、四五日の内に縛上げられ、その首が落ちる處、此平六が聞きたるゆゑ、

事ぢや」

七　段

こゝに又、玉の一は師匠歳の一方にありて、或日朝湯に行きて歸りければ、歳の一が妻、「おゝ玉の一、叔父樣の所からとて此お人が待つて御座る」「左樣で御座りますか」使の男「もし玉の一さん」玉「おゝ八介さんか、御苦勞で御座りやす。何の用だね」「なんだか知らぬが、お前を連れて來いといはしやれた」「さうかね、心あたりが御座りやす。もしお内儀さんへ、ちよつと往つて參ります」と二階へ上り、日外道で叔母に賴みしゆゑ、叔父が呼返す事と心得て、著る物著代へて、身に附きたる雜物一包になし、八介に持たせて立出でけり。

と知らさず、玉の一が手をきりたい」平六腕組したる手をほどき、「いかさまもつともだ。玉の一が手を切るは造作もない事、辻切の一ト打根を斷ちて葉を枯らさん」お糸は喫驚、顔見て平六、「密通したる玉の一、首は疾より無い奴ぢや」お糸「それはお前の武士形氣、可愛相に玉の一ばかり惡いのでは御座んせぬ。「遲かれ早かれ手を切るは金づく、玉の一へ得心させて手を切つて下さんせ」「彼の盲目めに金やるは、犬に蒲燒喰すよなもの。幸ひもとめし備前物、試しかた〴〵たゞ一ト打」お糸「拜むから止しておくれ。お前玉の一に逢ひなさんす仕方があらうか」平六「彼奴が叔父は糠屋六兵衛とて正直ものゆゑ、わしが世話をして御廐へ糠を入れる株を、ちとばかりの金子で世話をした恩もある。叔父の所へ盲目めを呼びつけ、一ツの謀を以て手を切らさん。その謀は」かやう〳〵と耳に口よせさゝやきければ、お糸首肯き、「夫にしても、目の見えぬもの不便なれば、此金子を私といはずお遣んなさんせ」と用意したる小判二十枚渡しければ、平六膝を打ち、「成程、おのしは賤しい藝者でありしが、母へ孝心、こゝろだてが別段ぢや。それ故にこそ此鎌倉で、指に折らるゝ町人の本妻とはなりつれ。今彼の盲目に二十兩やるは、たゞの女でない。感心々々」お糸「目が見えぬからおもひが恐ろしう御座ります」此時下女來り「旦那樣お歸りで御座ります」「さうか、もし叔父さん、今の話は貴方ぎり」「をゝさ、もとよりの

ります。左樣ならば何事もあなたへお任せ申します。あなた能く玉の一や、お時が事を御存じて御座ります」お糸「狩人ではないが、私にも犬があるわな」と打笑ふ。さてお市は、臺所にて晝飯たべて隱居所へ歸りけり。

六　段

かくて明る日、萬左衛門朝よりお出入屋敷へ出でければ、お糸文して叔父なる寺岡平六を呼寄せ、小座敷へ伴ひければ、平六「俄に逢ひたいとは心ならぬ。何事ぢや」お糸「外ではないが、おへみ樣の事」かやう〳〵と、お市が暇の願、又は豫て聞込みたる玉の一が事を語り、一度ならず又もや玉の一が事にて浮名が立てば、此方のひとの顔がいよ〳〵汚れ、世間の口にかゝりて店の外聞も惡し、おへみさんの知らぬやうにして、玉の一が手を切る仕方は御座んすまいか平六「おへみに知れても宜いではないか」お糸「お前も知つての通り、私が圍はれて居た時憂目に逢はせたおへみさん、その意趣返に、玉の一が中を引さくと思はれては殘念で御座んす。わたしが此家の本妻となり、鐵漿つけた耳盥も、下女に洗はす身となりしは、おへみ樣の身持が惡いゆゑと思へば、恩もあり義理もある御方、少しのたのしみは彼方此方の口をとめても置きたけれど、又もや玉の一では此方のひとの顔が汚れる。ぢやによつて、おへみ樣へも私が計ひ

取立てて番頭勤さするお市、暇を願ふは譯あらんと思ひ、其明る日、お市を呼寄せて尋ねければ、お市申しけるは、「俄にお暇願ひますは外では御座りませぬ。あなたも御存じの通り、叔母御様御目がねで、おへみ様の附人になさる時、叔母御様仰やるには、女の一人隱居、まだ三十代ぢやゆゑ、貴様を頼むのじや、萬事心をつけてくれよとお頼の一言、反故にせぬ爲に御暇願ひますので御座ります」—お糸「それではおへみさま、今の名はへ妙さん、身持よからぬ事が出來たのかえ」—お市「はい、わたくしの口からは申されませぬ」—お糸「なるほど、お前は正直な人ぢや此方がいはれずば私がいひませう。彼のへ妙さんが隱居して御座る處は此方の地面、住居は奥にありて表は貸店、その店借の中に床へ出る髪結の女房を頼み、へ妙さんの月代を剃らせる故、心やすく朝夕立入るよし、此女は勤奉公した流れの果、今は横櫛のお時とて、いたづら事の取持、女郎の文の屆け所、惡い奴が入込むと思ひしに、果して玉の一といふ按摩、其方は知るまいが、この玉の一には譯のある事、旦那とおへみさんとは夫婦の縁は切れてある、隱居で身分男妾もあるならひ、よしや玉の一が折節寢泊するとも、其方は知らぬ振、なるべきたけは旦那や叔母様には聞かせたくない。夫に今そなたが暇願ひては、藪をたゝいて蛇を出すよなもの、若しやの事あらば、其方のかはりにわしが皆様へ言譯する」と諭しければ、お市「有がたう御座

「嘘をつけ、叔父の内に居られぬとて此處へ來たではないか。竹の皮の牡丹餅喰つて居ながら」ちんか「違へねへ、お内儀さんに言うたをおれが聞いて居た。守の一さん、玉の一に何ぞ部屋振舞を奢らせなせへ」老人の按摩久とく、小娘たのみて灸すゑて居たるが、「玉の一、蕎麥を三百おごれ。おごらぬと大の艾を松茸の頭へすゑて、燒松茸にして喰ふぞ」「違へねへ」と皆々笑ふ。惡事は千里、況てや弟子同士なれば、此位な事は當然なるべし。

五段

それはさておき、彼の嫉妬女房おへみ、無理に頭を剃られ、別莊へ押込隱居となりしに、おへみが持出したる二百兩の金、いがみの權太が手に渡り、權太狼に喰殺されて、殘りありし財布を孝子太郎介拾ひ、財布の端に印ありしにて德若屋の金と知り、母を連れて財布の金を返しに來り、太郎介は德若屋の番頭となり、母のお市はおへみが隱居所のおもしがてら附人となりし事は、十四編に詳しく見えたり。さて萬左衞門の圍者なりし小糸、今は本妻となりたるお糸、おへみがやきもちにて種々の憂目にあひたる仇を恩にて返す心ゆゑ、時々の衣類はもとより、食物なども心づけけるに、其使は何時も年增の下女、久しくつかふお杉なり。今日もおへみへ使にやりて歸り、「お市、暇を願ひくれよと賴みます」といひければ、お糸おもへらく、悴を

や玉の一が越後から歸りし時、お前德若屋へ義理を立てて玉の一を追出したゆゑ、今では歲の一といふ鍼醫の弟子になり、屋根代出して居るさうな。一旦追出したゆゑ德若屋への義理は立つ、呼びかへしてやりなさんせ」六兵衞「いや、ならぬ、金滿家の內方をそゝのかし、二百兩持出させ、在所へ連れゆかんとしたる不敵物、盲目でなくば、どんな事しやうも知れぬ。それのみならず、去年の秋から重忠樣の御廐へ糠を納める株にありついた時、お世話に預りし寺岡平六樣、あとで聞けば德若屋の今の內方お糸さんの叔父御ぢやさうな。是へも一ッの義理あれば、玉の一は此後も敷居は跨がせぬ。さう思つて居やれ」とは、糠屋なれども物堅き男、人は斯くこそありたけれ。

四　段

さて玉の一を弟子になしたる歲の一といふは、裏店二軒を一ッにして住ひ、女房も子もあるものなり。毎日何程と定めたる飯料出して居る弟子、玉の一とも六人、二階住居の打込、盲目ばかりなれば、塵埃、蚤、虱、思ひやるべし。弟子頭の守の一、「これ玉の一、此二階から羽織著て療治に出るはおのしばかり、何で工面が好いと思へば、好い處の女隱居にくつついたさうな。大方小袖も拵らへて貰つたらう」玉の一「なに、是は叔父がくれたのだ」髭を脫いて居たる上せい

へ心にかゝるはおへみが事、頭剃らせて別莊へ押込隱居、わしを恨むかして便もせぬが、噂を聞けば、おへみが連れて逃げた玉の一、この鎌倉へ歸りしと見えて、見かけたといふ人がある。お前方知らずかえ」夫婦口を揃へ、「一向に存じませぬ」叔母「彼の淫奔女も、今度は目が覺めつらん。今の姿で心を改め、二三年温順くして居らば、此家で一人の血筋、お糸が姉にして、本家へ歸し、隱居させて下され」お糸「それは、私が願ふ所」萬左衞門「心さへ直らば、二三年待つには及びませぬ」といろ／＼話す内、時移りければ、お糸が獻立いひつけたる、叔母へ馳走の晝飯の膳、下女が持出でたるは、能代の會席膳に黑の丸椀、向附は針魚の細づくり、萌しの紫蘇、絞生薑の三杯酢、汁は蓴菜田舍味噌、椀盛は鯛のしんぢよに松露の薄剝、引菜は約束の鮎の照燒、杢兵衞が青磁の手鉢にたつぷりとあり、香の物は奈良漬の茄子細にたゝきたるなり。凡て老人の叔母が齒にかなふ獻立なり。これを心一ッにて申付けたるお糸、その平日を知るべし。さて萬左衞門へも相伴の膳持來りぬ。

三　段　話ふたみちにわかる

それはさておき、好色盲目の玉の一は、糠屋六兵衞が忰と思ひて十一編に記したるは、作者が聞過りにて、實は叔父なり。或日六兵衞寢酒呑みて居たりけるに、つまのおよね「もしいつぞ

二　段

此叔母のおみよ、年は六十に近けれども、嫖致が好きゆゑ、まだみづ〳〵と見ゆる大年增、先代の萬左衞門が妹にて、同じ程なる金持へ、十九の時嫁入して、二十七の時後家となり、十三の悴を傅育て、身代を減さず、今は悴に嫁も孫もあり、萬事拔目なく、男まさりの女ゆゑ、德若屋にては、一人も頭の上る者なし。今來りし裝を見れば、糸織縞の小袖、小紋縮緬の下著、渡緞子の帶、加賀紋の綿入羽織、帶に差したる筒提の烟草入は金更紗、金具は銀の彩繪の都鳥、裏座は金無垢、はるあきの銘あり、緒〆は金水晶、筒は一樂なり。此扮裝を見ても、徒の婆樣とは見えざりけり。お糸は、夫と見るより笑を含みながら、「おや〳〵能ういらつしやりました。餘り御無沙汰故、今日は上りませうと存じて、髮を結はせる處で御座りました」叔母「左樣かえ、天氣が好いから觀音樣へ朝參の歸りさ」萬左衞門「道理でお早う御座りました」と是より鮎を貰ひしを、お糸に持たせやらんとしたる事を語り「鮎は此所にて御馳走申さん。ゆる〳〵お出あれ」と夫婦取囃し、萬太郎が國盡の清書など見せる。叔母のおみよ淸書を褒め、お糸に對ひ「此方が此子をまうけたと聞きて、おへみがひとしほの嫉妬、此方もわしも苦勞しましたれど、今本妻のひろめもすみ、此子も健に育つを見るは、わしが爲には壽命の藥、それに引か

教草女房形氣　十五編上之卷

初段

およそ人の家にて、主人朝寝が好きなれば、福の神は眉を顰め、貧乏神は笑をふくむといへり。徳若屋萬左衛門は、家督受取りしより、家質の地面二ッ流込み、外にも地面二ッ殖したるほどなれば、朝寝はせず、六ッ半頃夫婦朝飯を仕舞ひたる時、圍置きたる小糸、今は本妻のお糸が叔父、秩父殿の足輕小頭寺岡平六より手紙に肴、萬左衛門披き見れば、組下の者四五人玉川へ參りたる網の鮎貰ひし故、差上げ申すとの文言なり。時しも春の末なれば、珍しき汲鮎なり。今朝肴屋が置きて行きたる大板の蒲鉾三本、肴籃の移に入れ、お糸より返事の文して返しけり。さて萬左衛門女房お糸に對ひ「叔母樣へ久しく無沙汰をした故、此鮎を持たせ、萬太郎を連れて機嫌きゝに往かつせへ」お糸「左樣さ、私も左樣思ひました。コレ竹や。坊はまだ寝て居るか。早く起せば好いに、癖になるよ」と今年七ッの萬太郎を起させ、顔洗はせ、飯喰べさせ、年増の下女に、萬太郎が月代剃らせる內、お糸は鐵漿つけ、髪結はせんとする處へ、下女來り、「旦那樣、叔母御樣お出なされました」と知らせる後より、叔母のおみよ入來りけり。

今は昔鎌倉にて、土一升金一升といふ所にて、五間間口の格子造、德若屋萬左衞門とて、質と兩換なれど、質は三十兩以上、兩換は大判小判なり、屋敷方に金子の御用きく所大あたま四五軒あり。あちこちより賜る御扶持にて、上下二十四五人の暮しに澤山なり。今の主は家の番頭なりしに、この前の萬左衞門目がねにて一人娘のおみのの婿となりしは二十七歳の時なり。このおみの、後におへみと名をかへしに、子なき故に圍置きたる小糸が事を聞出して、小糸を妬み、二度まで殺さんとしたる、大やきもちの事ども、おへみわがまゝをなし、亭主を尻に敷くを、萬左衞門尻に敷かれて居るは、昔はよその手代を勤めしに、養父萬左衞門の目がねにて、今この家の主になりし恩を忘れざる故、此家に生れたる女房とて、勘忍して尻に敷かれて居るなり。抑この大やきもちにてわがまゝなるおへみが事は、この女房形氣の七編より始まり、色々種々の事ありて、今十五編に至れり。初より讀まざれば、この十五編もわからぬ事あるべし。願はくは初より御覽あれかし。

らき、或は筆を採る。かくて在歴しは、頭まろめしより十五年の夢未だ覺めず、今年八十五歳になりても、猶乳臭き草ざうしの筆を棄てざるは、東家に三編、西家に五編、拾ひ集めて三百三菩提、これは夢かや現世かや、と梅がえが意見の種を蒔きて、歳々生ふる教草、女房形氣の十五編に筆を拭ひぬ。

嘉永六丑三月稿成　八十五歳

同　七寅初春發市　京山

自序

おのれ京山、唐人の稀なりといひし七十の時、めでたく浮世を仕舞ひて頭を圓め、五斗米に腰を折りたる袴を蟬脫て、袖なし羽織に投頭巾、猿も拾はぬ澁柹の身にしあれば、山にや入らん、そは殺に疎く、水にや寄らん、さて船が嫌なり。必ず山の奥ならずともと詠みたる歌主を地主と恃み、土藏の後に巣を造りたる方丈の鼠壁、猫の額ほどなるを書齋とも、茶室とも謂ふ人に任すべし。土一升金一升の地面なれば、鄭老が七松も庭に見えず、陶隱が五柳も門になし。蟻穴の一亭に献之の竹は植ゑつれども、舌切雀の塒に足らず、お宿は何所ぢやと訪ぬる人の無きは、なか〳〵に閑寂の、小自在釣釜に山林の松風を聞き、瓶花に浮世の春を知る。柴の戸近き髫髪らが、朝な夕なの音曲も耳なれぬれば、隣の庭の蟬の聲、況してや駒ひく鈴の音、車やる懸聲、松魚や〳〵、犬の嚙あひ、兒曹が遊ぶ太鼓の音、婆々が勸化の叩鉦、市喧街鬨、僅に牆一重を隔てて、かま〳〵しけれど、さすがに亥時の鐘すぐれば、四鄰寂として聲無く、稍々韻士の時至りて、心しづけく燈火に對ひて文をひ

此儘に別れやうかと、いろ〳〵に思案する。是悪いと知りつゝ迷ふなり。是に限らず、こんな處が肝腎の辛抱どころなり。愼まざれば、身を滅すの種蒔なり。おへみは玉の一が爲に谷へ落ち、辛き命を助かり、二月あまり一ツ目熊右衛門が女房となり憂目を見たるを、萬左衛門が情にて、熊右衛門が手を切り、叔母が計ひにて頭は剃られたれど、別莊の樂隱居、是等の事を思ひて、兎や角やと思ひて、更に物言はざりし處へ、お市唐紙あけて、「もしおへみ樣、本店のお使が歸りました。重箱は彼のまゝ返しませうか」おへみ我を忘れ「あい、紙を入れて返しな」お市「はい」と唐紙たてて行く。玉の一はおへみが肩を揉みながら、人の噂に聞きし事もあれば、もしやとおもひしに、おへみさまと呼ぶ名を聞き、唐紙たてた音を聞き、肩揉みながらおへみが耳へ、「谷へ落ちたあなた、夢なら覚めたく御座りませぬ」おへみ「お前ゆゑに斯うなつた」と玉の一が手を取り、剃立の頭さぐらせる。玉の一おどろく。お市唐紙開けて、「重箱のおうつり紙下さいまし」作者曰 これより後、おへみ玉の一が事、又は太郎介が事にも一つの話あり。或は小糸おへみへ仇を恩でかへす實義の事、この次の十五編にしるし、引つゞき出板仕候。めでたし〳〵。

て療治に念を入れゝば、小遣に困らず、羽織も著るやうになり、官にも進むべし。されど、白木の杖ついて年のよるは澤山にて、塗杖つくは少しと、さる鐘木杖つく人の話なり。

十四段

それはさておき、おへみが隱居して居る所は、鎌倉も場末にて、德若屋の別莊、表は長屋ありて奥に住居あり。彼のおへみへ附人のお市、賴まれし仕立物にて肩がはりしとて、或夜按摩の聲を聞き、飯焚の爺を賴み呼入れて揉ませながら話するに、才發なる者と見えて、其挨拶面白し。この聲を唐紙隔てておへみ聞くに、どうやら聞馴れたる聲ゆゑ、唐紙細く開けて見れば、連れて逃げたる玉の一なれば、びつくりなしけるが、元の座にかへり、小女を呼び、「わたしも揉ませやう。お市が濟んだらあの按摩、此處へよこしな」とは、よく〳〵の惡緣なりけり。

十五段

かくてお市を揉仕舞ひければ、小女、玉の一をおへみが側へ連來り、「按摩さん、旦那さんを揉んで上げな」玉の一「はい〳〵」と膝すりよせる。下女は唐紙たてて行く。玉の一は少し見えたれど、いろ〳〵の憂目に遭ひて、今は更に見えざるゆゑ、おへみとは露知らず、肩を撫りながら、「大分おはりなされました」と揉みおろす。この時おへみは心の内に、聲をたてたら聞知らん、

とぞ。今は六十二にて正直一偏、目前のきかざるは田舎育ゆゑなるべし。されば、おへみが又悪さしたるも、始は知らざりけり。

十三段

それはさておき玉の一は、糠屋作兵衛方を追出されて、せん方なく鍼をたてて按摩を取り、年も五十を越え、女房も子もある歳の一といふ者の方へ至りて弟子となり、一日百三十二文の雑用にて二階住居、同じやうなる弟子四人とも、毎日毎晩按摩に出でけり。玉の一は從來の旦那場もあれども、おへみが事にて寄付く事ならず、以前にかはる木綿布子、されども顔が綺麗で、口先おもしろき故、一度呼ばれた所にては、聲を聞きて又呼込まるゝやうなれば、同じ二階に居る按摩より錢廻よく、折々は買食などして仲間に振舞ひければ、新参なれども玉の一には、盲目ども一目おきけり。これ玉の一が、才發なる故なり。この才發害となりて、おへみとも悪さしたるなりけり。男振好くて、口先おもしろくて、身を亡す若き人まゝあるものなり。是は心ふは〳〵して、深き思案なきゆゑなり。若き人、此處をよく〳〵反省て、いたづらすべからずと、或老人いへり。さて又按摩を呼込み、肩を揉ませながら默つて居れば、大方は居睡する故、話しかけければ答へたばかり、世辭の詞もなく、又しやべり過ぎて嫌な奴もあり。此處を辨へ

る事ゆゑ、萬左衞門諫にまかせければ、五兵衞、太郎介親子に掛合ひしに喜びて得心なし、太郎介より在所の親類へ、しかぐ\のよし狀にしたゝめ、あとしきを賴み、太郎介は店の手代、母はおへみが附人となりけり。

十二段

かくて太郎介を店へ使ひて見るに、大庄屋の手代を勤めたるゆゑ、算盤とらせても、筆をとらせても、ありつきし若い者よりは遙に優り、新參なればといふ心にや、臺處にて飯をくふにも、年下の二才が次に坐る。才智ありて差出ず、柔和にて物數言はず、されども世辭がよく、お負に男ぶりもよきゆゑ、下女までが受がよく、惣菜の鰤の切身も、太郎介には大きなをつける程なりけり。さてまた、太郎介が母お市は、おへみが附人となりけれども、萬左衞門より家内へ言渡し、客分とあれば、お市さんく\と呼ばるれども、是も太郎介と同じく、少しもたかぶらず、下女と同じく働きけり。されどおへみが方には針仕事もなく閑なるゆゑ、「木綿物などあらば、可くはないが仕立てませう」と、本店の年增の下女にいふ故、店の丁稚が仕著物縫はせて見るに、給金やりて使ふお針よりは丁寧なるゆゑ、後には小糸が張反の物なども仕立てさせけり。田舍者には不思議と思ひしに、能く聞けば土地の縣守の奥にて、二十八まで吳服の間を勤めし

り。此後玉の一が行方次にしるす。

十一段

それはさておき、徳若屋の隱居番頭、主人萬左衞門に對ひ、「さて太郎介親子、私方へ留置き、彼方此方見物させ、夜は在所の噺など聞きまするに、太郎介は前髮の頃より大庄屋へ奉公いたし、算筆なども出來ます樣子、此鎌倉へは始めてぢやと申しますで、ならう事なら此樣な結構な所で、母にも米の飯喰せたいと申し、母も亦申すには、冬になれば山のいぬの鳴聲聞きてくらさんよりは、朝晩三味線聞きて死にたい事ぢやと申します。扨貴方の仰やるには、百七十八兩態々持來りて返したる實義といひ、親に孝心なる人ゆゑ、七十八兩は太郎介へやるとの事、いかさま御尤では御座りますが、右申す如く、親子が此鎌倉で暮したいと申す故、私思ふには、店の忠兵衞は在所の家督いたす男、最早長くは居りますまい。その跡へ直す番頭、吉藏では覺束ない。彼の實體なる太郎介を召抱え、一二年店へ置き、見慣はせて、帳場をお預けなされ。今おやりなさる七十八兩を店で廻して、利分は給金の外物。さてまた母は、別莊の御隱居おへみ樣へ客分として、萬端店より賄ひつけおかば、貴方方も御安心、私目にはまだ頭の丸い行儀とは思はれませぬ。今つけ置く女は見居けられませぬ」ト流石大家の隱居番頭、もつともな

なが、越後は何處と尋ぬるゆゑ、此方の人が詳しく敎へたが、如何なる事かと案じて居た內、遙後在所よりの便に、玉の一は此方へ來たと聞きて安堵した。連れて逃げたお內儀さんは如何した」玉の二「道で山賊に逢ひし時、お內儀さんは谷へ落ちたから死なれましたらう。それから私は一文なし、按摩をとりて、やう〳〵在所へ歸りしが、米の飯が忘られず、最早一年半も經ちし故出て來ました。お世話なされて下されませ。叔父樣はお留守かえ」「あいのう、今鹽風呂へ行かさんした。飯は如何ぢや」「はい戴きませう」「そんなら待ちな」と天麩羅とゝのへ來りて、茶漬食べさせければ、玉の一久振にて、此所の天麩羅食べるとて喜び、茶漬四杯に五十錢の天麩羅ぺろりと食べ、指で楊子をつかうて居た處へ、叔父の作兵衛歸來り、「玉の一か、わりや何の面下げて來たのぢや。德若屋の內方を連れて駈落なし、わが首には墨が引いてあるぞよ。一日もおく事ならぬ、出て失せへ」と腹立つ高聲、女房さま〴〵とりなしけれども許さず。玉の二「其樣に言ひなさる事はねへ。世間にもある事だ」「なに、ある事だ。ふて〴〵しい」と襟首摑み引倒し、握拳ふり上ぐる手に縋り、米「かはいさうに目の見えぬ者、まア〳〵量見なさんせ」と押止め、「行所もあるまいに、兎も角も此方へとゞめ」作兵衛「行所はいくらもある。仲間の座頭の家へ一日の食雜用入れさへすりや、何所でもおく。併し此近くへは置かぬぞ、さア出て失せい」と追出しけ

聴かざる四ツ足は、太鼓に張られて百たゝかれるも、親のばちなり。愼むべし〳〵。

九　段

さるほどに太郎介、酒は嫌ひとて呑まず、燒物塵紙へ包み、箸をおきて其儘歸らんといふを、萬左衞門も五兵衞も止めければ、「木賃宿へ殘しおきたる母へ、此お燒物を早く食べさせん」といふ故、「母も迎にやりて馳走なし、兎も角も先五兵衞方へ逗留なし給へ」と無理に止めおき、手代をつけて毎日鎌倉見物させし中に、母が目には、女の輕技に目を驚かしけり。田舍者には、芝居は分らず、輕技には驚く筈なり。此親子が成行に一ツの話ある事、次にしるすべし。

十　段

爰に一ツ話の脇路あり。彼の玉の一が越後國より十六の時此鎌倉へ出でて、二十二まで養はれたる叔父は、糠屋にて作兵衞といふ正直者なりけり。或時作兵衞が留守に女房お米、下女もつかはぬ暮なれば、行燈の前に飯櫃置いて夜食たべて居たる時、糠屋と書きたる障子を開けて入りたる顏を見れば、玉の一なり。およね驚き、「おや玉の一、見れば旅の姿、在所から來たのか」玉の一「はい」よね「サア〳〵上んな。如何したのぢや。おのしが駈落した明る日、みる目屋かぐ七といふ人が來て、玉の一は德若屋のお內儀さんを連れて逃げた。聞けば越後の生れさう

が、今お噺申す通り、首と腕とを葬り、石塔建て、百ヶ日までの營をなしたる費用を引いて、殘の金子百七十八兩御請取下されませ」と木綿の財布より取出し、書付三枚添へて出し、「これは使ひし入用の請取で御座ります」と差出しければ、萬左衞門膝を打ち、「やれ〳〵お前は正直なるお方、感心いたします」と褒めければ、側にありし叔母のおみよ、小糸、番頭五兵衞夫婦も、口々にほめにけり。太郎介、萬左衞門にむかひ、「今も申します通り、金子を拾ひましたは去年の冬なれど、一人の母が年來善光寺へ參りたいと申すゆゑ、春になり、此金子を返しながらと存じ、遲くなりました。長い旅にも此金をつかひますまいと、親子二人一錢二錢の物貰をいたしました。やれ〳〵嬉しや、お返し申して安堵いたしました。御面倒ながら金子の請取下されまし。お暇申します」といふ。萬左衞門はじめ、いよ〳〵正直なるに感服なして押留め、飯時なればとて、今日の有合は幸なりとて、本膳は小糸がするゆゑ、燒物は隱居番頭の女房、萬左衞門盃を始めて饗應しけり。これ熊右衞門が騷すみて、半時たゝぬうちの事なり。思ふに熊右衞門は、平六に縛られ、太郎介は、地面も澤山ある金持の女房が、膳をはこびて饗應にあふ事、善惡のかはるは雲泥の差なり。惡をするは、惡と知りつゝするなり。惡念おこる時は愼むべし。たま〳〵人と生れて、人がましからねば、人に生れし甲斐なければ、四ッ足なり。親の意見も

人々も顔見合せていぶかり、叔母のおみよ、「又おへみが事ぢやないか」萬左衞門「コリヤ忠兵衞、様子きいて見やれ」といはれ、熊右衞門に胸ぐらとられて、こづかれたるあとの痛も止まぬうち、迷惑ながら主人のいひつけ、せん方なくて、勝手へ立出でけり。

八　段

腰掛けて居る男を見れば、窶れたる旅の姿の木綿もの、二十六七の小男、顔付も優しければ、忠兵衞まづ安堵なし、様子訊ねければ、「私は木曾街道猿橋の近き處有賀野村にて、太郎介と申します水呑百姓で御座ります。此方様へ態々お尋ね申したは、拾ひましたものをお返し申しに參りました。此品に覺が御座りますか」と懐より、彼の胴巻を取出し見せければ、忠兵衞よくよく見て、「是は此方の品なり、此處に店の押切判もあり」太郎介「それ故にお尋ね申しました。貴方は旦那様で御座りますか」忠兵衞「いや私は、店を預る手代忠兵衞といひます」太郎介「左様ならば、旦那にお目にかゝり、お渡し申します金子が御座ります」といふ。忠兵衞奥へ入り、このよし萬左衞門へ告げ、胴巻を見せければ、打驚き、「こりや、おへみが二百兩偸去りし胴巻なり。その人を此所へ」と聞きて忠兵衞、中の間へ太郎介を連行き、萬左衞門始めての挨拶を聞きて、太郎介ありし事どもつゞまやかに語り、さて言ひけるは、「此胴巻拾ひし時は、百八十五兩ありし

教草女房形氣　十四編下之卷

六　段

さるほどに寺岡平六、一ッ目熊右衛門を柱に括しおき、手紙を認め、德若屋の下僕に吩咐け、主人重忠殿の對相役へ持たせやり、返事の來る間に、今日の馳走に逢ひけるに、此日は萬左衛門が叔母おみよも、隱居番頭夫婦も、振舞に呼ばれ參り居たりし故、皆々、平六來合せ、熊右衛門を縛り、五十兩をも取られざりしを悦び、口を揃へて平六に禮をのべけり。さて平六が手紙の知らせによりて、重忠殿の屋敷より、足輕十人、小僕十人、駕籠一挺持來りければ、熊右衛門に足枷、手枷をかけて駕籠へ入れ、平六、足輕小僕を引連れて歸りけり。後に聞けば、熊右衛門は國へ下し、刀の錆になりしとぞ。

七　段

熊右衛門が騷やう／＼濟みて、家内打寄り、祝とて叔母を上客にて、五兵衛、忠兵衛も吸物膳を控へて居る處へ、下女來り、「旦那樣、田舍よりとて旅の姿の男が參り、旦那樣にお目にかかりたいと申します」萬左衛門は、熊右衛門をたッた今追出したる後へ、又田舍者と聞きて、

一楽



をしへ艸
女房形気
十四へん下

る時、作事の役所にありし金子二十三兩、盗取りて行方知れず。汝ゆゑに疑かゝり、迷惑する者今にあり。見あたり次第何處にても捕へよ、手むかひなさば切捨てよと、重役より同役へも豫ての命令、此所で逢ひしは天の網、此首洗つて待つて居よ」と鐵骨の扇にて、かつきと打てば、頬しかめる。平六は打笑ふ。人々心地よくぞ見えける。今日は萬太郎が誕生とて、人々膳に坐りし時、かゝる忌しき事あるも、かのおへみが心一ツの爲す業なり。このおへみが人でなしの事、なほ末に記せり。心ありて讀まば、いましめともなりなんかし。

た處を、私が仔細あつて所を立退くに就いて、おへみを人手に渡したが、後で聞けば、おへみを安く引上げたはかぐ七が計略。今彼奴が所へ往つたれは、旅の留守と女房がいふゆゑ此所へ來た。おへみを渡すか、百兩出すか。但し又强請騙と名をつけて突出すなら突出せ。おれが首には幾つも條が引いてあるわへ」忠兵衛「いかさま、かぐ七から噺は聞いた。始め懸合をつけたかぐ七、旅から歸るを待つて下され」「篦棒め、旅から來た熊右衛門、歸りを待つて居られるものかえ。サア亭主を出せ」と胸ぐら把りてこづきまはせば、忠兵衛咳を喘きながら、「手荒くては懸合の仕樣がない。此所放さつしやれ」ト、放せば忠兵衛意氣地なく衣紋つくらふ。萬左衛門物蔭より差招き、忠兵衛に何か囁きければ、元の座に歸り、三十兩にて手切の一札取らんと懸合ひしに、熊右衛門足元を見て得心なさず、いろ〳〵掛合ひて、五十兩にてやう〳〵首肯かせ、一札書いて五十兩渡さんとしける時、小糸が叔父、重忠殿の足輕頭寺岡平六、今日の客に招ばれ、最前來り、物蔭より見て居たりしが、唐紙開けて入りたる顏、熊右衛門見て喫驚、逃げんとするを平六飛かゝり、柔術免許の大力、取つて投げすゑ羽がいじめ、「繩を〳〵」といふに、忠兵衛用心繩差出せば、高手小手に縛りけり。平六、熊右衛門を柱に括りつけければ、萬左衛門始め悅ぶ事かぎりなし。平六、熊右衛門に對ひ、「汝は角介とて、身共屋敷の作事の小使なした

ば、態と苞になし、荷物に入れて擔ひ、母は笊の中より杓柄を出し、往來の人に一錢を乞ひて、百七十八兩に手をつけざるは、親も子も珍しき賢人なり。

五　段

それはさておき、德若屋萬左衞門は、みる目やかぐ七を賴みて、一ツ目熊右衞門方よりおへみを取戻し、おへみが叔母の計ひにて、おへみに髮をおろさせ、別莊へ押込め、小糸今は本妻にて、心たゞしく勝手を治め、家内めでたく暮しけるに、今日は小糸が生みたる萬太郎が誕生日とて、店の小僧まで燒物つけし膳に坐らせける時、案内もなくつか〱と入りたる男を見れば、廣袖に細帶の大男、月代延びて髭を生し、片目ばかりの惡でくなり。番頭忠兵衞「挨拶もなく、中の間までつか〱と來た此方さんは、何所の人だ」「いかさま、面は知るめへが、名は聞いたらう。一ツ日の熊右衞門だ。此所へ來たは外でもねへ、此家の女房おへみ、盲目をつれて駈落なし、ところばり峠で山賊に出逢ひ、谷へ落され、狼に喰殺される處を、私が鐵砲で狼を打殺し、おへみを助けて連歸り、宿を聞けば、とても宿へは歸られぬといふゆゑ、然らば何處へなりとも行けといへば、錢一文もないといふ。そんならおれが女房になれ、なりませうとて相對づくで一ツ夜具。其後此鎌倉から、みる目屋かぐ七といふ野郎が來て、おへみが手切百兩と値のなつ

の一を連れて逃げたる時、爲換の金二百兩持ちのきてつかひ、また權太が手に渡り、山賊にこしらへたる者共に、骨折代に分與へたる殘なり。胴卷を財布に畫くは、見つきよからん爲なりけり。さて母胴卷を手に取りて見れば、縹色縮緬にて、口の所へ白き切を縫ひつけあり。母は目がかすみて見えずとて、太郎介に見よといふゆゑ、行燈に寄せ、熟と見て母にむかひ、「丸の内に德若屋とあり、右に小く鎌倉とあり、左にはとく町とあり。これは鎌倉のとく町といふ所の、德若屋といふ商人の店の押切判ならん」母「それに違あるまじ。その胴卷にありたる此百七十八兩は、德若屋の金なるべし。出た處の知れたる此金、おのしは何と思やるぞ」太郎助「今も申した通り、在所知れたらば、身寄へ返さんと、首に對ひて約束致したれば、此金を鎌倉へ持行き、德若屋へ返さゞれば、首への約束違ひます。さりながら鎌倉へ往來の日數かゝる內、此寒空にむかひ、母人をたゞ一人留守させ申さんは心ならず。夫よりは春を待ちて暖になりし頃、年來お前が參りたいと言はしやる善光寺へお連れ申し、その歸りに鎌倉へ至りて金を返し、鎌倉をも見物おさせ申さんと存じます」母「いかさま、それは宜からう。しかし、がく〳〵する私が足では」「イヤ、私が可い樣にしてお連れ申します」と春を待ちけり。かくて春にいたりて、花の頃に至り、留守は親類に賴み、笊を作りて母を入れ、かた〳〵には荷物と百七十八兩の小判を

を貰ひ、寺へ至りて葬り、戒名もらひて歸りけり。狼に喰れたる權太は、姉を谷川へ突落したる程の惡人なれども、善人の太郎介に死骸を拾はれ、戒名つけられしは仕合なり。是に引かへ弟の權太が爲に谷川へ突落され、海へ流されて鮫の餌食となりし下女おひよのは如何なる因果ぞや。思ふに彼のおへみ、小糸を憎み、二度まで殺さんとしたるも此おひよのが勸なり、又は玉の一にくるひ、二百兩を偸み、玉の一を連れて、亭主をすてて駈落したるも、おひよのがおへみを勸めたるゆゑ、弟と違ひ、その死骸善人には拾はれざりしならん。それはさておき、此日太郎介が母は、手間取る事ありとばかり言ひすてて行きたる太郎介、日の暮るゝに歸らざるゆゑ、如何なる事にやと案じけるに、やう〳〵歸來り、旅人が狼に喰れしを見つけ、斯樣々々と、寺へ葬りたる事までを詳しく語り、さて又胴卷の金を拾ひ、死骸にむかひて斯樣々々に言ひしと物語りければ、此母も凡々ならず慾に耽らぬ女ゆゑ、暫く思案の體なりしが、打首肯き「よし〳〵、死骸に對ひて金子を借受け、身寄の人知れたる時は、金子を返さんと約束なし、其金子にて葬り、石塔立てて菩提をいとなまば、死んだ人もうらむまじ。金子の事は人に隱すとも、道ならぬ事にもあるまじ。して金は幾許ある」太郎介「まだ見ませぬ、金は是ぢや」と肌につけたる胴卷より取出してあらため見れば、小判百七十八兩あり。是は彼の嫉妬女房おへみ、玉

郎介、薪採にか、早く稼ぐな」「はい。いや申し旦那、ごんどの原に、旅人が山のいぬに喰ひちらされて居りましたを見付けました。見届けて下さいまし」「ヤレ〳〵又喰れたか。猟人達を集めて狼狩せにやなるまい」太郎介「さて山のいぬに喰れた死骸は、私がお貰ひ申したく存じます。其仔細は」と心に思ふ事語りければ、庄屋得心なし、太郎介がこゝろざしを褒めにけり。山中には狼人にかゝるは度々ある事なれば、庄屋さのみは驚かざれども、村の小頭呼集め、彼所に至り、太郎介が言ひし菅笠を取除け見るに、彼が申したるに違はず、首と腕ばかりあり。小頭いぶかり、「庄屋どの、いかな狼でも著た物まで喰ひはせまい。何か殘りさうなものぢや」庄屋「いかさま、不審は道理ぢやが、今狼が子を育てる時分ぢやから、首をば喰切り、體を輕くして、著る物著た儘で銜へて往つたのであろわいの」「いかさま左樣ぢや」庄屋「皆の衆や、例の通り縣樣へお屆け申し、詳しい事を、此所へ高札にして建てざなるまい。道々も話した通り、首と腕は太郎介にやるのぢや。それにしても見付けた主の太郎介、何故此所へ立合はぬ」といふ處へ、太郎介すた〳〵來りければ、庄屋「わりや何所へ往たのぢや」「はい、樵に出たまゝで、歸りが遲ければ、母が案じますゆゑ、知らせに參りました」人々口をそろへ、「日ごろの孝心、感心感心」さて太郎介は念の爲とて、庄屋より、首と腕とは旅人の狼に喰れたるなりといふ書付

心故と知られける。偖太郎介立寄りて小判を胴巻に入れて懐へ慥と收め、首と腕とを寄せて菅笠を冠せ、邊の草を根拔にして假に埋め、鴉の用心をなして、獨語に、「何處如何なる人か知らねども、山のいぬに命を取られしならん。人の知らざる先に我が見付けたるも、過去性の因緣ならんと思へば、首と腕を我寺へ葬り、戒名つけて佛事を營み申すべし。是御身が冥途のため、一ツには去年亡せたる我が父親の菩提の爲とも思へばなり。さて又何程あるか知らねども、此金子は我に貸し給へ、我貧苦なれば、御身が佛事の入用、石塔立てる代にもなすべし。併し此事人に語らば、わが思ふ如くならざる事もあるべければ、人には隱置くべし、もしや御身の在所知れたらば、金子は身寄の人に返すべし。南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛、南無阿彌陀佛」と回向なし、死骸の有樣見屆させんと、庄屋方へ馳行きけり。

四段

尊き寺は門から知るゝ。庄屋の構は垣根から、棕櫚の植込茨垣、鋏の見ゆる折廻し、わが山より伐りし冠木門、落葉庭掃く作男、下女は板の間拭いて居る、まだ朝飯も濟まぬ頃、娘は起出て朝手洗、「申シ父さん、夜半に大分山のいぬが鳴きましたな」主人甚兵衛「をゝさ、此頃は子をそだつるで里近く出てならぬ」ト話の折から勝手口、太郎介腰を屈め、「旦那お早う御座ります」「をゝ太

の金百八十五兩の行道につきて、一條の物語ある事左の如し。

二　段

かくて其頃、木曾街道なる有賀野村といふ所に、孝子太郎介といふ者ありけり。前髪の頃より大庄屋に奉公なし、二十六七に至りて算盤も手も達者なれど、兩親年の寄るにつけて、心よく養はんとて暇を取りしに、其後父親久しく煩ひけるに、太郎介水を浴びて神佛に祈り、馬一匹持たぬ貧しき百姓なれば、奉公の中著貯めたる衣類をも賣拂ひて、人參までも呑ませけれど、空しくなりて後は、一人の母にも孝を盡して勞りけり。

三　段

かくて或日、太郎介薪を採らんとて、人は未だ起出でざる朝の程立出でけるに、常と違ひ群る鴉は合點ゆかずと立止り、彼方此方見けるに、草の中に光る物あり。立寄り見れば、胴卷の口よりこぼれ出でたる小判なり。又側に男の首あり、片腕も。菅笠、脇差などの脇に、狼と思ふ足跡あり。是則ち彼の權太が、狼に喰殘されたる死骸なり。太郎介は是を見て獨語に、「かはいや、旅人の狼に喰殺されたるならん、いかさま小判は喰殘す筈なり」と暫く佇みて打見遣りけり。思ふにたゞ人ならば小判を見て、直樣拾取るべきに、思案するは、親に孝なるほどの

敎草女房形氣　十四編上之卷

初　段

德若屋萬左衛門が女房おへみ、萬左衛門が圍ひおきたる小糸を憎み、嫉妬に胸を焦し、氣に入りの下女おひよのと言合せ、小糸を毒害せんとまでに謀り、亭主のやきもちは燒きながら、おのれは出入する年若き按摩玉の一とくるひ、萬左衛門に見附けられしが、入聟ゆゑに意見を言ひて許しけるに、爲換の金子二百兩を偸み、玉の一と下女のおひよのを連れて、玉の一が在所越後へ逃行く道にて、下女のおひよのが弟權太といふ惡漢に行逢ひ、打連れてころばり峠にさしかゝる時、權太が計略にて知人を山賊に扮へ、おへみが持ちたる遣殘の百八十五兩を奪ひ、姉のおひよのにもかくし、玉の一を宿に寢こかし、姉と共に大阪へ立去る道にて、姉を谷川へ突落して逃去りしに、天罰にてや狼に喰殺されけり。さておへみは、山賊に出逢ひし時谷へ落ち、一ッ目熊右衛門といふ獵夫に助けられ、妻となり、其後譯ありて萬左衛門方へ歸り、頭剃られて別莊へ押籠め、隱居になりし事どもは、十三編までに詳しく記せり。されば、嫉妬女房おへみが事は終りたるやうなれど、玉の一が行末、又は權太が狼に喰れし時、死骸に殘りし胴卷

まうがちがうぐへ入りにけりあれ
縁がつでァさんなさる人なればこそ
むりじさんのだよ女房をたゞいれねばならぬはん、
工面なしの亭主のかれが中おやぞろう蛇の見合
ぢぶくの加るまたあつよくかせげバこそれ
おてらくどめそうろう気まぜうまだらじさ
百年たゞ今までその事せりまするこれぞ
まくなちや ふでひつくねあるさえまてねへ
あまたちき ねくらでらひあひあいとのまゞ、ふでまでもあるぞよ
女房をもつても女房に亭まかすおれの むせさみまるのあたい
きのうの夫ちからでも所にかゆまのらんせう和合で夫婦があつて
おみかさん、ちやうちよがされまつてわらまで ねへちやふなおさんあるよ ねいり
●古人曰 儀の門よりそこしましたるちよがくれの工夫なりと いふ一げなれどもそこしん
いそうまでも女の道よれバ女房形気のちよみなようてこつまつーぬ



嘉永六丑春稿本同七冬上梓 八十六叟 京山



女房形氣十四編上巻

○ちよぼくれ婢女(ひぢよ)行(ぎやう)

やれ〳〵さて縁人もろ〳〵の衆生さんどきりの沙汰さんはうちがかゝあハ山だし女でへやぐさぞうきうおかひやハうぐとせわ〳〵おかみて身上がら〳〵かけなすものまであつ屋にさのまお嫁どのおはらひ食ぬ法まんどのどりにまぐればあつきまをつまされてゐるの土げがそろ〳〵まげればおかしろれべろ〳〵日が見ぬかゝらで雨を柱ぞのかんざしころちハそのこの祭もやお月ぐがもひやかやとふれをゆく〳〵そのまちたびひのゐをきうおやく おまちどちやでもあげよう目のうちゆろこうゑびがけもひゞくいちやのおいとをかくしてあいはさんたるおのどのおきうぐうきうぶしのみかいとをあとみのとみれはだし女も今ぞかみさんあさねがおまえんぶくとのざいハまらぐハちやぐへなりけりさぞ女房がされどじんだう浮世(うた)ハをするがなきん〳〵



がわが足を喰ふ様なものなり。身代減りて思當るは、六日の菖蒲なるべし。

十八段

かくて、月日のたつは矢のごとく、小糸が生みたる萬太郎、疱瘡もかろくすみて、五歳になりければ、世間なみの祝、如何にせんと、萬左衛門、叔母に相談しけるに、指圖したるは、「二子絹の紋付、絹の裃、脇指、提物はあらたに申付くべし。子供なれば駕籠には乘すべし。革羽織の供は奢なり。すべて質素にする中にも、振舞の料理には念を入れべし。地面の家主達へは、引物は紬縞一反、祝儀として目錄をとらすべし。店の者、下女どもへも、それ〴〵に隨ひて、しきせをなすべし。ともかくも見えを好まず、彼等が爲になる樣にしてやるべし。さてまた小糸、これまで心正しく萬太郎を育て、心底をも見屆けたるゆゑ、萬德を賴み里として、本妻にひろめすべし」と叔母の得心にて、小糸本妻となり、小糸が母は、地面内へ家を造りて、隱居させけり。これ皆小糸が心ひとつの誠よりして、母にも樂をさせ、わが身も金持の妻となりけり。これより後、駈落したる玉の一が事、一ッ目熊右衛門が事、おへみが事に話あり、十四編にしるす。めでたし〳〵〳〵〳〵。

より、この位牌は其方が兩親、是への申譯はかくの如し」と用意の懷劍拔放し、おへみが髻かい摑みて、ふつと切る。おへみは泣聲、五兵衞夫婦は打驚く。叔母きり髮を紙にくるみて、位牌を載せたる八寸に置き、懷劍を鞘に納め、「こりやおへみ。きり髮は萬左衞門への言譯明日はお寺を招きて尼となし、別莊へ隱居さす、入置く所も造作へおいた。其身一生不自由なく、萬左衞門が養はゞ、言分はあるまじ。猶又五兵衞より計ふべし」ト位牌の八寸手に持ちて、一間の內へ入りにけり。この叔母が計ひ、五兵衞もかくとは知らざりしゆゑ、さてもはげしきなされ方と、夫婦感心なしけり。さて萬左衞門、小糸も、これによりて、いよ／＼叔母を敬ひ、聞く人々も、叔母が計ひを褒めけるとぞ。

十七段

おへみ、かゝる過を仕出したれども、家の娘とて、何一ッ不足なく、下女下男をつかひて、別莊に隱居して居るは、金持の家に生れたる故なり。金銀の尊き事は、しんせんろんにも言へるが如し。町人は殊更、金持つ人は、持たぬ人が旦那と敬ひ、奴僕の如くつかはるゝは、自然の道理にて、この事は史記にもいへり。金持はともあれ、少しばかりあるを恃みて、身の分限を知らず、奢に耽り、贅澤に募り、洒落者といはるゝを喜びて、身代の減るを知らざるは、蛸

に請取り、別に禮金とて、五十兩取らせければ、かぐ七、さすがは大家の番頭と、感心なして悦びけり。

十六段

さてその夜、かぐ七、五兵衛方へおへみを連來りて渡しけり。おへみは、我が家來ながら、五兵衛夫婦に面目なく、日頃の我儘も、わが身の罪に消失せて、見るかげもなく、涙に紛らし、袖にて顔をかくし、さし俯向きて居たりけり。五兵衛が妻お六、おへみに對ひ、「あなたが文をお頼みなされたお竹、不思議な事には、わたくし方へ召抱へ、お文を見てから、斯樣にお歸りあるやう計ひしも、是みな叔母御樣と旦那の思召なり。かならずあだに思召すな」五兵衛「此後あなたのお身の上は、このお家のお血筋、叔母御樣のおはからひ次第、私どもは何とも口は出されませぬ」おへみ「此方の人へも、叔母樣へも、どうぞ詫して。頼むぞや」唐紙の内にて、「萬左衛門への詫は私がする」と位牌を持ちて立出でたる叔母のおみよ、上座に直り、「こりやおへみ。萬左衛門子なきを歎き、圍置きたる小糸を妬み、二度まで命を絶たんとなしたるをも、萬左衛門は入聟の義理を立てて、其罪を咎めざるをよき事として、尻に敷く我儘つのり、人もあるべきに、按摩の盲目を連れ、二百兩を私に持去りしは、かさねがさねの不埒至極。萬左衛門は素

よの、その弟権太と共に旅宿屋へ泊り、寝こかしにあひて、身一人となり、一錢も路用なき故、途すがら按摩を取りて口をぬらし、乞食の様になりて、やう〳〵在所へ歸りけり。さて又おひよの、権太は、玉の一を情なく振捨てて、権太がすゝめにて、大阪へこゝろざしけるが、権太は、おへみが持ちたる二百兩を、謀にて奪取りしが、姉のおひよのにかくし持つゆゑ、この金つかふ事ならず、毒喰らはゞ皿までと、悪心つのり、とある所にて、姉を谷川へ突落し、月をたよりに逃行きけるに、三四の狼この谷川を渡りてきたりて、権太に飛かゝりて、喰殺しけり。此時姉の死骸も此所に流れ寄りて、陰火燃上りしは、弟を怨む怨念なるべし。姉弟かゝる死をなすは、是みな悪の酬なり。おそるべし〳〵。権太が死骸につけて、一つのはなしあり、十四編にしるす。

十五段

それはさておき、通ひ番頭五兵衛は、みるめ屋かぐ七が音信を待ちけるに、ある日かぐ七來り、「熊右衛門が、百兩といひしが憎さに、かやう〳〵いたし、十兩にて、おへみさまを、昨日ゆふかた連歸り、昨夜はわたくし方にお泊め申したり」と道中にて使ひたる金錢くはしく記したる書付を添へて、残の金子を返しければ、五兵衛かぐ七が計ひをほめ、返したる金子は其儘

行く處があるならば、私が手からも行かるゝわ」と聞きておへみ、實にと思ひて、喜八に連れられ立去りけり。かくて熊右衛門は、身につく錢目の鐵砲一挺ひつ擔げ、十兩持ちて、山越に逃去りけり。かくておへみは、駕籠に乘せられ、伊香保の湯場へ至りけり。

十　三　段

おへみは、駕籠の内にて、涙に袖をぬらしけるが、三里の山駕籠夕方に、伊香保の湯治場の座敷に入りて、見ればかぐ七と、晝間はじめて見たる田子八、酒呑みて居たり。おへみこれはと驚くを、かぐ七、「おへみさま、合點がゆくまい。この譯は、熊右衛門が百兩と、足元を見たが憎さに、この田子八と相談なし、熊奴が舊惡ある故に、おどしつけて、お前を賣らせた謀。ぜげんとなつたこの人は、鎌倉から御座つた落話家、仕打が旨く行く筈だ。百兩を十兩で取戻したは我等が手段。是から鎌倉へお供します」と聞いてよろこぶおへみはいそ〳〵、久しぶりにて美き酒を呑みけり。さてかぐ七、五兵衛より受取りたる金子の内にて、田子八、喜八へも禮金を遣し、此所に二日とゞまりて、立出でけり。

十　四　段

こゝに又、おへみを連れて逃げたる玉の一は、おへみに別れしより、その夜おへみが下女おひ

「有難う御座ります」「まご／＼すると、手が後だぞ」と言ひすてて立去りけり。

十二段

此時おへみ、あやしく思ひ、窓へ立寄り、立聞しけるに、さだかには聞えざりしが、われが首は己がついだぞといふは聽取りしゆゑ、この熊右衛門、もしや盗人かと思へば、いとゞ怖ろしく、たゞかぐ七が來るをのみ、心の内にたのみけるは、あさましき身の上なり。是みな嫉妬に小糸を殺さんとし、又は玉の一と枕をかはし、二百兩盗みたる天罰なりけり。さてこの日の晝すぎ、かのぜけん來り、「田子八殿の口入れで來ました。奉公人を見せさつしやれ」熊、おへみを指さしければ、ぜげんの喜八「こんな年增をどうなるものか。これならばお斷り」と立たんとするを熊右衛門、「百兩の約束あれど、たつた今入用に差詰る。いくらでも好いから」喜八「さうかな。二十年も若くば、顏が好いから、直段もよけれど、この女一生を、十兩なら買ひませう」おへみ「これ熊さん、百兩になる私を、なぜ人買に賣るのぢやえ」熊「おれも賣る氣はないが、賣らねばならぬ仔細がある。さア、十兩で手を拍ちます」「然らば」とて十兩渡し、書付取り、連行かんとするを、おへみは悲しく、行かじといふを熊右衛門、おへみが細腕かい摑み、「厭とぬかせばもとの谷底、狼の餌食にする」と引立つるを、喜八取押へ、おへみを宥め、「此方さん、

ても厭だぞ」トーツの目玉剝出して、睨みし面の怖ろしさ。かぐ七心に、此奴たゞはゆくまじと、「成程もつともだ。しかし百兩はこゝに持たぬ」といひツヽ、五十兩をもとの如く胴巻へ納めければ、おへみ「かぐ七どの。どうぞして私を助けて下さんせ」かぐ七「心得ました。これ熊右衛門どの。この金を百兩にして、又來ますぞよ。しかし、鎌倉よりの往來、此月の末になりませう。いよ〳〵百兩で得心ぢやな」「をゝさ」「きつと詞をつがへたぞよ」とかぐ七、此所を立去りけり。かくて一日たちての朝、かの田子八、熊右衛門方へ來りければ、熊「これは親方、珍らしい」「をゝさ、われにちと話があつて、わざ〳〵來た。まア此方へ來い」一ッ家の片傍、稻村の蔭へ連行き、田子八「これ熊右衛門、われや疾に、おれが手にかける奴なれど、以前居候に置いた事もあるゆゑ、見ぬふりをして居るのだが、高崎の事、覺があらうな」熊「親方、ばれたかえ」田子八「さればよ。鬼達樣は伊香保に來て御座る。明後日は此所へござつて、われが身の上だ。早く逃げろ。それにしては、噂にも聞いた彼の女の身を賣り、それを路銀にして、何所へなりと、遠くの果へ。合點か」「心得ました」「しかし、女を賣りますには」田子八「それもおらが村へ、子供買出しのぜげんが來て居る故、今に此所へよこすから、いくらにでも賣つてしまへ」
熊「私を指したは、高崎の小間物屋で御座りやせう」田子八「誰でも好いわ。わが首は己がついだ」

き、年頃目をかけおきたる松屋正兵衞方へ文を賴みしゆゑ、心一ッに迎へを待居たる處に、ある日、德若屋へ出入するみるめ屋かぐ七尋ね來りしゆゑ、心の中には、さてはと思ひて嬉しきを、側に居る熊右衞門が手前をはゞかり、「かぐ七どの、私が此所に居る事を、能く知つてであつたな」かぐ七は、「この挨拶はせず、「貴樣が熊右衞門どのか。私は鎌倉の羽根川町にて、みるめ屋かぐ七といふもの。この女中は、私が知る人の內方、何ゆゑ此所には置かッしやるのだ」ト訊ねければ、熊右衞門一ッの目で、かぐ七をきよろ〳〵見て、「この女は、山の神から授つた私が女房、その譯は」かやう〳〵と、「谷へ落ちて狼に喰るゝ處を助け、宿へ連歸り、何所の人ぞと尋ねても、宿へは歸られぬといふゆゑ、宿も知らず、得心づくで持つた女房。かどわかしでもなし、强淫では素よりない」トならべ立てて言ひければ、かぐ七詞に取付く所なく、少しへこみて、詞なかりしが、金づくで得心させんと思ひ、「いかさま、山の神に授つたと言はッしやるも尤、私は大工ぢやゆゑ、山の神は氏神も同じ事、山の神へお初穗を出しませう。この女中私に授けては下さるまいか」熊右衞門打笑ひ、「大方そんな事だらうと思つた。お初穗はいくら出す」かぐ七「サア、見た事もあるめへ、五十兩だ。言分はあるめえ」熊右衞門「これ、かぐ七どの。命を助けた女、殊更得心づくでの女房、かねびら切つて連れて行くなら百兩だ。一文缺け

十段

さる程に、みるめ屋かぐ七は、わが子分の若い者一人供に連れて旅立ち、日を重ねて伊香保に至り、木暮八左衛門といふ名高き家に宿り、一日湯に入りて足を休め、あくる日こゝを立ちて、晝休の立場にて晝餉して居たる後より、「かぐ七どの」と呼びたるを、振かへり見れば、このほとりにて、かぐ七と同じやうなる業する者なり。かぐ七「おゝ、田子八どの、久しく逢はぬ」田子八「鎌倉へ往た時は、大きなお世話になりました。なんで此所らへ御座つたのぢや」かぐ七「されば さ。此方の所へも尋ねるところぢや。外ではないが、ころばり峠の麓、窪村にて、一ッ目熊右衛門といふ者の所へ、女出入の事で行くのぢや」田子八「成程。彼奴は此頃、此所らに見馴れぬ女を女房だといつて居るが、その女の事だらう」「違えねへ。取戻すのぢやが、口を利いてはくれめえか」田子「やすい事だが、今縣守様へ呼付けられて行く所だ。此方が掛合なら、手もなく渡すだらう」かぐ七「手切もやる積だ」田子「それなら猶更。窪村は此所から三里だ。歸りには寄らつせえ」トいひすてて別れけり。

十一段

こゝに又、おへみは、かの笄を賣る世話をしたる、太郎作が娘お竹、鎌倉へ奉公に出ると聞

語りければ、叔母、小糸がこゝろざしを賞めければ、萬左衛門「兎も角も、あなたの思召にまかせます」叔母「此方が助ける心あらば、わしも嬉しい。おへみは猶更こり〳〵して　いかな心も直るであろ。兎も角もわしにまかせさつしやれ」萬「よろしくお賴み申します」叔母「五兵衛へも、相談せにやならぬ。此所へ呼ばしやれ」小糸「はい」と立つて行く。さて五兵衛來りければ、叔母おみよ、文の樣子を語り、「おへみが逃げたる時、みるめ屋かぐ七を賴みしゆゑ、此度もおへみが迎へに彼を賴むべし」とおみよが指圖もつともなれば、五兵衛心得て、立去りけり。

九　段

かくて明る日、五兵衛方へ、みるめ屋かぐ七を招き、譯を語り、おへみが文をも見せ、迎への事を賴みければ、此樣な事に馴れたるかぐ七、文を見て、「もし、五兵衛樣、この樣子では兎も角も、金で熊右衛門が手を切らずばなりますまい」五「そりや勿論。まづ五十兩渡し申す。路用は別に十兩」かぐ七「左樣なら、是はまづ御預り申しませう。伊香保には、田子八と申して、顏の利く男、私存じ居りますゆゑ、熊右衛門が樣子をも聞きまして、事によらば、田子八をもつて掛合ひませう」五「いかさま。如何樣にしてなりとも、おへみ樣を連戻り、まづ此方の内へ置きて知らせ給へ」「かしこまりました」と請合うて歸りけり。

教草女房形氣　十三編下之巻

八段

萬左衛門、おへみが文を、小糸親子に見せけるに、親子の挨拶うつくしきを聞きて感心なし、「此上は、叔母様へ相談せん」といふ處へ、下女来り、「叔母御様お出遊ばしました」といふに、すぐさま叔母おみよ、「薬師様へ参詣したゆゑ、序ながら来ました」萬左衛門、小糸、口を揃へ、「やれ〳〵、能くお出なされました」叔母、小糸が母に、「婆どの、おかはりもなくて目出たい」母「有難う御座ります」小糸の母は、勝手へ立つて行く。叔母は萬太郎へ、土産の手遊など取らせ、萬左衛門、小糸、とり〴〵に待遇し、しばしありて、萬左衛門、叔母に聲をひそめ、「おへみが在所知れました」叔母「フウ、盲目奴が在所に居るのか」萬「いえ、この文を御覧じませ」叔母、懐中の眼鏡を取出し、「コリヤ、彼が筆ぢや」と讀下し、「命たすけてとあるは、よく〳〵な事ならん。私がたび〳〵の意見もきかず、妬の深い女、あげくの果に人でなし、不埒。萬左どの、捨てる心か、今一度助ける心か」萬「此上もなき不埒なれど、此家で生れしおへみ、御位牌へ對しても、この儘に捨ておく心では御座りませぬ」小糸親子もとも〴〵にすゝめたる事をも


京山老人作
國貞画

ふ子までまうけ、その上に心立よく、母へも孝心なるゆゑ、内へ入れて妾となし、母は下女の約束にて、勝手向の締をさせおきけり。これ皆、よそへかたづいて、今隱居して居る叔母おみよのはからひなり。萬左衞門、お六より文を預りしその夜、小糸と母を居間へ呼び、お六より聞きし事、くはしく話し、おへみが文を見せて、「おのしたち如何思ふぞ」と尋ねけり。萬左衞門、斯樣に小糸へたづねるは、おへみに心殘りて、呼返すかと思はれんの心なるべし。これも、萬太郎といふ子のある中なればなり。さて小糸、おへみが文を小聲に讀みて、母にも聞かせ、萬左衞門にむかひ、「貴郎は、なんと思召すか知らねど、おへみ樣はこの家のお娘御、男ならば御家督なさるお方、憚りながら、貴郎には義理ある御內方樣。このお文に、命たすけてとは、よく／＼な事、玉の一とお別れなされしとあれば、お呼返しなされて、元の樣に、なう母さん」

母「それ／＼、お腹だちはあらうけれど」トすゝめる小糸は、おへみがやきもちにて、二度まで殺さんとしたるを、義理の爲に返せとすゝめるは、妾のかゞみなるべし。

こりや兎も角も、この文を旦那に見せて、思召をお聞き申せ」お六「いかさま、旦那のお指圖を受けねばならぬ事。それにしてもおへみ様は、此上もない不埒ながら、嘸かし御難儀で御座りませう」五兵衛「此後心が直れば好いが」

六　段

かくて明る日、通ひ番頭五兵衛が妻おろく、いつもの如く主人方へ、機嫌きゝにとて至り、いろ／＼ありて、主人萬左衛門を小座敷へ招ぎ、山だしの下女と按摩との話したる事を語り、おへみが文を見せければ、萬左衛門繰返し讀みて、暫く考へしが、「こりやお六、知つての通、おへみが身内は叔母様ばかり、篤と相談した上で、兎も角も計はん。この文はおれに預けよ」おろく「玉の一が事、お腹は立ちませうが、おへみさま、この鎌倉へ御歸りあるやう致したいもので御座ります」萬「いやさ、おれが心一つでは計はれぬ。叔母様へも、五兵衛へも、相談の上での事ぢや」ト挨拶きゝて、とかくしてお六立歸りぬ。

七　段

おへみ、玉の一と駈落なしたる時、みるめ屋かぐ七を頼み、玉の一が在所まで尋ねしかど、知れざりしゆゑ、おへみが叔母の計ひにて、これまで萬左衛門が圍ひおきたる小糸、萬太郎とい

ました」五兵衛驚き、「どうした事ぢや」「その譯は」かやう〳〵ト、山だしのお竹、ちんかと話したる事を語り、かの封じたる文を見せければ、五兵衛「こりや違ない、おかみさまの手ぢや。松屋正兵衛は、雪の下の御地面の家主」といひツヽ、封じ押切り開き見れば、

よき便ゆゑ文して申まゐらせ候。わたくし此度の事、まことに〳〵心得違ひ、申すも御はづかしく候。玉の一が在所越後へと存じ、おひよのを連れまゐり候ところ、伊香保より草津へまゐる道にて、抜身の者三人に取卷かれ、路用も取られ、谷へ落され候へども、熊右衛門と申す者に助けられ、玉の一、おひよのは如何なりしや存じ不申候。せんかたなく熊右衛門方に居り申候。その所は、上州ころばり峠の麓、窪村と申候。身一ツの憂さ辛さ、地獄の苦しみ、筆には盡しがたく候。命たすけると思召し、迎への人御越し下さるべく候。熊右衛門へ謝金なくては、かへし申すまじく候。わたくし、その地へさへ歸り候へば、金子は如何樣ともして、御返し可申、くれ〴〵も、命御助け願上まゐらせ候。かしく

正兵衛樣、同じく御内方おとくね。　へみな

トあり。五兵衛眼鏡をはづし、「心がらとは言ひながら、お痛はしき事ぢや。こりやとても正兵衛の手際には行かぬぢや。はて、どうしたものであらう」ト腕組して暫く考へ、「コレおろく、

谷へ落ちて、狼に喰はれる處を、熊どのが鐵砲で打殺し、女を助けて女房にしたのさ」ちんか「そりや、とんだ話だ」ト二人が話を、肩揉ませながら聞き、お六もしやと思ひ、「これ竹、その女の名は何といふ」竹「名は知りませぬが、鎌倉へ行くなら届けてくれろと、頼まれました文には、名がありませう」お六「その文、持つて居るか」「はい」「見せや」「はい」ト立ち、持來りたるを、お六取上げ見れば、鎌倉雪の下、松屋正兵衛樣、へみより、とある筆は、見覺ある主人の妻のおへみなれは、びつくりしたるを、さあらぬ體にて、「竹、この文の名宛は、私が知つた人ぢや。届けてやらう。今話の、熊右衛門といふは何者だ」ちんか、口を差出し、「熊右衛門は、近頃窪村へ來た獵人で御座ります。めつかちゆゑ一ツ目の熊とて、惡でくな奴で御座ります」トはなしの中へ、通ひ番頭の五兵衛、本店のみせより歸來りければ、女房お六「貴方お揉ませなされますか」ちんか「旦那、お寒う御座ります」五兵衛「ちんか、店の喜介が風邪をひいて寢たから、歸りに揉んでやれ。おれがいうたと言へ」「はい。もしお下を揉みませう」お六「下はよいよ」「左樣なら」ト脱いで置いた羽織を著ながら、「おせんさま、あの太鼓はなんで御座ります」娘おせん「八人藝の寄席さ」ちんか「なるほど」娘「竹、手を引いてやりや」お六は、お竹が勝手へゆきしを見て、娘にいひつけ、三脚の蠟燭をつけさせ、聲をひそめ、五兵衛に對ひ、「もし、おへみ樣の在所が知れ

に、熊右衛門は、圖らず三兩を得てよろこび、おへみを酒買ひにやりて呑み、足たゝかせながら、おへみが顔を一ツ目で見らるゝ辛さ、悲しさも、情を知らぬ熊右衛門、猫が鼠をじやらすが如し。

五　段　　はなしふた道にわかる

おへみが御新造樣といはれたる、徳若屋萬左衛門が通ひ番頭の五兵衛、旦那の住居と同じ地面の新道にて、二間半の格子作、妻のお六炬燵に行燈よせて、貸本讀みながら、出入の按摩ちんかに肩を揉ませて居る。娘おせん、山だしの下女まだ白歯なるお竹、此所へ來て三日目ゆゑ、うひ〳〵しきを、火鉢の側へ招き、「おのしは伊香保の近所さうなが、伊香保は賑かな所かえ」お竹「左樣で御座ります、夏は湯入が多いから、いろ〳〵な藝者も、稼に參ります」おせん「さうかえ。おのしが在所は何といふ所だえ」竹「はい、伊香保から草津へまゐる道の、ころばり峠の山里、窪村といふ所で御座ります」按摩のちんか、これを聞きにつこり笑ひ、「女中さん、私は畑村の者だ」竹「おや、隣村だね」ちんか「さうさ。女中さん、お前の村の一ツ目熊右衛門は、好い女房を持つたと、飛脚が言つたが、お前知つてか」「あい、村中の評判さ」ちんか「飯盛だらう」竹「なに、この鎌倉で好い衆のおかみさんが、男を連れた駈落者、峠で追剝に出遭ひ、連にはぐれ、

留守でよかつたな」「なに、お前が留守でよいものか。今日で五日、油の錢さへ無いゆゑに、內は暗がり」「おゝ、その暗がりがよかつたらう」おへみ「何をいはんすのぢやえ。暗がりをよろこぶは鼠ばかりぢや」「やい、しらをきるな。おれが留守を幸ひに、旅商人を引ずりこみ、密夫をひろいだな」おへみ「おや〱まア、思ひもよらぬ疑ひ」くま「とぼけるな。密夫の證據はこの風呂敷包、まだ今日も歸るまいと、置いてうせたに違えねへ。ありやうに吐かしをれ」と髻摑んで引倒し、圍爐裏にある燃杭振上げ、うちたゝく折しも、小間物屋吉兵衞來りければ、熊右衞門おへみを突放し、顔見合せて互にびつくり、くま「高崎の吉兵衞さんか」吉「おゝ、熊右衞門。わりや高崎で、いや、高くはいはれぬ事。しかし、おれが身にはかゝらぬ事ぢや。これ女中、約束の三兩渡しますぞや。證據に預けた風呂敷包持つて行きますぞ」と肩入れながら、「熊右衞門。此所で顔見た事、人には決していはぬぞ。われもいふな」と言捨てて、立去りけり。さて熊右衞門、おへみに對ひ、「風呂敷包の疑は晴れたが、三兩の金はなんだ」「こりや私が笄を、あの人に賣りました」くま「これ、わりや狼に喰はるゝ處を、おれが鐵砲で狼を打落して、われを助けたゆゑ、われが身體に附いたものは、皆おれが物だ」と無體に三兩を取上げけり。おへみが悲しさいはん方なし。おへみは此所を去らんと思ひたる、路用の三兩を取上げられ、口惜しく思ふ

ど、かゝる憂目見んよりは、谷から落ちて目をまはしたる時、狼に喰はれて死にたるがましなりと、圍爐裏の火さへ消えかゝりたる時、門口より、質を頼みし太郎作が妻、柴籠背負ひながら、「おへみどの、まだ歸られぬかえ」おへみ「アイ」「やれ〳〵、一人で淋しかろ。これおへみどの、旅商ひの小間物屋が村へ來たゆゑ、此方が賣りたいというた、笄の事話したれば、見たいといふ。賣るなら此所へよこしませうか」おへみ「そりや、有難う御座ります。早くよこして下さんせ」「あい〳〵」と立去りけるが、軈て小間物屋吉兵衞來り、笄を見せければ、吉兵衞「熊右衞門は好い女房を掘出したと、この村の若い衆の話、この笄で昔が知れる。それは兎もあれ、いくらに賣らしやる」おへみ「お前は、いくらに買ひなさんす」「左樣さ」と又よく〳〵見て、「とても元の値にはなりませぬ。三兩なら買ひませう」おへみは、善く育ちたるゆゑ、いふまゝにまかせけるに、吉兵衞「今こゝに金なきゆゑ、才覺して持來らん。間違のない爲に、この荷物を預けます」と小間物の風呂敷包を預けて、立去りけり。

四段

かくて此日、七ッ下りになりしかど、小間物屋來らず。されども荷物預けしゆゑ、今にも來らんと、待つ門口に足音するは、小間物屋かと思の外、一ッ目熊右衞門、あたり見廻し、「おれが

しかのみならず、朝な夕な少しの事にも熊右衞門に打擲かれ、かくて何時まであらんよりは、谷川へと思ふ折もあれど、さすがに命も捨てがたく、今日明日と過しけるが、あたりの女達も心やすくなり、話にことよせ、鎌倉への道筋も知れ、しかのみならず此頃は、熊右衞門折々は四五日宿へ歸らぬ事もあれば、路用さへあらば、此所を逃去り、鎌倉へ至り、兎も角もせん、それにしては、路用の工面外になし、谷へ落ちたる時、髻に殘りしこの笄、質におかば五六兩にはなるべしと、隣といふも半丁ばかりなる、太郎作が女房に賴みけるに、此所らでは、このよな物は質に取らぬといふ。然らば賣りたしとて、十兩といひければ、太郎作が妻膽を潰し、この山中で、十兩の金持つ人なしとて取合はざるゆゑ、道は知れても路用は出來ず、心一ッに悲しみける。

三段

かくてある日、今日も二日熊右衞門宿へ歸らず、おへみ、一人さみしく圍爐裏に寄りて、憂身の程を歎き、ありし我家の事など思出し、我は家を立退きて、斯樣に難儀すれども、小糸は宜き事にして今頃は本妻になりしならん、それも我身より爲る事なり、連れて逃げたる玉の一、おひよのにも別れ、二百兩も奪取られ、命一ッは熊右衞門に助けられしは、運の強きやうなれ

爲換の二百兩奪取り、玉の一を連れ、下女のおひよのと三人駈落なし、玉の一が在所越後へ行く道、伊香保より草津へいたるころばり峠にて、山賊にいであひ、二百兩取られ、谷底へ落され、木の葉の中にて氣絶なし、日暮れて、狼に喰はるゝ處を、片目なる一ッ目熊右衛門に助けられ、玉の一、おひよのにも別れ、我家へ歸られず、身には一錢の貯なく、いかにともせん方なきゆゑ、黒あばたにて片目なる熊右衛門が心に從ひ、妻となりしは、心より爲す禍なりけり。これまでの事は、委しくは十二編を見て知るべし。

二　段

おへみは、鎌倉にて金持の指に折らるゝ家に生れ、下女七人つかひたる身なりしに、心柄にて、今は山の中なる窪村の獵人熊右衛門の妻となりしに、はじめ谷へ落ちたる時は、紬縞三ッ重ねたるを、二ッは熊右衛門に剝がれ、十月の寒空に小袖一ッ。わが生れたる家にあれば、黒塗の炬燵櫓に、更紗の布團かけしに、今は亭主が唾を吐く、圍爐裏に粗朶打燒べて、小袖一ッの肌を暖めるは、如何なる因果ぞと思ふにつけては、玉の一に狂ひたるを、やう〳〵悪しかりしとこゝろづくは、うはべのみ利口らしくて、愚なるゆゑなり。おへみは、手をたゝきて下女を呼びしに、かくなり下りしゆゑ、霜柱を踏分けて、谷川の水を汲み、破鍋に麥飯を炊く苦しさ。

敎草女房形氣　十三編上之卷

初　段

このくさざうしの七編より始りたる、德若屋萬左衛門といへるは、鎌倉の眞中にて、土一升金一升といふ所の、我が地面にすまひ、店は質と兩替、紙、油、屋敷方へ金子の御用も達し、手代はもとより、下女も七人の暮しなり。主人萬左衛門が妻おへみは、此家に生れて產聲揚げしより、乳母抱守にて、わがまゝに育ちけるに、家督の兄才藏、十七の疱瘡にて亡せたるゆゑ、おへみに聟を取りしに、兩親果てて、今は聟の萬左衛門が家督なり。これゆゑにおへみが心には、われ男なれば、この家督を取る身なりと思ふ心ゆゑ、聟を尻に敷く。聟の萬左衛門は心優しく、男ぶりもよく、身持正しく、地面も二ツ殖したる程なり。然るに十五年、おへみに連添ひて子なきゆゑ、小糸をかくしづまとし、一子萬太郎をまうけたり。おへみ、これを知りて、氣に入りの惡玉下女、おひよのにいひつけ、人を賴みて、二度まで小糸を殺さんとなしけるに、小糸は母に孝なるゆゑ、天の助けにて危きを遁れ、おへみは我儘つのりて、出入の按摩玉の一として、年は十も下なるに狂ひ、萬左衛門に見付けられて、意見いはれしかど、玉の一忘れがたく、

ざるべし。およそ人の妻たるは、才智ありて才智をかくし、夫を天として、おのれ地に位し、氣質靜にして、よく庖中を始め、針は紗綾縮緬の褄をあはせ、筆はり〳〵見事にて、遊藝は妻となりては入用なけれど、あれば猶よし。さて顏十人並なれば、極上の女房なり。あゝ武藏野の千草の中にも、かゝる花嫁は稀なり。風にそよ〳〵心かろき尾花は多し。世の人嫁をえらむに、第一美麗しきを先とするゆゑ、顏には似合はず馬鹿な嫁を取りて悃る人あり。たゞ氣質と針とをえらむべし。是、中から下の町家をいふなりと、かの先生が論宜なれば、無益の口繪よりはと、こゝに記せり。

八十五歲

嘉永六丑年仲春脫稿　　　　京山

嘉永四亥秋稿成
同七寅初春發市
京山老人作

烏有先生、予に謂ふやう、老人が作りたる女房形氣の稗史を見るに、町家の妻を敎導する意味ありて、世敎の萬一ともなるべきは、無稽の戲筆に勝れりといふべし。そも〳〵夫婦は人倫の大道、陰陽に位して一家の小天地なり。されば古語にも、天夫地妻といへり。夫の陽氣、妻の陰地を照して、家督の一子を生ず。天地和合すれば五穀豐饒し、夫婦昵密ければ家内安全なり。睦ましとは、色情の事にはあらず、夫婦心を一になし、夫は家業に怠らずして、物事正路を守り、妻は婦道を失はず、能く庖中を齊ふ。かくてこそ、夫婦昵密とは言はめ。然るに、亭主愚昧にして、身分量を知らず、家業には朝寢して、遊樂には夜を深し、女房少智ありて、亭主を凌輕て、雌晨をつくる。玆において、小天地反轉て陰陽位を失ひ、藏の屋根に草が生える。かゝる家にも、女房賢才ありて、夫のあやまりを諫め、補佐して、秋の末に大晦日を量討らば、燈火に油を注すが如く、家内暗夜とはなら

左衛門方へ知れ、萬左衛門義心ある事、十三編に記し、引續き出版いたし候。めでたし〳〵。

路用はとられ、駈落ものゝ宿無し、既の事狼に喰はれる處、わしが鐵砲で助けたは命の親。わしは今年四十八、此方さんとは似合の夫婦、不思議な縁を媒に、得心してはくれまいか。厭とあれば、かくまひおくも喰潰し、脇腹うんといはせ、もとの所へ捨ておけば、狼の餌食。白い歯はむかしの事、年増盛の此方さん、命の親の私がいふ事聞分けてはくれまいか」トいはれておへみ、顔うち上げてその顔見れば、片目はなくて團栗眼、黒あばたのひげ面なり。厭とはいはれぬ詞の手詰、「得心しました」「おゝ、そりや嬉しい。堅めの杯してくれ」トついに見もせぬ濁酒、猪の吸物、兎の煎付、おへみが口に合はゞこそ。「さア〳〵飯を」トさしよする、缺椀に麥飯、圍爐裏に唾吐棄てて、襟の虱を火に焚る、眇眼の男を假初にも、夫としたるおへみは、金持の家に生れ、一人娘にてわがまゝに育ち、入聟とて、善心なる萬左衛門を尻に敷き、嫉妬とはいひながら、親孝行なる小糸を、二度まで命取らんとなし、わがまゝ募りて、盲の玉の一に迷ひ、二百兩を奪ひ、親の位牌を棄て、亭主を捨てて逃去りしその罪、天道様ゆるし給はず、二百兩は權太が手を藉りて奪ひ給ひ、盲を連れて逃げたるゆゑ、片目の熊右衛門が妻となり、下女七人つかひし身が、鏡もなくて、盥の水影に髪を結ふ。是皆、心一ッの持ちやう惡き天罰なり。おそるべし〳〵。これより後、玉の一が事、ごん太おひよのが事、おへみがありか、萬





熊右衛門「見れば旅の女中、どうしたのぢや」「はい、鎌倉より越後へとて、三人連に供一人、此峠を通る處、追剝にいであひ、路用も殘らず取られて、突落されました」「やれ〳〵、怪我がなくて仕合。併し私が仕止めねば、それ其所に死んで居る、狼に喰はれるのぢや。さても命強い女中ぢや。まづ私が宿へ御座れ」と鐵砲を背中へ十文字に背負ひ、松明をおへみに持たせ、今打取りたる狼の足を取り、おへみが手を引き、右に狼、左におへみ、これも心は狼の、惡の酬といひながら、あさましき有樣なり。

十　四　段

檐の松風颯々の聲、後の山川鼕々と響く、住荒したる谷陰の一ッ家。おへみあたりを見れば、檐に獸の皮を曝し、壁に鐵砲、山刀かけてあり。竈はなくて大圍爐裡、莚屏風に藁莚の疊。熊右衛門、圍爐裡に榾打くべて湯を沸し、おへみに呑ませ、「道々聞けば、此方さんの名はおへみ、所は鎌倉。宿へ知らせて、迎ひの人呼んでやらうといへば、宿へは歸られぬといはしやる。さすれば駈落者。駈落なら宿なしも同然。私は見る通りのひとり者、この春まで女房もあつたれど、隣村の野郎とちよくりあひ、私を棄てて逃げたゆゑ、あとからぼつかけて、鐵砲で打殺し、今では男やもめ、かゝァがほしい處。狼を打止めて、立寄り見ればこなさん。連にははぐれ、

しよ事がない」ト おひよのと玉の一を乘せ、おへみが乘りし空駕籠を、擔げて麓へ急ぎけり。

十　三　段

かくて三人、麓の旅籠屋に宿りしに、玉の一風呂へ行きたるあとにて、權太聲を潛め、「これ姉御、おかみさんが死んだあとで、よしみもない彼の盲、在所まで送つてやるはばか〳〵しい。明日彼奴を寢こかしに此所を立ち、それから先は兎も角も相談せう」おひよの「いかさま。して、行先の心あては」ごん「お前はとても鎌倉には居られぬから、上方見物かた〴〵、伊勢へも參り、京も見て、大阪には、私が親分にした男もある」ト ひそ〳〵はなしの處へ、玉の一「あゝ好い湯だ。權太さん、はいんなせえ」下女「御膳を上りまし」それはさておき、おへみは谷底へ落ちけるが、年々の木の葉の積りし中に、芒など生茂りたる中へ落ちければ、身には傷つかず、されど氣絶して正體なし。日も暮れたる時なれば、狼三疋來り、まづ袖をくはへて引ずる。これ死切りしやと試むる事とぞ。さて三疋口を開き、手足にかぶりつかんとせし時、所の獵人、一ツ目熊右衞門とて、めつかちが、どんとうちたる鐵砲、手頸を喰はんとする狼が頭を打貫きければ、殘る二疋逃去りけり。この鐵砲の音、おへみが耳にこたへ、息吹返したる處へ、熊右衞門は松明を照して來りけり。おへみは、この燈を見ていよ〳〵正氣になり、腰を立てて居直るを見て、

の仕事をして、十兩ヅツとはあんまりだぜ」ごん「不足をいふな。かながい張の長脇差、田舍芝居から借りて來て、馬糞浚のおのし達を、長脇差の男に仕立て、言ひぐさまで敎へてやり、烟草一ッぷく呑むひまに、十兩づつは、饅頭に砂糖つけて食ふよなものだわ」「いかさま。そんなら權太、まめで居やれ」と三人は別れ去りけり。こゝろいがみの權太が、かゝる惡事をなし、そのをはりには、天罰をうける事、十三編を見て知るべし。

十二段

權太は、謀をもつて、百六七十兩の金を奪ひ、そしらぬ風にて、態とわくせく馳歸り、「姉御、口惜しや取逃した。財布は取られさんしたか」おひよの「さればさ、財布を取らるゝを、やるまいとて握詰めたを捥放し、蹴られてうんとのつけにそり、そのまゝ谷へまつさかさま。せめて死骸なりと探したい」權太「探すには、所の人を賴まにゃならぬ。最早日も暮かゝる。谷底の死骸、五丁も十丁も先から、人の臭を嗅付けて來る狼、殘るは著る物ばかりであろ。下女の七人も使ふおかみさんが、狼に食はれるも心がら。死骸を探すは金が入る。金があるかえ」おひよの「私がたしなみの五兩」ごん「そりや、是から先の路用にせにやアならねへ」と話しの處へ、逃げたる駕籠舁立歸り、「日が暮れると、追剝よりは怖しい山の狗。さア〳〵早く麓まで。谷へ落ちたは

山路なるに、駕の者「夜になると、此所らは狼の遊びどころで御座ります」とは、聞くも怖ろし。軈て下りにさしかゝる處に、熊笹の中より、長脇指の男三人、拔身を提け、道を遮る。駕籠の四人、これを見るより、「そりや出たぞ」と逃去りけり。おへみはびつくり、おひよのも共に、駕籠を出でて逃げて行く。男どもおへみを捕へ、二人して兩手を取れば、一人前に廻り、懷中へ手を入るゝ。「人殺し〳〵」と聲の限り呼ばはれば、「おとぼねたてると、芋ざしだぞ」と懷中搔探り、取出したる二百兩の財布、「これやつては」ト取縋る女の念力、「えゝ、面倒な」と捥取りて、立げにはたと蹴倒せば、うんとのつけに悶絶なし、谷へころりとまつさかさま。折から權太、馳付けて、かくと見るよりすらりと拔き、切つてかゝれば三人は、「ものすりや好いぞ、冗骨折るな」と逃行くを、何處までもといがみの權太、追かけて馳行きけり。玉の一の駕籠舁も、この體を見て逃去り、玉の一は駕籠のなかに樣子を聞いて身をふるはせ、「おひよのさん、おかみさんは」おひよの「谷底へ落ちさんした」トいひつゝ木にとりついて谷を覗き、「おかみさん〳〵」と呼べば、應ゆるは谺のみ、影も形も見えざりけり。權太は拔身をさけて追行きけるに、三人の男笹原へ逃入るを、續いて馳入り、「六藏、財布を取つたか」六「をゝさ、この通り」ごん「出來した〳〵」トいひッヽ、財布を探り、「それ、約束の十兩ヅッ」八六「二百兩あまり

玉の一「おかみさん、このお人をお頼みなさいまし」おへみ「さればさ。併し此所らにあるかの」權太「田舍とて馬鹿になさいますな。何でも自由で御座ります」おひよの「そんなら三兩おやりなさい」「おゝ」とおへみが財布の金、二百兩の内、小判二枚權太へやりけり。［作者曰］二百兩の小判は、餘程の重みなれど、女のふところに持ちしは、くさざうしなり。さて權太、おひよのに言ひけるは、「駕籠舁は此所より歸し給へ、私が心安き駕籠の者雇ふべし。私は買物調へて來るべし。若し時移らば、次の宿へ泊り給へ、心やすき旅籠屋あり。私がお供すれば、大船に乘つたと思ひなせえ、波風なしに高田まで。玉の一さん、あやかりものだぜ」と背中たゝかれ、目を白くして打笑みけり。權太、茶碗で二ッ呑み、「今直に參ります」ト出行きけり。かくて、やゝありて權太、供の形をこしらへ、髮月代もなし、一本さして來りし姿、誰が見ても、二才の男一疋なりけり。時しも八ッの下りなれば、この日は次の宿深谷へ泊りけり。

十一段

追手を恐れて、權太が計ひにて、高崎より伊香保へかゝり、一日足を留め、明る日草津へこゝろざし、ころがり峠とて、少しの山あり。この麓へ泊らんとて、この所へ來りしは、夕月の出し頃なり。此時權太少しの荷物を擔げ、玉の一が駕籠に附きて、後にあり。たゞさへ怖ろしき

立なり。おひよの、この男を見て、びつくり顔、「權太ぢやないか」「あい、姉御。見れば德若屋のおかみさん、八代目がけいまさといふお盲さんを連れて三人連、わしが目もにもそれと知れたる駈落者、何事もなく、能く此所まで來なさつた」おひよの「手前、今では何をして居る」ごん太「はて、見ても知れたる雲介、この樣になつたのも、おかみさんが嫉妬で、お前に頼まれ、小糸を暗打やり損ない」おひよの「これさ、聲が高い。マア〳〵上りや」と心をゆるすは、しん身の弟。權太草鞋を解き、足をはたきて座敷に入り、おへみに挨拶すれば、さすがのおへみも面伏なり。權太、おひよのにむかひ、「これから、お前方何方へ行くのぢやえ」おひよの、聲を潛め、「此所に居なさるは、玉の一さんとて、常々出入のお人、在所は越後の高田の在」權太「田地でも買つて、蓼食ふ蟲の好き〴〵、それも緣づく。さりながら、女二人にお盲さん、ごまのはひ、野臥、山賊、三人連では覺束ない」ト聞いておへみ「權太どん、此方なんと高田まで送つてはくれまいか。賃錢は遣るぞよ」おひよの「權太、雲介するなら否やはあるまい」「それは私が當然の稼ぎ。併し此所に一ツ話がある。この形では、誰が見ても、雲介宿から連れた供とは見えず、人の疑ひ怪まるゝは、旅の災難起る種、そこで、形をお供にこしらゆるには、半纒羽織に、帶、股引、脇指もなけりやならぬ。三兩もなくては出來ませぬ」おひよの「いかさま、もつとも」

十　段

おへみは、金二百兩僞換の金をわが物とし、下女のおひよのを連れて、叔母の所へと僞りて、宿を立出で、豫て出合ふ中宿にて、玉の一に逢ひて、鼻元思案の無分別、おひよのが計ひにて、今宵の泊までとて、駕籠三挺に打乘り、この日は七里の所にて、旅籠屋に宿りけり。さて毎日駕籠にて、玉の一が在所越後の方へ急ぎける程に、熊谷を越し、立場の茶屋の奧庭へ、三挺の駕籠を入れさせ、まづおひよの出でて、玉の一が手を取り、駕籠より出して座敷に居らせ、おへみが駕籠も緣に上げ、まづ包を出しければ、おへみも座敷に入り、三人衝立の陰にて、おの〳〵人目を包みし頭巾を取るは、追手を怖れしゆゑなり。猶あたりを見廻して、おへみ「此所まで來れば、もう好いぞえ」玉の一「毎朝祈る金毘羅樣のお蔭、在所までは大丈夫、お氣遣なされますな」トいふも小聲なり。かゝる惡事をなして、いかでか神の御利益あらん、罰のあたる事次を見て知るべし。さて、おひよのが申付けたる酒肴、飯の膳をも持來り、おへみも、玉の一も、おひよのも呑む口、猪口の廻る最中、緣先へ來りしは、二十五六の男、雲すけと見ゆる出


女房形氣
京山作
十二編 下卷
國貞画
五渡亭

を撰み、萬太郎を迎取り、その夜、小糸も母も、引移るべきやう申しおくべし。さて又、おへみ我儘ゆゑ、下女七人つかひしが、奢なり。それのみならず、おまめ、おかやはおひよのが相口、心よからぬ女なり。人減しとて暇やるべし」とて、拔目なき叔母が指圖、忠兵衛感心なし、明る日、寺岡平六方へ至り、しか〴〵の由話しければ、平六「尤なる御計ひ。併し、私は輕きものながら、主人も御座れば、請人には立ちがたし。妻が弟は町人ゆゑ、これに請人をさせ申さん」ト相談極りければ、小糸も母も大いに悅びけり。さて吉日に至り、萬太郎、小糸、母、引移り、みせの者、下女共へも、それ〴〵の土產は、萬左衛門がふところなるべし。其夜萬左衛門が側に萬太郎、次には小糸、膳をならべし時、萬左衛門、小糸と顏見合せ、につこりと笑ひたるは、おへみが駈落は、鬼に瘤を取られたる嬉しさなるべし。是はおへみが駈落より、三十五日目の事なりけり。おへみは、嫉妬に團子がくツつき、火の中へ落ちたるが如く、うたてかりける事どもなり。

し。おへみ斯くなる上は、小糸を萬左衛門が妾となして、萬太郎を育てさせ、萬太郎十五歳になり、小糸が身持、わしが目にかなひなば、本妻になすべし。如何思召す」と言ひければ、おのく「御尤」といふ。中に耳の遠い婆、「勘藏さん、お話は何で御座りますえ」

九段

およそ、中から下の町人の家にて、小僧が入らざる井戸側に乘りて水を汲み、井戸へ落ちて、子供の土左衛門になりしと聞きて、親類駈付け、何かの事すみて後、小僧の親に掛合ひ、小判で丸く治め、又は主人が乳母を孕ませ、女房が鬼になりしを宥め、乳母の亭主に掛合ひ、構なしの一札と、小判の十枚とを交換る親類あるは、その主人の仕合なり。私は親類どもで御座ります、さて此度の事は、トばかり、口のきかれぬ親類は、有りても無くても猫の尾なり。口の利かれるは、才智のあるゆゑなり。馬鹿は多く、才智は少し。德若屋萬左衛門、金はあれども、口利く親類なく、何事も叔母が計ひにまかせけり。さて叔母おみよ、番頭忠兵衛にいひけるやう、「小糸を入れるにしては、小糸が叔父寺岡平六を請人となし、一ヶ年給金十五兩、二度の仕著せ代五兩づつにて、妾奉公の證文取るべし。母は賄の下女となし、給金五兩の一札取るべし。これは表向、内證は萬左衛門が心にあるべし。此事どもを平六に話し、得心あらば、吉日

八段

さて叔母來りければ、萬左衞門、おへみが行方更に知れざる由を語り、「此上は、あなたの思召次第、如何いたしませう」ト忠兵衞とも〴〵いひければ、叔母のおみよ「親類もある事なれば、私が一存にて計はんは、親類を踏付にする道理なり。明日此所へ御座るやう、忠兵衞より頼みやるべし。私は今夜こゝへ泊る」とて、明る日此所へ寄合ひたる親類四人なり。一人はきぐすり屋の勘藏、一人は糶吳服屋の絹右衞門、一人は中道具屋のたんす郎、年若なり。一人はすこし耳の遠い搗米屋の女房、亭主の名代なり。いづれも萬左衞門よりは、遙か下なる身代、折々は金借りたる事もありし人達なり。おみよ、人々に對ひ、「惡事千里と申せば、定めて聞きもなされつらん。お話し申すも恥しけれど、おへみが事」かやう〳〵と、ありし事どもを語り、「在所知れゝば呼返し、頭剃りこかし、おしこめ隱居、とても萬左衞門妻にはなし難し。さて、あとの事は、如何思召す」といひければ、口のきける男、一人もなきゆゑ、分別も出でず、おの〳〵顏見合せ、「あなたの思召次第」トいひければ、おみよ「思召なくば、私が存念を申すべし。おへみ、あの年まで子なきゆゑ、萬左衞門、小糸といふ女を圍ひおきしに、一子萬太郎をまうけ、今年三歳なり。私も小糸には度々逢ひしが、一人の母に孝心なるゆゑ、外の事はおして知るべ

き、「先代の事を思ひ、よく勘忍さつしやれた。して、おへみは何所へ往た」「さればで御座ります」と二百兩の事を話しければ、「さても〳〵憎い奴、按摩を相手に駈落とは、とても本氣の沙汰ではあるまい。おひよのは、彼が日頃の氣に入り、玉の一も彼奴が手引、一緒に連れて逃げたであろ」と話の處へかぐ七來り、「玉の一が宿を探りしに、立駕籠三挺にて越後へ立ちたるよし。後から追かけますれば、五六日の内には連れて歸ります。お氣遣なされますな」番頭忠兵衛「然らば何分お頼み申す」とかぐ七へ、路用とて十兩やりけり。さて叔母は、五六日逗留しけるが、かぐ七が便なきゆゑ、立歸りけり。

七　段

さるほどに、二十日ばかり經ちても、かぐ七が音信更になし。如何と思ひしに、やう〳〵かぐ七、旅の形にて來り、忠兵衛に言ひけるは、「道にて逢はざるゆゑ、玉の一が在所、高田の在、豆畑村まで至り、尋ねたれど、更に知れず。外へふけたと見えたり。お心當あらば、又尋ねませう」とて立歸りぬ。さて忠兵衛、萬左衛門に對ひ、「此上は、貴方にお内方がなければならず、叔母御樣を御招きなされ、御相談なされませ」と番頭が詞にまかせ、駕籠をいひつけ、叔母おみよを迎にやりけり。

札にて堪忍したる萬左衛門は、養父の恩を知る義心といふべし。

五　段

この明る日、おへみ心あしょとて、晝頃に起出で、朝飯を喰ひ、叔母様の所へ往て參りますと、支度とゝのへ、氣に入りの下女おひよのを連れて立出でけり。さて此夜、叔母の方へ迎をやりしに、此方へは來ぬとの返事、萬左衛門訝りけるが、おへみが出行く支度の仕樣、合點ゆかざりし事ありしゆゑ、こゝろづき、今朝店より來りたる二百兩、手箪笥へ入置きしを、あらため見るに、鍵は側にありて、二百兩なし。この鍵はおへみが預る鍵なり。さては二百兩持ちて、玉の一と駈落したるも知れずと、番頭忠兵衛を呼び、おへみがあやまりの一札を見せ、二百兩の事を話しければ、忠兵衛打驚き、「玉の一は糠屋の悴、糠屋は越後の者、越後へ逃げたるも知れず、みるめ屋かぐ七を呼びて尋ねさせん」と、呼寄せて頼みけり。

六　段

此夜叔母のおみよ、萬左衛門方へ來り、萬左衛門に對ひ、「萬太が事をおへみに話し、得心させんと、泊がけの積にて來ましたが、何所へ往た」萬「それにつけては、御話が御座ります。まづ此一札を御覽なされ」とおへみがあやまりの一札見せければ、おみよ眼鏡出して讀下し、打驚

れおへみ、慥に見屆けたこのしだら、一言も言譯はあるまいな」といはれておへみ、差俯向きて詞なし。萬左衛門「他所から來た女房なら、媒人呼びにやり、このしだらを話し、さる狀書くは當然、武士ならば手打にもすべき處、いはずとも知りつらん。然るに私は十二の時、伊勢より來り、萬德に奉公して、二十七の時、大旦那の番頭を勤めしを、おのしの親御に見立てられ、萬德屋の御親類を里にして、今では二代目の萬左衛門、恩を受けたるお人の娘と思ふゆゑ、何事も氣まかせにすておく、氣隨我儘やきもちやくも、女の癖と思へども、男の廢るこのしだら。相手もあるべきに、按摩のめくら、豫てあやしき小袖羽織、今思へばこしらへてやる筈。さア、言譯があるか」おへみ「不圖した事で今宵ばかり。堪忍して下さいまし」萬左衛門「いや、徒は堪忍ならぬ」ト傍なる硯箱紙を取りて、「さア、あやまりの一札書け、文言はおれが好む」おへみせん方なく、筆を執りければ、萬左衛門、

「私事、玉の一と不義いたし候を御見屆なされ、一言の申譯なくゆ。しかれども、私父親の恩義を思召し、御見のがし被下有難く、玉の一は出入さしとめ、私事は、此後愼み、氣まゝ相止め申べく候。酉の九月十二日。萬左衛門樣。妻へみ。

よし〳〵、拇印しやれ」「どういたしますのぢや」「右の親指へ墨をつけて捺すのぢや」トこの一

の子が今年の祝も、本家にあらばどの様にもなるべきに、仕合の惡い子ぢや」と叔母が詞に取つき、萬左衛門「おへみ、あの年まで子なきゆゑ、萬太をやしなひ子になして、本家にて育てるやう、御執成下されませ」と詞を盡していひければ、叔母「三ツにもなるゆゑ、わしも左様したく思ふ。此様な愛らしい子を側へおけば、樂みにもなる事ぢやが、氣强いおへみ、とてもゆる〳〵いはねば得心せまい。明日は泊がけに行きて、おへみに篤と言聞かせん」と聞きて、萬左衛門悦びけり。

四段

萬左衛門、小糸、叔母が馳走に時をうつし、提燈つけて歸りながら、「叔母様が呑込んで御座るゆゑ、おへみも得心して、萬太郎を本家へ引取るべし。さすればおのしも、出入する様になるべし」小糸「萬太郎をやしなひ子になされても、あの氣隨なるおへみさま」萬「はて、案じるな。おれがついてる」ト話しながら、小糸が所へ歸り、此所にてもかれこれ手間取り、軈て九ツと思ふ頃、宿へ歸り、叔母が言傳いはんと、おへみが部屋の唐紙さらりと開ければ、こは如何に。出入する玉の一とて二十二歳、少し見える按摩、炬燵の前に三幅布團、枕二ツ。おへみはびつくり行燈吹消す、玉の一は這出でて逃去りけり。萬左衛門、下女を呼びて燈を點けさせ、萬左衛門「こ

藏に殘りし籠の鳥、やじりきりに助けられ」トいふを打消す下女おひよの、「これお千代どの、つべこべはまだ止まぬの。そんな事いはずとも、お詫をさつしやれ」トおひよの執成しければ、おへみ「私が腰元が駈落して、月花屋の千代吉、それが又武士の內方。世の中はさま〴〵ぢや。面あてがましい紋付は、見るも厭ぢや」ト奧へ入りけり。おへみが詞に、夫婦は針の席にあるが如し。

三　段

おへみが叔母のおみよは、おへみが父親の妹にて、同じ程なる金持へ嫁入しけるに、今は生みたる悴が家督し、おみよ今年五十七の樂隱居、おへみが爲には、外になき一人の叔母樣なり。この外に花々しき親類なきゆゑ、我儘者のおへみも、頭の上らぬは、この叔母樣なり。この叔母は、十七の時嫁入して、二十七の時夫に別れ、後家となり、十三歲の悴を守立て、人に後指さゝれた事なく、家ます〳〵繁昌するは、才智ありて、心たゞしきゆゑなり。されど野暮ならず、女の通人ゆゑ、萬左衞門、小糸を圍ひおく事も、始より打明けおきし事は、八編に委しくしるせり。さてある日、萬左衞門、小糸を伴ひ、小糸が生みたる萬太郞をも連れて、叔母おみよが機嫌きゝに至りければ、おみよ悅び、さま〴〵待遇し、三ッになる萬太郞を膝へ載せ、こ

義の禮に來りしなり。このやきもち女房の事、七編よりはじまりて、今十二編に至れり。やきもちの女中は見給ふべきをしへ草なり。

二　段

から四郎、大小は遙か後へ置き、夫婦頭を下げ、以前の召使の如く、「さて旦那樣、御蔭をもつて、此度身のありつきをいたし候事、貴方樣より、重役の衆へ御執成のゆゑと、有難う存じます。疾より御禮にまゐるべき處、母の手傷にかまけまして」萬左衞門「いかさまもつとも。手傷は如何ぢや」から四郎「一昨日、糸を拔きました」萬「危い事であつた。お千代も嘸かし魂消つらん。しかしその座にて、母の敵を討ちたるはあつぱれの手柄、お千代も嬉しからん」お千代「有難う御座ります。何方ぞこれを、御披露」とさかな籠。萬「こりや〳〵、おへみを呼んで來い」と呼ばれて、おへみ此所へ來れば、お千代頭をさげてつゞまやかに、何かの禮を述べければ、から四郎も詞を添へけり。おへみ「武士が敵を打つはあたりまへ、格別ほめた事でもない。又お千代は、藏へ入置きしを脱出でたる駈落もの、誰が許して此所へ來た」から四郎「いや、其儀は旦那樣へお願ひ申し、おゆるしを」おへみ「だまれ半次郎。お千代はおれが腰元、心のまゝぢや」お千代「駈落したとおつしやれど、藏の二階で出刃庖丁、あなたのお手にかゝる處、番頭どのにお呼ばれなされ、

敎草女房形氣　十二編上之卷

初段

秩父の家來羽打から四郎が妻お貞に、同じ家中なる黒星眼平、不義をいひかけしより事起り、二人とも永の御暇たまはりしに、から四郎浪人の中亡せけるに、お貞操を守り、さま〴〵の艱難を凌ぎけるに、同じ屋敷の足輕頭寺岡平六は、から四郎が隣にて、わけて懇意なりしゆゑ、お貞が難儀を氣の毒におもひ、秩父の門前に、女の手習師匠の跡をもとめ、娘お千代に聟を取りけり。この聟は半次郎とて、武士の忰なれども、父親浪人したるゆゑ、十二の時より、德若屋萬左衛門方に、丁稚奉公したるなり。お貞が娘お千代は、萬左衛門が妻嫉妬おへみが腰元を勤め、お千代十五、半次郎十六の頃契りたるなり。さて黒星眼平、お貞方に無心に來り、あまつさへ手込になさんとしたるゆゑ、横面はりけるを怒り、拔打に切付けたる肩先の薄手、折から半次郎お千代立かへり、半次郎、やしなひ母の敵がん平を打止め、親の敵を打つたる手柄によりて、半次郎を、から四郎が二代目として、秩父殿に召還され、二十石の加増をたまはりけり。半次郎もお千代も、奉公の外に、萬左衛門にはさま〴〵の恩をうけしゆゑ、今日夫婦、恩

今より二百年あまりのむかし、御伽草紙とて、ところ〴〵に繪を入れたる十二種の草子あり、いづれも根なし事を書つゞりて、井筒のもとに髪くらべするうなゐ兒のなぐさめ草になしたる物なり。もとは繪卷なるを、つぎ〳〵梓にしたる物と見ゆ。これなん今いふ草ざう紙の根ざしなりけり。此根ざし、今はむさし野にはびこりて、はふ葛の絶えず、若草のめづらかなるぞ多ありける。さる中に、土筆の筆のみじかきさへに、妬婦の身を書綴りしは、玉ぼこの道のしをりともなれかしとてなん。ざれごと、

さしぬらす硯の海の淺ければみるめかひなき水ぐきの跡

八十四歳

山東庵京山

嘉永四亥年二月稿成同五壬子春上梓

たりにて、盲の幇間にて、出入場を歩き、おへみにも氣に入りて、酒の相手は、井の緣の茶碗、あぶないものなり。およそ女の道を知らざる女は、嫉妬はやけども、亭主の前も憚らず、最屓な役者の噂をなし、甚しきに至りては、言譯たゝぬ文を落して、三行半の騒になるも、亭主には嫉妬をくはせ、おのれは手前勝手のうば玉食はんとする、我儘の心より起る事なり。嫉妬やかば、其身は亭主より百倍つゝしむべし。わがつまと定めたれば、憎しとは思はねど、するの外に、ちよつと摘んで食べるは、下女が重箱と同じ事、根のある芋にはあらずと、今年八十にて、野暮ならぬ婆樣がいへり。おへみがやきもち、焦げすぎて食べられず、取除けて捨てらるゝ事、十二編にしるし引續き出板いたし候。めでたし〳〵〳〵。

者は、から四郎が娘に娶せたる、聟の半次郎と申す者なり。から四郎が妻お貞、操正しきゆゑ、御足輕寺岡平六、世話をいたし、お貞が娘も、半次郎も、母へ孝行盡し」かやう〳〵と、少しおまけも混ぜて申上げければ、「奇特なる者共なり、半次郎とやらん、其座を遁さず、母の敵を打ちしは、天晴なる事なり。から四郎が暇は、先代の事。あらためて召還さん」と舊のおあてがひに、三千石加增ありて、給人格に取立てられ、名も羽打からの丞と改めて、目みえなしければ、其身は元より、お貞、お千代、小太夫、平六、萬左衛門も、世話がひありしとて悦び、敵打ちたる手習師匠と、弟子も殖え、町宅して榮え、又平六が世話したるも奇特とて、褒美賜ひけり。

お千代と半次郎が事は、目出たく納りしが、をさまりかねしはおへみが悋氣の胸なり。悪玉の下女おひよのがすゝめにて、おへみが我儘常にまさり、酒も呑みならひて、下戸なる亭主へも憚らす毎晩の酒盛、嗅ぎつけて來る相手は、ろくな奴でなし。その中にも按摩の玉の一、少しは見えて、年は二十三、歯も磨き顔も糠袋つかふは、糠屋の一番子。それゆゑ身形も穢からず。琴も三味線も習はせしが、目明より覺わろくて、とても藝人にはなるまじと、親がおもひきりて習はせたる按摩取。おとし話、こわいろも少しは聞かれ、口先おもしろきゆゑ、按摩はつけ

ても残る花」と寄添へば、「あゝ酒くさい。今に酒はやまぬのぢやな」「なに止むものか。金がいやなら枕を貸せ」と執る手を拂ひ、又すりよるを、煙管でかつきと横面を、撲たれてがん平飛退り、「おのれめ」といひながら、すらりとぬき身に、迯出すお貞、肩先の片手打。折から歸る半次郎、かくと見るより、「親の敵」と聲かけて、拔打の後袈裟、切込む手さきは毎日の稽古、刀は小太夫より貰ひたる備前の業物、乳の下まで切下げたれば、只一ト打にて息絶えけり。お千代は母に駈寄り抱上げ、「これ母さん、手疵は淺い。心を慥になされませ」「おゝ、二人とも歸つたか。黒星眼平めが」半次郎「敵は私が仕止めましたぞ」トいふ處へ、あたりの人々馳集り、まづ醫者を招きて、お貞が疵を縫はせけり。さて重忠樣下屋敷の門前にて、親の敵打がたつた今ありしと聞きて、そりや見に行かんと集る大勢、かの寺岡平六も來りて、半次郎が手柄を褒めけり。お貞が手疵淺かりしゆゑ、命に恙はなかりけり。

十四段

敵打の評判、鎌倉中にて噂しければ、重忠殿の聞に入り、奥にて噂ありし時、かの玉川、「敵打の事は、小太夫能く存じ候」と申しければ、それ召せとて、小太夫に訊ね給ひければ、これぞ好き歸參の種と、「手疵の女は、以前召遣れし羽打から四郎が妻、打たれしは黒星眼平、打つたる

こしらへつきの刀を、半次郎に取らせけり。さて半次郎元服して、寺岡平六もとも〴〵世話をして、めでたく婚禮とゝのひけり。

十三段

夫婦の中はいふも更なり、半次郎、母へも孝行に仕へければ、お貞朝夕心やすかりけり。半次郎、晝はわが好きなる劍術の稽古に通ひ、夜は手習して、母が師匠する跡を續がんと心がけるよし娘に聞きて、お貞いよ〳〵喜びけり。さてある日、二十五日の休とて、夫婦打連れ、龜井の天神へ參詣がてら、あすだ川の花も見んとて立出で、宿はお貞ひとりなりしに、もはや夕暮、ふたりが歸る頃と、濯の湯を沸さんとする折しも、門口開けて入りたる顏、見れば屋敷にありし時、不義しかけ、夫から四郎に額を切られたる、くろぼしがん平なり。お貞びつくりの、顏見てがん平、「聞けばから四郎は死んだげな。孀ぐらしをたてとほし、娘の聟も取つたげな。机の數も見れば澤山、歷としたお師匠さん。それに引かへ、こなさんのおかげで扶持に離れ、今もつてこのざま、十兩ばかり貸して下せえ」お貞「主ある女に不義をいひかけられ、それが事の原となり、浪人したるわが夫、私もさま〴〵艱難したる、恨あるこなさんに、何のよしみに金貸さん。さア、出て行かしやれ、歸らしやれ」「これ〳〵、今もつてつれないな。年増になつ

と存じました」小太夫「いや感心な事、色も變ぜず魚を拾ひとりたる心の落付、見て居つた者共も感心した。さて、それについて、かのお貞事、お身もとも〴〵世話をせられ、手習師匠の株にありつき、追々弟子も殖えて、暮方にも困らぬよし。此上はお千代へ聟を取り、刀さゝせて、浪人を立てさせ置きて、折あらば歸參の願させたき所存。お身が世話で貰ひくれまいか」と頼むを聞きて萬左衞門、心のうちに、いつぞや小糸がすゝめしお千代と半次郎が事、思ひあふ中を添はせてやらんと思ひければ、「今申します通り、武士の胤ゆゑかして、兎角二本差したいと申すよし。半次郎は悅びませうが、母と兄とへ」小太夫「勿論々々、掛合ひ給はれ。もとより支度は決して入らぬ」ト話の折から、時廻り、「四ツ半で御座ります」

十二段

かくて萬左衞門宿へ歸り、まづ半次郎へ言聞かせけるに、お千代とは豫ての中、刀さす事をも悅び、「私宿へまゐり、母へも兄へも話しませう」とて宿へ至り、しか〴〵の由いひければ、十歲の時より恩を受けたる旦那のお世話ならば、萬事お賴み申すと言へと、此緣談とゝのひ、萬左衞門へ、半次郎母此事にて來りし時、半次郎が支度金とて、萬左衞門より母へ金十五兩を取らせければ、大いに悅び、小太夫も、切味はちわりをどだんばらひに試みたる備前の無銘、

十一段

廣田小太夫は、在番の二階住居、下は若黨二人、草履取に、庖仕の飯焚なり。二階には二間ありて、四疊ばかりの一間を居所となし、片隅には、三尺の落しがけ、床めく所に懸物はなく、竹の花活には、扇と鳥の毛の塵拂插してあり。物干に、惜しき松の枯れかゝりたるに、鉢はきらく〳〵したる染付、君よりの賜の、かく成果しなるべし。發句の摺物にて、唐紙の破れをかくし、兩掛を竝べて手簞笥のかはりとするも、假の浮世にかりの在番と思ひすてたるなるべし。

萬左衛門は、二三日おきには此所へ來るゆゑ、案内もなく二階へ來りければ、小太夫「是は萬左、好くこそ」萬左「今朝ほど御手紙ゆゑ上りました」小太夫「いかさま、返事にも後刻とありしゆゑ、待居つた。御用は此通りぢや」と書付を渡し、この掛合すみて後、小太夫、「異な事を訊ぬるやうぢやが、お身がいつも使によこす半次郎が親は何者ぢや」萬「彼が親は、星の井家の浪人者の、父果てて後、わたくし方へ奉公に參りしは十歳の時、只今は、彼の兄、瀨田樣へ住込み、母もそれに居ります。武士の胤とて、店の者が稽古いたせば、彼も柔術劍術の稽古、音曲よりは優しと存じ、店の者等も、知らぬふりして許しおきます」小太夫膝を打ち、「それでよめた。昨日」かやう〳〵と、半次郎が働きを委しく話しければ、萬左衛門打驚き、「左程ではあるまい

取、お名は存じて居ります。有難う御座ります」と塵打拂ひ、立去りけり。大鳥毛をはじめ、遠くに見て居たる大勢も、半次郎がはたらきを感心なしけり。大鳥毛「私も今、お屋敷へ行く處ぢや。ござらつしやれ」と大鳥毛、取てきの供を連れて立去りけり。廣田小太夫もこれを見て、行過ぎけり。十七の丁稚が、かく手のきゝたる事、次を讀めばわかる。

十　段

萬左衛門が妻嫉妬のおへみは、悪玉の下女おひよのが勸めにまかせ、奥の事は何事もおひよのにまかせ、朝も萬左衛門よりは後から起きて、朝飯をいつしよには食べず。今朝は珍らしく、萬左衛門より先へ起きて、下女に髪結はせるは、何事かと思へば、芝居へ行くゆゑなり。それも、宿の下女二人に、かのおひよの、船宿の嚊と娘まで連れ行くは、きのふ二間ものいひつけ置きたるゆゑなり。それも、萬左衛門へは話さず、わが儘の計ひなり。さて萬左衛門は後より起きて、楊子つかひ居たる處へ、かの廣田小太夫よりの手紙、開き見れば、御用の事もあり、外に申し談じたき事もあれば、今日中に來るべしとの文體なりければ、おへみが、芝居へ參ります、とばかりいひて、出行きしあとにて、萬左衛門、かひごろしの六十越した下女の婆に、奥の留守させて、小太夫方へ立出でけり。

第九段

それはさておき、こゝに彼の萬左衛門が氣に入りの召使半次郎、今年十七歳なれど、小ぶりゆゑ、角は入れけるが、未だ前髪おとさず、さかな箱提げて使に出し道にて、傍見をなしたるはずみ、年若き侍につきあたりしを、この侍はさる家の家來、名さへ酒のうへぬく藏、居酒屋にて獨呑に傾けて、くらひ醉の千鳥足、半次郎につきあたられて尻もちつきしを、往來の人に笑はれて、ます〳〵腹たち、「やい、丁稚め」「はい〳〵、御免なされて下さいまし。傍見いたして、つい粗相」「やい、侍をつき倒し、粗相で濟むか」「はい〳〵。此通り、土に手を突きあやまります」「いや、許さぬ」ト胸ぐら把らんと延す手を、拂ひのければ、「ちよこざいめ」と拔打に、ひらりと見えしを半次郎、さかな箱にてかつきと受ける。魚は内よりばら〳〵〳〵。此時廣田小太夫通りかゝり、使にもたび〳〵來て、見覺ある半次郎、手並にも驚きつゝ、とりさへやらんと思しに、これも通り合したる相撲取の、顏は知りたる大鳥毛、馳寄りて、「ぬく藏樣、見苦しい」「おゝ、お抱の大鳥毛か。其所退け」「はてさ、なんであらうと、相手は前髪」「でも、おれを突倒した」「はてさ、子供に突倒されたとおつしやるほど、貴方の恥ぢや。ハヽ〳〵〳〵。ゆるしてお遣りなされ。これ若衆、早く逃げろ」「有難う御座ります」と靜に魚を箱へ拾ひ、「關

に、妻のお貞が看病疲れと、貧苦に迫る心づかひで、乳いでず、泣く子の聲が病の障。わが子は再びまうけもすべし、夫の命にかへられずとて、捨てたるとの事」玉川「やれ〳〵痛はしや。それとも知らず、お拾ひなされたは不思議な事。して、から四郎殿は息災なか」「いや、一旦は本服したれど、はかなくなり、妻のお貞は操をたてて再緣せず。あまり不便な事ゆゑ、身共世話をいたして、養ひ親の手を切りて、實の母お貞へかへし、只今はお貞、お下屋敷の御門前にて、手習の指南。私が拾ひし娘お千代へ聟を取り、刀さゝせて浪人をたてさせ、折あらば、歸參の願も取持ちやらんと存ずる。こりや內々の事」ト捨子の話をさいはひに、お千代を拾ひしあらまし、歸參させたしと思ふ事をも打明すは、この玉川は情深くて、心かしこく、十歲より此所に御奉公して、今中老のきゝ者、殿にも、奥方にも、御氣に入りにて、七十の老女はするもののやうに、玉川が頷けば、大方の事は濟むゆゑに、小太夫かく物語たるなりけり。玉川「いかさま、あの人の浪人は、くろぼしがん平が、內方へ不義しかけた事より起りし事、喧嘩の二人お暇は、片手落にもならぬゆゑ。あの人は、私も手本もらうた人、せめて位牌が歸參して、跡目が立たば、草葉の蔭でも悅ばん」ト話の折から、おちごの御小姓、「玉川樣、殿樣御入で御座ります」

敎草女房形氣　十一編下之卷

八段

（上のつゞき）その日の泊の亭主へ賴み、養ふ者あらばくれてやれと、金子をつけたれば、亭主も心あるものにて、さいはひ宿の嫁に乳あるゆゑ、まづ今宵はとて、其後は如何いたせしやと、折々は思出す事もありしが、此時の在番の留守に、悴が生れしゆゑ、拾ひ上げたる女の子、今年は十六歳ならん、いづれにあるやらんと、思出しゝに、いつぞや不思議な事で、十六年以前拾ひし子に逢ひました」玉川「おや〳〵、それは不思議な事。それでは育てられた親も知れましたらうな」小太夫「いや、養ひ親ばかりでない、わけありて、捨てた親まで知れました」玉川「左樣かえ。定めて賤しい者の子で御座りませう」「いや、左樣でない。こりやお前限の話ぢやが、私が手に附き、物書を勤めて居た、羽打から四郎が娘」玉川「おや〳〵、先殿樣の時、浪人した人、私がお小姓であつた時、手本もらうたゆゑ、宿下りの時、宿へも訪ねしが、內方にも逢ひたる、その內方の、產みし子を捨てましたのか」小太夫「さればさ」玉川「いかに浪人したればとて、子を捨てるとは聞えぬ事、產後に母が亡くなりましたのかえ」「いや、から四郎が長煩ひ

おやく、捨子を拾ひし事あり」玉川「此所へ入口の道にて、在番に著いたす時、も久しいあと、子を拾ひても致在番の身なれば、お聞きなされ。されば、」小太夫「その子はどうなされましたえ方なく、(下へつゞく)

らざる身請なさるぢやないか。悋氣は女房の役目なれど、それもさらけ止めておき、まゝなお慰なされませ。男なら、あなたの御家督、一年に五十兩や百兩、むだにお使ひなされたとて、誰が何といひませう。恨めしいの、口惜しいのが疊まると、お病になりますぞえ」と薪に油をのせて焚つけければ、素より曲る釵で、頭かきつゝ頷きし折から、「玉の一で御座ります」と唐紙開けるは、出入の按摩、少し見えて、綺麗なる按摩なりけり。

七　段

秩父庄司重忠殿の家來、かの廣田小太夫は、奥向の事をも兼役に勤むるゆゑに、中老玉川に用ありて、話のついでに、玉川「申し、小太夫さん。昨晩、御裏御門の前に、捨子があつたぢや御座りませんか。不便な事ぢや。その子は、どう致しましたな」小太夫「女の子ぢやさうなが、お作事へ連れて行きたれど、乳がなくて泣くゆゑに、前町に乳貰にやりたれば、貰人があるゆゑに、金子をつけて、今朝ほど遣されたさうな」玉川「それは仕合な子ぢや。おやしきを命の綱とおもうて、捨てたでもあらんが、わが子を捨てるとは、鬼の樣なる親心、能うまア思切りて捨てましたな」小太夫「焼野の雉子、夜の鶴、子を思はぬはなけれども、それを捨てるには、育てられぬよく〲の譯あらん」玉川「左樣さ、わけを聞いたら、さぞ哀れな事で御座りませう」小太夫「私

十兩やりきりとて、小糸より渡しければ、大きによろこび、師匠の株の譲受もとゝのひし事を、平六より小太夫へも物語りければ、小太夫も共々に心を添へ、お貞、お千代を連れて、師匠の跡へ引移りけるに、前の師匠よりは手もよく、年も若く、弟子の扱ひもよしとて、下りし弟子も立歸るほどなりけり。「此上はいよ〳〵お千代へ聟を」と、平六がいふを聞きて、小糸、平六へ、「年はゆかねど、半次郎は如何あらん」といひければ、平六「いかさま、見所ある者なれど、町方の丁稚勤めし者、刀さゝせる聟には」と辭む心の、物堅き叔父へ、お千代と半次郎が、わけある事はいひがたくて、そのまゝに打置きけるに、一ツの事ありて、目出たく聟となる事、下の巻を讀みて知るべし。

六段

それはさておき、こゝに又、嫉妬のおへみが氣に入りの下女おひよの、ある日萬左衛門の留守を見て、おへみにむかひ、「いつぞや、船宿の奥座敷にて、小太夫樣に小むづかしい事いはれてから、あなたのお胸が開けぬ樣子ぢやが、さりとはお心が狹い〳〵。旦那が心の儘な事なさるなら、あなたも心の儘な事なされませ。あとの月は、臺所で炭が五俵よけい入つたの、鐵漿つけるに、蠟燭は止せのなんのと、あなたが始末なされても、旦那は、下女が零落れたとて、入

て顔に袖はたゞならず。さては朋輩でありし時よりの事ならんと、心にうなづき、立別るゝまで見屆けけり。これこの二人が夫婦となるべき、はしとぞなりにける。

四　段

かくて此日の夕方、萬左衞門、平六方へ來り、いろ〳〵ありて後、小糸とさしむかひの話に、小糸萬左衞門にむかひ、お千代が母お貞に、手習師匠の跡を讓受けたきにつけ、平六より賴みにて、金七兩借りたきとの事をくはしく語りければ、地面の十二三も有る萬左衞門、七兩ぐらゐは、頤で領きければ、小糸又いひけるは、「師匠になれば、お千代に聟を取りてやらんと、叔父平六が申しますゆゑ、半次郎を聟にしてお遣りなされ。左樣いたしたならば、お千代も、半次郎も、貴方の恩は忘れますまい。そのわけは」かやう〳〵と、窓より見たる事、聞いたやうに二人が中を話し、頻にすゝめける小糸が心は、千代吉といひし時、萬左衞門を四五度、客にしたる事を知りて居るゆゑ、もしや珍しき花に、心うつらんかとて、遠火にうまく燒く嫉妬なりけり。彼のおへみに比ぶれば、小糸が才は遙にまされり。

五　段

さて萬左衞門、平六がたま〳〵の無心といひ、小糸を預けおく義理もあれば、七兩の無心に、

三　段

それはさておき、福德屋萬左衞門が召使ふ前髮、今年十六歳の半次郎、心につれて顏も美しく、利發にて忠義のこゝろざしもあるゆゑ、萬左衞門末たのもしく思ひ、目をかけて使ひけるゆゑ、小糸を圍ひおきし使は、この半次郎ばかりなりし事は、八編にも見えし如くなり。さて小糸を譯ありて、寺岡平六方へ賴みおくにつけても、この半次郎のみ使をなしけり。さて又千代吉、お千代といひて、萬左衞門が腰元を勤めし時、半次郎と深く契りし事、前の卷に記しあり。互に忘れね中、久しく絕えしに、半次郎ある日、小糸方に使に來りて、お千代と顏見合せ、互にびつくり、「おや、半次郎どのが」「お千代どの。どうして此所には」「これにはいろ〳〵のわけある事」トあたり見廻し、「懷しや」ト袖を取る折、小糸が此所へ來りしゆゑ、半次郎「旦那樣より」と文を渡せば、小糸そのまゝ立ちながら見て、「旦那に申しておくれ。萬太郎は疱瘡では御座りませぬ、熱も今日はさめて機嫌よく、乳も澤山呑みますと申しておくれ。夕方にはお待ち申しま す、御返辭は上げませぬと、申しておくれ」「はい〳〵。左樣なら」「これさ、まア」「いえ〳〵、又外へお使に參ります」ト立歸りぬ。小糸は間もなく小用にゆき、手をそゝぐ窓より見れば、お千代と半次郎、となりの垣根の前に立ちてひそ〳〵話、何をいふやら聞えねど、手に手を取り

て、このお屋敷の前町に、年頃居た女の手習師匠、年が寄つたゆゑ、在所へ引込むにつけて、もし入れかはる女の手習師匠あらば、家に子供をもつけて讓りたいとの事。疊、建具、鍋、釜までそのまゝに、十二兩ぢやと、前町の酒屋がはなし。少し此方に心あてがあるといふたは、此方樣の事。惜い筆を埋めおき、針とりてひと仕事せんより、筆取りて師匠すれば、人ぎきもよく、死なれた此方樣のつれあひ、羽打から四郎殿も、草葉の蔭にてよろこばん。その内には、お千代に聟を取り、浪人を立てさせおかば、家柄のから四郎、さまでの事もなくて浪人した故、歸參する時節もあらん。師匠のあと、讓受けるにした處が、先だつものは小判。それも小糸に話して、萬左どのに七兩借りれば、あとの三兩は私が才覺する。十兩ならば、負けやうと思ふ。なんと思はしやる、手習師匠する氣はないか」トいひければ、お貞は打喜び、「いやも、何から何までお前のお世話。それもこのお屋敷に居つた時、隣同士にてつれあひが、一方ならず親類同然」平六「いや、そればかりぢやない。此方樣が年頃の心立、又つれあひへの貞節に愛でて、世話もするのぢや」「有難う御座ります。此上にも師匠の跡、お世話なされて下されませ。お千代が櫛、笄、釵、賣代なさば、四五兩にはなりませう」「いかさま。兎も角も小糸にも詳しく話し、萬左どのへ、私が一札入れて、借受ける相談せん」と差向ひにて話しけり。

お出入願ひあげますといふたは、後の別となりし二代の馴染、一方ならず思ふゆゑ、其方への意見、心には如何樣に思ふとも、詞の禮義はあるべきに。したが、その筈〳〵。よき暮しする親の手許にてわがまゝに育ち、武家のよしある奉公もせず、禮義を知らぬはもつとも。しかし、好い聟を取り、家繁昌するとよろこびて、萬左衞門に優しくせよ。こりや己がいふではない、其方が親の代にいふのぢやぞ」「はい有難う御座ります」と小糸、千代吉を尻目にかけ、「さぞ好い氣味であらうな」ト一言いふもにくていに、おひよのを連れて歸りけり。

二　段

かくて小太夫と萬左衞門が計ひにて、千代吉をまことの母お貞にかへし、名も元のお千代と呼ばせければ、親子の悦いふも更なり、このお貞をかくまひおく、小太夫と同じ屋敷の足輕、小糸が叔父、寺岡平六夫婦も悦びけり。小糸が母と共に、この寺岡平六方に居りて、萬左衞門折々小糸に逢ふ事の譯は、十編にくはしく記せり。さてある日、平六、お千代が母お貞に申しけるは、「親子ふたり私が内に居るも、何かにつけて心遣ひもあらん、それゆゑに、在番衆のすゝぎ洗濯したて物にて、米の代入れらるゝも、わしが足輕のくらしゆゑ、却て氣の毒千萬。とてもなら、わが内にして稼がつしやらば、心づかひもあるまいと、嬶も常々いうて居る。それにつけ

まかせなされと、我にかはりて萬左が身請は、義理と情、いろがましき事にあらず。さすれば、お身が千代吉をとらへ、こゝろ山たてて罵るべき筋にあらず」おへみ「悋氣は、身請ばかりぢや御座りませぬ。この千代吉は、元わたくしが腰元につかひし者、駈落いたして、主人に暇くれた奴」小太夫「その事も、千代吉が話に聞いた。藏の二階、締殺されんとしたゆゑに、駈落したと詳しく聞いた。今こゝで、その事を千代吉にいはさうか」おへみ「さあ、それは」小太夫「言はされまい。事の起りは、お身が悋氣嫉妬よりおこりし事、萬左が聟に來りしより、地面も二ッふやせし由、これにて身持はいはずとも知れてある。これに居る小糸を軒の妻となし置くも、其方が腹に子なきゆゑなり。果して小糸に胤を宿し、萬太郎と申す由。おのしが子とも爲して養ふべきに、おのしが叔母の執成にて、小糸にやう〳〵一度は逢ひしが、兎にかく小糸を妬むよし。子なき時は妾あるは、町人にもあるならひ。それをなんぞや、小糸が命を縮めんと、妬みの沖を越えたる仕業もありしと聞く」おへみ「そんな事、少しも覺は御座りません。ほんに思へば、惡い所へまゐりまして、お目出たい御身請のお邪魔して、御面倒な御意見まで聞きました。さアおひよの、歸りましよ」小太夫氣色をかへ、「こりやおへみ、面倒な意見とは、入らざる事といはぬばかり。能う聞けよ。其方が親病氣の節、見舞に行きたる時、私亡跡までも、この家はお見捨なく、

御機嫌様能う」ト少しへこんで見ゆるは、親の代よりお出入する屋敷の重役、面伏にぞ見えける。小太夫はさし心得、小糸に對ひ、「其方は小糸か、萬左衞門が噂にて、豫て聞きたるぞ。母にも孝心なる由、奇特な事ぢや。こりや千代吉、身請されて嬉しいか」千代吉「何から御禮申しませうやら、此度勤を免れ、實の母の手もとへ歸りますも、あなたのお情。御禮は口では申されませぬ」小太夫「おゝ、もつとも〳〵」おへみは、小太夫と千代吉が詞を聞きて、樣子ありげに思ひ、嫉妬を暫く心に納め、下女のおひよのと顔見合せ、歸支度を見て取る小太夫、「こりやおへみ、お身が此所へ來たは、悋氣妬みとは、その顔に見えてある。好いついでぢや、いふ事あり。これなる千代吉を、身共が身請せんと、萬左衞門に語りしより事起り、萬左が身請したるその仔細は、この千代が親は、身共が下役を勤めし物書、故ありて浪人なし、貧苦に逼りて育てかね、捨てたるを、それとも知らず身共が拾ひ上げ、金子を添へて人にくれしは、十六年以前の事。草の中に聲たてし露の命のみどり子も、育ちて花の櫻風呂、圖らず逢ひて樣子を聞けば、名さへ熊手のおよくといふまゝ母に賣られし由、拾ひあげたる子と思へば、不便におもひ、親の手を切り身請して、實の母、かの浪人したる者の妻に返しつかはさんと、萬左に事の仔細を話し、身共在番ゆゑ、身請の金子、國へ歸るまで用立てくれよというたれば、千代吉が身請は、私にお

敎草女房形氣 十一編上之卷

初段

福徳屋萬左衛門、義理と情にて身請したる櫻風呂の湯女千代吉を、萬左衛門船宿へ連來りしに、萬左衛門がかくし妻、萬太郎といふ子まで生したる小糸は、心優しき女ゆゑに、千代吉を迎へがてら、又どのよな女かとも見たくて、此船宿に來り居たる顔見て、萬左衛門も嬉しく、千代吉に逢はせ、船宿へも殘らず山吹の花を咲かせ、酒盛の最中、萬左衛門が妻嫉妬のおへみ、氣に入りの下女惡玉のおひよのを連れてこゝへ來りしは、おひよのがつけ口したる故なり。萬左衛門は入聟ゆゑ、妻のおへみが顔見るとそのまゝ、裏口より逃去りけり。おへみは、千代吉が胸ぐらとらへて、恨のやきもち燃えつくを、船宿の嚊が打消して宥める處までは、十編に委しくしるせり。さてかゝる處へ、重忠殿の家來廣田小太夫入來り、この體を見て打驚く。船宿の嚊「これは〳〵旦那樣、好い處へ」小太夫「をゝさ、千代吉が今宵の身請、萬左衛門が豫ての約束ゆゑに來りしなり。萬左衛門は如何いたした」船宿の嚊「はい、只今其所へ」小太夫うなづき、「いかさま、樣子は知れた。こりやおへみ、久しう逢はぬ。無事で目出たい」といはれて、おへみ「はい、

およそ婚禮するは人倫の大儀なり。されば媒なきを野合といひて、公然たる夫婦にあらず。御道具を七日運ぶ重きも、輕子に一荷持たせやる輕きも、媒あれば、かはる事はなし。夫も是も、悋氣は野暮と品さだめ、紫式部が筆にもいへり。色直しにあからむ顔の、花嫁と呼ばるゝ程は、悋氣の角も前插の下にかくせど、御内方に至りては、角振立てて小男鹿の、痩せた亭主がふとり縞、やりたる先を糺し、下女が此頃白粉つけるを、店の手代とは知らず、面當に芝居見に行くなど、わが身代の減るを知らず。女さかしくして、牛賣損ひ、牝雞晨して、家の藏に草を生す、妬婦貞女のいろ〳〵絹、綴合せし鶉衣、深草の、ふかく人情を探りて、をしへ草の一本ともなれかしとは嗚呼がまし。たゞ卓文君が爐邊の慰めにとて、女房形氣の中年増、十一篇の筆を探りぬ。

八十三翁

山東庵京山しるす

嘉永四年辛亥　春稿本　冬上梓


○菊月
○湯女 千代吉
○丁稚 半二郎


○初喜
○妬婦
○孫生
○小喜が子
万太郎
小糸

小糸「そりやお嬉しう御座ります」ト話の折しも、いつか間諜を入れおきたる、萬左衛門が本妻おへみ、下女のおひよのを供に連れ、案内知りたる馴染の船宿、中庭の座數の障子がらりと開けたる顔付の怖しさ。萬左衛門びつくりし、どの様な事いはれて恥かゝんよりはと、裏口より逃去りけり。おへみは、千代吉が髻摑んで引据ゑ、逃る小糸が帯に手をかけ引倒す。主人は勝手へはづし、女房は差寄りて取さへければ、おへみは、倒れたる燭臺と共に燃上り、「この千代吉めは、私がつかふた腰元、小糸にも言分あり」宿の女房「左様でも御座りませうが、今にお屋敷の小太夫様もお出なされます。まアお靜になされませ」ト宥めけり。これより小太夫こゝへ來りて、このさわぎをとりしづめ、理非をつけて面白くとりさばく事、又千代吉、おちよとて腰元たりし時契りたる半次郎に、顔をあはす事のなりゆきなど、この次の十一編に記し、ひきつゞき出板仕候。めだたし〳〵〳〵〳〵。

十一段

かくて萬左衞門、千代吉を連れて船宿へ落著きたるは、夜の五ッ頃なりけり。こゝに又萬左衞門がかくし妻として、彼の寺岡平六方へ預けおく小糸は、萬左衞門、千代吉に逢初めしより、この度身請する事も、委しく萬左衞門語りけれども、小糸少しも悋氣の心なきゆゑ、千代吉にも、萬左衞門にも、花を持たせんとて、千代吉を待受けながら、どのよな女かと顏も見たく、この船宿の中庭を隔てたる座敷にて、宿の女房と話して居たる處へ、萬左衞門、千代吉を連れて來り、小糸が顏見て大に喜び、千代吉へ始ての挨拶、詞のつぢつま、五分もすかざるは、以前三筋の糸にて世を渡りたるゆゑなり。萬左衞門、千代吉が身請の祝儀とて、この船宿へ總花をふらせ、小糸が申付けたる待受けの酒肴も來り、船宿の夫婦も此所にありて、旦那々々と待遇すは、屋根舟こしらへた時も、餘程貰ひしゆゑなり。さて萬左衞門、小糸にむかひ、「おのしへ豫て話した通り、千代吉は實の母へ渡すのぢやが、さすればおのしを預けておく平六方の厄介、あの狹い所に、鼻を揃へても居られまい。おのしはいづれ別宅をと思ひしに、玉川町に好いうりするゑがあるゆゑ、昨日手付を渡して置いた。少し造作を直さにやならぬ」小糸「別宅はよけれども、又お内の」萬左「いや、案じやんな。おへみが嫉妬は、少し火の手がうすくなつた」

道様の手許にありて、善悪の勘定一分一厘間違はず、あゝ怖るべし〳〵と、塵劫記の作者がいへり。

九　段

こゝに又萬左衛門は、千代吉を身請の事にて、月花屋へたび〳〵行きけるを、嫉妬のおへみへは深くかくし、秩父のお屋敷へとて内を出づる。さて萬左衛門は、義理づくの身請とはいふものの、その事にて月花屋へ行くたびに、千代吉にも逢ひければ、子までなしたるかくし妻の小糸より、蕾の花の千代吉が珍らしく思ふ心、色にあらはれ、秩父のお屋敷へ行くといへば、何かそは〳〵するを、嫉妬のおへみ心をつけるを、萬左衛門は知らざりけり。

十　段

好事門を出でず、悪事千里を走るのならひ、態手のおよく、道端の石に頭を砕き死したるは、日頃の酒の千鳥足、躓き轉けたるならんと、その噂月花屋へも知れ、萬左衛門も聞きければ、鬼に瘤を取られたる思ひ、手切の百兩に及ばず、約束の七十兩にて、千代吉を、めでたく身請の門いでを祝はせ、待たせおきたる屋根舟まで、大勢送る。千代吉が嬉しさは、籠を出でたる鳥、網を脱けたる魚の如し。

かの寺岡平六通りあはせ、どろばうと聲かけ、女が追行くを見て不便と思ひ、仁三が肩先に手をかけしと見えけるが、仁三はもんどりうちて倒れけり。平六はそのまゝ立去り、およくは馳寄り、立上る仁三が胸ぐら摑み、横頰二ツ三ツ打擲き、「やい野郎、おれが子にもしやうかと思ひ、二年越の居候、褌まで洗つてやりしに、娘が身賣の二十八兩、横取りして駈落した恩知らずの畜生奴。さア、連れて出る所へ出るぞ。うしやアがれ」仁三「行くから、此所を放しねえ」「いゝや放さぬ」「はてさ、まア放しねえ」「いや、放さぬ〱」と兩手で胸ぐら、放さばこそ。仁三はこゝを逃去らんと、取られし胸ぐら捻放し、力任せに突倒されしが、藏普請の葛籠石に眉間をうちつけ、打破り、血潮流れてびり〱〱、敢なく息は絶えにけり。仁三は立寄り、見てびつくり、「ヤア、こりや死んだか」トいふ口へ手をあてて、逸足出して逃去りけり。思ふに此時、寺岡平六、仁三を支えずば、およく斯る最期は爲まじ。さあらば、千代吉が身請、百兩の手切金さゝはりとなりて、すら〱と身請はなるまじけれど、百兩取らんといひしおよく、此所に死したるは、辛くあたられしまゝ母ながら、育てられたる恩を忘れず、まことの母にめぐり逢ひても、まゝ母を捨てざりし千代吉が心を、天道樣憐み給ひて、仁三が手を藉り、およくが頭を切石にて割つけたまひたる、天道樣の算盤なるべし。善惡のひかへ帳は、二一天作、天





「兎も角も小太夫様へも相談して、挨拶せん」と、口ではいへど、心では、よしなき約束せしと悔みけり。

八段

こゝに又およくは、月花屋より立出しは、夜の五ツ頃なり。酒は呑む口、著肌は寒し、百兩とはいふものの、八十兩ぐらゐは違ひなく取れる事と、心に奢がつきて、米屋と店賃にあてておきたる巾著の一分をたのみにて、大きな煮賣屋の二階へ上り、さまぐの食物誂へ、ひとり手酌の茶碗酒、したゝかにたべ醉ひてこゝを立出で、駕屋あらば乘りて行かんと思ふのも、奢がつきしゆゑなり。此時道端に汁粉屋荷を下し、一人の男つくばひて、汁粉を食べて居る處へ、およく立寄り、「汁粉屋さん、こゝらに駕籠屋はないかえ」といひながら、汁粉をたべる二才の顔を、しるこの行燈のあかりに見れば、およくが所へ居候に置きたるだいばの仁三といふごろつきなり。この仁三は、およくが抱寢をしたる者にて、千代吉を、およくが身賣したる金二十八兩、横取りして駈落したる奴なりければ、腹立上戸のおよく、仁三が顔見て火の如く怒り、「野郎奴、見つけたぞ」と飛かゝるを、仁三は身に過あるゆゑ逃出すを、およく「どろばうどろばうく」と追かけゆけども、女のなま醉、此方は股引の二才、遙か離れて逃行く折しも、

門、立歸る道より月花屋へ至り、主人清六に逢ひ、小太夫が心底を委しく語り、身請の事をいひければ、清六も情ある俠氣のあるものなれば、千代吉が身の代金を安く負けて七十兩と定め、まゝ母の手切をば、二十兩にて請合ひければ、萬左衛門心には、手切とも七八十兩と思の外、百兩につばまるゆゑ、少し心にかなはざりしが、相談を極めけり。

七　段

かくて月花屋の亭主清六、千代吉がまゝ母およくを呼寄せ、千代吉をさる客、色氣なしの義理づくにて身請する事、かやう〳〵と委しく語り、「親子の緣切として二十兩、此後無心いふまいとの一札は此通り。得心ならば、今私が立替へて二十兩渡すべし。夢に牡丹餅の二十兩、得心であらうな」といひければ、およく暫し小首を傾け、「私は物が讀めぬゆゑ、一札には何とあるか知らぬが、此後無心いふまいとの約束なら、百兩を一文缺いても厭で御座んす」ト聞きて清六、いろ〳〵にいひけれども、およく、千代吉を育てたる物入嘘八百を言竝べ、更に得心せざる故、「然らば身請の主へ申し傳へ、又こなたを呼びにやるべし。まづ今日は歸られよ」とおよくを歸しけり。さて清六は、萬左衛門が馴染の船宿へ至り、萬左衛門を呼出し、およくが、二十兩にては得心せざる由を語りければ、萬左衛門、親子の手切百兩と聞きて、ぎよつとなし、

羽打から四郎幽靈の姿を現したるは、妻と娘に心ひかれて、浮ばざると見えたり。いかにしても不便の事なり。から四郎事は身分は輕けれども、我が屋敷數代の家なり。且又我十六年以前拾上げたる千代吉なれば、それと知りては見捨てがたし。彼といひ是といひ、我千代吉を身請なしてまゝ母の手を切り、實の母のお貞へ戻し遣したし。それにしては、金子百兩もあらばととのふべし。如何あらん」萬左「左樣で御座ります。貴方のお情で、實の親元へ歸すと申す事を打明けて話しましたなら、月花屋の亭主も心あるものゆゑ、千代吉が身の代五六十兩では、得心いたしませう。まゝ母の手切が二十兩といたしても、七八十で身請がとゝのひませう」小太夫「それならば心やすし。さりながら、身共在番の事なれば、右の金子身共に貸してはくれまいか。來年在所へ歸り、利足を添へて返すべし」萬左衞門「いや、お話の思召ならば、私、千代吉を身請すべし。千代吉は十三歳より十五歳まで、私方にて腰元に使ひしもの。しかのみならず、いつぞや貴方を月花屋へお連れ申した時、一座四人、持ちたるものを仲居に持たせやりて、相方を定めし時、私が扇を千代吉が取りて、相方となし、その後二三度も枕の塵を拂はせたる千代吉、貴方に身請をさせまする譯にはあらず。身請の事は、兎も角も私へおまかせなされまし」小太夫「然らば頼み申す」トいふ處へ、外の町人來りければ、この話こゝに止みて、萬左衞

合せて、小太夫を拜むさま、禮をいふ樣子なり。その顏を見れば、我が下役にて朝夕使ひたる、浪人の羽打から四郎にて、今二階に居るお貞が亭主、千代吉が爲には父親なり。さては我、捨子を拾ひとり、今又親子を引合せたる禮とて、幽靈姿を現しけるか、トおもひつゝ、「お身が妻と娘をば、我よくいたはり遣すべし。心を殘さず成佛せよ。南無阿彌陀佛〳〵」と稱へければ、なほ手を合せて伏拜み、につこと打笑みて消失せけり。小太夫もとの座敷へ歸り、幽靈に逢ひし事は口へ出さず、お貞と千代吉と、あらためて親子の杯をさせ、床の間に活けたる椿の枝を硯蓋の臺へ載せ、玉椿の八千代は、千代吉が行末を祝ふ島臺なりといひければ、親子はもとより、人々興じて喜びけり。この祝しるしありて、千代吉、お千代といひたる十五の時契りたる、萬左衞門が召使半次郎を聟に取り、もとの屋敷へ歸參して親の跡を繼ぐ事、十一編に委しくしるす。かくて、やゝ時移りければ、各別れて歸りけり。

六　段

さてその明る日、萬左衞門、申付けられたる用の事にて、秩父の屋敷へ至り、小太夫、萬左衞門へ對ひ、昨日千代吉を母に逢はせし時、かやう〳〵と、から四郎幽靈の姿を現したる事を語り、さて言ひけるは、「きのふお身が聞きたる通り、お貞が千代吉を捨てたるは、眞實の貞女なり、

へ預けると僞り、米上笊へ其方を入れ、もしやは後の紀念とて、守袋を肌につけ、つぎを當てたる風呂敷へ、包んで抱へて立出し、その時の悲しさ不便さ。推量してたもいなう」と聲もなみだに咽返る。千代吉も涙を拭ひ、「おはなしを聞きますれば、捨てさんしたも尤至極。さりながら、まゝ母の辛かりし度々には、なぜ捨てて下さんしたと、紀念の守を恨みし事も御座りましたに、思ひもよらぬ小太夫樣のお情にて、親子めぐりは逢ひつれど、育てられたるまゝ母は、熊手のおよくと、人にさへ呼ばるゝ人、酒を呑めば氣があらく、打叩かれし生疵の、絶えた事は御座んせぬ。さればとて、育て上げて下さんした母さんゆゑ、今お前に名乘合ひても、お前の儘にはならぬ私、捨てさんした其時に、死んだと思うて下さんせ」と母の手を取り咽返る。これを見て小太夫はじめ、萬左衛門も、平六も、みな涙さしぐみ、小太夫お貞にむかひ「二十四孝のその中に、郭巨が釜にも劣らざる心底、いとしと思ふわが子を捨てて、夫の本服を祈りしは感心なり。して、から四郎はいかにせしぞ」お貞「一度は床を上げしが、程なく又もや煩ひつき、歸參もかなはず此儘死ぬるは、いかなる因果ぞと、今はの時も申しました」ト涙に袖を濡しけり。さて小太夫小用に立ち、長き廊下を傳ひ、用を達して歸らんとなしけるに、廊下に平伏して居る人あり。小太夫あやしみ、持ちたる雪洞に照し見れば、この人、頭を上げ、手を

教草女房形氣十編　下之巻

五　段　（其二）

羽打から四郎といひしお人、筆は素より其役目、武藝にも疎からず、俳諧など好み、心立やさしき生れ、夫婦むつましく暮しゝに、同じ屋敷の人、私へ戀慕の事より事起りて、戀慕の人も、我夫も、永の御暇、浪人の後其方をまうけ、乳も澤山出でしゆゑ、日にましに智恵づきて、肥太りたる笑顔の愛らしさ。貧苦も此子に忘るゝと夫の悦び。然るに夫から四郎殿、始は風邪の心地なりしに、次第に重き永煩ひ、あれやこれやの物入に、一ッ賣り二ッ賣り、著肌も寒き秋の末、貧苦と病苦の看病に、私までが痩細り、乳が出ぬ故かはいやな、肥りしわが子も痩こけて、夜はなほさら泣止まず、夫がすや〳〵寐入るを見て、やれ嬉しやと思ふ時、又泣出す悲しさ辛さ。夫はこれに目を覺し、それといはねど目に涙。かゝる悲しさ度重り、つら〳〵思へば、同じ屋敷に勤めたるくろほしがん平といふ人、私に戀慕の事より起り、此方の人お暇となりしゆゑ、浪人したも私ゆゑ、さすれば夫の一命を、助けにやならぬと思込み、子の泣く聲は病の障、子は又もまうくべし、わが子に夫はかへられじと思ひきり、から四郎どのへは、乳ある方


女房形気
下のまき
十へん
京山老人作
とよ国画
山田や板

以前千住なる阿蘇宮の鳥居の前にて拾ひし捨子、かやう〳〵」とあらましを語りければ、お貞「そんなら其時、拾ひ給はりしは貴方でありしか。夫とも知らぬ子ゆゑの闇路、お拾ひありしその子の行方、いかに成行き候や」ト涙に曇る聲を聞き、千代吉は怺えかね、唐紙引開けお貞が膝へ走り寄り、顔見てびつくり、「さては私がさいつ頃、まゝ母の辛き故宿を駈出し、身を投んとしたる時、帶をとらへて止めたる女乞食、ではない、女中さんは、實の母さんであつたかいなア」お貞「をゝさ、守袋を取出し、身の上を語りしゆゑ、わが娘とは知りたれども、それといはれぬわが身の賤しさ。私は母ぢや、捨てた親ぢやとも言ひ難く、別れし時の悲しさ辛さ。もう此世では逢ふまいかと、思ひもよらぬお方に拾はれたる小太夫樣のお情にて、今相見るは夢心、ようまめで居やつたなう」千代吉「顔さへ覺えぬ實の母さん、なぜ又捨てて下さんした」「おゝ、其恨はもつとも。そもじを捨てたる其仔細、一通り聞いてたべ。これ千代吉、其方の父親は此所に御座る小太夫樣と同じ御屋敷秩父庄司重忠樣の御家來にて、御扶持は僅なれども、歴々にも負けぬ家柄。（下の卷へつゞく）

の女を連れて、此所へ參れと申しやらん」と硯、卷紙取寄せ、さら〳〵と認め、萬左衛門に計はせて、持たせやりけり。

五 段

此日も暮れて火ともす頃、平六、お貞を連れて月花屋へ來り、萬左衛門に逢はんといふ。仲居かくと告げければ、萬左衛門、千代吉はまづ次の間へかくし、店にて平六に逢ひてあらましを話し、仲居に一間を片付けさせ、平六お貞を小太夫に逢はせければ、小太夫平六に對ひ、「かゝる遊所へ招くは恥入る事ながら、お身も遁れぬ中なる萬左よりあらましは話せし由」平六「左樣で御座ります。これなるは、先年お暇の出でし羽打から四郎殿の內方、以前は隣同士、夫に別れ零落の由痛はしく、お暇とは申しながら女中の事、當分私方に圍ひおきます」小太夫「お身が深切感心いたす」トいひつゝ平六が後に居たるお貞を差覗き、「廣田小太夫ぢや。見忘れしや」お貞「なんの、お見忘れ申しませう。お久しぶりにて小太夫樣、お恥しう御座ります」「何の恥しき事あらん。浪人して零落るは間々ある事。それにつけても、この守袋に覺ありや」と千代吉が守袋を見せければ、お貞手に取り見れば、蠟燭のあかりに光る鴛鴦錦、內を見れば夫の筆。「お〳〵〳〵、こりや覺ある守袋、是を何うして貴方樣が」「をゝさ、驚くは尤。十六年

てたるやらん。さりながら、から四郎妻は、日頃かひぐ〳〵しき者なりしゆゑ、子を捨てる事はなすまじきに、產後に亡せたる者ならん。何は兎もあれ、我が下を勤めしから四郎が娘とも知らずして、我拾上げたるは不思議の緣なり」と語るを、千代吉は只差俯向きて聽き居たり。萬左衛門、小太夫にむかひ、「いかさま不思議な事で御座ります。から四郎殿の妻、產後に死にたるかとは御尤ぢやが、今息災で居られます」小太夫「お身、何として存じ居る」「さればで御座ります。私未だ子なき故、小糸と申す者をかくし妻にいたしおきしに、故ありて今は、貴方のお屋敷に足輕小頭勤めまする寺岡平六方へ、小糸と母とを預けおきます。平六は小糸が母の弟で御座りますゆゑ、小糸を預けおきますにつけ、私をり〳〵は平六方へ參ります。さて此程、見馴ぬ女、平六方に居りますゆゑ、尋ねましたれば、平六申スに、彼の女中は二十年ばかり以前に、此屋敷に祐筆を勤めたる人の女房、夫故ありて御暇賜はり、夫婦立去りけるに、この程道にて彼の女に行逢ひ、樣子を聞けば、夫永の煩ひにて亡くなり　身の置き所もなきよし。昔は隣同士にて暮せしゆゑ、痛はしく、まづ當分養ひおくと平六が話、連合の名は聞かざりしが、祐筆とあれば、から四郎とやらんが妻にて、此千代吉が眞實の母ならん」小太夫、膝を打ち、「重ね〳〵不思議な緣のあるものかな。平六は身が目をかける男、下屋敷は此所より程近し。そ

お國からお供したる若黨の手料理なりしとぞ。

四　段

さる程に小太夫、萬左衛門を伴ひ、馴染の船宿より屋根舟にて月花屋へ至り、座敷は常體にもてなし、小太夫はいつぞやの湯女、萬左衛門は千代吉を相方に、座敷も早く引かせて臥床に入り、萬左衛門、千代吉に云々の由を言聞かせ、小太夫を此所に招きければ、千代吉、萬左衛門が教にまかせ、身の上のあらましを小太夫に物語り、私實の親の紀念は是なりと、肌に著けたる守袋を見せければ、小太夫懐中より眼鏡を出し、守袋を篤と見て、内にありし臍の緒を包みたる書付を見れば、文安二年丑五月十五日戌刻出生みの女、

玉苗やみのる俵も露の恩　　仙月

とあり。小太夫打驚き、「この筆は、わが屋敷にて祐筆を勤め、わが下に使ひたる、羽打から四郎が手蹟なり。しかのみならず、書添へたる發句に、仙月とは唐四郎が俳諧の名なり。且又守袋の切は、殿様のお好みにて織らせ給ひし、外になき鴛鴦錦。彼といひ是といひ、さてはおのしは羽打から四郎が娘に違なし。から四郎事は、同じ家中の者、彼が妻に戀慕したる者ありし事より事起りて、戀慕したる者も、から四郎も、永の御暇になりしが、浪人の貧苦に逼りて捨

道〳〵も、妻が安產男を產めかしと祈りしに、此鎌倉へ著の時、千住が泊、夜道をかけて通りしに、千住なる阿蘇宮の鳥居の前に赤子の聲、立寄り見れば、笊に入れたる女の子、首に守もかけてあり。在所の妻はうみ月なり、此子を助けなば、妻が安產の祈禱にもと思ひ、拾ひ上げて宿につき、亭主を呼寄せ、しか〴〵の由を語り、在番なれば育て遣すべき仕樣なし、貰人あらば好きに賴むと、金子五兩添へてたのみしが、其後は如何なりしや、折々は思出す事もありしに、昨夜も寐ながらつく〴〵思ふに、悴が息災に育ちたるは、捨子を拾取りてやりたる陰德の酬かと思出せば、拾ひし女の子も悴と同じ十六歲、浮世はさま〴〵なものぢやなア」「左樣で御座ります。拾子のお話は先頃もあらまし伺ひました。それにつけて、旦那がもしやお拾ひなされた子ではないかと思ひます女は、年も十六」かやう〳〵と千代吉が事を語り、「折あらば月花屋へお供いたし、千代吉よりもおはなし申上させんと存じ居ります」といひければ、小太夫膝をすゝめ、「然らば、いつぞやお身の相方に」「左樣さ。彼が千代吉で御座ります」「いかさま、十六ばかりと見える新造。これ萬左、今日は幸ひ非番ぢやから、今より月花屋へ至り、千代吉に對面なし、尋ねて見ん。どうぢや、お身は今日差合はないか」「さまで用事も御座りませぬ」と話の中へ持來りし鯛のうしほ、萬左一口吸うて見れば、味淋を入れ過して酒臭し。その筈なり、

の優しきに、おへみが氣隨我儘なるを比べて、心の中には、疾より愛想は盡きてあれど、入聟といひ、心すなほなる萬左衛門ゆゑ、何事も堪忍はするなれど、今商賣事にて出入屋敷へ立出るに、下女にまかせて襦袢一ツ溫めず、冷たい物を著る萬左衛門、心の中には恨めしく思へども、一言いへば諍の端と、堪忍して立出でけり。

三　段

こゝに又、重忠殿の家來に廣田小太夫とて、年は四十八九、家内は國にある、在番にて勝手方の勤なり。萬左衛門來りければ、五六十兩の用向を申付け、掛合濟みし處へ、魚籠に狀箱載せて、家來の若黨持來りしを、小太夫眼鏡取寄せて返辭を認め、魚籠開けさせて見て、「鯛は潮煮にして萬左へ晝飯、己も食べやう。鮑と海老は隣家へ遣れ。殘の魚は其方達菜にせよ」「有難う御座ります」ト籠に狀箱持去りけり。小太夫「萬左も知つての通り、忰はお國にありて、若殿のお小姓を勤め、今年十六歳ぢやが、忙しき勤の中に武藝を勵み、この程劍術の免許を取りしに、十六歳にて免許を請しは珍らしく、格別の勵みとて、若殿樣より御手づから拜領した」萬左「それは御きほなる事、お目出たう御座ります」小太夫「さればさ、今貰ひし魚は、その悅びに、町宅いたすぼく庵より貰ひしのぢや。思出せば十六年以前、妻が臨月の時、この鎌倉へ在番の

し顔憎からず、假寢の枕をかはせしゆゑ、いとゞ不便に思ひ、小太夫が拾ひたるにはあらざるや、兎も角も序あらば、また小太夫を月花屋へ伴ひ、千代吉に逢はさばやと、心に思ひ居りけるに、ある日小太夫より、用ありと呼びに來りけり。

二　段

さて萬左衛門は、小太夫方へ立出でんとするに、此時女房おへみは、つね〴〵出入する按摩、少し見える玉の一に肩を揉ませて、玉の一が長屋の嚊が、女湯で喧嘩をしたる話を聞いて居るを

萬左衛門「これ、小太夫樣まで往て來るぞよ」「はい。誰ぞ來や、旦那が出なさるよ」と下女を呼びておへみは立たず、按摩揉ませながら、「玉の一さん、夫からどうした」と亭主が著る物著替るを後に見て、烟草輪に吹く面つきは、まだ三十二三、美しけれど、心根は憎し。このおへみうまれつき悋氣深く、手前勝手のわがまゝなる事は、七編八編にも記せり。そも〳〵此おへみは、家附の娘にて、亭主萬左衛門は聟なるゆゑ、彼が我儘も悋氣深きも堪忍して連添ひしが、一人も子なきゆゑ、小糸とて、三筋の糸に世渡りしを、妻にかくして圍ひおきしに、小糸が腹に萬太郎といふ一子をまうけ、故ありて今、小糸が叔父、重忠殿の下屋敷に住居する寺岡平六方へ、小糸親子、母をも預けおく事、八編にしるせり。萬左衛門は、小糸が母への孝行にて、心根

敎草女房形氣十編　上之卷

初段

さる程に、德若屋萬左衛門は、出入屋敷の秩父庄司重忠殿の家來、廣田小太夫を振舞の爲、その下役三人をも連れて、けはひ坂なる月花屋といふ風呂屋へ至りて遊びしに、萬左衛門が相方になりしは、去年の秋まで、妻の嫉妬おへみが使ひし腰元のお千代なり。打變りたる顏形に、萬左衛門は見忘れしが、お千代は忘れず、屛風の内の差向になりし時、お千代、熊手のおよくといふまゝ母の爲にこゝへ賣られ、今は千代吉とて、湯女の勤をするよし、萬左衛門に語りければ、不便に思ひ、實の親はと尋ねければ、恥しながら捨子なり、實の親のかたみは是なりとて、守を見せ、捨てられし所は、千住なる阿蘇宮の鳥居の前なりしとは、まゝ母の話に聞きしと語りければ、萬左衛門、その日振舞の上客廣田小太夫、十六年以前、この鎌倉へ在番の時、鎌倉への入口千住にて、女の子を拾ひし事ありしと、小太夫の話に聞きし故、もしやそれかと、小太夫へ千代吉が事を語らんと思ひしが、またも折あらんとて歸りし事、なほ委しくは九編にいへり。さて萬左衛門は、圖らず以前召使ひし腰元の、千代吉にめぐりあひ、賣物に花を飾り

て、あやまちありし事、度々なり。みめかたち醜き女渡る時は、川水つねの如し。この故に、この川のわたしをば、妬婦津と名づくと、もろこしの書、酉陽雜俎の十四册目、又太平廣紀の百七十二册目にも載せたれば、眞にありし事なるべし。わが朝にても、やきもちの怨念大蛇となりし事、諸國に今もその跡殘れり。おもふにやきもちは、愚痴とわが儘より起る事なり。やきもちを燒かんと思はゞ、わがむねの火を消して、口へいださず、常よりは亭主を百倍好くすべし。さすれば亭主の風かはりて、よその花を吹散らし、うは木の枝は枯果てて、もと木に花咲き實もなりて、又はら帶をしめる事あり。このくさざうしのやきもち女も、こゝに心のつかざる事、左の如し。

妬婦津の故事。やきもちのわたしといふ所のはなし。
むかし唐土の晉の世、大始年中、劉伯玉といふ人の妻光明、生れつきて妬忌なりしに、ある時夫の伯玉、文選といふ本の中にある、洛神の賦とて、美人の事をかきたるを見て、しきりにほめて、我も斯様なる女を妻となさば、さぞかし樂しからん、見ぬ世の女なればせん方なしと、歎息しければ、妻の光明これを聞きて、洛神とは何人ぞや。伯玉曰く、龍宮の乙姫のやうなる娘なりと答へければ、やきもちの妻、さほど乙姫を妻にほしくば、我水に入りて乙姫となるべしといふを、たはむれと思ひしに、その夜光明家のほとりの川へ身を投げて、死にけり。さて七日目の夜、夫伯玉が夢に、身を投げしやきもちの妻、姿を現していひけるやう、御身乙姫を妻に持ちたしとのたまひし故、我水に入りて乙姫となれり、この後ながく契らん、見捨て給ふなと、うらみの顔付おそろしければ、伯玉あつと叫びしが、妻の姿は消失せけり。此後伯玉は、妻が身を投げし川は、生涯渡らざりしとぞ。しかるにかの女がやきもちの怨念川にとゞまり、美しき女この川を渡れば、俄に浪あらくなり

女房形氣の仕立物、書肆が誂にまかせて、歳毎に袖を重ね、今又十編の褄を合して、初春の振袖とす。されど、老が夜なべのともし火のもとに、綴りあげたるすさみなれば、針目どもいと覺束なく、ゆきたけもいかにやあらん。おのれが筆の針さきこそ利かざれ、とぢ巻の縫模様は、見事なる豊國の下繪なれば、錦の橋と名によぶ板元が、十編の襟をそろへて、めでたき初春の晴著となしぬ。

八十二翁　山東菴京山

嘉永三年 庚戌秋昼夕稿本同初冬梓行同四年辛亥發

の妻たる道に背きし罪身にむくふ事。小いと萬左衛門が本妻となる事。十編十一編ひきつづき出版。めでたし〳〵〳〵

今日振舞に連れて來た上客、廣田小太夫といふ御方、いつぞやの話にも、十五年以前在番の時、千住なる阿蘇宮の鳥居の前にて、女の子を拾ひ、金子五兩添へ、養ふ者あらばくれよとて、其夜泊りし宿屋の主人に頼みしが、如何なる者の育てしや、拾上げたる時の面ざし今に忘れず、年も大方十五六歳、昔をしのぶと物語、今宵はまづ此儘に、またもや彼のお方を連れ申し、委しく語りて引合はさん。つら〳〵思へば、おのしがかゝる身となりしも、わが女房おへみが悋氣よりおこりし事、思はず其方に對面なし」ちよ吉「あなたの扇とも知らず、手に取りて今宵のお客と定りしも」「をよさ、不思議な縁で」おちよ「御座んしたなァ」萬左「何はともあれ夜が更る、寒くもあり、さァ寐やう」「ぢやと申して、旦那樣と」「はて、昔は昔、今は今」「そんなら、御免遊ばせ」と下著の胴の石がけ絞、堅い心の萬左衞門も、下女の姿は何所へやら、打變りたる千代吉が、蕾の花の捨てがたく、一枝契る一夜妻、後の馴染となりにけり。めでたしめでたし〳〵〳〵。

これより後、ちよ吉を拾ひあげたる廣田小太夫、ちよ吉に對面の事。ちよ吉まことの母おこていにあふ事。まゝ母およく、だいばの仁三に殺さるゝ事。ちよ吉こしもとたりし時、ちぎりたる半次郎にあふ事。おへみがちよ吉をねたむ事。おへみやきもちにて人を苦しめ、人

ましたか」「さればさ、座敷の内では、しげ〴〵顔は見ざりしが、どこやら見たやうな面ざし」「見たやうなとはお情ない。あなたに勤めた千代で御座ります。今の名は千代吉と申します」「おゝ、お千代であつたか。いかさま、賣物には花を飾ると、廓で磨けば、顔も姿もかはりて見違へた。さいつ頃奥藏のやじりを切られし時、おへみが申すには、折檻の爲おちよを藏へ入置きしが、やじりを切りし盗人、お千代を連行きしか、又は切りし穴より逃去りしかと、其方が母およく方へ人を馳せしに、此方へは參らずといひしゆゑ、訝しく思ひしに、盗人に賣られたか」「いえ〳〵、お藏へ締込まれしは」かやう〳〵、賣られしはかやう〳〵と、ありし事ども細々と語りければ、「さては、おへみが悋氣にて、小糸を暗打にせんたくみを、おのしが己に告げしと思ひ、おへみがおのしを締殺さんと、危き命は助かりしが、また母に賣られしとな。して又、實の親は何者ぢや」「お恥かしい事ながら、私は捨子で御座ります」「フウ、捨子とは、此方にも聞いた話がある。捨てられた所に覺はあるまいな」「その話は、まゝ母に聞きました。千住と申す所の、阿蘇宮の鳥居の前に捨てたるを、この鎌倉へ在番のお侍が拾ひとり、その夜の泊の旅籠屋へ賴み、望みの者あらば養はせよとありしを、今の母が貰ひしと聞きしも、此所へ賣らるゝ時の事」「さて〳〵不思議な緣もあるものかな。その在番の侍とは、

るべし。

十三段

こゝに又、此夜萬左衛門は、お貞が足洗ひの金を與へ、平六に別れ、我家へ歸りけるに、女房おへみ炬燵にあたり、下女に肩揉ませて居たりけるが、例の我儘なる女、「大分遲かつたね」といつたばかり、炬燵を離れず。妻の道を背くは、横面をはつてやりたし。

十四段

かくて德若屋萬左衛門、店にて商ふ紙類の用を達す出入屋敷の侍四人、馳走すべき事ありて、鶴が岡八幡の近き邊の料理茶屋由良淸へ伴ひ、馳走の酒も、皆呑む口々にけはひ坂をといふは、豫ての覺悟、四人を連れて、月花屋へ至りけり。さて風呂屋女五人、相方を定むる盃も面白からずとて、おの〳〵持ちたる扇五本、仲居に持せやりけるに、軈て風呂屋女五人、扇を持ちて出來りしを、仲居が開きて、「これは何方」「おい、己ぢや」これは、あれはと四人定り、末に居たるは、まだ初々しき新造が持ちたるは、萬左衛門が扇なり。これにて相方定り、藝者なども來りて、彈きたてる三味線、廻す杯、日も暮れて時をうつし、おの〳〵鴛鴦の衾に入りにけり。さて萬左衛門も閨に入り、程なく相方の新造來り、「もし、おなた、お見忘れなされ

へ來かゝりお困りと見受しゆゑ、彼等に與へしは僅の金子、足さへ洗へば、その後では、ねだり事申さぬが彼等が掟、なか〳〵正しいもので御座る」平六「思ひも寄らぬ御情、拙者においてもかたじけない」お貞「平六殿が責められし、地獄の餓鬼に佛のあなた」ト手を合せ、「お旦那樣、有難う」の詞はいまだ非人が脱けざりけり。

十二段

それはさておき、かのだいばの仁三は、お千代を入れたる葛籠を背負ひ、けはい坂の近くに至りて、葛籠よりお千代を出して、騙しつ賺しつやう〳〵に、身を賣る事を得心させて、宵におよくが方へ來りしぜげんの内へ、お千代を連行きければ、ぜげんの女房、賣物には花を飾れぢやとて、お千代が亂れし髮をとりあげ、化粧させ、口入のぜげん、お千代、仁三をも連れて、月花屋といふ女郎屋に目見えさせ、勤奉公二十七までの證文にて、仁三が手に取りしは、何かを差引きて二十八兩受取り、およくへ渡さんとて、此所を立去りしが、道々思へば、あの慾深いおよく婆、この金を渡したとて、己には革半纒一枚著せるが好いひき。いつまで黑油のにほひ毎晩嗅ぐも智惠がなし、此二十八兩橫取りして隨德寺、さうぢや〳〵、と金ゆゑに、惡玉になる人心、ましてごろつき二十三、行方知れずとなりにけり。此後この仁三が事、末を讀みて知

ひの付合した者へ、素人に立かへる、お目出たい祝儀を下さるを、足洗ひといひます。足を洗はにや、素人になつても脱けぬ乞食の臭み。連れてなら、お前まで乞食仲間で御座るぞよ」平六うなづき、「おゝ、もつともだ〳〵。足洗ひの祝儀やらう」「はい〳〵有難ふ御座ります。お貞さん、嬉しかろ。お目出たい」平六「それ祝儀やるぞ。落すな」と手に渡すを、月影に、「こりや旦那、二朱一ツ。このお貞も知る通り、私等が仲間は三十四五人。なんぼ乞食しましても、十六文にもあたらぬ御祝儀、これぢやァ足は洗はれぬ。サア來いお貞」平六「ヤイ〳〵〳〵、それより外に持合が無いゆゑに、不承せい」「こいつはいけねへ。皆來やれ」「どれ〳〵行かう」と女の乞食、平六をとりまきて、「旦那さん、お遣んなさいまし」「下さいまし、御繁昌なお旦那様」と袖に縋りつき腰に寄る、あらめの袂、虱の襟、女といひ、非人といひ、腕に力の平六も、困り果てたるうしろより、「それ、足洗ひ、持つて行け」と雲間漏れたる月影に、ひらりと投げたる五枚の小判、非人どもは餓ゑたる犬に蒲焼と、押合ひへし合ひ拾ひ取る。掃溜おけら、聲かけて、「その金は皆してわけるぢや。こゝへよこせ。おゝ、五枚ある。有難い」と皆引連れて立去りけり。平六提灯差上げて、「ヤア、あなたは萬左衛門樣。今お歸りで御座りますか」「左樣々々。樣子は悉しく知らねども、定めし女中は御身寄の人、非人仲間の足洗ひ、こりやある事。此所

に代へられじと、思切りて子をすてしは、扶持に放れしその原は、私ゆゑと思ふから、わが子にかへて、介抱した甲斐もなく、その年の暮夫に別れ」平六「すりや、から四郎殿は死なれたか。まだ三十になるかならず。はて是非もない」おてい「夫に別れし其後は、しるべに身を寄せ、二年あまり暮せし中、男を持てとすゝめしかど、野邊のおくりもまゝならず、果てられたれば、二度の男は持つ氣もなく、奉公せんには著肌もなく、米も小買の痩暮し、食潰すも氣の毒にて、其所を立退き、母親の在所へとこゝろざし、立出でたる一人旅、因果や、道にて煩ひつき、終には非人と成下りしに、今宵圖らず捨てたるわが子に、廻逢ひしが、此身を恥ぢて名乘られず、其儘に別れしが」平六「いや、お貞どの、そのあとはゆる／＼聞かん。何はともあれ、わが宿へ連行かん」てい「忝ないが此姿」平六「はて、夜の事ぢや、大事ない。さあござれ」と立上り、括したる提灯さげ、連行かんとなしけるに、最前より物陰に見て居たる女非人立塞り、「もし旦那、この女を連れて行くなら、足を洗つて連れてお出」平六「いや、足を洗ふには及ばぬ。足は内で洗はせる」「ハヽヽ／＼。こいつァ分らねへ。コレ旦那、足を洗ふとは、乞食仲間を脱ける事じや。私は掃溜おけら、この姉に溝川おわんとて、私等は女乞食の上に立つ、乞食の腹から出た乞食、素人衆が零落れて、私等が様に身を落し、もとの素人になる時は、これまで一文もら

つぎして、小糸親子が居る所となし、わが子と小糸が顔見るを、をり〳〵の樂みとし、今日も彼の半次を供に連れ、夕暮より來りし故、主人平六宿にありては、萬左衞門氣づまりならんと、用もあれば中屋敷へ至り、暇取りて夜の四ッ前、最早萬左も歸りしならんと、提灯さげて歸る寺町つゞきの道の眞中、倒臥したる女あり。さては意趣切、辻切か、不便な事、と提灯の明に照せば、髮打亂し、姿もそぼろな非人の態、疵も見えねばいぶかしく、提灯顏へ押當てて、よくよく見れば、同じ屋敷に勤めたる物書、浪人したる羽内から四郎が妻なりければ、隣に住みたる好もあれば、見捨てがたく、側にありし流灌頂の柄杓に水、抱起して水吹きかけ、耳に口寄せ、「お貞どの〳〵」「あゝあい」「心がついたか」「はい」「私が顏見えますか」「ヤア、お前は寺岡平六殿。はづかしや」とて逃げんとするを、平「やれ待ち給へ。浮沈は世のならひ、此姿になられしには、仔細あらん、そのあらましを語られよ」「お話し申すも耻かしながら、一通り聞いて給べ。此方の人の上に立つくろぼしがん平どの、年にも耻ぢず私へ戀慕、耻かゝせしを遺恨にふくみ、此方の人を惡しざまに讒言なし、思も寄らぬ永のお暇、あたくさ邊に佗しき住居のその内に、此方の人の長煩ひ、著はださへ殘らず質入れ、その介抱に身も疲れ、乳細りて、二ッになりし女の子、泣止む時なく、夫の病に障るゆゑ、わが子はまたもや生出さん、夫の命

き町はづれ、立寄りしをすかし見て、「わりや最前の乞食だな。葛籠のお人と呼んだはなんだ」おてい「はい、その葛籠の内のは、私が娘、ではない、娘御さんに、たッた一言いひたい事が御座ります。どうぞ逢はせて下されませ」「なんだ逢はせろ。あゝ聞えた。最前きけば、此葛籠の娘が、身を投げやうとしたを、われが止めたと娘の話。命たすけたその代り、錢をくれろとねだるのぢやな」「いゝえ〳〵、其樣なさむしい心ぢや御座りませぬ。言ひたいは親子の名乘」「なんだと」「はい、あの何さ。親からの非人でも御座りませぬ。ちよつと逢はせて」「やい〳〵、死損ひの乞食女、お千代に用は無い筈ぢや。袖に縋るはわいらが癖。あゝうるせえ、其所放せ」「これ、拜みます。一目逢はせて下さりませ」ト葛籠に取付く脇腹を、礑と蹴られて、あッと一聲、倒れて息は絶えにけり。仁三、月影にすかし見て、「ハヽア、脆くも消えた野邊の露。ドリヤけはひ坂へ」ト急ぎけり。

十一段

此九編のはじめにもいへる如く、小糸は、嫉妬のおへみ、權太を賴みて、小糸を暗討にせんのたくみを、萬左衞門が小僧半次郎が口より聞きて、暗討をおそれ、重忠殿の下屋敷に住む、小糸が母の弟、足輕小頭寺岡平六方へ、小糸親子引移りければ、萬左衞門物入にて平六が家に建

仁三が後のお千代が顏見て、「おゝ何所に居た」「いや、私がいうたに違なく、相摸川の鐘が淵、たびく身投のある所、死神に取付かれ、危い所を、女非人が止めたげな。この餓鬼も命づよく、我等も仕合。けはひ坂から來ましたかな」「をゝさ。來たなれど、娘は駈落とはいはれず、しるべの方へ暇乞にといふたれば、それならば連れてござれ、金は女と引換に、證文するとて、歸つたわいの。道から駕籠で連れて行きや」「いやお袋、それではゆかぬ。此所へ來る道々も、おとぼねたてて泣喚く。けはい坂へ行く道で、わめかば人にかどわかしと、思はれては惡ごんす。猿轡で葛籠の中」「をゝ、それく」と古布子開けて取出すはり葛籠。お千代は泣聲、「母さん御免」と逃げ支度。仁三はお千代が腕捻廻し、括し上げ、手拭の猿轡。お貞は後より此所へ馳付け、窓の隙より差覗く、わが子の有様、今更捨ててわが子ぢやと、いはれぬ義理に止められず、餘所に見捨てる悲しさ辛さ、袖をくはへて忍び泣、持出す葛籠はわが子ぞと、見捨てて別るゝ足たゝず、又もやあとを慕ひけり。

十　段

さる程にだいばの仁三は、お千代を入れたる葛籠を背負ひ、けはい坂へと急ぎけるに、あとより聲かけ、「おゝいく、葛籠のお人、しばらく待つて下さりませ」仁三は後へ振かへり、月影暗

を、譯ありて命助かり、やどへ逃げて來りしに、母さんが抱寝する男に私を連添はせて、世帶持つには金が入る、まづ五六年けはい坂へ身を沈め、金にすると聞いて悲しく、男は厭なり、勤は辛し、いつその事ひとおもひ、身を投げてと思ひしに、圖らず其方に助けられ、優しい詞に思案もかはり、命だにあるならば、この守をしるしとなし、實の親に逢ひたいゆゑ、どうぞお前に身を任せ、共に非人となり下らん。連れて退いて下さんせ」と膝に取付き泣きければ、捨てたる娘の泣く涙、膝にかゝるは熱湯の思、我を忘れて抱きしめ、實の母は私ぢやぞよ、と言はんとしたるその折しも、だいばの仁三背後より、お千代が襟首搔摑み、「案に違はず此川へ、身を投げやうとしたのだな。さア來い」と引立つる。取付くお貞を蹴倒して、「わりや乞食の女だな。なんで止立しやがるのだ」「さアそれは」わが子ともいはれぬ乞食、「旦那樣、暫く待つて下さりませ」「エ、やかましい。邪魔するな」と立げに蹴倒し、お千代が手を取り引いて行く。別惜しさと悲しさに、腰はがつくり、やう〳〵と這起きて、「およさうぢや」何所までもと、あとを慕うて行く空も、子ゆゑの闇に迷ひけり。

九　段

およくは宿に只一人、仁三がおとづれ待ちけるに、門口がらりと開けたる音に、およく立出で、

敎草女房形氣 九編下之巻

八段

お貞心に思ふやう、十五年の年月、露の間も忘れやらぬわが娘、不思議に廻逢ひながら、母といはれぬ乞食非人。鳥居の前に捨てたるは、足らざる乳に夜もすがら、泣けば夫の病の障、夫に見かへて捨てたりし、その夫には死にわかれ、生別れのわが子には逢ひながら、娘かと言はれぬは、如何なる因果と身を悔み、落つる涙も隱しかね、鶉の袖を濡しければ、お千代は母と知らざれば、「夫ほどまでに思うて下さるは忝い。是につけても懐しいは生の親、情ないは今の親。邪慳な事、聞いて下され。育てられたる母さんは、四十を超えし年にも恥ぢず、若い男を抱寢して、餘所へは私が從兄といひなし、側へおくゆゑ、私を朝夕使ひたて、寢ながら腰を打たせては、打ちやうが惡いとて、足蹴にさるゝ口惜しさ。母さんはその男ばかり可愛がり、私をば憎がりて、三度の飯も親子らしく、中好く食べた事もなく、男とは差向ひ、とり膳の給仕は私。寢床も狹い瘦暮し、何かにつけて私が邪魔ゆゑ、十三の年腰元奉公。おかみさんが邪慳なお方、嫉妬の事よりおこり、寃の罪で奥藏の二階で、おかみさんの手にかゝり、縊殺さるゝ處


京山作豊國画

の折檻、痣の絶えたる事はなし。その度々に戀しいは生の親、又恨めしいも生の親、何故捨てて下さんしたと、恨いふはこれこの守、是は捨てたる籠の中に、ありしを其儘この年月、眞實のかたみと思へば、せめてあの世で實の親に、逢はゞ印と思ひしぞや」「さてはあなたは阿蘇宮、鳥居の前の捨子とや。その守護お見せなされ」と口に啣へ、蒲鉾小屋に火を燃し、ひでに映し照し見れば、切の模樣に覺あり。開き見れば、十五年以前病に死したる夫の筆にて、臍の緒に書付けあり。さては捨てたるわが子ぞと、胸にびつくり取縋り、名乘らんとは思ひしが、いや〳〵、待てしばし、今の詞に恨めしいも生の親、何故すててとはもつとも至極、しかのみならず今この樣、わが子ながらもはづかしと、涙をかくし、守はお千代へ返しけり。此所下の巻へ續く。

つけば、直段が下る」と止めけり。

七段

かくておよくは仁三と言合せ、此明る日、けはひ坂のぜげんを連來りてお千代を見せ、お千代へは五年と僞り、二十七まで年一ぱい賣る約束にて、晩には金と引換に、お千代は駕籠にて連行かんと、約束して歸りければ、此事をお千代二階にて委しく聞きしが、十五の子ども心に差詰り、其夜裏口より脱出で、死神や取付きけん、相摸川の堤より、身を投げんとなしけるに、側にありし蒲鉾小屋より、女の乞食馳出でて、危き帶をしつかととらへ、「これ姉さん、待ちなさんせ」「いや、放して死なせてくれ」「いや、放しませぬ。まア下に御座らつしやれい。今月影にすかして見れば、お年はまだ十五か六、いかなる譯か知らねども、見捨てて死なすはいぢらしく、止めても甲斐なき非人の私、元は由ある人の妻、今は此身に成下る、是までの憂き思、幾度か死なんとは思ひしが、一寸延びれば思案がかはり、ながらへて居りまする。身こそ賤しき非人なれ、女は女どしとやら、霜を踏みたる鶯が、鳴く音をしゆる雛もあり。譯をお話しなされませ」「おゝ嬉しや、頼もしいその詞。私はもと千住なる阿蘇宮の鳥居の下に棄てられしを、今の母に貰はれて、育てられしは、生の親より義理ありと、朝夕大事にしたれども、心もあらく邪慳

千代が事も、お前と相談して置いた通、勤奉公の事も得心させ、やじりのかゝりやひもあれば、お千代を此所へは置かれず、ちつとも早くけはひ坂へ」およく「おれもその氣ぢや。これお千代、駈落はもつけの僥倖、その譯は、おれもおのしも、いつまで獨身では居られず、それゆゑ、この仁三どのを聟にして、おのしに添はせる約束。それにしては、私が覺えた以前の烟草店を出す積ぢやが、もとでの金がないゆゑ、おのしが暇を取り、今から五年、けはひ坂で勤奉公。その金で店を出し、かの人と私とで稼ぎつけ、下女の一人も使ふやうにする。その中五年は夢の間、おのしが年も明けて、目出たく彼の人と盃させる。得心して、勤奉公してくりやれ」おちよ「あの、私に勤奉公」よく「おいの、厭か」お千代は心の中に勤も辛し、仁三も厭なり、涙を袖にさしうつむき、返辭せざればよく「勤は厭か」ちよ「あい厭で御座んす」およくは今の酒機嫌、腹立上戸の腕捲り、「やい、此あまめ。譯をいふて聞かせるに、厭とは何だ。これ、能く聞けよ。十五年以前千住に居た時、わりや阿蘇宮の前へ捨てられたを、何所のかお侍が、この鎌倉へ在番とて、千住泊で阿蘇宮の前を通りて拾上げ、貰人があらばと、泊られた旅籠屋へ頼むと聞きて貰受け、此乳で育上げた母ぢやぞよ。恩知らずの畜生奴。いやだとぬかせば、これ斯う」と髻摑んで引倒し、手にあたる燗德利、額をはつしと撲たんとするを、仁三は抱止め、「大事の玉に疵が

十三の時、まゝ母のおよくは四十二歳、だいばの仁三といふごろつきの二才におつこち、お千代は何かの邪魔になるゆゑ、慶庵の口にて、かの嫉妬おへみが追廻しの腰元に出し、三年勤めて、お千代は今年十五、母のおよくは、四十五にぞなりける。さてだいばの仁三はあしかけ三年越の馴染、およくが内のゐさふらふとも、むすこともつかず、宿に居るかと思へば、十日も見えず、今日は七日目にて歸り、およくが、野郎よばりの喧嘩も常なれば、あたりの人も聞馴れて、取支ゆる人もなけれど、どうかして仲直の徳利酒。仁三「大分犬が吠るの。何時だらう」といふ門口、「母さん、寝なさんしたか」と戸を打叩く。およく「ありやお千代が聲、今時分合點のゆかぬ」「お千代ぢや。開けて下さんせ」犬「わん〳〵〳〵〳〵」およくは門口あけて、お千代を入れてあとを締め、「見れば跣足、夜更けて其態。どうせろくな事ぢやあるまい。足を洗いでまづ上れ」「あい」とお千代はながしの水瓶汲上げて、まづ柄杓のまゝ水をがつくり。胸打敲き、足をそゝぎて、上りければ、仁三はかたへに差寄りぬ。およく「駈落して來たのか」ちよ「あい」よく「いろ事ぢやな」ちよ「いえ〳〵、そんな事ぢや御座りませぬ。逃げねばならぬその譯は」とあらましを語りければ、仁三傍にて是を聞き、「やじりの穴から逃げたれば、盗人の惡名うけ、今にも徳若屋から人が來るは知れた事、其時はお千代をかくし、此方へは來ぬといひなせえ。お

る藏は、此所では御座りませぬ。座敷續きの大藏の、穴藏の中に澤山御座ります。彼方の藏へお出なされませ」「べらばう面め。こいつァ骨折損をした。さりながら」と蠟燭にてあちこち探し、簞笥の引出しより、おへみが頭の物の入りたる箱と、唐棧と八丈の反物など、有合ふ風呂敷へ包みて背負ひ、出刃庖丁持ちて破りし穴よりぬつと出れば、此所へ來りし此家の時廻り、盜人はそれと見て、ひらりと見する出刃庖丁。あつといひつつ逃げて行く。ぬす人も立去りければ、お千代も穴より出で、猿轡にはめられし、手拭かぶりて逃去りけり。

六段

このお千代が母はおよくとて、今年四十四五歳、若き時は千住といふ所にて、夫婦暮しの刻烟草屋なりしに、およく三十の時、始て女の子を生み、三十日ほど經ちて、その子むし氣にて亡せけるゆゑ、捨子に五兩つけてやると、宿屋の話を聞きて、乳のあるをさいはひに、貰受けて育てたるは、此お千代なり。お千代七ッの時、父親かさにて長く煩ひ、身代と共に瘦細り亡せたるゆゑ、およくしるべを便りて、この鎌倉へ引移り、やもめ女のひとり者、口も八丁、手も八丁にて、ひと仕事又はよからぬ事の宿をなし、或は店者の中宿、あれや是やにて、店賃も月を越さず。四月になれば、洗張した袷を著るは、女やもめに卯の花の咲くなりけり。お千代

蹲踞り、つら〳〵思ふに、小糸を殺さんといふ企を聞きしと言ひしゆゑ、人に漏さんを憚り、我を縊殺さんとて、この細帯を頸へかけしならん。此奥藏は假の牢獄、首こそ切らね、殺さるる此命、ま一度逢ひたい半次郎さん、わしや此所で死ぬわいのと、口に言はれぬ猿轡、涙は顔に傳ひても、拭く事さへもうしろ手に、辛さ、悲しさ、口惜しさ、綱にかゝりし鴛鴦の、泣く音もらさで膝そぼつ、涙も凍るばかりにて、夜はしん〳〵と更けにけり。さて、此藏をごちごちの、音は慥にやじりきりと、お千代はいとゞおそろしく、身を顫はせて居たりけり。盗人は切開けて、内へ入り、火口出して附木にうつし、用意の蠟燭にあたりを照し、お千代がうしろ手に、髪振亂したるを見て、思ひよらざる事なれば、盗人ながらびつくりせしが、最前おへみが忘れおきたる出刃庖丁を見て、打頷き、「これ、わりや何か惡い事をして、殺さるゝ處ぢやな。これ、その後手も猿轡も解いてやる。その代り、己が聞く事有體に言へ。聲を立てれば、此所にある出刃庖丁、息の根とめるぞ。聞く事かくさず己にいふか」お千代は、後手、猿轡、解くと聞きて嬉しく、打頷きければ、「をゝ、よし〳〵」と解きほどけば、お千代は嬉しく、「ほんに優しいお方様、お有難う御座ります」「いや優しくもない盗人ぢや。聞きたい事とは、金のありか、知つて居やうな」「あい知つて居ります」「をゝ、さうであろ。何所にある」「金のあ

五、何事も知らぬ濡衣著せられて、悲しさ、辛さ、怖しさ、只俯向きてしやくり泣、つぼみの花の顏に、ふりかゝりたる鬢の毛は、雪に柳のいとゞ猶、あはれげに見えに見えけるを、鬼になりたるおへみは差寄り、詞もかけず襟首摑みて引倒す。「あれなう、おかみさん、御免なさいまし。拜みます」「えゝやかましい。聲たてるな」「あれ〳〵、御免〳〵」と逃廻るを、おひよのは立げに蹴倒すを、おへみ解きたる下締の細帶、お千代が頸へ打掛けて、締殺さんとなしたる時、藏の戸を打叩き、番頭の聲として、「おかみさん〳〵」と呼立てられ、胸にひいやり、細帶の手をとゞめ、「忠七、なんぢや」「伊勢吉から、爲換の金取りに來ました。旦那がお留守で知れませぬ」「をゝ、今行きます」と細帶にて、お千代を括せば、おひよの側から手拭の猿轡、二人は藏を出で、あとへは錠を下しけり。

作者いはく、これより末も、夜の所のみ打續くは、一夜にさま〴〵の事落合ふ故とはまけをしみ、まことは作者の下手なるゆゑと、御みゆるし可被下候

五　段

さるほどにお千代は、細帶に括され、猿轡にて聲たゝず、雪洞は持行きて、眞暗がりの藏の二階、そろ〳〵下へ梯子を傳ひ、綱戸へ寄りても聲はいでず、探り足に突當りたる長持のもとに

ませぬ」「いや、聞いたであろ。その聞いた事を、旦那に告げたな」「どういたしまして、私が聞きもせぬ事、なんで旦那へ申しませう」おへみ「われが立聞したといふには、慥な證據があるわ」ちよ「證據とは、何で御座ります」おへみ「そりや、おひよのに聞け」ひよの「これお千代どの、いつぞやおさんが、雜藏へ澤庵出しに往つた時、拾つて歸りし釵、水瓶の蓋の上へ置いたるを、こりや私が釵ぢやと、頭へ插した覺がある。さすれば其日その時に、おのしが雜藏に居たに違ない。窃に小糸を斬う爲えと、私が弟へ頼んだも、その日その時。おさんが拾ひし釵が、慥な證據。是でも知らぬと噓つくか」ちよ「さアそれは」「さア〳〵言譯はあるまいがの」と競詰められて、お千代は何といひわけの、泣くより外の事ぞなき。おへみは用意の出刃庖丁、研すましたをお千代に差つけ、「さア雜藏で聞いた事、殘らず旦那へ告げましたと白狀しろ。言はねばわれが乳の下、此出刃庖丁がぐつさりだぞ」お千代は、がた〳〵身を顫はせ、「あゝ〳〵〳〵あ、めつさうな。いかにも小糸を暗打と、聞いた事は聞いたれど、旦那は素より、人にいうた事は御座りませぬ」おへみ「小糸を殺す相談を、殘らず聞いたか」「はい」の返辭に、おへみはびつくり、おひよのと顏を見合せて、おへみ「漏れてはならぬ一大事」と首をしめる眞似をして見せければ、おひよの頷き、「して、その後は何となさる」おへみ「身投と見せる庭の井戸」おひよの頷く鬼と鬼。お千代は十

事に出れば、いつでもおへみ、機嫌あしきゆゑなり。かゝる女房を持ちしは、萬左衛門が不仕合なり。されば、何かにつけて、腹の底では、おへみに愛想が盡きたるにつけては、小糸が深切、心のすなほなるを、我儘なるおへみに比べて、いよ〳〵小糸が可愛くて、此夜俳諧といひしも、かの下屋敷に移りたる、小糸がふところへ行くのなり。是むかしの事なれば、門限にかぎりなく、殊更重忠殿の下屋敷ゆゑ、ゆる〳〵小糸に逢ひしなるべし。それとは知らず、おへみ、おひよのを呼びて囁きければ、打頷き、茶の間の行燈の下に、下女三人、おのれらが物の夜なべする中に、お千代は彼の半次郎に頼まれしとて、前垂の鈎裂繕ひながら、心に、いとしい若衆の前垂、膝に置くも嬉しきと思ふ後より、おひよの、「これ、お千代どの、おかみさんが奥藏から出しなさる物がある。雪洞つけな。私も行く」「あい」と前垂かたよせて、立つも尻がる、奥へ行く。あとからおひよのが送り狼、憂き目に遭ふとはしらはの十五、憐むべし〳〵。

四　段

奥藏は、座敷を離れし廊下づたひ、間口三間に奥行四間半。二階の簞笥の上に、雪洞二ツ置きて、おへみ「これ、お千代、おのし此間雜藏にて聞きし事、旦那に告げたな」と藪から棒に尋ねられ、心の内に、おそろしき事聞きしかど、人に語りし覺なければ、「否、何も聞きはいたし

せぬで御座りませう」「兎に角、憎いはお千代め。憂き目に遭はせて白状させた上、旦那へ告げたと言うたなら、旦那へは、小糸を暗打とは僞、私を恨む事ありて、身に覺のない事を、あなたへ告げたを、眞實と思ひ給ふは、憚りながら彼方のおろかなりと、罪を彼奴になすりつけねば後のいひぐさ」おひよの「それ〳〵。それなら旦那の留守に」「をゝさ、人に聞えぬ奧藏の」おひよの「二階で彼奴を括しあげ」おみの「暗打の事、聞いたか聞かぬか」「これさ、お聲が高い」

此所へ鳥渡申上候。この嫉妬女をおみのと申すは、巳の年、巳の月、巳の日に生れしゆゑ、蛇の性を享けて心妬しく、大嫉妬なりと申すが、此くさざうしの七編よりの趣向なれど、おみのとは有りさうな名ゆゑ、差合なきやう、おへびと付け候へども、あまりうそらしく候ゆゑ、まづおみのと致し候へども、此所より後、おみのいよ〳〵大嫉妬募り候ゆゑ、名の差合を憚り、へびをへみとも申候ゆゑ、作者蕎麥を配りて、おみのをおへみと、名を改め申候。皆樣左樣に思召しませ。

三　段

かくて此明る日の夜に至り、萬左衛門が妻のおみの、名をかへたるおへみに向ひ、「今夜は其角庵に、俳諧句合の點開きあり、行きてもよいか」と女房に聞くは、亭主が入聟のみならず、遊

き店にて、うりすゑの札が貼つてありしゆゑ、隣のかみさんに聞きましたれば、小糸さんは、何所のか、屋敷の親類衆の所へ引越しましたと申しました。屋敷へ引越したとあれば、彼の事を聞きしか、又は悟りしか、それでなければ、手出しのならぬ屋敷へはいる筈が御座りませぬ」「いかさま、こりや誰ぞ、おのしが權太へ話しの時、立聞して告げた者があるに違ない。おのしが心あたりはないか」といはれ、おひよの小首を傾けけり。

二　段

おひよの暫く考へしが、「私が思ひますには、お千代めが、旦那へ告げたと思ひます。其譯は、いつぞや雜藏で、權太と彼の話をいたせしあとへ、飯焚のおさんが、澤庵出しにまゐり、澤庵桶の側にありしとて、拾ひし釵を、流しの水瓶の蓋の上に置きたるを、お千代が見て、おやこれは私のぢやとて、頭へ插したるを、私側に見て居りました。其時、お千代もしや彼の事を聞きはせぬかと思ひましたれど、何を申すも、人の命を縮める事、毛を吹いて疵をもとむる喩もあれば、聞いたかとはきかれず、其儘にすてて置きましたが、今思へば、彼奴が旦那へ知らせたかも知れませぬ」おみの「それに違ない。子まで生した小糸、旦那が得心でなければ、屋敷へ移る筈がない」おひよの「左樣さ。屋敷へはいつたから、權太も手出しがならず、まだ沙汰を

教草女房形氣　九編上之巻

初段

さる程に、小糸をかこひおく徳若屋萬左衛門が店の小僧半次郎、腰元お千代に馴染め、雑藏に忍び逢ひし時、嫉妬のおみの、悪玉のおひよのと諜合せ、やきもちの妬に、小糸を暗打にせんとし、おひよの弟破落漢の權太を雑藏の中へ連來り、おひよの、權太へ暗打の事を頼む話を、半次郎お千代、物陰にかくれ居て聞き、大に驚き、その夜半次郎、店の使をさひはひ、小糸が母へ告げければ、母は殊更おどろき、明る朝、重忠殿の足輕小頭寺岡平六とて、小糸が叔父に語り、いかゞせんといひければ、平六、さる企ありては、町の住居危しとて、下屋敷に住居する平六方へ、小糸親子を引取る事、くはしくは此まへの八編を讀みて知るべし。さておひよのは、權太が音信聞かざるゆゑ、小糸が住居を尋ねけるに、うりすゑといふ札ありしを見て、いぶかしく、隣にて樣子を尋ね、さてはとて立歸りぬ。こゝに又嫉妬のおみのは、奥の居間に在りて、只一人おひよのが歸るを待ちける處へ、立歸りければ、おみの「樣子はどうぢや」おひよの聲をひそめ、「いやはや、とんだ事で御座ります」「小糸は息災か」「息災どころか、小糸が宿はあ


女房形氣
九篇下
豊國畫
山田屋板


女房形氣

序

おのれ、いたづらに犬馬の齡をかさねて、今年九々の春に遇ひぬ。年頃反哺の孝に養はれて、膾は細きを厭はず、家山藥は太きを食ふ。裘衣を重ねて寒さを忘れ、輕羅を纏ひて暑さを知らず。身の程に於ては、足らざる處なし。されば、心に織りて衣とし、筆を耕して食ふといふめる、王勃が比舍には住まざれども、下手の横好、書賈の催促、是も辭しがたく、彼も棄てがたくて、今年も亦、女房形氣の九編を作りて、かの催促に與ふ。

時年八十一　山東翁京山

嘉永二年乙酉之春稿本同晩秋上梓庚戌新販

▲出世する一つの宝 かのおちやうと云ふ ふうりう九へん十へん みつぎそれより ▲ここに又加ほよの父 じんたらがかつてに 多き[illegible]のふ さいてくせうと あつうハあるさ 一家おもひ多き[illegible] るあまハ小ひとをおくづれの おつひにかえらず[illegible] ええそかくとふりて[illegible] いつふへらうまるとらふ[illegible] つらひのめくちゆうたとも[illegible] よ一かみのへかさりけるに[illegible] あ[illegible]うらんたるにみやとふ[illegible] かんりんけるうゑとあ おもてようざまふらへ くんぎておとこ[illegible] うるをかのもひたし おちよう立かぎして だんるへつけるる うらんとはっ[illegible]⊖一

京山作

豊國画

女房うさぎ八ゑんとそゐり



⊜つぼぐり とんおちよ 日あら母 つとと らけ さまくの 多んきす あさ口 又まてられ まるの母か あかるハ九へ ふあるまへ ▲さて又小ふ 息子ハ平六 くてまおうそ ひろ円しきて きのおくて へもらりふ 手もられて めぞさきを むりへけり めそうて 多く

出し、お千代が立聞して、旦那へ告げたるならんと、半次郎が告げたりとは、お千代も知らぬ罪を受け、さま〴〵の難儀に遭ふ事、又すてられし眞實の母に逢ふ事は、九編にしるすべし。さて又小糸親子は、平六方に在りて、廣けし座敷の新宅へ移り、この年も暮れて、めでたき春を迎へけり。めでたし〳〵〳〵。

品々持たせて平六方へ至り、始て尋ねしとて、進物を出しければ、互の挨拶終りて、萬左衛門いひけるは、「昨晩小糸が母に聞けば、小糸を恨む者あるによりて、此所におかくまひ下さる由、母ひとり殘りて、いろ〳〵に心づかひもあるよし。とてもの事に、母も御引取下さるまいか。それにしてはお手狹ゆゑ、お住居をおひろげなされ。私も折々はまゐるゆゑ、物入はいか程ありても、お世話にはかけまい」と言ひければ、平六得心なし、昨夜曲者にいであひし事をも語りければ、萬左驚き、「然らば一日も早く、母をも御引取下さるべし」と頼みけり。さて萬左が持たせし肴にて、盃出しけるに、輕き足輕にはなか〳〵ない福と見えて、吸物の膳椀も見事なるに、萬左賴もしく思ひけり。さて又供に連れたる半次郎、此所へ來る道にて、龜を捕へしが吉瑞にて、後に平六に貰はれて、ゆく〳〵出世なし、終には彼のお千代と夫婦になる事、九編、十編に續きて記す。こゝに又おひよのは、權太がおとづれなきゆゑ、おみのに催促せられ、然らばあなた、一度お逢ひなされし事あれば、小糸をお尋のお使に、私がまゐり、樣子を見んとて、彼所に至りしに、小糸が以前の家には、うりすゑといふ札あり。おひよの驚き、つかひ物の重箱も持歸り、しか〴〵の由おみのへ語りければ、さては彼の事、告げたる者ありしならん、誰にやと二人して考へけるが、おひよの、お千代が雜藏へ、釵落しありし事を思

侍と見せかけ、夜は編笠も異なものと、目ばかり出せし頬かむり、小糸が風呂へ行くならんと、あたりに窺ふ眞暗がり、子を肌に背負ひし女、門に立ち、「お袋さん、坊さんの頭巾忘れました」「おゝ、さうか」と門口開け、負ひたる子に頭巾かぶせければ、この女馳行くを、權太さてはと、あとよりつけて行きけり。町を離れし寺續き、右は細川の流、左は竹垣の藪なれば、星も見えざる眞の闇、おとし差の平六が、小提灯提げたるを、權太、侍とは思はず、提灯の光に、頭巾の顔すかし見れば、小糸なり。權太すらりと拔き、後に下げてつけて行く。平六「これ小糸、提灯持つてくれ」「お小用かえ」「いや、足袋の中へ小砂利が入りて歩き惡い」と俯向く。小糸は提灯さげて立つて居る。向へ廻り、權太が翳す拜みうち、劍の光にあつといふ。平六見るより拔打の、二尺八寸だんびら物、米一俵さげる腕にて、下よりかつきと拂ひければ、刀を持ちたる事なき權太、手さきぴりゝと刀を落され、びつくり仰天、侍なりと始て知り、後をも見ずして迯去りけり。平六鞘へ納めながら、「暗討とはこれぢやな。ハヽ〱〱。たはけ面め」

十五段

寺岡平六、小糸を連來りたる明る日、小糸を圍ひおく萬左衞門、かの半次郎を供に連れ、進物

十三段

それはさておき、小糸が叔父は、母の弟にて、重忠殿の譜代の足輕寺岡平六とて、四斗入の米俵片手で提げる大力、下屋敷にて夫婦暮しの住居、家の側に作りおきたる菜を、朝飯の汁の實に摘みて居たる處へ、小糸が母來りければ、平六「朝がけに何用あつてござつたのぢや」母おつな「いやも、小糸が事につき、氣の揉める事が出來て、相談に來ました」「はてな。まア〳〵、此方へ」と摘入れたる菜の笊提げて家に入る。小糸が母お綱、平六が妻お吉へ挨拶して居る處へ、平六手を洗ひて來りければ、足輕なれど二間の座敷ゆゑ、お綱、平六を座敷へ招き、半次郎より聞きし事語りければ、平六「小糸を暗討とは、嫉妬女の鬼めがたくみならん。案じさつしやるな。小糸も萬太も乳母も、まづ當分私が預りませう。此所へかくしておけば、よしや知れても手出しはならぬ」おつな「それなれば、わしも安堵」「今日は當番、夕方は退くゆゑ、晩さきから迎ひに行く。それまでは、小糸を外へ出さつしやるな」と弟が詞に、おつな安堵なし、摘たての菜汁に鮭の鹽引、朝飯食べて歸りけり。

十四段

權太は三十兩の慾心に心くらみ、おひよのが敎に任せ、ふきぬきの黑羽二重に、大小ぼつこみ、

が娘にて、母のお貞、貧苦に迫りて捨てたるを、在番のさむらひ廣田小太夫に拾はれ、金五兩つけて小太夫が、人にくれたるが人に養はれ、今十五歳にて、此所に奉公したるなり。このお千代に樣々の話あり、後を讀みて知るべし。半次郎は、小糸が方へ使の度々、小糸親子が半次を可愛がり、優しくするゆゑ、お千代が口は止めたれど、その夜店の使に出しをさひはひ、まはり道して、雜藏で聞きし話を、小糸が母に告げけり。

十二段

こゝに彼の下女お千代は、半次郎と物置にありて、おひよのと權太が話を聞きて怖しく思ひ、二人が立去りしを見て、半次郎は店へ、お千代は奥へ、そしらぬ風して居たりしが、おみのが烟草盆の灰吹あけよといふに、お千代灰吹持ちて臺所へ來り、ながしへ下りて灰吹をあけ、灌がんとて、柄杓を取らんとしけるに、水瓶の蓋の上に細き釵あるを見て、「おや、これは私の釵、おさんどん、何所にあつたゑ」おさん、澤庵切りながら、「今澤庵出しに往つたら、樽の側に落ちてあつた」「おや、有難う」と頭へ插して奥へ行きけり。此時おひよの、傍にありて思ふやう、さてはお千代、雜藏にかくれ居て、權太を頼みし事、聞きたるも計りがたし、しかし、それとは問はれもせず、と心にはかゝりしが、火ともしの忙しき頃に紛れて打棄ておきたり。

三十兩ぢや」「姉御、そりや眞かえ」「なに嘘をいふものか。やる氣はないか」「三十兩なら、命がけの出刀庖丁で、どてつ腹を」「いや、そりや惡い。此三兩を手付にやるから、小袖一枚、大小一腰、古編笠に姿を替へ、噂にさせる戀の意趣切」「なるほど〳〵、面白え」おひよの「血の付いた片袖を證據に渡す三十兩」「姉御、恨人はおかみさんだな」「その口ふさげが三十兩ぢや」ごん太「安いもんだぜ」

十一段

おひよの、おみのが五十兩といひしを、權太へは三十兩とて、姉弟の中といひ、殊更善からぬ金を二十兩、我が物にせんとする、此おひよのが惡心、天道様いかでゆるし給はん。おひよのが身の果、後を讀みて、天罰ある事を知るべし。それはさておき、半次郎、お千代は、雜藏の内の澤庵樽の陰にかくれて、おひよの、權太が話を聞きしが、おひよの、權太も露知らず、立去りければ、二人はやう〳〵ため息つき、「これお千代殿、今聞いた話、誰にもいふまいぞ。私等が口から漏れたら、おかみさんが徒はおかぬ。どんな目に逢ふも知れぬぞよ」「左樣さ。しかし、おそろしいおかみさんだ」「それだから、どんな目に逢ふかも知れぬ」「怖いねえ」と取縋る、妹背の莟、室の梅、まだ早咲のいたづらなりけり。このお千代は初編に見えし浪人羽内から四郎

大阪へ行くのか」「なに噓を吐くものか。此土地に居られぬ譯で逃出すのよ」「それなら、おのしに話す事がある。此方へ來や」と下駄穿いて先に立ちけり。この臺所の後の澤庵の樽、炭、薪、味噌樽、臼、杵、夏の建具など入れ置く雜藏あり。夕暮の紛れに、小糸への使をする萬左衞門が氣に入りの小僧半次郎、おみのが腰元のお千代、同じ年の十五、此藏にありて、お千代「きのふの晩は、あれ程約束したゆゑ、八ツまでは、寒い目して待つて居たに、なぜ私に風をひかせなさんした」「番頭さんの帳合が長くて、拔けられなんだ。腹が立つたなら堪忍しねえ」とひそ〳〵話の折しも、此所へ來る下駄の音に、二人はびつくり、澤庵の樽の陰へ足を縮めけるは、人知れずくつついて居たるなるべし。こゝへ來りしはおひよのなり。傍にありし薄縁を敷きて、立膝なし、權太にあとの網戸をしめさせ、「これ權太、大阪へ逃るなら、一仕事する金儲の口があるが、行がけの駄賃にして見ぬか」「金儲とは耳よりだ。どういふ譯だえ」「おのし、己が旦那のかこひものを知つて居るか」「あの新道の小糸か。評判の女だ」「おのし、見た事があるか」「見たどころか、いつぞや落語の寄席へでんばうに往つた時、小糸が來て居たから、吉と二人で大勢を跨越し、小糸が側へ行き、宵から四ツまで面を見たが、好い玉だ。旦那ののろけるは尤だよ」「見知つて居れば、よし〳〵。さて權太、金儲といふは、小糸を恨むお人があつて、小糸を暗討にすりや

につこと打笑み、「それをおのしに習はふか。おれが心は、是かうぢや」と耳に口寄せ囁けば、おひよの「そんなら小糸を、旦那のお留守に招き、馳走に紛らし」「をゝ」「いえ〳〵、そりや悪い。血でも吐いては、あなたと知れる。あの抜目の無いおのりでさえ、一ぺん遣損つたぢや御座りませんか」「すりや人知れず暗討に」「夫も他人ぢや漏れやすし。私が目下の身内に、此役をさする者が御座ります。しかし口止は小判の光」おみの頷き、「首尾好くゆかば五十兩やらん。まづ手附に、十兩はおのしに預ける」と簞笥の引出錠前開けて、小判十枚渡しけり。さて怖しき嫉妬に、悪魔の悪玉のりうつりければ、小糸か命は風のともし火、危し〳〵。

十[illegible]段

かくて明る日の夕方、この徳若屋の勝手へ來りしは、二十三四の男、廣袖に三尺帶、紺の股引白い足袋に藤倉草履、立廻る下女にむかひ、「もし、おひよのを鳥渡呼んで下さいまし」「何方ぢやえ」「權太が來たといつて下さいまし」「あい〳〵」と奥に入りしが、おひよの出來り、弟の顔見て「何しに來た」「姉さん、來られた義理でないが、いつぞやの三分も、その晩に消えて仕舞ひ、爲る程の事がぐれはまで、とゞのつまりが深みへはまつた借錢で、この鎌倉に居られねへから、金毘羅かけて大阪で稼ぐつもり。姉さん、氣の毒だが、三兩ばかり貸してくんねえ」「眞に

九段

こゝに又小糸が母は、嫉妬のおみのに小糸を逢はせるとあるゆゑ、その首尾を案じけるに、四ツの拍子木打てども歸らず、待わびし處へ、門口より小糸が聲にて、「母さん歸りましたよ」「やれ〱遲かつた。たいてい案じた事ぢやない。さア〱著替は炬燵にあるぞや」小糸「勿體ない、憚りで御座ります」小袖著かへる傍にて、乳母は萬太郎に乳を含めながら、「今日はお留守ゆゑ、いつにない乳がはつて困りました」母は小糸にむかひ、「あちらのお首尾はどうであつたな」ト尋ねければ、小糸、萬太を爼に括しつけたるを、叔母様の謀とは知らで、悲しかりし事、叔母様の取持にて、嫉妬のおみのに盃までなしたる事、叔母様の厚きこゝろざしの數々を、委しく話しければ、母は涙拭ひて、叔母が深切を悦びけり。さて又嫉妬のおみの宿へ歸り、萬左衛門に、叔母様のとりもちにて小糸に逢ひ、盃もして、萬太も愛らしきなど語りければ、萬左衛門大きに悦び、心の内には、まづ是で、小糸がこゝらかりし緒解けしと悦びけり。さておみの、部屋に至りければ、惡玉下女おひよの聲を潛め、「今旦那への御話を聞けば、小糸にお逢ひなされし由。小糸に叔母様といふ後見がありて、萬太郎様といふ男の子がありては、あなたはおしつけ、お爲ごかしの御隱居様、うか〱なさる處ぢや御座りませぬぞ」おみの

ゑ、他人の中を知らず、親達が祕藏して、我儘に育てしゆゑ、何事も氣隨にて、我一人よいと思やるは、心得違ひ。可哀さうに萬左衞門は入聟とて、萬事おのしが我儘をゆるしておくは、私が目には見ゆる。彼が來てから、地面も二ッ殖し、心立は優しく、酒は呑まず、男振はよし、不足のない亭主。おのしに子がないゆゑ、一人欲しいとて私には明したあの小糸、禮いうても盃する筈、私が頼むに、厭なら止しやれ。これ竹、その銚子も引いて、盃も吸物も下げてしまへ」と、以の外なる立腹。負惜みのおみのあやまらず、「盃がいやと申すのでは御座りませぬ。歸りが遲くなりませうと存じて」叔母「暇は取らせぬ。これ竹、吸物が冷めたらう。つけかへて來や。そして小糸をこゝへ呼びや」小糸は此所へ來る時、叔母が文に、おみのに逢はすとありしゆゑ、萬太は此所の下女に頼みて、座敷へ出でければ、叔母が指圖にて、おみのより小糸への盃、小糸は十一の年より十五まで、さるお屋敷のお小姓を勤めたるゆゑ、盃の取廻しもみにくからず、おみのは御奉公せぬゆゑ、小糸への肴、紙へも取らず、蒲鉾一ッ挾んでやるを見て、叔母苦々しく思ひけり。かくて少し時移り、おみの歸りければ、小糸も叔母へかずく禮をのべて歸りけるが、そのあとにても、下女ども口々に小糸をほめ、「何所の嫁さんにしても宜う御座ります」叔母「さうよなう」

下女より傳へけり。さて叔母は、おみのへ何うがなして逢はせんの心なれば、最前萬太が事に、小糸が目の縁すりあかめたるを見て、叔母化粧を直させおきたれば、をづ〳〵出づる小糸は、はたちの半元服、こゝぞ一ッと言分のなき美人、遙下りて手をつきし、手肌も白く指細し。おみの是を見て、おのれよりは十倍優りし顏形に、もちまへの嫉妬の火燃上りしが、叔母の手前あれば、色に出さず、「小糸、始て逢ひました。今私が膝へ這寄りしは、こちの人の胤を宿して、おのしが生みし由、お手柄〳〵。わしは今年で十五年連添へども、火の止つた事がないのに、おのしは、萬太郎とやら、男を産落して羨しい。しかし本妻は私ぢやぞよ」と眞綿に針の詞。叔母は苦々しく、小糸は怖しく、「お目にかゝりますも面目ない身の上、お腹立は何事もお許しなされて下さりませ」と疊へひれふしたる折しも、叔母「おや〳〵、此子は尿をした」と聞きて小糸すり寄り、萬太を抱取りて次へ立ちけり。さて叔母がいひつけ置きしと見えて、盃吸物持出でければ、叔母「おみの、其方より、小糸へ盃してはくれまいか」「左樣さ、今宵はこちの人も留守ぢやゆゑ、早う歸らねばならず、小糸へ盃は、又重て折も御座りませう」叔母これを聞きてむつとなし、「こなたは心強い人ぢやなう。子まで生したる小糸に逢ふて、暇取りしといはゞ、萬左衛門いかばかりか悅ぶべし。おのしは、親の膝元にのみ育ち、有難い御奉公せぬゆ

教草女房形氣　八編下之卷

八　段

唐土の古語に曰く、虎穴を探らざれば虎子を得ずといへり。いふ心は、虎の穴を探るは危けれど、その危きを踏まざれば、虎の子は得がたし、おもひ込んだ事は、天に任せて遣つて見よとの教なり。さてかの叔母、萬太を俎へ載せて、おみのへ見せたは、こしらへものの庖丁、虎穴を探る謀なり。孟子に、人の性は善なりといへるにもとづき、おみのが腹も立たざる處へ、いた〳〵しきみどり子の樣を見せて、膽を潰させたる叔母がはかりごと、奇々妙々なり。さて叔母、年増の下女にいひつけ、萬太に小袖著せて、次の間にて小糸乳を呑ませければ、泣止みたるを上の間に呼びて、叔母が膝元に、足投出して坐らせければ、おみのを母とや思ひけん、這寄りて膝に取著き、にこりと笑ひし顏の愛らしさ。嫉妬のおみの、さすが鬼にもあらざれば、思はず抱上げけり。叔母これを見て、「これおみの、その子を抱上げる心があらば、とてもの事に、その母の小糸に逢ふて下され。おのしにはたつた一人の叔母が、一世一度の頼ぢや」といひければ、暫し思案ありて、「叔母さんのお頼なら逢ひませう」「それは嬉しい。小糸を是へ」と



女房形氣
八編下
庚戌
新板
山東京山作
歌川豊國画

り差覗き、やう〱胸を撫下しぬ。それより後の事、下の卷にしるす。

て、「これおみの、この餓鬼は、おのしが日頃憎い〱と思やる、萬左衛門がかくし妻小糸が生みたる餓鬼なり。男を寐取られた女の敵と思ひ、その出刃庖丁で首打つとも、手足を捥ぐとも心の儘にして、くたばつた死骸は、その早桶へ入れ、砂利で詰めたを、裏の古井戸、樒一本は立ててやらん。さア殺せ。見物する」と何時にない叔母が眼玉。おみのは杉の木へ釘打つて呪ひし程、憎しと思ふ小糸が子と聞きても、さすが女なれば、聲を立てて泣叫ぶ玉の樣なるみどり子に、出刃庖丁はあてかねて、差俯向きて居たりけり。叔母「これは日頃に似合はぬ。殺して恨を何故晴さぬ。聞えた。手を下すは汚らはしいと思やるのか。さうであろ〱。それなら私が料りませう」と膝立直し襷がけ、泣居る萬太が口へ手を當て、庖丁引拔き、「塞の河原へ今やるぞ」と庖丁振上げければ、最前より怺えて居たる小糸、唐紙あけかくるを、叔母聲かけ、「出ては惡いぞ、出まい〱。とは思へど、血は出るであろ。じたばたするな」と振上ぐるを、おみの「やれ叔母さん、待たしやんせ」「いや、殺す。おのしにかはりて切刻む。其所放せ」「いや放しませぬ」「そんなら此餓鬼、助ける心か」「あい。可哀さうに、なんにも知らぬそのみどり子、むごたらしい事がなりませうか」叔母庖丁がらりと投棄て、「それが女の本性ぢや」おみの「繩も解き、小袖もお著せなされませ」叔母は頷き、襷はづし、萬太に小袖著せるを、小糸唐紙の隙よ

する處へ、かの小僧半次郎來り、使に出しが、何ぞ用はなきかといふ。幸ひなれば、叔母樣の處まで送りくれよと、半次郎には貰置きし玉子の折を持たせんといふを、半次郎「私は坊樣を抱こしませう」と、土產の折の包は、下女に持たせて立出でけり。扨又此夜、叔母より嫉妬のおみのへ文に、珍らしきものを見せ申さん、今宵來り給へとありければ、おみのは小糸より先に來り居て、世間の物語に時を移しければ、おみの「叔母さん、珍らしい物とは何で御座ります」「をゝさ、今取りにやりしが、未だ參らず。暫し待ちたまへ」と勝手へ立出で、年增の下女に、「小糸はまだか」といふ處へ、小糸來りければ、此方へとて、おみのが居る座敷の次の間へ連來り、「これ小糸、おのしをおみのへ逢はせんとて、呼寄置きたり。まづ萬太郞に逢はすべし」とて抱きとり、「これ小糸、何事があらふとも、私が聲かけるまでは、此唐紙開ることはならぬぞよ」と萬太を抱き、唐紙の內へは入らず、緣を傳ひて立去りけり。こゝに又おみのは、大蠟燭つけたる座敷にたゞ一人、わざ／＼呼寄せ、何を見せるかと、不審に思ひけるに、叔母が持出したるを見れば、當歲のみどり子を赤はだかになして、新しき大俎に載せ、腹の所を荒繩にて俎へ括しつけて、研立てたる大おろしの出刃庖丁を俎へ突立てたるなり。その側へ小さき早桶に、樒、荒繩添へて置きけり。心強情なるおみのも、是を見てぞつとしたる顏付、叔母じろりと見

せ遊ばしました。お恥しいお目通、末長くお目かけられて下さりませ」と詞つき取廻し、思ひしよりは人柄もよく、嫉妬のおみのよりは、遙優りて美しくしとやかなれば、叔母まづ小糸が可愛くなり、「どれ、萬にも逢ひませう」と抱き取り、「やれ〳〵好い子ぢや。このまア肥つた事は」と乳臭い顔に、顔おしあてて愛しけり。年増の下女、重箱の包提げて來り、叔母に、「これは彼方のお土産で御座ります」「小糸がお土産か。止せば好いに」萬左「小糸が始てゆゑ、お肴でも上る處、何事もない〳〵故」下女「それ〳〵御覧遊ばせ」と重の蓋取れば、上は鯛の味噌漬に、鱚の開き、下は叔母が好きとて、玉子の厚燒に、鴨の蒲鉾、長芋の旨煮。「是は皆私が齒に合ふもの。こゝろざし嬉しう御座る。母屋へも福分しませう。是は重の儘とめますぞえ。これ」と下女が耳へ囁きければ、稍ありて、吸物に三ツ物、小糸へ始てとて盃取らせ、菊重の小紋に、紋付の小袖一重、唐繻子の帶、萬太郎へとて、八丈縞一反に裏地をも添へて、小糸に取らせけり。

七　段

かくて萬太郎宮まゐりも濟み、日に増し愛らしく、父母の顔も見覺えける程にいたりし折、ある日叔母より小糸へ文に、久しく萬太を見ざるゆゑ、今宵連來れとありければ、優しき叔母が文に、小糸嬉しく、此程叔母より貰ひたる八丈縞を、仕立て置きたるを著せて、行かんと支度

りものなるゆゑ、萬左衞門が心を推し、小糸にも逢はんといひしなり。下々の女は、大方は頑固、我儘、負惜にて、心さばけず、わが好まざる事には、理をつけていひ紛らかし、善き事も心に落ちざれば、言張りて人の言を用ひず、嫁をいびり、亭主を尻に敷くも、皆頑固に我儘なるゆゑなり。古歌に、

何事もそれにまかせてすぎゆけば常に心もしづかなりけり

此歌にて心の垢を洗ふべし。合點か〳〵。

六 段

さる程に小糸が産みたる子を、母の乳太ければとて、半乳の乳母を置きけるゆゑ、萬太郎犬の子の樣に肥り、小糸もひだちければ、ある日の日暮より、乳母に萬太郎を抱かせ、小糸を連れて萬左衞門、叔母の隱居所に至り、小糸を次の間に待たせ、云々の由叔母にいひければ、叔母「さア〳〵、小糸を此所へ」の詞に、小糸乳母に抱かせし萬太郎を抱取り、をづ〳〵一間へ入りければ、叔母「やれ〳〵、此人より内々聞きました。聞けば五年の馴染といひ、子まで生した中、萬太郎の爲にもなり、お主が爲にもと、陰ながら私も苦勞します」と涙ほろりは老の癖。小糸も嬉しき涙を拭び、わが子を横に、手を突きて、「有難いあなた樣の思召は、旦那からもお聞か

ゆゑ、いつぞやおみのに聞けがしと、おひよのへの話に、私が町内の軒下へ捨子がありしに、その家の内方がいはるゝは、私を見かけて捨てたるならん、親知らずに貰はんより、捨子拾ひあげて育てなば、その父母も嘸かし悦ぶべし、何よりの功徳なれば、家のきたうともなるべしとて、夫婦同じ心にて町内より貰受け、乳母を置いて育てるが、何と捨てた親の心では、さぞ嬉しかろ、捨子をわが子にするとは、心立の好い女中ではないかと、おみのが心をひきみんため、おひよのに話したれば、おみのがいふには、私らは厭な事かな、それよりは人の育てた子を貰ひ、氣に入らねば出してやる分の事と、一ト口の詞に、さても／＼母には似ぬ氣隨な心と、愛想が盡きた。今此方の話のやうにすれば、世間のほめもの、上々吉ぢやが、あの心根では、私が勸めても得心せまい」「左樣で御座りますか」と萬左衛門が打萎れたる顏付の不便さに、「兎も角も稚子も見たし、小糸に逢ひませうから、ひだち次第稚子をも連れ、夜に入りて、小糸を連れて御座れ」「それは有難う御座ります。小糸も母も、嘸かし有難がりませう」と、この話はこゝに止み、此家主人夫婦にも逢ひ、彼是する内隱居所へ鰻を取寄せ、萬左衛門酒は好かぬゆゑ、叔母がいつもの一銚子、共々に夕飯食べけり。そも／＼この叔母、御大家のお身近く勤め、且又夫と賴みたるは、世に十八大通と呼ばれたる男なりければ、麻に連るゝ蓬にて、通

萬左衛門も、此叔母をば常々大事になし、叔母も、萬左々々と可愛がるゆゑ、この叔母には、小糸が事も明かし置きたれば、男を産みたる事を知らせんとて來りければ、叔母は庭にありて、柿を落させる所、繪の如し。叔母のおみよ、萬左衛門が顔を見て「おゝ、よく御座つた。さア〳〵此方へ。コレ三太、上のは落すに及ばぬぞ」といひつゝ先に立ちて座敷に至れば、萬左衛門「昨年より澤山に生りましたな」「左樣さ、まだ霜が降らぬから、澁が拔けまいと思ふが、下の方を落さねば、私が留守には、店の小僧共が木登りして、危險いから落すのぢや」「いかさま、何方も小僧共の惡さには困ります。ハヽ〳〵」「小糸は臨月ぢやが、どうぢやえ。最早月末、延びでもするか、婆はなんといひます」「されば、その事で上りました。お悦び下されまし、一昨晩安産いたしました」「やれ〳〵さうかい。して男か女か」「男で御座りました」「それは一入めでたい。血心もないかえ」「おや子とも息災で御座ります」「それは仕合。小糸が母も、さぞ安堵であろ」「心立も好い婆で御座ります。さて叔母さん、私が思ひますには、お家の血筋と申し、殊更男の子ではあり、今まで子の出來ぬおみの、小糸が産みしを養子にして育てなば、世間でもおとなしく思ひ、私は素より、小糸も心嬉しう御座ります。お賴み申しますはあなたばかり。どうかおみのへ、おすゝめなされて下さりませ」「その事は私も心づいた

ぞ見繕ひ、三ッ物を一枚、己がいふとて早くと言へ。まだ寢はせまい。此所へよこすのぢやぞ」平次郎「はい〳〵」と提燈つけて立出るを、呼返し、「酒も一升よこせと言へ。砂漉だぞ。おふくろ、平六樣へ始てなれば、一杯上げたい」平六「それは有難う御座ります」

五　段

それはさておき、萬左衞門が女房大嫉妬の我儘者おみのが叔母おみよは、おみのが父親の妹にて、十三の春、三曲に、踊と下方を申立にて、さる御大家のお小姓に上りしに、丈も小振ゆゑ、十六までちご髷なりしが、殿樣お年若ゆゑ、此子が美しきに絆され給ひ、ほの字と見えし糸薄、風に任する白露の、落ちさうに見えければ、ごましほ程なる片端しの椎茸殿、それと見て取り、おちごから直に元服して、目出たく勤める筈なり。親は金持、鳥渡のお供に、綸子の小袖も、紋付を仕立てさせて間に合す程なれば、御奉公に事缺く事なく、御首尾も宜かりしが、同じ程なる金持より、是非貰ひたしとの事ゆゑ、廿一の秋御年期十年を二年殘し、やう〳〵お暇を戴きて嫁入せしに、廿九年は夢の間、實の兩親も見送り、夫にも別れて、今は產落したる悴の家督にて女の樂隱居、かの嫉妬のおみのが爲には、外になき一人の叔母樣、外には捗々しき親類もなければ、わがまゝなるおみのが、頭の上らぬはこの叔母樣のみなり。されば入聟の

は別して大事ゆゑ、出入の醫者に賴んでおいた。明日は來るであろ。山井ぜんくわいといふ醫者ぢや。これ半次郎、その重箱を」と母に遣るを、下女開けて見れば、切餅に大根の味噌漬。是も子ゆゑの闇に迷ひ、途次にて求めたるなるべし。およそ世の中の親たるもの、子の生れぬ前は、さのみには思はざれども、產聲きゝて顏見れば、直に可愛くなるは人心の常なれど、その子人の道を知らざれば、何時までも親の恩を知らず、勘當うけるもあるは如何にぞや。愼むべし〳〵。寺岡平六、小糸が母にむかひ、「目出たい折から、居り合せしこそ幸ひなれ。烏渡お近づきに」母「それ〳〵。申シ旦那、是は私が弟で御座ります」萬「おゝ左樣かな」平六「貴方は小糸にお目かけらるゝ萬左衞門樣、私は寺岡平六とて、秩父の家來、輕き者。いつぞはお目にかかり、お禮も申したく存ぜし處、好い折から、お見知り下され。姉が話にも、是まで小糸を厚きお世話、この末ともにお見捨なく。別して又、今晩は目出たき安產。拙者今夕ふと參り合せ、男子の平產、さぞ貴方にもお悅びで御座りませう」と詞のつぢつま、袷袴の棧留も、折目みださぬ男振。萬左衞門は少しひるみしが「いやもう、宿へは沙汰なしの事なれば、何事も心に任せず、小糸にもお袋にも不自由させます。しかし男子出生の上は、致し方も御座りませう。兎も角も小糸親子は、拙者引受けます、御案じ下さるな。これ半次郎、ぎよ淸へいつて、なん

四　段

小糸が下女立歸りければ、小糸が母お綱、「どうぢや、今の文半次郎に渡したか」下女「はい、渡しました」と蠟燭三挺行燈の側に置く。母「およ、よし〱。半次に渡しさへすりや旦那に屆く。今にお出であろ。小糸、旦那も今にござるぞよ」といふ所へ、人を頼みて呼びにやりたる子安婆駈付け、脈を診て、「今晩の汐時は四ツ半ゆゑ、今暫時ぢや。しつかりなされ」と産氣づきたる小糸を扱ふこと、少しも騒がぬ落著顔、馴れたものなり。小糸も母も心穩順にして、あたり隣のつきあひも好くしておくゆゑ、産氣づきしと聞きて、女房達見舞に來り、釜の下燒つけるもあれば、催産の藥振出すもあり。兎角する程に安産の産聲、しかも男の子なりければ、母の悅はさらなり、日暮より圖らず來て居たりし母の弟、重忠殿の足輕小頭寺岡平六も、小糸が安産を悅び、然らば私は歸らんといふ所へ、半次郎を供に連れ、わくせく來りし萬左衛門、平六は好き折なり、近付にならんとて留りけり。神さん達も旦那と見て、母に悅びいうて立歸りぬ。萬左衛門「お袋、安産であつたか」「はい、思の外輕う御座りました。しかも男のお子で御座ります」と産湯も濟みたるを、抱きながら見すれば「およ好い子ぢや。乳が細くば乳母も置かしやれ。話の子守はいよ〱來るかの」「明日からまゐる約束で御座ります」「よし〱。産後

始て我子の顔見るは、今日か明日かと樂みも、女房に知らさぬ胸一ッ、有難き安產の護符早くやりたくて、一筆添へて持たせやりしは、店にて使ふ小僧の內、半次郎とて十五の若衆、心優しく怜悧者ゆゑ、萬左衛門が氣に入り、小糸への使は、此半次郎のみなりけり。

三　段

小糸が臨月も月末に至り、子安とて上手の名あるとりあげ婆摩りに來り、「おかみさん、こりやもう近々に御安產でありませう」といひければ、母は嬉しく、戌の日に造へおきたる產の仕度も、手許へ出し置くほどなり。されど胤を宿したる男は、定まる妻ありて、しかも小糸が側には居らぬ人ゆゑ、小糸が賴みは、年寄たる母ばかり、母子が心細さ思ひやられて、いと〳〵哀れなり。それはさておき、ある日萬左衛門が店にては、四ッの拍子木かち〳〵を聞きて、店の小僧ども居眠の眼はぱちり、やれ嬉しや、寢る事ぞと、思ふ門口がらり開け、「蠟燭をおくれ」といふ顏、かの半次郎、行燈に透し見れば、見知りたる小糸がつかふ白齒の下女なり。小糸より萬左衛門へ用ある折は、此格なれば、半次郎そしらぬ風にて、「蠟燭は何をあげます」「十六錢のを三挺おくれ」「はい〳〵」とその品渡す手へ下女が文、半次郎の懷中へ入れ、「はいお歸ンなさい」

教草女房形氣　八編上之卷

初　段

むかし〳〵鎌倉にて、土一升金一升といふ所に、五間間口、質、兩替に紙油、蠟燭、居付地面の外に、七八ヶ所の地主德若屋萬左衞門とて、妻のおみのは家付の娘、萬左衞門は入聟にて、年は四十に近く、妻のおみのは二十七八、智惠は鼻の先にありて、腹の底は愚なり。萬左衞門は入聟ゆゑ、店の商賣の外は、おみのが心のまゝに任せるも、小糠三合の入聟なればなり。さて四十に近けれど、おみのが腹に一子なければとて、密に新道の出格子に、小糸とて十九、もとは三筋に世を渡りしうちも、母に孝行なるに、萬左衞門一入不便に思ひて、この新道に移らせ、下女も使はせ、母にも肌に木綿をつけさせず、火鉢は常に櫻炭なり。かゝるかくし妻にも、萬左衞門の心の儘に通ふ事のならざるは、女房おみの、心あら〳〵しく、我儘者の嫉妬やきなる故なり。その事は此草ざうしの七編を見ても知るべし。

二　段

七編にも記したる如く、小糸が腹に萬左衞門が胤を宿し、既に此月は臨月なれば、萬左衞門も

序

明人謝肇淛が五雜俎、巻八、人事の部中、妬婦の條下に曰く、世に勇猛三軍を馭るに足れるも、其威房闈には行はれず、智謀は六合に周るに足りても、其智紅粉には運らず、憤を含み、歎を茹みて、首を俛め、眉を低れ、甘んじて之が下と爲り、莫可誰何は、人生の一大不幸に非ずやといへり。唐土のむかし如斯。況や今の中より以下の人の中に、男一疋といはるゝ俠客も、博識と推稱らるゝ學者も、其妻には常に肌の白を取られて一目おき、剛舌四ッ目殺しに一口も出でず。妬妎き刻歴きて、我が一世の夫を人に嘲らせ、おのれ何の德ありや。我が心一ッにて、夫を人に嘲らすは、朝夕わが影を映す鏡に、我が糞を塗りて、曇らすが如し。其臭氣をうつしたる此くさ草子の、にほひを齅ぎて、やきもちのこげるを知るべし。

嘉永二年 己酉孟春滴本 同季秋上梓戊春發　八十一歳 山東老人識

彼に話したれば、けんもほろゝな挨拶ゆゑ、小糸が產みしとて、おみのが子にする事ではなし。それはともあれ、小糸が病氣は、彼が打つ釘に違なし。それにしては、丑の時まゐりも何もかも、とんと知らぬ風で、まづ當分の內、おみのを騙して、心を宥めて置く仕方がありさうなものぢや」萬左衞門「晚に、私が、彼が閨へまゐり、氣やすめをいひませうか」「いやく、そんな事では行くまい」「左樣なら、いつその事、小糸が事を打明し、あやまりの一札でもやりませうか」「なんぼ聟ぢやとて、女房にあやまり證文書く馬鹿があるものか、腑甲斐ない人ぢや。よしや、あやまりて得心なし、彼が心のとけるには、小糸を見捨てずばなるまい。見捨てる心か」「左樣さ、小糸はともあれ、腹の子が不便で御座ります」「小糸はともあれとは、私への言譯ならんが、子まで生したる中、見捨てるは不便、兎も角もおみのを宥め、小糸に安產さす仕方ありさうなものなり」萬左衞門「あなた、何うぞお賴み申します」叔母のおみよ打頷き、「篤と分別して見やう」七ツの時計ちんく。作者曰この叔母、おみのが怖しきやきもちに固りたる胸を開かせ、小糸が安產の事、上の卷にて捨てられたる女の子、十七歲の時、不思議の事にて、まことの母にめぐりあひしが、親子の名のりはなし難きわけある事、又小糸がほかに大やきもちのさわぎ出來る事など、此次の八編にしるし、引續き出版仕候。めでたしく〳〵。

とりつきもののしたる樣なれば、萬左衛門も樂みの一子、もしや流れやせんと、さま〴〵にいたはり、母は梓巫子に頼みて、神おろしの口寄をなしけり。

十六段

それはさておき、おみのが夫德若屋萬左衛門が養父の妹、叔母にあたるおみよは、同じ程なる金持のお袋、今は後家にて樂隱居なり。ある日萬左衛門來り、いろ〳〵ありてのち聲を潛め、「さて、いつぞやお頼み申したる小糸、もはや帶もいたしけるに、先月よりぶら〳〵の病氣、とりつきもののしたる樣なるゆゑ、小糸が母、巫子の口寄したるに、目上の女の生靈と申したるよし。さておみの事、最早一月あまり、氣分惡しきとて、一所寢を致さず、藥もいやとて呑まず。しかるに一昨日、奥で使ふ長松が、ごん介に申すには、裏の稲荷樣の杉の木へ釘が打ちてありし故、私が拔いて置いたれば、今日見れば、又釘が打つてある、誰が爲るか惡い事すると、長松が話すを聞きましたが、口寄のいうた事など思合せ、もしやと存じ、昨夜密に窺ひしに、二十六夜の月影に、丑みつ頃、稲荷を拜み、杉へ釘を打ちたるは、おみのなり。私も、ぞつとする程恐しく、さては小糸が病氣は、おみのに呪はるゝゆゑと存じます。叔母樣、どう致しませう」「さて〳〵困つたものぢや。いつぞやも餘所の事によそへて、捨子を貰ひし事を、

提げたる小僧が出す文を見れば、おみのが筆とおぼしく、かの事聞きたく、はや〳〵御出可被下候とあり。さては亭主留守と思ひ、門口に錠を下し、小僧と共に出行きけり。さておみのは待兼ね、如何と尋ねければ、斯樣々々と、振出しの中へ入れたるを、小糸呑みたりと僞りければ、おみの大きに悦び、約束とて五兩取らせ、別に三分は、袷の表とてくれければ、おのりかず〳〵禮をのべて立歸り、その明る日、家財殘らず賣拂ひ、その夜跡を暗ませけり。

十五段

おみのは斯くとも知らず、十日ばかり經ちたれども、おのりが知らせる約束なる、小糸が音信を聞かず、覺束なきゆゑ、おひよのを遣しけるに、おのりが居たる所に、貸店といふ札あり、あたりの噂に尋ねければ、いかなる譯か知らねども、十日ばかり以前、家財は賣りしと見えて、夜逃したりといふ。おひよの、さては十兩騙取りしゆゑと、立歸りて云々の由おみのに言ひければ、もしや小糸に告げたるかも知れず、此上は外に恨を晴さん手段なしとて、病に假托け、亭主と一所寢をせず。三ツある藏の後に廣き空地あり、是も親の代よりの持地面なり。この空地の隅に小さき稻荷の宮あり。こゝに神木とて、年經る杉あり。おみの夜な〳〵此稻荷へ丑の時まゐりをなし、杉の木を打つて、小糸を呪ひけり。この惡念屆きてや、小糸がぶら〳〵病、

思ひしゆゑ、殘さどりしは殘念なりと、心には思へども、口には、「小糸さん、頭痛でも揉みませうか」「いえ〳〵」と横になるを、母は夜著を引掛けやる。おのりは何とやら面伏にて、兎角して宿へ歸らんとするを、小糸「をばさん、まあ遊んでおいでな。母樣、砂漉があるではないか。今朝貰ふたお肴もあるし、をばさんに一つお上げな。お前も上れ。私も針魚で御飯を食べやう」母「そりや宜からう」小糸「をばさん、針魚は食べてもよからうかね」おのり「宜い段か。産後でも食べます」小糸「それなら母樣やいておくれ」母「あい〳〵」と下女を相手におのりへも、酒呑まさんと支度する。おのりは今の墮胎藥のやりそこなひにに空怖しく、物に假托けて、酒も呑まずに宿へ歸り、つく〴〵思ふに、小糸が心のしをらしさ、年は十八、顔は美しく、もしやの事ありて、腹に莟の子ばかりでなく、親の花も散らさば、かはいさうなり、あの子には恨も遺恨もなし、もしやかゝる惡事にくみし、人に知れなば、どの樣な憂目にあはんも知れず、嫉妬のおみのへは、あの藥呑ませしと僞り、殘の五兩を取り、この家財殘らずを賣代なさば、五兩位にはなるべし、十五兩を持ちて此所を夜逃になし、在所へ歸り、茶呑男でも持たば、我一代は口には困る事なかるべし、あの嫉妬女をだまし、五兩を取るは罪でもあるまいが、店賃の二分と、酒屋の一分を踏むは氣の毒なれど、まゝのかはよと、一人暮しの氣儘なる、門口あけて、提灯

方食頃と思ひ、小糸が所へ至りければ、小糸は常とは違ひ、取亂して寢て居るを見て、おのり「おや、何うかなさつたかえ」母「左樣さ、昨夜怖い夢を見てうなされてから、胸が惡く頭痛がするとて、今朝から寢て居ります」「おや〳〵、それは惡いね」小糸「母樣、鉢卷を締代へておくれ、緩くなつた」「あい〳〵」と鉢卷を直してやるうち、咳を喘く故、母、小糸が背中擦りながら、「おのりさん、其所にある振出し、其茶碗へ。火鉢の鐵瓶に湯が沸いてあらう」おのり「あい〳〵、沸いて居ります」といひつゝ、こゝぞ十兩には好き折ぞと、ふたりの方へ尻を向け、茶碗に粉藥、振出しに沸湯を注ぎ、盆に載せ、「小糸さん、熱いうちあがりまし」と差出しぬ。此時小糸茶碗を取り、「をばさん、是は憚り」といひつゝ、心の中に、日頃信ずる金比羅を祈念し、呑まんとしけるに、金比羅の御利益にや、「おや母樣、今朝のとは臭が違ふよ。嗅いで御覽」「いかさま、こりや色も違ふ」おのりは南無三と思ひしが、そしらぬ振にて、「おや何うしたのだねえ。茶碗に袋のあつたまゝ振出しました。お呑みなせえ」母「なに止しな。たかい藥ではなし」と小糸が枕元にありし眞鍮の耳盥へ、茶碗の振出しをあけけるに、その所ばかり眞鍮黒ずみけり。親子は是をおろし藥と知らざれば、何とも思はざれど、おのりは、さても怖ろしき藥と胸に應へしが、そしらぬ風にて心の中に、彼の藥少し殘し置かば、又も役に立てべきに、きゝみち速くと

と思ひしに、猿智恵あるおみの、小糸が犬につかふには、主人萬左衛門に見知られては惡しゝとて、常には來るなといひつけ置きけるに、萬左衛門留守を見て、おみのおのりを呼び、粉藥一包に金五兩添へ、耳に口寄せ「是は人を殺す毒藥にはあらず、身にはあたらずして、胎内の子を散す藥なり。是を小糸に。旨く行かば又五兩やらん。此事おひよのにも言ふな」と頼みければ、十兩の金に目をくれて、首肯きけり。下女のおひよの、おのりが歸りしを見て、おみのが部屋に至り、聲を潛め、「得心しましたかえ」「をゝさ。此事はおひよのへも知らすなと言うたれば、いかさまとて得心した」「いくらお遣んなさいました」「五兩やつた」「おや、高いものだ」「其上に、後で又五兩やる約束ぢや」「そりやお前さん遣り過ぎます」おみのは打笑みて何ともいはず。これ一年に三兩の下女と、一年に八百兩程の暮しするおかみさんと、心意氣の違ふ處なり。況んや由緒ある御方と下賤とは、心意氣すべて違ふぞかし。能く上下の人情に通達せざれば、人の上には立ちがたしと古人もいへり。子供衆こゝの處を能く推量して、親達が子に苦勞する心をも斟酌くべし。

十四段

おのりも猿智恵ある女ゆゑ、惡い事とは知りながら、おみのが頼みたる粉藥をかくし持ち、大

をなしたるを、天道様ゆるし給はず、そのむくいある事、末を讀みて知るべし。

十　二　段

かくておみの、其夜は病に假托けて、夫萬左衛門と蒲團を並べず、わが部屋にひとり寢しけるに、小糸が憎い〳〵と思ふ一念、生靈ともなるべき程なれば、小糸に通じけん、此夜小糸、母と枕を並べて寢て居たりしが、夜半に小糸が呻吟る聲に、母のおつな目を覺し、「これ〳〵、お前夢でも見たか」「あい。あゝ怖しや〳〵。既の事に締殺さるゝ處」「どうしたのだ此子は、寢惚なさんな」「あい」と寢卷の袖で顔の汗を拭きつゝ、「母様、怖い夢を見ました。私が風呂から戻り、庭の縁側で、足の爪を取つて居たれば、手水鉢の下の葉蘭の中から、大きな蛇が出て飛付き、私の頸へ纏付き、エ、もう話すも怖い」「おうそりや好い夢ぢや。蛇は辨天様の御神體、それが頸へ巻付いては、おのしがお腹のやゝは、女の子の美しいが生るゝであろ。そして辨天様は福の神、それで七福神の内ぢや。善い夢〳〵、明日は辨天様へ御供上げて祝ひましよ」と此子で暮す母親は、唯安産をぞ祈りける。

十　三　段

それはさておき、かの洗濯婆のおのりは、おみのに二分貰ひしより慾心起り、近しく出入せん

れ、誰ぞ風呂を見て來や」と、ちやほやの挨拶。おひよのは不思議と思ひ、何故やかぬぞと思ひしが、是不思議にあらず、おそろしきやきもち故、消炭ぐらゐの火ではやかぬ筈なり。されど胸の中は煮えくりかへる思なれば、心地あしく、我が部屋に床をとらせ、寢て居ながら、此恨「如何にしてか晴らさん」と、いろ〳〵さま〴〵に考へるに、洗濯婆おのりを犬に入れおき、夫が小糸の所に居る時振込み、小糸に存分いはゞ、人騒がしにて、我が外聞かく事もあるべし、亭主に恨をいふは尋常にて腹は癒ず、彼奴の腹の子を、何かなして人知れず墮胎して後、兎も角も、夫にしてはおひよのに、あゝいや〳〵、彼に才覺させては、人の耳が殖る、はてなア、と枕をつけながらいろ〳〵考へ、おゝ、それ〳〵と、親の寫し置きたる妙藥の本の事を思出し、下女のおひよのを呼びければ、おひよの「お頭痛でもなされますなら、揉みませうか」「いや揉んでもらう程でもない。氣紛れに本でも讀んで見やう。藏の二階の棚にある、は印と書いてある、小さな本箱持つて來や」と取寄せ、日も暮れければ、燈火の下にて表紙もつかぬ寫本、いろ〳〵妙藥しるしたる中にありしを見て、親の寫せし形見の筆のおろし藥、悋氣の用に立てんとは、如何なる心ぞや。是不孝なり、不仁なり。かゝる惡念の起るも、女の敎の道を、露ばかりも知らざる故なりけり。されば女の子には、第一に誡むべきは悋氣妬なり。この女かゝる怖しき事

ば、その子をおみのに貰はせんと約したるゆゑ、まづおみのが心を引き見んとて、おみのも聞けがしとて、年増のおひよのに向ひ、「此間私が知る人の檐の下へ、赤子を捨てしが、女の子で、しかも美しい子であつたさうなが、其所の内方は二十七八、内方のいはるゝには、私に子が無い故、見掛けて捨てたるならん、子にしてやらば、親も悦び、子も仕合、今から育つれば産みの子も同じ事と、乳母で育てるが、なんと好い氣立の女中ぢやないか」と話せば、下女が挨拶を待たず、おみの「私共は赤子を育てるは嫌な事かな。それよりは人の育てた子を貰ひ、氣に入らねば出してやる分の事」と一口の詞に、叔母は心に、さても氣隨な女かな、小糸が事もかなふまじ、外に仕方あらんと思ひ、彼是して立去りけり。

十一段

さる程に、小糸が事を告口したる下女のおひよの、心に思ふやう、今にも旦那歸らば、嫉妬の大喧嘩になるべし、告口したるわが名を出してくれねば好いが、しかし旦那は聟、此家はおかみさんのものなり、二ツどりなら、おかみさんに附くのが下女のあたりまへ、まさか追出されはせまじと、たかを括居たりしに、旦那お歸りの聲に、そりやと聞耳立てしに、思の外おみの常よりも優しく、「お晝飯はお寺でかえ。左樣なくば支度しませうが、最早精進落なさんせ。こ

目錄貰ひ、鐵漿もところ〴〵剝げたる口開いて打笑みつゝ、かず〴〵禮をのべけり。おみの膝をすゝめて聲を潜め、小糸が年格好、顏貌など、聞けば聞く程、我には遙に優る女、殊更姙娠と聞きて燃立つ胸も、始て逢ひしおのりには恥かしく、兎角する中かの叔母來りしと聞きて、おのりは早くと歸しけり。

十　段

おみのは叔母と聞きて、心にはうんざりと思へども、立出でて愛想いへば、連れて來た孫娘も、叔母が仕付けた故、穩順しくお辭儀する。おみの「やれ〳〵穩順しい。お雛さまはお飾りか」「あい、昨日から飾りました」叔母「今日はこの子の琴のお師匠樣が、河内屋で彈初めをなさるから、連れて行くのぢやが、まだ早いから、無沙汰の詫言にさ。旦那はえ」おみの「彼岸だからとて、今朝早くお墓參に參りました」叔母「それは奇特な事ぢや。これ〳〵おみの、馳走はおよし。河内屋へも行くし、この子も私もお腹はよし」「それでも、酒をあがらぬから鰻でも」「いえ、もう止しておくれ」「左樣なら、更科に致しませう」「お蕎麥なら、此子も好きぢやゆゑ、少し取りにお遣り」と蕎麥の來る中は、此所彼所の開帳の話などして居る。蕎麥も來り、かの下女おひよのもとり〴〵待遇しけり。さて馳走も濟みて後、浮世話の序に、萬左衞門が頼みし、小糸が安產せ

が、名も所も知らぬといひしゆゑ、小糸が所へ行く貸本屋に聞いたれば、是も知らぬといひしゆゑ、小糸が所に洗濯物があらばと、貸本屋へ頼みましたれば、その明る日、蒲團の皮と單物を二ツ、小糸の下女が頼みに參りましたゆゑ、餘所のは打捨て、蒲團の繼まであてて持つて行き、能くは出來ませぬが、お張かへしの物なら、仕事も致しませうと言うたれば、小糸の母が、それは重寶とて悅び、小糸が平常著の張返しも、直樣仕立てて持つて行く時、是は在所から貰ひましたと、河岸で買つた孟宗竹の竹の子、外に私も物入をして、心安くなりしに、終に旦那の影は見ざりしが、下女を騙して、やう〳〵突とめた此方の旦那の事、しかもお腹まで大きくなりし事、昨日始て知りたるは」斯樣々々と小糸が母、腹帶を戴きし事委しく話しければ、おひよの「そりやとんだ事ぢや。私が聞いても妬ましい。しかし此事で、お前に少しでも物入させては氣の毒。今日は幸ひ旦那の留守、おかみさんにお前を逢はせるから、此所に待つておいで」と梯子を下り、いひつけしと見えて、小女茶など持來り、やゝありておひよの來り、おのりを奥へ連れゆきけり。さておみのは、我が部屋にておのりに逢ひ、始ての詞終り、おひよのが耳に口寄せ囁きければ、最前拵へ置きしと見えて、水引かけたる目錄、盆に載せ、おひよの、おのりにむかひ、「是はおかみさんが始てのおしるしに」と取らせければ、洗濯婆が二分の

事によそへ、そろ〳〵やくべしとの教は、遠くは詩經、近くは源氏の品さだめにも見えたり。さて大嫉妬の故事は、此艸ざうしの四へん五へんにもいへれど、こゝに又唐土の昔やきもちの女房ありて、下女に紅白粉を濃くつけさせざりしに、新參の下女是を知らず、美しく化粧ひければ、彼のおかみさん是を見て、我おのしに化粧してやらんと、眉毛へ入墨なし、目のふちへ熱鐵をあてたる事、酉陽雜俎といふ唐土の本に見えたり。悋氣深き女には、下女に醜きを使ふは、まゝある事なり。德若屋萬左衞門が妻おみのも、下女は皆南瓜に目鼻、蕃南瓜に鐵漿なるゆゑ、萬左衞門は朝夕見るも嫌なり。されば十年あまり、おみのが樽酒ばかり呑むも、男に生れたる甲斐なしと、光源氏のむすこ夕霧のやうに思ふ心より、不圖したる事にて小糸に馴染み、子が欲しきとは叔母への言譯にて、眞實は鴉の埋め喰ひ、人にかくして樂みけるを、女房更に知らざりしが、まかなひの年增の下女、おみのが氣に入りのおひよの、大方はそれと悟り、おみのへ知らせければ、猶能く聞糺せとありしゆゑ、是にて小袖の一ツも貰はんの心ゆゑ、同じ國者の村馴染、かの洗濯婆おのりを犬に入れけるが、ある日來りしゆゑ、其事と思ひ、女部屋の二階にて差對ひのひそ〳〵話、「どうぢや知れたかえ」「さればさ、小糸は人の世話になつて居ると聞いたゆゑ、大方それと思ひ、小糸が裏に居る按摩に聞いたれば、旦那は折ふし來る樣子ぢや

教草女房形氣　七編下之卷

九　段

孔子曰、女子と小人とは難レ養、近レ之不遜、遠レ之怨。これを耳近くいへば、女はたゞの野郎と同じ事にて心縱されず、可愛がればのさばり、寄付けねば惡くいふといふ事なり。こゝに女子といひしは、よしある女の事にあらず、賤しき女の事なり。聖人ありし大むかしの時さへ、賤しき女は教の道に疎かりしと見えたり。まして今の世をや。そも〳〵繁華の所にて、中より下の町人の娘は、七ツ八ツの頃より、手習の外大方は三味線の稽古、その文句に、女の道の教の事は一ツもなく、色がましき文句を小娘が唄ふ、側に母が繼物しながら聞くは、毎日なれど、是を惡い事と耳にとめざるは、門並の慣なればなり。十四の娘が、おはん長右衛門を好き藝と心得、御師匠樣のおつしやつた女今川庭訓の讀を忘れ、母に聞けば、お父さんに聞けといふ。そのお父さんも讀めず。此父母の育てたる娘、女の道は知らぬ筈なり。此娘乳の膨れる頃に至り、その男を定め、おのれはその男一人を守るに、男は餘所の花にも狂ふゆゑ、女の道を知らぬ心から、嫉妬をやくは尤至極なれど、やかんとする胸の火を心にいけこみ、物に觸れ


嘉永二年酉春新梓
門人国貞画

立出でけり。お頼み申ます」「はい〳〵、天氣はよし、おかげで參詣いたします」と打連れて、立出でけり。さる程に、小糸が母おつな、おのりを連れて、かの稻荷へ參詣なし、心に小糸が安產を祈り、お宮に居る法師に、お腹帶を戴きたしといひければ、「安產の腹帶は、瀧に打たれて垢離を取る人に、下帶を貸す所へ至り、木綿の代にて、人のしめたる下帶を貰ひ給へ。男の垢離を取りたる下帶なれば、穢れたる事決してなし。垢離を取りたる男の下帶を、女の腹帶となせば、陰陽合體して、安產すべき道理にかなへり」と敎へければ、實にとて、小糸が母、下帶を貰ひければ、おのり、おつなにむかひ、「小糸さんは身重にかえ」「さればさ、もはや來月は帶をせねばなりません」「それはお目出たい。さつぱり知りませなんだ。お仕合だねえ」

年連添ふおみの、未だ子供を儲けざるゆゑ、一人欲しくての事なりしに、火がとまりてはや四月、安産の上は如何いたさんと、今日はあなたへ御相談に參りしなり」叔母聞きて暫く考へ、「いかさま、子の欲しきは尤な事、安産あらば、私がおみのへ得心させ、おみのが腹を痛めぬ子にして、あれに養はすは覺束ないから、我が引取り育てる內には、おみのも年を重ね、思ひあたる事もあるべし。兎も角も安産するまでは、おみのへは沙汰なし〳〵」「左樣で御座ります。力と賴むはあなた一人、どうぞなりよく行く樣に、お願ひ申します」「いやもう、お前もおみのには困るであろが、氣隨なは性分、心には掛けさんすな」と野暮ならぬ叔母が請合に、小糸が腹のかたまりに、痛める胸は開けけり。

八　段

ある新道に、二間間口の格子造、奥に三疊の小座敷に、續く雪隱、小庭もあり。小糸は湯より戻り、浴衣のまゝにて鏡臺に對ひ、胸まで白粉つけて居る。母のおつな、王子村の稲荷へとて支度して居る。小糸「お前遲くはないかえ」母「なに、日は長し、しなによれば、歸りは駕籠さ」小糸「しなによらずとも、駕籠になさいまし。お腹帶をお忘れでないよ」母「その事で行くものを、忘れるものか」といふ處へ、約束したる洗濯屋のかゝアおのり來りければ、小糸「をばさん、

ば、年來女房の尻に敷かれたる聟、始て頭を上げ、心に奢もつき、女房にも秋風たちて、招く尾花の糸薄、名も小糸とて、三筋の糸に世渡る女に馴染しが、のきの妻の約束をして、母諸共に新道の格子作、女房には猫ばゝにて、折ふしの忍駒に、泊りし事はなかりしが、月役は何時かとまりぬ。

七段

この德若屋の家より、同じ程なる金持へ嫁入したるは、今の萬左衛門が養父の妹なれば、義理ある叔母なり。さるゆゑに、今の萬左衛門が目上は、此叔母のみにて、外には捗々しき親類もあらぬゆゑ、おみのも此叔母には心を置く程なり。此叔母、名をおみよとて五十四五、心優しく、物事に能く行屆き、野暮ならぬ若婆樣なり。萬左衛門は目上といひ、話せる女ゆゑ、折々機嫌きゝに、今日も行きければ、いろ〳〵ありて、叔母聲を潛め、「さて、お前を今日呼びにやらんと思ひしが、さる人の話に聞けば、小糸とて、可愛がる女あるよし。お前の身代では些少な事ながら、あの悋氣深いおみのに知れたら人騷し、何のよな揉にならふも知れず。なんと思はしやる」と眞綿で頭の意見、萬左衛門、喫みかけた烟管をはたき、手を膝にして、「あなたの手前も面目なけれど、小糸を世話にして置くは、敢て色を好むにはあらず。御存じの如く、十

侍は廣田小太夫とて、此夜泊に著きしが、年々の在番にて、旅籠屋の亭主も心やすきゆゑ、子を拾ひたる由を語り、「我在番の身なれば、育てべき手段なし、人に遣して養はせくれよ」とて、金五兩添へければ、主人も心あるものゆゑ、好き御陰德なりとて、まづ乳いづる女を呼びて預けけり。

六　段　話もとにもどる

それはさておき、月日は矢の如く、かの德若屋萬左衞門の娘おみの、十六になりしゆゑ、今年はとて、嫁入の口を尋ねしかど、長し短しにて、未だ定めず。是はと思ふ方ありても、貰ふ方にては傳手をもとめて聞合すれば、顏には似氣なく心あら〳〵しく、見る事聞く事親に告口して、子供だちから憎まれもの、その上何事にも妬の心深しと聞きて、見合までしたれども、御籤が惡しとて、だしに使はるゝ觀音さまこそ迷惑なれ。されば此娘、十九まで親の元にありしうち、兄の才藏身持惡しく、さま〴〵にしたれども手にあまり、終には勘當の身とならの葉の、凩に散りて行方知れず。さしづめ家督はおみのとて、二十歳の春聟を取りしに、豫て悋氣の女房覺悟の事なれば、雌猫も膝へ載せざれば、夫婦中見苦しき程睦しけれど、腹帶の沙汰もなく、七八年たつ内に、兩親つゞいて極樂へ參りしゆゑ、此聟德若屋萬左衞門の名を繼ぎけれ

心強く分別を固め、から四郎へは、乳ある女預らんといふゆゑ連行くとて、その宵闇に立出で、近きあたりは惡きとて、金杉につゞく天住といふ宿の中ほど、阿蘇の宮の前なる稻村の陰にかくれ居て、人を待ちけるに、遙に見ゆる提灯、由緒ある人に拾はせ給へと、阿蘇の宮を祈り、用意の籠に懷の子を入れ、守を添へて宮居の前、手を放つが親子の別、わが身は鬼か蛇かいのと、身を顫はせて忍び泣、親子心が通ひけん、泣出す赤子、近寄る提灯、お貞は稻村の陰にかくれて窺ひけり。こゝへ來るは武家の家來と見えたる五十ばかりの侍、赤子の聲に立止り、「こりや市介、その犬追つてやれ」と下部が持ちたる提灯取りて、今捨てたる子を照し、「やれ〳〵不便や、捨子ぢやな。親の悲しさぞ思ひやらるゝ。哀れな事ぢや。こりや市介、今宵の泊まで、此籠のまゝ持つて行け」「旦那樣、あなた御在番でありながら、捨子を拾うて何うなされます」「いかさま、其方が心では尤ぢやが、こゝは阿蘇の宮の鳥居の前、捨てたる親も心ありての事ならん。且又、見遁し行かば、今の犬奴が齒にかけん。袖振合すも他生の緣、ましてや道の邊に露の命を結ぶ嬰兒、見すてて行くは人にあらず」と家來に持たせて行く情。お貞は嬉しく、後姿を伏拜み〳〵、影もやう〳〵見えざれば、是が一世の別かと、袖に涙の村時雨、うちしほたれて立去りけり。此後おいて、捨てたる女の子にめぐりあふ事、つぎ〳〵を讀みて知るべし。この

小屋に、小犬の肥りしを見ても、お貞は羨ましく、頽れし垣根をやう〳〵の便として、纏ひたる朝顔の、すがれの花のわびしきは、わが身の上とお貞が涙、夫がすや〳〵寝入るを見て、寝かした子をも差覗き、やれ嬉しや此内と、針箱出し、前垂の繼あてて居たるに、乳の足らぬわが子が泣出せば、食の進まぬ夫も眼を覺して呻吟るを聞きて、落る涙を押かくし、子を抱上げて痩せた乳房を含ませつゝ、枕に差寄り、「湯でも上げやうかえ」「いや呑みたくない。少し寝たと思へば、彼が泣く聲で眼が覺めた。乳の足らぬが不便と思へば病の障、其方へはかくして居れど、彼が泣く度々にいぢらしくて」と、あとは涙の夫が顔、泣きたい胸をおしかくし、「お前心弱い事おつしやりますな。乳も昨日から出るやうで御座ります。今に見なさんせ。乳もこの子も元の様に肥ります。どりや藥あたゝめて上げましよ」と立てば泣出す懐の、子よりも辛き母親が、涙煮えつく藥鍋、持たねば蓋も缺土瓶、貧苦の中ぞ哀れなりける。

五　段

かくてお貞が乳更に出でざれば、子の泣かざるは寝入たる時のみなり。泣けば夫の耳障り、それも是も悲しさ辛さに堪へかねて、つく〴〵思ふやう、夫の命恙くば、子は再び產みもすべし。二十四孝の例もあれば、心のほだしの子を捨てて、夫の耳障りも拂ひ、快く看病せんとて、

した。憎らしいねえ。そして長松が、月代剃る頭を揉みながら、兄さんの手拭をつかひます。そのわきでお杉が、重箱の煮しめをあけながら、蒲鉾を一ツ食べました」と、見る事聞く事、つげ口するゆゑ、召使の者ども、このおみのを、憎まぬ者はなかりけり。小供衆、つげ口は愼み給へかし。

四段　はなし二た道にわかる

それはさておき、こゝに同じ鎌倉なる長谷の觀音の北に當りて、金杉といふ所に、草葺の貸屋四五軒ある中に、羽内から四郎とて、三十七八、元は由緒ある家にて、七十石のきうにんなりしが、妻のお貞の美しきが身の害となり、ゆゑありて浪人なし、一年餘り賣食する中に、お貞、女の子を儲け、産も輕かりしゆゑ、肥立も早く、乳も出でけるに、から四郎、風邪の心地より次第に重りけるゆゑ、貧苦の中にも醫者をもかへて、お貞手ひとつに看病なし、賣殘したるお貞が嗜みの品も質入して、夫の病を勞り、生れた赤子を懐に夫の看病、我子と夫の尿屎まで、朝な夕なも心ひとつ、心遣に身も痩せて、乳も細りければ、くり／＼と太りたる女の子も、夫と共に痩細るは悲しけれど、あたりに子持の乳もなく、親子三人なきの涙。頃しも秋の半なれば、家の前なる庭ともなき空地には、植ゑもせぬ草ども生茂りたる中に、子供が作りたる犬の

しかも三枚で歸つたから、早い筈ぢや」「おや〳〵、左樣で御座りましたか。それとは知らず、久しぶりでひとり寢る事かと思ひました」とは、女房の身では嬉しき筈なりけり。さて女房お春は小用に行き、亭主萬左衛門は、まだ酒も能くは醒めず、うと〳〵として居たりしに、お春歸り、行燈の燈心一本減し、少し片寄せ、「おやもうお寢りましたかえ」「いゝや喉が渇く、溫くても好い」といふゆゑ、枕頭の火鉢の鐵瓶のを注ぎて飮ませ、「雨になりました、お濕りには好いねえ」といひつゝ枕をつけけるに、後に寢たる七ツのおみのむくと起きて、片寄せたる行燈押出し、「母さん、明が暗い」と減した燈心搔立てけり。母のお春、わが子ながら、此子が大きくならば、と怖ろしき程に思ひけり。さればこそ、成人して男を持ち、嫉妬の爲に、手は下さねども、女の命二人まで縮めける。是みな巳の年、巳の月、巳の日に生れ、蛇の性をうけたる故なるべし。

三　段

このおみの七ツなれども、年にはませて何事にも小ざかしく、殊更妬みの心ふかく、父母の睦ましきさへ妬むほどなれば、小女を連れて手習の晝下りに、ちらりと見たる事も、「母さん、今臺所で、お駒が才三に襟を剃つて貰ひます。才三が何かいうたれば、お駒が嬉しさうに笑ひま

より嫉妬のきざしある事左の如し。

二　段

萬左衛門が忰才藏は十五歳ゆゑ、兩親と一ッ所へは寐ねざれども、妹のおみのは七ッゆゑ、母と枕を竝べて寢かすは、さもあるべき事なり。今宵も側へ寢かしけり。さて女房枕をつけながら、亭主萬左衛門に、「もし貴郎、今日の無盡は所が惡いから、大方お歸りはなさるまいと思ひ、少し雨氣づきたれど、お迎も出しませなんだに、能くお歸りなされました。お迎を出さぬは惡う御座りましたねえ」「其方が推量の通り、歸られぬ所であつた。あの伊勢吉が、例の後引上戸、これから大磯で飲直すと無理無體。こゝで嫌というても放すまいと思ひ、面白しと浮かれた風をしたれば、人の懷中を當にする輩二三人、屋根舟にも脇櫓を入れ乘出し、大磯の茶屋近江屋半四郎にて、藝者も二組。伊勢吉が馴染の女郎も來り、己が相方も仕舞にやるというたれど、己は逃る氣ぢやゆゑ、相方は見立るとて仕舞にやらせず、茶屋の女房へも祝儀をやり、伊勢吉へは沙汰なしに、私は歸るゆゑ駕籠をというたれば、それではと止めたれど、おれは始ての客、此後は知れずと思ふゆゑ、強ても止めず、左樣なら駕籠が來たらお知らせ申しませうと、頓て知らせたゆゑ、伊勢吉が女郎屋へ行く道ではづし、茶屋の男が案内で駕籠に乘り、

敎草女房形氣　七編上之巻

初　段

源氏物語、雨夜の品さだめに、左馬頭が頭の中將への話に、ある所の女に語ひしが、姿はさのみにあらねど、こゝろざし厚きゆゑ、本妻にもと思ひけれど、妬の心深き女ゆゑ、それを懲さんとて、口説しけるに、女腹立て、馬頭の指を喰破りたる事をしるせり。此源氏物語は、一條院の御時、紫式部が作りたるものなれば、今より八百餘年のむかしも、嫉妬の諍には、男の指を喰破る樣なる女もありしと見えて、紫式部が女の筆の虚事ながら、その世の女の樣を寫し書きたるなり。八百餘年のむかしさへ、嫉妬には我身も忘れたるに、ましてや、今の女のやくは尤ながら、あまり燒過ぎては、亭主困りはてて、心底より愛想の盡るものなり。さればとて、更にやかざるも亭主の爲にならず、この事も雨夜の品さだめにいへり。さて面白くもなき長物語は打措きて、むかし〳〵鎌倉の賑ふ所に、德若屋萬左衞門とて、質、兩換の有德なる暮し、妻のお春が產みたる二人の子あり、忰才藏は今年十五、妹のおみのは七ツなり。此妹をおみのと名づけしは、巳の年、巳の月、巳の日に生れしゆゑなり。されば、蛇の性をうけたるにや、稚き

し、筆先にて口を濡らすではなし、いつまでも稚げたる艸草紙書くは止めなさんせ、筆取るが好きならば、少し本らしき物を書きなさんせと恥しめられ、顔に汗しながら、お諭の事ども心づきては居りますれど、前編出たる其後を〳〵の催促に、まづ今年は〳〵と鰻上りもいつかはや、半は化したる山の芋、萬葉集の鰻ともならず、類物考の芋ともならず、どちら付かずのちくらもの、恥かしけれど今更に、虚名は何とせんたくもならずとて、物識のお袋様が深切の意見も耳を塞ぎて、今年も亦筆を濡しぬ。さてこれまでは、序文とも本文とも、どちらつかずの出傍題、是も鰻か、山芋か、下が俣野か、上が眞田か、石橋山の星月夜、さつぱり分らぬ事ながら、分るといへばわかるべし。斯く疎漏なるは、この草双紙原稿もまうけず、心に出でて筆に隨ふ、面白くなきは宜なれど、そこがお馴染、當る〳〵とやみくもに、御賞め給はれかし。

嘉永元年戊申三月稿本

同年初冬開板酉春布于世

序

女房形氣四編より五編六編に續きて記したるは、やきもち上手の女房、おのれが胸をばさのみ焦さず、人のたきつけるをも構はず、そろ〳〵と遠火にて焦げざるやうにふつくりと燒きたるゆゑ、やかるゝ男も腹が立たず、夫婦中の旨みを損ねず、終には亭主も女房の美しき心に引かれて、女狂をやめて、めでたし〳〵と書了りしを、ある物識りたるお袋、おのれに言ひけるやう、女房形氣四編より六編に續き、やきもち上手の手本を見せて、下手に燒く女中達の誡とせられたる心ならん、されど、さりとは根太味噌灸にて、利道惡しゝ、源氏にもいひし石婦人のやうにこそあらね、大嫉妬に胸の火を燃す事をしるし、夫に去らるる七の内の一ツなる嫉妬に厭かれ、終には三行半にさるものの身の上を記して、妬の心深ければ、おのれまづ妬む女より先にその深き穴へ陷り、其身を破る事を面白く書きなさば、少しは嫉妬の敎にもなりて、かの味噌灸よりは驗目も好かるべし、しかし物書くも心に連れるものゆゑ、お前が老込みたる筆にて、嫉妬を面白く書く事は覺束なし、歳に不足はな

十二段目

かくて大吉、佐良右衛門が厭きたる茶道具を賣る事に付けても、度々來りしを、お兼、心を付けて見るに、酒も呑まず、心立も好きゆゑ、お兼、心におもへらく、旦那とおいなが顔を見合す時、わが煩惱の胸を忘るゝには、好き退け所なりと胸にをさめ、まづお松が聞くふりにて、大吉を男に持つかと問はせけるに、見初めし男なれば喜び、さて佐良右衛門にも尋ねければ、おいなは其方の心まかせといふ。さもあらんと思ひ、大吉が母を呼び、おいなを嫁には、といひければ、大きに悅び、大吉は素より、下女には惜しきと思ひし女、相談極り、居付地面の家守の妻の妹分として、支度もしてやり、目出度婚禮させけり。是お兼が、妬を上手にふッくりとやきしゆゑ、圓く治り、おいなが腹もいつしか膨れ、安々と男の子を産み、母も、大吉も悅び、おいないよ〳〵、お兼が恩を知りけり。茲に又、佐良右衛門が悴佐良太郎とて、お兼が産みたるひとり子なりしに、佐良右衛門が叔父、大阪より下りし時、町人にて多くの人を使ふには、奉公して見ねば使ひやうが知れず、おれに預けよとて、大阪へ連行き、大店へ奉公させけるが、今年十六なれば、呼返して元服させ、久しぶりにて親子三人に、まぜ子のおみつも愛らしく成長なし、目出たき春を迎へけり。めでたし〳〵〳〵〳〵。

行て、泣べるが好い」大吉「それは有難う御座ります」母「親父同様お目かけられて下されませ」佐良「親父は律義一ぺん、話も出來なんだが、息子は折ふしよこすが好い」母「有難う御座ります」大吉、何か母へさゝやきければ、點頭き、お兼にむかひ、「お店の忠七様へも忰が事を」かね「今呼びにやつたよ」といふ所へ、番頭忠七來り、大吉家督の由を聞きて、互の挨拶は、くだ〳〵しければ漏せり。かくて持來りし交魚にて、吸物を出し、佐良右衛門目出たく大吉へ盃を差す。この酌には、お兼が吩咐け、おいなに取らせ、さて飯は臺所にて、奥で遣ふ小僧の給仕。地面預け置けば、家來も同然ゆゑ、その區別を分つなり。是前にもいへる如く、町人にても、好き暮しの家は、少しく武家に似たる禮儀あるゆゑなり。さてお兼、佐良右衛門にさゝやきて、大吉へ、一二度著たる紋付の上下に、紬縞一反取らせければ、親子數々禮を述べて歸る時、母は心付かざれど、大吉は、下女にまで挨拶なし、おいなを横目に、下女には惜しきものと思ひ、おいなもすいた男とおもへり。さるほどに彼のとゞ屋大吉、茶道具の店を開きけるに、目先も利き、世辭もよければ、商もありけるが、勸めたる内見屋の得意へは、茶筅一本たりとも、内見屋へ義理惡しとて賣らず。内見屋の亭主是を聞きて、茶道具のあり物を納める屋敷一軒、大吉にくれけり。是舊の主人を、餘所にせざりし故なりけり。

十一段目

おみつが雛祭も濟みし頃、佐良右衛門が持地面の家主の後家、悴大吉に袴穿かせ、交魚は賴みし番太に持たせて來り、父親果てたるゆゑ、十三の時茶道具屋内見屋とて、手廣く商ふ店に奉公して、今年二十三歳、親の跡を繼がんとて、暇を貰ひて宿へ歸りしとゞ屋大吉、これまでの格子を取除け、茶道具を並べ、柄杓、茶筅の類も商ひ、近々に跡繼の廣めをなし、店開をもするについては、地主の佐良右衛門方へ、大吉を後家の母が連來り、右の事ども委しくお粂へ語りけり。お粂是を聞きて、大吉を見るに、御本手の袴、紬縞の小袖、羽織は紋付の小紋、烟管、烟草入は丸に利の字と見ゆるものなり。男ぶり、口ぶり、人がらよく、取なしの如才なさ、いかさま好い衆を得意にする茶道具屋に奉公したる故と思ひつゝ、肴の禮、家督の悦び、好い子を持ちしと母を褒め、「幼き時逢ひし後、いつか好き若い者になりしぞ。旦那にも」とて此所へ呼び、しか〴〵のよし言ひければ、佐良右衛門、大吉にむかひ、「おのしが勤めたる内見屋の亭主は、おれも知る人なりしが、おのしが勤めし事は知らざりき。十三の時から奉公とあれば、目利も覺えつらん。茶道具屋を始めるは好からん。おれが店は瀬戸物なれど、屋敷方へ銀主もすれば、彼方此方の交際で釜もかけるゆゑ、押込まれた道具もあるから、店を開るなら、持つて

子が持つて來る筈に掛合ひました」と此話茲に終り、犬七は酒を呑み、夕飯も食べ、目錄五百疋貰ひて立歸りぬ。是、立寄らば大木の蔭ぞかし。

十　段　目

かくて此次の日、お粂が指圖にて、十五年こゝに奉公して居る賄のお松を鐵漿親として、おいなに齒を染めさせけるに、お松、鼈甲の櫛に、笄、前插一本、紙に包みしを持來りておいなに渡し、「是はお前覺があらう。駕六が内に居た時、竹吉に借りられて質に置れたのぢや」いな「左樣さ、其事もおかみさんへ話しました」まつ「それだから、おかみさんが犬七に頼み、質屋を尋ね請戻し、今日は彼が鐵漿をつけるから、彼にやつて插させろと仰やつた。有難く思ひな。此樣になさるものを、お前又、旦那と何うかすると、罸が當るよ」といはれ、おいな染々嬉しく、數々禮を言ひて頭へ插しけり。これおいなが心をあらたむる一ッにて、お粂が遠火でやく妬の上手なるゆゑなり。さておいなは、これが産みたるおみつが抱守として召使ひけるに、己が産みたれば、心なしも逎に可愛くもあり、大切にかしづきけり。お粂は、おみつが晝寢にも、おいなには手を遊ばせず、繼物させても欠を出さず、行燈の後にて足袋も繼いで穿くを見て、お粂、折ふしの意見、少しは身に染みしかと悦びけり。かくて此年も暮れて、春になりぬ。

取つて貰はん、如何ぞ」と尋ねければ、忠七「いかさま」とて認め置きたる請狀を犬七に見せて賴みければ、犬七、忠七にむかひ、「此鯔吉の父親は、私が親父の子分。鯔吉は先妻の子、今の母が產んだはおいな。今の母も、私の親父が持たせてやつた女房、私の親父も、鯔吉の親父も死んでから音信不通。しかし、母は知つて居りませう」忠七「さういふ中なら猶更、おいなが事お賴み申す」と聞きて、犬七「今から直に參りませう。此形でも往かれますまい」と著替へて來りしは、銘仙紬の藍縞、廣棧の羽織、盲縞の股引、白い足袋にて、鯔吉方へ至りけり。かくて半日ばかり、其日の夕方犬七歸りければ、忠七店より來り、犬七、忠七、お粂、中の間にて、お粂、犬七に禮を述べければ、犬七、忠七へ判を取りし請狀見せ、お粂にむかひ、「成程鯔吉は、正直な奴で御座ります。彼がいひますは、おいなをあらためて、十年の年期で御奉公に上ます上は、先達下さいましたおいなが片付金の二十兩は、お返し申しませう、慥な所へ預けて置きましたと申せしゆゑ、あなたへお聞き申して、返辭をすると申して置ました」かね「さうかえ、やれやれ正直者ぢや。母にも孝行者ゆゑ、母の養育金にせよ、おいなが勤め次第で、片付く時は又、心づけんといううてお吳れ」犬「それなら別に書付を取りませう」かね「なに、それには及ばぬ。二十兩やつた時の一札があるから澤山ぢや。なう忠七」忠七「左樣さ」犬「おいなが雜物は、喚に輕

手ごめに笹折開けて、薄皮餅頰張る。是親の躾あしき過なり。是を唐土の昔、舐犢の愛とて、親の牛が犢を愛し、朝夕嘗めて、終には嘗殺すに喩へたり。能く教育つれば、十六豇豆が垣根を越して南瓜と契り、親芋を捨て逃げるやうな不埒はなきぞかしと、ある老人の長々しく申されしは、實にと思ひ、此繪草紙を、教草女房形氣と名づくるゆゑ、教訓の二字によりて玆に記しぬ。おのれ思ふに、敎へずして素直に穩順しき子あり、是ぞ子寶なるべし。嗚呼子寶はすくなし、子どもらは澤山なるは、困つたものなり。

九　段　目

さるほどに竹吉は、七兩貰ひて悅びければ、犬七お兼に向ひ、「あれ程お遣んなさらねへでも、好う御座いましたに」お兼「旦那の外聞を思ふからさ。しかし好い事にして、又來やアしめえかの」犬七「なにお前さん、それだから彼奴に今、おれが證人に立つ、手切だと申しました。あの金も身につく事ぢやア御座りませぬ。一晩に取られませう。まづ私は」と立たんとするを、お兼「まアお待ち、まだお頼みがある」と歸るを止め、店より番頭忠七を呼び、「あらためておいなを下女に召使ふ事、おいなも得心の上は、おいなが兄の鯔吉を呼びて其事を言聞かせ、證文も取らんと思ひしが、正直ばかりで分らぬ男ゆゑ、犬七を頼み、おいなが母へも言聞かせ、證文

し旦那といひ、女房は寢そべりて乳を呑ませながら、夫にお晝食あがれといふ。此暮しでは、子供に禮儀教ふる暇なく、山に育つ山雀、釣瓶で水は汲まぬ筈なり。是中位なる町人の事なり。前にもいへる如く、町人は、金銀の有無を以て貴賤を分つゆゑ、丸印澤山の家は、少しく武家に似て、禮儀はあるぞかし。あゝ金が欲しいなア。されば如何程忙しく暮すとも、せめては夫婦の中、親子の間は、禮儀を缺かざるやうにすれば、おさん、長松も是に習ひ、おのづから家内取締りて、繁昌の基たるべし。さればとて、忰風呂へ行くにも、親の前に手を突き、今日横町の風呂は釜損じ候に付、相休み候由、橋向ふの風呂へ參りたく、お先へ御免下されまし、といひては、町人の忙しき暮しには間に合はず、その程らひを計り、親は親らしく、夫は夫らしくしたき事なり。惡くすると、亭主が晝寢の裾を跨ぎ、母に飯を盛らすに至るは、中位の町人大方の常なり。幼兒は殊更、白き糸の如しと古人も言へれば、赤くも青くも染めやすければ、行儀は常に教ふべし。可愛さのあまり我儘に捨てて置けば、客の聲を聞き、七つを頭にぞろ〳〵と立出で、頭は下げず、客の袂懷に目をつけるゆゑ、客それと悟り、土産の笹折を出し、是はお子さま方へ。やれ〳〵お止しなされば好いのに、坊やお禮をいひな、と教へても、常に仕付けさせせぬゆゑ頭は下げず。母は戴いて後へ置くを、この七つの男の子、鳶の如く攫ひゆき、

いへば、樣といはれる久米之助より、お梅へ手切を出す。大方は此の如し。是みな町人の事なり。町人は、金銀の有無を以て貴賤を分つゆゑ、樣と呼ばれて金銀のある方より、手切の金を出すは、自然の勢なり。されば、お粂が竹吉へ七兩やりしも、彼は一文無しの惡漢、これは箱金が藏にある身分ゆゑ、後の遺恨をも思量りて、手切をやりしなり。其故は、彼は一文無しにて身卑しきゆゑ、事を爲出していかに罪なはるとも、己に出でて己が身ひとつにかへれども、是は家内の上下二十人も暮す身分ゆゑ、家藏をも思ひて堪忍するなり。是町人なるゆゑんなり。武家には禮法といふはかり目正しければ、召使の下男、娘と不義をなさば、主人と不義の罪によりて手打になし、娘は髪を切り、事によりては手打にもなすべし。士道を磨かんとならば、斯くあるべし。かの下男に手切金など、武家には更に無き事なり。是武家は禮法正しきゆゑなり。されば、幼子も自ら禮義を見ならひ、鳶凧揚げるお坊さん、羽子つくお孃さんも、親が懇意の人を見れば、誰敎へねど腰を折りて禮をなす。然るに、町に育つ悲しさは、麻上下の下にぱつち見ゆる年禮の客、とし玉とて、二枚張の凧に糸さへ一たま添へたるは悦べども、此忰禮をなさず。親が氣の毒がりて、お時義しろと敎へても、芥子坊子の頭を下げず。常は猶更なり。是は深く咎む可らず。如何となれば町人は、今日の活計に忙しく、手代は立ちながら、も

置かつしやるお妾だ。妾と不義すれば密夫同然。それを、わりや、しらきちやうめんと思ふか、べらばうめ。それのみならず、おいなをつり出したるは誘拐同然」竹「なに、誘拐すものか、相對づくだ」犬七「相對づくなら何所までも、おいながおのしを見捨てぬ筈だが、手前、突出されたぢやアねへか」竹「それだから男が立たねへのだ」犬「馬鹿をいふな。旦那がおのしを密夫だと言はしつたら何といふ。密夫同然な事をして、男が立たねへとは分らねへ野郎だ。しかし今もおかみさんの言はつしやる通り、友達の手前もあるから徒は歸さぬ、渉をつけて遣らう」と竹が膝の前に置きし小判を取り、お兼に返し、犬「もしおかみさん、竹が來たしるしに、褞袍でも著せて下さいまし」お兼「私もさう思つて居る」と投げた小判の内を紙に包み、「是をやつてお呉れ」犬七開き見て、犬「竹見ろ、七枚あるぞ。密夫同然な事をして、七兩は有難いと思へ。おれが證人に立つ。手切だぞ。おかみさんと仲直りに、笑つてお禮申せ」竹は七兩に打笑みつゝ、「もしおかみさん、有難う御座ります」とお兼にも犬七にも、禮いうて立歸りぬ。或老人の申されけるは、凡そ人たる道を踏違へ、男女密事をなすに事顯れて、立つ立たぬと縺れし時は、その親人を頼み、手を切るしるしとて、金をやるは間ある事なり。此時たとへば、半七が常々お花樣といへば、樣をつけられるお花の方より、半七へ手切を出し、又お梅が常々久米之助樣と

眞實と思ひ、「おい〳〵」と奥へ入り、主人の女房お兼にかくと告げければ、女部屋の二階よりおいなを呼び、まづ仲の間の障子の破れより見よといふ。おいな差覗きてびつくりし、竹吉なりといひければ、お兼は豫て竹吉が身元を聞糺させたる犬七を呼びて物蔭へかくしおき、怖がるおいなに何やら言含めて呑込ませ、竹を中の間へ呼びければ、竹吉おいなを見るより、「阿魔奴、覺えたか」と胸ぐら搔摑み、隱し持ちたる出刃庖丁閃かしければ、お兼、小判二十枚、竹吉が横面へ、はらりと散りたる山吹色。竹は是を見て、取りたる胸ぐらほろりと放し、庖丁捨てて小判搔寄せる隙に、おいなは奥へ逃入りけり。竹吉は見もやらず、拾ひ集めたる小判手に握り、「もしおかみさん、この金はおいなが手切で御座りますか」兼「小判を顏へ打つけたは、おのしが心を引見ん爲、案に違はずおいなを放し、庖丁も捨てたるは、手切を取らん豫てのたくみ、まだ惡漢も生馴れた、瓜畑の青二才。しかし友達の手前もあらん、掛合はつけてやる。犬七どん來て下さい」と聞いて匿れ居たる犬七出來り、「これ竹、己を知つて居るだらうな」竹「何もお前のかゝりあつた事ぢやねへ。しらきちやうめんな伊達入だ」と口ではいへど、嫌な奴が出て來たと思ふ弱身を見せぬは、かゝる者の常ぞかし。犬七「これ竹、能く聞け。われが連れて逃げたおいなは、此所の旦那の抱妾だぞ。抱妾といつちやァ、われにはわかるめえ。人に預けて

子と乳を探れば、抱きしめ、顔に顔を押つけ、いな「お前にも逢はれまいと思ひました」とさしぐむ涙たもちかね、おみつが顔へ一雫。お松是を見て實にと思ひ、これも涙をかきやりければ、おいなば堪らずおみつを抱きながら、顔に袖を當てけり。これおいなが善心に復るべき始なりけり。凡そ女の、色に迷ひて、我子をも捨てて、男と駈落するは間々ある事なれど、かゝる女は心愚にして、親子の情を知らず、犬猫に等しき心なれば、死しての後は畜生道に落つべし。おいなは今年十九、母兄の言葉に背くいたづら者なれど、少しく才智あるゆゑ、親子の情を知りて、涙を落したるなるべし。さればお兼が側へ置き、朝夕の事につけて、心をあらためる事、つぎ／＼を讀みて知るべし。

八　段　目

さて次の日、おいなが此所に居る事、竹吉聞出したりと見えて、染付屋の臺所へ來りけるに、針妙のお松、折ふし金盥へ、しちりんにかけたる大湯罐の湯をあけんとしたるを見て、竹吉「もしあなた、ちとお頼み申します」松「あい、何だえ」竹「はい、私はおいなが親類どもの悴虎藏と申す者。おいなは此方のおかみさんの御蔭で、不思議の命助かりし御禮も申したし、おいなに用も御座りますから、鳥渡逢はせて下さいまし」といふは彼の駕六が、敎へて言はす僞、お松は

敎草女房形氣　六編下之卷

七　段　目

さてもおいなは不思議の命を助けられ、女部屋の二階にありて、小用のほか下へ降さず、飯も此所へ運びて喰はせ、かはり〲下女をつけ置く事、皆主人の妻お象が指圖なり。針妙のお松、おいなに向ひ、「お前と旦那がこれまでの譯、おかみさんが常竝の女なら、角が十本も生え、お前をつゝき出しなさるだらうが、何事も堪忍して、別に家まで作り、お前を捨ゑて置くやうにと、番頭さんにまで相談したも、おかみさんの心から出た事。それにお前が、竹とやらにくつつき、あげくの果には花水橋から旣の事、命の恩は忘れなさんな」おいな「あい」松「それにお前の産んだおみつさん、常並の女房なら、旦那のかくし子、金でも附けて人にやるべきを、おかみさんの仰やるには、私が子の佐良太郎は、大阪の叔父さんに預けて、大阪の本店へ奉公、一人子には幸ひなおみつとて、餘所目には人の産んだとは思はれぬ寵愛」いな「私も昨日からあの御子さんを見たくてなりません」松「いかさま、心は浮氣でも、實の親子、逢はせてやろ」と頓て連來りければ、おいな抱取りければ、人見知りせぬおみつ、母とも知らぬ嬰兒も、流石親

敎草女房
形氣六編
下之巻

京山作
豊國画
山田屋板



へか。竹さん、誰ぞ頼んで、縮吉が所へ見せにやんねえ」六「遣へねへ」といふ處へ出入場の小僧來り、「隱居さんのお寺まゐりだ、おんぼつを一挺よこせと、おかみさんが」六「あい〳〵、今あげます」

やう〳〵立歸りければ、棕櫚箒にて掃出しけり。

六　段　目

それはさておき、おいな竹吉を捨てて、四手屋駕六方より逃出したる時、駕六おいなを大磯へ沈めよと竹へ勸め、竹もおいなを賣らんと得心したるを、おいな風呂より戻り、門口に立聞したるゆゑ、いよ〳〵竹に愛想盡きて、此所を逃去りたるなり。それとは知らず二人の者は、おいなが遲きを訝り、駕六、女房に吩咐け、湯屋へ聞かせけるに立歸り駕六に向ひ、「番頭に聞いたら、先刻歸つたとさ」六「はてな、竹、其所らを見て來や。肝心の玉を無くしちやアおへねへ」といはれ、竹吉立出しが、やゝありて立歸り、「何所にも居ねへ」六「それ見ろ、寢返りをうつたのだ。それだから賣つてしまへといつたのだ。大方内へ歸つたらう」竹「さうさ」と出刃庖丁手拭にくるみ、駈出さんとするを、六「これ、竹、急くな。腹の立つは尤だが、おいなの兄の鰡吉は、其日稼のぼてえふり、劍の舞をした處が、納りはつかねへ」竹「ついても著かねへでも、あの阿魔が面へ出刃庖丁當てねへけりやア男が立たねへ」駕六女房、子に乳を呑ませながら六に向ひ、「こんな事たらうと思ふから、今朝も早く渡りをつけなせえと言つたのだ。竹さんも今更つまらねへもんだ。何にしてもあの子の居る所を、突止めた上での事だらうぢやアね

けて死ねと、こなたが言うたさうな。かはいさうに、突出した男、何しに退状出さうぞ。あれが身を投げたは、こなたの口から起つた事。それはともあれ、私の屋根舟が通らずば、おいなは川流れ。事によれば、死骸も見えぬも間ある事。さすればおいなは、私が拾うた女、貴樣達からは貰はぬ、天道樣から授つた女故、煮て食はうと燒いて食はうと、私が心まかせ」へそ「いや、さうはなりますまい。彼には母も兄も御座ります」かれ「その母も兄も、おいなが身を投げて、死骸が見えずば何とする。私が助けたればこそ此世の人なれ。おいなは貴樣達の自由にはなるまいぞや」へそ「それでも彼には、竹といふ毛蟲がつきましたゆゑ、もしや竹が、こなた樣へ振込みましたら、お店のお名も出る事。おいなは私へお渡しなさい」かれ「竹が事もおいなに聞いたゆゑ、賴む所へ賴み、竹が身元も聞いて置いたが、十七の時、親に勘當うけたごろつき、此所へ振込んで來れば、賴んだ人へ知らせてやり、來べき人が來て、女かどはかしの名が付いて、事によりては、手が後へ廻るも知れぬ。ちつとも怖い事はない。ともかくもおいなは渡されぬから、さう思はつせえ」と辯舌爽かにいはれ、勤奉公と企圖んだ叔母も、お粂が辯舌に言伏せられ、すご〳〵とも歸られず、おいながをさなだちの事など、入らざる事を長々しくしやべるゆゑ、小僧は履物へ灸をするゑ、下女は箒に手拭かぶらせて、歸る呪しけるに、これが利きしか、

さしたるは、まだ散り果てぬ鼻筋通り、張替したる紬縞に唐棧の前垂、今朝番頭が店より持來りし小判、紙に包みしを硯箱の蓋に置き、帳面控へて烟草吸付けし時、「はい御免なさいまし」と勝手に來りしは、彼のおいなが叔母なりけり。

五　段　目

おへそが來りしとて、お兼へ下女がいひければ、店の者に聞かせるもうとましとて、庭傳ひの小座敷に案内させ、お兼立出でければ、おへそ「是はあなたさま、始めて御目にかゝりました。私はいなが叔母、へそと申します。今朝ほど、おいなが事御知らせ下さりましたゆゑ、鰡吉上りまして、おいなが不埓のお詫、又、命をお助け下されましたお禮も申上げ、おいなを引取ります筈の處、口不調法な鰡吉、妹が不埓面目なく、あなた方へ顏も向けられぬと申しますゆゑ、私があがりました。彼が不埓は、何卒御免遊ばして、私へお渡し下されまし」と早口にいひければ、お兼その返辭はなく、かね「昨夜五ツ頃、屋根舟で私が花水橋の下を通りし時、舟の屋根へどつさり落ちたは女の投身と、船頭がいうたゆゑ、舟の中へ入れさせて見ればおいな、氣絶したゆゑ介抱して、やう〳〵息を吹返し、連れて歸つて樣子を聞けば、竹に愛想が盡き、宿へ歸りしに、こなたが居合はせ、竹から退狀取つて來い、取られぬなら內へは歸さぬ、身でも投

まへ」ぼら「何を」おへそ「おいなを勤奉公に。竹の野郎には、四手屋の駕六といふ尻押がある。彼奴等においなを引たくられ、彼奴等に賣らせるよりは、おのし賣つてしまへ。どうでおいなは、おのしの手には乘らぬぞ」と、慾の熊手ですよめこみ、叔母がおいなを引取に行きけり。

四　段　目

染付屋は家内の上下二十人ばかり暮す瀬戸物の大店、朝飯すみし頃主人佐良右衛門妻のお兼に對ひ、「おいなを助けた事、鯔吉方へ知らせてやりしゆゑ、鯔吉が來るであろ。太郎吉を呼んで置き、彼に掛合せさつせえ」かね「私が思ふには、鯔吉は律義な男、おいなが男をこしらへたを氣の毒がりて來ますまい。大方叔母が參りませう。女同士の事、私が掛合ひませう。どうでもかうでも、おいなは渡しませぬ」さら「おいなが事は貴樣に委せるから、好いやうにして下さい。今日は紅が谷のお屋敷へ出ねばならぬが、どうしやう」かね「お出なさいまし。おいなが此所に居ると聞いたら、連れて逃げた竹も來るかも知れませぬ。竹が事は、昨晩犬吉に賴み、身元を洗つて置きましたは、貴郎も御存じ。お前さんのお顔の汚れぬやうに致します。お案じなさいますな」さら「そんならお屋敷へ出かけやう。松や、お屋敷へ行く著物を出してくれ」中の間の時計ちんと四ツ半。かくて佐良右衛門は屋敷へ出て行き、お兼は鐵漿付けしまひ、薄化粧に口紅

三段目

かくて此明る日の朝、おいなが叔母おへそ、鯔吉方へ來り、おへそ「母さん、おいなが事、染付屋から今朝知らせて來たさうだの」母「をゝさ、店の抱の衆ぢやとて、太郎吉といふ人が來て、店のおかみさんが、昨夕五ツ頃、屋根舟で花水橋を通らさんした時、おいなが身を投げ、おかみさんの乘られた舟へ落ち、不思議に命助かりしゆゑ、先おいなを預かりおくと、おかみさんの口上。それでおのしへも今朝知らせて遣つたのぢや。なんとまア、命強い子ではないかいの。私も今朝の知らせを聞いて、癪がけろ〳〵と宜くなつた」おへそ「それはあの子ばかりではない、皆の仕合」と話の中、鯔吉は、干物買ひに來た商ひを仕舞ひ、ぼら「叔母さん、おいなを引取に行かうと思ふが、竹といふ野郎があるから、彼方へ預けて置かうか」おへそ「預けて置くとは此方の勝手。旦那を捨てて竹にくつついたおいな、何しに預かるものか」ぼら「内へ置いたら、竹が振込んで來るだらう」おへそ「知れた事よ」ぼら「叔母さん預かつて呉んねえ」おへそ「いや〳〵。女ひとり暮しのおれが内、竹の野郎が出刃庖丁で振込んだ時、女と侮り、どんな事しやうも知れぬ」ぼら「それぢやア内へ置くより外仕方がないが、毎日商ひに出る私、母さんばかり居る所へ竹が來て、母さんへ怪我でもさせては世間へすまぬ。叔母さん何うせう」おへそ「男の手切に賣つて仕

事、若し勤奉公せずとも身持よからぬおいな、此後何のよな悪漢の妻になるまいものでもない。さすれば如何程堅い證文取るとも、腹を借りたる親子の中、行末彼が産みたるおみつの、苦勞になるまいとも言はれませぬ。こゝを考へて見れば、繋がる緣の斷れぬしるしが、不思議に助けた屋根舟で、拾ひしを捨ててしまはず、證文仕換へて、つねなみの下女になして人手に渡さず、私が手につけて、彼が心を撓直し、その內、店の者か出入する者にめあはせなば、貴郎の顔も汚れず、おみつが爲にも好いでは御座んせぬか」さち「いかさま尤。此上は貴樣に委せる、好いやうにして下され」かね「しかし、たゞの下女にして置くを、貴郎又も手をお出しなされてはなりませぬぞえ」さち「いやもう、貴樣の手前も氣の毒、彼奴には懲り〳〵した」かね「その御口をお忘れなさいますなよ」そも〳〵此佐良右衛門は、身持さまで惡くはなけれど、この家に生れて世間を知らず、才智もはか〴〵しからず。しかるに妻は優れて賢けれど、夫を尻に敷かず、操も正しく、夫の心つかざる事は、密に教へて能く家を治め、常には無口なれど、いで言はんと思ふ事あれば、男に優るこのお兼を妻に持ちたるは、佐良右衛門が天幸なり。このお兼ぞ女房形氣の鑑なりける。人の妻たるは、かくあらまほしき事ぞかし。

より、酒が狂はす日を逆立て、ありあふ烟草盆振上げ、おいなが頽れし島田搔摑み、引伏せければ、お兼「こちの人、もつともぢやが、まア譯を聞かんせ」「いや放せ、打殺しても大事ない。畜生阿魔奴」と放さぬ髻、お兼やう〳〵捥放せば、おいなは黒髪振亂し、泣くより外に言葉なし。針妙のお松馳付ければ、おいなを預けて、元の部屋へ連行かせけり。

二段目

佐良右衞門いきまき荒く、「なんで彼奴を内へ寄せたのぢや」かね「いかさま、お腹も立たん。是には譯ある事」佐良「べらぼう面奴。なに譯があるものか。あの阿魔奴は坊主にして叩出す」かね「その腹立は尤ぢやが、まア譯を聞いて下さんせ」と竹に愛想を盡かせし事を始とし、身を投げし事、屋根舟へ落ちたるを助けたる事ども、委しく語りければ、さち「それにしても彼奴を片時も内へ置く事はならぬ。追出してやらつせえ」かね「そりや貴郎お心得違ひ」さち「何故々々」かね「おいなは只の下女では御座りませぬぞえ。あなたの胤を宿し、おみつといふ子を産みたるもの。今彼を追出してやれば、兄の鯔吉は母に孝行なるものゆゑ、堪忍もすべけれど、おいなが叔母のおへそは、慾深いならずもの、おいなが不埓を幸ひにして、母や鯔吉をすゝめ、おいなを賣るに違ひない。さすれば貴郎の外聞、二ツには、彼が腹を借りたるおみつが恥ともなる

預けおくと聞きしゆゑ、左樣ありては店の者の思はくもあしく、家の爲にもならぬゆゑ、別に家を作り、おのしを据置かんとせしに、竹とやらいふ若い者と逃げしと聞きしに、心中の桂川でもなく、ひとり身を投げしは如何なる事ぞ。品によつては私が世話して、竹に連添はせん。それにしては旦那へ詫言もせねばならぬ。身を投げんとしたる事、つゝみかくさず話して聞かしや」おいなはさし俯き居たりしが、やう〳〵顏を上げ、いな「あなたへは誠に面目なく、何と一言申しませうやうも御座りませぬ。私が身を投げやうと存じました其譯は」斯樣々々と、竹に愛想が盡きたるのみならず、四手屋駕六と竹が相談にて、おいなを大磯へ賣らんとしたるゆゑ、竹を捨てて逃出し、兄の鰡吉方へ歸りし時、叔母のおへそ居り合はせ、竹の手を切る心なら、竹が手より退狀取つて來い、さなくては、突出されしとて腹立ち、男が立たぬとて出刃庖丁で振込むは間々ある事、退狀取る働きがなくば、身でも投げて死ねと、叔母に言はれて追出され、退狀は取られず、身を投げし事五へんの下にありし事ども語りければ、お兼「いかさま、年のゆかぬ心一つ、身を投げんとしたるは、尤、竹に愛想が盡きしとあらば爲べきやうあり。それにしても、恩知らずとて旦那の腹立、今にも歸り給はゞ、心得違ひの詫言いふべし。私も側から執成さん」といふ處へ、旦那お歸りの聲の下、微醉にて歸りし佐良右衞門、おいなを見る

敎草女房形氣　六編上之卷

初段

瀨戸物を手廣く商ふ染付屋佐良右衞門が女房お兼、寺まゐりの歸り、芝居を二幕見て、打出しは日が暮れければ、歸りは舟にて花水橋の下を通る時、宵闇の暗紛れ、身投の女、この屋根舟へ落入り、氣絕したるを見れば、佐良右衞門が手をつけて子まで生したるを、片附金二十兩取らせて暇をやりしおいななれば、お兼大きに驚き、介抱して息吹返し、宿へ連歸りしに、此時主人佐良右衞門は、出入屋敷の人を振舞にて宿に居らず。おいなはまづ下女の部屋へ入置き、身を投げし心のものゆゑ、年增の針妙お松をつけおき、お兼は風呂にも入りて後、おいなを呼寄せ、「これおいな、舟の內で聞かんと思ひしが、船頭ふたりの聞くを厭ひて尋ねざりしが、今更いふには及ばねど、私にかくして旦那が其方へ手をつけ、お腹もたゞならず見えしゆゑ、私が計ひで、おし晴れて妾となし、其後片附金もつけて首尾よくいとまをやりしに、叔母の所へ引取られ、人にかくして旦那へ文をよこして釣出したは、おほかた叔母の指圖ならん。旦那はおのしへ心が殘りしと見えて、叔母の所へ度々通ひ、其後紺間の喜の八方へ、旦那がおのしを



弘化四年丁未霜月稿本
嘉永元年戊申冬上梓酉春新發



とりあげてみる人あれといのるかな梅のはやめの女房形氣を

丁未霜月　山東庵

弘化四年丁未霜月稿本

嘉永元年戊申冬上梓酉春新發

はしがき

往年、我が作たる娘を繪草紙商人山田屋へ嫁らせて、女房形氣と名づけしに、此女房小舅のお兒樣方のお心にも叶ひしとて、板元の親達も悅びしは、産の親の作者が幸、繪師と作者の夫婦中も睦しければ、女房形氣年子に孕みて、毎年産聲をあげて、今年も五編目を作出し、少し色ある産著を著せて、繪賣店の宮まゐりも目出度させけり。さてある日、板元の主人來りていひけるは、今年の五編に續く筋の六編をも、今年の内に作出し給へ、歌川の水に産湯を浴せて、歳を超ゆる二年子となし、春の日長に緩々と、彫の疱瘡をも輕くさせて、彫頽しの虫氣もなく、美しく育てあげて來年のかゝり子にいたしたしとは、産出す親の作者に花をもたす言葉。これを聞きしは、庭の敷松葉に初霜置く頃にぞありける。腹稿もなきに産出さんは、いと覺束なけれど、家製の女孕藥を呑みて、王勃がためしにならひ、蒲團かぶりて考へつゝ種を宿し、机にかゝりて此六編を作出しぬ。

と呼ばれて、うんと息吹返し、不思議の命助かりけり。めでたし〱〱〱。
これより後の事ども、このおかねが女房形氣は、六編七編に委しく記せり。御もよりの繪店にて御たづね御もとめねがひ上奉り候。めでたし〱〱〱。
此のちおいな竹吉が事六編にあり。

が不埒を深く憎み、「不孝者奴、内へは入れぬ、出て失せい」と立掛るを叔母押止め、「これおいな、竹の野郎は親に勘當受け、あちこちへ居候の宿無し。彼奴にくッついて、わりやどうする積りだ。今に賣られるぞ」「さればいな」トしか〴〵の由いひければ、「それ見ろ、言はぬ事か」「お前も腹も立たうけれど、勘忍して兄さんにも母さんにも、詫言して下さんせ」「をゝ詫言してやらうが、只はならぬ。今から直に立歸り、彼奴が手から構なしの書付取つて來い。さうもなくちやあの野郎、人おどしの出刃庖丁、能くある事だ。鰡吉、書付取つて來たら、許してやらしやれ」母は耳が遠けれど聞付け、「それ〳〵、早く退狀取つて來い」鰡吉「退狀取つて來ぬうちは、内へは置かぬ」「どうもそれは」叔母「出來ぬなら身でも投げてしまへ、いくぢなしめ。早く行け、はやく〳〵」と兄と叔母に迫立られてせん方なく立出しが、とやせんかくも胸一ッ、心の闇に迷ひけり。此時此くさ草子の三べん四編にも出でたる、おいなが元主人染付屋佐良右衛門が妻お兼、屋根舟にて宿への歸り、眞暗がりの闇の夜、花水橋の下を過る時、屋根舟の上にどつさり落ちて氣を失ひしを、船頭が、「あゝ身投の娘だ」「それ助けよ」とお兼が指圖ゆゑ、舟の中へ舁入れければ、提燈に顔見てびつくり、「こりやおいなぢや。屋根へ落ちたは命强い」と川の水を顔へ吹きかけ、「おいな〳〵」とお兼が聲、供の下女ふたりも、「おいなどの〳〵」

此中にあんな厄介、明日炊く米もねへぜ」「それだつても見掛けて頼むから仕方がねへわさ」噂の中に、子が泣出して、話は消えにけり。

第十二段

おいな五六日此所にかくれ居る中、持來りたる包の内の、櫛笄など無理に借りられて質に置かれ、その金は米と酒、雙六毎日竹を相手に酒呑みて、親元へ渡も捨置くゆゑ、おいなは逃げたを後悔すれども、今さら爲べきやうなく、いよ〳〵竹吉が厭になりけり。かくて晝は人目を憚り、五六日は湯へも行かざりしゆゑ、夜に入りて風呂に入りて歸り、裏口を開けんとしたる時、雙六が聲にて、「もし身を賣るが厭だとぬかしたら、括上げても得心させやれ。彼奴が素振を見るに、おのしに愛想が盡きて居るぜ。女に突出されぬ内金にしやれ」竹が聲にて、「さうさ、毒を食はゞ皿までだ」と聞いておいなは、いよ〳〵竹に愛想がつき、兄鰡吉が方へとこゝろざして逃去りけり。

第十三段

この夜鰡吉方にては、かの叔母來り、おいなが相手は竹吉と知れたれど、行方は知れずと話最中、おいなおづ〳〵這入ければ、兄の鰡吉は母へ孝心正直三昧、妹背の道に疎きゆゑ、おいな

名いよ〳〵高くなりけり。これ雌鳥教へて雄鳥時をつくりしなり。かゝる妻を持ちしは長五郎が仕合、お勝は女房形氣のかゞみなりけり。

第十一段

それはさておき、茲に彼の竹吉は、長五郎が留守を守る叔母に言伏せられて、おいなを連れて悄悄と、長五郎が家を立出でけるが、おいな心に思ふやう、あの叔母がいふ處も道理なれど、女に言込められ、碌々言葉も返さず追出されたるは、働のなき男なりと、心の内に少し愛相が盡きしが、「竹さん、是からお前何所へ連れて行く」「今度は大丈夫な所へつれて行く」「又義理の惡い所ぢやないか」「案じるな行つて見やれ」と連行きたるは四手屋駕六とて、宿に二人の駕舁あれど、屋根代取る居候、女房に三才の女の子ある、其日稼ぎの貧しき暮しなり。竹吉門口打叩き、「駕六さん、内にかえ」「をゝ誰だ、もう寢たわ」「竹吉だよ、開けてくんねえ」「竹か、何しに來た。待て〳〵」と門口開くると、竹はおいなを連れて内に入り、しか〴〵の由を語りければ、駕六「若い時にはある事だ。此子の親元へ渡をつけて、貰引もならふわさ。内の奴等も、成田へ通しに雇はれ、四五日は歸るまい。二階に夜具もある、まア寢やれ。何かは明日の事よ」と聞きて二人は二階へ上りけり。女房寢て居て、三ッになる子の胎毒の頭叩きながら、「お前もつまらねへ、

なればせん方なし。せめては此島臺で忰と盃さすれば、そもじは先妻、お徳は後妻、恨を晴して下されい」「えゝ、何の恨みませうぞ。箱根の轉寢は私がいたづら。墮胎藥にあてられたは私が因果、長二郎さんに恨はなし。今あらためて嫁にして下さんすは、染々と嬉しう厶んす」「嫁の事なら此後も、訪弔はしますぞや。さあ忰、盃せよ」と長五郎夫婦は媒人、幽靈の婚禮は、珍じかりける事どもなりけり。かくて盃めで度すみければ、「やれ〳〵嬉しや。是で私は浮みます。長二郎さん、何時までも生存へ給へ。夫婦は二世と聞くからに、半座をわけて待ちまする」と長二郎を見やりつゝ、にこと打笑み、烟の如く消えければ、差覗きたる人々も、袖を濡さぬはなかりけり。かくて夜も更けければ、嫁のお徳は床盃のみにて、妹背をかためけるが、夢にお花來りて、盃の禮をのべ、この人形はわが祕藏なれども、お徳さんに讓ると聞きて夢覺めけるに、此月より火とまりて、男の子を生みけり。これお花が腹の子生れかはりたるならんとて、殊更にいつき侍きけり。さて又長五郎には、貴樣の働にて物の怪の譯もわかり、世間の聞えも惡しからず、お徳に疵もつかず、婚禮もめで度すみたる禮なりとて、金百兩主人手づから長五郎に與へければ、長五郎、こは思ひも寄らずと辭退しけるに、いや〳〵、これはお徳が持參金の福分なりとて、女房が智惠百兩になり、長五郎は幽靈を得脫させたりとて、其

那、ありますか」長二「いかさま、湯場の座敷の薄暗がり、思も寄らぬ花の露、その明る日は、直に歸りし母の供」「あわたゞしきお歸りゆゑ、所もお名も聞落し、思ひ焦れし胸一ツ、一ツの枕に火がとまり、袖でかくすは三月か四月、下女のお杉が才覺にて、人にかくして墮胎藥を呑みけるに、それにあてられしか、其夜お腹の苦しさ堪へ難く、兩親は食傷とのみ思ひ給ひ、招きし醫師の藥もきかず、その明方に失せました」と語るも涙咽かへる。長二郎は二十二の年若なれば、涙ばかり言葉は出さず。お勝膝をすゝめ、「やれ〳〵お痛はしや。して、あなたの御家は何所、お名はなんと申します」「をゝお勝さん、さぞお見忘れてで御座んせう」ト此時顏にあてたる袖を除けければ、嫁のお德と見えたる顏も打變り、お德より今一際優りたる美人なれど、雨に痛みし淺黄櫻、お勝はびつくり、「ヤアあなたは、金爲屋のお娘御お花さまで御座りましたか」長五郎「金爲屋樣はわたくしが親の代からのお出入、いかにも食傷にて人々にも惜まれ給ひし、お葬式にも參つた私」「さればいなア、それゆゑ此方衆ふたり聞人に此所へ置きました。お懐しや長二郎さん」「思ひも寄らぬお花どの、あはれな最期であつたよなア」かゝる折しも長二郎が父親、婚禮の島臺手に持ちて一間を立出で、島臺をお花が前におき、涙かきやりつゝ、「狐とのみ思ひしに、おもひも寄らずあはれな話を立聽きて、泣かぬ者は御座らぬ。何事も亡き世の人

投付けられて倒るゝ屏風、割薪振上げ打込む虎が腕首を、細き腕の嫁に握られ、手首痲痺れて落す割薪。投げられたる熊跳起きて、組留めんと取付く頭、押へられて働き得ず。一人の嫁は是を見て、やれ怖しやと逃去りけり。長五郎是を見て、大手を廣げてたちかゝる。此家の男ども尻につきて馳寄れば、嫁聲をかけ、「これ〳〵人々騒ぎ給ふな。妾は狐狸にもあらず、嫁に姿を變じたる事、此家の御子息長二郎殿に語り申さん。長五郎夫婦を聞人にせん。あとは殘らず此所を立去り給へ」といふ。此詞を聞きて主人長左衞門を始め此所の人々、立去る風をなして物蔭にて立聽す。子息長二郎は怖々ながら、長五郎の側にありけり。さて幻のお德、涙をはらはらと落し、袖に顔をかくして言ひけるやう、「今は何をか包み申さん。我は去年みまかりて、今宵は丁度一周忌の待夜なり。父母追善を營み給ふゆゑ、しばし冥途の暇を貰ひ、我家へ行かんとなしけるに、お德どのの婚禮、その乘物に行合ひ、さても〳〵羨ましと思ふ心の戀の闇、お德どのの姿になり、せめては思ひ焦れし長二郎さんと、妹背の盃したき故、かゝる姿にまよひしが、長五郎殿に見現され、思ひし事も皆徒事。長二郎さん、不便と思うて下さんせ」長五郎夫婦顔見合せて訝しみ、長五郎「思焦れし長二郎さんと申さるゝは、お前此世で」「さればいなア、去年の春忘れもやらぬ三月二十日、箱根の湯場の旅枕、長二郎さんにも覺があらん」長五「若旦

事お前が心づきたるやうに、大旦那へ話しなさんせ」「こりや妙ぢや、うまくゆけば己が名の揚る事あり、有難え〳〵」と長五郎悦びけり。これ雌鳥敎へて雄鳥時をつくるなり。時も丁度八ツのかしら、主人にかくと語りければ、誰も心つかざりし事なりとて、長五郎が才智を褒め、思ふ如くに賴むと悅びけり。

第十段

さる程に嫁の實母にも、しか〴〵の由いひきかせ、狐奴を取逃さぬやうにとて、かの熊と虎が外にも抱への男、出入の車引まで、腕こく者どもをも隱し置き、嫁二人屛風の側へ連來り、主人長左衞門、「此屛風飛越えたるを嫁にせん」といふ。悴もとも〴〵、「飛越えたらば二世の固めに盃せん、いざ飛越えよ」といふ。主人夫婦、實の母、媒人夫婦、後にも竝びたる親類、宿持の番頭、長五郎夫婦も、「お飛びなされて早く盃を」といふ。嫁二人はさし俯きて居たりけるが、顏を上げて淚を拭ひ、兩人口を揃へ、「幼き時踊のおさらひ、忠信はしたれど、此屛風何として飛越えん。ゆるし給へ」あるじ「いや〳〵許さぬ。飛ばずば盃させずに歸すぞ」と鋭き詞にひとりの嫁、「さらば」といひて身を躍らせ、ひらりと越ゆる六尺屛風、飛鳥の如く見えければ、さてこそ狐と人々が、思ひけるも道理なれ。待設けたる熊と虎、一摑にと飛掛るを、ひらりと外し、

くも泣出す、母に縋りてふたりの嫁も泣して再びよく〳〵見比ぶるに、少しも違はず。思はずわつと泣く聲に、主人の妻、屏風引退けければ、母涙ながらに、「痣のしるしも頼まれず、因果の者や」とすゝり泣。主人是を聞き、此上は神佛の御力を頼むより外なしと、持傳へたる尊き懸物、狐の落つる守など竝べたてたる座敷へ、二人の嫁を連來りて居らせ、月祓に來る法印を呼寄せければ、法印しか〳〵の由を聞きて、こゝぞと汗を流して祈りけれど驗も見えず。二人の嫁はさしうつむき、しく〳〵と泣くばかりなり。さて宵のおめでたには打變りたるこの騷に、金の光にて集りたる悦びの人々は更なり、格別のよしみあるも、物に託けて歸り、殘るは親類媒人夫婦、富は屋をうるほすと嘆息したる先生もいつか歸り、臺所もひつそり、燗をつける湯もぬるみ、五人の仕出屋も手を明けて、つまらぬものなりといふも小聲なり。こゝに金神長五郎が女房お勝、長五郎をかたへに招き聲をひそめ、「今宵の樣子、お前なんと思はんす」「さればよ、なんでも狐であらう」「私も狐と思ひますゆゑ、いろ〳〵に考へて見るに、先屏風を立置き、その後へ、連れて來た内の熊と虎をかくし置き、さて嫁御さん二人に、大旦那が、此屏風を飛越したるを嫁にして悴に盃させ、たとへ鼠の油揚なりとも望に任せ馳走せんといはゞ、畜生なれば、我を忘れて飛越ゆべし。ところを彼等が力で括し上げ、明日までには正體を顯すべし。此

を遣したる上は、お德は忰の妻、我娘なり。二人の嫁、一人は變化なる事疑なし。是を見あらはすは此方にてすべき事なり。まづお德が母を呼寄せ、樣子をも見すべし」とて、人を馳ければ、嫁の母駕籠にて馳付け、二人の姿を見て、驚き歎きければ、二人のお德、母が右と左の膝に縋り、「母樣、わたしに物怪取付きて姿が二ッに見ゆるよし。私が目には更に見えず。恐しけれど、探りても手には障らず。お前の目に見ゆるなら」と後は涙に咽返る。母は涙を拭ひ、さゝせたる髮の飾を見くらぶるに、花笄の南天、珊瑚樹の色もたがはず。帶小袖は素より、手を取りて見れば、差してやりたる爪紅も同じやうなり。主人夫婦も此所にありしが、長左衞門母に對ひ、「此子が身體の內、人の見ぬ所に、何かしるしは御座らぬか」「いかさま、お話し申すも恥しけれど、此子が生れし時より、內股に鬼灯程の赤き痣あり」主「それこそ好きしるしなれ、痣さへあらば嫁にすべし、無き方は變化に違なし。あらため給へ」と屛風立廻させければ、お德は舅が嫁にすると聞きて、痣のあるをも恥ぢず、「母さん、早く見て下さんせ」と母より先に屛風に入る。ひとりの嫁も、「うれしや是で明が立つ」と是も母より先に入る。母は手燭のしんを切らせ、手に持ちて屛風に入り、眼鏡をかけ、引捲りて能く〳〵見るに、慥にあり。「やれ嬉しや」と立たんとするを、「母さん、私にも」と自ら見するを、見れば在所も違はず。喫驚

前の側に又一人、お前の樣なお嫁御さん」「どれ、何所にえ」「それ其所に」「なんの、居はせぬものを」といふ詞のした、あとより出でたる嫁、「匕庵樣、何をその樣に驚き給ふ」「驚くは外でない。お前には見えぬかえ」「一人ぢやない二人で御座んす。下女のつまと袖」「いやさ、お前の樣な嫁が居るわいの」「おや、何所にえ」「それ側に」「匕庵樣、常とは違ふ、戲れを仰しやるな。わたしの樣なお嫁さんが、二人居て善いものかいな」「すりや、お前の目には見えませぬか」「何がえ」「側に居る振袖が」「氣味の惡い事おつしやるな」といふ顏はお德に違なし。さては二人の內、一人は狐か狸ならんと、盃はさておき、家内大騷となりけり。

第九段

かくて二人の嫁に、連れて來りし下女二人に、袴著て駕籠傍に附きたる年寄の手代も二人つけおきて、さて主人長左衛門、一間の内へ媒人匕庵夫婦、來合せたる親類を集め、番頭をも呼び、嫁の異變如何計はんと相談しけるに、親類は此所の主人よりは目下の人々にて、年若きもあれば、強て口を開かず。匕庵進み寄り、「さて〳〵思ひも寄らざる化物の嫁を御世話いたし、氣の毒千萬。この上異變の是なき內、二人とも元の如く駕籠へ乘せて連歸り、兩親へ引渡し、私は媒人の肩を拔きたし」といひければ主人、「お前はお年若ゆゑ、左樣に思ひ給へども、しるし

敎草女房形氣 五編下之巻

第八段

持丸屋長左衛門が悴長二郎が、妻に迎ふる金枡屋福右衛門が娘お德、十八の花嫁日出たき婚禮の夜、約束の時刻過ぎて、家内の上下待ちくたびれたる處へ、手ぐりに舁込みたる中の間の乘物、媒人の醫者の夫婦、聟の長二郎も此所に立出で、待女郎駕籠の戸を開けば、しづ〳〵と立出でし花嫁、待女郎會釋して手を取れば、同じ駕籠より又一人立出る大振袖、綿を冠りて顔は見えねど、姿は二人少しも違はず、媒人はじめ喫驚なしけるが、うへ〳〵の御輿入には、はふ子樣とて、お先乘もある事なれば、そのやつしかと思ひ、ふたりとも設けの座敷へ伴ひけり。さて媒人の匕庵、嫁が連れたる下女にむかひ、お德どのと同じ姿のいま一人は、何故ぞと尋ねければ、下女等二人も肝を潰して、取止めもなき挨拶ゆゑ、匕庵が女房立寄り、駕籠より先へ出でたる嫁の綿帽子を取りければ、待女郎は後より出でたる嫁の綿を取りしに、二人の顔、鏡に映るが如く、少しもかはる所なし。これはと人々びつくり仰天、不思議々々々と匕庵がいひければ、先に出でたる嫁、驚きたる風情もなく、「匕庵樣、何をその樣に驚き給ふ」「驚かいで何とせう。お

女房形気五編下巻

弘化五年申春

錦耕堂山田屋板



下の巻にしるす。此嫁に異變あり、入れけり。嫁の駕籠中の間まで舁

を入れて、嫁の駕籠中の間まで舁入れけり。此嫁に異變あり、下の巻にしるす。

第七段

それはさておき、持丸屋の婚禮に、親類は素より、金の光にて集りたる男女の大勢、女は女同士、男は男同士、身の程につれて此所彼所に擧り寄り、お目出たいと言はざるものなし。太い蠟燭惜氣もなく輝かし、樟腦臭い金屏風の雛鶴、婚禮にはさもあるべけれど、見きりの衝立に、薩陀峠の富士の山に心つかざるはいかにぞや。お出入の按摩が招きもせざるに、一名の僧俗邪魔になりて迷惑なれど、開けともいひ難し。さて臺所は、仕出屋の男五人、煎酒の匂鼻をつらぬき、濱燒の鯛目を驚かす。七輪の炭幾度ついでも、お嫁御樣いまだ來らず。されば主人夫婦を始め、待ちくたびれて話も跡切れ、扇に欠かくす人もありけり。さて持丸屋の息子長二郎へ、五經の素讀敎へたる先生、此夜の樣子を見てつくぐ\思へらく、富は屋をうるほすとは是なり、千金の子は市に死せず、長二郎は仕合ものなりと嘆息なし、本讀みゆゑ富を羨む心はなけれど、文庫の蓋に入れたる水引かけたる目錄澤山なるを見て、かうき字典だに買ふ事ならぬ身を悲みたるは哀なり。嫁あまりに遲きゆゑ、長五郎連れて來りたる若い者に吩咐け、樣子見せにやりしに、頓て駈戻り、今それへといふ。後より見ほしの者も駈歸り、三丁目までお出といふ。そりやとて家内の騷、媒人夫婦駈拔け來れば、待女郎も立出で、玄關めく所より袴著たもの肩

かゝへたるにて、大方それと知られけるが、お芳「竹や、久しく逢はなんだ。何しに來た。見れば女中の連、お前、此方へお上り」おいな「はい」竹「私も久しく御無沙汰いたしましたが、おかみさんにお願あつて參りました」およし「お願とは何か知らねど、夫婦ながら出入場の婚禮にて、歸りも遲からう。お勝へ用なら、私に言や」と聞いて竹吉、股引の膝を寄せ、おいなが事のあらましを語り、頼のよしをもいひければ、およし「此子と二人、此所の内にかくまはれ、その上親元へ渡り、此子を貰つてくれろといやるは、手前勝手な言分。尤も女の貰引はもとより、頼まれた事は、其筋道を立てて、白い黒いの譯をつけるゆゑ、金神長五郎と人に立てらるゝも、名をかさにして無理をせぬからの事ぢや。若い奴等も見習うて堅木の棒、男を研くその中に、おのしはお勝が誂へた蒔繪の櫛、金持たせて取りにやつた先から行方知れず、伊勢まゐりかと思の外、何所のか部屋にぶらつき、その後雷正九郎を頼み、出入はかなひたれど、土藏普請の時さへ一度も面を出さず、えてがつてには女を連れて、此子は可愛さうなれど、とても長五郎は素より、お勝も得心はせまい。お勝はおのしたちに馬鹿にされる女ぢやないぞ」と厳しき詞に、竹吉は今更、連れて來たおいなが手前も面目なく、只管頼みけれど、取合はざればせん方なく、すご〳〵と歸りけり。此ふたりが事つぎにしるす。

それはさておき、魚賣鰡吉が妹のおいな、預けられたる叔母の所より、竹吉と駈落なしける心の闇路、「竹さん、ちつと徐に往きねえな、息が切れる。叔母さん一人だから、追手の氣遣はないよ」「知れた事だが、頭の所で寢ると惡いから急ぐのだ。併し腹が減つた。丁度好い。おい〱茶飯屋、一杯くんねえ。おいなも食はねへか」と美しき娘が途上にて、あんかけ豆腐を啜り、つくばひて茶飯食ふは、掃溜に宿る蝶なりけり。

第六段

こゝに又、長五郎が叔母は、六十の上二ツ三ツ、腰も曲らず、搗米屋のお袋にて、長五郎が近所に隱居して、長五郎が女房お勝とも合口にて、物のわかる女ゆゑ、長五郎夫婦留守の時は、いつでも留守を頼むに、留守の用向まちがひし事なし。今日も持丸屋の婚禮にて、長五郎夫婦今朝よりの留守をまもり、晝の總菜とて鰹魚一本、叔母がもの入して食はせければ、若い者三人下女二人も悦びけり。是にて此叔母が常をも知るべし。さて日も暮れ、四ツにもなりければ、夫婦の歸りは遲かるべし、皆寢めと聞きて、坐睡の下女うれしく、其所ら片付ける。叔母のお芳は火鉢の鐵瓶を下し、火をわけて居たる時、臺所の入口そろりと開けて、「御免なさいまし」といふ顔は、叔母も知りたる竹吉なり。後より這入りしは、十八九と見ゆる美しき娘、小さき包

より持來れり。かくて持丸屋にても屋根船にて乘出し、かの角田川のほとりなる百花園に到りけるに、いまだ金ますやは見えず、長五郎が借置きたる座敷に落付きけるに、顔の賣れたる長五郎、此所の主人も知る人なれば、別に心じたる煮花に菓子。長五郎への挨拶を聞きて、長二郎が母、座敷を借切置きたる事を知りて、心のきゝたるを感じけり。是かのお勝が、亭主に光を増さするなりけり。さてすこしありて匕庵來り、かくと見て、此人々に挨拶の内、後より來るは金枡屋の母娘、匕庵の女房、下女等三人、羽織著た年寄の手代、物持の男に、奥で使ふ丁稚、以上九人なり。匕庵馳行き、まづ持丸屋が居る座敷より見ゆる腰掛へ休はせ、雙方見渡すは、僅十間に足らず。茶烟草ありて後、匕庵がさしづに、秋草の花畑を見めぐり、かの座敷の前を通る時、思はず見かはす長二郎、お徳もにつこり、「お杉見や、蝶が」と小聲でいふは、につこりを餘所へ逸す詞。母はその心も覺り、聟の男ぶりも心にかなひて嬉しく、此緣雙方めでたく結ばりければ、お德が支度はいふも更なり、毎日吳服屋の荷持が、どつさりと二人づつ。しるしの取換せもすみ、道具もおくり、婚禮の晝は聟入り、しうと入り、夜に入りて輿入り。此日は金神長五郎夫婦朝から頼まれ、留守居はいつも頼む長五郎が叔母お芳なりけり。

第　五　段

はなし四へんの下にしるしたる事に戻る

に蝶のとまる日和に、心も浮立つ金枡屋の支度。娘お徳は十八の振袖盛り、丸顔なれど目鼻立に申分なく、物言ふ時の口もとに、こゝぞといはれぬ愛敬あり。今日は常より化粧に念を入れ、どれが好からうと、母が迷ふも子故の闇の、黒よりはと紫の曙、鶴に立浪の友禪摸樣。帶も振袖も三ッ四ッ並べ、下女までが著物を借合ひ、支度最中、媒人の匕庵夫婦も來り、今日の天氣を悦びければ、母は娘が帶しめてやりながら挨拶。船宿からお船がよろしうの知らせに、打連れて乘出しけり。さて又持丸屋にては、見せるものが男ゆゑ、紅白粉の世話もなく、常よりは少し風呂を早くたてさすのみ。悴長二郎風呂から上れば、髪結は剃刀合せて待つて居たゆゑ、月代剃りながら、「若旦那、今日はお樂みで御座ります」「誰に聞いた」「今お店で聞きました。お美しいさうで御座ります」「何だか話ばかりで、穴の狢よ」と話しの處へ、金神の長五郎、若い者供に連れて來り、勝手口から、「若旦那、今おぐしで御座りますか。お船も出來て居りますぜ」「さうか。母さんは例の性急、お支度は出來て居る。まア一服呑みねえ。天氣は妙だの」「左樣さ、誂へで御座ります」と臺所の烟草盆引寄せながら、「お竹どん、お供か。美しくなつたの」お竹につこりして奧へ行く。長五郎腰へ手をやり、「南無三。これ熊や、烟草入を忘れて來た」といふ處へ、小女宿

の心根も、お德が乳母でありし下女の飼殺しのばゝアが、お德を我子のやうに可愛がる事など、家内の樣子、お勝が話にて殘らず知れければ、持丸屋夫婦大に悅び、此上はとて、かの匕庵に賴み、見合の相談。匕庵は年若ゆゑ、おのれが女房へも見せたきまゝ、夫婦兩方へ別れて取持ち、芝居にて見合は如何あらんといひければ、持丸の母、「いや〱、一日顏合すも異なものなり」とて、とゞの詰り、秋の七草見物ながら、百花園にて見合せんとありければ、匕庵金枡屋へ至り、しか〲の由語り、暦にて吉日をえらみ、日をさだめ、百花園へ落合は人の込まぬ内、朝の四ツ半と約束。匕庵あちこち駈廻りて、媒人の世話なるを始めて知り、持丸屋にては、かの忠兵衛より使にて、金神長五郎方へ見合を知らせ、若旦那の供を賴みければ、長五郎悅びけり。女房お勝此事を聞きて、かやう〱に計ひ給へと敎へければ、いかにもとて、その日より二日前に、内の若い者を百花園へ遣し、庭の座敷二間借切の約束しおきけり。これ雌鳥敎へて雄鳥に時をつくらすなり。斯樣に才あるおかみさんも、出來合のは亭主を押退け羽根ばたきして、雌鳥時をつくりて、心ある人にさげしまるゝを知らず。アゝ愼むべし〱。

第四段

かくて其日に至りけるに、この緣組目出たく調ふしるしにや、昨日の雨今朝は晴れて、ほし傘

知れた五兩か十兩づつの事、私は知らぬ風なれど、染込まぬうちとて、金ます屋福右衛門殿の娘、年は十八、身代も釣合ひたる縁組。されども貴樣も知つての通り、七庵どのは親御に別れてまだ二十二三、若い人の口ゆゑ、旦那夫婦覺束なく思はれ、貴樣は金枡へも久しい出入、内の樣子、娘の氣質も聞きたいとて、わざ〳〵私をよこされたのぢや」といふ。長五郎「それはよき御縁組、金枡屋御夫婦は御心よし、若旦那は一昨年、田舍の大盡より嫁御を貰ひ、お子樣も出來、今年は親御達隱居なさるゝよし。その地面も買はれました。お娘御お德さんは、此春お母さんと箱根へ湯治の時、私方の勝もお供いたしたゆゑ、お德さんの氣質も、彼は能く知つて居ませう。コレお勝や」「あい〳〵」と勝手から手を拭きながら出來りければ、長五郎しか〴〵のよしを語るを、お勝はこれを聞きて忠兵衛に向ひ、箱根宮の下蔦屋に二まはり、それより歸りには江の島、鎌倉、金澤にも二日足を留めし間、下女も二人つれけるが、母の事は下女に任せず、心の屆きたる孝心の事など、少しはおまけも交へて語りければ、忠兵衛悅び、馳走にもあひて歸りけり。

第三段

持丸屋にては、お勝が話にて、嫁に貰はんといふ金枡屋の娘お德が、氣質の美しき事も、親達

房お勝が心づけ、二度目の催促を斷りたるを、後から持たせてやるなど、雌鳥が敎ふるゆゑ、長五郎が名汚れず。此一ッをもつてもその平日を知るべし。されば小指が、と人に誹らるゝ事なく、くりからの腕だてする若い者も、お勝が一言にはひりゝとするなり。これ才智が鼻の先にぶらつかぬ故ぞかし。かゝる女房を持ちたるは、長五郎が天幸なり。おまけに素顏に薄櫻、三十近しとは見えざりけり。

第二段

こゝに又、同じ鎌倉にて金持の指に折らるゝ持丸屋長左衛門が宿持の番頭忠兵衛、金神長五郎方へ尋ね來りければ、年來出入場の重手代なれば、長五郎肩の手拭をはづし、「これはお珍らしや」と、お勝も鐵漿の口拭き〳〵挨拶の中へ下女魚籠を出し、「これは彼方樣の御土産で御座ります」と蓋を開ければ、足を動かす伊勢鰕もある交魚、夫婦とり〴〵禮を述ぶれば、忠兵衛「いやお尋ね申すしるしばかり。ちとお賴の事ありて、態々來ました」といひつゝ烟草吸付ける。才智敏きお勝心の内に、お店へ勤むる此人の息子、豫て聞きし事もあれば、人の娘を連れて逃げたかしらん、と思ひつゝ勝手へ立つは、貰ひし魚にて、一杯呑む人なれば、盃を出さんとてなり。さて忠兵衛「時に長五郎どの、知つての通り若旦那、此春から夜泊りもをり〳〵、それは高の

敎草女房形氣　五編上之巻

第一段

今は昔、鎌倉にて土一升金一升といふ賑しき所の裏町にて、金神長五郎とて、人に頭々とたてられて、年は四十三四の男盛り。妻のお勝は三十五六、親は大工の棟梁、諸所の屋敷へもお出入するゆゑ、其傳手にて、此お勝をさるお屋敷へ十五の春より奉公させしに、二十五の時御年も明けたれば、此金神長五郎が妻となりたるなり。さるゆゑに熨斗の折方、水引の結びやうも辨へ、地赤の小袖は何時著る物、長髢のかけやうも知りては居れど、夫の家業に連れて、心にもなき横櫛、手拭肩へもかけ、大方は平絎の細帯、子分等も多ければ、姉御々々と呼ばるゝ伊達衆の女房、まだ敎りはてぬはな筋通り、凜々しき目元に才智は見ゆれど、かの雌鳥敎へて雄鳥に時をつくらす女房なれば、夫の心付かざる事あれば、密に敎ふるゆゑ、長五郎が名いよ〳〵高く、鎌倉近き田舍までも、その名通りけり。されば金持の出入場も數多ありて、好き人にも最屓せられ、掛物かけた座敷へも通さるゝにつれて、薄茶の呑みやうも覺えければ、床にも花を絶さず、夫婦綺麗好きゆゑ、二分の手附で誂へた提烟草入も、知りつゝ後金の遲くなるを、女

陽所を失ひ、あきなひの外はおかみさんまかせ、息子も親のいふ事は用ひず。それも主人のおしが利かざる故なりと、わが夫わが親の光を薄くなして、家の暗くなるに心つかざるは、才智鼻のさきにのみありて、禮節を知らざる故、身のほどを忘れて、めん鳥時をつくるなり。母鳥かくあれば、そのひよつ子も身持あしく、はきだめの蟲を拾ひて、けいこ所の三味線になる猫の爪にひつかゝる事まゝあり。學ばざれども道にかなふ人はさにあらず、鼻のさきに才智をおかず、たましひ腹にすわりて禮儀をみださず、夫の心つかざる事は、ひそかに諫めて家を治む。是を俗にめん鳥敎へてをん鳥時を作るといふ。これぞ人の妻たる道なるべしと、かの翁が言ひしをきゝて、めん鳥敎へて、をん鳥の手がらばなしを、女房形氣の五へんとす。

あるものしりの翁いひけるやう、古語に牝鷄の晨するは家の亡ぶる也といへり。是を俗には、夫を尻にしきて妻のさしでるに譬へて、めん鳥時を作るといふ。めん鳥がとけつこうにて、國のみだれし事、和漢の例あげてかぞへがたし。此事は五雜俎巻の八にも、謝肇淛がためいきつきて、婦道の得失を論ぜり。そも〳〵世の中の夫婦をみるに、武家はもとより、いやしき町人といへども、中人以上の家には、おのづから上下の禮儀みだれざるゆゑ、夫婦の中にも禮節をうしなはず。されば、おかみさんが旦那にもいはず、芝居の棧敷とりにはやらず。萬事是につるゝゆゑ、めん鳥のとけつこうは稀なり。中より以下の町人は、世渡りのたづきに忙しきゆゑ、事の輕便をむねとするより、一家の禮儀おのづから立たず。店の長松、立ちながら旦那にものをいひ、勝手のお竹、二階からおかみさんを呼ぶ。これらをとがめては、今日のまにあはず。是が常なれば、夫婦の中、親子のあひだにも、禮儀はあらざるが如し。こゝにおいて、悴は親仁をやきがまはつたと誹りて敎に背き、妻は夫を愚なりと見くだして尻にしき、めん鳥時を作るゆゑ、此家の小天地ひつくりかへりて陰

女房形氣五編

あまりの事りの公羽にけるやう古語に牝雞の晨するハ家の亡る也といへり是を俗に夫をおさへて妻のさし出るにたとへて女房の作るといふなるべしされど国のみだれし事和漢のためしおほくかぞへがたし此書ハ五雜組巻の八にも謝肇淛が云ひおきたることを見て婦道の得失を論ぜり

さもあれ世の中の夫婦といふハ武家ハもとより商人町人といへども中人以上の家ハいかのなる上下の礼義ハこれ有る事なれど夫婦の中にも礼節といふ事をしらずされバいかなる女房も旦那をもうやまひ立居のもの言ひまでも万事




京山作
豊國画

これよりおいなが逃げてゆくへの事は、五へんにしるし、引續きうり出し候。

案じ、夫婦噂の所へ太郎吉來り、おいなを歸參させて、改め圍ひ妾になす事を語り、それにつきては、一旦おいなを元の如く叔母へかへし、其後叔母へも、おいなが兄の鰡吉へも、此方より掛合ひ申さんといふ。喜の八は好き肩の拔き處と心に悅び、其夜おいなを連れて叔母の方へ至り、しか〴〵の由を語りておいなを渡し、おいなが品々は、明日持たせ返さんとて歸りけり。さて叔母は、おいなが歸參については、正直なる鰡吉に智慧をつけてねだらせんと、心に納めておいなを殘し、風呂に行きたる留守、おいな小褄きりゝと引上げ、喜の八方より持來りたる用意の小包小脇にかゝへ、立出たる路地の暗がりより、豆絞の手拭に顏かくし、廣袖に股引、年は二十二三、「おいなか」「竹さんか。文が屆いて嬉しい約束」「間違ねへのがおのしへ立引。サア來い」といふも小聲の頰被。犬が見付けてわん〳〵〳〵。さて叔母は風呂より歸り、おいなが居らぬゆゑ其所ら尋ねしに、隣の嚊、あの子は最前若い男と路地を出でしと聞きて、さてはと心當りをかけ廻り尋ねしかど行方知れず、明る日此事、太郎吉より染付屋へ知らせければ、お粂は嬉しく、鬼に瘤を取られたる思ひ。佐良右衛門はいよ〳〵女房へ面目なく、手の内の玉子を落して犬に甜られたる悔しさ。是に懲々して色を愼みければ、夫婦睦ましく友白髮の尉と姥、家も繁昌、立のぼる初日の影を拜みしも、やきもち上手のゆゑなり。めでたし〳〵。

ながら喜の八樣へも、おいな御世話になり候よし、よろしく御禮ねがひ上げり〳〵。めで度しと讀んでびつくり佐良右衛門、痛みいりたるひゞたけの、尻の割れたるかくし妻、かくし置かれぬふみの文、はづかしとぞ思ひける。これお兼がやきもちの上手なる故ぞかし。かゝる所へ喜の八歸り來り、此文を見て共に頭をかき、此文の治り如何せんと、佐良右衛門喜の八へ相談しけるが、その相談もかたまらず、兎も角もと酒になり、重箱を開きけるが、佐良右衛門は更なり、喜の八夫婦、おいなも、比目魚の刺身にひら〳〵と、火の燃る思なるは、さもあるべき事にこそ。

第十四段

かくて佐良右衛門、其夜は早く宿へ歸りけるが、お兼は常の如く美しき挨拶に、いよ〳〵面目なく、小座敷へ招き、あらためて詫びければ、お兼、かくし置くは世間もよからず、かやう〳〵と番頭忠七に相談しおきたる、おいなに歸參させ、近くへ置く事を、抱の太郎吉に掛合せる積なりと語りければ、佐良右衛門頭かき〳〵、何事も好きに賴むと、女房に手を下げるは、色に迷ひしゆゑなり。愼むべし〳〵。こゝに又きたりや喜の八も、佐良右衛門が内の首尾如何ぞと

知れず。もし又身持よければ、彼も仕合、わしも世話甲斐あるなり。此事如何おもやる」とひければ、忠七至極のおぼしめしとて諾ひけり。さて又、ある日佐良右衛門、ものにかこつけ夕方より立出で、喜の八方へ至りけるに、夜に入りて入口の格子戸開けて、「お頼み申します」といふ聲に、折ふし下女居らざりければ、喜の八が妻立出でて見るに、見知らぬ男、包一つに文箱添へて、「是はおかみさまへ上げ置きます」といひつゝ、所もいはず立歸りぬ。喜の八女房おつま、包文箱を座敷へ持來る。此時佐良右衛門おいなも此所にあり。おつま文箱を開けば、おいな包を開き、「もし旦那御覽じまし、好い重詰で御座ります」さら「いかさま、こりや念を入れたのぢや。上が摘物、中は刺身、その下は吸物種、味噌まである。こりや餘程の遺物、何所から來た」とおつまへ尋ねければ、おつま常ならぬ顔付にて、「旦那此文を御覽じまし」と差出すを、佐良右衛門讀みて見れば、女房お兼が筆にて、

いまだ御目もじいたし申さず候へども一筆申入りまゐらせ候。佐良右衛門事度々まゐり、御心厚き御世話樣、御禮申し盡しがたく候。今晩もまゐり居り候よし、此品は文にて御禮のしるしまで御目にかけ申上候。此ほど御開帳にて御見かけ申候へども、人込ゆゑ御禮も申さず候。嫁入の帶、おいなには能く似合ひ申候てうれしく存じ候。なほまたの御便と申殘し候。末

おいなと旦那、喜の八夫婦並べて置いて、存分言はん、さうぢや〳〵と首肯きしは、是尋常の妬にて、かの表面ばかり胸の火に焦し、中へは通らざるやき樣なり。お兼は利發なる女ゆゑこゝに心づきて、又思ひけるやう、並べて置いて存分いはゞ、喜の八夫婦の手前もあれば、默つて聽いては居られまじ、詞爭ひになるは必定、さすれば夫の身持惡き事を、女房が世間へ知らす道理、負惜みの腹立に、打叩かれまいものでもなし、外に爲樣がありさうなもの、思直して思案せんと、生えたる角をふり落し、手にまろめて懐へ入れけるは、是やきもち上手なるゆゑぞかし。

第十三段

さるほどにお兼、抱の太郎吉を呼びて、おいなが事を語りて探らせけるに、いよ〳〵喜の八方へ預置く事知れければ、その日通番頭忠七にしか〴〵のよしを語り、「私に隱して置かれては私の顏も立たず、旦那の爲にもならざるゆゑ、隣町の持地面に庭つきの賣居あるよし、其所へおいなを住はせ、改めて圍ひ妾の證文を取らんと思ふなり。おいなにはお松を附置き、風呂も内へたてて、遠出もさせず、萬事窮屈に爲置かば、彼より暇を取る事あらん。或は又宿へ下りてありし内、如何なる惡さの男ありしも知るべからず。旦那が自ら目のさめる事爲出さんも

さる程にお兼は宿へ歸り、夫の顔見るにつけても、おいなが帶心にかゝりて快からざれども、物見に行きて歸りし時は、機嫌惡きが癖なる佐良右衛門、心に一ツの過あれば、今日は常に變りて機嫌よく、思の外早かりし、風呂もたててありなど機嫌とり〴〵の挨拶、お兼心に、是も一ツの不思議と思ひけり。さて明る日、佐良右衛門屋敷への留守に、手箱の内を探し見るに、花水橋樣、喜の八といふ短き手紙あり。開き見れば口上とありて、

今日客人の叔母、此程の御禮、あなたへとて交魚參り候。折よく吉藏參り居り候間、會席にいたさせ、釜もかけ申候。夕方より御出、彼の客人も待申候以上。

十三日とあり。お兼これを見て思ふやう、十三日には近所へとて、供も連れず、先もいはず、四ツ過に歸られたる日なり。彼是を考へるに、此手紙に客人とあるは、喜の八方へ旦那が預け置くおいなの事なるべし。開帳まゐりにおいなを連れたる喜の八といひ、おいなが帶も證據の一ツ、一度ならず二度までも、おいなに手出しされるは、さりとは恨めしと、涙の顔に角の生えしは道理なりけり。お兼心に思ふやう、あまりといへば私を踏付にしたなされ方、此手紙を證據となし、屋敷の嫁入に進物とて、お松に仕立てさせ、私に包ませたが、おいなが帶を茶屋で見たる事も、何もかもぶちまけて、いや〳〵、夫よりは旦那の跡を附けて喜の八方へ行き、

てゆる〳〵參詣をなし、地内水茶屋の奥に入りて休ひけり。さて又此日、おいなも喜の八夫婦に連れられ、此開帳へ參詣なし、お兼が休みたる茶屋よりは十四五軒筋ちがひに隔てたる茶屋に休みたるゆゑ、互に見付けざりけり。さてお兼、三吉に吩咐けおいなが生みたる子へ土產とて、手遊をとゝのへさせけるに、三吉調へ歸り、「お松どん、彼所の茶屋においなどんが居るよ」松「どれ」ト見る。おいなは後向ゆゑ顏は合せず。お兼もおいなと聞きて、簾の內より差覗きつつ、おいなが頭の飾、衣類の善きを見て、「お松、あの黑い羽織の男の世話になつて居ると見える」松「左樣さ、しかし側に腰掛けて居るは女房ぢや御座りませぬか」「いかさま」といふを三吉傍より、「あの黑い羽織の男は喜の八とて、旦那の幇間もつ男で御座ります」おかね「フウあれが喜の八か。宿を知つてか」「はい旦那のお供で、度々參りました。德井町で御座ります」松「もし御覽じませ、おいなが締めて居る帶は、旦那の見立にて此間、お出入屋敷のお娘子が嫁入のお遺物とて、私が仕立てました帶によく似て居ります」おかね「いかさま、栗皮茶牡丹唐草の模樣、はてな」と大方は心の中に思量りけるが、慥にそれと證據もなければ、さり氣なき風にてなほ差覗く內に、彼の者どもは立去りけり。

第十二段

譯など、面白くもをかしくもなき話、おいなは氣の毒がり、箒に手拭冠らせたる呪にて、やうやうやうと歸りけり。

第十一段

こゝに又、佐良右衛門が妻お粂は、夫がおいなに再び心を移し、かゝる振舞ある事は夢にも知らず、おいなが腹に宿りし女の子を、明暮不便がり、少し熱があれば、流行の疱瘡ではなきかと案ずるなど、佐良衛右門心に嬉しく、それにつけてもおいなを隱し置く事、心の內に恥しく、何をがな禮心とてお粂にむかひ「今日は天氣もよし、私が留守するゆゑ、長谷の觀音の開帳まゐり、ゆきかへり屋根船にさつしやれ。晝のしたゝめは小倉庵、風呂へはいり、ゆる〳〵遊んで歸らしやれ」と何時になき夫のすゝめに、お粂嬉しく、針妙のお松、腰元のお竹、奥で使ふ十三の三吉、物持の男一人、いつも乘つけの船宿より、屋根船も二人船頭にて、朝の四ツ過より乘出しけり。そも〳〵宮戸川より出現ありける觀世音は、今より千二百五十餘年の昔、推古天皇三十六年三月十八日、濱成、武成、豊成といふ兄弟の者の網にかゝりて、宮戸川より出現の事は、普く世の人の知る處なり。されば千二百餘年の昔より、靈驗あらたに立たせ給ふ御佛の開帳なれば、日每に群集なす事はいふも更なり。さて染付屋佐良右衛門が妻のお粂、船より上り

旦那がその話をなされて、お前にも咄せと仰やりました」「そんなら今朝にも話せば宜いに」といふ詞の尾につき、喜の八が如才なき掛合に、叔母も嫌といはれず、此明る日おいなを喜の八方へ引取るに相談を堅めて、喜の八かへり路、古著屋にて、おいなのとて郡内の小夜著、同じ蒲團持たせよこす約束にて代を拂ひ、塗物屋にて、京枕二ツとゝのへ歸りけり。かやうに氣轉が利かざれば、人のたいこは持たれぬものと知るべし。

第十段

さる程に喜の八方へおいなを預りし後、佐良右衛門此所へ來り、叔母を呼び、此末の事をも呑込ませ置かんと、喜の八方より呼びにやりければ、如才なきおへそ徒は來らず、瀧水二升の卷樽を持來りければ、佐良右衛門も、用意したる結城縞一反に目錄五百疋取らせければ、おへそは大きなる口あいて打笑ひ悅びけり。おいなも仕立てある女帶、栗皮茶の緞子、模樣は大形の牡丹唐草なり。「叔母さん、此帶今日旦那に貰ひました」と見せければ、「やれ〳〵旦那有難う御座ります。おのしは仕合者だ。はゝ〳〵〳〵」とつきもなき處にて笑ふ。さて酒を出して喜の八の妻、佐良右衛門への義理にて、いろ〳〵待遇しければ、おへそ大きに悅び、呑む口なれば時を移し、相長屋の按摩が無盡にあたりし噺、洗濯する出入場の仕事は下へ渡す所が二軒ある事

叔母の所に居るが」かやう〳〵と精しく語り、喜の八方へ預置きたきよし女房にも頼みければ、「私も内で二三日づつ泊り歩くは度々の事、淋しさの紛れにもなる事」と口ではいへど心の内は、厄介ものと思ふもことわりなり。喜の八もその心なれど、嫌ともいはれず、「彼の子はあなたの御胤を生んだ女中、人の手に御渡しなさる譯ではない。私方へお預けなさるにしても、その事を彼の子にも叔母にもあなたから」「さうさ、お前も叔母へ掛合ひて、何分頼むよ」と愚になるは、此道のならひなりけり。

第九段

おいなが叔母のおへそは、佐良右衛門が事心の壺へ陥りたれば、獨思ふやう、まづ二階の天井を張つて貰ひ、疊替もしてもらひ、おいなが木綿夜具も絹にしてもらひ、序に私が帶も謎をかけて見やうなどと、心に工面の摑み性、慾の熊鷹いやしき女の老いたるは、大方こんなものなり。さて喜の八は佐良右衛門が頼により、おへそ方へ尋ね來り、始てとて酒の切手を出し、佐良右衛門とは豫て心やすき事を語り、おいなを預る事をかけあひければ、おへそは少し心の當が違ふゆゑ、はい〳〵とばかり。喜の八見てとり、「旦那からもお話があつた筈ぢやが」「いえ、まだ承りません」といふ所へ、おいな風呂から歸り、しか〴〵のよしを聞きて、「昨日の晩

第八段

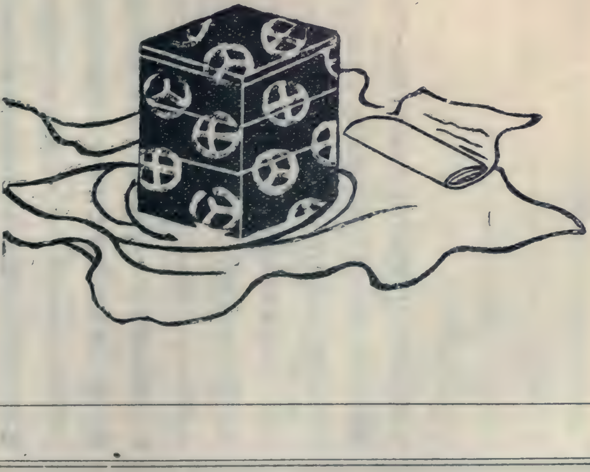
おなじ鎌倉の片ほとりに、北り屋喜の八とて、茶道具は商へども、宿は格子作り、毎日釜はかけておけども、らく代々の名さへ覺束なく、たゞ野幇間といはれぬ爲の商。されば是に心は入れず、有得の人に膝を屈め、目先が利きて何事にも調法ゆゑ、女房達にもかはゆがられ、立寄らば大木のお蔭で、夫婦に小女、小僧も一人つかうて、常にも木綿は肩へかけず、女房が唐棧の前垂しめて暮すも、こくたくの餘滴ぞかし。喜の八今日も旦那場へ立出んとする所へ、染付屋佐良右衞門來りければ、喜の八夫婦とり〲の待遇、炭を直して薄茶たてるも女房が手まへ、佐良右衞門は、茶の場によばれて鰡の椀盛に困りし噂、喜の八は、某の隱居婆樣が寺まゐりの供をして、圖らず說法をきゝて弱りし咄のをかしさ、その内酒も出し、女房も呑む口ゆゑ、酒盛めきけり。さて佐良右衞門、喜の八にむかひ、「少したればなしの樣なれど、お前に賴む事があるから、譯をいはねば判らねへ」「もし旦那、皆まで仰やりますな。此間内二三度此所から、今日もお供の三吉を返し」女房、「もし、聲が高い」と勝手を指す。喜の八聲を潛め、「あなたお一人で小提燈、なんでも徒事ならずと、のうおつま」「左樣さ、お噂申しました。旦那、堀出しは何所で御座りますえ」「なに、堀出しではない。お前達も知つて居るおいな、今では

教草女房形氣 四編下之巻

第七段

こゝに又、佐良右衛門が下女のおいなに手をつけて產みたる女の子の面差、おいなに似たれば、尋常のやきもち女房なれば、人目は可愛がるやうにも見ゆべけれど、おいなが面ににた〳〵笑ふは、思の種ともなるべし。然るにお兼は左樣の女にあらず、我が產みたる子の如くいつき養ひけるは、女房形氣の鑑ともいはまし。それに引かへ夫佐良右衛門は、おいなが靨に入たる道を踏迷ひ、かの叔母が裏住へ五六度通ひしが、人目を忍ぶ三輪の神、夜ばかりでは、宿の首尾、女房の手前、たび〳〵の嘘もつくろひ難く、しかのみならず、おいなが叔母のおへそが、口先の空輕薄、慾深き心からは、一人を守らせはせまじ、さればとて別においなを隱し置くにしても、附けて置くべき人なしと、屈托の顔付を見て女房お兼、「あなた、何をお考へなさる。ちんかが參りました、肩でもお揉ませなさいまし」ト言はれてびつくり、「いかさま揉んでもらはうか」ト肩を畢へば横になる、裾へふはりとお兼が搔巻、かゝる女房を持ちながら、かくし小袖の重褄は、うたてかりける事どもなりけり。

女房形氣
四編下巻
京山作
豊國畫
山田屋板



に心迷ひて、おいなが鬢附の匂なつかしく、夕方より奥で使ふ三吉といふ小僧を、いつもの如く供に連れて立出で、常に連歩く、茶道具は附たりの幇間北り屋喜の八方へ至りて、三吉には、五ッ頃迎に來よとかへし、喜の八方にて日を暮し、此時は喜の八へもそれとは言はず、物に託けて立去り、文に所も知れたれば、おへそが宿へ尋ねければ、おいなは聞知りたる聲ゆゑ、まづ勝手へかくれ、俄につける白粉の、はな高きも咲きかゝる十九の、娘一人産みしとは見えず、笑顔の靨に、四十超えたる佐良右衛門が、心の置所を狂はせしたぐひ、和漢古今の例かぞへ盡しがたし。嗚呼恐るべし愼むべし。此時佐良衛門始てとて、おへそへ角なるもの三ッ取らせければ、おへそも酒肴取寄せての待遇に、いろ〳〵趣ある事どもはこゝに記さず、粋は推し給へかし。さておいなが叔母は、佐良衛門が爲には悪玉なり、若し胸の鏡に映さば、〆たと手を拍つて悅び踊るべし。されども佐良右衛門女房お粂が上手にやきし妬の狐色なるに、おいなが化を現はす事は、下の巻を讀みて知るべし。

三兩」「はてな」と暫く考へけり。「これおいな、今暇をやるに、人に隱して小遣呉れるのは、おのしに心が殘るゆゑなり。嫌でなくば文をやりやれ、屆けてくれる人があらう」「左樣さ、お鍋どんは初からの內幕、其事は旦那も御存じ」「よし〱、文を書きな」「私には書けないものを」「そんなら私が代筆で、明日おなべが所まで、旦那への文も封込み、なにかの禮に託けて、此所に居る事知らせたなら、花を尋ねて蝶とまれ、おのしの爲にもなる事だよ。子までなしたるおのしが身を、彼の身代で二十兩、手切の金は安いもの。如才のないおかみさんに、馬鹿律義な鯔吉、つまる處はおのしの損は私が埋めてやる。文は明日の事、まあ著物を著換へて、あの子を連れて湯へ往きな」と玉を拾ひし心にて、悅ぶ叔母の悪玉も、後は碎ける闇の礫、落つる所は、次々を見て知るべし。

[illegible]第[illegible]六[illegible]段

ある物識人のいひけるやう、聖人の教千言萬語も、色を誡しむるを以て先とす。國の亂るゝとして、色に溺るゝにあらざるはなし。されば家の榮ゆると榮えざるとは、鬢附油の匂にありといひしは、俗に諭しやすき格言なり。染付屋佐良右衞門も、おいなが文をお鍋が袂から受取り、妻のお兼にかくし讀みけるに、如才なきおへそが代筆とは夢にも知らず、情深く哀れなる文句

口惜しく、下る時、旦那が人に隱して小遣にとて下さつた金があるから、酒を吞ませたのさ。內の錢を使やアしめへし」といふを母は聞きつけず、おへそへむかひ、「此奴が歸つてから、おれが氣の休まる間がない」とありし事どもならべ立てていふ。おいなも兄の鯔吉が馬鹿律義の小言が苦しいといふ。此折しも鯔吉商ひより歸りければ、おへそ云々のよしを語り、「おいなは當分わしに預けさッしやれ」と母へも兄へも得心させて、おいなを我家へ連れゆきけり。

第五段

此おへそが亭主は、大店の臺所番頭を勤めし內、おへそを圍置きけるに、店持になる時妻となし、二十年あまり實體に勤めたるゆゑ、一人扶持貰ひ、其後六七年いよ〳〵實體に勤めけるに、十日ばかり煩ひて失せけり。然るに夫の勤功によりて、後家のおへそへ一人扶持を殘し、夫が勤めし店の地面ゆゑ、店賃なしの一人扶持、その店のすゝぎ洗濯、仕立物にて、親子二人は樂な暮し、裏家なれど內厠もありて、すこし小庭もある住居なりけり。さておいなを連歸りていひけるやう、「これおいな、最前旦那に小遣貰ひしとは何うした事ぞ」「あい、貰ひましたは下るとき」「人の手から貰ふたか」「いえ〳〵人には隱して貰ひました」「金はいくらぞ」「小いので

二上り、竹が甚九の最中、門口がらりと歸りたる寺まゐりのお袋、この體を見て肝を潰したる顔付の恐しさ、猫又のお婆と見ゆれば、竹も虎も鼠のやうにこそ〳〵と歸りながら、「おいなさん、御馳走で御座りやした」おいなは喰散したるもの片付けながら、「母さん早かつたの」母は挨拶なく著る物著かへ、「これおいな、今日はおのしが父親の祥月命日。見れば鰻の岡持もあるぞよ。その魂性とは知らず、佛殿の御墓へ手を合せ、おいなが好い所へ片付きますやうに、草葉の蔭から守り給へと頼んだれど、なんのまもらふ、罰あたりめ」「母さん、其様に腹を立ちなさんなな。竹さんが取寄せた刺身や鰻」「だまれ、嘘つきめ。今竹が歸る時、おいなさん御馳走にと禮いうて歸つたぢやないか」おいな小聲にて「聾のはや耳だ」「なに聾だ。この口でか」と横面はられて泣出せば、母は大聲、「われが家へ歸つてから、おれが手助りには一ッもならず」「手助りにならねへかはり、片付くお世話にもなりやせん」「又鼻にかけやァがる。畜生阿魔奴」「何故畜生を生みなさつた」「又口叩くか」と烟管振上るを、隣の嚊馳入りて押止めれば、又一人の嚊も取支へる。此折しもおいなが叔母おへそ、七ッの娘を連れて來りしゆゑ、あたり隣の者どもは、此騒を叔母に預けて立去りけり。さて叔母のおへそ母を宥め、おいなに樣子を聞けば、母も兄も留守の處へ、かの二人來り、なんぞ奢れといふのも、私が彼の樣な奉公した

みたるをお爲ごかしに追出され、宿へ歸りし後は、六十越えたる母に飯を炊かせて喰ふべきにあらず、飯も炊き、水も汲むべきは當然なるに、三度の飯にも母に椀まで洗はせ、湯屋へは毎日糠袋を持ち、湯より歸れば二階へ上り、胸まで白粉つけるほどなれば、揃ひたる目鼻立もいよいよ人の目につき、鰡吉が下手將棊の好きなるに附込み、おいなに王手をかけんとて、桂馬の飛上る若い者ども入込みけれど、耳は遠くても側にお袋の角がきいて居るゆゑ、京車の鎗先も屆かず、さればとて金銀竝べる力なき者どもなれば、髮結床の噂に笑はるゝばかりなりけり。

かくて或日、鰡吉は商ひに出で、母は亡せたる夫の命日とて寺詣の留守を嗅付け、例の若い者兩人、いづれもいきな二才、一人は假聲、一人は聲よき淸元と、おいなかねて聞きければ、今日は妾が鬼の留守に洗濯すると、酒屋の御用に酒を運ばせ、序にと角の煮賣屋より肴を取寄せて、終になき此家での酒宴。二才共は開いた口へ菓子屋の牡丹餅。おいなは二階より古三味線持來り、すこし酒も廻りければ、「竹さん、なんぞ語んねえ」と腕まくりして合せる調子、ぽつきり斷れる三の糸、二才の虎が、「おつと三なら此所にある」と提烟草入の段口から座糸を出すは、虎も三味線彈くと見えたり。竹が淸元の後は虎が假聲、おいながうしろ。この假聲に、あたり隣の小娘どもが來りし中に、九ツになる踊子、おいなが汐汲歌彈いて踊らせ、その後は虎が

らば、月に二朱づゝお貰ひ申して、お袋の小遣にやりませう。殘りはお預け申します」「いや感心々々。臺所の出入も多いが、貴樣の樣なは一人もない。晦日になると前借が多い。貴樣は誠に感心する。のうおちせ」「左樣さ。今朝此人が願があるというた時、無心かと思ひました」「いかさま、例があるから」ト話の中へ下女が、「おかみさん、八百屋が參りました」かくて主人は二十五兩預りの一札を鰡吉に渡し、今日の總菜鰹の切身、茄子の付合にて、鰡吉へ臺所にて飯を喰せて歸しけり。此鰡吉は十九の時、父親に別れたれど、身持も惡しからず、何事も打捨てて稼ぎしゆゑ、見事に母を養ひ、新道なれども表に住ひ、酒も呑まず稼ぐゆゑ、女房持てと店請もすゝむれど、厄介殖えては、母を快くは養ひ難しと、ひとり身なるから、母の死金とて貯溜を百づつも除けしなり。其日暮しの人、女房引ずりのくせに、貧乏餓鬼の種澤山に產み竝べては、亭主いかに稼ぐとも、店賃は溜る筈なり。鰡吉は敎へずして爰に心づきしも、母に苦勞させじと思ふ孝心より出し處なり。おなじ腹に生まれながら、兄の鰡吉と妹のおいなと、心に善惡のかはりある事、比目魚に裏表あるが如し。そのよしは次を見て知るべし。

第四段

鰡吉が妹おいなは、かの染付屋佐良右衞門が女房お傘が、妬上手の遠火にやかれて、子まで生

那へ咄して、少しの金でも廻して貰ふが好い」ト話の中へ主人金田屋爲右衛門、鰡吉と聞きて魚見に此所へ來りしゆゑ、妻のおちせ、二十兩の事を語りければ、主人二十兩をあらため見て、「これ鰡吉、生物かゝへて暇取つては惡い。此事は歸りに寄りやれ。樣子次第で預つてやらう」「はい〳〵、左樣なら歸りに參りませう」「さう爲やれ〳〵。魚は何がある」「はい、是で御座ります」「好い鯵だな。生貝を一ツ、鯵を五ツばかり置いていかッせえ」おちせ、「鯵は買つて置ましたよ」「あゝさうか」と二十兩を手に握りて奥へ入りけり。かくて鰡吉は得意を廻りて魚を殘らず賣り、再び金田屋へ來りければ、足を洗ひ奥へ來よとの指圖に、中の間へ入り、主人が二十兩の譯を尋ねけるゆゑ、鰡吉、妹のおいなを染付屋へ下女奉公に出したる初より、證文書換へ妾になり、女の子を生み、此度片付金として二十兩もらひし事を語り、是皆おかみさんの計なりといひければ、金田屋の夫婦これを聞きて、さても如才なき女房かなと感心なしけり。鰡吉は又財布より金取出し、「旦那樣、此金はお袋の死金と存じ、毎日の賣溜を百づつ除けて置きました。是もお預り下されまし」と聞いて主人あらため見れば、大小交りて五兩あり。夫婦顏見合せて感心なし、あるじ「鰡吉、心がけ感心ぢや。是もこなたが酒呑まず稼ぐゆゑぢや。二口合せて廿五兩、月に壹分づつの利足にして廻してやらう」「それは有難う御座ります。左樣な

來たわな」

第　三　段

鰡吉が毎日廻る得意の内に、金田屋とて格子造りの質店、朝飯も濟みし頃、あるじの妻臺所へ立出で下女にむかひ、「鰡吉は來たかえ」「まだ參りません」「今日は十五日だから、總菜はお魚だよ。鰡吉が來たら知らせな」といひつゝ奥へ入口の、神棚を見て、「これ、何時まで御燈を上げて置くのだ。何うしたものだぞ、氣の付かねへ」と小言めく、折しも鰡吉來りければ、あるじの妻、上下の總菜を見分けて奥へ入らんとするを、鰡吉「いやもしおかみさん、ちとお願が御座ります」と臺所へ腰かけければ、妻のおちせ心の内に、資本の無心ならば二分か三分ならん、毎日の魚で差引けばすむ事と思ひつゝ、「お願とは何だえ」「いや、外でも御座りませぬ」ト首にかけたる財布を探り、紙に包みしもの取出し、少し小聲にて、「これは二十兩御座ります。譯あって人に貰ひましたが、御存じの私、宿へ置きては心もとなく、御面倒ながらあなたお預りなされて下さりまし」と聞いておちせは案に相違の二十兩、あるべき筈のない其日暮しの鰡吉、さればとて盗みするよな鰡吉にあらざる事は、日頃の正直にても知られけれど、いかにしても訝しければ、二十兩には手にも觸れず、「いかさま、仔細のある金であらう。その仔細も精しく且

衛門が妻お兼見付けたれど、やきもち上手なれば人目にかゝる角を生さず、夫に手を下げさせておいなを妾にあらためて、やす〳〵と女の子を生ませ、おいなが乳にて育てさせ、百日ばかり經ちて乳の細りたるに託け、妻のお兼夫に意見して、片付金二十兩にて、おいなを兄の鰡吉に引渡し、手がたき一札取りし事は、前の三編に審なり。

第二段

鰡吉が母は、昨日鰡吉佐良右衛門方へ呼付けられ、おいなが暇の樣子を聞きしに、母は年寄、鰡吉は獨身、妹のおいなうか〳〵奉公の内年長けては氣の毒、早く片付けて身を固めよとお爲ごかしの、お兼が妬上手とは母も鰡吉も知らず、今日夜に入りておいなも道具引取に行きけるに、母は六十越えたる年寄、久しく逢はざる娘のおいな待兼し處へ、おいなは鰡吉より先へ内に入り、「母さん、今歸つたよ。是はお前にお土産」母「をゝ鮓か。さあ茶をあがれ」いな「あいあい」鰡吉「是は御苦勞、その簞笥は直に上げてくんねえ。あい〳〵」と鰡吉が得意金田屋から借りて行きたる釣臺の、簞笥、夜具、葛籠、鏡臺、針箱、盥二ッ、金盥一ッ、日傘、傘、鰡吉は片付けながら、小袖櫃一ッ、夜具包みで奉公にやりしに、殖えた道具は旦那のお蔭と悦べども、おいなは彼方此方見廻し、「おや兄さん、おへない事をした」「何うした」「駒下駄を忘れて

教草女房形氣　四編上之巻

本文發端

今は昔、鎌倉の片邊、何とかいふ新道に、九尺間口の魚屋、店は片隅へ棚を釣り、少しの板の間に鰹節の空箱を竝べ、干物に玉子、缺けた皿に鮭の切身、棚には鰑、煤びた箱二ッ三ッ竝べてあるは、鱓に鰹節なるべし。主は鯔吉とて二十六七、母はおはぜとて六十四五にて耳が遠きゆゑ、鯔吉毎日魚賣に出る留守に、耳遠き母が干物商ひ、賣れぬ筈なり。されど鯔吉は正直者にて母を勞り、商ひも正路にて能く稼ぐゆゑ、得意に可愛がられ、惣菜も遣物も鯔吉が來るを待つ程なれば、店賃は更なり、河岸の買出しにも借はなかりけり。是この鯔吉が正直に稼ぐゆゑなり。それに引かへ妹のおいなは、美しきを鼻に掛けて、兄の正直なるを馬鹿にして、母のいふ事をも肯かず、髪結床で襟を剃りて貰ふ事たび〳〵なりしが、終には惡しき噂兄の耳にも入りしゆゑ、おいなが十七の三月、瀬戸物の大店染付屋佐良右衛門方へ下女奉公に出しけり。然るに主佐良右衛門、四十六七にて、悴も嫁もあり、妻はお兼とて四十に足は踏込みしが、まだ散りはてぬ秋の紅葉、その紅を餘所にして、おいなに手をつけ、乳の黒くなりしを、佐良右

妬百拙を掩ふに足れりといへれど、更にやかざる、をつとの爲にならず。さればとて、人にたきつけられ、或はむねの火の燃るにまかせ、炭團のやうなる顔をまつかになし、おこりたちて、やきもちの火かげんも知らず強くやく時は、やきもちうはこげして中へは通らず、夫の心に叶はざるゆゑ、つひにはやきもち喧嘩となる。此やきもちは犬もくはず。此故に、定家卿の女阿佛尼が、乳母のさうしに、やきやうの敎あり。又紫式部は、源氏をかきしほどの女房なれば、あま夜の品さだめに、やきもちの火かげんをいへり。その火かげんとは、燃え立つむねの火にて、そろ〳〵と靜にやけば、やきもちの形も崩れず、なかへも火がとほりて、味もよければ、やく妻もやかるゝ夫も、夫婦のあぢはひを損ねず、偕老の契をまつたくするぞかし。そのやきもちをあべ川にしたる女房形氣の四へん、左のごとし。

およそ人の女房として妬をやくは、和漢古今の通弊なり。然れども、日本は君子國なるゆゑ、日本紀古事記などに見えたる神代のやきもちも、神だなのおそなへにて、いとちひさし。もろこしは夷の國なるから、いみじき、悍妬あり。漢の高祖の本妻呂后が腹に男子一人あり、妾戚夫人も男子一人あり。高祖戚夫人がうみたるを愛してあとつぎに立てんとしけるに、事ならざる内高祖死しければ、本妻の呂后わが子を立てて天子とす。是を惠帝といふ。時に呂后夫の妾なりし戚夫人をとらへて、手足を斷り、眼をくりぬき、耳をふすべ、藥をのまして瘖となし、厠の中へいれおき、食をあたへて、死もやらず、是を人の彘也と名づけたるは、酷妬の本家といふべし。その出店なるは後漢の袁紹が本妻、をつと病死して、肌いまだ冷えざるに、妾五人をころし、此儘にして棄てなば、地下にてふたたび夫に逢はんとて、五人が黒髪をそりおとし、美しき顔に黥をなしけり。此二ツは日の本にはなき、古今無類の大やきもち也。これらの類かの國にはあげて數へがたし。是えびすの國なるゆゑ也。されば謝肇淛が五雜俎にも、やきもちの例をあまたあげて、婦人不


○女房形気四編上冊
弘化四年丁未夏五月稿本
仝年晩秋上梓發販

やきもちは遠火でやけよやく人の胸も焦さずあぢはひもよし
女房これを守れば、めでたし〳〵〳〵〳〵。
下女おいな宿へ下りて、いろ〳〵の事あり。四編にしるす。

おいなは、矢張下女並にして置くから、其事も店の者へ言聞けておかつしやれ。おいなが歯を染める鐵漿親は、貴樣の内方、大儀ながら賴みたい。鐵漿道具も内方へ賴みます。立派でなくても好いぞや」と萬事拔目の無き計ひに、五十七の忠八も、いよ〱感心なしけり。

第十三段

かくて此日おいなに歯を染めさせて半元服となし、馴染の產婆を呼びて帶を締めさせ、佐良右衞門より櫛と笄を買つて遣り、お兼より紋付の小袖、息子佐良之助より目錄五百疋、嫁より厚板の帶、いづれも帶の祝とておいなに取らせけり。是等の事も皆おかみさんといはるゝお兼が計ひなり。されば佐良右衞門、お兼が美しき心に感心なして、いよ〱夫婦睦しく、下女のおいなも、お兼が心を有難く思へと、彼の譜代の婆にもいはれ、おのれも忝しと思へり。かくてあたる月に安々と女の子を生みけるに、乳母を置かせず、おいなが乳にて養ひけるに、百日ばかり經ちて乳細りけるゆゑ、乳母を置付け、さてお兼、夫に申しけるは、「最早おいなに暇を遣りたまへ。久しく使ひては、忰や嫁の手前、店の者の示しにもならず」と諫めければ、「好き樣に賴む」と夫の詞に、片付の手當とて金二十兩取らせ、手形を一札取りて、おいなを兒の鰡吉に引渡し、お兼は始て胸を晴しけり。此時隣に狂歌師ありて、

行くとて立出しに、午過ぎても歸らず、不審に思ひしに、やう〳〵立歸り、夫佐良右衞門を小座敷へ連れ行き、「私が今朝買物といひしは是なり」とて、彼の請狀を見せ、是からおいなは、あなたの妾なれば、假令孖子を生まう共、彼が身內に一言もいはせぬ此請狀、今年一年の給金も仕著せ代も此通り、おいなが兄の請取、母が承認の瓜印、十六兩でお心を安く、お寢間の伽をおさせなされませ」と女房にいはれて、穴へも這入りたく、手を摩りて禮をのべけり。お兼は些とさうも御座るまいと心には思へども、烟にも出さず、手を附けた下女のおいなを此所へ呼び、請狀を見せ、しか〴〵の由言聞かせければ、おいなはお兼へ面目なく、顏も上げず、「有難う」とばかりにて立去りければ、通ひ番頭忠八を店より呼び、「あなた、ちと彼方へ」と亭主をはづさせ、忠八に對ひしか〴〵の由を語りて、請狀も請取も見せければ、五十七の忠八膝を打ち、「是は好きお計ひ感心仕る。幸ひ三丁目の御地面に好い賣居が御座ります。彼へおいなを」「いや〳〵それは惡い。あの裾張を放して置いたら、旦那の顏の汚れる事仕兼ねぬ女。第一冗な物入もあり」「いかさま御尤」「それぢやから、矢張私が手許へ置くのぢや。腹はかりもの、胤は大事の家の血筋、最早五月ぢやから、今日直に帶を締めさせ、鐵漿も附けさせ、明日の晚には店の者を始め、殘らずへ膳を食べさせるつもり。大抵見計ひ、仕出しへ吩付けさつしやれ。さて又

貴樣が得心さへすれば、給金も仕著せ代も殘らず十六兩貴樣へ渡す。請狀も書いて來た。得心なら金と引換へ。何うぢやえ」鰡吉は十六兩と聞きてぞく〳〵嬉しく、何の分別もなく、「いやも、何がさて有難う御座ります。おいなさへ得心なら、私共は宜しう御座ります」「いやお前が得心でも、彼が叔母があるぢやないか。此方は急がぬ、相談の上で」「いえなに、私が姉で御座りますが、後で話しても好う御座ります」「母さんへは今咄さつしやれ」「お袋は耳が遠くて、咄が餘所へ聞えます」「いかさま、そんなら請狀は此通」と十六兩も渡しければ、けちな印判出して捺しけるを、供に連れたる男、「もし親方、おかみさんが此樣事をなさるのぢやなけれども、おいなどんを可愛がんなさるゆゑだ。彼の子は仕合ものだぜ」「誠に有難う御座ります。母さん、お茶が出來たか」と金を鼠の嚙つた痕のある引出しへ仕舞ひて、外へ出んとするを、お兼「私は歸りますぞえ」「それでも、お蕎麥でも上げませう。好い手打が御座ります」「いえ〳〵お止し」と立歸りぬ。さて門を立出でて、供に連れたる抱への男、「もしおかみさん、旦那が孕ませたを、十六兩ぢやァ安いもので御座ります」お兼「太郎吉、必ず人に咄すなよ」

第十二段

爰に又染付屋佐良右衛門は、妻のお兼、今朝太郎吉を供に連れ、小出しの金を持ち、物買ひに

ば、いとしく思ひぬ。それはさておき、下女おいなが宿は、其日稼ぎの肴屋、爺親は果てて、年寄の母を鰡吉といふ忰が養ふ貧しき暮しなり。今日は魚も不漁なれば、鰡吉商ひを休み、友達と將棊をさして居たる處へ、お粂は抱への男に仕著せの絆纏著せて供に連れ、下女も連れず、魚といふ字を大きく書きたる入口の障子、供に開けさせて這入りければ、鰡吉「これはお內儀樣、何と思召して、まあ〳〵此方へ。もしお前、御苦勞樣。先其所へお掛けなさいやし」と取囃すを見て、將棊さして居た男は裏口より歸りけり。鰡吉母にむかひ、「是はおいなが勤めるおかみさんだよ」と大きな聲していふは、耳が遠きゆゑなり。母は「さうか」とていろ〳〵禮をいふ。鰡吉は、客の煙草盆さへなければ、まご〳〵するをお粂、「いや構はつしやるな、貴樣にちと話があるゆゑ尋ねたのぢや。始て尋ぬるゆゑ肴でもと思へど、魚商ひゆゑ、是は心ばかり」と供に「それを」といへば、包の內より小さき盆に載せたる五百疋。其日稼ぎの鰡吉膽を潰し、母にも見せて、親子禮をいふ。さてお粂いふやう、「今日來たは外ではないが、貴樣が妹おいなが事、至極心立もよくて、私はじめ旦那の心にも叶ふゆゑ、それにつけては、彼を旦那の側に附けて置き、私の代に、夜の伽、萬事の世話をも賴みたく、それにしては請狀も妾奉公に改め、給金は一ヶ年十兩、二度の仕著せが三兩づつ、〆て一ヶ年十六兩。此事おいなは得心、此上は

證據立たぬ水掛論なり。篤と思案すべし。此事人にいふな」と堅く口を止め、少しもやきもちの匂せざりければ、お松婆、腑甲斐なき女ぢやと心に輕蔑みつゝ立去りけり。是猫は虎の心を知らざるゆゑなりけり。

第十一段

かくてお兼は其夜人なきを見て夫に向ひ、「あなた、私にお隱しなさる事が一ッ御座ります。が、憚りながら惡い御量見で御座りますぞえ」「何が」「外でもないが、いながお腹、最早目にもかゝるほどの事、この暮しで、妾一人よしやあるとも、譏る人はあるまいけれど、その約束でない下女ゆゑに、子供を始め店の者の思はくもあり、譏るには違ひなし。此樣な事は、事と術によりては、女心に差詰り、井戸、川へ浮名を流すはまゝある事。あなた、何うなさる思召で御座ります」とちつとも悋氣の色なく、眞綿で首を締められ、佐良右衛門頭搔きく、「いやもう、貴樣へも面目ない。火がとまつたと聞いてから、よしない事したと後悔して、末のをさまり思案がつかず、こなたへ相談今日明日と延びたも面目ないからぢや」「私へお任せなさるなら、あなたのお顏も汚れず、彼が爲にもなるやうに、仕方がありますが、お任せなされますか」「何卒賴む。腹の立つは堪忍して下され」と手を下げたる一言に、年來嫌でもなく連添ひたる男なれ

おてんばなれど、今年四十二のお兼上に立ちて、奥の取締よきゆゑ、店の者とふざける事など決してなし。然るにおいなが腹たゞならずとお兼目をつけしが、慥にそれとも思はざれば、夜風呂へ入りしを覗き見れば、乳房も色づき腹も違なし。さてはと思ひ、相手は店の者ならん、鐵の關をも越ゆるは此道のならひなり、八月は人減しといふて暇やるぶんの事と、心に點をかけて置きけるに、ある日亭主の留守に譜代の婆お松、お兼を小座敷へ招き聲を潛め、「あなた、いなが腹のいはく、御心がつきましたか」「さればよ、不思議ぢやから此間、湯殿の窓から覗いて見たれば、大方四月位と思はるゝ」「左樣々々。相手は誰ぢやと思召す」「おのし知つてか」「お聞きなさいまし、彼が内幕になつて、段〱尋ねて見ましたれば、旦那があなたがたを頻にすゝめて、此春湯治にお遣りなされたお留守に、度〱の事ありしゆゑか、火がとまりましたと、彼が口から申します。彼奴も憎いが、旦那も馬鹿〱しい。五十づらをさげて、なんの事で御座りませう。あんな奴だから外にもあつて、旦那に押冠せるのかも知れませぬ。早く彼奴を叩出して、旦那へ存分仰やりませ。餘りあなたを踏付にしたなされ方、私さへ腹が立ちます」とたきつけられ、たゞの女房ならば、忽ち角の十本も生えべけれど、その角を心に納め、「彼が口から、旦那と指していへば違もあるまじ。もし又外に相手があらうとも、一度でも手をつければ

あなたへ、此上とも宜しうお頼み申上ます」

第十段

お兼と佐良太郎が縁組は、前にもいふ如く、神樣が心して結び給ひし縁なれば、萬事障なくお暇も叶ひ、目出度婚禮もすみ、夫婦の中はいふも更なり、嫁姑も睦ましく、嫁が來てから家内の上下いよ〳〵和熟しければ、彼の隱居、おれが見立は何うぢやと髭を撫でけり。これ全くお兼が才ありて、内端で志よきゆゑなり。斯てお兼十九の年、男の子をまうけたれば、親達の悅、初幟の賑、めでたし〳〵とぞ祝ひける。さて婚禮してより二十五年夢の如く經つ中に、門徒宗なれば二親も極樂詣をなし、佐良太郎今は佐良右衛門とて四十七、お兼は四十二、忰は二十八、嫁もありて家内睦しく、家富み榮えけり。さて爰に一ッの噺あり、心して讀まば、女房形氣の手本とは、はゞかりの夏櫻、花は言葉になけれども、悋氣の角を生して、心の鬼おのれが身を責め、やきもちをやきて、亭主のあらすそを人に知らするは、大方の女心、此お兼はそんな女でなきこと左のごとし。

そも〳〵此染付屋は大きな暮しするゆゑ、町人ながらも下女五人あり。その中に去年の三月より召使ふおいなとて、今年十八、顏は尋常なれど、色白く愛嬌ありて、男の好く風なり。性質

さて近江屋にては、家内相談したる處、いづれも遣るが宜からうに極め、さるにてもお兼が心をとて、宿下の御禮かた〴〵、土産物持たせてあがり、娘の部屋へ通り、いろ〳〵ありて、さてしか〴〵の由咄しければ、お兼しばらく考へていふやう、「私は十二の年、十年の御約束で上りまして、やう〳〵すこし御役に立ちまするは、十五から今年まで僅三年。御年もまだ五年ござります。それを私の勝手にまかせ、好い嫁入の口があるとて、それとは言はず嘘ついて、お暇戴くは、私はどうも嫌で御座ります。御年の明くは二十一で御座りますから、御禮奉公しても二十二、嫁入するに遲くはあるまいぢや御座りませぬか」と尤なる言分に、母は當が違ひ、しばし答もなかりけり。此時お兼よりは上を勤むる相部屋の年増の女中、母が當惑の體を見て氣の毒に思ひ、「お兼、お前のいふのは至極尤ぢやが、好い口ならば夫を外さず、早く片付けて安堵したいは誰しも同じ親心、よしやお前がお暇いたゞいたとて、御差支にもならず。好い口なら嫁入して、親達へ安堵さすが孝行ぢやぞえ。しかしお兼、その聟さんが嫌のかえ」母は側より、「なにお前さん、餘程好い男で御座ります。此間お前さん、餘所で落合ひまして、それからの相談で御座ります」女中「お兼、いやでなくば行きなさい。御年の内お暇願うて片付いたは、幾人もありました」お兼考へ、「左樣なら御母さん、いかやうとも」「あい〳〵。もし

れば、隱居夫婦折よしと悦び、庭より馳走して居る座敷へ通し、母とお兼へ引合せるも、隱居夫婦は見合の心なれど、佐良太郎は更に知らず。お兼は素よりなり。然れども十七の好い娘、二十二の好い息子、心の内には如何に思ふやらむ知るべからず。かくてお兼は明日はお屋敷へ上る日なれば、宿にも種々用ありとて、杯を納めさせ、數々禮を述べて立歸りぬ。かくて隱居、佐良太郎に對ひ、「今の娘の父親は近江屋九四右衞門とて、笄町の小間物屋、忰には嫁もあり、妹お兼はお石が生花の弟子なりしが、十二の年桃井樣へお國付の御奉公に出で、此春五年ぶりにて歸りたる宿下なり。彼の娘ならば私等ふたり請合ぢやが、妻に持つ心はないか」といひければ、佐良太郎につこり打笑み、「いかやうとも宜敷」といふ顏付、嫌でないは色に現れければ、その明る日隱居が妻お石、染付屋へ到り、佐良太郎が兩親へ云々のよし話しければ、大きに喜び、これも萬事賴む、少しも早く取極めて安堵したいとの事ゆゑ、又その明る日、お石近江屋へいたり、お兼が母へ悉しく語りければ、今日は宿も留守なれば、いづれ後より御返事と、あたりまへの詞をきゝてお石、「憚りながらお支度は有の儘、少しも望みませぬ。只彼の子の御心立が所望で御座ります」と、言葉を殘して歸りけり。

第九段

い。家名が酢屋ぢや。酢屋の番頭酒屋の後家」「いかさま、そりや好かろ」と結び給ふ。神の結び給ふは、皆親の許す緣なれど、私に結ぶは神のしろしめさゞるゆゑ、親も許さぬいたづら結なり。されば是を惡緣といふ。惡緣募れば刃に伏して浮名を流し、又は身を流す事もあり、愼むべし恐るべし。と、彼の六十六部が物語りぬ。

第　八　段

上の卷にいひつる染付屋の息子佐良太郎が緣も神の結び給ひけん、彼の隱居夫婦が噂したる近江屋の娘お粂、此度桃井樣のお國よりお姫樣のお供して歸り、五年ぶりの宿下とて、かの隱居方へ連れて來りければ、彼なら嫁に請合と噂したる娘なれば、隱居夫婦大きに喜び、「これは珍らしや、昨晩も此子の噂、やれ〳〵美しう大きくお成りなさんした。御兩親も嘸御悅び、お前も五年振でお嬉しがろ」といひつゝ嫁にの心あれば、お粂が挨拶の顏容、目を止めて見るに、一つも申分なければ、もはや嫁にした心にて馳走なし、土産物の禮、お國から音信れた文の禮いひながらも、お粂が紫縮緬の振袖の紋所まで氣を付けて見るは、嫁にの心あるゆゑなり。凡世の中の緣組の相談に、萬事都合よく調ふは、かの出雲にて氏神樣、能々念を入れて結び給ひしゆゑなり。されば此お粂が事も都合よくて、お粂親子へ馳走の肴、佐良太郎圖らず來りけ

しいとて、神々爭ひて結びつけんとするを、辨天樣は、炭團の樣な男に玉の樣な娘は可愛相ぢやと、逃げて歩き給ふ。此時彼の札を四五枚落し給ふを、此所彼所より馳出で拾取りて結びつける。是卽ち相撲の下女に、武藏の旦那が手をつけ、安々と產落して、終には本妻になるは、右の拾札の緣なり。さて又段々結合はせて後、二三枚殘りたる札、いかにしても結ばるゝ緣なければ、氏神も厭果て給ひ、まゝよ、是は又來年の事にせんと、札箱へ打込んで置き給ふ。廻合惡く、來年も亦斯の如し。是緣遠きといはるゝ女なり。又は神樣札を提けて、神込の中を彼方此方歩き給ふ時、女の札は小さきゆゑ、物に絡みなどして無くなる事あり。神々還り給ひて後、掃除する宮仕も心付かず、紙屑と共に掃寄せて籠に入れ置く。是卽ち一生御奉公して男を持たず、或は尼寺にて腰屈むは、右の理由なり。「さあ〳〵私が氏子に、玻璃屋の娘美しき事請合、其所らに好い嫁の口は無いかな。年は十八、名はお春、おとなしい事請合、玻璃屋でも鋳たけは入らぬぞや。どうぢやな、口はあるまいかな」と聞き歩き給ふ。「おつとある〳〵、綿屋の息子は何うぢや」「いや夫は幸ひ。玻璃屋に綿屋は妙ぢや」と結び給ふ。又外の氏神「亭主の死跡酒屋の後家、年は三十一、まだ若くて不便なゆゑ結んでやるのぢや。好い男山の聟はないかな」「おい〳〵、あるある〳〵、生藥屋の番頭はどうぢや」「酒屋に生藥屋はちと釣合はぬな」「否、さうでな

教草女房形氣　三編下之巻

第七段

十月は神無月とて、日本國中八百萬の神々、出雲の大社へ集り給ふ。何をなさるゝかと思ひしに、六十六部が大社へ通夜をしたる談を聞けば、神々寄合ひ、其年五穀の吉凶を始めとし、罸利生の御相談、さて又氏子の緣結をしたまふ。伊勢の御神は八百萬の御神の司ゆゑ、此所へは出まし給はざるなり。彼の緣結をなさるゝを見れば、男の名を書きて町所をも記し、又女もさの如し。男の札は大きく女の札は小さし。大小にて陰陽を分つ。一ツにはワヤ〳〵取込の中なれば、男と女と見易き爲とかや。神の中にも疫病神、風の神、疱瘡神、貧乏神などは、塵紙、落し紙の類なれば、大社の緣の下に集りて、人に取付く相談を爲すなり。さて神達は、武藏は武藏、駿河は駿河と席を分け、六十六箇所へ舉り集り給ひ、彼の札につけたる紐を手に持ち給ひて、似合はしき緣を見立てて互に札を取換へて結付け給ふ。此時しつかりと堅く結付け給へば、夫婦偕白髮まで離るゝ事なけれども、御神酒など過し給ひ、とろんこなどの時、ざつと結び給ひし緣は、空解けして、子まである中を別るゝ事あり。神の中にも辨天樣の氏子の女は美

内端、第一親孝行」「左樣さ、私の處へもお國から度々しをらしく文をよこしますが、手も年に合せては好く書きます」「己も見たよ。あれなら請合ぢやが、里がちと釣合はぬと言うであろ」「何方で」「佐叓右衛門が」「そりや貴方、晝の話をなされまし」「いかさま、併し肝心の玉が百里先に居る」「否々、今年は歸らるゝも知れぬと、正月の文にいうてよこしました」と噂する。

くなれば、同じ處へ往くぞかし。假の浮世の宗旨を望むは、雜行ぢやあるまいか。里は法華にもあれ、貰ひし嫁は其日から門徒なり、早く角隱こしらへて遣るべし。なんとおちよく、理屈をいへば斯んなものではないか」「左樣で厶ります」「そこで私へ相談なら、志の好い馬鹿でない嫁でだにあらば善として尋ね給へ。綸子屋は今いうた通りぢやから、早く噓吐の伊勢七へ斷り給へ」「左樣致しませう」隱居の妻「何處にか好い緣が結んでありませう。何にしても彼の子が溫柔いからお仕合だ」「左樣さ」と話の中へ下女膳を持つて來る。「おや〳〵、まだお腹は好う厶ります」「遠方だから上りまし」「左樣なら戴きます。もし伯父さん、貴方も上りませんか」「あい、お持たせを食べませう」と隔てぬ中の親類は賴母しきものなり。此後よき嫁ある事、次にしるす。

第六段

斯て其夜隱居黑石は、燈火の下に本を讀んで居る、妻のお石は針仕事して居たりしが、「もし近江屋の娘は今年幾歲だらうね」「おのしが花を敎へたお兼か」「左樣さ」「彼は桃井若狹之助樣のお國附へ往つて四五年も經つだらう、大方今年は十五か六だらう」「彼娘が家に居ると、惣太郎の嫁に好いぢやァござんせんか」隱居眼鏡を外し、「いかさま、此方へ稽古に來る中でも、怜悧で

き事炭團に目鼻なりしかど、才德備りたるゆゑ、卑しき身より妃となりしは、國王も賢人なりしゆゑなり。此女妃となりしより、屢〻王を諫めて、國能く治まりしゆゑ、其頃世の亂れたる中に、衞の國へは戰をしかける國なかりしとなり。玄宗が楊貴妃にて國亡びたるとは裏腹なり。又日の本にては神功皇后は人の知る處、崇神天皇の御時、もゝそ姬命、天皇を諫めて謀反せんとする、たけはにやすひこ夫婦を討たせ給ひしも、智惠かしこくまし〱たる故なり。是等の故事に附けても、顏よりは、才ありて心優しき嫁をこそ望むべけれ。扨又支度を望むは、貰ひし方にて金を吝む故なり。如何となれば、裸で貰へば著せてやらねばならず、道具もそれ〲に製へねばならず、然るを强飯の重箱も袱紗も、嫁の持ち來りしを使へば心安し、こゝをもて支度を望むなり。其心いやしといふべし。家さへ讓る嫁なり、著せもし製へもすべし。又里を望むは名聞なり。里が善く、支度が善く、標致がよければ、嫁も何ぞの時は鼻にかけ、里でも誇る心ありて、親み薄くなるの因なり。鼻にもかけず誇らざるは君子なり。君子は少く小人は多し。されば支度も里も標致も少し次なれば、里も嫁も、一目も二目も置く心になるゆゑ、親み厚し。是家繁昌の基なり。扨又宗旨を望むは、門徒に限る事なれど、門徒の敎には、ざふぎやうを誡め給ふ。同じ宗旨を望むも雜行なり。門徒の極樂とて別にはなし、禪も法華も眼が白

越後へ追こくりしは、先月の事なりしと幸介が話、これ程の事を彼の伊勢七め、知らぬ事はあるまいに、慶庵口とはいひながら、餘り薄情な奴ではないか」おちよく是を聞いて、「やれ〳〵人は見掛によらぬもの、眞におぼこな娘で御座りましたに、大きないたづら者」「さればよ、幸介が話を聞かねば、己もよからんといふ縁組ぢや」隱居の妻傍より、「眞に惜い娘、肝心の心立が惡くては、男狂も一度では止みますまい。親達の苦勞思ひやられます」おちよく「左樣さね」隱居「およそ嫁を尋ぬるに、第一に顔、第二に里、第三に支度、是誰しも望む處なり。されど爰に一つの話あり。これ茶を一つくれ」かくて隱居中古渡の湯呑にて茶を呑みて下に置き、桑の釣瓶の煙草盆に挾んでおく上田の紙にてちんと鼻かみて塵壺へ入れ、「さておちよく、聞き給へ。嫖致の好きを望むは、其夫色を好むゆゑなり。又母は嫁を始めて連歩く時、三平二滿にては外聞あしゝと思ふべけれど、見せる程見せるは十日ばかりの間なり。さて又その夫たるものゝ、如何程美しき妻を持ちたりとも、心愚にて目先が利かず、客に酒一ツ呑ますするにも、もしへ〳〵と、夫を度々勝手へ呼ぶやうなる氣轉の利かざる妻を持つは、其人一代幾らの損あるか知るべからず。されど妻が夫より才が優れば、惡くすると夫を尻に敷くなり。夫の馬鹿を人にかくし、陰にて諫めるは賢女といふべし。昔唐土の衛の國に、しやうりしゆんといふ女、顔の醜

惹ておちよく、隱居夫婦に對ひ、今日參りしは斯樣々〱と、花見に娘を見た事を始とし、伊勢七が話をも精しく語りけり。此時隱居は返辭もなく、思案の態なりければ、おちよく、「里はよし、嫁はよし、宗旨も同じ門徒なれば、私共は丁度好い緣と思ひますが、貴方へもお話し申した上で、伊勢七へ頼み、先方へ言入れます積で御座ります」隱居頭を振り、「いや〱此相談止めさつしやれ」「へヱ何故で御座ります」「されば其譯は、綸子屋の番頭幸介といふもの、二本差すが好なりし故、今では馬乘袴も穿いて歩く身となりしが、碁が好で儕が弟子、此間久しぶりで來たから、何故見えなんだと尋ねたれば、いや此間中はとんだ事にかゝりあひ、大きに暇を費しましたといひし其談に、其方の嫁に欲しがる綸子屋の娘、店の若い者と淫さして、若い者にすゝめられ、小出の金を懷中にかくし、二人逃る處を乳母が見付け、其夜若い者は宿へ預け、娘は明る日奉公して居る姉へ預け、さて彼の番頭を勤めし幸介は口も利き、今では二本さすゆゑ、かの若い者の手を切る掛合を頼まれ、とゞの結局、金と一札と引替に事は濟みしが、濟まぬは娘、何うして音信したやら、彼の野郞二三度邸へ來たゆゑ、姉も身分にかゝはるとて妹を返したゆゑ、きかぬ氣の幸介、掛合行屆かざるやうにて、元の主人へ言譯なく、一札をも反故にしたる仕方、武士が立たぬゆゑ、野郞を手に掛けると威したゆゑ、終には野郞を在所の

第五段

此染付屋佐良右衞門は、此所へ聟に來りし人にて、二ツ上なる兄は親の跡を續ぎて、椀屋善兵衞とて、有得なる塗物の大店なり。さて今は忰に家督を讓り頭を圓め、高羽といふ所に持地面ありしに隱居所をしつらへ、夫婦に下女二人、下男一人使ふ樂隱居なり。名をこくせきといふ。こくせきとは黑石と書く文字なり。此名をつけしは、若き時より碁が好にて、今は初段を打ち、茶の湯、俳諧、少しは學問もあり、談話も面白き老人ゆゑ、此鎌倉の歷々へもお出入するが多く、碁、茶、俳諧のお相手、內にも會日ありて弟子もあるなり。されど是で口を濡さぬ藝ゆゑ、一番打つて下されと尋ねて來ても、嫌な奴と思へば逢ひもせず、氣隨に暮しても不足なき樂隱居と人も羨みけり。さて目の寄る所へは玉の譬、妻のお石年は五十一二、琴三味線は夫で御奉公勤めた女、おまけに生花は遠州流の皆傳、これも慰みに、女の子の弟子は取るなり。さて或日染付屋の妻おちよく、今朝買つたと見ゆる新しき交肴一籠持たせ來りければ、親しき一家の事なれば、義理合の挨拶はなく、隱居が妻、「此所までは餘程の道、丁度風呂がたててある」「そんなら入りましよ」と隔てぬ中の間、隱居は碁を打つて居たりしが、「只今はお肴を」「はい〳〵、貴方御免なさいまし」と客に挨拶して風呂へ行く。此間に持たせたる肴を料理して饗應しけり。

り、親元を尋ねければ、伊勢七心の中に、いかさま似合しき緣なり、娘に少し罅たけは入しが、瀨戸物屋の嫁に少しの罅たけは、白臘磨込めば知れまじ、此仲人をなさば、五月まへの十兩は心安しと、酒も話もぐつと呑込み、「まづ先樣は染川町の糶呉服にて、持地面の土藏作、綸子屋絹右衞門とて堅固な身代、姉樣は去る方にお側勤、あなたの目に留つたは今年十七、お糸さんとて怜悧なお子さん、暫く姉さんの所へ部屋子に往つて御座つた處が、標致はよし、藝は琴三味線踊下方、手も書き、怜悧で內端ゆゑ、お小姓になされたいとありしに、お糸さんの言はるゝには、姉と妹と同じ所に奉公しては、もしやの事ありし時、互に惡いとて、宿へ下られた程の怜悧者、嫁の口を探さるゝ所、願ふたり叶ふたり」「宗旨はえ」「此方と同じ御門徒、阿彌陀樣の御引合、早速綸子屋へ話したら、嘸悅ばれませう。これおさんどん、曆持つてござれ」と一人呑込むをおちよく、「先此方でも篤と相談の上で、改めてお賴み申しませう。夫まではまづ先方へは」「いかさま、併し私が申す所、慶庵口では御座りません。正直正銘掛直なし。ハ、〳〵ハ、おさんどん、お銚子が少し微溫い、もそつと熱くしたい。我らは都の生れ、貴樣は大方上總であらう」「存じません」と立つて行く。おちよくは、呑ますれば方圖がないゆゑ、好い加減に杯を納めければ、伊勢七は呑足らず、酒中位にて歸りけり。

を袖に押拭へば、伊勢七一言もなかりけり。此伊勢七隨分如才なく口前もよく、店へかよりし人賣らずに歸した事なく、商賣上手ゆゑ華客も出來れど、兎角酒を好み、呑つづけると怠け出して後先を忘れ、しかのみならず常は猫の樣なれど、大醉すれば虎の如く、誰にでも喰つてかかる故、酒で華客をしくじりしも度々なり。己も是は惡いと知りつゝ、酒のやめられざるは、前の世には狩人にて、猩々を鐵砲にて打殺したる報なるべし。惹る伊勢七ゆゑ、此節句前に、染付屋の拂十五兩を五兩入れて、殘金は五月まへと言譯したゆゑ、今日も向ふの用に呼付らるゝなり。前にも言ひし如く、稼ぐに錢の入る事なし、遊ぶに錢をつかはざる事なし。遊ぶ中にも酒ほど面白きものはなし。されど酒は百藥の長とは些とづつ呑めとの誡、酒は量なし亂に及ばずとは、呑む程を幾許とは其人によりて量られぬものなれど、己は此位と量りて、どろんこにはなるなと、聖人の意見なり。大酒は其身と身代を腐らす毒水なり、おそるべし〳〵。

第四段

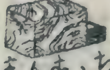
染付屋の妻おちよくは、昨日亞田川にて嫁を見付け、伊勢七に約束したる事共を、夫佐良右衛門に話しければ、大きに悦び、御主から奮と先方を伊勢七に聞けといひしゆゑ、心待しける所へ伊勢七來りければ、先酒を出して待遇し、さて昨日宿下の妹らしき娘、嫁に欲しき由をかた


いせ七

たとひでんじ、まことに十七八のせがれは
兄ゝ、とはいへ一やう人のせ中く二歳の
ひかりと母へかゝりつきちゝを
さがすむすこのかはいさよびて
つま高のしらせ七出のうちでも
女房のむしの「ねたみ」のかみちで
そのつけやきかゝさんにあは
ふんぐるだらうとなに用があると
いつくかぶさせても用があるか
うらあつそくらぞとのかは
つまへそのあのまゝはせ
みりちよつとまあ下さい
おのぞみさの「ろんご」やなんぞ
ちかつておく人さま、ちつとの
おうにおとゝのゆへかぎりで
みせ、それでだきつくしてみまするのゝ
おごうまんぎやのおやどまりがみやげを
りつてよくおきえるのやれんときのこのともも
せめて「ほ」にてもをいつはりませうと
のぞみさるからあくよくさきへ
のむにはあつてゐる水のぞの
あやうくなつてめいてゝでもあらう
とかけいゝ女房の身として
そうとふりのひよりなさらぬ人さへ
ものけふれはそれをさてちやまるのちらくも



㊁ 年ごろとむりなさとめられ始めてから
「よふまあ、さぞくふそんなうそがでてまぁ
ねく五ツとうつ日なき
やふくいとはきへんおかたさまで
やまいことおつくさうのへんし
のあたまをおかみさん
へとおさきるほどうつて
あぢいとゝめを目に
見んなさそうやたれ
のみをみせるな
松ふ二人吉
おまへのこりを
おみせと
おくつたし
ひとりの
きくずを
ちと
まる
あて



ふくさまんせ
ところも
ふかり目に
うるきうるぞ

まあ下にお居でなさい」「なんだ」「昨夜申したかつたが、酒に酔つてお歸んなすつたから、言はふものなら二言目には握拳はお前の癖、夫で默つて居ましたが、昨日の朝綸子屋のお宿下が土産を持つて寄んなさつた時、花見と聞いて頼みもせぬに、私もお供を致しませうといひなさるから、あゝ止しなされば好いに、呑む口は知つて居る、水入らずの親子三人、却て迷惑であらうとは思ひましたが、女房の身として夫に對ひ、止しなさいとは人聞もわろし、女連をとめては悋氣らしくも聞えるが嫌さに、態々葛籠の底から嗜みの著物まで出して、難有うを八百ほどいひましたに、何の難有い事があろ。寢ずに待つのは妾ばかり。花も盛の人群集、美しい女連、若しやばか者がひやかしなどしたを、お前が一杯機嫌で喧嘩でもと案じられたも、子なかなした中ぢやゆゑ。昨夜の歸りは恰度八ツ、何で手間が取れたのぢやえ」「何さ、女連ゆゑ送屆けねばならず、處で親類の人が宿下の待受とて、落語家を連れて來て、聽者が少くては困ると無理に留められ、酒は出るし」「好うまあさそくに左様な嘘が出ますねへ。五ツを打つ故長松を聞かせに遣つたら、夕方觀音様でお別れ申しましたとおかみさんの返辭。お前の身代をお前が減しなさるは御勝手次第と、他所目に見るはそりや他人の事、店は長松と二郎吉、お前の留守には、店と奥、わたしひとりの氣配を、ちつとは推量して下さんせ」と聲も曇り目も潤み、涙

奥へも心安く來る男ゆゑ、おちよく「おや、お前一人かへ」「いゑ今日はお宿下りの宰領に頼まれ、舟で一杯やつた處が、この提烟草入を舟へ忘れ、取りに行きました」「宿下りといひなさるは、紫縮緬のお方、阿母さんと、一人はたしか妹らしい」「左樣々々、餘程行きましたか」「いゑ〳〵」「はい左樣なら」と駈行くを呼止め、「もし、お前に些と聞きたい事があるから、明日來ては下さんせぬか」「はい〳〵、丁度お店にも用が御座ります」と急ぎ行く。おちよくがこの伊勢七を呼びつけるは、此三月の節句前にも、十五兩の處へ五兩入れて置くなど、日頃の恩ある故なり。されば黄なる物の光ほど有難きものなし。鈍間も金の光にて怜悧に見え、持參金にては痘痕も消ゆるなり。かく貴き金を、殖すも減すも心一ツにあり。その心といふは、稼ぐと遊ぶとなり。稼ぐには錢をつかふ事なし、遊ぶに錢の要らざる事なし、恐るべし愼むべし。

第三段

凭て明る朝、伊勢七昨日の約束ゆゑ、染付屋へ往かんとて、平帶著へ羽織引掛け立出んとす。今年十歳の悴は、手習の師匠に出行く。二歳の妹、母へ取付き乳を探すを、子守を呼びて連行かす。伊勢七立ちながら女房にむかひ、「昨日道で染付屋のかみさんに逢ひ、何だか頼みたい用があると言つたが、店にも用があるから行つて來るぞ」といふに、妻は其挨拶はせず、「もし鳥渡、

好み、仕度を好み、同じ宗旨の門徒を好むゆゑ、三拍子の上よけいの好あるから、佐良太郎今年二十二歳、今もつて嫁がなきゆゑ、男の事なり、もしや悪所へはまりはせまいかと、案じるにつけても嫁が欲しく、さればとて、舌切雀お宿は何處ぢやと、たづねても歩かれず、母は殊更心を惱ましけり。

第二段

佐良太郎が母は今年四十五、おちよくとて、今日は有難き御法談聽きたる歸り、天氣はよし、花も盛と聞きて、あすだ川の花見、群集の中に、宿下りと見ゆる女中、母と妹、下女ふたり、年おいなる手代に小僧、見たところが、好き暮しする町人にこそあらめと思ひつゝ、立止りて見れば、先でも櫻の下に立ちて、親子三人何やらいひながら、連を待つ風情、宿下りと見ゆる姉は、少し顔劣りて見ゆれど、妹と見ゆるは、姉にははるか優りて美しく、佐良太郎が母おちよく、嫁を尋ぬる心には、姉は二十二三、年が釣合はず、妹は丁度註文の十六七、姿色も彼の位なら申分なく、何處の人やらん、小僧に所を聞かせたく思へども、さすが女なれば、はぢらふうちに行過ぎけり。おちよくは本意なけれど、ふりかへりつゝ歸りあし、半丁ばかりにて、「おかみさんと」聲かけしは、伊勢七とて、瀬戸物の小賣する亭主、いつも瀬戸物の買出しにて、

教草女房形氣　三編上之巻

第一段

おもひやれ親の心のわりなさは唐も大和もかはら撫子

とは、子に教へたる京傳翁が歌なり。産落して、ぎやつと啼く一聲にかはゆくなり、日を重ね月を越え、笑顏見て笑はざる親はなく、這へば立つを待ち、立てば此所まで御座れと、四十面さげた立派な男、手を拍ちつゝにこ〳〵するも、子ゆゑに馬鹿を盡す夜の鶴、千歳を壽く食初に、わが年の寄るを知らず。七ツ八ツより、男女それ〳〵の藝をしつけ、かはゆい〳〵で育てたる十一二の女の子は、御奉公に出さんと、母の氣を揉む事大方ならず、やれ嬉しやとお首尾して、はじめて膝を放しても、人中を案じて苦勞は絶えず。男の子はやう〳〵元服さすれば、他所の交際を案じ、歸りが遲ければ連は誰ぢやと聞歩かせ、これ皆中位なる町人の事ぞかし。息子穩順しければ、氣の反れぬうちとて嫁を搜ず、親の心の遣瀬なさ、例を爰に、今は昔、鎌倉の賑華ふ所に、瀬戸物を手びろく商ふ染付屋佐良右衞門とて、有得なるくらし、一人息子の佐良太郎、心立も穩順しく、男振も好すぎるくらゐ、元服も過ぎて後、嫁を尋ねしに、姿色を好み、里を

王勃は、心に織りて袖を通し、筆に耕して食ひしとかや。されば湖上の笠翁が、十種九種の曲も、書肆のあつらへ物にやありけんかし。おのれ過ちて足を稗史の草澤に踏込み、穢るゝ名の袂を汚す事、あゝ言ふはくだなれど、今更なんと洗濯も、ならずの森の杜鵑、をちかへり鳴く三編の女房形氣、りんきのつのぐむ折からに、いかさまさうぢやなアの教にもがなとて、王勃にはあらで、おほつかなき筆をぞ採りぬる。

弘化三年丙午仲夏稿本、同仲秋上梓、丁未正月の新板とす

山東庵京山

二人の姿を。心得たか」と仰にはつと兩人を、つれてお次へ下りけり。かくて尼君、昔召されたる色の小袖を、二人に賜りければ、化粧も美しく、萎れし花もいきかへる、惠の露は身に染みて、中もよし野の七重八重、打竝びて、再び御目通へ出でければ、尼君よろこび給ひ、渡に仰せて、浪右衛門、琴次郎をも召されければ、ふたりは何事やらんと、身の上を案じながら、呼ばれし所へ出でにけり。さて渡は、兩人來りしよし、尼君へ申上げければ、「今日はゆるすゆゑ、目通へ連來れ」と仰に、おづ〳〵出でければ、尼君「いかに浪右衛門、二人の妻に別れ侘しからん。また琴次郎は、いまだ妻もなきよし。妾媒介して妻をえさせん。連歸りて今宵婚禮せよ」と浪右衛門へはおりつ、琴次郎へはお筆を賜りければ、四人は更なり數多の人々も、尼君の情を感じ、其夜目出たく婚禮をなしければ、琴次郎、尼君のはからひにて、浪右衛門の同役となり、程なく兩人とも、同じ月に帶を祝ひ、男子をまうけ、めでたき春を迎へけり。めでたし〳〵〳〵。

を紙に包み、渡方へ至り、しか〴〵のよし物語りけるに、この落著渡も思ひつかず、兎も角も、尼君のお指圖を伺はんとて、渡より申上げければ、筆を召せとて召されけり。かくて尼君、お筆が志を褒め給ひけるに、お筆申しけるは、「かくなりし上は、何卒御佛間の御奉公遠めたし」と願ひけり。かゝる折しもお次にて、物騒しきを尋ね給へば、局芳川、黒髪を持來り、「りつ事、筆に義理立たずとて、斯樣に髪を切り候」と申上げければ、尼君兎角の應答もなく、暫し御思案の體なりしが、おりつをも召されて、のたまひけるは、「いかさま、筆に義理を立てられ、それを他日には見られまじ。姿をかへしは、左樣あるべき事なれども、いまだ思案が若し。如何となれば、浪右衛門が身にとり、先妻と後の妻と、義理くらべに髪を切られては、男を捨てて熨斗目の袖を黒染にかへねばなるまじ。其身ばかりの義理を思ひて、夫の迷惑を思ひはからざるは、鹿を追ふ獵師は山を見ざるの譬なり。さればとて、切りたる黒髪せん術なし」と尼君の詞に、ふたりははじめて目が覺め、何といふべきやうもなく〳〵、さし俯きて居たりけり。尼君また仰せけるは、「二人をはじめ皆の者も、あれあの鉢植を見よ。桃へ櫻の接木をなせば、花も早く開くぞかし。此道理にならひて、筆が切りたる髪を、りつが髢となして接合はせ、りつが切りたる髪を、筆が髢となして、二人に髪を結はすれば、元の姿に接穗の花嫁ぢや。こりや芳川、

けて話しけり。斯くて浪右衛門我家へ歸りけるに、後の妻お筆見えざるゆゑ、大小袴など手づから取納めたる頃、やう〳〵お筆納戸より立出で、目に涙を含みつゝ、「これ此方の人、わしや里へ歸ります。去狀書いて下さんせ」浪右衛門打驚き、「其方は氣でも違うたか。氣色を變へたるその顔つき、何うした譯ぞ」「氣も違はひで何とせう。本木に優る末木なし、燃杌には火がつきやすい、と世のたとへ、お前に操を立ぬきしおりつどの、尼君樣が連歸り、不義の疑晴れたるよし、今さる人に聞きました。私が邪魔なは知れた事、あのゝものゝに假托けて、追出されぬそのうちに、私から男に暇をやるのぢや」「そりや惡い合點。さうした譯ぢや更々ないぞ」「いえいえ、結局の果は毒害か、締殺さるゝか、命が惜しい。去狀書いて下され。人でなしめ」と睨付ければ、「無禮の一言ゆるさぬぞ」「こりやをかしい。口と心は裏表、去狀書くは嬉しかろ」「わりや天魔が魅れたな」と襟首摑んで引伏せければ、髻より切りたる黒髪、手に取上げて喫驚仰天、「こりや何うぢや」お筆涙の顔を上げ、「その黒髪はおりつどのへ進ぜます。尼となりたる私を、とても妻には持たれまい。去狀書いて下さんせ」と涙を袖に包みつゝ、納戸の内へ入りにけり。浪右衛門は茫然と、途方にくれて居たりしに、下女來り、「御新造樣、里へ行くとて、頭巾かぶりて出で給ひし」と聞きて、浪右衛門さま〲〵思案しけるが、心に落ちざるゆゑ、黒髪

を立てやらんと、渡に仰せて、彼の額の寫を一ッの證據となし、有馬にての事どもを、浪右衞門へ申聞かせ、不義にあらざる由明白にしらすべしと言ひつけられければ、直樣浪右衞門を呼つけ、ありし事ども精しく語り、額の寫をも見せければ、浪右衞門大きに恥入りけるが、いひけるやう、「全く某が粗忽にもあらず、彼等をたしかの不義といひしは、重役の横島眞鴈殿なり。今おもへば、わが妻に意恨ありて、跡方もなき虚事をいひしならん。りつが心不便とは思へども、尼君のお留守に、後の妻を迎へし某、今更如何ともせん術なし。さりながら、りつが貞心、はて何としたものであらう」と溜息つけば棚橋渡、「これ浪右衞門、お身が疑を晴らし、不義と思ひしは誤なりしとさへ言はるれば、おりつは更なり峰松琴次郎も、不義の惡名を雪ぎ、歸參の事も適ふべし」「左樣あらば拙者より、貴殿へ謝罪の一札を」「いや〳〵、それには及ばぬ。お身が疑晴れし事を、おりつに聞かせて悅ばせ、尼君へも申上げん」「しからばよろしくお賴み申す。返す〳〵も、後の妻さへ無くんば、おりつを歸さんものを、殘念至極」と浪右衞門が詞の始終を、此座敷の庭に、子を遊せて居たる乳母、篤と聞きしが、この乳母、浪右衞門が後の妻お筆と心安きゆゑ、すぐさま浪右衞門が此所に居るを幸ひに、お筆が方へ至り、今かやう〳〵の話を聞きたり、用心なされ。惡くしたら去られるであらん」と尾に尾をつ

美しく著飾りたる中へ、裾には綿も見ゆる太織縞恥かしけれど、はるか下りて平伏も、恐入りたる樣なり。尼君「めづらしやりつ、渡より具に聞きつるに、尼君「近うまゐれ」の御詞に、おづ〳〵進みければ、尼君「めづらしやりつ、渡より具に聞きつるに、根無事の浮名を受け、浮萍の所定めず、誘ふ中にも操を破らざる心、感心なり。斯くありてこそ、妾が側にて使ひたるしるしもあれ。されば妾も、人に面を起すぞかし。其方が身の上は、館へ連歸りて、兎も角も計ひ遣すべし。こりや渡、琴次郎も連來りしよし、彼は其方に預けるまゝ、これも連歸るべし。歸參の事もはからひやらん」と有難き仰に、お糸は忝くて、涙に袖をしぼりけり。

第七段

それはさておき、おりつが以前の夫柵浪右衛門は、おりつを全くの不義と思ひ、打漏したるゆゑ、女敵打にも出でたく思ひしが、能く思へば、疑はしき事を一目見たるのみにて、ほかに確なる證據なければ、思ひ止まり、獨身ぐらしにてありけるに、この度尼君御留守にて、閑なるを幸ひ、人の勸めに任せ、同じ家中なる物書の娘お筆とて、他所の屋敷に廿七まで奉公したるを、媒介ありて貰受け、中も睦しく暮しけり。さて尼君御歸りありて、此事を聞き給ひ、おりつが不仕合を憐み給ひ、まづ何とはなしに、おりつは奥へ置き給ひ、せめてはおりつが志

所にありしその譯は、此度尼君此所へ御入ありて、かの藥師の額を御覧じて、歌は松尾が筆と見極め給ひ、歌の心を思遣れば、彼が不義の惡名受けしは仔細あらん、この額此所にあるからは、おりつ此所に居るべし、尋ね見よと、某仰を受けて、尋ねしかど更に知れず。然るに尼君のたまふは、妾此所へ來たゆゑ、影をかくしたるもはかり難し、後へ殘りて詮議せよと、尼君の御推量に違はず、この程其方を見かけしゆゑ、これなる金倉有右衛門は、上京の折から知る人なりしを幸ひに、斯樣〳〵計ひ給へと、妾奉公と僞りしも、其方が心底を試さんため。今の物語を聞けば、二人が心底感心せり。尼君はこれより五里の在、功德寺といふ尼寺に御逗留あれば、兩人とも彼所へ伴ひ、事の由を申上げなば、おりつ、今の名はお糸、再び浪右衛門が妻となり、峰松琴次郎、今の名は二郎吉も、歸參の叶はん事あるべし。兎も角も彼の尼寺へ連行かん」と聞きて二人は低頭平身なし、かず〳〵禮を述べ、その夜、宿を片づけ、身の廻をも調へ、あくる朝、渡に隨ひ尼寺へ到りけり。

第六段

渡ふたりを伴れて尼寺へ到り、しか〴〵の由つぶさに申上げければ、尼君おりつが心不便におぼし給ひ、りつを召せとありけるに、おりつはお局をはじめ、以前朋輩なりし女中もありて、

方へ後妻の妻となり、浪右衛門と拙者は、同じ尼君の附人、長屋も近ければ、拙者朝夕浪右衛門方へ立入りしに、ある時、浪右衛門方の留守居に頼まれ、浴後の肌寒きに、浪右衛門が脱ぎすてたる、紋附の小袖を借著して、轉寢したるは夕暮頃、此時これなるおいと悅の事ありて、同じ家中へ招かれ、飮まぬ酒を無理に强ひられて立歸り、拙者が轉寐したる後へ打臥したるは、紋所を見て夫とおもひしゆゑなり。拙者は寢入りて斯くとは知らず、お糸も酒ゆゑ前後を知らず、日の暮れたるも知らざりしに、浪右衛門立歸り、不義と見たるは尤至極、不義者覺悟の一聲に、むくと起きたる頭の上に劒の光、いひわけの間もなく、庭へひらりと兩人逃去り、その夜春日の宮に一夜を明しゝ時、神に誓を立てて、兄妹の約束をなし、此所に住むも、何卒不義の惡名を雪ぎ、再び歸參いたしたき願。お糸も不義でなきことを、浪右衛門に知らせ、疑を晴させん願。これゆゑに身の願叶はぬ内は、男に肌は觸れぬ心願、篤と聽いて下され」と聞いて桝右衛門、「いかさま御尤至極。然らば此程評判ある藥師の額は、お糸どのの納めしならん」「いかにも私で御座ります。いま二郎吉が申したる事、僞にあらざるは、額の歌にて御推量下さりませ」「委細は聞いた、二人に逢はん」と唐紙あけて立入りし、顏見て二人は喫驚し、「ヤア貴方は棚橋渡樣、面目ない」と逃げんとするを、「やれ待て」と引止め、渡ふたりに對ひ、「身共此

お身も一緒に下られよ。帶代はこの百兩、お糸が仕度は此方でする。なんと何うぢや」といひければ、二郎吉は思ひがけざる事ゆゑ、返辭に困り、思案の顏を見て柹右衞衞、「妹はお身が心まかせでありそなもの。たゞし帶代が不足なか」「左樣では御座りませぬが、お糸は深い譯ありて、男に肌は觸れませぬ」「その譯はどうした事ぢや」「其儀は人には言はれませぬ」「さすれば不具者ぢやな」「いや、左樣では御座りませねど、譯あつてお糸は、男に逢ひませぬ。お斷り申しまず」と立たんとするを、「待て二郎吉、身共は武士ぢやぞ。有右衞門に此事を賴まれて請合ひしに、出來ぬとばかりでは武士がたゝぬ。これこの通り刀の金打、人にいはれぬ譯をいへ。外へは漏さぬ」とせつぱつまりし折しも、お糸、二郎吉に用ありて、此所へ來りければ、柹右衞門好き折とて、お糸へも事のよしを言聞かせ、いろ〳〵むづかしくいひて、「男に逢はれぬ譯をいへ。言はずば二人とも其所は立たせぬ」と責問ひけり。二人はさしうつむき、暫詞もなかりしが、お糸、二郎吉に對ひ、「此上は詮方なし、我々が身の上を」「さればよ、有體にいうて斷り申さん。さて井原樣　お糸が男に逢はぬ譯お聞きなされ。そも〳〵我々は都にて、志賀山左衞門殿の家來、拙者は峰松琴次郎と申しよもの。これなるお糸は、同じ家中にて、柵浪右衞門が妻おりつと申して、元は主人の母君、今は尼なる御方に奉公いたし、松尾と申しょに、浪右衞門

肯くべきに、小首をかたむけ、「あのお糸、此所へ來てから、地の若い衆やお客方も、兎や角仰るお方もありしが、柳の風に受流し」「これさお竹、枕金五兩ぢや。野暮をいはずと話して見やれ。今というて返辭も出來まい。明日の晩に、出來る事ならお糸をつれて。合點か。その時は金と引換へ、働き次第で褒美がますぞ」とひとり呑込む柿右衞門、もとの座敷へ歸りけり。

第五段

かくてあくる日の晝頃、お竹、有右衞門が借りて居る座敷へ來り、かの柿右衞門を傍に招きければ、お竹が詞を待たず柿右衞門、「どうぢや出來るか」といはれてお竹「いやはや馬鹿な女、いろ〳〵に申したれど、得心しませぬ」「して、五兩の事いうたか」「いひましたとも。とても私にはゆきませぬ。此上は彼が兄の二郎吉をお呼びなされ、表向で」「いかさま旦那にいうて試よ」「若し出來たらば御祝儀を」「をよさ」「左様なら私は」「いや待て」とお竹を待たせ、しか〴〵と事の由、有右衞門に話しければ、お糸が兄を呼び、斯様々々にはかりくれよと、有右衞門が頼に、お竹にいひつけ、二郎吉を呼寄せけり。爰に峰松琴次郎は、名も二郎吉と前垂姿、御用は如何にといひければ、井原柿右衞門一腰指して、側なる小座敷へ招き、金倉有右衞門が住所姓名を明し、「妹のお糸心に適ひしゆゑ、三年の約束にて妾に抱へ、在所へ連行きたし。望みならば、

事見事。持合せた盃一ッ飲みやれ」といひければ、お糸「はい有難うは御座りますが、とんと下されませぬ」といひつゝ下女が注ぎたるを一口飲みて、「これお竹さん、すけて下され」と差出すを有右衛門、「ア、これ、その酒私がすけませう。こりや女ども、何ぞ肴持つて來い。時にお竹、此女中名はなんといふ」「お糸と申します」「定めて主があるであろな」「いえ〳〵、二郎吉と申します兄と二人、近頃京から來た人達でござります」「そんなら兄妹二人ぐらしか」「さやうで御座ります」「はてなア」と何か心にひと思案。お竹は笑をふくみながら、「旦那様、此子のも私のも、なんぞ買うて下さりませ」「をゝ買うてやる。併し逗留はまだ長い、土産は何程も買うてやる。まづ今日は二人とも、酒の相手をしやれ。餘所へ往て商ひする程の事は呑込んで居るぞ。まづ一杯呑みやれ」とお竹にさし、「井原鳥渡御座れ」と次の間にて、何か密々囁きて、二人元の座敷へ歸りけるに、井原柹右衛門、「これお竹、そちに少し相談が有馬山ぢや。こちへおぢや」とあきたる座數へつれ行きたり。井原柹右衛門聲を潛め、「これお竹、あのお糸が兄は何者ぢや」「兄は二郎吉と申して、雇はれの料理人で御座ります」「左様か、それならば話が出來やう。外でもないが、有右衛門殿が、あのお糸におもはく、おのしが世話で首尾さへすれば、おのしへは光る物二枚、お糸へは五枚ぢやが、なんとどうぢや」といひければ、お竹好い口と首

敎草女房形氣　二編下之卷

第四段

さる程に尼君お立ありければ、今は憚る人目なしとて、次郎吉は病氣全快とて、いつもの雇はれに出で、お糸も今日は久しぶりにて、髮化粧などつくりけるに、所の名物籠細工をあきなふお竹婆來り、「お糸さん、いま二郎吉どのにも逢ひました。病が癒つてお目出たい。お前も今日は商に出るさうなが、月花屋へ好い客が來ましたぞや。西國の大金持ぢやさうなが、名さへ金倉有右衛門。ひとりの連は侍の大男、道の用心とて旦那が伴れて來た、劍術使の浪人者ぢやげな。供も三四人。皆男連ぢや故、お前の美しい顏で笑ひかけたら、何程買はんも知れぬ。私のも、お前の口車で買はせて下され」「そりや眞に好いお客。そんならいつしよに」「さアござれ」と打連れ彼所へ出行きけり。爰に又かの金倉有右衛門は、浪人者の井原柹右衛門を相手に、毎日の酒盛、宿の女どもをも光る物にて引付け、今日もめれんになりたる折しも、お竹來りて、座敷の入口より、「旦那様お賑かでござりますね」「ヤアお竹よく來た、此所へ來い。後の一人、いやこりや美しい。毎日いくらも來るが、こんな花はつひに見ぬ。井原どうぢや」「いかさま見

え」「そりや何故に」「さればいな、明日は尼君樣お立ぢやと、油屋で聞きました」「成程、おのしがいうた通り、長い御逗留がなくて有難い」「もし兄さん、お立は六ツぢやと聞きましたが、知つての通り、私は松尾とて、御恩を受けた旦那さま、昔の身なら此度など、お供をせんに、女中にさへ逢はれぬも、身に覺なき無實の惡名うけしゆゑなり。せめては他所ながらお暇乞に、お駕籠が拜みたい」「そりや私も同じ事、お通路は畷通り、松の下の稻村の蔭にかくれて拜むべし」とその翌朝東雲より、彼所にかくれて拜みけるに、お糸は殊更御わかれ悲しく、涙にくれて、鋲打のお駕籠も霞む朝ぼらけ、心のうちぞあはれなりける。

おりつを尋ねけれども、此所へ來りては、お糸と名をあらためたれば、尋ねあたらざりけり。此時尋ねあたらば、不義の惡名を雪ぐ事もあるべきに、不幸なる事ぞかし。後の身の上は次を讀みて知るべし。有馬にてまくの湯といふは、他の人を入れず、借切なり。由緒ある人の湯浴するは、大方はまくの湯なり。況てこの尼君は、藤屋を借切なれば、憚る人目もなく、女中達は珍らしき湯治場の、遊山の氣晴し、よきお供と喜びけるが、尼君は御病にもあらざれば、一ト周にて、明日はお立とて、女中達名殘惜しく、又何日此湯をとて、一日に幾度も湯に入りけるは、さもあらんかし。爰に又お糸三郎吉は、病と僞り戸をしめて、引籠り居りけるに、そもそも屋敷を立退きし時、その夜春日の社にて、兄妹の契約はなしたれど、男は二十五、女は二十三の花の盛、互の心の底は嫌とは思はず。しかるに尼君ゆゑの虛病氣、人に逢はじとて、晝も戸をしめて、鏆かけてさしむかひの二人、夜は殊更夜著の袖も重なるほどな狹き住居、木竹にあらねば、心の動く折もあるべけれど、人の人たる道に背くまじと思ふゆゑ、衝立小屏風にて、二人が寢床の隔となし、心の關と書きたるを、衝立に貼りて、心の戒となしけるは、此所に二人ぐらしする、はじめよりの事なりけり。さて晝も戸をしめて居たるは今日で七日、その夜お糸油買ひに出でて戻り、「兄さん、晝も戸をしめて、お前に窮屈させたも今日ぎりぢやぞ

せんか。私は松尾に手本を貰ひました故、筆の運びもおぼえが御座ります」尼君膝を打ち給ひ、「いかさま、これは感心、好く見やつた。こりや渡、松尾は次をつとめ、後は目通りにて召使ひしが、其方も知りたる通り、妾が萬の調度をはからふ柵浪右衛門が妻は、松尾が姉なりしに、果敢なくなりし其跡へ、妹の松尾を姉の遺言とて、後妻の願ゆるし遣したるゆゑ、名もりつと改め、年齢の釣合はぬ夫婦なれど、りつが貞節なるゆゑ、妹背の中も睦ましと聞きて悦びしに、妾が料理人を勤め居たる、峰松琴次郎と不義をなし、浪右衛門に見つけられ、刀の下を潜りて、兩人逃去りて行方知れざるよし。りつは左樣なる淫奔する女にあらざることは、見どころありしが、思案の外に狂ひしにや、さるにても妾が側にて使ひし女、不義の惡名うけては、妾も恥なりと思ふゆゑ、りつが事心にかゝりしに、此額はりつが筆に違ひなく、殊更願主子歳女とあるも、彼が年なれば、これも一ツの證據なり。さて歌の心と繪の樣とを以つて推量するに、佛に誓ひて、男には再び妹背をゆるすまじとの誓願なり。さすれば、りつが不義の惡名には、仔細あらん。この額を此所に納めたれば、若しこの邊に隱住むも計りがたければ、其方詮議して見よ。若しりつに逢はゞ、妾が此額を見て、りつが筆と見極めたる事を申聞かせ、歌の心を尋ね見よ。この額は召連れたる榮竹に謄させて返しやべし」との給ひければ、柵橋渡、

豫て申しつけたる宿の主人、一里ばかり出迎へて案内申し、七ッ下りに著き給ひしゆゑ、先まくの湯を召して、供人等にも道の疲を休めさせ、そのあくる日は所珍らしければ、此所彼所見歩き給ひしに、藥師の額堂に懸けたる、彼の評判の額に目をとめ給ひ、しばし佇み眺め入り給ひしが、さて御歸ありて、お供より下宿へ下りたる奥家老棚橋渡を召され、「其方も最前見たる女繪の額、妾思ふ旨あれば、此所へ取寄せ、篤と見度思ふが、取寄する事なるべきや」と仰に、渡「靈前の額取下し候事如何あるべきや。兎も角も宿の主人に尋ね申すべし」「いかにもく、好く計らへ」「畏り候」と立退き、云々の由宿の主人にいひければ、主人「大評判のあの額、誰が上げましたやら、藥師でも知らぬよし。額ゆゑに人足も繁き藥師、大事に致すで御座りませうが、御覽あるのみならば、譯を申して借りて參りませう」と請合ひしが、やゝありて毛氈に包みて持來りければ、直樣御覽に入れけるに、尼君悅び給ひて、篤と見給ひ、「これ渡、今朝程この額を見しに、歌の調もとゝのひ、筆の運びも卑しからず、何處やら見知りたる手蹟の樣なれど、妾が老人の目には、高き所の額なれば、確と見きはめ難き故、斯樣に取寄せて能々見るに、こりや是覺ある手蹟なり。女子ども篤と見よ。覺ある筈ぢやが」と仰に、局をはじめ、よくよく見ても思ひよらざりしに、振袖のお小姓が、「この歌を書きましたは、松尾では御座いま

ず。今宵此所を立退き、暫く身をかくさんと思ふが、おのしは何と思やるぞ」お糸これを聞きて打驚き、「それは思寄らざる事なり。いかにも見咎められては悪しけれど、御前様は常から御持病もなく、ついにお薬召上りたる事もなければ、此度の御湯治もお慰の爲ならん。さすれば長き御逗留もあるまじければ、お前は病氣と僞り、私は兄の看病とて、戸を閉し、用あらば夜にたし、人に顔だに合せずば、見つかる事もあるまじ。假令三日なりとも、二人此所を夜逃にしては、再び此所へは戻られぬぢや御座んせぬか」といふは尤なる言分ゆゑ、お糸がいふに任せて、戸を閉し、門へも出でざりけり。

第三段

爰に梅月院どのと申すは、都なる志賀山左衛門太夫治信殿の母君にて、齢は六十路に近き尼君なり。もとは雲の上人の御息女なりしゆゑ、歌は更なり、詩をも作り、左國史漢の史は暗に覺え給ひ、みちく〵しき事を好み給ふからに、宮仕の女中も、おのづから歌も詠み、四書のおもても辨へ知るもありけり。さて此度の湯浴も、さる尼君なれば、供人も輕くしたまひしが、御醫者の外に、御家來の繪士を一人連れ給ひしは、風雅を好み給ふゆゑに、處々の景色を寫させ、道の記のさし繪にも、または話ぐさにもとて、繪士をつれ給ひしなり。有馬に著き給ふ日は、

て、生けるが如くなれば、湯入の人は更なり、遠きあたりよりも聞傳へて、見に來る人多かりければ、藥師の御前にも人足繁く、此額ゆゑに賑を增しければ、いよ〳〵額の名高くなりつれど、お糸が捧げしとは知るものなかりけり。

第二段

さてお糸は、誓に立てし關の戸といふ歌を、佛の前にかける程の心なれば、狹き住居に琴次郎と二人、薄團を竝べて寢る中の、隔ての衝立に、心の關、と筆太く書きたるを貼付置きて、心を戒しめ、身を愼むも、不義にあらずして、不義の惡名を雪がんの願なりけり。世には男を持ちながら、男をこしらへ、我子を棄てて、密夫と駈落するもあり。左樣なる人でなしは、このお糸を己が心に比べて、馬鹿律義と思はんが、お糸は人の人たる貞女の鑑なり。これをこそ女房形氣の手本といはめ。さて二郎吉ある日宿へ歸りてお糸にいひけるやう「今日雁はれの先にて噂を聞けば、我々が御主人志賀山樣の御母君梅月院樣、此度この有馬へ御湯治とて、明日は藤屋へお著きの由なり。私は梅月院樣の料理人、そもじはお次を勤めて、松尾と召されたる身の果、身に覺はなけれども、不義の惡名を受けて、そもじが夫浪右衛門殿の、劒の下を逃去りし我々二人、此所にありて梅月院樣のお供の人に見つけられなば、いかなる憂目に逢はんも知れ

はれに歩き、お糸は旅人のすゝぎ洗濯、又は所の名物の籠細工を、湯坪に持歩きて、湯入の人に賣りなどして、その日ぐらしのなく音わびしく、朝夕をおくりけるに、お糸は花の盛の美しく、由緒ある奉公もなしたれば、物事卑しからず、殊更利潑の生れなれば、武士町人のほど〳〵に待ひて、目先が利くゆゑ、お糸〳〵とて、他の者よりは商も多かりけり。されば眞魚箸で皿を洗ふを見て膽を潰し、弟子になるもある程なれば、わづか半年程の内に、移りかへの袷にも困らぬ様になりけり。かくて其頃有馬の湯場へ、菱川師宣とて名高き浮世繪師來りければ、お糸これに頼みて繪をかゝせ、額に造りて、有馬へ湯入する人は、必ず參詣する薬師の額堂へ、人知れずかの額を納めけり。その額の繪は、美しき女、手を合せて拜む姿の、前を合したる所へ、錠を下したる樣を描きたるに、一首の歌をぞ書きける。その歌に

御佛のちかひにたてし關の戸にとゞめあへぬは泪なりけり

と書きて、願主子歳女と記せり。歌の心は、この薬師樣へ願をかけ、心の中に關を据ゑて、男は入れまじと思へども、泪ばかりは、心の關にも止められぬが、いとゞ悲し、といふ心なり。この額お糸が懸けたりとは所の人も知らず、珍しき額なるのみならず、繪も名人の師宣が筆に

敎草女房形氣　二編上之卷

發端

初編にしるしたる室町殿の頃、都なる志賀山左衛門太夫治信の母君梅月院と申すは、加茂川の下屋敷に住み給ふ。その附人柵浪右衛門が妻おりつ、もとは彼の梅月院殿の側に仕へて、松尾といひしに、姉の死後へ、後の妻になりたるなり。さて又梅月院殿の料理人峰松琴次郎、日頃浪右衛門方へ近しく立入りしに、浪右衛門は五十に近く、妻のおりつは後妻ゆゑ、年も釣あはぬ二十三四なり。さて毎日立入る琴次郎は、廿五六の鰥夫、男振もよければ、よそ目にも、蠅取黐に玉虫もくつつきさうなれど、おりつは貞節、琴次郎は律義ゆゑ、人目をつつむ涙は、露ばかりもなかりけるに、不圖した間違を浪右衛門に見咎められ、不義のいひわけすべき證據もなく、ふたり駈落なしけるが、道にて春日の宮に入り、兄妹の契約をなし、一度は不義の惡名を、洗ひ淨めんと願ふ事ども、悉くは初編に記したれば、讀みて知り給へかし。さるほどにおりつ琴次郎は、京を立退き、いさゝかの知緣を便に有馬へ至り、人の住荒したる小さき家を借りて住ひ、おりつはお糸と名をかへ、妹といひなし、琴次は二郎吉と名をかへて、料理の雇

の巻に見えたり。今この女房形氣の二編の筆をとらんとして、ふと思出したるゆゑ、六百年まへの、女房のかゞみを、この女房形氣に照して、あはせ鏡となすになん。かの明智光秀が妻、夫のために髪を賣りたりといふ話は、好事の人、件の惟成が妻の髪を、結ひなほしたる虚言なるべし。唐土にも、母が子のために、髪を切りて賣りし事、世說の賢媛の部に見えたれど、女房ならねば記さず。色情のために髪を切りし事、西土には許多あり。されどこゝに用なければ省きぬ。

むかし花山院の御時、多田の滿仲の聟になりし惟成といひし人は、いまだ雜色たりし比、友達とうちつれて花見の時、おの〳〵食物一種づつたづさへべきよし約束しけり。さてその日にいたりて、惟成は飯をとゝのへべきにあたりけるに、家貧しくて、用意とゝのひかねしに、惟成が妻いひけるやう、いかにもして調じまゐらすべしとて、夫をいだしやりけり。さて惟成は友達と共に花のもとに遊びながらも、飯の事おぼつかなくて、おもひ煩ひしに、やがて仕丁唐櫃を荷ひ來り、妻よりといひければ、惟成うれしく、開き見るに、二斗ばかりの飯に、雉一折、酒をさへ添へければ、友達の人々も、惟成が妻のかひ〴〵しきを褒めければ、惟成は面目を得て、心うれしく、花を見て日をくらし、家に歸りて、閨に入りし時、妻の髮を見れば、髻より切りたるさまなれば、大きに驚き、事のよしを問ひけるに、妻いふやう、わらはが黑髮は、大臣殿の御炊の米にかへて、けふの事をとゝのへはべりし、といひつゝ顏に袖をあてければ、惟成も涙にくれけるとぞ。この故事は、弘化の今を去る事六百三十餘年前、建保の間、兼顯卿の記し給ひし古事談といふ書の、前編の二

込む所、湯入の人のすゝぎ洗濯、張業の賃仕事、共稼して暮すべし」と、身の落著はこれに極め、社に一夜を明し、有馬をさして急ぎけり。

第十三回

有馬の湯元の近き所に、御利益あらたなる藥師あり、湯に入る者、かならずまづ參詣す。おりつ有馬へ落著きて後、人に知らさずこの藥師へ額を納めけるに、珍らしき額なれば、態々見に來る人もありて、繪のさまにつけ、歌の心につけ、さま〴〵に評判なし、湯入の人のはなしぐさとぞなりける。さればこの額の事につけて、おりつ琴次郎等が身の上に、幸福出來る事は、めで度二編に記すべし。そも〳〵忠も孝も貞も、かの節といふふしなければ、其義たゝず。おりつがこの額を掛けて、夫を重ねざるは卽ち貞節なり。いたづらものは、惡しと知りつゝ惡き事をなす。これ心に愼まざる故なり。聖人の敎に思邪無しといひしも、愼めとの事なり。色と慾は愼むべきの第一なり。これを愼みさへすれば、めでたし〳〵〳〵。

のかためをなし、何處へなりとも身をかくし、此方さんの身のまはり、すゝぎ洗濯朝夕の飯ごしらへして進ぜましよ。何とさうしては下さんせぬか。左樣あらば、神や佛のおめぐみにて、兩人が惡名消ゆる時節も御座んせう。あゝ果敢なき身にはなりました」と涙に袖を濡しけり。見れば神前に土器あり、「いかにも尤なることろざし、此期に及び見捨てて下さらぬはかたじけなし。御手洗ともおぼしき水を汲みとり、兄妹の契約に、神の前にて盃せん」と、神前に入り土器取下し、御手洗ともおぼしき水を汲みとり、神前にある鏡の影を映して飲みかはしけり。斯くありしおりつが貞節の心、この神も納受ありけん、わづか二年たちて、不義にあらざるよし詳にわかり、元の如く柵浪右衛門が妻となる事、二編を讀みて知るべし。さて兩人神に誓ひて兄妹となりければ、詞をあらため、「これ妹、慌急しく立退きし故、丸腰の某はともあれ、おのしは細帶、人目あしよ。さればとて身に一錢の貯蓄なし。如何せん」といひければ、「兄上案じ給ふな」とて、襟にかけたる守袋より、小判三枚取出し、「これは私がたしなみ置きたる金子なり。今宵はこの社に通夜をなし、帶は明日道にて調へ申さん。さるにても落著く方の心あたりは御座んすかえ」「さればよ。其許の親達ははるばる隔てし國にあり、我とても身内はなけれども、有馬の湯場にすこしの知緣あり。彼所は繁昌の所、習覺えたる料理人となり、細くとも烟を立てん。諸國の人の入

る物著替へんとて帯は解きたれど、目もぐら〱したゆゑに、お前が寝て御座る後姿を此方の人と思ひ、帯解いたまゝで添寝したは私があやまり、屏風も立ててあり、燈さへなかりしゆゑ、不義淫樂と見られしは尤至極。さればとて言譯せんにも語らんにも、劒の下の犬死は口惜しと思ひし故、此所まで逃げては來たれども、こりやまア何としたら宜からうぞえ」琴次はため息ほつとつき、「留守を頼まれ退屈して、轉寐したるが因果のはじめ、言譯の證據一ッもなし。惡事千里は世のならひ、今更屋敷へも歸られず、不義でないを不義と思はれ、そのあかりさへ立てがたく、闇路にまよふ友千鳥、是も前世の約束ならん。この上はお前と夫婦のかためをなし、何處へなりと立退きて、如何なる業をしてなりと養ひ申さん。お前は如何おもはるゝぞ」おりつは頓の返辭はなくて、しばし小首を傾けけり。おりつやう〱顔をあげ、涙をぬぐひ、「さりとは嬉しきおこゝろざし、かたじけなく思へば、詞にまかせたく思へども、お前と夫婦になりては、水にあとなき浮萍も、根深き不義となりて、夫は更なり兩親へも恥をかゝせ、草葉の蔭の姉までも、浪右衛門殿へ言譯なしとて怨むべし。されば此身は髪を切り、尼寺へかけ入らんとは思へども、左様ありては私ばかり、心を清くなし、私ゆゑ惡名受け、扶持にも放れし旅烏、塒に迷ふ此方さんを、見捨てるは人でなきゆゑ、此所は幸ひ春日の御社、神に誓ひて兄妹

かくて浪右衛門宿へ歸りしは、暮六ツ頃なりけるに、いまだ燈もなく、內は暗がりにて、人なきやうなり。はて心得ずと、持ちたる挑燈にて邊を見れば、片隅に小屏風立ててあり。內を照し見れば、かの峰松琴次郎は後向、妻は添寢して、帶も側に解きてあり。夜具こそなけれ、枕をならべたる姿、まがふかたなし。是を見るより怒の胸燃ゆるが如く、寢首を取るは武士にあらずと、聲あらゝげ、「不義者見つけたるぞ」と呼ばはる聲に、跳起きたる頭の上に劍の電光、詞かはさん隙なければ、枕上なる障子開くる間もなく蹶放して、逃げる琴次に續くりつ、緣も切目の一足飛、庭に驅下り逃行くを、やらじと續いて追蒐けしが、黑白も知れぬ宵暗に、二人はなんなく遁れけり。

第十二回

鳴く蛙身をうきくさに隱してもねをこそ絕えね水の苗代

啣く聲さへかすがの神、しろを放れし社の緣、琴次おりつ息をやすめ、「まうし琴次郞さん、今宵の事は私のあやまり、其譯は、棚橋渡樣の娘御が、疱瘡の酒湯の祝とて招ばれ、此方の人が居らぬゆゑ、お前を留守に賴み、渡樣へまゐりしに、彼方此方の內方もまゐられ、飮むお方の相手して、飮めぬを無理に强ひつけられ、胸もぐら〳〵するほどにて、やう〳〵宿へ歸り、著

御意見ぢや」と昨日の意趣の塵芥を、焚付けられて火になる顔貌、眞鴈はよしと、ます〳〵口に任せて、さん〴〵と譏しければ、さては日外神鳴の時の有樣も、訝しく思ひつれど、彼等に於て左樣なる事はあるまじ、とは油斷なりし、と心に納め、眞鴈に向ひ、「御意見かたじけなし。證據になるべき此扇、お貰ひ申さん」といはれて眞鴈考へ見れば、昨日彼に書かせたる扇、彼が見ば其時の事をいはん、これ草を打つて蛇を出し、毛を吹いて疵を求むるなりとて、事にかこつけて扇はやらざりけり。これにつけても人の妻としては、もの書くにも心すべき事ぞかし。

第十回

かくて浪右衛門は、暇乞して立歸る途次、つら〳〵思ひける樣、眞鴈が申さるゝを聞けば、これ迄さぞかし人に譏られつらん、この上は事破れざる内、彼に暇をやるより外なし、さるにても彼が兩親今は他國にありて、この所には親類一人もなし、引取らす人なきに、追出しても遣られまじ、それにつけても、七人の子は生すとも、女に肌をゆるすなとは昔の譬、欺かれしは口惜し、證據さへ見るならば、彼等を打留め武士を立てんと、心も闇む、日も暗む、道にて挑燈かりがねの、家路をさして歸りけり。

第十一回

尋ね見ばやとて、取次に尋ねさせしに、序ながら來りたるにて、若御用繁くば申置かんと聞きて安堵なし、居間へ通し、常に優りて親しく款待し、さて昨日おりつが書きたる扇を取出し、「此扇の筆見知りありや」と尋ねければ、取上げ見て、「これは私妻の書きたるなり。如何いたしてお手にあるや」といひければ、「いや、これはさる人の持ちたるを貰置きたるなり。御身が妻の詠みたる此歌の心、考へ見よ」と云ひけるに、風雅に心なき浪右衞門なれば、困る樣子を見て、「知れずばいうて聞かさん。琴寄祝とありて、歌に

それとしも見えねど千代を契るかなねいろかはらぬ琴のまつ風

といふ歌の心は、琴に寄する祝とは表面、心の内は、琴といふ名の男と契る戀歌なり。それとしも見えねどとは、人に匿すこと、千代を契るとは、心の深き事、ねいろかはらぬとは、今までの樣な調子で、琴といふお前を松風、といふ心をかくして詠みたる歌なり。琴を名につきたる鰥夫、お身が内へ毎日入りびたるよし。それにつけ、惡い評判おれが耳へはいる程なれば、知らぬはお身ばかりであらん。されども、誰ありてお身に意見言はぬは、能々の腰拔と思ふ故なり。おりつを去つてしまやれ。若又確に不義と見屆けたらば、兩人とも切捨てるは武士の當然、見遁しては武士が立たぬ。こりや言はずとも知れた事。言憎き事なれど、お身が爲を思うて

如何あらん」といひければ、琴次暫時考へ、「酒の上にて言はれた事なれば、跡方なき戯にして置けばおかるゝ事なり。しかし有のまゝに告げるは、お前の身晴なれど、浪右衛門どのが、眞鴈殿を見下る心が出來ては、浪右衛門殿の勤に障る種ともなるべし。篤と思案召され」といひければ、夫へは語らざりけり。これもおりつ琴次が、後の難儀の一ッとなりけり。

第九回

横島眞鴈はおりつに横面はられ、我が惡しきはかへりみず、大に怒り、刀押取り立上りし時、蟹藏來りて推止め、「這は何故」と尋ぬければ、眞鴈「其方が申すには、打付にいへと言ひしゆゑ申したるに、身が面をはりをつた。女なればとて、武士が面をはられて捨置かんや」「御尤御尤、其樣事でやあらんと、おりつを追蒐けしが、見失ひました。此意趣返しは仕樣もあらん。先一杯あがり直して、御機嫌をお直し遊ばせ」と酒に日を暮して歸りけり。此眞鴈といふは、妻も子もある身にて、凭る亂業の身持追々募り、終には身を滅すことは、後篇に記して、人の戒とす。凡人の禍の出來る時は、惡き事の重るものなり。眞鴈は昨日おりつに恥をかゝされたるのみならず、面を撲れて口惜しく、何をがな意趣返しと思ふ折から、柵浪右衛門お見舞申すと聞きて思ふやう、さては昨日の事おりつが語り、それゆゑに來りしやらん、先用の事

に、おりつは難なく遁れけり。

第八回

爰に又彼の峰松琴次郎は、おりつが留守を頼まれけるに、おりつが夫浪右衞門は、每日の勤なれば、琴次郎一人留守を守りしに、七ツ頃にはおりつも歸るべしと思へば、洗足の湯を沸しおき、浪右衞門も夕飯食べに下り來らんと、其仕度も調へおき、忠實なる若者ゆゑ、座敷の掃除、火鉢の灰まで篩ひ、煮花も出來たるに、二人とも歸らず。貸本の三國史、關羽五關に大將を斫る所、一册讀んでも歸らず。琴次郎獨語に、「主人は兎もあれおりつどのは、他所の子供を連れて人込の中へ行き、浮々手間取る女でなし。もしや彼の子を、はぐらかしはせぬか。しかしおりつどのの利發では、左樣な事もあるまい。庭へ水でも打たん」と、家の後の井戸に水汲んで居たる處へ、おりつ娘を連れて歸りけり。琴次郎「やれ〳〵手間がとれましたな」おりつ「さればで御座んす。此子は連れて行く、些とも早くと思ひましたが、據處ない譯あつて、思はぬ暇入。此方の人はえ」「今日はまだお歸りが御座りませぬ。洗足の湯も沸いて居ますぞえ」「有難うござんす。先此子を送つて來ませう」と土產持たせて送り返し、平常の姿に著替へ落著きて後、さて歸りの遲かりしは斯樣々々と、眞鷹が事を語り、「これを詳しく此方の人へ談さんと思ふが、

るに、歌など知る人にあらじ、然るに、扇を書かせ、厚く饗して、馳走するは合點ゆかず、男の相手となりて長居せんはゐしょ、と思へば頻に歸りたく、その上日も西へ傾きければ、再び言傳の催促しければ、眞鴈「これ蟹藏、おりつに内用の傳言あり。此所を立て」といひつゝ眴しければ、惡がしこき蟹藏その心を悟り、おりつが側に居たる小娘に、此所の庭の池の金魚を見せんとて連行きければ、銚子控へたる下女をも立たせ、眞鴈おりつにむかひ、「日外簾を身共が肩へあてたる事覺あらん。そもじを見たるは彼の時が始なり。何時ぞはゆる〳〵逢はんと思ひ居りしに、今日圖らず、此二階より見かけたるゆゑ、呼入れんといひしに、言傳ありと僞て連參らんとは、蟹藏が計なり」と聞いておりつは喫驚の胸を治め、「左樣ならば、直にお暇申しましよ」「はてさ、主ある花はいはずとも知れた事、七重の膝を八重に折り、一枝と所望すれば、折りてやるが人の情ぢやあるまいか」と不貞の道へ引く袖の、褄は爭か重ぬべき、面恥かゝせんとは思ひしが、夫よりは遙上に立つ人、恨を遺さば夫の身の上にも惡しからん、此場は美しく立去らんと、風の柳川瀨の若鮎、拔けつ潜りつ言ひながしけるに、鐵石の心とは知らず、甚しき無禮をなしけるゆゑ、差出す横面ぴつしやりはり、下へ驅下り小娘連れて逃去るを、蟹藏はそれと見て追蒐けけるに、生醉の市虎小蛇を手に持ち、人を嚇すを見て、逃散る人の込合

す。さア御案内申しましよ」「はい、お頼みなら行きも致しませうが、しみ〲お目にもかゝらぬ御方、そのお言付、お前聞いて來て下さんせ。私は此所に待つて居る」「はてさ、お手間は取れまい。まゝ鳥渡」と呼ばれたるは夫の目上、詞に背かばあしからんと、蟹藏があとにつき、小娘連れて茶屋へ行きけり。

第七回

さるほどに、おりつは蟹藏に伴はれて、茶屋の二階へ行きければ、横島眞鴈笑を含み、「これはおりつ、まゝ此所へ〱。はてさ、此所は他所の事、敷居越では話が出來ぬ」と近く招かれ、おりつ始ての挨拶をなし、「夫浪右衛門への御言傳仰せ給へ」といひければ、眞鴈「そりや後の事、先持合したる盃獻し申さう。こりや蟹藏、吸物申しつけい。さて此小娘は」「はい、隣のでござります」「好い生れつきぢや。はてさ一盞飲み給へ」と茶屋の下女が持ちたる銚子、眞鴈が手づから注ぎけれど、飲まぬおりつが迷惑も、構はぬ眞鴈が酒機嫌。おりつは早く此所を立ちたく、言傳の事しきりに急ぎけれど、眞鴈はそれに取合はず、おりつが歌を詠む事を聞及びたるゆゑ、持ちたる扇に歌を書きくれよといふ。辭退すれども聽かざるゆゑ、詮方なく、寄琴祝の歌を書きけり。眞鴈は扇を手に取り、頻に賞めけるに、おりつは最前より、眞鴈が詞の俗な

教草女房形氣　初編下之卷

第六回

其頃同じ鎌倉なる長谷の觀音にて居開帳あれば、諸人擧りて參詣群集なしければ、浪右衞門が妻おりつも、夫のゆるしを受け、留守は彼の琴次に賴み、一人行かんは人目も惡しゝとて、隣の小娘を連れて參詣なし、奉納の飾物など彼方此方小娘にも見せ歩きけるに、粟餅の曲搗は、見る人口を揃へて笑ひ、菜飯に田樂は、働く女客を見て呼ばはる。後付にしなをやる蛇娘あれば、前に仕掛を飾る機械あり。日傘は蓮の葉を竝べて、玉を欺く大振袖、坊主頭の手拭は、藥罐に布巾掛茶屋に、かける客あれば立つ客あり。色々種々の群集の中に、おりつは小娘の手を引き、歸る後に聲ありて、「もし、おりつさま」と袖をひかれて振かへり、「お前は何方でござんすえ」「お見忘れなされましたか、石崖蟹藏で御座ります」「なる程、これはお久しや」「さればで御座ります。此所は人込、まゝ此方へ」と傍に立寄り、「さて私は、只今は貴女のお屋敷の、橫島眞鷹様へ若黨を勤めます。今日も眞鷹樣お供をいたし、あれあの料理茶屋の二階に居ります。眞鷹様貴女を見掛けて、浪右衞門様へ何やら急に御用、言傳をして貰ひたい、鳥渡こゝへと仰やりま


京山作
豊国画
女房形氣下乃巻
錦森堂
山田屋板

物戸板の儘、取入るゝ時、雨はぽち〳〵降り來る。琴次郎も共々に手傳ひて、張物したる戸は戸袋へ操込まんとしたるに、雨も強くなり、雷さへごろつきければ、電光におりつは怖れ、「お前、その雨戸閉てて下さんせ」と雨戸締めれば薄暗がり、雷嫌のおりつ、線香たてるやら、蒲團出すやら、雷は次第に近くなりければ、おりつは琴次を便に思ひて寄添ひ、蒲團引被り身を縮めて居たりしに、雨戸の隙間ぴかりと光る電光につれて、がら〳〵ぴしやりの一聲に、おりつ琴次にしがみつきけり。恁る折しもおりつが夫浪右衛門、勤先より歸り來りければ、二人はひとつ蒲團の内にありて面目なく、兩人口を揃へ、事の由をいひければ、浪右衛門其答はなく、「今の一つ、いやはや膽が潰れた。雷嫌が蒲團被るは尤ぢや。確に近くへ落ちたであろ。思ひがけない雷も止めば、濡衣の雨もはれた。さあ〳〵雨戸開けやれ〳〵」と夫の詞に安堵のおりつ、琴次郎も浪右衛門が、胸の寛きを感じけり。しかしながら此時の事、後の禍の種となる事、下の巻を讀みて知るべし。

皆男女の亂業を記したるものなり。されば男女のなかを、遠くて近しとは言ひつらん。今はむかしとは事變りて、男女の中にも掟ある故、其掟をよく守りて、心の愼さへ深ければ、男女の中の近くなる事は、決して無きものなり。愼は卽ち禮儀なり。然れども禮儀も、彼の禮節といふ節がなければ、禮儀ぬつぺらばうにて、雪の達磨なり。譬へば夜半に嫂が、内の井戸へ身を投げんとするを見付けながら、抱付きて止めるは禮儀にあらずとて、やれ待ち給へは耳に入らず、後から確りと抱止めるが禮節なり。されば男女の中には、別して禮節がなければならず。禮節なければ、宿下の女中と一つ座敷に寐ては、心は堅くても、人に疑はるゝ事あり、愼むべし。と或翁が言ひしに違なき例ある事左の如し。

第五回

さる程に柵浪右衛門は、彼の峰松琴次郎を弟の如く思へば、宿の事は萬事琴次に打任せ置くも、毎日の勤に忙しき故なりけり。されば琴次も、浪右衛門方を我宿の如く思ひ、浪右衛門の妻おりつをも、齢こそ下なれ、姉の如くに敬ひけり。されど彼の禮節なかりしゆゑ、大いなる禍を惹出しけり。時しも夏のはじめ、琴次郎例の如く來り、「おりつさん、張物を取込みなさい。今に白雨がしますぞえ」「左樣か」と夫が歸りを待受けの、煮花の土瓶も打置きて、庭の張

りつと申します」「お主よく知つて居るな。何者の娘ぢや」「彼は星井樣の家中の醫者の娘、親達は國勝手になりまして、彼の娘一人御當地に殘りました。私は星井樣の家中にも奉公いたし、彼のおりつどのの十三四の頃は、羽子板こしらへてやつた事も御座りましたが、もう見忘れましたらう」「すりや以前は心安くしたか」「左樣で御座ります」「はてな。南無三泥濘へ踏込んだ、可介、何故敎へぬぞ」

第四回

人のよく知りたる淸少納言は、今より八百五十年ばかりの昔、一條院と申し奉りし帝に仕へたる女房なり。大内の女中を、女房といふからに、夫がうつりて人の妻をも、今は女房といふなり。さて此淸少納言は、彼の源氏物語を書きたる紫式部と傍輩なり。淸少納言も枕草紙とて、大方は自分の身の上の事を記したる中に、行成卿と心を通はせし時、世にあふ坂の關はゆるさじと詠みし歌は、實方中將にも心を通はせたる言譯に、行成卿へ詠みて送りたる歌なり。それが作りたる枕草紙に、遠くて近きものは男女の中と書きたり。そ
の心は、人目あればこそ遠けれ、人目を厭はずば、直に近くなるは、男女のなかぞといふ心な
り。八百餘年のむかしは、大方は斯樣なる風俗なりしゆゑ、源氏はさらなり、古き物語ども、

爰にまた同じ家中に、横島眞鴈とて、年は三十五六、碌な人でないと嫌がらるれど、人の上に立つ男なれば、避けて通すをよき事と思ひ、肩で風切る、風邪の御見舞とて、主人の母君梅月院殿の方へ來りけるに、逢ひ給ふべき人なれば、逢はせ給ひ、風の病氣も昨日より忘れて、湯にも入りしなど、語り給ふ中、盞も賜りけるに、眞鴈は飲む口なれば、女中相手に微醉ひ、猶打解けて飲みたけれど、物堅き尼君の前なれば、盞をお局に納めさせて、此所を下り、上館へ歸る折しも、浪右衛門が妻のおりつ、夕方なれば門口に、かけたる簾を取入るゝとて、通りかかりたる眞鴈が肩衣に、少し障りたれば、眞鴈これを咎めんとて、目を瞋して振返る。おりつは其人と知れば、打驚きつゝ、「御免遊ばせ」と柳の腰を屈め、花の顏赤めたる風情、こゝにも春のありけるよと、打笑みて立去りけり。これかの水滸傳の西門慶が事に好く似たり。扨此時横島眞鴈が供に伴れたる若黨は、石崖蟹藏とて、邪曲者の眞鴈が心に適ふ程の奴なれば、惡がしこく、眞鴈が今の面つきを悟りければ、「もし旦那、今の女、貴方は御存じでござりますか」「をゝさ。門に打ちたる屋札を見れば、柵浪右衛門が宿。しからばありや浪右衛門が後の妻と見ゆるが、齢も若し、浪右衛門には過ぎものぢや」「彼の女、貴方は御存じな筈ぢやが」「否、知らぬ」「ありや梅月院様のお次を勤めました、松尾と申した女中。姉の死後へ參り、今の名はお

文に、昔は賤しき檜垣の嫗さへ、歌の集は今に遺る、捨てずに詠めとてお題を下された中に、忍んで契る戀といふお題があるゆゑ、何うした心であらうかと、夫で其所の戀の部を讀んで見ました。いかさま戀する心は、種々なもので御座んす」と話の折から、おりつが夫浪右衛門歸り來り、戀する心と女房が聲に心とまり、立聞くとは夢にも知らず、おりつ「琴次さん聞かんせ」と本を開き、忍んで契る戀に

　我にさへいつとはいはぬ夕かなかねて人目のひまを知らねば

此歌はよく詠んだぢやござんせぬか」「いかさま、歌の道は知らねども、忍んで逢ふといふ心は其樣なものでがなあらん」と二人が話に、浪右衛門いよ〳〵耳を傾けて、立聞しけるに、おりつが聲に、「浪右衛門殿といふ夫のあるわたしが、忍んで逢ふ戀といふ歌を詠みましては、異なものでござんすが、見もせぬ名所、身にも知らぬ物を、言の葉にならぶるが、歌の道とは知りながら、夫のある身では、忍んで逢ふ戀といふ歌をよむは、此方の人へ氣の毒なれど、旦那樣より下された題ぢやゆゑ、迷惑します」と妻の詞に浪右衛門、疑も唐紙もさらりと開き、「今歸つたぞよ。」

第三回

心には合はざれど、浪右衛門が妻となりけり。さて連添ひ見れば、顔貌には似ず心優しく、能く勞るゆゑ、いかさま姉が遺言したるは、宜なりとぞ思ひける。されば夫婦の中も睦じく、浪右衛門に浪風はなかりけり。こゝに又、同じく梅月院殿に仕へる料理人に、蜂松琴次郎とて、二十五六の若者、男振も心につれて素直なるものなりければ、浪右衛門身内の如く思ひ、目をかけて睦じく、琴次郎も浪右衛門を、兄の如く思ひけり。

第二回

扨て琴次郎は、今日も浪右衛門方へ來りければ、女房おりつ繼物をしながら、「降りはせまいかね」「何うであらうか。旦那はえ」「町に用があつて行きました。傘を持たいで行かしやんしたゆゑ、降らねばよいがと思ひます」「お案じなさるな。買物なさるお勤ゆゑ、傘ぐらゐは何方でも貸します」といひつゝ、おりつが側にありし本を取上げ、栞の入りたる所を開き見れば、頓阿が草庵集類題の戀の部なり。琴次郎少しは風雅にも心やありけん、おりつが珍らしく此本を讀むを訝りて尋ねければ、おりつ針をやめ、「さればでござんす。奥に勤めた時、御隱居樣から月並の御題が出て、皆さんと一所に、腰折を詠みましたが、此所へ來てから、下女さへ使はぬ水仕業、歌どころぢやないゆゑ、捨てて置きましたが、御隱居樣の御意ぢやとて、お局の御

當世男女之鏡 教草女房形氣

山東庵京山作

初編上之巻

發端

今は昔、足利室町殿の頃とかや、都あたり近きに住み給ふ、志賀山左衛門太夫治信といふ人ありけり。母君を梅月院とて、年も六十路、尼君にて、世の塵を厭ひ給ひて、加茂川の邊の下屋敷に在しけり。附人の重役を、棚橋渡とて心直なる老人、その下に立つ柵浪右衛門とて、年は五十に近けれど、妻はおりつとて二十三四、つりあはぬ夫婦なりけり。是は如何となれば、今の妻は先妻の妹にて、彼の梅月院殿に事へけるに、姉がいまはの時、浪右衛門に遺言せしによりて、後添ひしたるなり。此おりつは、若木の花の美しく、心操も優しき故、浪右衛門よりは年も若く、祿も男振も優りたる同じ家中にて望むもありしかど、姉がいまはの遺言を守り、

約束を違へざるも禮節なり。如何程心安き友達なりとも、亭主の留守に其女房と、浮々長話せざるも禮節なり。況してや酒など飲みあふは甚敷無禮なり。されば世の教にも、親しき中にも禮儀ありといへり。分りましたか」といひければ、子息感心して歸りけり。その親しき中にて禮節を缺き、大いなる騷を仕出したる物語、次にしるす。

きゆゑ、味方に附けんとて、天龍寺の僧を使とし、味方に附かば、國六ツを與へんと、證文を書きて遣りしに、正儀申しけるは、我等三代慾の爲に戰を爲さば、天下をも取るべしとて、使の僧を縛り、南朝の帝の在ます吉野へ連行き、此事を奏聞して、僧を追放ちける。これ忠の節なるなり。さて又禮節といふは、むかし」「もし御隱居さん、お話の腰を折るやうで御座りますが、昔話はさておき、今の事で」「あゝ成程尤ぢや。昔の故事はくだ〳〵しい。常盤や楠が事珍しからず。扨今の事でいへば、何ぞ序もあらんに、今日態々貴樣が土產まで持つて來て、禮節の事を聞かるゝは、これ卽ち禮節なり。今もいふ如く、節とはふしといふ事、物にはふしといふが無けりやならぬ。人の體にも節々ありて、働をなす。其節を惡くすれば、腰が拔けたり、手が利かぬやうになる。草木にも節がありて、節より枝を持ち、花も咲くなり。禮節は、禮儀の節と思はしやれ。されば親子、兄弟、夫婦の中にも、禮節がなければならぬ。禮節は禮儀の節々なり。例へば、子息花見に行かんと思ひても、我儘に行かず、親の許諾を受けて行くは禮儀なり。さて行く時、親が早く歸れといひしを忘れず、道連の惡玉、色里の花をも見んといふを、親の早く歸れを忘れず、惡玉をはぐらしてすた〳〵歸る、是子の親にする禮節なり。夫婦、兄弟の中の禮節も、皆此心持なり。況してや他人の中には、別して禮節を缺くべからず。

序

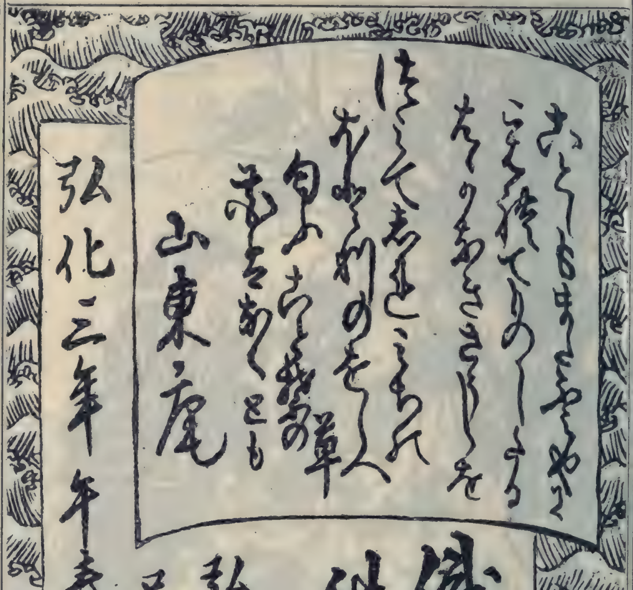
山東庵京山作

深き學問はなけれども、少しばかり物を知りたる翁ありけり。若き男此翁に問ひけるやう、「もし隱居さん、手紙に書く其節又は時節柄などは知れてあれど、禮節、忠節、貞節などの節とは何の事で御座ります」翁「いかさま分るまい。節といふ文字をふしと讀む、節とは卽ち竹の節に擬へたる文字、それゆゑ竹冠に從ふなり。竹にも節がなければ力がない。されば禮儀にも、忠義にも、貞義にも、節がありて强きを、禮節、忠節、貞節といふなり。昔平治の亂に、義朝、淸盛と戰ひしに、軍破れて尾張國野間内海にて、家臣長田が爲に弑されしに、義朝の妾常盤も擒となり、淸盛常盤に戀慕しけるに、常盤三人の子を助け置かば、親の敵の淸盛を、討つ事もあるべしとて、操を破りて淸盛に從ひたる故、三人の子の命助かり、果して其子賴朝、義經、範賴、力を合せて平家を亡滅し、親義朝を殺したる長田父子をも生擒りて、怨を報いたるも、母の常盤が操を棄てて、操をたてし故なり。これを貞節といふ。又むかし建武の戰に、楠三代、南朝の天子に忠を盡しゝに、正成の孫正儀の時、尊氏、正儀と戰ひしに、正儀が軍强

○攝津國有馬郡山口の庄に温泉在り、これを有馬の湯とて、その名諸國にきこえたる名湯なり。そも〳〵此湯は、今を去る事千二百五十餘年のむかし、欽明天皇五年此湯始て湧出で、行幸あり。その後孝德天皇も行幸ありし事など、日本紀に見えたり。又千載集にも、こゝにみゆきの歌あり。さて此湯、堀川院承德元年、洪水山を崩して、温泉潰れしより、後九十五年の間絶えたるを、後鳥羽院の御時、建久二年大和國吉野の僧仁西法師、熊野に參詣なし、權現の靈夢によりて、有馬にいたり、温泉を浚ひて、再興したるより、後天正十七年、殿下もこゝに入湯ありて、灰形山阿彌陀堂などいふ利久の古跡も殘り、本朝に冠たる名湯として、繁昌する事、あまねく世の知る所なり。この繪ざうしに、この湯の事あれば、温泉の起原をこゝにしるす。


教草女
房形気
初編上下
京山作
豊國画
錦耕堂寿梓




山東庵
織心
絣草
弘化二年
巳夏稿本
弘化三年午年春新板

小さん金五郎假名文章娘節用 終

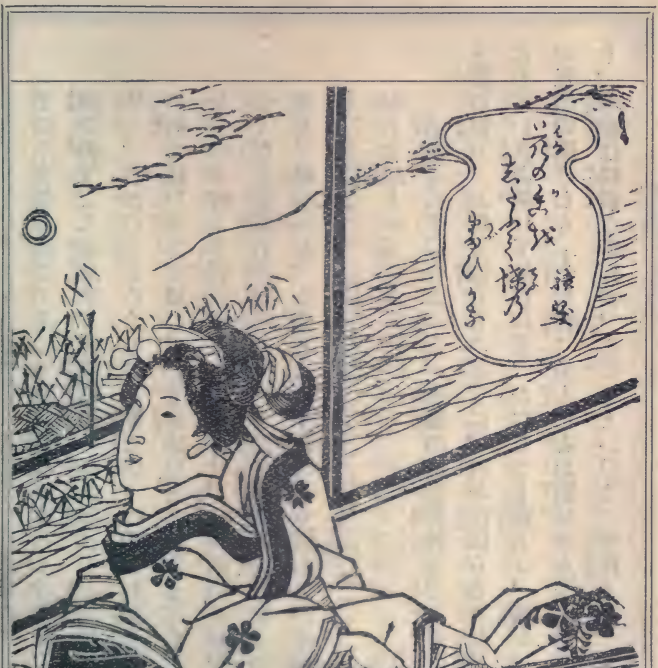
時発されしかば、京師の家には養子をなし、その身は直に東へ下り、親族眷屬に對面して、喜ぶ中に小三の身の果、聞いて悲歎の泪にくれ、頻に無常を觀ずるものから、終に髪を剃り佛門に入りて、身を雲水にまかせつゝ、諸國行脚に出でしとなん

させたのも、みんな因縁約束事。この上は言ふまでもねへが、金ばうを可愛がつてやつてくんな。ア丶何だかひどく鬱いで來た。お雪、おめへいゝ子だから、茶碗に一盃酒を持つて來てくんな。その中ちよつくり奥へ行つて、皆の機嫌を取つて來やう」ト羽織をひつかけ奥へゆく。お雪は酒をもち來れば、金五郎も部屋へかへりて、「お雪、金ばうはの、祖父さんの側に媚付いて居て、好なねだり事をして居るぜ」お雪「左樣でございますかヱ。お祖父さんにはよいお相手でございます。ハイあなた、御酒を」ト茶わんをぼんにのせさしいだせば、金「オツト有がたし、御苦勞だつた」ト手にとりあげていきをもつかず、ぐつとのむゆゑ、お雪はびつくり、「オヤあなた、召上るのなら、燗めて參ればよう御座いましたチヱ」金「なアに、冷でもいゝ。是で氣色が直つた樣だ」お雪「ほんにその事もあの書置に、いつそ案じて書いて有りましたヨ」金「さうだつけのう。いつでもこのぐい呑では、小三にひどく氣をもませたが、ア丶今思へば是も後悔、モウ／＼ふつつり止にする。思へば小三はおれが爲の、善智識でもあるだらう」ト何かにつけて身のおこなひを、あらためるのも小三の貞心、天に通ぜしゆゑにこそ。あつぱれ賢女といひつべし。是よりして金五郎は、主君へ忠勤怠る事なく、白翁初め兩親に、孝を盡す事日にまし厚く、お雪とも中睦ましくして、金之助を愛育し、紫雲の庵も四季折々に、訪ひ音信れて疎遠せず。忠孝信義全きゆゑに、家内に和順の基をひき、お雪の腹にも子を儲けて、幾千萬代賑しく、益家富み榮えける。かゝる目出たき因によりて、金五郎が實の親、文之丞も年來の、勘氣をこの

か、心をおかずと言つてきかせな。一生添はうと思ふには、隔てぬでこそ夫婦といふもの」
お雪「そのへだてるといふ事は、誰がわたくしに教へましたか」金「なんの事たな。こつちはそんな覺はねへもの」お雪「外の事はともかくも、小三さんの事ばつかりを」金「へだてたといふ事か」
お雪「ハイ。それ故にこそこの悲しみ、先から私に、斯う〳〵だと、譯をお聞かせなすつたら、あなたにも御苦勞をかけますまいのに」金「なんだナ、又おもひ出したやうに。モウいくら言つてもはじまらねへ。未練も大概にやめてくんな」お雪「しつこい樣でございますが、何につけ彼につけて、つね〴〵忘るゝ事もなく、みんな私がおろかゆゑだと、この身を恨んで居りますが、けふは取わけいつもより」金「百ケ日だけ氣になるか」お雪「又そんな事ばつかり。お疑が晴れませぬから、申しますからお腹をお立ちあそばしますなヨ。アノ、あなたの御留守のうち、お烟草盆の引出から、小三さんの遺書が出ましたゆゑ、ツイちよつと」金「見たので氣色にさはつたらう」お雪「なんぼおろかなわたくしでも、先から深い譯ある事を、知つて居つたら、どうでもいたして、あなたのお側へ小三さんを、呼びます事も出來ましたらうに、なぜ隱しては下さいました」金「モウどのやうに言つたとて、とてもかへらぬ繰言だ。小三の事をかくして居たは、おれが一生の誤だから、堪忍してくんな。年もいかねへおめへにまで、いろ〳〵苦勞

いふものの、わか死をするゆゑに、人にすぐれて生れて來たのか。金五郎の爲を思ひ、おまへに義理を立通して、名を汚さない貞女の鑑。ほんにお雪ヤ、かならず仇に思ひなさんなヨ。この書置はおまへの爲には、實によい手本だヨ。このやうに金五郎を大事にして、道を立てるが女のたしなみ。金坊も麁略にしてはすまないヨ」お雪「ほんにさやうでございます。わたくしが人なみに、よく氣のつくやうな生れなら、このやうな事にはなりますまいに、因果な事でございました」トおや子二人がくやみなき、なみだに袖をしぼりけり。をりから下女がはせ來り、下女「若旦那さまのお歸り」トつぐるに母は奥へゆく。お雪は手ばやく文をしまひ、泣顔かくして出迎へば、金五郎はその顔見て、「お雪、どうぞしたのか。泪ぐんだ顔つきだが、ハヽア大きな形をして、又おつかさんに叱られたの」お雪「イヽエ、そんな事ではございませんが」トあといひかねしが手もちなきゆゑ、「アノ、金坊はどう致しましたエ」金五郎「ばゝアと先へ、奥へ行つた」トきものをきかへおびをしめながら、「アヽヤレ〳〵草臥れたぞ。ほんにお雪、けふはの、寺參をして、直に向島へ行つたら、紫雲さんのお傳言があつたぜ。おめへに金ばうを連れて、ちつと泊りがけに來いとヨ」トいへどもお雪はうつむいて、ハイといつたばかりゆゑ、金五郎はふしんにおもひ、金「ハテ、どうもおれは、おめへの樣子がわからねエが、何をそんなに鬱塞ぐのだらう。ハヽアきこえた。こりやア何だの、おれが小三の寺參に行つたから、それで癪にさはつたのだの」お雪「どう致してマア、そんな事が」金「心になけりやアどういふ譯だ





でのやうなる御こゝろにては、御ためあしくけまゝ、是より御心を入れかへ、むりなる御酒を御すごし被成ず、御宿にのみ御出遊ばし、お雪さまにも無理なる御事御申しなされぬやう、ねがひ上まゐらせ候。猶このうへの御ねがひには、後の世の御事に御座候。百とせの御よはひ過させ給ひて、未來はひとつ蓮のうてなこそ、ひとへに願上げ〳〵。まことにをさなき時より御したしみ申しあげ、時の間の御わかれだに、心うくぞんじさふらふに、かくながき御わかれとなり、さかさまなる御ゑかういたゞきけは、いかなるむくい因果にやと、繰かへし、まことに〳〵御なごり惜しさいはんかたなく、こゝろも亂れさふらふで、申上度御事は、濱の眞砂の盡きせねど、明がたちかきかねの音に、死出の山路へ心せき、をしき筆とめり〳〵と。

道しらぬくらきよみぢへ初旅の身は御佛を力にぞして

と讀み終り、お雪も母ももろともに、目を泣はらして顔見あはせ、母「アヽヤレ〳〵、よしない文を開けて見たゆゑ、かなしさも悲しゝ、胸がせまつて、大きに泪をこぼしました。金五郎の迷ひしも尤な筈、美人だとお祖父さんさへ小三が容貌を、おほめなさる程な生れつき、容貌は格別な事だが、心だてといひこの手蹟まで、うつくしいとも見事とも、約束事とは

て〳〵は君の御ためあしからむと、行すゑのことぞんじつゞけ候へば、ながらへをり候ほど、つみをかさぬる思ひにて、後の世さへも空おそろしく、又このうへにかず〳〵の御苦労かけ参らせんもはかりがたく、せめてはわが身を果し候はゞ、すゑ〴〵君の御こゝろも安かるべしと、とくより覚悟はきはめまゐらせ候へども、女心の浅ましく、御名残のみ惜まれて、けふまでながらへをり候御事、まことに〳〵御はづかしく存じまゐらせ候。たゞ〳〵此うへは、お雪さまと御中よう、御祖父様御はじめ御両親さまへも御孝行のほど、願上げまゐらせ候。二ッには姉事は、御存じの通り、まことにたよりなき身のうへ、これまではおよばずながらも、たがひに便りいたしをり候へども、末々は猶々たよりなき身にさふらへば、何とぞ御見捨なう御めをかけ被下候やうねんじ上まゐらせ候。又金之助事はぐわんぜなきわんぱく者にさふらへば、わが身なきのちは、たづねわび、泣きむづかり候はんかと、今より目に見え候やうにて、みれんながら、ふびんにぞんじまゐらせ候。姉方へも昨日まゐり、よそながら、いとまごひのついでに、金之助の事も、よく〳〵頼みおき候へば、あの方へ御あづけ下され、西東もわかり候やうに成候はゞ、母なし子とて、人にわらはれぬやう、手ならひなど、よく〳〵御をしへ下されべく、かへす〴〵も君の御身もち、只今ま

れでもお杉が見つけましたもの。開いて見ましても宜しうございませうかチエ」母「不遠慮なれど、あんまり可愛さうだから、ちつとばかり開けて見なナ。アノ杉ヤ、おまへはの、お煎茶の支度をしておくれヨ」下女「ハイ〳〵、かしこまりました」（下女は勝手へ立つて行く。お雪はこはごはふみをひらけば、その文にいはく、）

逢ふは別れの初めとは、かねてより人の身の、定めなきに引くらべ、覺悟いたしをり候ひしに、やうやく只今おもひあたり候まゝ、この世の御名殘に、一筆書殘しまゐらせ候。まづとや御平らかに御くらし被遊候御事、此上もなう御よろこび申上まゐらせ候。さてしもわが身事、いやしき賤のふせ家に生れ、草葉の露のはかなき身を、御父君の御情にて、やう〳〵人となり候御恩のほど、海とも山とも詞には盡しがたく、夫のみならず親姉までも命をつなぎ、御惠みの淺からぬ御事、いつの世にか、報いまゐらせんやうもなく、あまつさへ一日の御恩も送らず、かへつて御辛勞のみかけまゐらせ候この身の罪の深き御事、申上ぐべくやうも御座なく候。えにしは神のむすばせ給ふ御事にや、もとよりいやしきわが身ながらも、君の御情にあづかりまゐらせ候より、ひと方ならぬお氣がねのみ遊ばしさふらふも、みなわが身故と存じ候へば、身もよもあられず、たゞ〳〵つたなき身をのみうらみまゐらせ候。御祖父さま御はじめお雪さまにも、さぞ〳〵わが身を御にくしみ、御うらみ被遊候はゞ、は

には入れども、あらためて先妻と呼稱し、佛事も手厚く行ひければ、金五郎はいへば更なり、紫雲乳母も上なくよろこび、家内の者も朝夕に、金之助を掌中の珠と愛し、只すこやかに成長するを、指をり數へてくらすほどに、はやくも小三が百ケ日に當りければ、金五郎は寺に詣んとて、金之助を乳母に抱かせ、供の男を引連れて、菩提所へとて出行きける。あとにお雪は下女とともに、金五郎の部屋をかたづけなどする時、下女あやまつて煙草盆を打かへしけるはずみに、引出よりさま〴〵のほぐの出しまゐに、取入れんとする中に、女のふみがちめきしもの出しかば、下女はこれを手にとりあげ、ちひさなこゑにて、下女「オヤ〳〵、御新造さんえ、一寸御覽あそばせ、女中のお文がございましたよ」お雪「ドレお見せ、ほんにねえ。オヤ、常のお文だと思つたら、書置の事としてあるから、こりやァ小三さんの書置だよ。わるい物があつたチエ。モウ是を見たら、中を讀まないのに、胸がいつぱいになつたヨ」下女「オヤ、書置でございましたかえ。ほんに思出してもお可愛さうでございますチエ」お雪「さうさ、大かた若旦那の事が、いろ〳〵書いてあるだらうから、見たさも見たいが、泪のたね。それにひよつと知れでもしたら、お腹をお立ちなさると惡いから、マア〳〵、よしにしませう」トしまはんとするところへ母おやが出來りて、母「お雪ヤ、モウ今に金五郎も歸るだらうヨ。早く其所を片付けておしまひ」お雪「ハイ、モウしまひました。アノおつかさん、一寸是を御覽なさい。まことによい手で御座いますねえ」母「ドレ〳〵、オヽ、書置の事、アヽ小三どのの書置かエ。又そんなものを見つけ出して」お雪「そ

養はれしが、便の人に早くわかれて、頻に佛門の志願おこり、髪を剪り尼となりつ、世をのがれてくらすうち、妹が身の薄命から、浮世の義理にせばめられ、添ふ事ならぬを覺悟して、心づよくも身を果せしは、みな男の爲を思ひ、操を立ぬくこゝろざし、妹ながらも天晴貞女、只一トすぢの不量見と、おぼしめさずに心のうち、推量してやつて下さいまし」トいちぶしじうをつまびらかに、かたれば白翁もかんるゐをながし、白「さて〳〵姉妹揃ひもそろひし、貞婦といはうか、義婦といはうか。殊に小三は幼い時から、金五郎と一緒に育ち、家出して死んだと聞いた、養娘のお龜であろとは、夢にも知らぬが大きなあやまり。さういふ譯のある事を、養子の身ゆゑ金五郎も、遠慮して人にも明さず、ひとりで苦勞をして居たかと、思へば小三が心の中と、金五郎が胸の中が、不便でどうもなりませぬ」ト思ひやりつゝうちなげくに、紫雲も泪をせきかねて、ともに泣いては物がたり、はなしは泪ではかどらず。ろばも次の間に、金之助をねかしながらのもらひなき。しやうじふすまのあけたても、なみだでしめるばかりなり。偖も白翁は、泣く〳〵紫雲に別を告げ、家に歸りて金五郎の、兩親はじめお雪にも、小三が成行紫雲の身の上、金之助が事までも、くはしく語りける程に、皆もろともに泪にくれて、小三を惜まぬ者もなし。この上はすこしも早く、忘れ記念の金之助を、引取つて小三の亡後、ねんごろに弔はんとて、金五郎にもこのよしを相譚ふに、喜ぶこと限りなく、それかり日をえらみ向島より、金之助を乳母もろともに呼むかへ、お雪の子となしていつくしみ、小三は世になき數

五郎めが聽居らぬも道理かヱ。まして小三どのは女の事、このマアいたいけな子を措いて、飽きもあかれもせぬ中で、男のためと身を捨てられたは、貞女ともあつぱれとも、賞めても是が稱め盡されうか。しかし眞身のこなさんが、身に取りてはこの爺を、鬼とも蛇とも惡魔とも、さぞマアにくいと思はつしやろ。ガ、その言譯ではなけれども、この子を家へ引取つて、晴れて金五郎が悴と披露し、小三どのの亡跡も、ねんごろに弔はせましよ。せめては夫をなぐさめに、思ひあきらめてくだされ」（トなみだふき〳〵いひければ、紫雲もうれしさかぎりなく、泪のとめどもなき顔あげて、）「だん〳〵厚い思召、何とてお恨み申しませう。みんな過世の因縁ゆゑ、どうも仕方もござりません。それにつけても姉妹が、身の上のあらましを、おはなし申すもお恥しいが、わたくしどもが生立は、かやう〳〵でござります」（ト兄弟二人母なきゆゑ、小三が身は生れ落ちより、文之丞に養育せられ、わが身も共になさけにて、親にかねをさづけられし、）その惠にて里に行きしが、早く父にも死わかれ、里親にだまされて、うき川竹に沈みし事、小三も金五郎と共に育ち、たがひに末を契りしに、金五郎は本家へ養子となれば、小三は便なき身をかこち、心狂ひて鴨川へ、身を沈めしが不思議にたすかり、惡者の手にわたりて、つひに同じ花街へ賣られ、唄妓となりてくらすうち、縁ありて金五郎にめぐり逢ひしより、二世をちぎりて深くなり、つひに子どもの出來しゆゑ、身請をされて圍はれし事、又その身も同じころに、さる人に請出され、この別莊に

すこしは憂さも晴れますが、まだマアまことにぐわんぜもなく、明けても暮れても母を慕ひ、泣くにつけ、すねるにつけ、達者で居たならどうかうと、思出しては同じやうに、泣いて泪のかわく間は、ほんに一日もござりません」白翁「イヤモウ、そりや言はるゝまでもない。お前の胸を推量すると、わしが胸もはりさくやうで、矢も楯もたまる事ちやない。マヽヽ、それは左もあれ、孫めが悴はどこに居るか、ちよつと逢ひたい、逢はせてくだされ」紫「ほんに左様でございました子。金坊は奥においでかエ。乳母一寸連れておいで」（トよびたてられて金之助は、うばよりさきへかけきたり、）金「をばちやん、坊、おとつちやんお出だと思つたヤ、餘所のおぢいちやんだ子」紫「是はしたり、よそのお祖父さんではないヨ。是は坊ヤのお祖父さんだから、手をついてお時儀をおしよ」白翁「ヤレヤレ、おとなしいよい子ぢや。ドレ〳〵、祖父の側へ來やれ。オヽよく言ふことをきくぞ。そんならお土産をやりましよ。サア〳〵手を出しやれ。オヽてへ〳〵がよく出來たぞ。ヤレ〳〵可愛いゝ好い子ぢやナア」（トやうかん一トさを出しやれば、いたゞいてうれしさうに、）紫「をばちやん、コレお菓子、お祖父ちやんお呉だ。有難うごじやイまちゆ」紫「オヤ、よいお菓子をおいたゞきだの。よく忘れずにお禮を申したぞ。よいお祖父さんを持つて、坊は仕合ものだぞ」白翁「ハヽヽヽ、イヤ、この坊ヤを見るにつけ、はじめて逢つたわしでさへ、可愛くつてならぬもの、いくら疾深く意見をしても、金

し金五郎がわか氣の癖で、愛想づかしの腹立まぎれ、疵でも付けて騒動を、出來した故にふさぐかと、思つて見れば片時も、案じに胸がやすまらず、わざ／＼青柳橋へ尋ね行きて、見ればおもひもつかぬ人の、栖家となりて勝手口も、變つた事で引越せしかと、あたりの人に尋ねしに、小三どのの知る人にや、子までなしたる身ながらも、男の爲と義理づくで、身を捨てられたあつぱれ貞女、近所の者までその當座は、皆惜がつて泣きましたと、泪ながらの物語、聞いて突胸のわしがびつくり、悲しさ不便さやるせなく、その捨てられし子の行先、聞けば眞身の姉御のところへ、引取られしといふ事なれば、悔もいひたし樣子も聞きたさ、孫めが顔も、イヤ孫ではない曾孫であつた、見ねば心も落つかぬゆゑ、駕籠を飛ばせてやう／＼來ました。子まである身と知つたなら、なんのむごく縁切らせう。なま半つゝみ隱されたが、今となつては却て恨、年に不足のないわしが、長命せずばこの樣に、かなしい泪はこぼさぬもの、なんの因果で生延びたか、おもへば年が恨めしい」ト老のなみだをくりかへし、愚痴になるのも道理なり。紫雲もあらまし聞取るうち、ともに泪をもよほして、紫「ほんに妹が薄命は、約束事とは申しながら、子までなしても日かげ妻、一日半時人なみの、息をもつかぬ苦勞を爲死。わたくしとても眞身といふは、天にも地にも小三ひとり、力におもふ甲斐もなく、杖にはなれし今のかなしみ、わすれ紀念の金之助で、

が儘よと、捨てて置いては爲にならず。刃物も折々磨がなければ、錆付いて切れぬ道理。その錆を落すには、普通の世事の合砥では、とても切れる事ではないと、推量をして見る時は、わしが心の荒砥にかけても、切らねばならぬ浮世の義理。お雪といふ孫娘と、祝言までさせたから、とても添はれぬ惡縁と、思うたゆゑに孫めにかくれ、ア丶いつでかあつたげな、小三どのの家へ尋ねゆき、はじめて逢うたその席で、よろこばせもせず孫めが身の上、かう／＼いふ譯あれば、長うとは言はぬほどに、いやでもあらうが暫時が間、どうぞ縁切つて下されと、無粋なむごい頼をば、聞いて涙にむせながら、義理と恩とを聞わけて、ふつつり思切りましよと、いはれた時のわしが胸、うれしさ餘つて不便なは、小三どのの心の中、さぞつらからう悲しかろと、おしはかられて侶なみだ。ア丶浮世が儘になるならば、容貌といひ利發といひ、やさしい心の生れつき、孫めと夫婦にしてやつたら、さぞマアたがひに嬉しがろと、思つたばかりでそれも叶はず、是非も泣く／＼歸つたが、それから後は金五郎めも、そは／＼する樣子もなく、家にばつかり居るゆゑに、偖は心が直りしかと、家内の者がよろこんで、機嫌をとるほど鬱ぎ顔、じれては部屋にとぢこもり、何か屈託なやうすを見ては、又案じるが親の常、兩親の者もお雪めも、同じやうに苦勞がれば、わしもやつぱり氣にかゝり、考へて見るほど合點がゆかず、も

なただか、マア庭口からお通し申しな」下女「ハイ〳〵」ト立つて庭口へまはり、しをり戸開きこなたへと通せばつゑをつき〳〵入り来るは、金五郎がぢい白翁なり。白「ヤレ〳〵よい御住居ぢや。マヽ御免くだされ」トざしきへとほり座になほりて、「偖ハヤわしは金五郎めが祖父で御座るが、たしかこなさんは、小三どのの姉御といふことゆゑ、聞きたい事、はなしたい事、山々あれば孫めにかくれ、わざ〳〵尋ねてまゐつたが、おさし合なお客はござらぬか」トいふに紫雲もよろこびながら、なにか様子もわからねばたゞいんぎんに手をつかへ、「これは〳〵、どなた様かとぞんじましたら、金五郎さんのお祖父さん、ようマアお出あそばした。何にも御遠慮なものは居りませんから、何なりともお心おきなく、おはなしなさるが宜しうござります」トやさしきことばに白翁は、老の目やにをふきながら、紫雲の顔をうちながめ、白「ヤレ〳〵、姉妹とはいひながら、小三どのに生うつし。おまへの顔を見るにつけ、涙がモウ、さきだつやうぢや。扨何から申さうやら、心のうちが取込んで、前後するのも老の癖、退屈ながら一ト通り、はなすを聞いて下されや。その仔細といふは、知らしやつた通り、不思議な縁で金五郎と、小三どのと深うなり、たがひに思ひおもはれゝばこそ、深切づくが苦勞のたね、大概に惚合つてゐたならば、人のおもはく世の義理にも、かゝはらずに樂みだらうに、あんまり可愛がりいとしほがられたから、孫めもその情にまようて、うちを外の夜どまりばかり。一ツづつ年はとれども、放埒が直らぬ故、止のつまりが案じられて、意見はしても糠に釘、豆腐にかすがひ、きかぬ

した」トかたるもはなすもなみだゆゑ、金之助はたいくつして、金「ばゞア、をばちやん所モウいやだヨ。面白くないかヤ、家行かうよゥ。おつかちやんへ行かうよゥ」うば「又そんな事をおつしやるかよ、お聞わけのわるい。こゝがお坊さんのお宿でございますから、家へ行かう〳〵とおつしやるものでは御座いません」金「フウ、坊の家爰でないよ。おつかちやんへ行かうよう。をばちやん、ばゞアいけないヨ。坊、家へ帰やせないよ」紫「ヲヽさうかエ〳〵、わりいばゞアだぞ。ア、しかし騙しすかしても、まだぐわんぜもない子供だから、家へ帰らうといふも無理ではない。小三が座敷活業で、なんぼ傍には居ない勝でも、三日と離れた事もないのに、やがてもう五十日あまり。賑やかな所で育つた子が、こんなさむしい所へ来て、緋鯉や亀の子が相手だから、どうでも遊にあきるはず。コレ金ばうヤ、おまへは利口ものだから、をばさんの言ふことをよくお聞き。アノ、おまへのおつかさんはの、それは〳〵遠ウい所へお出だから、モウ家には誰エもお出ではないよ。それだから家へ行かう〳〵といはずに、をばさんの所にいつまでも居るのだよ」金「坊のおつかちやん死んだから、お寺へ行ちまつたかエ」紫「アイ、さうサ」金「夫だから坊の家無ち〳〵かエ」紫「さうサ、よくわかるぞ。それだから爰が坊やの家だよ」トうばとふたりでなぐさむる、をりから下女がかけ来り、「モシあなたへ、どこのか御隠居様が、お目にかゝりたいといつて、入らつしやいましたヨ」紫「さうかエ、そんならど

三編下巻

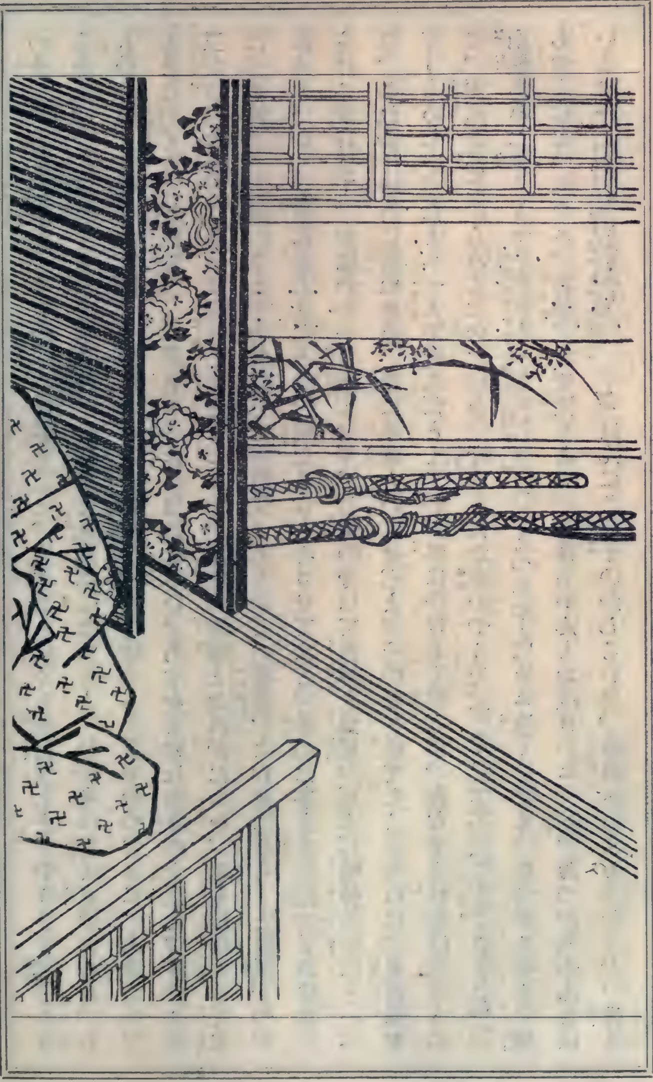
第九回

朝夕に、木々の落葉を雨と見つ、冬をば告ぐる寂しさに、心も空も時雨月、訪ふ人もなき草の戸へ、友さそひ來て音信ふは、水鷄にあらぬ小雀の、ちよはよと啼く聲を、聞くにつけても哀添ふ、紫雲は小三の亡後を、弔ふひまに金之助を、なぐさめてもまだ聞わけの、泣いては母を尋ぬるゆゑ、不便の増して可愛さに、泪のかわくひまもなし。母におくれし金之助は、紫雲や金五郎ともろともに、七日々々の寺まゐりに、小三のはかへ花をたむけ、念佛となへてをがむをば、見やう見まねの子心に、内にかへりてあそぶにも、さすが血筋といひながら、菊の花など折りて來つ、庭に立てたる石どうろうへ、たむけてちひさき手をあはせ、金「なんまい〳〵、ののちやんなんまい〳〵。ばゞアこゝへ來て、なんまい〳〵爲なよ。をばちやんもお出よウ」トわけわからねどをがむをば、見るにつけ聞くにつけ、乳母も紫雲も倶なみだ、金之助をいだきあげ、紫「これ金ばうヤ、又そんな事をして、をばさんを泣かせるのかエ。ア、栴檀はふた葉とやら、やがて成人したならば、孝行者にならうのに、いたいけざかりのこの子を捨てて、死んだ小三が心の中、マアどの樣につらかつたらう。思ひやるほど後生のさはり。ア、南無あみだ佛あみだ佛」トつまぐるじゆずもしめりがち、うばもなみだの目をぬぐひ、うば「とてもかへらぬ繰言と、思ひ直し氣を取なほしましても、お可愛さうな事をいたしま

のか、小三の身のうへおぼつかなし、いかなる事かたづねゆき、樣子を聞きて安堵せんと、ひとりひそかに兩國の、小三が家へぞいたりける。

んになつたとは情ない。こんなかなしい事を見るのを、虫が知らせたせゐかして、きのふ歸すが氣にかゝり、乳母と二人でとゞめたが、あの時歸さずばなんのマア、あつたら命を捨てさせやう。歸すも約束歸る身も、みんな定まる因縁ながら、薄命な妹が身の果や」トくりかへしてはさめ〴〵と、みなみな歎きかなしみて、涙に疊も浮くばかり、哀れといふもおろかなり。斯くては果しなき人の、爲にならじと金五郎は、男心を取直して、紫雲をいさめ乳母をはげまし、野邊の送もねんごろに、七日々々の訪とむらひも、手厚く法會なしにける。かゝりし程に金五郎は、をさなき金之助が母に別れて、便なき身となりしを案じ、かねて小三が存生より、紫雲の許へ預けくれよと、たのみし言葉もあるゆゑに、日がら立ちて金之助を、乳母もろともに向島へあづけ、青柳橋の家は取かたづけ、殘るかたなく心を配り、をり〳〵紫雲の庵を訪らひ、金之助を愛しながらも、只小三の事忘れかね、家に在る時は部屋にのみ籠り、お雪にだに是等の始末を、祕しかくして語ることなく、氣のひき立たぬも理なり。白翁はじめ家内の者も、金五郎がこの頃にては、急にうつて變りしごとく、夜あそびにも出でざるゆゑ、さては身持の直りしかと、よろこぶもののいつとても、何か心に案じ顔、屈託らしくふさぐのを、見るにつけ又白翁は、老の身の思ひ過しに、倘金五郎が短氣から、小三に怪我をさせしも知れず、それゆゑにこそふさぐ





の身でかへらぬ事を、くりかへして歎くこそ、人のおもはくも面目なしと、やう〳〵思ひあきらめて、かの遺書を手にとりあげ、ひらきて見ればこま〴〵と、わが身の爲と家のためを、おもひつめての覺悟の文體、讀めばよむほど後悔の、身を切らるゝよりせつなさに、あきらめてもまた泪ぐむ、目をしばたゝき胸をなで、金五郎「老少不定は世のならひ、あすをも知れぬ身の上だと、きのふ小三が言つたのが、思へば記念の言となつたか。浮世の義理とおれがためを、おもひなやみて先だつ不便さ。亡跡の事まで苦勞にして、意見まじりのこの書置、よむ身にならうとは氣がつかなんだ。いつか世に出し人なみの、樂なくらしをさせてえと、思つた事も水の泡、子供の時からけふが日まで、かはいや一日樂もせず、日影の身にて苦勞を爲死、死んだ劬勞の原はといへば、おれが片時内に居ぬゆゑ、親に不孝といはせじと、その身を捨てしこゝろねは、眞實過ぎてうらめしい。たとへ一人で死んだとて、わが手にかけしも同じ事、死なずと仕樣はあらうのに、短氣を爲たからみんなのなげき。吁なんだか夢のやうで、かへらぬ事だが不便でならねへ。南無あみだ佛〳〵」トゑかうするかは金の助は、つく〴〵と見てふしんにおもひ、「おとつちやん、ナニ泣くのだえ。おつかちやん、佛ちやんになつたかエ。乳母、なぜ泣くよウ。をばちやんもお泣きかエ。坊、おつかちやんこはいよウ」トともになきだすあどけなさ、紫雲もわつとなき出し、紫「ほんにこの子のかしこい事、誰敎へねどおつかァが、佛さ

ぜ死んだ。どうしたのだ。氣が狂つたか。コレ小三。小三々々」トだきおこし、よべどこたへもこときれて、顔の色つやあをざめて、虫の息さへなきゆゑに、さすが男の心もみだれ、泣聲くもらせなみだとともに、金「コレお竹、てめへが内に一所に寝ながら、小三が斯ういふ様子があつたら、ちつとは知れさうなものだのに、知らずに殺してしまつたか、情ねへ事をしてくれた」トぐちをいふのもことわりなり。この時粂川のわかい者、清助佐助もかけ來りて、おどろくこと大方ならず、何はともあれ向島へ知らせんとて、佐助を紫雲のところへ走らせければ、紫雲も乳母も仰天して、金之助を連れ駕にうちのり、飛ぶがごとくに馳來りて、小三のすがたを見るよりも、あまりの事のかなしさに、夢か實か辨きかねて、涙にむせぶばかりなり。紫雲は顔に袖おしあて、聲くもらせつゝ金五郎に、小三がきのふの様子を語り、金之助の行末までを、とにかく憑みて別路に、名殘の泪の盡きざりしも、斯ういふ覺悟をきはめしゆゑか、情なやかなしやと、歎くかたへに書置の、ありしをうばはとりあげて、うば「コレマア御覧じまし、遺書までこんなになすつて、お果てなさるはよく／＼な事。とは申しながら、いとし盛の、お坊さんをこの世へ捨てて、後のなげきを思しめさぬは、あんまり聞えぬおどうよく、おせまい心てござりました」トしやくりなみだにむせび居る。金五郎は男子ながら、共に心も消々に、歎きに沈みうつとりと、夢現ともわかぬまで、惜しさやるかたなかりしが、さすがさかしき生れゆゑ、武士

歸る心のつらかりしが、主人持つ身の儘ならねば、言葉を契りて別れしかど、その夜の夜詰の番にあたりて、出づる事さへならざるゆゑ、心ならずもとやかくと、案じわびてもせんかたなく、明くる夜遲しと待かねて、御殿より内へ歸りても、胸さわぎの常ならねば、食事さへせず著物を著かへ、青柳橋まで急ぎ來る、足も空に飛ぶがごとく、小三の許へ來りしは、やう〳〵日の出の頃なるべし。まだ入口の戸も開けねば、さては何事もなかりきと、少しは心もおちつきながら、戸口をとん〳〵と打たゝき、金五郎「オイお竹、起きねえか。モウ日があたつてゐるぜ。お竹〳〵」トうちたゝかれて、下女はおどろき、お竹「ハイ〳〵、旦那さまでござりますか。オヤオヤ、大きに寐すぐしました」トかけがねはづして戸を開くれば、金五郎は内へとびこんで、金「坊主はどうした、まだ起きねえか。小三の病氣が惡かァなかつたか」お竹「ハイ、昨日は大きにおこゝろよいとつて、お坊さんをお連れなすつて、向島へいらつしやいましたが、お坊さんは、乳母どんと御一所に御逗留で、お獨あちらの男衆に、送られてゆうべお歸りなさいました」金「ナニ、きのふ金ばうを連れて、向島へ行つたか。よく歸つて來たのう。夫ぢやァくたびれて、まだ起きねえのだらう」トいひつゝ小三のねやへ行き、からかみあけてひとめ見るより、「ヤヽヽヽヽ」トびつくりぎやうてん、尻居に倒るゝ物音に、下女のお竹も何事にやと、かけ來りて樣子を見れば、小三は白無垢を身にまとひ、いつの間にやら自害なしけん、朱に染みて死したる體に、おなじくわつと駭きて、倒れてわな〳〵ふるへ居る。金五郎は狂氣のごとく、金「小三、ナ

にまゐりませう、ねェお坊さん」金「フウ、ばゝア、坊歸ゆの、いや〳〵だよ。龜ン子の所へ泊ようョウ」乳「あゝだもの、どうも困りきつた事た。どういたしたら可からうやら」紫「そんなら斯うしませう、坊と乳母はお泊と極めて、おつかさんには三松に久助を附けて上げやうよ。それでは案じる事もあるまい」乳「さやうならどうぞさうなすつてくださいまし。ヤレ〳〵それで落つきました」（トみなく〳〵あんどするゆゑに、）小三は紫雲と金之助に、名殘のことばが置みやげと、（なみだを袖にかくしつゝ、）小三「さやうならあなた御機げんよう。御厄介でもござりませうが、金ばうが事をおねがひ申シます。ばゝア、そんならたのんだよ。金ばうヤ、おつかァはモウ行くから、おとなしくして機げんよくお遊びョ。あば〳〵だよ、おさらばよ」（トのこるかたなくつど〳〵に、いとまごひして立出れど、）輪回の絆にひかされて、盡きぬ名殘のやるせなく、紫雲も乳母ともろともに、金之助の手をひき門口まで、別を惜み送る身より、送らるゝ身はこの世から、くらき冥途の旅の空へ、消えゆくものと悟りしも、さすがは尊き法の道を、受けたる身ゆゑ御佛の、眞身の姉に導を、させて給はるものにやと、ふり歸りては目に涙、哭音をしのぶ親鳥の、雛に別るゝ思にて、氣も絶々になる鐘の、無常の風にひゞき來て、耳をつらぬく入相に、おどろかされて氣を取なほし、心弱くてかなはじと、別れてこそは歸りける。さる程に金五郎は、今朝小三に別るゝ時、常にかはりて名殘が惜しまれ、

つても、たづねて泣くのではないよ。泣くとの、直灸だよ。をばさんの所には灸がたんとありますから、おとウなしくしてお出よ」金「アイ、坊おとなチくすゆが、おつかちやんどこイお出だ」小三「おつかさんはの、アノ内が遠ウいから、歸らないとおとつさんに叱られるよ」トいひつゝ金の助をいだきあげ、かはいゝこの子のかほ見るも、是が名殘か悲しやと、いはねど胸にせきあげて、顏を見つめて目に涙、しばし言葉もなかりしが、疑はれんかと心づき、泣く目をかくし、わらひがほ、小三「ほんに子供といふものは、何をいつても無我夢中、後生樂なことでありますねえ」トおもひきつて下へおろし、帶〆直す顏つきも、常にかはりし樣子ゆゑ、紫雲も乳母も何となく、小三の身のうへ案じられ、かへしがたさに顏見あはせて、紫「どうもわたしは今ツから、おまへを獨かへすのが、心にかゝつて落付かぬから、今夜は泊つて明日の朝、はやく歸つたらよささうなものだ。なうばゝア」ろば「さやうさ。旦那だとて一ト晩ばかりの事、譯をおはなし申しましたら、お腹立もありますまいから、是非今夜はお泊んなさいましな」トとめることばもきゝいれず、小三「さうだけれど、けふこなたへ來る事を、旦那におはなし申さなんだから、泊つてはどうも濟まないよ。それに是非、おはなし申さねばならぬ事もあるから、三松どんでもお借り申して、ちつともはやく歸らうよ」ろば「さやうならおばうさんも、お歸りがようございます。小僧さんばかりでは、おかへし申されません。わたくしもお供いたして、龜ン子は又明日、見

夜わたくしが留守のあとへ、ひよつと旦那がお出なさると悪うございますから、どうも歸らずはなりますまい」菊「ぼんにさうさねえ、旦那の御機げんをそこねても悪し、一ト晩でも儘にならないことだねえ。そんなら舟でおかへりな、しかし揺れてわるからうから、駕籠の方がよからうか」小三「ナニ、それにも及びません。ずゐぶん歩いてまゐられますから」菊「それでもおまへ氣色がわるいに、往還ではくたびれるヨ」小三「いゝエ、却てすこしづつ頭痛のいたす時は、歩くはうが勝手でございます」菊「さうかへ、そんなら金ばうばかりも泊めてお出な。なう金坊、おまへは、乳母と爰へおとまりよ」トいだきあぐればうれしさうた、金「アイ、坊、をばちやん所へ、寐仕て、お池の龜ン子つやまいゆよ」トゐなかめづらしき子心に、かへるそらのなかりしかば、小三も心にあんどして、小三「オヤ、そんなら坊はおとなしくして、おとまりヨ。ばゝアのいふ事をよくきいて、だゝを言つてすねるではないヨ。アノ内に居る様におこるとの、をばさんが、泊めてくださらないヨ。あなたが可愛がつてくださるから、直に泊らうと申シまして、おくめんが無くつてこまります」菊「それだからまことに可愛いゝのサ。人見しりをする子供は、愛想をしても泣出すから、うつかり口もきけないが、この子のやうなにこやかな、可愛らしい子はありません」小三「坊はまことに仕合ものだよ。こんな野廣い所へ泊めていたゞいて、おつかァよりあやかり者だの。そしてアノ坊や、おつかァが居なくな

力になつたりなられたりするのは、そりやァ言はないでも知れた事。もう〳〵そんな愚痴はやめて、金坊をつれて梅屋敷へでも行つて、ちつと氣ばらしをしてお出」トなぐさめるをりから金の助も、庭のあそびにあきたるにや、乳母にいだかれ座敷へ來れば、紫雲は抱きつあやしつして、わが子のごとくに慈愛み、是よりみな〳〵もろともに、梅別莊へゆかんとて、内には下女と下男を、殘して小三と紫雲は連立ち、花屋敷より蓮華寺の、大師へ詣に出行きしが、程なくして立歸り、紫雲は種々の美味をとゝのへ、みな〳〵に夕餉をすゝむる、馳走に時を移しければ、秋の日のはや西にかたぶき、入相ちかくなりしかば、小三は家にかへらんと、きせるなどしまひながら、小三「ヤレ〳〵今日は久しぶりで、つひになくゆる〳〵と、身のうへばなしに鬱をはらし、まことに保養いたしました。日の暮れるにも氣がつかず、盡きぬはなしをくりかへして、大きに遲くなりました。乳母、おまへも支度がよいなら、モウそろ〳〵歸らうぢやアないか」紫「マアおまへ、よいわナ。それに今日は遲くもなるし、内にさしたる用がなくば、又かういふよい首尾はないから、今夜一ト晩泊つてお出な。病氣がよくなつて、座敷へ出るやうになると、又出るといふが手重になつて、いつ來られるか知れないから、寐物がたりにゆつくりと、身の上ばなしの跡をついで、ふさぐ胸をはらしてお出よ」小三「私もたまたまではございますし、盡きぬお名殘だからどうぞして、泊つてまゐりたいと存じますが、今

まずと、金ばうの行末を神佛に祈つて、成人させるがおまへの手柄、女の道の缺けぬといふもの。しかし子もちの身でありながら、旦那の爲の手助に、身すぎ世すぎといふものゝ、人の機げん氣づまを取る、今の身での座しき活業は、ア、さぞいやだらうつらからうと、わたしがむかしの身を思つても、おまへの心が悟られて、もう／＼胸もはりさくやう、何かにつけて苦が絶えぬから、ふさいで病氣のおこる筈。とはいふものゝわたしと違ひ、おまへは身ひとつといふではなし、幾度もくどく言ふやうなれど、あんまり苦勞に苦勞をかさねて、今のわづらひが大病になると、もしもの事がありもしまいが、さういふ時にはわたしはもとより、金ばうも便がなくなるから、どうぞこの末は願でもかけて、煩はぬやうに爲ておくれ」トさすが姉だけ理をわけて、いもとをあはれむしんせつは、かくぞありたきものぞかし。小三「その御意見につきまして、申すやうではございますが、人の命はけふが今日、明日があすとて定まらぬ、世のならひゆゑわたくしが、けふが日ももしもの事があらうや、知れぬ生身のことなれば、逆さまながら御回向を、受けます事もあらうも知れず、達者で居つてもなき後でも、眞身はあなたおひとりゆゑ、何彼につけて金ばうが事を、どうぞおねがひ申しますから、わるい事はどの樣にも、お呵りなすつてくださいまし」ト子にまよふゆゑひたすらに、たのむ言葉ぞあはれなり。小三「なんだエ、モウ、そんな哀れつぽい事はいつておくれでない。姉となり妹と生れて來たからは、

それはほんの一隨。はやい譬か世の中に、子寶とさへいふものを、大切な金錢よりも、子ほどまさつた寶はないと、誰しも知つた世の諺、子を持つた身に苦勞の絶えぬは、お前ばかりではあるまいし、みんな世間のならひだわネ。高貴でも下賤でも、子にひかさるゝは親の常、マア見るかげもない橋の上の、むしろ蒲團に世をおくる、食ふや食はずの乞食でさへ、子を大切に可愛がり、寐る目も寐ずに育てあげても、出世の出來ぬ乞食は乞食、上を見れば方圖がないから、貧しいものを思ひやれば、寒い目もせず不自由なく、くらしてゐるは安樂さネ。欲に限のない世の中ゆゑ、十分なことも不足におもふは、人情だから仕方もないが、おまへなんぞも日かげの身で、儘にならぬを苦におしだが、滿つれば缺けるといふ通り、十分すぎた事はないもの。人のほしがる金銀が、有り餘るほどの大家には、子を欲がるほど子が出來ず、貧乏人の子澤山を、うらやむと云ふことだから、金錢づくにも換られぬは、金ばうといふアノ大事の子寶、よし病身の生れつきで、人の知らない苦勞をするも、親となり子となるほどの、因緣づくだとあきらめて、面倒を見て育てなくつては、親の役目がすまぬといふもの。サアそれだから少しの事を、くよ〳〵案じて煩つては、おまへの身にも壽命の毒、彼子の爲にもなるまいから、氣を引立てて、煩はぬ樣に、身を厭ふのが肝心さ。世に樂も何にもない、わたしが身をうらや

菓子をあてがひますと、又食べすぎてはお腹が痛い、痛い〳〵の食傷の度毎に、虫氣でいつもちよつとは直らず。一體ひよわい生れだのに、わたくしの乳で育てぬから、猶病身になりますると、おもへば不便がいやまして、よその丈夫の子供のやうに、折檻もしず、つよくも叱らず、わんぱくそだちが增長して、手にのらぬ程のいたづら者に、なりましたせゐかして、些づつ丈夫に育つやうだと思へば、旦那は又行儀がわるいの、育てがらが悪いからのと、あの子の身の爲をおもつて、小言をおつしやるも無理ではないが、まだやう〳〵丸三歳に、なるかならぬのふところそだち、生れ落からちやほや言つて、あんまり大事に爲すぎたゆゑ、わがまゝ氣まゝに育つ筈、今更急にせつかんしたり、泣く時あたまを批たりして、きびしくしたらわが儘も、少しづつは直りませうが、只でさへひよわい子が、それこそ驚風の虫でも引出し、ほんとうの病身になりますだらう。可愛いゝにつけ不便につけ、苦勞のやすまる隙もなく、氣で氣をつかひます故に、今の病氣もおこりましたの。是もわたくしが氣がちひさいから、せずとよい苦勞を餘計にいたして、壽命をちゞめますも心がら、とても長生はできませんが、思へばまことに世の中ほど、うるさいものは御座りません。それゆゑにこそあなたのお身が、お羨ましうござります」ト涙ながらのかこちごと、聞くもなみだの目をしばたゝき、ふさがる胸をなでおろしつゝ、案「ほんにさう言へばさうでもあらう、けれども

たさに、小三は始終涙にくれ、胸もはりさくばかりにて、顔もえあげず居たりしが、やう〳〵袖になみだをはらひ、小三「眞實眞身の妹と、おぼしめしてくだされぱこそ、お案じなすつての段々のお言葉、うれしいにつけ悲しいにつけ、なんであなたを隔てませう。この世に杖とも柱とも、力に思ふはあなたおひとり、浮世に人は澤山あれど、考へて見るとおまへさんや、わたくしほどな因果者は、あんまり外にはありますまい。生れ落ちると親にはなれ、姉妹二人揃ひもそろつて、古郷をよそにはる〴〵と、知らぬ東へさまよひ來て、うき川竹のながれに沈み、苦勞にくらうを爲ぬいたあげくに、あなたは行末たよりのお人に、はやくお別れなすつたゆゑ、お若い身そらに世を捨てて、附會しらぬ佛の道、夫にひきかへ私は、恩と情を捨かねし、浮世の義理にせめられて、日陰に咲きし徒花の、散りてゆく身はいとはねど、まだ撫子も芽生にて、育てあげぬが一ツの氣がかり」三紫「そのなでし子が氣がかりとはエ」トとがめられてこゝろづき、小三「サア、その氣がかりとは金坊が事、とかく虫持で病身ゆゑ、明けても暮れても苦勞になり、どうぞ丈夫に育てたいと、思ひましても子供の事、何が食べたい彼が食べたいと、それは〳〵日がな一日、見る程の物食べたがり、ねだり事も三度に一度は、食過ぎぬやうに氣をつけて、騙し賺せばぐわんぜもなく、いやいやをして泣きますから、ツイ可愛さにひかされて、灸でおどすより早でまはしと、ねだるお

ばうして、末の榮をたのしみに、時節をまつのが樂の種、すこしの事をきな〳〵思つて、あんまり苦勞ばつかりおしだと、大わづらひにでもならうも知れず、氣をきりかへて私にも、苦勞をさせておくれでない」トしんみのことば身にしみて、うれしさあまるかなしさの泪を袖に包みかね、袂をぬらし暫時は、詞さへ泣くばかりなり。紫雲はこれを案じわび、倘や金五郎が小三を見かぎり、お雪にこゝろを移せしゆゑ、胸を苦しめ氣をつかひて、このわづらひの出しかと、おもひすごしてひざすりよせ、紫「おまへのふさぐを見るにつけ、病の根が知れないから、どうもわたしは案じられるよ。癪や血の道でふさぐのなら、案じるほどの事もないが、何やらひどく氣をいため、心の疲のわづらひかと、見たはひが目か知らないが、思案に落ちない事でもあつて、一人で心勞してゐると、ろくなことは考へ付かず、苦勞にくらうを增すやうな、つまらぬ事を考へ出すから、だん〳〵病氣は重るとも、快氣方はすくないものさ。他人は格別眞身のわたし、世を捨てし身といひながら、苦勞な事があるならば、お前の胸を隱さずに、はなして聞かせておくれなら、女の智惠の淺はかでも、そこは膝とも談合づく、へだてぬでこそ實の姉妹。からす啼がわるいにつけ、夢見のわるいや何かにつけ、おまへの事が氣にかゝり、後生を願ふさまたげど、おもへど凡夫のかなしさに、浮世を捨てゝもやつぱり苦勞、心の休まる間はないわネ」トまことをあらはす言葉の中に、なさけと泪をふくみたる、姉の意見のありが

三編中卷

第八回

その時紫雲は長羅宇の、烟管に多葉粉を吸つけて、（小三に出せば、手にとりながら、）小三「ほんにお羨ましいはあなたのお身、うるさい世事の御苦勞もなく、朝夕こんな靜なところに、憂世を捨ての樂なおくらし、わたくしもどうぞ三日なりとも、佛につかへて死にたいと、心に願つて居りますが、身の罪障が深いかして、それさへかなはぬ憂苦勞、なんの因果でござりませう」（ト始終なみだにむせびがち、紫雲も何となくむねせまり、）紫「なんのわたしの身の上が、うらやましいとはおまへの僻事、世に在りてこそ人は花、金ばうといふ實を結んで、苦勞はあらうが又樂み、旦那も人におすぐれなすつた、發明なお方ゆゑ、行末はそれこそ安樂だわネ。おもしろい事もをかしい事も、たのしみもかなしみも、知らぬこの世の世捨人が、なんの本意であるものかネ。是も定まる因縁と、思つて居てこそ又安樂、姉妹二人が同じやうに、浮世を捨てては亡親たちの、菩提の爲と思はれやうが、却てそれでは不孝の罪、せめておまへは人なみに、世を過ぎてこそ兩親が、草葉の影からおよろこび、かならず〳〵わたしが身を、うらやまないで金ばうや、旦那を朝暮大切に、うき苦勞をもしん

を連れて、梅屋敷の七草から、蓮華寺の大師様へお參り申しませう。今年は旦那も前厄でございますから、お身のうへに何事もないやうに、金ばうの行末やわたくしの、後の世の助かるやうに、よく祈つて參りませう」（トほろりと泪こぼすにぞ、紫雲も何とやらあはれになり、）紫「ほんにおまへもわたしに似て、後生願ひだと見えるねえ。金ばうは退屈だらうから、三松と一緒に、お庭の池の緋鯉に、お菓子でもやつておあそび」（トいはれて金の助はいそ／＼よろこび、うばに手をひかれて庭におりたち、）丁稚の三松を相手にして、池のほとりをめぐり歩き、緋鯉龜の子などおひまはし、餘念もなくぞ遊びゐる。

うで御座いますかヱ。サア坊、いたゞいておたべ。ばゞアにもお相伴させませう」金「おつかちやん、牡丹餅おいちいヨ。坊たんと食べゆヨ」小三「ほんに誠においしう御座いますチエ。乳母とんだよいお菓子だのう」うば「さやうで御座います。此樣なお菓子を、向島で賣りますのを、さつぱり存じませんチエ」小三「さうさ、モシお姉さんエ、これは御近所で初めましたかエ」紫「アイ、直この秋葉さまの裏門の通で、土手へ出る道サ。松花園といふ家で、ちかごろ賣初めたが、とんだ好くするチエ」小三「さやうで御座います。實に美味ございますから、坊が大悦びで、たんといたゞきます」紫「それはよかつたチエ。金ばう、たんとおたべヨ。乳母は酒の方だから、今にお肴が來ると、一ト口あげるヨ」うば「イエ、御酒よりか又、このおはぎと都鳥は、結構でございます。そして手綺麗でございますから、おつかひ物やお土産などには、よろしう御座いますチエ。これは今にはやり出しませう」紫「さうサ。わたしの所の本店なぞでも、人をつかはさる度毎に、いつでも買つて來いとおつしやるさうさ。何所でも評判がよいからはやつて來るのサ」小三「ほんに向島も、今ぢやァ都になりましたチエ」紫「此節はおまへ、梅屋敷の七草が盛だから、たいさう見物の人が出るヨ。それに蓮華寺の大師さまのお庭がよく出來たから、だん〳〵こつちも賑やかになるチ」小三「左樣でございますチエ。私も些休みましたら、坊

おくれ」うば「イエモウ、お利口なお生れつきで御座いますから、目からお口へぬけますやうで、よその子供衆より御合點がよくまゐりますのさ」二紫「ほんにさうだらうチエ。金ばうヤ、おとつさんは御機嫌よいかエ」金「アイ、おとつちやんお屋敷に、お竹内に居ゆヨ」紫「ヲ、お竹は内におるす番で、おとつさんはお屋敷かエ。よくわかるねえ。お常ヤ、お煮花を早くこしらへて、ソシテ今さういつた物を取りにやつておくれかエ」下女「ハイ〳〵、只今お煮花もできますヨ。アノお菓子も、三松どんが取つて參じました」紫「そんなら早く爰へ持つて來て、金坊に上げておくれ。そしての、鯛七へさう言つてやつて、金坊ヤおつかさんのお好な、旨い魚を取つておくれヨ」下女「ハイ〳〵、かしこまりました」トにばなと菓子をもちはこぶ。小三「オヤモウおかまいなさいますな。今日は御馳走をいたゞきますより、久しぶりでゆつくりと、むかし咄や、うさばなしで、氣を晴すのが何より御馳走」紫「ほんにさうさねえ。女といふものは久しぶりで逢つても、身の上ばなしかなんぞより、外にはなしは無いものさ。マアお茶ができたからお菓子をおあがり。サア金ばう、好ならたんとおあがりヨ」小三「ハイありがたう。左樣なら坊やいたゞきな。オヤ〳〵おめづらしい、お牡丹餅でございますかエ」紫「アイ、富貴牡丹といふ道明寺のおはぎサ。そちらにあるのは都鳥といふお菓子で、兩方ながら向島の名物だから食べて御覽」小三「ほんにさや

こしだから、どういふ様子かと、いつそモウ案じくらして、ちよつと見舞にまゐらうと思つてゐたが、あいにく私も時候にあたつて、つい〱けふまで出かねてゐたよ。まだおまへも顔の色もわるいが、氣分はだん〱よい方かヱ。そして舟ででもお出のかヱ」小三「イヽエ、あるいて參りましたよ。見かけ程心もちは惡くもございませんが、只ふさぐばかりで御座いますのさ。私はモウ手まへにかまけて、御無沙汰ばかりいたしますから、あなたのおあんばいのお惡かつたのを、ぞんじませんでお尋ね申しもいたしません」粂「ナニサ、わたしのはほんの當分の事、モウさつぱりと快いヨ。ほんに金ばうよくお出だネ。ちつと見ない中に大きくお成りだぞ。目つきや口もとがおとつさんに生だねえ」小三「金ばうや、手をついておばさんに、ハイ御機げんようとお辭義をしなよ」粂「アイ〱、よくお辭義ができますぞ、利口ものだぞ。サア〱おばさんに抱子をおし、うまいものを御馳走するから。オヽよく言ふことをお肯きだぞ。可愛いいねえ」ト金の助をひざの上に、いだきあげながら乳母にむかひ、粂「乳母アお出かヱ。ハイしばらく。おたつしやでよい子」うば「へイありがたうござります。まことに御無沙汰さまをいたします。へヽヽヽ。オヤお坊さん、お嬉しうございますかヱ。お抱子でようございますネヱ」粂「この子もおまへの丹精で、まことにおとなしく成人したネヱ。ほんに氏より育てがらとやら、この末ともどうぞ面倒見てやつて

なれば、あはれ尼となり佛門に入りて、隱居をはじめ亡親の、後の世をも弔はんこと、生涯の願なりとて、ひたすらに望みけるゆゑ、本家の主もその心操の、淸らかなるを深く感じて、望に任せて、別莊を眞名鶴にゆづり、その庭の中に庵を造らせ、念佛庵といふ號をつけて、佛事をいとなむ補助とし、日々の雜費は月每におくり、不自由なく暮させければ、眞名鶴は日ごろの望もかなひ、その恩義の厚きをよろこび、浮世をのがれし心地にて、髮を切り尼となり、名を紫雲とあらため、月々に彼庵にて、百萬遍をいとなみつ、佛に仕ふるを身の業とし、行ひすまして暮しけるは、いと〳〵殊勝の事なりけり。頃しも秋の中なれば、庭面に桔梗、女郎花、なでし子、藤ばかまなど、さま〴〵秋草の咲みちたるまゝ、紫雲は御佛にまゐらせんと、庭下駄をはき下りたちて、花を手折りて居るをりから、枝折戸の外に人音する故、ふりかへりてひとめ見るより、紫「オヤ〳〵、青柳橋の姉さんだネ。よくマアお出だねえ。サア〳〵こつちへお上りナ。ヤレ〳〵よくお出だ」トさすがしんみのきやうだいゆゑ、よろこぶこと大方ならず。小三も姉の無事な顏を、見て嬉しさのかぎりなく、乳母の背中に負はれゐる。金之助を抱きおろし、手をひきて座敷へ通り、おさだまりの挨拶すみて、みやげ物などいだすとき、紫「ヤレ〳〵まことに久しぶりだネ。オヤ御無用におしならよいに、遠方だのにお土產まで。ほんにこのあひだ人をあげた時、おまへがちつと氣色がわるいと、お返事に書いておよ

やうに食べしまひ、楊枝をつかひながら、氣のぬけし如く、考へて居たりしが、うばにむかひ、小三「ばゝアヤ、けふは旦那もいろ〳〵御用があるさうだから、モウ出直してお出なさりもしまひし、わたしも氣分が大きによいから、保養がてら今ッから、向島へ行かうと思ふよ。それに此節はモウ、花屋敷の七草もさかりだらうし、天氣はよし、金ばうをつれて、ぶら〳〵と出かけやうよ」うば「それは宜しうございますが、おあんばいの惡いのに、遠道をお歩きなすつたら、又あとがお惡うございませうョ」小三「ナニ、爰からはそんなに遠くもないものを、ぶら〳〵と出かけたら、氣がはれて却てよからうョ。向島の姉さんも、金坊が成人したのを見たがつて、連れて來い〳〵と、お文をたび〳〵およこしだから、マア何にしても出かけやうョ」ト是より小三は身じたくして下女のお竹を内にのこし、乳母に金之助をおぶはせて、向島へと出行きける。小三の姉眞名鶴は、富家の隱居に愛せられて、向島の洲崎村なる、秋葉の社のほとり近くの、別莊に住居して、月雪花を友としつ、いと樂々とくらし居けるが、この春隱居は世を去りて、なき人の數に入りしかば、本家の主人も眞名鶴の、便なき身をあはれみおもひ、殊に壯年のことなれば、いづかたへなりとも支度して、嫁入らせやらんと深切に、情厚くいひけれども、眞名鶴は今更縁付きて、榮耀を望む心もなく、勤の身にて年久しく、つらい苦勞も爲あきたれば、たとひ不自由のくらしをするとも、世を物靜やかに送らんこそ、上もなき樂み

マア何でもいゝから一緒に來いく。そんなら小三大事にしな。婆ア氣を付けてくんなよ」トいひつゝおりてざうりをはけば、金の助はお竹にいだかれ、さきへおもてへ出てゐる。小三は金五郎のうしろより、著物のえりをなほしながら、小三「さやうなら御機げんよう。オヤあなた、ちよつとこちらを向いてお見せなさいまし」トいとまごひにも別を惜しめば、金五郎はふりかへりて金「ナゼ、己がどうぞしたか」小三「ハイお頭上に何やら芥が」トとる手もふるへ聲くもり、これがこの世の見をさめかと、おもへば心も消えぐに、じつと見つめる目に泪、せきくる胸のせつなさを、咳にまぎらす顔に袖、あてて泣く目をかくすなる、心の中の四苦八苦、思ひやるさへ哀なり。金の助はわけもなく、金の助「おとつちやん早くお出よう、坊背負ちて待て居るヨ」トせたげられて金五郎も、せんかたなさに格子戸を、跨ぐはずみに門口の、石につまづきよろ〳〵金五郎「ホイ、こいつアしまつた」小三「オヤ、どうなさいましたエ」金五郎「ナニ、鼻緒を踏切つたのヨ。ハテめんような。きのふ買つた雪踏だから、切れる筈はねへけれど、どうも不思議ぢやアねへかのう」ト又氣にかけて思案がほ、小三「そんならアノ、昨日お買ひなすつた、お雪踏の鼻緒が、アノ切れましたかエ」金「フウ、こいつアどうも氣がかりだ」小三「エヽ」トむねにこたへてはつといき、「あのそんなら、お雪踏をお竹に持たせて、直しの所へおやんなさいましな」金「なアに、二本鼻緒が一本切れたのだから、履いて行つて橋臺で直させやう。サア金ばう、一緒に來な」ト心ならずも出行きける。小三は金五郎の後影、見ゆるまで見送りて、名残の泪のやるせなく、止めかねしをかくては果てじと、思ひかへして食事をば、やう

呉よう」小三「アイ〳〵、モウお遊びはいや〳〵かエ。そんならばゞアや、お菓子でもやつてお
くれヨ」うば「ハイ〳〵。お坊さん、サア落雁をあげませうチエ」金の「乳母、坊、落雁いや〳〵
だヨ。梨子食べたいよ。おつかちやん、佛ちやんの梨子おくえよう」小三「ナニ佛さんの梨子か
エ。坊はこのあひだ、お歯が痛々だつたから、信州の戸隱さんにお願ひ申したから、梨子は食
べられないからお菓子におしよ。いゞ子だチエ坊は」金の「お菓子いや〳〵だもの。佛ちやんに
あんがちて居る、梨子おくえよウ」トすこし泣聲になる。金五郎「坊や、なぜ其樣にだゞをいふ。梨子は毒だ
から惡い〳〵。だゞをいつていびるから、おつかアの病氣がわるくなるのだ。おとなしくして
お菓子をたべな、赤いうまいのがあるから。コレ坊ヤ、なぜそんなに似指をいぢるのだ。似指
をいぢると手へ灸するよ」金の助「灸いや〳〵、御めんだよウ。おとつちやん似指いぢやないか
ヤ、何じよ買つておくえよウ」金五郎「ヲゞ、さうおとなしくするなら、旨い物を買つてやりませ
う。おとつさんはお屋敷へ歸るから、お竹に抱子して、兩國のお橋の方へ一緒に來な。お菓子
と、お手遊と、そして何を買つてやらうのう」金の助「アノウお菓子とおもちやと、そイかヤ、アノ
ウ佛ちやん上げる、花々買つてお呉よウ」トいはれて小三はむねにぎつくり、金五郎も氣にかゝれば、金五郎「エ、このばうずは、妙な子
だのう。なんだといふと佛さんへ買つて上げやう〳〵といふが、氣になる事をいふ坊主だぞ。

それ〳〵、金ばうの背中の灸がまがつてをりましたから、どうぞ直してやつてくださいまし。そしてまだ疱瘡前でございますから、觀音さまの二王さまの股を潜らせてくださいましョ。此頃はあつちこつちに、だいぶ疱瘡がありますさうだから。それにアノ、モウ獨行をいたして、浮雲くつてなりませんから、轉ばずの玉子守と、水天宮さまのお守を懸けさせてやつてくださいまし。爰らは近所に川が多うございますから、水が怖くつてなりません」ト萬事につけて子を案じる心のうちぞふびんなり。金五郎「なんだな、そんな事はいつでも言はれるものを。あんまりいろ〳〵な事をいふから、おれも歸るのがをかしいやうだ。マア、モウ一ぷく呑んでから歸る事とせう」ト男心にも氣にかゝれば、わかれのつらきも無理ならず。小三はたばこを吸付けて出しながら、小三「袖引たばこであなたのお足を、無理にとゞめた歌妓の時分は、眞のくらうも苦にならず、はやく身まゝになりたいと、樂み盡きてかなしい今の身、おもへば夢のやうでございますねえ」金五郎「さうよ、この子のできねへ時分が、ほんの色事後生樂、むりな口說にすねたり妬いたり、つらいと思ふは逢はねへ晩、ゆうべの恨は今夜の手くだ、おもしろい事もたのしみも、かんげへて見ると昔のやうだ。爺いじみた言ひぐさだが、アヽ年はなんでも重らねえ事た。あの時分のやうな身のうへに、もう一度なつて見てえものだ」トもゆつくわいめきたるくりごとに、ふさぐ心を子は知らで、金の助はあそびにあきけん、金の「おつかアちやん、坊、ばゞアと遊ぶの、モウいや〳〵だよ。なんじよ旨いものお

ひとりが頼だから、ずゐぶん氣をつけてやつてくんな。女といふものは心の狭えものだから、ひよんな事でもしめえかと、夫が一ぱい心配だ」トいひながら金の助のあたまをおさへて、「こりや金ばうヤ、おつかアはきい〳〵がわりいからの、あんまり世話をやかせずに、おとなしくして居るのだヨ。又明日來る時に、お土産をたんと買つて來てやりませう」トいへば嬉しさうにひざにとりつき、金「おとつちやん、坊おとなちくするかや、うまい物お呉よ。明日おつかちやんきい〳〵まだわゆいかャ、坊おとなちくすゆョ」金五郎「ヲヽ、さうだ〳〵。坊は利口ものだからおとなしくするのう。そんならおとつざんはマア歸りませう。おつかアはまだ目を覺さねえから、靜にしなよ」トいふ聲きゝつけ小三はおきいで、小三「オヤモウあなたお歸りなさいますかエ。今日は御番でありますか」金五郎「フウ、モウ四ッだから歸らざアなるめえ。なんぞ用でもあるのか」小三「さやうさねえ、用と申すのでもございませんが、なんだか今朝は御歸し申すのが」トなごり惜しげなやうすゆゑ、金「又そんなことを言つて、とめるのか。けふは顔ッつきがでえぶいゝやうだぜ。なんにしても歸つて又出直して來やう。主人へつとめの間をかゝぬも、親父や祖父さんへの心やすめだ。マアなんでも精出して藥を呑むがいゝぜ」小三「それでもあなた、今夜はお出なさりやアしますまいネ」金「大抵なら繰合して來る氣だが、あんまり遲ければ、明日の朝は是非來るヨ。それとも用でもあるなら、さういつておきねえ」小三「ほんに

が、そんなに不自由もさせめえし、日かげ者でもなんでも、共に心さへ變らねへけりやアいいぢやアねへか。儘にならぬのが浮世だとは、唄にさへうたふから、其處を承知して、なにも時節だと、氣を大きく持つて往生して居なけりやア、苦の世界が渡られるものかな。ほんに往生するといつちやア氣がかりだつけ。ア、鶴龜々々」ト小三のこゝろをなぐさむる、ことばのはしにもいまはしき、ことのみいひて氣にかけるも、むしのしらするゆゑなるべし。この日は金五郎も何となく、小三の身が案じられて、歸る心もなかりしかば、看病がてらこゝに泊りて、夜もすがら沈りがちなる事のみはなして、夜更けてみな〳〵打臥しける。あくる朝金五郎は、早く起出で仕への身なれば、たち歸らんと身じたくするに、小三は心のつかれにや、まだ目覺さぬこなたには、金の助があさおきにて、うばをあひ手にあそびゐる、そばへ來りてあやしながら、金五郎「ばゝアや、子どもといふものは、まことに朝おきなものだのう。坊ャのしやべる聲で、おらア目を覺したやつよ」うば「さやうで御座いますかエ。どう致してもお坊さんは、お晝寢をなさいますから、朝がお早うございますのさ。ほんにおつかさんはまだ、お目ざめがございませんネ。旦那さんエ、あなたはさぞモウ御苦勞でございませうが、まことにお困んなすつた事でございますネエ」金「さうよ、實に苦勞でならねへ。それになんだか氣にかゝる事ばつかりいふから、どうも案じられて安心ならねへヨ。おれは勤の身のことゆゑ、毎日附どほしに附いても居られず、なんでも手前

勞をかけ申さぬやうに、御孝行になすつてくださいますれば、わたくしはモウどのやうな、佛事供養をしてくださるより、思ひ殘す事もなく、うかみます。あなたには子どもの時からおなじみ申シて、ひとかたならぬ御恩をうけましたが、この世の縁が薄いかして、この子ができても末かけて、添ふにそはれぬ身の因果、何のむくいでこのやうに、後生のわるい生れかと、いくたび思ひかへしても、かへらぬ事でござりますが、これもやつぱり女の愚痴、このうへのお情には、わたくしのからだは、あなたのお寺へ、どうぞ遣つてくださいまし。さうしたならあの世へ行つて、お側に居られませうかと、儚いやうでございますが、今の身にてはそれがたのしみ、お察しなすつてくださいまし」ト又もなみだともろともに、くりかへしてぞ歎きける。金五郎「まだそんなつまらねへ事をいふよ。あんまりくよ〳〵思ふから、ちつと取のぼせたのぢやァ無へかノ。この一日二日は、なんでもおれの顔さへ見ると、あはれつぽい事ばつかりいふから、おれまでどうか氣色がわるくなるやうだ、愚痴なことを考へ立して、氣でも狂ふといかねへから、ほんに氣をしつかり持つがいゝぜ。お雪にひどく氣がねをするから、それでこんな病氣が發るのだらう。あの子お雪の事と祝言したのは、知つてる通り、祖父さんや親父の氣やすめの爲だから、何も今更おめへを捨てる心もなし、又金坊ができたから、榮耀榮花こそさせられねへ

母のお乳もかたはらに、二人がこゝろを推量して、共になみだに嗚咽びける。小三はやう〳〵なみだをぬぐひ、「この子のまだぐわんぜもなく、わたしが愚痴な心から、つまらぬ事を案じ立して、あんまり悲しくなつたゆゑ、つい泪をこぼしたのを、旦那に呵られる事かとおもひ、あやまる心のしほらしさ。なぜ子どもといふものは、こんなにもマアかはいからう。この子の成人するにつけ、欲にかぎりは無いゆゑに、いつまでもたつしやでゐる氣でも、壽命がなければそれもかなはず。もしあすが日に目を眠つたら、さぞマア後で泣くだらうと、それが今から見らるゝやうで、死ぬ氣はさら〳〵ないけれど、とても長命のできないわたくし、遺言ではござりませんが、ひよつとマアさかさまな事で、この儘死にでもいたしましたら、たより少いこの子の身のうへ、佗人の手にかけないやうに、どうぞ向島の姉さんのところへ、お預けなすつてくださいまし。とても日かげで育つたこの子、末始終あなたの御家督を、つぎます事もなりますまいから、養子にやらねばならぬ生さき、今からあんまり他人の中で、いぢめられたり苦勞をさせたら、根がひよわい生れゆゑ、虫もちにでもなりませうから、外へやつてくださいますな。御如才もござりますまいが、六ツか七ツにもなりましたら、手ならひや讀書も、敎へてやつてくださいまし。又二ツにはお雪さんと、御夫婦中よくおくらしなすつて、御祖父さんはじめ御兩親へも、御苦

に煩つてくれちやア、實にどうも困りきるぜ。是からは考え事はさらりとやめて、苦勞は地獄へでも捨ててしまふがいゝ」小三「あなたはさう一ト口におつしやいますが、とても女は罪が深いから、苦勞は一生放れません。苦勞より此體が、さきへ地獄へ參りませう」トあはれなことをいひ出すにぞ、金五郎もむねふさがりて、金「その氣の小せえのが病の原だ。老人かなんぞぢやアあるめえし、是しきな病氣で死ぬものかな。ちつと氣をきりけえて、向島の姉御の所へ、保養にでも行つて見るがいゝ」小三「わたくしも向じまの姉さんに、久しく逢ひませんから、この間からどうぞして、まゐりたいと存じてをりました。老少不定は世のならひ、盛りの花も散るは常、定めなき世と申シますから、あすをも知れぬわたくしが身のうへ、もしもの事があつたらば」トあといひさしてむねせまり、金五郎のかほと金の助の顔を見つめる目になみだ、袖にあぶれて膝のうへに、雫と落つるを子心に、ふしんにおもふ金之助は、のびあがりて小三の顔を、つく〴〵と見てひざにとりつき、金の助「おつかちやん、なに泣くのだエ。おとつちやんお呵いか。坊あやまゆから堪忍ちておくえよウ」トいはれて小三はたまりかね、こゑをしのびてなきむせび、金の助をだきあげて、可愛さあまりてせつなさは、胸もはりさくばかりなる。金五郎も男心に、口にはさま〴〵言ひまぎらせど、小三の胸をおしはかり、せまき女のこゝろから、よしなき苦勞に取つめて、もしもの事もあらんかと、おもひ過して胸せまれど、さとられじとて鼻紙に、泪つゝむぞ無理ならず。乳

ことにあがりにくいさうで、ねつからどうも果取りません」金五郎「そりやァわりいのう。どうで藥は呑みにくいから、誰しもすゝんで呑むものはねへが、そんなに無精ぢやァどうもいかねへ。それにあの醫者にかけてから、ねつからはかぐ〜しく無へやうだから、なんなら醫者を取替るが宜からう」小三「ナニあのお醫者さまもお功者だから、轉ますにもおよびますまい。どうでかういふ病氣といふものは、はかぐ〜しい事はないと申しますから、お氣をもんでくださいますな。私がこのわづらひより、あなたに御苦勞かけます事かと、思ひまはしますと、もう〳〵、いつそこの儘死にました方が、はるか優でございませう」トいひつゝなみだはら〳〵。金五郎「またそんな馬鹿なことをいふヨ。なに死ぬのが優なものか。病は氣から發るといふから、氣の持ちやうで早くも直り、重くもなるのに、おめへのやうに些と煩ふと、死ぬ方がましだ〳〵と、氣で氣を病むものだから、ちよつとした病氣も埒があかねへのだ」小三「それでもどうも心から、氣で氣を病む氣はございませんが、もとより苦勞性な生れつきゆゑ、つまらない事も氣になつて、あんまり深く考へますから」金五郎「それがわりいナ。寐る目もねずに考へて、氣で氣をもんで苦勞をしても、儘にならねへことが儘になるものかナ。餘計な苦勞で命を削るやうなものだ。勿論平生おれの爲をおもつて、人の知らねへ苦勞をして呉れるのは、眞實うれしいは山々だが、こんな

かへす迷の闇に、ひとり胸のみ苦しめつ、年ごろ日ごろの辛勞が、つもり〱てこの頃は、うき立たぬ氣のむすぼれて、食事も日々にほそるものから、面もかたちも痩がれて、うつら〱と氣を病むも、ことわりせめて哀なり。かゝりし程に金五郎は、案じること大かたならず、藥よ醫者よとさま〲に、心を配り氣をつけて、いたはりやさしくさるゝにつけ、小三はいとゞその情の、あつきと恩の深かるを、おもひつゞけ考ふれば、いかに義理でも操でも、いとし可愛の夫と子を、捨てて死すべきやうもなく、いつその事に白翁が、緣きつてくれと賴みたる、事をうちあけ金五郎に、はなして談合したならば、どうかかうかとさま〲に、心もみだれ氣をもみて、病はます〱重るゆゑ、寐ても起きてものぼせるのみ、頭痛とゆるぐ齒のいたみに、胸のやすまるひまぞなき。金五郎は勤の身ながら、案じることひとかたならず、日毎々々に訪ひ來るが、今日しも例のごとく入來りて、（奥へとほれば小三のそばに金之助は、持あそびを、ところせましとならべたて、餘念もなくあそびゐる。）金五郎「どうだ小三、けふはちつとも快方かの」（トとはれて小三はくるしき中にも、金五郎のかほを見るより、なやめる顔につこりわらひ、）小三「ハイ、やつぱりけふも同じ事で、どうもふさいでなりません」金五郎「さうか、まことにどうも困つたものだ。藥は毎日精出してのむか。ばゝア立つけて呑ましてくんなヨ」（トうしろをむけば、うばは火ばちへ炭をつぎながら、）「ハイ、なるツたけ精出してお呑ませ申して、早くお快くしてあげたいと存じますが、今度のお醫者のお藥は、ま

三編上卷

第七回

生者必滅會者定離は、浮世のならひと悟つたる、言も今は身のうへに、おもひあたりし憂事と、小三は胸にこたへたる、人に知られぬ心勞も、かねての覺悟といひながら、さすが女のやるせなく、浮氣を捨てて眞實に、二世を三世と契りたる、かはらぬ中の金五郎の、爲とはいへど今さらに、義理といふ字にせめられて、緣を切らんはなか〳〵に、身を裂るゝより苦しくて、とやせんかくと案じれば、案じるほど猶物おもひ、まさる苦勞を胸の中に、置どころさへ泣のたね、心を鬼に持つとても、道に缺けたる愛想づかしは、いふにいはれぬ恩愛と、執著の絆斷難く、ふつ〳〵おもひ惱みしが、左にも右にも末かけて、添はれぬあだな緣ゆゑ、なまじひなこといひ出して、臨終に憎しみ受けんには、女子は罪の深き身に、罪かさなりていつの世に、罪滅さんやうはなし、うすき緣は前の世の、因果と思ひ定めなば、人をうらみ身をうらむ、よしなき罪はなきものをと、あぢきなき世を悟れども、心ぼそさのいとゞしく、生さきのある子を捨てて、いとしい男のためながら、暗き冥土へ旅立たんは、よく〳〵業の深き身と、又くり

娘節用三編序

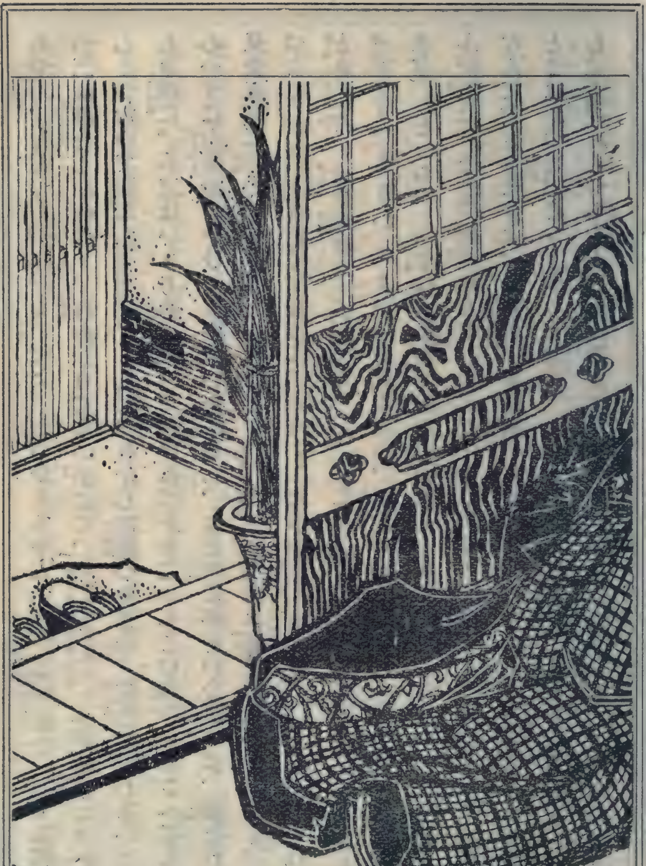
器の古きを愛るのは、ひねつた茶人の一癖にして、旨き物を食したがるは、小児と意地のきたな連中、婦人を視て目のなきは、放蕩家の病なるべし。觀所と趣向のあたらしきを、妙で誤說の咎もなく、ヤンヤと蘭語で贊言は、戲作通の看的、評判よし野の花より高く、部數は春の山ほどに、賣らん事を欲するは、言はねどしるき發客の慾情、活業原より忌敵、速いが勝の新版は、夕河岸の魚を競ふに齊し。近屬娘節用の、刻成つて發市は、近きにあれば序文でも、口上なりと出たらめに、早く〳〵と書肆より、使をおこして居催促、机下に居眠りし、調市の鼾を聽きながら、筆を採りて斯くばかり、有の儘に記すになん。

甲午の孟春　　　　　　　三文舍主人

ア夢にも氣がつかねへよ。末々かけて夫婦だと、互におもひ思はれたに、お雪といふ惡魔が這入つて、苦勞をさせるせつなさつらさ。夫故にこそ祖父さんや兩親へ、一倍氣がねをするといふも、アヽうるせえ世の中だのう」小三「其様にマア、お雪さんのことを兎や角とおつしやるが、お雪さんは大事の〳〵、お家のお娘でござりますから、可愛がつてあげてくださいまし。どうで私は日蔭の身ゆゑ、どうなつても宜しうござりますから、そんなにあちこちお氣をつかつて、必ず煩うてくださいますな。それが私は苦勞で〳〵なりません」と、しばし泪にくれ六つの、かねの鳴るまでまどろまんと、金五郎はこゝにうち臥しける。是より小三、金五郎に、あいそづかしをいふや否や、そは三ぺんを見て知り給ふべし。

の代りばゝアと行つて、何ぞいゝ物をとつて來な」金之助「アイチヤウ、ばゝア行かうよう」トせたげるゆゑに次の間より、立出る乳母もなみだ顔、うば「サアお坊さん、まゐりませう」ト金之助をいだき、出てゆくそぶりをつく〴〵と見てふしんがほ、金「なんだ、てんぐ〳〵にをかしな顔をして、どうもおれにやア合點がいかねへ。なんぞ苦勞な事でも出來たか。コレ、なぜおれをば隔てるのだ。そりやア分らねへと言ふものだぜ」小三「エヽ、何も込入つた事もござりませんから、あなたを隔ては致しませんが、餘りうつ〳〵として居りましたから、つい色色な事を案じ過して、互にこしかた行末を咄して、果は泪をこぼし、ふさいでなりませぬからとろ〳〵と、少し氣を休めたのでござります。ガ、わたくしよりはあなたのお顔、いつにないお色のわるさ、お心持でもお悪くはござりませぬか」金「ナアニ、おれのはこりやア持めへだから、時々ふさぐが直になほるよ」ト口にはいへど心には、何くれかくれさま〴〵の、苦勞あれども男氣の、それと知らさぬ胸の中、言はぬはいふに彌增して、猶さらつらきものぞかし。小三「あなたちつとお氣ばらしに、御酒でもおあがんなさいませんかエ」金「いや〳〵酒よりはマア、ちつと寐やう。全體けふは番だから、どうも來られねへ處だつけが、きのふもをとゝひも來ねへから、又案じるだらうと、氣になつて、それでやう〳〵ぬけて來たのよ。一ト寐入やつたら直るだらう」ト小三のまくらを引よせて、ねころびながら、「のう小三、實に人のいつ生は、どうなるものか知れねへものだの。今ごろ斯して暮さうとは、おら

ちゃん、おとつちゃんがお出だよ。おつかァちゃん〳〵」ト出たりはいつたりするうちに、金五郎は入來るゆゑ、小三は顔をしかめつゝ、起あがりて右の手にて、むなさきをきつくおさへながら、小三「お出なさいまし」トいつたばかり、さしうつむいて詞なし。金五郎「どうした、をかしな顔つきだの。氣色でもわるいのか」トいつにかはらぬやさしき詞に、小三はいとゞ胸さきの、さけるばかりにさしこむ癪を、おさへても猶をさまらぬ、心一ッに白翁が、いひたる事をいかにせん、なま中な事をいひ出さば、頼まれしかひもなし、又金五郎に胸のうちをさとられじと、わざとなにげなく、小三「けふ髪をあらひましたら、まことに頭痛がつよくして、ふさいでならぬに、いろ〳〵な事を考へますと心ぼそくて、それでつい顔色も」トせつなさかくして笑ひがほ、金之助はさしのぞきて「おつかァちゃん、もう氣色なほつたかエ」トいはれてなみだをほろりとおとし、小三「アイ、もういゝよ」金五郎「なんの、氣色がわるさうなら、髪を洗はなけりやアいゝに」金之助「おとつちゃん、今ね、よしよのおぢいしやん來て、坊こはかつたよ」金五郎「ナニ、おぢいさんが來た。そりや何所のおぢいさんだ」トとはれて小三はほつとばかり胸とゞろくをそらさぬ顔で、小三「ナニサ、なんでござりますよ、矢劍堀の御隱居さんが、御出なすつたのでござりますが、この子は見るとこはがつて、どうもなりません。オホ、、、」トわらひにまぎらす心の中、さこそつらくも悲しかるべし。金之助「おとつちゃん、お土産あるかえ」金五郎「ホイ、しまつた、ツイ今日はわすれて來た。そ





ので、外面如菩薩内心如夜叉とかなんとか、佛さまがいはしつた通り、顔はうつくしくつても、肝魂のおそろしいのがあるものだ。しかしあの女もその息子の、一旦恩になつたから、男の爲や何かを思つて、死んだのはあつぱれ名が殘るが、をしいかな首をくゝつたからおしめえだ。とても死ぬならいさぎよく、身を投るもちうだから、剃刀で咽をぐつとやると、鏡山の尾上ときて、がうぎに利いてゐるぜ」■「さうよのう。そこがやつぱり氣がよわいから、剃刀でやつたら痛からうと思つて、縊つたのだらうが、見つともなかつた」▲「さうだらう〳〵。それぢやアやつぱりその息子の、面よごしでわらはれ草だの。ほんに死ぬのもよつぽどあんべえものだ。何にしても恐しや〳〵」トはなすを小三はきゝすまし、つく〴〵思ふひとりごと、「ハテ、世の中にも似た事があればあるもの。今のはなしの樣子では、この身に似たのも辻占か。あきもあかれもせぬ中を、心におもはぬ愛想づかしが、どうマア、なんと言はれやう。死ぬる今際に若旦那に、お腹をおたゝせ申しては、後の世までの心がかり、ひとつ蓮もおぼつかなし。アヽなんとせう彼とせう」トひとり胸のみ苦しめける。金之助は婢女のお竹と、いづかたへ行つて遊びゐたるか、嚢に白翁が立歸るとき、すれ違ひて歸り來しが、子ども心にも小三や乳母が、なにやら歎くやうすゆゑ、褒美さへもねだらずして、又門口に立出でて、土ほぜりして居る折から、金五郎が來るを見て、よろこびて内にかけこみ、金之助「おつかア

いけれど、首をくゝつて往生したアな」△「エ、縊つたか。ヤレ〳〵とんだ事をやらかしたの。そりやアマアどういふ譯だ」▲「聞きねえ。アノ女はの、婦多川の女郎だがの、さる所の息子に惚れて〳〵ほれぬいて、互に心をあかし合つて、末は女夫だ、夫婦にならうと約束をしたが、聞きねえ、その息子がおめへ、内にやアの、いゝ嫁があるんだアな。それを何でも深くかくして、まだ女房は持たねへから、請出す〳〵とだまかしたが、大ふでかしよ。それからおめへ、相應に金まはりもいゝもんだから、親父の金をひん盗んで、身請をして己が長屋へ、連れて來て圍つて置いての、女房はたゝき出しの、から、手におえねへから、親父はおほおこりで、上がたへやるの、田舎へやるのと、大もんちやくよ。した處があの女は、女郎に似あはぬよく出來た者で、嫁が出されたり、親父がおこつたのを聞くと、サア氣をもんで〳〵、息子が不埒とはいふものの、嫁を出したり内がもめるも、みんな私があやまりと、ひどく嫁に氣がねをして、生きてるちやア、四方八方、丸くいかねへと思つたさうで、とう〳〵書置をして、首をくゝつて死んでしまつたから、嫁も歸るし、息子もそれから、しかたがねへから穩順しくなつたが、なんとその女郎は、よつぽど氣めへもので胸がいゝに、第一、貞女といふ女だ」▲「ほんに女のかゞみだのう。水滸傳一百八人の中に、どうかありそうな豪傑な女だの。なるほど女は魔のも

をしたのぢやァなし、天道さまも見とほしゆゑ、今日はけふ、明日はあすと、その日の風に任するばかり。せつぱつまつたその時は、又外に思案もあらうから、それを案じてくんなさんな。今にも若旦那がお出なすつても、かならずわるい顔をしないで、今お祖父さんのお出なすつた事も、おしらせ申しちやァわるいよ」うば「それは呑こんで居りますが、なんぼお祖父さまのおたのみで、お家の爲や若旦那の、おためとは申しながら、常にかはつてあなたの氣づよさ、お思ひきりのよさといふものは、あんまり見事でござりますから、どうも合點がまゐりませぬ」（トいはれて小三はつと當惑）死する覺悟をさとられじと、（わざとまぎらすぢびやうの癪、）小三「アイタヽヽヽ、今のもや／＼で持病の癪が、どうやら頭痛もするやうな」（トまくらを取つてよこになる。）乳母はせん方なく／＼も、次の間へ立つて行きて、金之助のゆかたびらを、縫ふもなみだで果取らじ。小三はしばし氣をやすめんと、横に寐ても眠られず、只胸さきのみとゞろきて、とやせんかくやとさま／＼に、思ひなやみし折からに、隣れる家にて若者ども、二三人にて聲高に、浮世ばなしのいろ／＼なる、（中に一人がいひけるは、）■「コウ八さん、おめへ、己がむかうにゐた、つとめあがりの女を見たか」▲「フウ見た／＼。二十三四のいゝ女だつけ。あれがどうした、文でもよこしたか」■「ばかァいひねえ、アノ女で此間大騷動があつたァな」▲「ハテノ。又迯げでもしたのか」「どうして／＼、迯けたぐらゐならばい

とられては、若旦那も今までよりは、なほ〱御苦勞が增すであらうし、二つには又わたしも、あの子を手ばなしては樂みもなく、さぞ日にまし淋しからうと、未練らしいがいひ出さぬも、やつぱりたがひの爲ばかり。又若旦那と緣切つても、わたしや外にどのやうな、男があらうと二人とは、馴染をかさぬる氣はないから、いつがいつまでも今の通りに、斯してくらす心ゆゑ、そなたもやつぱり今までのとほりに、金坊の世話をしておくれよ」トいふもなみだのおとやさき、乳母も目をこすりながら、うば「まことにあなたのお心の中を、推量いたせばいたすほど、わたくしの胸もはりさくやう。なる程おばうさんのある事を、おかくしなすつたは深いお心、たとひ今日が日御緣がきれても、一生別れきりといふではなし、ほんの人目や浮世の義理と、お祖父さまの先刻のおことば、すこしの御辛抱でござりませう。又お坊さんの事はおつしやるまでもなく、ばゞアばゞアとお馴染なすつたもの、なんで他人と思ひませう。もつたいないが私が、產み申したお子だと存じますもの。たとひどのやうな苦勞をいたしても、お育て申す氣でござりますから、ちつともお案じなさいますな。しかし是から若旦那の、お手がきれたら猶あなたは、いろ〱御苦勞あそばすだらうと、それがおいたはしうござります」トほろりとおとすためなみだ、小三も浴衣の袖を目にあて、小三「わたしも今度の緣切が、一生の身の大事だから、只何事も神まかせ、わるい工

身の、別れてつらき日を送らんより、死して苦患をまぬかれんと、こゝに覺悟をきはめしも、せまき女子の心から、嗚呼是非もなき事にこそ。かゝりしほどに乳母のお乳は、最前よりの一五一什を、次の間にて聞くものから、小三の胸のせつなさを、さこそとおもひやる程に、おのれも共に胸のうち、はりさくばかりの苦しさを、こらへてしのび泣きゐたるが、今はなか〳〵怺へかねて、わつとばかりに走出で、小三のそばへすわりながら、うば「もしあなた、とんだ事になりましたねえ。あのやうにマァうつくしく、おいそれと、お請合なすつたは、どういふお心か合點がまゐりません。おばうさんのある事を、なぜうち明けてかう〳〵だと、おつしやらぬのでござります。子までなしたる戀中と、お聞きなすつたらお祖父さまも、無理に切れろとはおつしやるまいに、今若旦那と御緣を斷つて、どうなさる思召でござります。お坊さんが可愛くはござりませんか。あのお子さんの事はお案じなさらぬか。マァどういふお心でござります」ト只ひとすぢに金之助や小三を、大事とおもふゆゑ、心を付けることは意見、乳母はかくこそありたけれ。小三はなみだのかほをあげ、「ほんにそなたのいふ通り、子まである身を折かれる事、せつないとも悲しいとも、胸の中ははりさくやうで、そのくるしさは譬へられうか。それゆゑ金ばうのある事を、うち明けやうとおもうたが、男の子は緣切らるゝ時、男親に附くがならひ。なま中な事いひ出して、あの子まであちらへ引

死すまでも、ふつつり思切りませう」トいふもなみだのうるみ聲、わつとばかりにせきあげて、正體もなく泣きゐたる、心のうちぞいかならん。白翁もともによろこびなみだ、「ヤレ〳〵マア、よく思切つてくださつた。かたじけないぞや小三どの。そのかなしさを見るがいやさに、今日行つてたのまうか、明日行つていはうかと、一日々々と見合せても、どうでいひ出さねば果しがつかねば、心を鬼にしてわざ〳〵來たが、さぞ憎からうが是も身のため、うき世の義理のせんかたなさ。老の身に後生は願はず、緣切に來た罪つくり、わしが胸のせつなさも、するりやうしてくだされよ。この事とくと承知なら、けふあすといふでもない。心まかせにいつなりと、こなたの身にも怪我のないやう、手ぎはよくやつてくだされ」トいひつゝ立つて出てながら、「金五郎とは緣切つても、わしはやつぱり孫娵のこゝろ、この後なんぞ不自由あらば、かならず〳〵遠慮なう、なんなりとさう言うてよこさつしやれ。こなさんの身の落付くまでは、いつまでもわしが貢ぎますぞや」ト他人とおもはぬ白翁が、やさしき言葉にうれしさあまり、悲しさやるせなきまゝに、とかくのいらへさへもせず、只うつ臥して泣き居たる、その心根の不便さを、おもひやりつゝ白翁も、老のなみだにかきくれしが、心よわくてかなはじと、思ひ直してかへりける。小三はもとよりお雪の事を、聞いてゐたゆゑ末々は、中を折かれんは必定なり、もし緣切らるゝ事とならば、生きて居たとてかひなき

ひたい。さすれば世間のおもはくもよし、又子どもでも出來てからは、こなさんを內へ入れても大事ない。今金五郎が義理のある身で、こなたを內へよぶときは、部屋住の事ゆゑ世けんへすまず。こゝをとつくり合點して、しばしのうちを辛抱して、思ひきつて見てくだされ。もしその內が待遠なら、こなさんの心にかなふやうな、身の爲によい所を見たて、この爺が支度して、緣付けて進ぜませう。さうすりや此方の身も落つき、おほくの人のきげんきづまを攬るにも及ばず。せめてはわしが禮心、氣樂にして進ぜたい」トものやはらかにことをわけ、のつぴきならぬ義理づめの、賴にいやとはいはれねば、いつそわが身の成行を、うち明けんとは思ひしが、今さら素性を明しなば、見さげられもし殊に又、金五郎の爲あしからんトおもひさだめてかほをあげ、小三「だん／＼のお賴うけたまはり、何と申さんやうもなく、大事の大事の若旦那さまを、人にわるく言はせたり、あなた方へいろ／＼な、御苦勞をかけましたも、みんな私がいたづらから、つくつた罪でござります。お赦しなされて下さいまし。それをマア、憎いともおぼしめさず、氣樂にさせてやりたいと、かへつてやさしいそのお言葉、もつたいないとも有がたいとも、申さうやうはござりませぬ。さりながら私は、たとひ外にどのやうな、けつこうな所がござりませうとも、樂みのぞみはござりませぬ。只若旦那やみなさまの、おためになります事ならば、たとへこがれて

の迷ふはもつともかい。こなさんを内へ入れたなら、孫めが尻も落つくであらうけれど、上へのきこえ世間のおもはく、義理と人目のせんかたなさ、たのみといふは玆の事、知つてるかは知らねども、金五郎はわしがためには、惣領むすこの一人孫、世が世であるなら、無理わがままも爲次第だが、だん／＼深いやうすがあつて、あれが親は家出なし、其弟が今での家督、その養子となりし金五郎、あかの他人といふではなけれど、養子と名のつく悲しさは、おもふにまかせぬ世間の人目、家の娘のお雪といへるを、娶合せねばならぬゆゑ、金五郎もふしようぶしよう、やうやく此頃婚禮しても、お雪はまだ子供同然で、おもしろくないから片時も、内に居つかぬはもつともかい。わしが孫でいふではないが、世間の人にほめられて、それほどの事わきまへぬやうな氣性でもなかつたが、今に夜どまりはなほ止まず、女房はほんのすもり同樣。それは誰ゆゑこなさんゆゑ、わしが命のあるうちは、内外の者もわしにめんじて、金五郎がわるいとは言はねども、見らるゝ通りわしも老人、今をも知れぬ身のうへゆゑ、わがなき後は金五郎の、身のためにならぬ事もあらうかと、案じ過せば夜の間も寐られず、苦勞で壽命も縮まるやうぢや。こんな事いうたら、鬼とも蛇とも、慈悲なさけのない心と思はつしやらうが、眞實あれが憎くもなくば、内の娵のお雪の中に、子どもの一人も出來るまで、遠ざかつてもら





ひに見なれぬお方、どちらからお出なされました」白翁「ハア、そんなら此方さまが小三どのか。わしはこなさまに、ちと内々咄しがあつて、わざ〳〵來ました。ゆるさつしやれ」上へあがればいぶかしながら、小三「何はともあれそこは端ぢか、マア〳〵こちらへお通りなさいまし」ト奥へ通せば座になほりて、白「扨こなさまの名はかねてより、聞いては居れど逢ふははじめて、わしは金五郎の祖父白翁といふものでござるが、今日わざ〳〵來ましたのも、外の事ではござらぬが、アノ、孫の金五郎めが事。イヤもう、見るかげもないあのやうな者を、ようマア可愛がつてやつてくださる。眞身にとつては嬉しいとも、かたじけないとも、禮は詞に盡きませぬ。その深切な心を見込んで、ちと頼みたい事がござる」ト聞くより小三は胸に釘、はつと心に當惑し、いかゞはせんと思ひしが、今さらおどろく事にもあらず、かねての覺期はこゝぞとおもひ、胸なでおろし氣をとり直し、茶烟草盆を出しつゝ、しとやかに手をつかへ、小三「ほんにわたくしも、若旦那さまのお咄しにて、つね〴〵から、御噂を承りましたあなたの事、お目にかゝりますは始てでござりますれど、眞身の親に訪はれた心、おうれしうござります。ようマアお出あそばしました」トいふかほつく〴〵打まもり、白翁「イヤ、あまりよくも參らぬて。アヽ物ごしといひ取まはし、容貌まで高位の、奥方とても恥しからぬ、人にすぐれた生れつき、いかなる人の身の果か、見れば見るほど美くしい。アヽ若い者

のものに、一ばい氣がねを爲たりしが、お雪もはや、十五にもなりたれば、金五郎と婚姻を結ばんには、すこしは足も止らんと、頻に是をすゝめしかば、金五郎は心ならずも、婚禮はしつれども、お雪はまだ年もゆかず、殊に手のなきおぼこ氣なれば、とにかく面白からぬゆゑ、さまざまこしらへ騙しては、小さんが許へのみ通ふものから、はやくも二とせばかり立てども、猶不身持の止まざりけり。隱居白翁は是を愁ひ、文次郎夫婦もお雪の仕かたの、あしきゆゑに金五郎が、内に居つかぬと口にはいへど、心には眞實わが子の可愛さに、金五郎に愛相やつきん。我あるうちは善惡とも、金五郎の爲をおもへども、いくほどもなく吾齡、はてにし後やいかならんと、老の心をいためつゝ、おもひあまりて、手をまはし、小さんの名所聞たゞし、心の中をさぐりしうへ、理を說きて緣切らせ、事に由らば金を出し、支度して何方へなりとも、片付やらんと思案しつ、金五郎が當番にて、詰所へ出でて留守の日に、小三が許へぞ尋ね行きぬ。頃しも文月上旬、小三ははでな中形の、ゆかたに藤色のうらえりかけ、黒繻子の帶しどけなく〆、あらひ髮をうしろへさげ、緣側へ出て金之助の、腹がけを縫うて居たりける。折から表に人ありて、頼む〱と案内を乞ふに、小三は「ハイ」といらへつゝ、立出れば隱居白翁が、「卒爾ながら小三どのの、お宿は爰でござりまするかな」小三「ハイ、その小三は私でござりますが、あなたはつ

でも大事ねへ」トいひつゝ小三の帯をとけば、うれしげに上著をぬぎ、下著のまゝに寄添うて、顔みあはせて互ににつこり。金「コレ小三、そなたもかねて知る通り、心にそまぬお雪の事、とやかく内でいふゆゑに、のつぴきならぬ義理づめで、しぶ〳〵請けはうけたれど、松に櫻は見かへられず、そなたに勝つた花があらうか。かならずそれを苦にしねへがいゝ。しかし親を捨て、兩刀を捨てて、矢立をさして町人にならうと思へば、一も二もねへ心やすい世界だのう」小三「サア、それがいやさに苦勞になります。只あなたが全うに、お宿のお首尾のよいやうに、お雪さんともお中よく、みなさまに御安堵させて、わたくしをも見捨ててさへくださらねば、どのやうなせつない暮しをしても、少しもいとひはいたしません」トしんじつ見えし女のみさをを、金五郎もおもひやりて、金「おれもその實心を見ぬいたゆゑに世間はれて、内へ入れてえと思ふけれど、何をいつても養子のかなしさ。むかしの身ならいさくさなしに、おつけはれて夫婦だが、かへつて今の身の上が、思ひまはせばつまらねへ」トぐちなくりごとくりかへせしが、「アヽおれとした事が、つい胸におもつてゐるゆゑ、女のやうな愚癡ばつかり、儘になるのもならぬのも、みんな約束、仕方がねへ。これも浮世だ、どうなるものか。のう小三、床へ這入つて、又いゝ夢でも結ばう」ト[十一字節略]いかなる事や契るらん。在斯程に、隱居白翁は、金五郎が日にまし放蕩募りて、家にとては居らざるゆゑ、養父文次郎はじめ家内

後編下卷

第六回

小三は乳母や下女を臥さしめ、行燈の側につくねんと、ひとり何やら物案じの、顔うちながめながら金五郎「コウ小三、何をしてゐるのだ。なぜ寐ねへ。又持病でも發つたか」トとはれて小三ははつといき「イヽエ、持病ではありませんが、つく〴〵思ひまはしますと、あなたの事が苦勞になつて」金五郎「なぜ、おれがどうした」小三「もとより御好でなかつた御酒を、此頃のやうにあがりますから、しみ〴〵夫がわたくしは」金「フウ、わかつた。おれがあんまり酒を呑んだり、身もちがわるいから、行すゑこしかたを思ひまはすと、つまらねへものだと愛想がつきて、それが苦勞になるのだらう。ウヽさうだらう〳〵。いやになつたら厭だといへ。おれも男だ、切れてやるわ」小三「ソレ、そんな無理をおつしやるから、それが苦勞で片時も、氣のやすむ間はござりません。大かたお宿のお雪さんにも、やつぱり御無理をおつしやりませうが、それでは惡うござります」金「なんの事た、をかしくもねへ。そんなつまらねへ事を案じずと、サアもう寐ねへか。寐るがいゝよ」ト手をのばしてひきよせる。小三「アレ、まだ著ものを著かへませんよ」金「いゝわな、著ものはそれ

それこそ潰しておしまひなさるだらう」金「いゝわな、潰してもおれの子だから、だれも何ともいひ人はねへ。萬一おれがつぶしたら、又いゝのをこしらへるわ」ト金之助の手をとり引ばる。小三「すきな事をおつしやるよ。アレ、およしなさい、そんなに引ぱると目をさまします。起しちやア惡うございます」金「ナニ起しやアしねへ。ちよつと貸してくれ」トむりに金之助をだきとりて、「エヽよく寐る坊主だぞ。コレ、ちつと目をさましてあすばねへか。こちよ〳〵〳〵」トくすぐりさうにする。小三「アレ、およしなさいといふのに。寐るさきへ立つて起しちやアいけませんよ」金「ハヽヽヽ、そんなら乳母の處へ行つて寐ろ。今目をさまして泣出すと、おつかアの邪魔になるさうだ」トねたまゝうばの手へわたせば、乳母は金之助をかき抱きて、次の間へ入りてうち臥しける。

しさ」トいふところへくめ川の小女、「清介どん、佐介どん、お客があるよウ」佐介「ヲイ〳〵、そいつは斯しては居られねへ」金「小三、そこにある紙入を清公にやつてくんな。そして此一ッ提は、佐介、貴公に譲つてやらう」トふたりになげてやる。兩人「へイ、是は有難うございます」トいたゞきながら出でて行く。金「ア、醉つた〳〵、けふはどうしたか誠に醉つた」トそのまゝそこへうちふして、ぜんごも知らぬ大いびき、小三「お竹や、もうこゝを片づけておくれよ」下女「ハイ〳〵、もう宜しうございますかえ」小三「ア、いゝのさ。乳母や、今夜は若旦那は、よつぽどあがつたかえ」うば「いゝえ、そんなにお過し遊ばした樣子でもござりませんが、いつたい御酒がおよわいから」小三「さうサ、全體あがりはなさらなんだが、近頃はよくあがるよ」うば「さやうでござります。若旦那さまもお宿では、萬事おほしめすやうにもいかず、お心づかひもあそばしますから、ちつとづつ御酒をあがらずは、お氣のはれやうがござりますまい。ほんにお坊さんもよくおよつたから、若旦那のお床をのべませうか」小三「そんなら其子を、わたしが抱いて居やうから、お床をとつて上ゲておくれ」ト金之助を抱きあぐるにぞ、乳母はこの内、六疊の座しきへ、床をとり夜著を出して、ト立あがりて上著をぬぎ、うば「モシ、若旦那さまえ、サアおよりまし」トゆりおこされて、金五郎「ヲイ〳〵。ア、いゝ心もちだぞ」ト下著ばかりになりて床へ入り、金「サア、おつかアも寐ねえか。坊主はおれが抱いて寐やう」小三「あなたが抱いておよつたら、

氣が承りてえもんでござりますネ」小三「なんだね、をかしくもない。娘子供ぢやアあるまいし、心意氣なんぞはいやだわね」佐介「そんな事をおいひなさらずと、ちよつと一ツおやんなせえ。ソレ、どゞいつどい〳〵、なだべこ、ちやら〳〵、どんぶり鉢アういた〳〵」金「ア、やかましい、何をいふのだ」佐介「ハア、、サア〳〵小三さん、サア一ツ」トいはれて小三はせんかたなく、とこの間にある三味せん手にとり、

うたなまじなま中ほれたがうらみ、ほれざ苦勞もせまいもの。

清「ハ、妙だ〳〵〳〵」小三「モウ是でかんにんしておくれ」金「コウ、おつなものでの、おれも實は上がたぜえろくだが、都といへば聞えがいゝが、上がたぜえろく、上がた猿といはれては、一句もねへのす」佐介「その上がたにも、お前さんのやうな通人がありやすから、東ッ子は一句も出ません。全體は旦那がわるいのさ。おめへさんがあんまり程がいゝから、やぼなら斯したうき目はせまいと、小三さんがこれ〳〵で、氣がもめるでごぜえませう」トひたひにつののはえるまねする。

金「そんな口説はむかしの事よ。コウ、それよりやア清公、今の阿多氣の物語の二段目狂言をはなさねへか。後學のために聞きてえのう」清「ナニもう跡ははなしますめえ」金「なぜ」清「小三さんに叱られます」小三「清どん何だえ、おもしろい話かえ」清「なアに、わつちが色の戀ばな

とも、來めえと思つてあきらめて居たが、逢はずに行んではぢやァなくつて、逢はずに居ると氣になるから、顏が見たさについうか〳〵、やつぱり迷つて又こゝへ」小三「オヤばからしい、なんでありますえ。清どんや佐介どんが聞いてるのに、そんな事を」金「ハテ、人が聞いても大事ないての。コウ小三、こんな馬鹿にやァ誰がしたらう。おれも生れつき是ほどの、阿房ではなかつたつけ。のう佐介公。楊貴妃や玉もの前のためしもあるから、さのみ恥かしいとも思はねへの」佐介「こりやァ旦那のが御尤だ。惚れてもりきむのは野暮の至りサ。小三さんはやつぱりおほこ氣がぬけませんね」金「なんの〳〵、おほこどころか、ぼらが變じて古狸とはなりにけりだ。アヽ化される〳〵と、知りつゝやつぱり化されるは、おれが一生のあやまりだ」小三「オヤ、よろしく申しておくんなさい。あなたこそわたしを、お化しなすつたのでございます」金「そりやァまたなぜだ」小三「それでも、唄にもうたふ通り、心がらとて古郷をはなれ、知らぬ此地で苦勞するとは、よくわたしの身の上に、かなつた唄でございますよ」清介「モシ、ト小ごゑで、うた

苦勞するのもおまはんをたより、それに邪見な事ばかり。

モシ旦那、小三さんの心は、このうたの文句の通りでございますよ。ねえ小三さん。一ッ心意





大酒もりとなるまゝに、互にさいつおさへつして、いと賑しくなりにけり。金五郎はとこの間の柱によりかゝりて、金「なんと清公や佐介公なんぞは、いつも〳〵忙がしいから、女の所へ行くひまはあるめへのう」清「サア、そこがもし、おつなもので、是でもずゐぶん女ゆゑにやア、相應に謀計もいたしますのサ。まづ女に逢はうといふ晩にやア、内を都合してはやくきりあげ、おたしなみの藏衣裳を引かけの、親かたの目をしのび足、こそ〳〵とぬけがけの、逸足出して阿多氣へおしかけ、ろぢ四ツ限も目にかけず、たゝきおこして上りの天神。サアそれからが口說のこんたん、おもしろ狸の腹つゞみ」トのりぢではなすそのところへ、座敷をしまひ歸り來る、小さんのあとより箱まはしの仁介、三味せん箱を背負ひ、ちやうちんをかた手に引さげ、供をして來る。小三は上へあがりながら、「仁介どん、大きに御苦勞。そんならまた明日來ておくれ」トおびにはさみし金を出し、紙にちよいとひねつて、「サア是で一つ呑んでお寐よ」トわたせば箱まはしはいたゞきて、仁介「ヘイ、これはありがたうございます。さやうなら明日。ヘイお休みなさいまし」ト三味せん箱をおき、かへり行く。小三は金五郎のそばへすわり、小三「オヤ、よくお出なすつてくださいました。此間はなぜ、さつぱりお出なさいませんえ」ト顔を見てうれしさうに笑ふ。金「ヘン、あんまりよくも來ねへのよ。來るなといふから來ずに居れば、又うらむのか、あきれるのう。四五日おれが來なかつたから、煩くなくつて好かつたらう。あんまり邪魔にされるから、呼によこすまでふつつり

事は申すまでもござりませんが、御新造さまが明けても暮れても、あなたの事のみお案じなすつて、それは〳〵御苦勞のやすまる間とてはござりませんから、その御心根をおもひやつて、あなたもどうぞ、あんまりお氣をおもませあそばさぬやうに、なすつてくださりまし」金「イヤモウおれとても、憎しとおもふ小三ではなし、殊に子まで出來たのに、少しはおれの手だすけと、いやな座しきの勤をするのは、なみ大ていの女などは、なか〳〵及ばぬ心だてとおもへば、一日片時も勤をさせる氣はねへが、足らはぬがちゆゑ是非もなく、苦勞をさせるが可愛さうだ」ト　ほろりとおとす男泣、ろばも泪にくれにけり。　折から粂川のわかいもの淸介、料理ばん佐介　うちつれて入り來り、「ヘイ旦那、このあひだは」金「オイ淸介に佐介公か。さアあがんねえ」兩人「ヘイ御めんなせえ」ト　ふたりながらそばへ來り、淸「もし旦那、此間はねから入らつしやいませんね。きついお見かぎり。又外に何か、おもしろい世界でも出來ましたか」金「とんだ事をいふ。おもしろい世界どころか、いつも眞面目でさえねへやつよ。ちつとおもしろい世界へ、案内してもらひてえのう」淸「是はまためいわく千萬。ハヽヽヽヽ」佐介「旦那、この間、あなたがお出なすつたのを見とゞけまして、ちよつぴり趣向してめえりましたら、もうあとのお祭で、大きに鼻をあきましたのさ」金「ハヽアさうだつたか。そいつァ殘念だつけの。しかしその心意氣がありがてえ。そんなら今からはじめやう」ト　是よりいろ〳〵肴をとりよせ、

ざしだから、置いて參りませう」トさかなを置いていつてゆく。さても金五郎は、酒がいはする癇積の、腹立まぎれとがもなき、小三につらくあたりちらして歸りしが、根もなきくぜつの事なれば、又あはねば氣になるゆゑ、四五日たちて晝すぐるころ、小三のもとへいたりしに、小三は留守にて乳母ばかり、針仕事をしてゐたりしが、「オヤ若旦那さま、此ごろはまことに〳〵お遠々しうござります」金五郎「さうサ、此間はちつと用が多くつて、さつぱり出られねへやつよ」うば「アノ、あなたがいつそこのあひだ、お腹をお立ちあそばして、お歸りなすつたから御新造さまが、まことにお案じなすつてお出なさります」金「ハヽヽヽヽ、さうだつたかの。おれはさつぱり知らなんだ。アノ、今日はどこぞへ行つたか」うば「ハイ、今日は鮫清に、なんとやらの會がござりまして」金「フウ、坊はどうした」うば「お坊さんは今、お竹がどこへかおつれ申してまゐりました」金「さうか。おれを忘れはしねへかのう」うば「オヤ、とんだ事をおつしやいましな。三日や四日お出なさらぬとて、お忘れなさるものでございませうか。今朝なども、いつそおとつちやん〳〵と、あなたの事をおつしやいました」金「ハヽア、子どもといふものは、どうも憎くねへものだの。アノ、この間來たとき、ちつと頭にふき出がしたやうだつけが、そんなに殖えもしねへかえ」うば「ハイ、お頭のでござりますかえ。そのやうに殖えもなさりません。それはさうと若旦那さまえ、こんな

は日にまして、だん〳〵御酒が上るから、まことに苦勞でならないよ。わたしは何といはれても、つねから御氣性を知つてゐるゆゑ、御酒をあがつて御きげんの時は、その氣でゐるからよいけれど、やつぱりお雪さんにもあの通りに、無理ばつかりおつしやるかと、蔭ながらそれが案じられるよ。わたしも女の情だもの、いとしとおもふお方をば、つれなく言ひておかへし申すも、浮世の義理や二つには、お身のためを思ふゆゑ、心にもない事などを、いひ出すまでの胸のせつなさ、すゐりやうして」トなみだぐむ。うばもさこそと目をしばたゝき、うば「御尤でござります。譬にもいふ通り、一ツかなへば又二ツと、何をいうてもまかせぬうき世、十分な事はござりませぬもの。いろいろ御苦勞あそばすも、因緣とやらでござりませう」トしめりがちなるはなしなかばへ、くめ川のれうりばん表より、「オイお竹殿、ちよつと爰をあけてくんな」下女「アイ〳〵、佐介どんかえ」トしやうじあければ、佐介はひろぶたへ、いろ〳〵酒のさかなをのせ、もちこみて、「モシ旦那はどうなさいました」小三「オヤ佐介どん、旦那はもうおかへりだよ」佐介「ホイ、そいつは大しくじり。けふはなぜ早くお歸んなすつたヂ。さつきお出なすつたのを見とゞけたから、せつかく、くめん十めんして、旦那のお好な一口ものを、仕込んで持つてめえつたのに」小三「オヤさうかえ、それはマアよく忙がしいのに、氣をつけておくれだ。うれしいヂ」佐「なんにしても旦那がお出なさらねへぢやァはじまらねへ。そんなら此鉢のものや何かは、旦那へのこゝろ

た外におつりきな、面白えはなしでもあるからだらう」小三「オヤ、久しいものでありますよ」金「ナニ、久しいなじみがあると。それだからなんのかのといつて、はやく歸さうと思ふのだな。よし〳〵、そんなに邪魔になるなら、歸つてやらう、とめるな」トじれるかんしやくはひふきへ、きせるとん〳〵八ツあたり。小三はいつもの事と思へば、わざとそしらぬ顔をして、「お腹が立つならどうでもなさい。たま〳〵はお早くお歸りなさるも、御孝行でござりませう。オヤ、何だか風が變つたやうだ。ア、雨がふらねばよいが」トさからはぬゆゑ金五郎はきせるをしまひ立あがり、金「ナニ、御孝行でござりませう。お香々でお茶づけがきいてあきれらア。雨が降らうが降るめえが、歸るに四も五もいるものか」トむりなくぜつも酒のわざ、我儘氣まゝをいひちらし、じれつゝ内へ歸りけり。乳母はこの時金之助をつれて、歸りかゝれど、金五郎が不機嫌ゆゑに、次の間にてあそばせて居たりしが、やう〳〵こなたへ出來り、うば「御新造さまえ、今日はおとつさまの御機げんが、お惡うございましたねえ。何のお腹だちであのやうに、お怒りなすつたのでございますえ」トいへば小さんはわらひながら、「ナニサ、いつでもあゝだわな。御酒をあがるとなんだの彼だのと、わたしに無理ばつかりおつしやるのサ。たまにははやくお歸し申さないと、あなたもいろいろ譯あるお身ゆゑ、おやどの御首尾が大事だからさ。お内では心づかひもなさるだらうし、私にはわがまゝの、いひどころだとお思ひなすつて、いつでも〳〵あの通り。それに此ごろで

そやしたて、それからなんでも大ざかもり、さいつおさへつ唄へや彈けや、じれて迷うて、まようてじれて、くぜつも痴話も屏風の外へ、はふり出したる一ツ夜著。はやしさつさおせ〳〵堀までつけろ。あとは野となれ山となれ。床とつたら寐てかへろ。雨ふつたら居つゞけだ。などと唱ふからたまらぬて」小三「道理こそ、マアきつい御機嫌。それはさうと、あなたは京を御立の時、おとつさんのおつしやつた事を、覺えて御出あそばしますかえ」金「是はまた改つたおたづね、親父のをしへを守ればこそ、外の女に目もふらず、たつた一人を守つてゐるから、何もハヤお案じなさる事はござなく候サ」小三「オホヽヽヽ、そのおぼしめしなら嬉しいけれど、今では日かげのこの身ゆゑ、おぢいさんや皆さんが、このやうな事とは御存じなく、只あなたがわがまゝで、放蕩をあそばす事と、思召すでござりませうから、お宿のお首尾がお大事ゆゑ、あんまり御酒をあがりますと、あなたのお爲になりますまいかと、それが苦勞でなりません」ト思ひにあまるしんみのいけん、心に憎しとおもはねど、一盃きげんの金五郎、「ア、百も承知二百もがつてん、お爲ごかしのその意見、聞きたくもねへ、耳がけがれる。酒をあんまりあがりますと、あなたのお爲になりますまいッ。ヘン酒を呑まうがのむめえが己が口だから勝手だによ。大キにお世話お茶でもあがれッ。そんな理くつらしい意見をいふのは、おほか

りて金五郎は、人々にわかれて、可助といふ供の男を引つれて、粂川の前へ來れば、乳母は金之助をいだきつゝ、かくと見るより遠くから、うば「オヤ〳〵おばうさん、アレ、おとつさんが入らつしやいましたよ」金五郎「オヽ坊か、ばゝアにだつこしていゝのう。おつかァは内にかえ」うば「ハイ、お宿でございます。サアおばうさん、おとつさんにおじぎはえ。ヘイ御機げんようと。オホヽ、イエ〳〵、おとつさんにだつこはなりません。もうまつくになりますから、お寐んねがようござります」金五郎「金坊や、おとつさんはおつかさんのとこへ行つてお乳をのむよ。あばあばだよ」トいふに金之助は顔を見て、「おとつちやん、いや〳〵。おつかちやんのちゝ、いや〳〵」うば「ヲヽさやう〳〵、おつかさんのお乳はお坊さんの。おとつさんのではござりませんねえ。おとつさんは御きげんゆゑ、おじらしなすつていけません」金五郎「ハヽヽヽヽ、坊やのばかや〳〵」トからかひながら内へゆき、見れば小さんは、今座敷よりかへりしまゝ、三味線筥によりかゝり、物思はしげなる顔つきに、金五郎はそばへより、「小さん、どうぞしたのか、おつな顔をしてゐるのう」トいはれてにつこり笑ひながら、小三「いゝえ、どうもいたしませんが、今座敷から歸りましたのサ。そしてあなたは、どこのお歸りでござりますえ」金「ナニおれか、拙者めは今日仲間の者の付あひにて、よんどころなく向島へ御遊覧と出かけて、鯛七へおしかけた處が、女子どもが大勢出て、ソレお手をとれ足を取れと、めつたむしやうに

もの、今時縁切だのなんのかのと、芝居かしやれ本ではあるまいし、どうしてそんな事がありますものか。たわいもない事ばつかり」トいひまぎらせど共なみだ、小さんも胸をなでおろし、「ほんにさう言へばそんなもの、作物とは知りつゝも、身につまされて繰言いふも、やつぱり女のあさはかゆゑ。金坊といふ子まであるものを、御本妻にはなられずとも、末のすゑまで添とげやうと、思はないでなんとせう。もしもの事があつたらば、それは又その時のこと。もう〳〵案じまい〳〵」トはなしなかばへ糸川より、むかひの人がきたるにぞ、「夫ならばァやァ、行つて來るから氣をつけておくれよ」ト出かゝりしが、ほんにアノ、坊が歸つて、わたしが居なかつたら、又おとつさんをいびるだらうから、アノ、蠅帳にうづら燒があるから、あれをやつてだましておくれ。わたしが又かへりに、何ぞお土産を買つて來るから。そして若旦那がお目がさめたら、大方お茶漬を上らうから、鍋燒でも取つてあげておくれ」ト萬事に氣くばりぬけ目なき、女房かたぎぞあはれける。かくまで夫やわが子をば、大事にかける心から、座しきへ出てもとにかくに、內の事のみ案じらるれど、勤といふ字は是非なくも、いやな客にも機げんとる、心の中ぞつらからめ。かくて小さん金五郎は、たゞ金之助の愛におぼれ、他事なく暮すその年も、くれて又來る春がすみ、たなびく空もうらゝかな、彌生なかばの事なるが、金五郎は仲間の者にさそはれて、向が岡の花見もどりのほろ醉に、みな〳〵舟にうちのりて、青柳橋まで來りしが、こゝより上

後編中卷

第五回

小三は粂川より口がかゝりしゆゑ、鏡臺取出し身まじひの、紅粉おしろいも深くはせず、ちよつと化粧ひて櫛笄、前ざし一本うしろへは、銀の細打ばかりさして、いきな粧飾のいやみなし。金五郎は手枕して、こたつにあたり寐いりし樣子に、小さんは戸棚よりかいまきを出しそつとかけて、枕をあてがひ、そこらをかたづけ金五郎の、羽織をたゝんで戸棚へしまひ、火鉢のそばへすわり、煙草を一ぷくのみ、そばにある淨るり本を手にとりあげ、讀みながら乳母とはなし、小三「コウばアやよ、こんなことを言つたらまた、つまらぬ事とわらふだらうがの、水のながれと人の行する程、定めないものはないよ。この淨るり本の三勝を見るやうなわたしの身のうへ、よく似てゐるが若しひよつと、浮世の義理にからめられ、どんな別にならうも知れず。マアさうなつたらどうしやうと、外に苦勞はないけれど、そればつかりが案じられて、人の知らぬ胸をいためるよ」ト身の行すゑをくりかへし、ほろりとおとす一トしづく、乳母はそばから打けして、うば「アレ、またしても〳〵、そんな役にもたゝぬ事を、おつしやるものではござりません。その三かつの身のうへは、それはほんの戲作

ませう。さやうなら小三さん、又明日」トあいさつして、髪ゆひおたぼは歸りけり。

わね。夫だからいつもより髪がだいなしになつたのサ」金「ナニ、昨日は舟へ行つたから髪がこはれたと。そいつはちとあやしい」ふたぼ「オヤ〳〵、旦那が何かおつしやるよ」小三「又おやきがはじまりさ。めづらしくもございません」金「これがやけねへでどうするものか。番人のねへ生簀だもの、どんな人が釣るか知れやァしねへ」小三「オヤ、とんだ寃をうけるもんだ。たとひどんな釣人があつて、餌をどん〳〵まけばとて、曲つた針にやァかゝりませんよ。はゞかりながらわたくしは」金「ヘン、とんだ所でりきむやつよ。あかえが芝居をするやうに」（トかちかつてゐるうちかみをゆひしまひ）小三「ばァやァ、お茶はまだ出來ぬかえ」うば「ハイ、やう〳〵できました」小三「そんなら一ツあげやう」（ト金五郎のはつぼをとりて、ふたぼにもついで出す。）たぼ「是ははゞかりさま。モウおかまひなさいますな。ほんに旦那え、このごろに顔みせはどうでござります」金「わたしも此間からさう言つてゐるのサ。小三も見てえといふから、一緒にお出な、四五日のうちに」たぼ「それはありがたうございます。たのしみにいたして居りますよ」（トいふところへくめ川のわかいもの入り來り、）「モシ小三さんえ、このぢうのお留守居衆が、夕方行くから口をかけて置いてくれろ、といつてめえりましたよ」小三「オヤさうかえ。けふはお店の衆のやくそくもあるが、こつちは夜がふけるから斷つて、おまへの方へまゐらうよ」わかいもの「そんならのちほど、御案内をいたしませう」（トわかいものはたちかへる。）たぼ「どれ、わたくしもまゐり

をつれ申して、惠迎院へ行つて遊ばせ申すから、アノ歯入やが來たら、ながしの下駄の歯を入れさせておくんなさいまし」うば「アイ〳〵。夫はいゝが、お泣きなすつたら早くお歸りよ。お怪我をさせ申さねへやうにおしよ」下女「アイ。そんなら行つて參りませう」トお竹はそとへ出て行く。引ちがへて女がみゆひおちひかみのおたぼが來るを見て、小三「オヤおたぼさん、丁度よい間だよ。サアおあがり。坊を今あそびに出したから、この間にちよつと結つておくれな」たぼ「それは丁度ようございますね。オヤ、旦那お出なさいまし。この間は間ちがひまして、さつぱりお目にかゝりません」金「ほんにサウサ。なんだか急に寒くなつたね。モウこんなに火燵と首つぴきをするやうになつちやアいけねへのサ」たぼ「オヤおまへさん、そんな事をおつしやるが、こたつといふものは能いもので、ちよんの間のたのしみがありますよ。ねえ小三さん」小三「なんだねおたぼさん、おつな事をおいひでない、人の鼻をこするやうな。わたしらアそんな事はきらひサ」金「コウおたぼさん、おまへもよつぽど好物家だね。なるほど鳥渡いちやつくには、まんざら惡くねへやつさ。九字で節略出來るやつがいくらもあるものさ」小三「もし、をかしくもないそんナはなしは、もうおよしなさい、氣障でありますわね。サアおたぼさん、今に煮花ができるから、その中結つておくれなねえ」トこれよりおたぼは、小三のかみをゆひながら、たぼ「小三さん、昨日はアノ、どこへお出なすつたえ」小三「きのふかえ、きのふは舟で酉の町へ行つた

子といふものは屁をひつても、できるのなんのと、ぢらす人があるから、わたしも又まけぬ氣で、味噌をあげるぢやアないけれど、かはいゝ人と大骨を折つてこしらへた子だから、出來合の子とはちつと違ひますといひますから、色氣がなくつていゝといつて、呼んでくださるからをかしいのサ」金「ヘンとんだからくりのいひ立だ。ほんに此頃ぢやア、めつさう口が達者になつたよ。道理でおれも言ひまくられる」トいひつゝねてゐる金之助が、みゝをひき鼻をつまむゆゑ、金之助は顔をしかめながら目をさます。小三「アレまたそんな悪戯ばつかり。とう〳〵起して、おしまひなすつた。せつかくよく寐かしつけましたものを」金「いゝわな、あんまりひる寐をすると、夜になつて目をさますから、やかましくつて寐られねへ」小三「おまへさんではあるまいし」金「ナゼ〳〵」小三「なぜもよくできました。あなたはいつでも午時までづつおよつてはお起きなすつて、宵ッぱりをなさるものを」金「ナンノ、むりに起しても、もう寐あきた時分だから、アレ機嫌のいゝ事を見な。己が顔を見ちやア、にこ〳〵わらふぜ。いゝ子か〳〵、いゝ坊ちやんだぞ」ト金之助の顔をなでて、「こりや、おつかアのやうに、うは氣になつちやアいかねへぞ」小三「オヤ、けしからねへ。私よりあなたに似たら、親に世話ばかりやかせませう」トいひながらだいどころのかたをむいて、「お竹や、何をしてゐるか。坊が起きたから、ちつと抱いておくれよ」下女「ハイ〳〵。サア〳〵坊さんお出なさいまし。アノお乳母どん、わたしやア今お坊さん

さ、まんざらではねへけれど、まだ一向のねゝさまなり、どこのか人とくらべては、とても及ばねへ論なしよ」トゆびのさきで小さんの顔をちよいとつく。小さんは笑ひながら、「またそんな憎らしいことを。それでもモウ女といふものは、子もちになると色氣もなくなり、つまらぬものでありますねえ」金「ちげえねへ。色氣がなくつても、汁氣があれば澤山だ。のうばゝア」トこゑをかくればうばもふきだし、うば「オホヽヽヽ、ほんにさやうでございます。私の樣になつてはいけませんが、御新造さんなどはこれからが肝心でございます」小「オヤいやよ。それでもおつなもので、子どもにかまけると、いくぢなくじゝむさくつて、わが身ならら婆アじみたと思ふやうだよ。それだから座敷へ出ても、お客がみんなわたしの事を、子もち山姥だなんのといふから、わたしもそれをやつぱり通して、かういふ唄をうたつてやるよ。

わかい時は二度はない、有頂天までのぼりつめて、親に苦勞をかけるはばかよ。子をもつて知る親の恩ほど深いものはないわいな。

たとへ金銀で、富士の山つむとも、子にや易られぬ。ほんに世の中に、子ほどかはゆいものはない。

と唄ふゆゑ、中にはむねきなお客は、てめへのやうな者にやア、ろくな子は出來やアしめえ。

客の相手に出しかば、容貌もすぐれ、座もちなれば、引手あまたにいよ〳〵はやり、内に居る間はなかりけり。頃しも霜月のすゑつかた、小さんは金之助をかきいだき、その身もこたつへ横になり、出もせぬ乳をふくませて、ねんころ〳〵と鼻うたを、うたうて寝かしつけてゐる。そのかたはらに乳母のおちよは、火鉢に煮花をこしらへながら、金之助の頭巾を縫つてゐる。かゝるところへ金五郎は、しやうじをあけて入りきたるを、小さんは見てかほをあげ、「オヤ入らつしやいましたか、さぞお寒うござりましたらう」金「さうよ、なんだかひどく冷えるのう。ばうずめは又ひる寐か」トいひながらはおりをぬぎすて火燵へあたりて寐ころべば、小さんはかた手にて煙草をすひつけ、金五郎に出しながら、小三「もしおまへさんエ、アノ廓から、最中のもらつたのがありますが、アノお雪さんにあげましては悪うございますかえ」金「ナニわるくもねへが、あんな大きな者にやるよりは、取つておいて坊にやるがいゝ」小三「それでもこの子には、あんまり甘くつて悪うございます。ほんに甘露梅もありましたから一緒にして、おぢいさんの所へでもあげませうか」金「ばかァいひねえ。石部金吉鐵かぶとといふかたい内へ、花街から貰つたものが出されるものかな」トいはれて小三はこゝろづき「オホヽヽ、ほんにさうでありましたね。それはさうとアノ、お雪さんは、さぞお美しくおなりなさいましたらうね」金「さう

わらひながら、「オヤ〳〵、そんな事をいふと叱られるよ。上がたの伯父さんの、まことのお宿は爰だから、おとつさんよりお兄さんが　大切だとつね〴〵から、おつかさんがおつしやつたよ」ト子ども心にも金五郎を、大事にするぞいぢらしゝ。さても金五郎は、件の金をたづさへて、飛ぶがごとくに額俵屋へ至りて、あるじ重兵衛に逢うて、小さんの身の代をわたして、これまでひとかたならず　世話になりしを厚く報い、夫よりたゞちに青柳橋のほとりなる、粂川といふ、料理屋の裏に家をもとめ、造作までも綺麗にして、この家に小さん金之助をひきとり、乳母をかゝへ婢女をおきて住まはせけるに、小さんはゆゑなく、産後すら〳〵肥立つものから、小さんはつく〴〵行すゑを、考へ見れば金五郎も、養子の身にて、この身をはじめ、金之助や乳母下女まで、はぐくまんこと大ていならず、所詮わが身はおちぶれて、一旦廓の藝者して、人にも顔を見しられたれば、今さら斯してくらすとも、誰知らぬものもなければ、女の手わざにはかばかしき事も出來ねば、またもとの藝者となれば馴れし事ゆゑ、さのみに氣ほねもをれぬわざ、三筋の糸の世わたりも、藝は身を助くると、たとへのふしも金五郎が、せめては心やすめなりと、思へば金五郎へ我胸を、うちあけてものがたれば、今更一旦うけ出せし、小さんをふたゝび客へ出さんは、人のおもはく世のそしりも、口惜しくはおもへども、萬事心にまかせぬ

金「なにさ、あとでは又どうでも、言ひやうがあるからいゝわな。案じずにさういひなよ」ゆき「ハイ、さやうならおはやく、お歸りあそばしまし」トいふに金五郎は出てゆく。引ちがへてお雪のうばは立いでて、うば「おぢやうさん、何をあそばします」ゆき「これかえ、これは此あひだおあにいさんに、いたゞいた、人形の著物だよ」うば「もういゝかげんにねゝ樣いぢりもあそばしまし。いつまでもそのやうに、ねゝ樣ばかりかはいがつて、どうしたものでございます。今に若旦那さまの奥さまに、おなりあそばすお年でから」ゆき「オヤ、乳母はいやなことをおいひだよ。あれはおあにいさんだものを、そんな事はなりません。さうしてもう何所にか、奥さまがお出だよ」うば「それだからあのやうに、お内にとては片時も、お出あそばす空はなく、それといふもおまへさまが、もうちつとおとならしくあそばせばよいに、ほんのねゝさまで、若旦那の女ぐるひをあそばすを、知らぬ顔でお出あそばすから、私はもうじれつたくつてなりません」トいはれてお雪は氣の毒さうに顔をあかめて猶あばひ、ゆき「それでもアノおあにいさんは、おぢいさんや皆さんに、まことにお心づかひをあそばすから、おかはいさうだものを、ちつとは御保養のおあそびを、あそばしてもよいではないかえ」うば「それは又しれた事。あなたはお家のお娘さま、若旦那さまはお血すぢでも御養子でございますもの、お心づかひもあそばす筈を」トお主おもひの岡燒もち、お雪はにこ〳〵

たから人が來たかえ」トいふに白翁もきゝ耳たて、「オヽなんぢや、上がたから便があるか。今も今とてうはさをした處、早う金五郎行つて見やれ」トすゝむることばに、金五郎はいそ〳〵として玄關に立出で、使に逢うて狀うけ取り　ひらきて見れば、刀をもとむる金一包は、使のものに、持たせつかはし候へば、あらためてうけ取申すべしと、こま〴〵といひ送りつ。猶其書狀の封じの奥より、隱居白翁への書簡も出しかば、その狀は白翁のところへさし出し、かの一封の金をうけ取り、おのが部屋に入りて返書をしたゝめ、使の者はかへしけり。金五郎はかの一封の金を得しかば、飛たつばかりによろこびて、すぐに懷中し、立出んとして、中の間をみれば、お雪はひとり一心に、人形の著物を縫ひ居るすがたは、今年十四になりけれど、よろづ内端にしてあどけなく、容貌かたちも美くしく、心だてさへ優しけれど、小さんに比べては劣るなるべし。金「コウお雪ばう、それはこのあひだの人形に、きせる著物か」トとはれてお雪はゑみをふくみ、ゆき「ハイ、あなたにいたゞきました、人形のでござります」金「それはいゝがの、おれは今出て行くから、おぢいさんやおつかさんがお聞きなすつたら、今仲間からよびに來て、まゐりましたと、いゝ子だからさういつてくんなよ」トいへばお雪は笑ひながら、「ハイ〳〵、かしこまりました」金「なぜそんなに、笑ふのだ」ゆき「それでもお仲間へお出あそばしたと申しましても、おかへりがお遲いと、うそだとお思ひあそばしませう」

やから、わるい耳をきかせぬやうに、せにやならぬが若いうちは、利發なものでも些づつは、身にあやまりの出來るもの。もつともはや遊びなどは、めん〳〵の得手勝手ゆゑ、暑さ寒さも何ともおもふまいが、また内ではさうはない。アこの寒いに出てゆきをつたが、風でもひきそへねばよいが。夜がふけてかへらねば、寐てゐてもろく〳〵ねられず、人の足音のするたびたびに、歸つたか〳〵、門をしめたで這入られぬのかと、引立耳をして聽いてゐるぞや。ずゐぶん折ふしは付あひなどで、あそびにも行くがよしサ。若いうちの事なれば、なんでもするなでは無いけれど、此頃はあまりに嵩じたぞや。それがつのると、はて〳〵は、モウどうなつてもまゝの川と、身のをさまりもつかぬやうに、なるものだからたま〳〵は、内にゐてみんなの氣も、ちつとは休めるやうにしやれ。このくらゐな事はいはずとも、承知してゐるであらうが、募らぬやうにしたがよい」トかたいやろでもどこやらにかどのとれたる丸あたま、なでつゝことばやはらかき意見に金五郎は一言半句の、かへす言葉もなかりしが、金「だん〳〵の御意見心魂に徹しまして、申し上ることばも御座りません。これまで種々に御苦勞を、かけましたは、重々身のあやまり、おゆるしなされてくださりまし」トあやまり入りたるをりからに、おゆきはまたもいできたり、ゆき「モシ、おあにいさまへ、アノ上方からお使がまゐりましたヨ」ト聞くより金五郎は俟かねたる、便にとびたつ嬉しさを、知られじと胸におしかくし、金「ナニ上が

ました。なんぞ御用でござりますか」白「ヲヽ、さしたる用もなけれど、私が今茶を入れるから、ちとはなしに來いと呼んで來やれ」ゆき「ハイ〳〵かしこまりました、お呼び申して參りませう」

ト琴をかたよせ出て行く。引ちがへて金五郎は、おくの白翁が居間に來れば、

「オヽ、金五郎か。サア〳〵もつとこつちへ來て、茶が出來たから一ツ呑みやれ。茶菓子はさいはひ御前から頂戴したのをとつてある」

トいつにかはらぬまめ〳〵しさに、金五郎も茶をのみつゝよもやまのはなしのついて、

白「コレ金五郎、おぬしも今が血氣のさかり、老人のいふことは面白うあるまいが、マアよう聞きやれ。おつなもので、子をおもふは親の常で、貴い賤いの差別はないもの。さきだつていつの頃でかあつたか、上方から狀が來た時、あちらは一統風がはやると、さういうてよこしたも、やつぱりおぬしを案じるゆゑ、氣をつけてくれとの事であらう。もとよりおぬしもひとりの親、又兄弟とても外にはなし、もちろん文之丞はじめおぬしまでも、隱してはゐるなれど、お龜とやらいふ容貌よき娘を、親知らずにもらうて育てあげ、たがひに兄弟のやうにして、憎からぬ中であつたとやら。そのお龜でも側にゐたら、又まぎれにもならうけれど、それとても行がた知れず、生死のほどもわからぬと、サ、ちらりとおりや聞いたぞや。何をいうてもこちらのお雪は、まだ一向の子どもなり、内にゐても面白くあるまいが、今では文之丞もおぬしをば、こちらへ貰ひうけてからは、お龜も居ぬゆゑたのしみに、おもふはコレ、そちばかりぢ

五郎はかくまでも、額重夫婦の深切の、ひとかたならねば少しもはやく、身請の金をわたしたく、おもへどそれも自由ならず、ひとり胸をぞ苦しめける。はや月みちて小さんは、玉のやうなる男子を産みしかば、金五郎はさらなり、額重夫婦も、よろこぶこと大かたならず、その名を金之助と名づけしが、兩親に似てうつくしければ、金五郎は日ごろにまして、小三金之助の愛にひかされ、とかくそは〳〵氣もおちつかず、内に居ることは稀にして、額重へのみ行くものから、白翁は惣領の、文之丞が不身持にて、大かたならぬ苦勞をしつれば、秘藏孫の金五郎、いたづら者になりもやせんかと、はら〳〵思ひゐたりしに、近きころは外を内、内を外と居つかぬも、はじめのほどは若ものの、ならひとさのみ咎めもせず、打捨てておきけるに、漸々につのるゆゑ、かくては身の爲あしかるべしと、おもうてある日わが居間に、孫娘のお雪に琴を彈かせ、たばこくゆらし聞きゐたるが、きせるをはたいておゆきにむかひ、「コリヤお雪よ、モウ琴もよいにしやれ。この頃は大ぶん上達したが、ずゐぶん身にしみてならうたがよい。わしもおのしが琴をきいて、大きにうさをはらしました。年がよるとおつなもので、外に何もたのしみがないから、お念佛でも申したり、おのしが琴や三味線を、きくのが何よりよいなぐさみぢや。イヤそれはさうと、アノ金五郎は内にゐるのかの」トとはれておゆきは琴のつめをはづしながらにこやかに、「ハイお兄さんは、お部屋にお出あそばし

送りけるは、この程三條の小鍛冶宗近の銘作にて、大小のはらひものあり、殊に燒刃世にすぐれし、わざものにて其價は、一包との事なるが、もとより兩刀は武士のたしなみ、何とぞ是を手に入れたきまゝ、内々にて右の金子、御かし被下候やうにと、ひたすらに懇望の文面ゆゑ、文之丞もいと祕藏なる、一人の子の望なれば、いつはりなりとは露しらず、まことゝ思へばわが子ながら、よき心がけ末たのもしく、本家を繼げども、兩親のあるゆゑ萬事身まゝにもならで、心にまかせぬがち、さこそあらんと子をおもふ、なさけある親心に、故なく百金の金をとのへ、爲替にて、ひそかに金五郎のかたへ送りけり。偖も金五郎はげいしやの小さんが、只ならぬ身となりしより、猶さらに可愛さいやまし、はやく勤をひかせんと、おもへど身請の金とゝのはねば、是非なくみやこの父のかたへ、刀もとむる金なりとて、いつはりて書狀を送りしかど、かの地で金とゝのふや、それさへ恃にならざれば、とにかくに心安からず、みやこの便を俟つうちに、しだい〳〵に月かさなりて、小さんははやこの月が臨月になりしかば、額俵屋の重兵衛夫婦も、深切なる心から、欲をはなれて、小さんをいたはり、殊に金五郎の親もとも、ゆたかなること知るゆゑに、手付の金を取りしのみにて、殘の金はうけ取らねど、さらに危むこともなく、産の手當を何くれと、のこる方なくまめだちて、安産をこそいのりける。金

後編上巻

第四回

こゝに又、千歳屋の眞名鶴は、妹の小さんに名のりあひてより、力になりつなられつして、いとむつましく萬の事をかたらひて暮せしが、かねてつき出しの時分より、さる有德の商賈の、隱居がふかくなじみきつ、何くれとなく深切に、よく世話をなしたりしが、其年の暮眞名鶴は、かの隱居に請出され、向じまの邊に樂々と、世を送る身となりにける。されば月日の過つこと速にて、明る二月のころには、小さんははや五ッ月になりしかば、座敷へ出れば夜もふける、又は無理なる酒も呑むゆゑ、身のためにあしかるべしと、金五郎は額俵屋のあるじにかけ合ひ、些の手付の金をつかはして、ちかきうちには請出すほどに、夜の座しきへ出さぬやうにと、たのみにあるじ重兵衛も、さすがはすいな男ゆゑ、早速に承知して、いと深切にいたはりけり。かくて金五郎は、小さんを身請の金とゝのへんと、さま〴〵に思案したりしが、もとより大金の事なれば、養父文次郎へ、うち明けていふべきやうもなかりしゆゑ、いかにやせんと左や右に、ひとり胸のみ苦しめしが、やう〳〵に思案をめぐらして、京師の父文之丞かたへ、ひそかに言


倣舊圖
國直畫

娘節用二編敍

いろは引の節用集は、日用の御重寶にて、士農工商が朝暮の、引書、乾坤時候草木器財、何でも撰採十三門、部分に四聲の畫引入らず、和らかいのが當世と、思ひついたる假名まじり、娘節用とこじつけしを、俗でいゝとか實意だとか、茶かして稱る看的の、洒落を版元實とこゝろえ、二編は今些色氣澤山、戀といふ字の趣意を、穿々の平催促、初編の縁にひかされて、いやといはれぬ義理と犢鼻褌、書れぬものは新趣向、變らぬ口舌の魂膽も、おもしろ狸の腹合せ、帶の心實解盡せし、小三金五郎が偕老の、その約言のひそ〳〵と、枕に残る仇言は、こんなものでもあらうかと、書肆の携せし稿本へ、ちよつぴり加へた補書の、序に朱墨を摺ながして、口繪の前をよごすといふ。

江戸　三文舍主人戲題

みんなをよんで酒とせう」小三「とは言ふもののこれからは、一チばいあなたに御苦労を、かけませうかとそれが今から」金「くらうになるとは金ばかりの苦労、つまらぬことを案じ立して、煩つてくれちやア　いかねへぜ。サア〳〵酒だ」トこれよりいつもの幇間藝者、大ぜいあけて大さわぎ　酒筵にときをやうつしけん。

しうつむくを、さしのぞきつゝ、金「どうした、ひどくふさぐのう。雪の寒さにあたつたか、風でも引きァしねへかの」小三「風もちつとは引きましたが、そればかりではありません」金「フウ、夫ぢやァいつもの持病の癪か」小三「持病や酒の二日酔なら、ふさいでゐてもあなたのお顏、見れば直るは常の事、そんなことではござりません」金「ハテおつなことをいふもんだの。そうしてマァどういふことだ」小三「なんだかいつそ苦になつて、人にも言はれぬ心の苦勞」金「ナニ、人にいはれぬ苦勞が出來た。ハテナ、ハヽア、それぢやァ大かた、なじみの客が身うけをするといふ事か」小三「なんのマァ、そんなことが。アノなんでございます」金「なんだとは」小三「アノ、是でございます」トはらへゆびをさしてはづかしさうにかほをかくす。金「ハヽァそんなら、とまつたのか。アノ夜食のかたまりが出來たといふのか」小三「ハイ、それだからモウ、まことに苦勞でなりません」金「なんのことかとおもつたに、どうでかういふなかだもの、子の出來るのは覺悟のうへ、なにも苦にすることはねへ。さうしてとまつたのは、いつからだ」小三「モウ三月ほどになりますョ」金「そりやァ大さうはやかつたの。しかし身おもになるからは、いつまでつとめもなるめえから、追つけ春になつたらどうなりと、重兵衛に懸合つて、つがふして勤をひかせるから、必ずあんじることはねへョ。マァ〳〵何はともかくも、實をむすぶ目出たいことだ。こゝろ祝ひにこれからわつさり、

ん、おめへに獻上しやうと思つて、持つて來た物があつたつけ」トふところから、本べつかふのくわんぎくのくしを出してやる。おきく「オヤ〳〵およしなさればよいに、毎度どうもお氣の毒さまで」金「なんの、マアだまつて取つて置きなナ。お前のすきな、紀の國やのだから」きく「誠に有難うござります。ほんに釻菊がた、源之助のでござりますチ。どうも誠に風といひ、甲といひ、いつそ、好いた形でござりますヨ」金「コウときに、小三は都合は能いかの。どこぞ、座敷へ出てゐるかえ」きく「イヽエ、なんでございますヨ、方々から口がかゝりましたが、なんだか氣色が悪いとやらで、みんなおざしきをことわつて、引こんでゐなさいますよ」金「さうか、どうしたの。又れいの癪だらう」きく「ナニ癪ではありますまいが、大かた此雪に、あたんなすつたので、ありませう。小三さんの氣色のわるいは、おまへさんの、お藥が、いつち、よくきゝますから、はやくしらせて參りませう」金「何のかんのと、嬉しがらせるのか。おめへもよつぽどさるものだヨ」トきせるでしりをちよいとたゝく。きく「オホホヽヽ、有がたうござります」トおきくは立て下へ行く。程なく小三はしづ〳〵と、梯子をあがつて出來るすがたは、何かなやましげに顔色さへも常ならず、あらひ髪なる島田髷、鬢のおくれ毛寐みだれしを、黄楊の小櫛にかきあげつゝ、おもき顔にもにつこりと、笑をふくむあいきやうは、俗に所謂いのち取、男ころしといふべけれ。金五郎は、あんかへあたり、寐ころびてゐる側へ、小三はよりそひ、さ

ける。偖も金五郎は、小三と契を込めしより、たがひにつのる戀中に、一日逢はねば氣にかゝり、二日も顔を見ぬ時は、心もすます苦になるまで、一トとせあまり通ひけり。ころしも師走の半にて、雪は木ずゑの花とちり、寒さいとはぬ若い同士、雪見の船を堀へつけ、連をはづして金五郎は、ほろゑひ機嫌に只ひとり、額俵屋へ入り來れば、それと見るより若い者、「これは旦那、だいぶお遲うこの大雪に、よい御きげんで」金「雪のふる夜も雨の夜も、かよひくるわの大門をか。ハヽヽヽ。めつぱう寒くつてげん氣なしョ。十公いつものとほり飲込んだらうの」十吉「オツト合點承知之助、モシ今夜らはしつかりおあつたまんなせいまし。サアお二階へ」トあんないに金五郎は、はしごとん／＼ 奥の小座敷へうち通れば、娘分のおきく茶たばこぼんをもち來りて、「オヤ金さん、よくいらつしやいました。お珍らしいものが澤山ふりましたねえ」金「さうサ、夫だから一ばい寒いの」おきく「よくこのマアおさむいに、あなたもよつぽど小三さんにやア御信仰でございますネ」金「御推察の とほりス。しかしおめへなんぞも容貌はよし、氣めへといひ、しん心をする男が多からう」おきく「オヤよろしく申しておくんなさい。なんの 私 のやうな者を、つめつてくれる人もございませんヨ」金「うまくいふぜ。しつぽりと、しんねこではまぐりのお吸物を〆てる人が、のうお菊さん」おきく「オホヽヽヽ、あんな、にくらしいことを、小さんさんにいつつけますよ」金「ハヽ、コウお菊さ

づら者」金「コウ〳〵なにをいふ、そりやアほんの狂言だ。よし又實説のことにもしろ、なんのおれが水くさい、そんな心をもつものかな。朱にまじはれば赤くなると、おめへも僅なあひだ泥水をのんだら、たいさう手も見え足もはえたの。モウいゝ加減にやきもちをやいて、久しぶりだから、もつとこつちらへ寄んねえヨ」ト(十二字節略)小三「私はモウ、あんまり嬉しくつて、夢ぢやアないかと思ひますヨ」金「ヘン、夢なら大方、はやく覺めればいゝと思ふだらう」小三「又そんな憎いことを。夢ならどうぞ、いつまでも覺めずにをれば、ようござります」金「うそ〳〵。そしてモシ夢ならどうする氣だ」小三「どうもいたしませんが、お側にゐて」金「それから」小三「オホヽヽヽ、いやでございますヨ」金「(三字節略)がいやか」小三「どうだかぞんじません」ト顔をあかくしてうつむく。金「ナニ知らねへ事があるものか、(二十八字節略ト二字節略)心もうちとけて、契りそめたる湯帷子、(十一字節略)かくて是より金五郎は、千年屋へ人を走らせ、眞名鶴を招寄せて、小三に對面させしかば、眞名鶴も頻に驚き、生れてはじめて姉妹の、まめで逢うたるよろこびに、嬉しさ餘る悲しさは、身儘にならぬ勤と勤、あぢきなき世とうちかこち、泣きつ笑ひつ夜と共に、互に憂さをかたりける。かくまで小三と金五郎は、淺からぬ中なるゆゑ、眞名鶴は小三の事、いふまではなけれども、千世に八千世も末かけて、不便と思ひ憐みて、お情かけて下されかしと、いと懇にたのみ

いひながら、眞名鶴さんは親のため、苦界にしづむも恥でもない。それに引かへわたくしは、いたづら事の心から、御おんの深いおとつさんを、都に殘して此つとめ、我身でわが身の愛想もこそも、つき果てて恥かしい、面目もない身でござります」金「なるほど夫ももつともだが、ハテ何事もみんな約束、どうするものか、仕方がねへわな。そんな事を苦にやまねへで、久しぶりだから浮き〳〵して、ちつとにつこりして見せな。一體のろけるやうだが、眞名鶴とおめへと、よく似てるが、ならべて見たら又いちだん、おめへの方が美しからう」小三「オホヽヽホヽ、そんな事をおつしやるけれど、姉さんとおまへさんは、どうも知れませんヨ」（トにつこり笑つてよりかゝる。）金「こいつァをかしい。姉さんとおれがどうしたと」小三「オホヽヽヽ、どうもなさりはしますまいが、わたくしはどうも」金「なんのこつた、（四字節略）といふとか」小三「ハイ」金「ハテおめへも疑ひぶがい。今もくどくいふ通り、ちひさい時からひとつに育つて、あんまりかはいがられもしなんだが、憎がられもしねへ中だに、おめへをすてて眞名鶴に、見かへる心があるものか」小三「それでも戀は思案の外、をとこの心は秋の空とやら、お疑ひまうすではござりませんが、アノ芝居でもいたします、お半長右衛門を見るやうに、思案の外の不義いたづら、長右衛門は年といひ、お絹といふおかみさんのある身分で、ひとり娘のおはんをば、身おもにさせたいた

とり〴〵に評判するを、守多屋の二階で眞名鶴と共に、見ればそなたに違はねば、どういふ事でこの廓へ、遠路を隔てて來てゐるかと、不審に思へば帮間共が、男のために身を賣つたの、男と迯げたのなんの彼のと、いふを聞いてはこの胸が、はりさくばかりに腹が立つて、心の腐つた女の事、ふりむいて見るもいま〳〵しいと、あきらめて見ても凡夫のことゆゑ、やつぱり迷ふ心の愚痴から、なんでも實否を糺したうへ、ともかくもしやうとおもつて、みんなに知らせず歸つたふりで、取つてかへしてこゝへ來て、見ればそなたに違はねへが、顏を見るより物をもいはずに、迯げるから猶腹が立つて、今の樣にいつたのも、なんと無理ぢやァあるめえがの。かう心がとけるからは、眞名鶴を爰へ呼んで、姉妹の名のりをさせてやるぜ」トきいて小三は大きにおどろき「エヽそんならアノ眞名鶴さんは、わたくしの姉さんでござりましたかえ。アノ姉さんで」金「さうヨ、正眞正銘のおめへの姉よ」小三「エヽそりやマア嬉しうござります。さうとは微塵もぞんじませんで、淺い女のこゝろから、いろ〳〵愚痴な恨ごとは、もつたいないとも、恥かしいとも、又嬉しいもやま〳〵なれど、なんの因果でこのやうに、姉妹ふたりが揃ひもそろつて、つらひつとめの流の身、はかないなりで名のりあひ、つもるはなしのうき事も、亡兩親が草葉のかげから、御聞きなすつたら、うかばれますまい。同じつとめのその中でも、騙されしとは

に死んだか壯健でゐるか、又は外にいひかはした、男があつて迯げたのか、取とめた事もわからぬのに、己ばかり心中立てるも、あんまり愚痴な穿鑿で、末代人の物わらひ、殊に上方の親父をはじめ、此地の養父や養母に、苦勞をかけるは大不孝と、心で心を取直しても、おめへのことが忘られねへから、他の女にや心もうつらず、一日々々とくらすうち、友達にさそはれて、いや〳〵燈籠を見物に、來た日が丁度眞名鶴の、突出しの日でとり〴〵に、美くしいと評判するゆゑ、もしや少しも似てゐるかと、見れば迷かそなたにその儘、ハテ似た者もあるものと、客になつてよそながら、聞けばやつぱり都といふから、心ゆかしくなつかしく、初會の晩からうちとけて、たがひに身の上あかした處、似たのも道理、お鶴といつて、里にやられた六兵衛殿の、總領娘と聞いてびつくり、妹のお龜は斯々と、はなせばお鶴も共に驚き、泣きつかこちつ哀なはなしで、一ツに寐るは偖おいて、妹のそなたに心中立、帶紐とかぬさすがの氣性、おれとても又おめへの生死が、知れぬからとてその姉の、眞名鶴を抱いても寐られず、というて見捨るも本意でねへから、妹のよしみに客になつて、末ながく力にならうと、約束をして通ふゆゑ、深い樣子のあることを、誰一人知る者もなく、今日まで義理であそびに來たのヨ。ところが今度額重で、かゝへの藝者の小三といふが、淺間の踊ををどるといふが、廓中での隨一と、

した」金「そりやアマア何が。やつぱり誰にか義理だて歟」小三「人の事よりあなたのことさ。聞けば千年屋の眞名鶴さんと、深い中とおつしやること。眞名鶴さんは情を賣るが、勤のならひに引かへて、わたくしは又座敷ばかりの、はかない歌妓の身のうへゆゑ、たとひどのやうな譯あつても、彈妓は抱の女郎衆には、勝たれぬが廓のならはし。それゆゑなま中お目にかゝつても、今日より末はどのやうな、つらい憂目を見ませうか。知らねば知らぬで心はすめど、あなたと眞名鶴さんとの譯もあれば、やつぱり焰をもやすたね。悋氣は女子の嗜なれど、さすが女の淺はかに、よい貌ばかりはして居られず、どのよな事であなたのお名まで、出るやうな事でもありませうかと、今からそれがさきだつ劬勞、思へば悲しうござります」金「なんのこつたな、こりやアをかしい。そんな劬勞を今からすると、天井で鼠が笑ふによ。この廓の立だといつても、思ひこんだが男の意氣地、廓の掟をやぶつて見せう、といふはまことの意氣張づく。だが眞名鶴とおれが中も、ふかい馴染であらうかと、一寸聞いても腹が立つ筈、牽頭歌妓もくはしい事は、たがひに顔に出さぬから、惚れて通ふとおもつてゐれど、これにやァ深い樣子があるのョ。といふ譯は外でもねへが、おめへが家出をしたことを、しらせの狀にがつかりして、この世に望も絕えたから、ながらへて居やうとも思はなんだが、又よく〳〵考へて見ると、實

でお迯げなさるチ。そりやァ近ごろあなたでも御ぜえません。モウ一ッ獻じませう。モシ旦那、およつちやァいけません。モシ旦那。これはしたり、モウおよつたさうな」目八「そんならモウそろ〳〵軍勢は、この陣を退かう。のうおとわさん」おとわ「さうさねえ」トいふところへ、小三はちやわんに水をくみきたり、小三「オヤ、旦那はおよつたかえ」目八「さやうさ、あんまりあがりつゞけだから、ちつとおよるがようごぜえやせう。そんなら小三さんおゆるりと」もく蔵「しかし旦那と小三さんとさしむかひぢやァ、猫に鰹節泣子に乳で、ちつとあぶねへものだテチ」小三「オヤいやよ。わたしも今に下へ行くがチ。アノおとわさん、はゞかりながら、枕と搔巻をちよつと下へさういつておくんなさいな」おとわ「アイ〳〵合點でございますヨ」トみな〳〵は下へゆく。引ちがへて下女、かいまきと枕を持來り、下女「モシ枕をおさせ申しませうかえ」トいふとき金五郎は、小三の膝をそつとつく。小三はこゝろを呑こんで、小三「ナニ私が今、お起し申して上げるから、そこへ置いていつておくれ」下女「ハイ〳〵かしこまりました」ト枕をおいて下へ行く。金五郎は目を開いて、あたり見廻し まくらを取つて又ねころび、金五「七段目の由良といふ計略だ。サアもつとこつちへよんな」ト小三の手をとり引上せる。小三「また誰かまゐりますよ」金五「なんのこつたな、そんな野暮な者が居るものか。但しはいやか、嬉しくねへか」小三「あなたのお心がとけまして、嬉しいことはうれしいと、思ふにつけて又一ツ、心がかりが出來ま

かそつとは何とか彼とか、のうおとわ」とわ「さやうさねえ、今日はどうかおしださうで、まことにふさいでお出なさるが、こりやア何か譯がありませう」トけどつたやうすの口うちに、金五郎はわざとまぎらし、金「さうヨ、大かた色男が、侯つてゐるのをこつちへ呼んだで、それできつく鬱塞ぐだらう。どうで己がやうなのつぺらぼんは、女にやア緣遠いから、兄弟分になるつもりだ。ちひせへもんぢやア面倒だから、サア／＼是へついでくんな」ト大きなゆのみへ酒をつがせ、のみにかゝると小さんはおさへて、「モシあなた、夫ではあんまり過ぎますぞえ」金五郎「なぜ、酒がすぎちやアわりいのか」小さん「わるいと申すぢやござりませんが、あんまりあがるとお身の毒、わたしがすけてあげませう。是もやつぱり勤の一ツ、みなさんわらつておくんなさんなよ」トぐつとのみほし、はつとひといき。もく藏「イヨ濱々、ありがたし。玉藻前の再來め。これらがほんの、よしこの／＼」目八「モシ旦那、わたくしが目のわりいせえか、小三さんはどうも、おいらんに似てゐなさるぢやアごぜえませんか」トいはれてふたりはむねにぎつくり、金五郎はわざとそらとぼけ、金「ナニ小三がカ、どれ／＼」トわらひながら、小三の顏をさしのぞけば、小三はうれしさ恥かしさに、はながみでかほをかくす。金「ほんにのう、足下の目のせえでもねへ、己にもさう見えるやつヨ。他人のそら似とやらだ。のう小三」トいはるるたびにむねどき／＼。小三「どうでございますか、私なんぞが」金「アヽなんだかひどく醉がまはつた。ゲエイ引。コウ小三、水を一ぱいもつて來てくんな」トそのまゝそこへうちふすに、小三は下へおりてゆく。もく「旦那もし、モウたぬき

今しまひましたヨ。まことに〳〵暑くつて、びつちより汗になりましたよ」トいひまぎらせどとかくにむねのどうきのをさまらねば、さしうつむいてふさぎゐる。もく藏「ときにおいらんはまだ御入内がごぜえませんね。モシ旦那、やつがれがちよと、勅使に立ちませうか」トいふに金五郎わらひながら「ナァニ、足下の足を勞すまでもなしさ。ちつと見かけた山があるから、おいらんの處へ勅使もたてず御内意もしねへのよ」おとわ「オヤ〳〵旦那はおいらんに、かたい約束をなすつたぢやァありませんかえ。夫にマァそんな事を」金「ナニサ、今に容子がわかりせえすりやァ、眞名鶴も呼びにやるのす。まァ〳〵そんな事は措置として、諸事酒だ。唄へ〳〵」トぎよいにしたがふげいしやの長うた、

さうした黄菊としらぎくの、おなじつとめのその中に、外の客しゆは捨小船、

トうたいはやしで賑しく、しだいに銚子の數もかはれば、はやことくぜりのはやり唄、上がたうたで騷ぎ立つれど、とかく小三はうき〳〵せず。目八は小三の肩をたゝき、目八「コレ女房ども、なぜマァそのよに鬱塞いでをる。ちと浮々しやいのう。イヨ成田屋ァ」小三「アレモウいやだヨ。おふざけでない」目八「コレサなぜそんなに、ぴんしやんぴんするのだ。人目が多くてはづかしいか。さうか〳〵。ハテさて初心な子ではあるぞ。おまへとわたしのその中は、知らねへものは、子エもし旦那」金「大きにサの。左右この子は男が嫌えださうで、なんぼ馴染のねへおれでも、ちつと



もみんな約束ごと、いたし方もござりませぬ」トゆだんを見すまし又ぬきかけるを、金五郎はさしぞへもぎとり、金「はやまつたことして後悔するな。それほどに深く思つてゐるなら、生ながらへて後の世まで、人の物わらひにならぬ樣に、にごりし名をもすゝぎあげ、生わかれた眞身の姉に、めぐりあうて名告りあひ、古鄕に殘したわが親父に、孝行せうとは思はぬか。殊にそなたの身のうへは、此家へ賣られて來たことゆゑ、わがものならぬ主人の體、なりや今こゝで死んで見ると、主人も難儀このおれも、のがれぬ中で難儀をするわ。死は一旦にしてなし易く、生はかたしといふところへ、心づかぬか、コレ小さん」小三「エヽそんならあなたお疑ひが、はれましたと申しますのか。そりや本當でござりますかえ」金「ウンヨ、なに虛をつくものか」小三「エヽ嬉しうござります。夫でちつと氣が落付きました」トたがひに心はとけながら、金五郎も男のいぢ、なんとやはらぐことばもなければ、又酒肴をいひつけて、唄妓幇間をよびにやると、程なくみな〳〵どや〳〵と來る。目八「へイ旦那、其後は一別以來、とんと見參つかまつりませぬ」金「ほんに目八公、さつき逢つたまんまだつけの」目八「ホイ、さうでありましたつけか」太鼓「大しくじり、目八公それじやア、先刻以來といひてえのう」おとわ「オヤ旦那、お歸んなすつたと存じましたら、またこゝの穴へお這入なさいました子。オホヽヽヽ。オヤ、小三さん、是はおはやう。さぞおくたびれなすつたらう」トあいさつするに、小さんはけどられじとなみだをかくし、小三「アイ、やう〳〵

直してくださりまし。もしお疑ひがはれましたら、たつた一言いつものやうに、堪忍するとやさしいお詞、お聞かせなすつて下さりまし。よ、よ」トぢがねあらはすむすめ氣の、金五郎にとりつきて、しばし泪にくれけるが、こゝろづきて泪をはらひ、あたり見まはし金五郎の、側に置きたる指添を、音せぬやうにそろりと拔くを、見るより金五郎ははねおきて、その手をしつかとりおさへつけ、金「コレ何をする、あぶねへわ。人おどしの刃物三昧か」トいふ顔つくぐ見て、泪はらり、小さん「エ、お情ないそのおことば。女子だてらに人おどしの、こはい刃物が持たれませうか。そりやあんまりでござります。なんぼあなたが男でも、お情ないおどうよくでござりませう。是ほど事をわけまして、お詫言を申しますに、たつた一言のおへんじもなく、しばらくお目にかゝらぬとて、そんなにマアわたくしが、憎くておいやになりましたか。そりやあなたでもござりませぬ。たとひ女夫のかためはせずとも、一旦あなたのお口から、戯談におつしやつたかは存じませぬが、行すゑかけて女房にするの、二年や三年遠ざかつても、かはる心はないことの、短氣を出さずに便をまてのと、人ばつかりを嬉しがらせて　わづか半年あまりのあひだに、左樣お心の變りますは、あんまりきこえぬあなたのお心、どうでそのやうにおきらひなされば、なにを樂しみに今日が日から、むだに命をながらへませう。わたくしがなき後で、せめて一遍の御回向をと、申した處がおいやの私、とても夫も叶ひますまい。これ

ありますまいし、どうで憂目を見る位なら、大磯の廓は朝暮に、人の入りこむ所といへば、そこへ身を沈めたなら、あなたにめぐり逢はれうかと、はかないことを便にして、御恩の深いおとつさんを、お見棄申す心はなけれど、心一ッにせんかたなく、とう〳〵この額俵屋へ、歌妓に賣られてまゐりましたが、思ひもよらずたつた今、あなたにお目にかゝりまして、あまりの事の嬉しさに、ものさへいはずに立ちましたは、私が前後の考なく、不調法でござりますから、おゆるしなされてくださりまし。殊にあなたに逢ひたいばかりに、覺期いたしてこの苦界へ、身を沈めは沈めましたが、今さらお目にかゝりますと、まことに身のほどが恥かしく、消えてなくなりたうござります。どうで大切のおとつさんを捨て、道ならぬことに身を墮し、御苦勞かけてあなたには、御憎しみをうけたこの身、いつまでながらへ居られませう。どうぞこの世の思出には、今までのお疑ひを、おはらしなされてくださりまし」トしじうなみだのうるみ聲に人のきこえをはゞかりて、わびることばのせつなるを、聞けばさすがに金五郎も、いつたん腹はたちけれども、かくまでわが身を深く思うて、この泥水に身をしづめても、蓮に似たる心の潔白、苦勞さするもわれゆゑか、不便のものやと心には、おもへど男の事なれば、そのまゝ心もをれかねて、返事もせずに空睡。小さんはなほもすりよつて、顏さしのぞき〳〵「もしあなた、是ほどまで申しますのに、お疑ひがはれませぬか。エ、エ、金五郎さんえ、どうぞ御堪忍あそばして、お心を

聲の、三度四たびと聞ゆるゆゑ、また出て見れば物もなし。われとわが身で合點もゆかず、途方にくるれば寺々に、ひゞく夜中の鐘の音の、あはれ無常を告げるかと、ながらへ難く胸せまり、物うき月日を送りますのも、心ぐるしく苦患になり、いつそ死んだがましであらうと、おもへばしきりにぞく〳〵と、首すぢもとから身の毛だち、死ねよ〳〵と死神の、ついて死ぬのを勸めますのか、立つても居ても落つかず、我を忘れてふら〳〵と、家をぬけ出で走りましたが、その後の事はさつぱり知らず、どうして身を投げしやら、加茂河へながれ著いたを、近所の者に引上げられ、息ふき返して見ましたところが、顏も見しらぬこはい男が、ぜげんとやら人買とやらいふ男とふたりで、いろ〳〵な、あだいやらしい事をいうて、抱かれて寐るか言ふこと聞くかと、いはれて怖さおそろしさ、いろ〳〵にわび言しても、こはい目ばかりいたしまして、聞入のない無理非道、というて身を汚すくらゐなら、舌を喰つてなと果てませうと存じましたが、身を投げてさへ助かるものを、まだ命の盡きぬ事なら、どうぞして東へ下り、あなたのお顏をもう一度、見ましたうへで死にたいものと、おもうた心の通じましたか、その惡棍が、いふことをきかずば、遠い大磯へ賣こかし、金にするとやら申します故、とても運わるく死におくれ、惡者の手に捕へられては、おとつさんのところへ直ぐすなほには、返す事も

前編下巻

第三回

當下小三は胸なでおろし、泪を袖にぬぐひつゝ、金五郎の側へさしより、小三「今さら實を申しましても、一旦お疑ひを受けましたれば、誠とは思召すまいが、あなたにお別れ申してより、一日片時わすれませせず、泣いてはあかし哭いてはくらし、もう〳〵悲しい日を送るも、やがて東へ落ついたら、呼によこすとおつしやつた、そのおことばを力にして、今日か明日かと指をりて、まてば一日も十日の思、明けても暮れてもお便なく、一と月たち二月過ぎ、三月四月と日は立てども、風のたよりのお文さへ、ないてくらして居るうちに、この春の彌生のころ、日さへ忘れはいたしません、上の八日の夜もふけて、みな家内は寐しづまつても、わたくしばかり目も合はず、こしかた行すゑどうかうと、思ひまはせばいとゞしく、たよりなき身にあなたにまで、捨てられては世に頼なく、いつそ死なうか果てやうかと、案じすごして居ります折から、閨の戸とん〳〵うちたゝき、おかめ〳〵とあなたのお聲、さてはと嬉しく戸をあけて、見ればなんにも眞の闇、これも心のまよひかと、また寐まするとまたとん〳〵、おかめ〳〵とよぶ

ぐいと呑み、手まくらをして寐ころびゐる。

から、勝手次第に浮氣をしをれ」トいひすてゝ立たんとするを、小さんはしどろいひわけなさに、只なきしづみゐたりしが、こゝぞ大事とあわてゝとりつき、小三「サヽヽみな御尤でござりますが、マア〳〵俟つて下さいまし。くはしい樣子を御ぞんじないから、お腹をお立ち遊ばすも、すこしも御無理はござりませんが、是にはいろ〳〵ふかい譯が」金「ヲヽ譯もあらうし義理もあらう。けれどもそりやァ聞く耳やもたねへ。エヽいけふざけた、はなさねへか」小三「いゝえ放しはいたしません。言がひのない心から、思ひもよらぬおうたがひ、死なうと覺悟極めしは、今日の今まで日にいくたび、やつぱり死なれぬ身の因果、どうなりとして今一度、あなたのお顔を見たうへにと、あまたの人の入りこむこの花街、そればつかりをたのしみに、つらい苦界に身を沈めて、恥や人めに氣もつかず」金「エヽやかましい、よしにしろ。どゝいつの文句めいた、そんなせりふはをかしくねへ。流行言に道理をつけたり、間に合ひの口ほこでも、モウその手ぢやァばかされねへわ」小三「左樣ではござりませうが、どうぞ情とおぼしめして、たつた一言申す事を、お聞きなすつてくださいまし。その上にてはともかくも、殺してなりとお腹いせ、御勝手しだいになされまし」ト身をなげかけてすがりとめ、泪ながらにわびるにぞ、金五郎もさすがまた、心づよくはいふものの、にくからぬ小三のことゆゑ、すげなく立つても歸られねば、袖ふりはらひ身をそむけ、銚子の酒を手酌にして、茶碗にうけて

た、産の親より恩の深い、養親の情をわすれ、恩を仇の犬畜生、ぎりある親の名をけがし、恥をはぢとも思はぬ狸め。よくマア面もかぶらずに、のけ〳〵と出てうせたナ。いかに遠路をへだつるとも、多くの人のいりこむ廓、この鎌くらにもおれが親父の、文武の弟子はいくらもあれば、この街へもみないりこむわ。それに面を合しても、恥ぢやァあるめへ恥でもなからう。さういふ事とはつゆ知らず、親父は直なこゝろから、神かくしにでもなつたのか、又は身をなげて死んだかと、心を盡して尋ねさせ、うらなひ八卦御鬮にも、生死の程もわからぬから、家出した日を忌日として、佛事供養も懇にすると、くはしい書狀が來たゆゑに、子供の時より一ッに育ちし、馴染がひに朝な夕な、念佛申してやらうとおもへど、今は養子の身の上なれば、兩親の前へも遠慮がちで、心にはまかせねど、合間を見ては回向して、抹香くさい佛いぢりも、萬一たつしやで居るならば、身の祈禱にもならうかと、心づくしに引かへて、生根のくさつた恩しらず、大切な親をふり捨てて、この土地へ來て泥水活業。オヽ貞女だ、節義ものだ。髪のかざりの櫛笄、はでな衣裝に浮氣なとりなり、長唄豊後はやり唄や、一中ぶしをうなつたり、是見よがしに踊を踊つて、客のきげんをとる事ゆゑ、人も迷はう惚れもしやう。悪性ものの天上め。モウ〳〵愛想のつかしをさめだ。顔を見るのもいま〳〵しい。ものをいふのも是ぎりだ

へました」（トとり〳〵ひやいばんのそのうちも、金五郎はむねに手をおき、）アノ小さんこそ面ざしといひ、上方から來たといへば、おかめによも相違はあるまじ。眞名鶴にもうち明けて、やうすを聞かんと思ひしが、なま中あからさまに語りても、健で彼してゐるからは、心かはりて男のために、身を沈めしもはかりがたしと、さま〴〵に思案して、今宵は去りがたき用ありとて、そこ〴〵に座敷もきりあげ、眞名鶴に別れて大門を出でしが、忽ち又取つて返し、私に額俵屋重兵衛の所へゆき、彼の小さんに口をかけて、二かいへあがり酒のみながら、今や來ると待つところに、程なく小さんは俄をしまひ、うかぬ顔にて何氣なく、二階のはしごをとん〳〵と、上り來りて金五郎の、側へ立寄り顔見合せ、ハッとばかりに驚きあわて、立たんとするを金五郎は、（すそをとらへて目をつりあげ、）「コウ小さんさんとやら、なぜ迯げる。氣障な客だから氣に入らねへか。きざならきざでいゝけれど、物もいはずにそしらぬふりは、見わすれたのか見くびつたか。よもや忘れはしめへがの。未練が残つて來たのぢやねへ、聞く事があるから下にゐろ」（トいはれて小さんはむねにくぎ、なんといちへんことばもなく、めんぼくなげにひれふして、只さめ〴〵となきゐたり。金五郎はこゑあらゝげ、）「コレ、あいさつしねへは面目ねへのか。エ、そのざまはマア誰ゆゑだ。定めしかはいゝ男のために、心がらのこのつとめ歟。よく物をつもつて見ろよ。犬猫でもそれ相應に、恩といふことは知つてゐるぞ。それになんだ、己の顔を踏つけにするはおろかな事、わらの上から育られ

山だヨ。オホヽヽヽヽ」目八「ヘンやつかましい、妬くなく〳〵。おとわばうは氣めへはいゝが、とかく妬くのでおそれるのツ」おとわ「オヤよしておくれ、お前のおかみさんとはちつと違ふによ。モシ旦那え、アノ小三さんはネ、上がたから此頃まゐりましたさうでございますが、よく早く呑込みましたぢやアございませんか」金「さうか、とんだ遠くから賣られて來たの。大かた男と駈落でもして、其男に賣られたのだらう」目八「旦那きついもの、お前さんの判斷の通り、男とはる〴〵にげて來たが、その男にたぶらかされて、泥水へ沈んだのでござえますツサ」まなづる「オヤ〳〵アノ子がかえ、どうもさういふ樣子には見えいせんねえ。もしえ、さうぢやアおつせんかえ」金「おいらんはさういふけれど、そこが譬の小袋と小娘、油斷のならねへ世の中さの」へぼ吉「ナニ〳〵旦那、さういふ譯ぢやアござえせんツサ。わたくしがこのあひだ額重へめえつた時、よく氣をつけて見ましたが、それは〳〵起居ふるまひの物しづやかさ、音聲はさわやかにして鶯のさへづる如く、多辯でなく、はすはでなく、意氣でしやんとして程がよく、鴨川の水を産湯にあびて、京おしろいを糠袋に入れて、みがきあげた眞の美女さネ」トはなす處へあるじ庄吉いてきたりて、庄「モシ旦那、額重の小さんをごらうじましたか」金「フウ何だかろく〳〵見なんだが、よつほど美婦人ださうだの」庄「さやうでございます、まづ此頃での藝者だと申します。いゝ金箱をかゝ

あさい心としら糸の、染めてくやしきなれ衣、ありしながらの一ツまへ、小づま揃へてしどけなく、風に柳の吹くまゝに、まかせるはずのつとめぢやとても、いやな客にも比翼ござ、思ふ男の山鳥の、

トかたる文句につれて踊る小さんを、金五郎は、何心なく、見ればふしぎやすぎし頃、家出して死したるおかめに、寸分違はぬ顔かたち、これは不思議とまたゝきもせず、見れば見るほど違はねば、是もわが身の迷かと、思ひ直して見るものの、外の女と思はれねば、もしや浮氣なこゝろを出し、男をこしらへこの廓へ、逃げて來てゐることにやと、まはり氣すれば腹立しく、さりとて人に問ふも異なもの、とつくり樣子を見きはめんと、そしらぬふりにて見てゐれば、幇間のへぼ吉見とれつゝ、へぼ「イヨ〳〵、濱の本店、小さん大明神さま〳〵〳〵、外には決してござえせん、三千世界にたつた一人」目八「イヤ有がたし、妙でござえす。濱むらや丸むき、額俵屋の大黑柱、ありがたいの天上め、咲耶姫の再來か、三國一の無類々々」金「たいさうほめるのう、賄賂でももらやアしねへか」目八「モシ旦那、賄賂どころか、けふもきのふも昨日も今日も、文玉章の數々は、ヤモシ、あんなうつつい美婦人が、つけ文をするのでのほせやすのさ」女げいしやおとわ「オヤ目八さんきついこつた子。十九文やの店さきのやうに、うぬぼれ鏡が澤

聞くからに、悲しさいとゞいやまさり、しばし泪にくれにけり。かゝるえにしの淺からぬ、中なればなほさま〳〵に、身のうへの事かたりあかしぬ。されどもたがひに一ッに寢ず、一旦金五郎も妹お龜に、女夫の約束せしことなれば、今さらその血すぢの姉が、流の身とても枕かはすは、さすがにうしろめたく思へば、眞名鶴もまたその心ゆゑ、すいた男とにくからねど、帶紐解いては死したる妹の、供養にならずと心につゝしみ、いやらしきことさへ言はず。さりながら金五郎は、この儘にもふり捨てられねば、是より常の客のごとく、をり〳〵眞名鶴の所へ通へど、決して枕をかはすことなく、酒などのみては憂さをかたりぬ。かくてその月もくれ、八月のはじめになりけるに、例のごとく思ひ〳〵の、俄狂言をどりなど、さま〳〵あるその中に、額俵屋といふ茶屋の、今度かゝへの藝者の小三、品かたちといひとりなりまで、五町にまれなる容貌ゆゑ、淺間のをどりにこの小さんを、傾城奥州に仕立て、衣裝著つけも美をつくし、淨瑠璃は登見本阿輪太夫にて、人の耳目をおどろかす踊ゆゑ、廓中での大評判、をりふし金五郎は、待宵の月をながめつゝ、俄を見物なすべしと、例のごとく守多屋の二階にて、眞名鶴と共に酒くみかはし、今や來ると待居るところへ、程なく來る淺間の踊、節おもしろき太夫の淨瑠璃、

し珠數屋町の邊ぢやアねへかえ」鶴「エ、ほんにさうでおざりいすヨ。よくぬしは知つてお出なんすチ。その珠數屋町の六兵衞と申しいすまづしい者のむすめ」金「ヤ、そんならアノ珠數屋町の、古鐵買の六兵衞どのの、娘であつたか、アノおめへが」ト、あきれてしばしことばなし。眞名鶴は何かは知らねば、わが身の上はをさなき時より、母にわかれ家まづしきゆゑ、さるかたへ里にゆきて、やうやく成人なしたるところ、里親にだまされて、過ぎし年この大磯の苦界に沈み、父六兵衞は夫より先に、亡靈の數に入り、たつた一人の妹は、藁の上から情ある、お方にもらはれ育つと聞けど、つひに一度逢ひもせず、便なき身はつね〴〵から、妹ばかりがゆく〳〵の、力とおもへどかひなきつとめ、まめで居るやらどうしたやらと、案じるのみと身の素生を、かたるをきいて金五郎は、驚くことひとかたならず、我こそそなたが妹の親の、文之丞が男子なるが、をさなき時より妹おかめは、吾身と共に人と成りて、いまだ枕はかはさねども、行すゑ女夫の約束して、中よくくらすその中に、われは此地の叔父の家へ、もらはれ來りしその後にて、おかめは家出し果てたるにや、行方の知れぬその處に、今また思ひがけなくも、姉のおん身にめぐり〳〵て、今宵名のりあふといふも、やつぱりつながる血すぢの糸、あやしき緣なりけりと、いちぶしじうを物語れば、ます〳〵駭く眞名鶴は、便にせんと樂しみ俟ちし、只ひとりの妹まで、世になき人と

いふもの。おめへがさういふ心なら、わたしも根かぎり通ふ氣だが、いゝ時分に突出しちやア恨だよ」鶴「どうしてマア、ぬしを突出しいしたら、それこそ罰があたりイせう」金「それはさうと、たとへにも、他人の空似といふけれど、どうも他人とはおもはれねへが、おめへはマアいつたい何所の生れか、なじみがひに咄してきかせな」鶴「そりやアぬしのことざんすから、おはなし申しもいたしいせうが、身の上をあかしいしたら、ぬしに愛想をつかされいせう」金「さうおもふも尤だが、いづれこの廓へ身を沈めるには、仕合がよくつて來たものはねへから、なに恥といふではなし、咄して聞かせてもいゝぢやアねへか」鶴「ほんにそれもさうでおす子、そんならおはなし申しいせう。アノ私はまことに〱遠くの國でおざりいすよ」金「ハテ子、それぢやア蝦夷松前か、紅毛の果からでも來たのかえ」鶴「オホヽヽヽ、ばからしうおすヨ。アノ上方でおざりいすからさ」金「フウ、アノ上方、ハテナ本當にか」鶴「アイ、それだから遠くだと申しいすのさ」金「なんの上方の生れなら、遠くなことがあるものか。ハテ縁といふものはおつなものだ子。わたしもやつぱり上方ぜえろくさ」鶴「オヤ虚をおつきなんし、なんのマアぬしなんぞが、上方だとおつせえしても、上方にやアぬしのやうな、いきなお方はおざりませんよ」金「さうさ、わたしの様な不意氣な野郎は、どこの國にあるものか。そしておめへは上方の、も

から、物ごし恰好、似たとはおろか、瓜を二ツにわらずとその儘」まなづる「オホヽヽヽ、ばからしうおすヨ。似た／＼とおつせえすが、誰に似申したのか、話してお聞かせなんしな」金「話しませう／＼。その似たといふ仔細は、マア聞いておくれ、かういふ譯さ。わたしが幼い時分から、行すゑかけていひかはし、女房にせうと思つた女にサ。ほんに野暮な野郎だと、わらつてくんなさんな」鶴「なんのマア笑ひんせう。そんならモウぬしは御新造さんがおざりいす子」金「ナニサその女はモウとつくに死んでしまつたのサ」鶴「うそ／＼。そんなにお隱しなんせずとよいぢやァおつせんかえ」金「うそぢやァなしサ、實に死んでしまつたよ」鶴「ほんざんすかえ、ソリヤァマァさぞお力がお落ちなんしたらう子。譬また虚いつはりにも、ぬしに思はれてお出なんした、そのお方に似たと思つておくんなんすりや、わたくしが身に取りいしちやァ、眞實嬉しうおざりいすヨ」金「なんの、うれしい事はありやすめえ。そりやァほんのつとめの手くだ、實は七里けつぱいだらう」鶴「オヤ勿體ない、なんでいつはりを申しいせう。初會からこんなことを申しいしたら、おさげすみなんせうが、ぬしのためなら都合しても、呼び申したうおざりいすが、ぬしやァ大かた通り一遍で、もうお出なんすこつちやァおざりいすめえ」金「そりやァみんなこつちで言ふ事、一河の流一樹の蔭、他生の縁があればこそ、かうしてわざ／＼來ると

己も行つて、誰ぞ見立てやう」ト、二人はたいこげいしやをひきつれ、ちとせやへをどりこみ、醉狂もあひかたをさだめ、お定りの盃事も、程よくきりあげ床へまはれば、藝者幸頭は、「御機嫌よう」ト、みな〳〵どや〳〵下へゆく。金五郎は初會の事ゆゑ、羽織は枕元にぬぎ捨てて、横になつて寐てゐるところへ、相方の眞名鶴は、藍御納戸の唐縮緬、裾に光琳の鶴の染出し、緋ぢりめんの裏襟つきし、ひとへものについたけの襦袢、黒の紋天に緋のごろふくりんの、腹あはせの帯をだらしなく結び、鼻紙を持添へて褄をとり、いそ〳〵しながら金五郎のそばへ來り、顔をさしのぞいてよりかゝり。眞名鶴「もしえ、モウおやすみなんしたかえ。なぜ起きてゐておくんなんせぬえ。サア目をお覺しなんし」ト、ゆすりおこせば金五郎は、わざと目のさめたふりにて、金「オヤおいらん、いつの間にマア來なすつた、くるなら來ると前びろに、鳥渡人でもよこしなさればいゝ、出しぬけに起されちやァ蟲が動じるから」まなづる「オヤ〳〵いやでおすよ」金「さうだらう子。いづれ私のやうなへうたんは、可愛がられねへのはあたりめへさ」まなづる「アレさうぢやァおざりいせん。お氣にさはつたらお容しなんし」、ト、たばこをすひつけていだす。金五郎はひとひきひいて、金「これは御馳走」ト、まなづるにわたし、顔をしげ〳〵見てゐる。「オヤなんざんすえ。ぬしやァなぜそんなに顔ばかり見なんすえ。ぬしにそんなに見られえすと、恥しくなりいすヨ」ト、にっこりわらふ。金「まことに不思議。どうも生うつし。こんなにもよく似るものか」ト、われをわすれてはつといき。まなづる「オヤなんでおすえ。似いしたとは、そりやァ誰さんに似いしたえ」ト、にっこりわらふ顔をつく〴〵。金「ソレ、その笑ふ顔つき

らう」日八「違えごぜせん。酒呑猪口がきやりをいつて、銚子の引物を引出すと、吸物膳の箸が突立つて、硯ぶたの慈姑をおつちらかしやせう。とんだ化物屋しきのやうだ。アハヽヽヽヽ。旦那おどけはのけて、モシ、噂をすれば影ぢやあねへ、正眞正銘本家元祖、まじりなし、外八文字でしよなり〳〵。アレ〳〵、あの挑灯がそでごぜえます」醉「ほんにのう、金さんおめへもよく目利をして、もし無疵で氣に入つたら、今夜の花にしなさるがいゝ」金五郎「ちげえねへ、なんならお前ともやひにしませう」ト、おどけをいふうち、千とせやのつき出し女郎まな鶴は、新造かぶろをひきつれていろ〳〵ぜんとあゆみくるを、金五郎はひとみをさだめて、みればふしぎやゆくへの知れぬおかめの姿に生うつし。もしやそれかとつく〴〵見れば、劣はせねどどこやらが、違ふ様には思はれても、目もと口もと愛敬ある、品かたちのよく似たれば、胸とゞろきて心まどひ、わが身の迷か、醉うたる故かと、しばし見とれて詞なきを、見てとる幇間醉狂も金五郎の肩をたゝいて笑ひながら、醉「コウ金さん、おまへは此頃ひどく物案じな様子だから、いろ〳〵にすゝめても、女郎もげいしやも地者もいやだと、だゞつ子がすねるやうに、いやだ〳〵といひなすつたが、なんと今の花魁はどうだエ」金「さうさネ、なか〳〵美しい子」醉「よつほどさそふ水あらばだネ」金「ナニ、さういふ理窟でもねへけれど」醉「けれどがをかしい。あながち氣がないでもあるめえ」金「ハヽハヽヽ、マアなんでもいゝから、わたしやアあの子にきめやう」醉「それがいゝ〳〵。そんなら

ヤ〱目八さん、今日はまことに閉口だねえ」目八「ナニサ〱、こんな理も非も辨へねへ、田夫野人と論は無益だ」へ狂「ナニ、己が田夫野人なら、足下は牛房にんじんだ」みな〱「ハ、、、ハ」目八「時にモシ、金さんとおつしやいましたチ、ちよいと一ッけんじ天皇あきの田のといたしませう」金五郎「こりやア一ッお押へだ」目八「ナアル、そこもあれば蓋もあるか。モシ旦那、實に妙といふことがござえますトいふ來歴は、モシ、千年屋のかゝへの子で、このごろまで引込んでをりましたのが、けふ突出しの眞名鶴といつて、ぶつつけ呼出しのお職さチ。その容貌といつぱ、天人は羽衣をかぶり、辨天さまは冠を落し、拙者がお宿の山の神も、尻をまくつて逃出すばかり」へ狂「ヘンがうぎに山の神をあがめたの」目八「大きにス。エ、とまづこの天盃は、そちらの旦那へさゝげて置きのト。そこでモシ旦那、今にモウこゝへ眞名鶴さんがめえりますから、よくお拜みなせえ。實にびつくりおいたちこ、ねずみこつこは痴話のはじまり、とけつこつこは鶏よ、はとつぽつぽにや豆をやれ、すてつぽうには油斷をするな、ふてえ奴なら打のめせ、じたいわれらは都のうまれ、色にそやされ、こんな幇間になられたア。ハアどんどこどん、どんどこどんッ。ア、せつねへ、いきがはづむ。アッハ、、、、ハ」醉狂「エ、やかましい、よくしやべるぞ。そんなにどなると、天井の煤が神事舞をして、疊の芥がをどり出すだ

うさねえ。モシ旦那、よく御覽じまし。顏の丸みあんばい肉合なんどは、てもなく珊瑚珠の緒〆の再來、モシ鼻筋が横の方へぐつと通つて、眉毛がによつくりと蛞蝓の樣で、鼻は獅子でもねへが赤くむくれて、口は錢湯のざくろ口だが、流し男の給金が安いかして、齒は一向に磨上げず、匂のあしき事いはん方なし。譬へていはゞてんぐ〳〵むき〳〵の、寄合世帶といふ顏構サ。ア、なげかはしいが愛敬のねへ、女縁のなささうな御面相だぞ」目八「こう〳〵貴さまは、何の遺恨があつて、おれが顏の棚おろしをするのだ。隣の寶をかぞへるやうに、人の疝氣を頭痛に病むとは、よつぽどおめへも苦勞性だぜ。アヽとかく男のいゝものは、そねまれるのでうるせえぞ。オホン〳〵」へぼ「ヘン、おつうとまりたがる奴だの。コウ戲談はおどけだが、足下幇間をさらけやめねえ。いゝ金まうけの筋があるぜ、九月になると」目八「なぜ〳〵」へぼ「よく考へて見さつし。容貌といひ口前といひ」目八「ハテナ、富でもとるといふ事かノ」へぼ「ヘン押の強え、神明の祭だからよ」目八「ナニ〳〵、神明のまつり、フウめつかち生姜か。ヤいま〳〵しい事をぬかしやアがる。コレそんなに難非を付けて惡くいつても、是でも女にやア憎がられねへ男だよ」へぼ「そのかはりかはいがられた事もあるめへ、その顏ぢやア」目八「そねめ〳〵。顏にや迷はぬ姿にやほれぬと」へぼ「フウたつたひとつの目に惚れるか。フハヽヽヽヽ」おたこ「オ

レサおたこばう、ちよつとこつちを向き給へ」トげいしやの袖をむしやうに引ばる　おたこ「アレいやだヨ、よしておくれ。そんなに引ばると著物がきれるはナ。すかねへのう」へぼ吉「オヤ氣がつかねへ、堪忍しておくれようツ。コウおたさん、いゝ子だからちよつとうしろを彈いておくれ。無類飛切大極上、せり賣卸仕らずといふ聲色をつかふから」おたこ「オヤ／＼おつな藥のいひ立だねえ」

うた菊はとうりのもとよりも、けいしやうの袖やかをるらん。

へぼ「まねまするは、エヘン／＼エヘン、エヘヘンノ、エヘン／＼、エヘエヘエヘンノ、エヘン／＼エヘン／＼」目八「なんだ／＼、コレどうしたのだ。そこへ小間物見せを出しちやア眞平だぜ」へぼ「なぜ／＼。こりやア聲色だ」目八「エヘン／＼、エヘンノヘンツ、なんのこつた」へぼ「ハテやぼな事を聞き給ふな。よく考へて御覽じろ。卽ち咳が三十らうサの」醉狂「おきやアがれ。アハヽヽヽ」目八「モシ旦那、妙な事がごぜえます。誠にどうも、どうも誠に、實に妙々妙でごぜえす」醉「何だやかましい、何をいふのだ」目八「イエサあなたが誠にどうも」醉「己がどうした。女が惚れるで羨しいか」目八「いかなこつても御挨拶。オホヽヽツ。エモシ、お前さんはお目が二ツあつてよく見えますナ。實にうら目しいたアこのこつた」醉「ハヽヽヽ、何をいふかと思つたら、足下は目が一ツだつけの。をしい男だが、あつたら玉に疵だのう」へぼ吉「さや


屋



となれば、なま中たよりをするならば、思のたねをいやます道理、音信せぬこそ互のため、いつか忘るゝこともあらんと、あきらめては見るものの、愛敬づきて憎からぬ、おかめを今さら餘の人の、手活の花になすことも、いと口惜しき事なりと、日々に胸のみ苦しめけり。かゝるところに實父の方より、しかぐの事により、おかめが家出し行方知れずと、いひこしければ金五郎は、駭くこと大かたならず、掌中の玉を、うしなひし、心地にあきれ胸つぶれ、氣ぬけするまで惑ひしが、さすが男の事なれば、やうやくに心取直し、つくぐおもへば緣なきむかしと、あきらめては見るものの、もしやおかめの心かはり、我のみ深くおもひゐるのも、知らずに男をこしらへて、家出せしにはあらざるか、又は狹き心から、添はれぬ事を苦に病みて、入水などせしにやト、さまぐに思ひとりて、心に回向したりけり。是より後は金五郎も、おかめが死せしと思ふものから、家の娘お雪の姿も、十人なみには勝れたれど、見かへる心もなき故に、世にたのしき事もなく、おもしろからぬ日を過すうち、夏去り秋も文月の、中旬にいたれど暑さはさらず。ある日金五郎は、醉狂といふ友達にさそはれて、大磯の燈籠を見物せんと、打連れてたそがれより、廓へ至りなじみの茶や、守多屋へゆきて酒宴をまうけ、歌妓牽頭なんど相手にして、さゞめきわたつて大さわぎ。へぼ吉「コウく、おたこさんく、コ

の如くおもひおもはれ、たがひに憎からぬ中なりしを、いつぞや別れしその日より、たどうづら〳〵として、東の空のみ打詠め、娘心に添はれぬ事と、思ひあまりの胸に絶えずや、夜もをり〳〵うなされては、淵川へなと身を沈めんと、うつゝの如くにいひけるが、さては入水やなしたりけんと、猶人を出し水邊を、落なく尋ねさがしけれど、その死骸さへ知れざれば、今は文之丞も定業ならんと、やうやくあきらめ、家出せし日を忌日として、七日々々の訪とむらひもねんごろに、泪ながらにいとなみつ、文之丞はこの事を、くはしく狀にしたゝめて、鎌くらの金五郎かたへ、人を下して知らせけり。されば又金五郎は、本家の叔父文次郎の家に、養子にもらはれ來りけるが、おもひきやお雪というて、容貌のうるはしき、娘のあるに驚きしが、今さらにせん方なく、父の敎にしたがひて、養父母に孝をつくし、くらすうちも都に殘せし、おかめの事のみ氣にかゝり、末は女夫と約束して、別れて此地に落著きしなら、便をなしで呼迎へんと、思ひし事もくひちがひ、お雪のあればこなたの父に、おかめの事をうちあけて、迎へたしとも言ひがたく、殊に實父文之丞が、おかめは素生もいやしければ、本家の娵にはなりがたしと、いひたる言のかれこれを、思ひ合せばゆく〳〵は、とてもおかめと添ふ事ならず、一旦約束したれども、かゝる譯ゆゑおもひきれと、言送らんもさすがにて、又遠ざかりゐるこ

うちかこち、一日二日と送れども、夜の目もあはさで案じ事、行すゑこしかた思うてみれば、よく〳〵幸なきうまれにて、親にはおくれ姉にはわかれ、便さへなき身の因果、こゝろの願もかなはねば、生ながらへても樂からず、いつそ淵川へ身を沈めて、果てなん事こそましならめと、戀に心もみだれ髪、なであぐる氣もなか〳〵に、泣しづみたる閨の戸を、ふけゆく夜半の風ならで、ほと〳〵とうち敲き、「おかめ〳〵」とよぶ聲に、驚かされて立あがり、そつと戸を開けうかゞへど、人もあらねばさてはわが、心のまよひに風の音を、もしや戀しきその人の、來給ひしとや思ひしゆゑ、あなあさましき心かなと、わが身のほどをかへりみて、またうち臥すにふたゝび三たび、「おかめ〳〵」といふ聲の、耳に入るこそいぶかしく、もしやと惑ひて出て見れば、影さへもなしうち臥せば、またよぶ聲のするゆゑに、おかめは夢歟うつゝかと、そのまどひさへ解けがたく、心亂れて立つたり居たり。こは生存へても添はれねば、思ひあきらめ死ねかしと、父母の呼び給ふならん、オヽそれ〳〵と娘氣の、よしなき迷にひかされて、死する覺悟に裾はしをり、幸ひ誰も見しらぬ樣子ト裏口より脱出でて、いづくともなく急ぎ行きぬ。其明の朝おかめの居ざるを、見つけて驚く文之丞、家內の男女もおどろきて、其所此所と搜せども、その行方知れざりければ、文之丞はつく〴〵思ふに、日ごろより金五郎を、夫

前編中巻

第二回

在然程に、お龜は金五郎が鎌倉へ下りし後は、いとゞ心もむすぼれて、とかく浮立つ事もなく、今日や便のありもやせん、あすや音信あらんかと、あだに過つ日を指をりかぞへ、一日々々とくらすうち、早くも半年あまりも過ちて、彌生の末になりにけり。されどもいかなる事にやありけん、金五郎の方より音信の、文さへ來ねばひとしほに、おかめはおもひいやまして、ほのかに聞けば鎌倉には、お雪といへる娘ありて、ゆく〳〵は金五郎に、娶合する約束なるよし、きいて猶さら胸つぶれ、さうとは知らずうか〳〵と、たよりの文をたのしみに、待ちし心のおろかさよ、殊に妹伕のかたらひも、せぬ中なればなか〳〵に、いつの世にかは添ふ事ならず、といふて今さらよそほかの、男持つ氣はさら〳〵なし、今は日頃のたのしみの、かひさへ泣いてくらすのかと、おもへば千々に胸くるしく、あるにもあられぬせつなさを、父文之丞にもかたられず、ひとり心をいためしが、只その事のみ思ふものから、うつら〳〵と床病の、朝な夕なの食事さへ、ろく〳〵すゝまずうち臥しぬれど、もとより妬む心なければ、あぢきなき世と

むきで唾だらう」おかめ「なんのマアもつたいない、夢にもそんな心は持ちません。たとひ業平さんが生れかはつてまゐりましても、私はあなたに見かへる心は、爪の垢ほどもござりませんヨ」金「いゝかげんな事をいふ、見かへるこゝろは富士の山ほどあるだらう」おかめ「モウ〳〵あなたはなぜそのやうに、わたくしが申すことを、お疑ひあそばしますえ」金「うたぐりやアしねへけれど、虚らしい言ひやうだから。それが信實まことなら、かならず短氣を出さねへで、便をするのを俟つてゐるなよ」ト背をさすればお龜はうれしく、おかめ「私はどのやうにも、俟つてゐる氣でござりますから、どうぞきつとお便を、早くなすつてくださりまし」ト互につきぬ名殘のなみだ、いとしかはいもまだ知らぬ、明のからすのなく〳〵も、おかめは金五郎が支度する、かたへに持ものなど取そろへるうち、用意こと〴〵く整ひしかば、いざ出立とざゝめくを、金五郎はさすがにも、跡に心の殘れども、せんかたなければ氣をとりなほし、父とおかめに別をつげて、迎の者ともろ共に、心づよくも旅立つを、今が名殘と文之丞、おかめも共に門透まで、おくり出でつゝ金五郎の、蔭見ゆるまで見送れば、あなたも見かへる別の泪、たがひに胸の憂也霧に、かくれて姿はみえずなりぬ。

し」トしとやかなるあいさつに、文「イヤそれはかくべつ。おかめもそちと同じやうに、ちひさい時から共に育ちて、兄弟同様にくらしたから、今別るゝも悲しかろが、これも定まる約束事、無分別の出ぬやうに、よく暇乞したがよい」トすいもあまいも嚙みわけた、ことばをしほに金五郎は、父の前を退きて、おのが部屋へ入り、翌日出立のことなれば、何くれ彼くれそれ〴〵に、旅の準備を落もなく、とゝのへて夕餉をしまひ、楊枝をつかひながらおかめの部屋へそつと來り、金「どうだお龜、ちつとは氣色が直つたかの」おかめ「ハイなんだかどうも鬱塞ぎつゞけで、やつぱり頭痛がいたします。アノあなたはどうでもあしたの朝、お立ち遊ばすのでござりますかえ」金「さうさ、モウ迎が來て居るから、どうも延されもしねへのさ。それだからおめへの顏を、見るのも今夜かぎりゆゑ、忘れぬため見をさめに、能く見て置かうと思つて來たよ」ト笑ひながら顏を見れば、おかめは恥かしげに顏をあかめ、おかめ「またそんな虚ばつかり、それはほんの氣やすめでござりませう」金「さうさ、いづれおいらの言ふことは虚さのう。どうでモウ明日から、居ねへのだから、本當にやアしねへ筈だ。さつきおとつさんが言ひなすつた事を、おめへも大かた聞いたらうが、おいらが行つたその跡では、おかめに才子をとつてやつて、この家を讓るとおつしやつたヨ。のう、もしその聟が色男なら、首つたけはまりこんで、おいらのやうな者は、うしろ


文之丞


金五郎

は、住居もさだめずさまよひしが、親の身では不孝な子でも、憎し罰あたれとは思はぬにや、ここに住居を定めてから、仕合と不自由なく、暑さ寒さの難儀もせず、人なみ〴〵に世を送る、今このくらしも浪々の、日かげ者の望はなけれど、不孝の罪なりやどのやうに、今さら悔んでもあとへはかへらず。サこゝの道理をよく辨へて、女色その外あしき事には、遠ざかるやうにするがよい。今度そちが、わが本家へもらはれ行きて、御主君へ事ゆることはいとめでたく、我身のよろこびこの上なし。又お龜はちひさい時より、そちにこの家を譲りなば、娶合して夫婦にしやうと、思うては居たれども、本家へ行かば何として、わが手で育てし娘でも、氏素性といひ弟の手まへ、いやしい娘は妻にはなるまい。殊にかための盃を、させたといふ中ではなし、そちを彼地へ下した上、おかめには婿取つて、この家をゆづらば我は又、ほかにたのしみ望もなければ、かならずともに今の教訓、わすれてはならぬぞや」（トわが身のことと世の事を）まじへてさとす言の葉の、はじめをはりを金五郎、つぶさに聞きて胸にたゝみ、ありがたなみだと別の泪、（目にうかめてつをのみこみ、）金「だん〴〵と事をわけて、お心ふかき御教訓、きつと骨身にこたへまして、ありがたうござります。もとよりおろかな私なれど、心のおよびますだけは、忠孝二ッを勵みます。あなたもずゐぶんお身の上を、御大切に御養生なされ、おすこやかにお暮しなされて下さりま

ず、譬高貴縉紳をはじめ、稻刈漁る下ざままで、子を思ふのは同じ事。もはやそちも十八なれば、案じるほどのことはないが、かういうては異なものなれど、人なみ〳〵より文武の道も、すぐれたといふではないが、マアどのやうな人中へ、出してもまんざら恥かしくもなし、というておのが智にほこり、藝に慢じて多くの人を、眼下に見くだしてはならぬぞや。又一ッには祖父さまを大事にかけ、われにかはりて孝行してくれ。二ッには弟文次郎は、養父といへども其方が爲には、いはずと知れた血すぢの叔父ゆゑ、ずゐぶんともに心にそむかず、これまた孝行せにやならぬぞ。また鎌くらは繁華の土地ゆゑ、人氣が都と違ふから、よく風俗をのみこめよ。仲間の付あひそのほかも、仕儀によつてはのつぴきならねど、物事萬うちばにして、花にさそはれ月にうかれて、女郎買なども三度に一度は、はづされなけりや行くがよいわさ。さりながら傾城傾國の譬もあれば、かならず深くはまらぬやう、心にこゝろを亂しちやならぬぞ。只忠孝に心を勵まば、その身の末もあしからねど、兎角に酒色は染まりやすく、むかしより名將勇士も、色に迷ひ酒に溺れて、大切の身をほろぼす例も、まゝあることゆゑ、この道はふかく耽らずつゝしめよ。こゝが常言の、恥をいはねば理が知れぬといふ通り、早い例はこのおれが、若氣のいたりといひながら、無分別な心から、親を捨て故郷をはなれ、家出なして暫が中

ちよけれ、昔の亂世の時で見な、なんぼおいらの樣なちよろつかな者でも、武士の種だから、軍のところへ、是非出なけりやァならぬわ。よしか、出れば敵の首を取るやら、こつちの首を取らるゝやら、二ツに一ツ命がけ、親を捨て子を捨てて、戰場へ出るは武士のならひよ。むかしと今と比べて見な、まことに樂なこの世の中、そんな危い狂言もなく、武士の身に取つては本意ぢやなけれど、實に今は極樂世界。こゝの道理を考へると、三年や五年遠ざかつても、苦にするほどのこともねへが、そこがやつぱり自己勝手で、十分でも不足におもふは、人情のあたりめへさの。それだからかならずとも、きな〳〵思はず時節を俟ちなよ。短氣を出したそのあとでは、後悔してもはじまらねへから、心を大きく持つがいゝよ」ト、としわかなれど金五郎、さかしき言葉に事をわけて、さとすをりから下女來り、「若旦那さまえ、旦那さまがちよつと入らつしやいましと」トいふに金五郎は、「ヲイ〳〵」トおかめの部屋を出でてゆく。父文之丞は一間の内に、煙草くゆらし文よみ居る。金五郎はしとやかに、父の傍にかしこまる。文「オヽ金五郎か。さてモウ鎌くらへ下るのも明日なれば、旅の調度を、落なく用意するがよいぞや。それにつけてもくど〳〵と、いひきかすまでもなけれど、獅子はわが子を谷へ投げ、其生立を見て安堵して手ばなすと、燒野の雉子夜の鶴、子ゆゑにまよふは親の常、鳥獸でさへそのやうなるを、況て人間は猶さらに、子を見ること親にしか

けばとて、おめへに此家をゆづりでもすると、ぜひ聟をとらねばならぬが、さういふ時は、マアどうする心だ」おかめ「そりやモウあなたがおつしやらずとも、海より山より御恩の深い、おとつさんのおつしやることを、背く心はござりませんが、この事ばかりは背きます。たとひ妹伕のおゆるしをうけずとも、あなたをのけて餘の人に、添ひます心はござりません。あなたが東へお下りあそばして、問音信もござりませんと、わたくしはその時は、とても生きては居りません。死ぬる心でござります」金「馬鹿な事をいひな。それはほんの短氣といふもの、死ぬくれへなら何も苦勞をするにはあたらず、添ひたいと思へばこそ、いろ〳〵に氣をもむぢやアねへか。ほんに惡い事はいはねへから、すこしのうち辛抱して、便をするのを待つてゐな。コレサおかめ、なぜそんなに泣きなさる。子供かなんぞの樣に、別れて一生あはぬといふ事ぢやアなし、ちつと氣をしつかりもちな」ト、いはるゝほどなほおかめは、うれしさかなしさやるせなく、「あなたがそんなに事をわけて、やさしくおつしやつてくださるほど、猶悲しくなりまする。考へて見れば見ますほど、しきりに心細くなりまして、あなたがお宿にお出あそばすうち、いつそ死んでしまいたくなりました」ト、金五郎のひざにとりつき、なげくこゝろをくみとりて、金「エヽ、おめへもマア心の弱い。なんぞといふと死ぬ〳〵と、譯もないその繰言。マアよくものをつもつて見な、こんなことをいふと年寄めくが、今世の中が靜だか

それはマア勝手次第。おほかたモウ東へ行くから、いやになつた時分だらう。のうおかめ、いやか」おかめ「いゝえ、なんのいやでござりませう。心にもないことばつかり。たとへどの様な所でも、あなたが呼んで下さいますなら、私はうれしうございますが、あなたは東へお出あそばしたら、あづまの女中は上人品で、まことに意氣だと申しますに、私の様なものは、とてもモウ、お捨てなさるは知れてをりますもの、末々の事を考へますと、寝ても夜の目もあひませず。そのうへ實の父さんは、お顔さへ見ぬその中に、三年あとにお果てなされ、跡に殘るは姉さんひとり、里に行つてお出なされば、いつぞや逢うて名告あひ、便になつたりなられたり、致しませうと存じましたに、そのかひもなく里親に、だまされて身を河竹に、おしづめなさりしといふ事ゆゑ、今は杖にもはしらにも、力に思ふはおとつさんばかり。末を憑みしあなたにまで、おもひがけないこん度のおわかれ、心ほそい身になりました」ト。いひつゝなみだをそでにのごへば、金五郎もそのこゝろねをおもひやりつゝ、むねなでおろし、「なんのこつたな。そんなに末の末までを、案じるから氣がふさぐ。なるほど兩親に早くわかれ、姉さんにも生わかれては、心細いももつともだが、人間は老少不定、さだめないのが世のならひ、命ばかりは神佛の、力づくにもゆかぬのは、みな定まれる身の宿世、それをくよ〳〵氣にしても、役にもたゝぬ事ぢやアねへか。又たとへわかれ〳〵に、遠く隔つて行

にねへ大あたりで、それからなんでも當りつゞけて、町も屋しきも紀の〳〵と、べたいちめんに女子供が、ひいきすると上がたまで、もつぱらの評判よ」おかめ「そのひいきの多い紀の國屋にも、まさつたお方がまた東へおくだりあそばしたら、マアどんなでござりませう」金「紀の國屋よりいゝ男とは、そりやアどこの人だ」おかめ「どこのお人か御存じでありながら、目もとから口元まで、音羽やに紀の國屋を、一ッにしたよりよい御容貌と、學文のけいこにお出なさる、みなさんが常不斷、さういつておほめなさいますよ」金「なんのこつたかさつぱり解せねへ」おかめ「わかりませんかえ、あなたの事さ」ト、につこりわらひ、顔をかくす。金「何をいふかと思つたら、おいらが顔の棚おろしか、いゝかげんにおひやるものだ」おかめ「アレ本當でござりますよ。それだから私は、いちばい苦勞になりまして、いろ〳〵な事を案じますと、胸がいつぱいになりますよ」金「なんのこつたな、をかしくもねへ。戯談はじやうだんだが、ほんにあんまり案じなさんな。迎と一緒にあしたの朝、鎌倉へ立つて行つても、落ついたら早速に、お前を迎へによこすから、ちつとの中だ、待つてゐな。しかし末しじうは、親父がおめへとおいらをば、夫婦にすると豫ての料簡、なれど今までつひしかに、親の目をしのんだり、なまめいた事もしねへから、そこがおめへの料簡一ッで、もしおいらに遠ざかつて、呼によこすが待遠なら、縁づくともどうなりと、

イ、いろ〳〵のことを案じますと、こゝろぼそくて氣がふさいで、いつそ頭痛がいたします」トほろりと落す一トしづく、金五郎は見てとりて、「おほかた今度東の本家へ、おいらが別れてゆくものだから、それでふさぐといふのだらう。マア〳〵何はともかくも、けふは南であつたかいに、こんなに立こめたり引かぶつては、なほのぼせてわるいから、ちつと庭でもながめな」トびやうぶを片よせ夜着とりのけ、丸まどのしやうじをあける。おかめはやう〳〵おき直り、あたまをおさへてさしうつむく。金「コウおかめ、つよく頭痛がするなら、なんぞ藥でもやらうか」おかめ「ハイありがたうござります。あんまり氣がふさいで、頭がおもくてなりませんから、今しがた實母散をのみましたヨ」金「さうか、あんまりつまらぬことをくよ〳〵思つて、ほんとうの病氣が出るとわりいから、今日はちやうど天氣はよし、芝居でも行つて見ればいゝ」おかめ「いゝえ、わたくしは、芝居も見たくはござりません」金「ハテこまつたものだ。行つて見ればいゝがのう。團藏だの璃寛だの、國五郎なんぞが大ひやうばんで、それに東からのぼつて來てゐる、路考の門弟の路之助が、又新作のはやりうたを、舞臺でうたつて、三絃の手があるが、いつ見てもまことに妙だヨ」おかめ「さやうでございますとネ。アノいつぞやあなたと御一緒に、浪花へまゐりましたとき、濱芝居で見ました評判のよい、紀伊國屋はどういたしましたネ」金「源之助か。今は東都へ歸つての、ます〳〵評ばんがよくつて、去年の春向町の芝居で、苅萱の狂言をしたさうだが、近年

ん、文通のみは苦しからず、又孫の金五郎は、罪なき身ゆゑさいはひに、文次郎に男子なければ、迎をつかはしこなたへ引取り、いく〳〵は假名家の家名を、相續さするほどに、支度をとゝのへ待つべし、と返事に委細を聞くよりも、文之丞は大いによろこび、わが身の出入はかなはずとも、悴を本家へつかはすは、このうへもなき事なりと、金五郎を近くまねき、鎌くらの事くはしくかたり、日あらず迎の來るをまちて、鎌くら表へくだるべし、と聞いて金五郎は今さらに、おもひがけなく本家を繼ぐは、身の本まうトいひながら、一人の親をのこしおき、そのうへ子どもの時よりして、行すゑたがひに夫婦ぞと、胸におもひしお龜にも、わかれんことの心憂苦、いまだ枕はかはさねど、何かにこゝろおくそこも、なくうちとけてにくからぬ、中なるものをうち捨てて、行くことにやとさすがまだ、おぼこそだちの心には、當惑するも理なり。お龜もこの事聞きしより、心細さの案じごと、とやせんかくやと思ふうち、鎌くらより金五郎を、迎の人の著きしかば、今はわかれとなりけるかと、人目の關のしのび泣、ふさぐは女子の常ながら、いとゞに胸もむすぼほれ、部屋に屛風を立まはし、衣引かつぎ打臥して、なみだのひまもなくばかり。をりから障子引あけて、立まはしたる屛風のはしを、折かへしてはいる金五郎「おかめ、けふはどうだ、やつぱり氣色がわるいのか」 トいふ聲に おかめは 目を見ひらき、にっこりわらひまくらをあげ、「ハ

の恩、報じがたきをくちをしく、おもふものから考へ見れば、主家の掟をやぶりつゝ、妻と不義して出奔せしかど、今にも詫のかなひなば、ふたゝび主家へ立歸る、こともあらんとゆくすゑを、彼是おもひあはすにぞ、はやくより金五郎には、文學武術を敎へしに、もとよりさかしきうまれゆゑ、一を聞いて萬を知る、文武の才に長けたれば、幾程もなく上達して、今ははや金五郎は、武士の道くらからず、殊に和歌、連俳、茶の湯、插花のたぐひまで、人なみ〳〵より勝れたる、よき壯士とはなりにけり。お龜もまた世にめづらしき、發明のうまれにて、文よみ歌よみ手ならふ道はさらなり、物たち縫針の技藝にすぐれ、琴三味せんの調さへ、いとうつくしく何にまれ、女子の道にくらからず、その生立もたのもしく、人もうらやむばかりなれば、文之丞は何とぞして、古鄕の父に勘當わびて、子どもの顏を見せまほし、と人を憑みてつど〳〵に、父白翁にわびたりける。鎌倉には白翁も、惣領の文之丞が、身のいたづらから家出して、今は花洛に相應に、文學武藝の師範しつ、不自由なくくらすうへに、孫まで出來しと聞きつるが、いかなるさまに生立つや、尋ねまほしトおもふをりから、人づてにて文之丞より、わび言をいひ入れければ、白翁は、うれしさひとかたならねど、いつたん主君へ勘當と、披露せし身をたやすくは、ゆるす事もならざれば、そのうち首尾を見つくろひ、君へねがひて出入をさせ

かはし、あぢきなき世をおくりけり。さればまた吾妻なる、假名家が家には文之丞が、不義なして家出せしかば、文字之進は怒りつくやみつ、にくからぬ忰といへども、世間のおもはく上への聞え、親の名を出す不孝の罪、打捨ててもおかれねば、これ等の趣主君へ達し、文之丞を勘當なし、弟文次郎に家督をゆづり、嫁を迎へて是に娶合せ、その身は隱居し名を白翁と、あらためてくらすうち、文次郎夫婦の中に、一人の女兒を儲けけり。是につけても文字之進は、文之丞のことをりふしは、何かにつけてうち案じ、おもひ出しつゝほのかに聞くに、今は花洛に住馴れて、男子持ちて不足なく、くらすと人の風便ゆゑ、案じの胸もやすまりて、ゆく〳〵は文之丞が子を、文次郎が娘に娶合せ、家をゆづらば血すぢも絕えずと、心に思ひゐたりけり。

第一回

されば月日に關守なくて、文之丞が一子金五郎は、今年十七歲、お龜は十五の春となりしが、二人ともに天性の美男美女にして、華洛廣しといへども、たぐひまれなる容顏は、梅と櫻の婀娜くらべ、おとらずまさぬ風情なり。文之丞はこのとしごろ、古鄕をはなれ遠き都に、世をおくるそのうちも、二人まで子をまうけ、何不足なき身のうへにも、十年あまり過ぎしころ、鎌くらの家をぬけ出でて、父のところへ便さへ、ならねばいとゞなつかしく、子を持つて知る親

ならず、名さへいはうてお鶴と號び、いつくしみそだつるうち、妻はふたゝび妊身になりて、次の年また女子を産みぬ。しかるに今度は養生の、惡しかりしにや四十のうへの、年子の事ゆゑおのづから、血心おとろへ循環せざるや、惡血さへもおりかねて、あと腹のしきりにかぶり、そのなやみの堪へがたきと、心のつかれに養生かなはず、つひに空しくなりにけり。こゝにおいて六兵衛は、子なきを神や佛にいのり、二人まで子をまうけしに、今はた思ひがけもなく、妻は子を捨て亡靈の、數に入りたる身の當惑に、なげくより外なかりしを、近所の者にいさめられ、まづ亡骸は取納めても、をさまりかねし胸のうちに、とやかく思ひつゞくれば、貧しきくらしに男の手一つ、いかゞして二人の子をば、そだてんやうもなかりしゆゑ、心を鬼とも蛇ともなし、藪へなと子を捨てんかと、思ふまでにくるしみて、一日々々とくらしけり。さるを假名家文之丞は、傳へ聞きておのが身に、引くらべては捨置きがたく、今不自由なくくらすゆゑ、當歳の子を親しらずに、もらひうけて育てなば、その親の手もすこしはかろく、なりもやせんと人づてに、この事をいひ入れて、妹娘をもらひうけ、名をお龜となづけ、また幾許の金を六兵衛におくり、姉なる娘をはぐくみ給へ、と情ある深切に、六兵衛はいたくよろこび、むすめが行するゑふかく憑み、これより後、めぐまれし金を少々お鶴に添へて、さる家へ里につ

便にして、難波をさしてのぼりつゝ、彼地此方とさまよひて、おもはしからぬ日を送れば、この地にをりても要なきことと、夫より皇都へおもむきて、三すぢ町のほとりに、さゝやかなる家を借りて、學文劍法の指南をしつ、月日をこゝにおくりしが、もとよりその技に勝れたれば、わづかのうちに弟子の、あまた付いて繁昌しければ、おのづから金銀の、融通もよければ、些づつの金を人に貸しなどして、その利を取りて不足なく、暮す程に月滿ちて、妻はやす〳〵と玉のごとき、男子を產出しければ、名を金五郎とよびなして、蝶よ花よと育つるうち、滿つれば缺くる世のならひ、妻は產後肥立たぬ上に、あしき風を引そへて、醫療手をつくすといへども、その驗更になく、つひに無常の風にさそはれ、冥途の旅におもむきぬ。文之丞はたよりに思ふ、妻に別れて今さらに、かなしみやるかたなしといへども、いかんともすべきやうなければ、泣く〳〵野邊の送をなして、跡ねんごろにとむらひけり。かゝりし程に幼兒を、乳なくてはそだてがたしと、乳母をかゝへ養育させ、只金五郎を手の中の、玉の如くにいとをしみて、光陰の過づをかぞへけり。こゝにまた珠數屋町に、古鐵買の六兵衛とて、夫婦かすかにくらす者あり、年ごろ子の無かりしかば、つねに是をふかくなげき、神佛にいのりしゆゑ、その信心の通じたりけん、妻は今年四十歳にあまりて、はじめて女子を儲けしかば、夫婦のよろこび大かた

小三金五郎 假名文章娘節用

江戸 曲山人補綴

前編上巻

ほつたん

太刀は大山石尊の、さゝげ物に納れば、長刀はひやめしの、草履にその名を止めたり、弓は矢場のあねさんが、活業の助となれる靜けき御代のことになん、斯波家の藩中に、假名家文字之進といへる者あり、二人の男子ありけるが、兄は文之丞と云ひ、弟は文次郎と喚なして、兩人ともに文武の道を、常にはげみて勸めしが、兄文之丞はいつしかに、奥づとめの御側玉章といへる、容貌よき女と人しれず、契をこめて語らひしが、日にまし互に思ひつのりて、しのび〴〵の密話に、玉章はいつか只ならぬ、懐姙の身となりけるにぞ、この事今にも現れなば、とても添ふ事なりがたし、とおもへば二人ひそかに語らひ、ある夜館を忍び出で、すこしのしるべを







そも〳〵男女のなからひは、八百萬の神達の、出雲の御社に群つどひて、結ぶえにしのさまざまなる、竈の前の三介が、相撲出生のおさん殿と、物置の出合の國訛、片言まじりの口説事、寡婦と養子の芋田樂、喰はぬは損者のびんづる隱居が、むしろやぶりの女ぐるひ、あるは帶屋の長右衛門が、老實をして筥入の、お半の壺へくらひ込み、浮名を桂川に流せしも、皆こと〴〵く緣なるべし。こゝにあらはす一部の册子は、いかなる人の筆に稿けむ、小三金五郎が一期の奇譚を、いと長々しく綴りたるを、書肆のもて來て、補ひてよと、需にしたがひ、をこがましくも、いさゝかこれに筆を加へて、櫻木に壽くこととはなりぬ。

文政拾四年辛卯孟陽

江戸　文盲短齋しるす

主要人物

黄金屋爲右衛門(はじめの名はため助、奈久四郎の父)　おぬか(爲右衛門の妻、奈久四郎の母)　奈久四郎(爲右衛門悴、おゆきの夫)　おゆき(奈久四郎妻、爲右衛門が故郷の大盡の娘、)　おてこ(舞鶴屋の抱へ、遊女名まひ鶴、奈久四郎に身請せらる)　もみ助(黄金屋番頭)　おひき(もみ助のかこひもの)

事件の梗概

㊀ 越後より鎌倉に稼ぎに出でたる爲助、遂に金持となり黄金屋爲右衛門と改名、妻おぬかとの間に一子奈久四郎を儲く。㊁ 爲右衛門死去し、奈久四郎放蕩甚し。やがて爲右衛門が故郷の大盡の娘にて鎌倉の親類たらふく屋太利右衛門の許に居るおゆきといへるを妻とす。㊂ 暫しの後、再び遊蕩に耽る。惡番頭もみ助、奈久四郎に勸めて舞鶴屋の遊女舞鶴を身請して圍はしむ。籾助は既におひきといへるを圍ひ居るなり。㊃ 奈久四郎、おゆきに難くせつけてたらふく屋へ追かへし、舞鶴本名おてこを家に入れる。㊄ おゆきは太利右衛門の心配にてお出入屋敷なる畠山家へ奉公す。㊅ 奈久四郎は家屋敷も人手に渡すに至り、場末に移りて何がしの會所に筆執る役をなし、細き煙を立つ。㊆ おてこは男の子をまうけていよ〱増長し、姑おぬかを虐待し、又くりから龍の吉五郎といへる男と姦通、姑を殺さんとなす事再度に及び、遂に過つてわが子を殺す。㊇ 後奈久四郎をそゝのかして太貝福屋より金を貰ひ來らしめ、それを持ちて吉と共に走る。㊈ 奈久四郎は、太貝福屋及びおゆきの苦心に賴りて、以前畠山家へ貸上の巨金御下金になり、再び大分限者となりておゆきを迎へ、子孫長く榮ゆ。

事件の梗概

㈠ 鎌倉に金有屋箱右衛門とて有德の商人あり、妻のおよわ二人の男の子を殘して死す。㈡ 圍ひ妾おしやく、本妻の看護に託して家に入り、遂に其儘ずる〳〵べつたりとなる。㈢ 長男金太郎は劍術を好みて楠左門の弟子となりしが、武者修行を志して家出す。㈣ 次男錢藏家督をつぎて松竹屋龜右衛門の娘おひなを妻とす。㈤ おしやく出入の髮結才三と不義をなし、其文(ふみ)をおひなに拾はれ、却つて姦策を弄しておひなをいぢめる。㈥ 長男金太郎、以前金有屋に勤めしいせ田や忠右衛門と邂逅し、連れられて家に歸る。㈦ 箱右衛門不在中、一夜盜賊入れりとの騷ぎに、金太郎追駈けて切殺せしはおしやくなり、大に驚き切腹せんとしたるに、牛澤六郎の裁判により、おしやく金を奪ひ髮結才三と駈落せんとしたる段判明す。㈧ 爰に望月家の浪人薄田段五兵衛の娘お花といへる者、父の歿後、母の妙節と二人、忠僕袖助と共に金有屋の別莊あるその地内に住む。㈨ お花の不在中、井原垣藏といへる不良浪人妙節を殺し、袖助にも深手を負はしむ。㈩ お花母の敵を打たんとして金太郎の弟子になり、終に本望を達して尼となる。⑪ さて金太郎は武者修行中の手柄に據りて、御譜代弓頭役に新規召出され、かねておひながすゝめし今出川の物頭長橋わたるの娘かをるを妻となす。

(五) 二十一編より二十五編に至る

て三人の追剝にあひ、おへみは財布を奪はれて谷へ落つ。此追剝實は權太が賴みし者共にて、金は權太の懷に入りたるなり。㉗ 權太おひよのは玉の一を麓の宿屋に置き去りにし、上方をさして赴く途中、おひよのは權太に谷川へ突落され、權太は狼にくはれて死す。㉘ 谷へ落ちたるおへみは獵人一ッ目熊右衛門に助けられ其家に連れられ、不得止その女房となりて苦しみしが、この山里より鎌倉へ下女奉公に出づるお竹といへる娘に託したる手紙により、遂に鎌倉に呼び返さる。㉙ 叔母手づからおへみの髮を切りて尼とし、別莊へ隱居させたり。㉚ 其後萬太郎五才の祝をなし、小糸は本妻となる。㉛ おへみ髮を剃りて、名もへ妙と改めしが、惡緣猶つながりて、再び玉の一と契り、遂に孕みて女子を產む。㉜ 小糸今の名はおいとが計ひにて、その女子を引取り、後々は萬太郎の嫁にもしたしといふ。㉝ へ妙、おいとの至誠に感激し、おいとと姉妹の盃をなすに至る。

（四）　十六編より二十編に至る

主要人物

金有屋箱右衛門（金持、屋敷方の銀主）　おしやく（箱右衛門の圍ひ女、姦佞）　金太郎（箱右衛門長男）　錢藏（箱右衛門次男）　おひな（錢藏の妻、松竹屋龜右衛門の娘、御奉公の名ひなぢ）　おはな（薄田段五兵衛の娘、孝女）　妙節（おはなの母）　かをる（今出川の物頭長橋わたるの娘、金太郎の妻）　髮結才三（町内の廻り髮結）

歸り、葛籠に入れて化粧坂へ賣りに行く。おてい追跡して却て仁三に蹴られ氣絶す。（十二） 折から通りかゝりし寺岡平六に助けられ、昔隣家たりしよしみにて其家に引取らる。（十三） おちよは月花家の遊女に賣らる、仁三は其金を持ちて逃亡せり。（十四） おちよは此所に圖らずも萬左衞門に遇ひ、一伍一什を語る。（十五） 萬左衞門、其昔おちよを拾ひし廣田小太夫をつれ來りて逢はす、小太夫おちよの守袋を見て羽打から四郎の娘なる事を知り、その妻おていと寺岡平六とを招きて母子の對面せしむ。（十六） 廣田小太夫萬左衞門とおちよ身請の談整ひ、月花屋の亭主に相談す。（十七） おちよの養母およく、手切の金高につきて折合はず、歸途だいばの仁三に邂逅して相爭ひ、其結果遂に悶絶するに至り、仁三は驚きて逃去れり。（十八） かくておちよは無事實母の許にかへり得たり。（十九） おちよの母おていは、寺岡平六の世話にて手習師匠の跡を讓受け、遂に小糸及小太夫等の好意にて、半次郎をおちよの聟に迎へ、家內和合せり。（二十） ある日半次郎おちよ兩人の留守中、浪人黑星眼平來り、遂におていを切りつけし折から、夫婦歸來り半次郎は親の敵眼平を討つ。（二十一） 此事により半次郎は召出されて二代目羽打から四郎となる。（二十二） おへみは下女おひよのにそゝのかされて愈わがまゝ募り、遂に按摩玉の一と姦通す。（二十三） ある夜、其現場を萬左衞門に見つけられ、その翌日二百兩の金を持ち、おひよのと玉の一を伴ひ、玉の一の在所越後へ駈落す。（二十四） 德若屋にては追手を出して捜索せしも得ず。（二十五） 叔母おみよの計ひにて、小糸をまづ妾として家に入る。（二十六） 駈落の三人は、熊谷の先の立場茶屋にておひよのの弟檔六に遇ひ、それを供に連れて伊香保に廻り、草津へと志し、ころばり峠に

平（秩父家の浪人、悪漢）　おみよ（おへみの叔母、らく隠居）　おひよの（おへみ氣に入りの惡玉下女）　玉の一（年若き按摩）　權太（おひよのの弟、惡漢）
一ツ目熊右衛門（獵師、惡漢）

事件の梗概

㈠ 鎌倉に質兩替の有德なる商人德若屋萬左衛門といへるあり、家つきの娘たる妻おへみ、わがままの女にてやきもちやきなり。㈡ 萬左衛門小糸を圍ひおき一子萬太郎を儲く。㈢ それより前、おへみ此事を知りて、下女おひよのを語ひ、洗濯婆おのりをしておろし藥を小糸に吞ましめんとす。おのり仕損じ、金を騙取して逃亡す。㈣ おへみの叔母おみよは、小糸の子萬太郎をおへみに養はしめんとして苦心すれども得ず。㈤ おへみは又おひよのと謀りて、其弟權太に小糸を暗打せしめんとす。㈥ 小僧牛次郎下女おちよと契りて偶々雜藏にあり、其密談を聞きて小糸の母に告ぐ。㈦ 小糸は叔父秩父家譜代の足輕寺岡平六に預けらるゝ事となり、途中つけ行きたる權太は平六に追拂はる。㈧ おへみは密計の暴露を以ておちよの密告に出づるとなし、藏にておちよを責め、遂に殺さんとして果さず、其夜盜賊入りておちよ命を助かり、家に逃歸る。㈨ 養母およくその若き情夫だいばの仁三と謀りておちよを化粧坂へ賣らんとす。㈩ おちよ逃出して投身せんとし、圖らずも救はれたる女乞食おていは、浪人羽打から四郎の妻にて、實に十六年前貧苦の餘り己を捨てし實母なり。おていは之を名乘らんとして流石に得せず。⑪ だいばの仁三逐ひ來りてお千代をつれ

しめられて去る。⑪ 此婚禮に關する插入の一話あり。要に曰く、鎌倉屈指の金持持丸屋長左衛門、その悴の長次郎の嫁として金升屋福右衛門の娘おとくを迎ふ、婚禮の當夜少しも違はぬ二人のおとく來る、大騷ぎの結果、其一人は一年前に此世を去りし金ため屋の娘お花の幽靈にて、生前箱根の湯場にて一夜を長次郎と契りし者とわかり、長左衛門の情にてお花の幽靈長次郎と盃し、お花は先妻おとくは後添といふ事になり、其夜おとくの夢にお花より祕藏の人形を貰ひしと見て、男子を孕む。⑫ さておいなは竹吉と共に四ッ手屋かご六の許に行きて五六日潛みしが、竹吉に愛想がつき、且又二人の姦計を立聞きて其儘逃歸り、遂に花水橋より投身するに至る。⑬ 然るに恰も染付屋の妻おかれの乘りたる屋根舟の上に落ちて救はれ、また主人の家に歸る。⑭ 斯くておいなはおかれの計ひにて竹吉の手も切れ、遂に改心して染付屋の地内にすむ茶道具屋とぶや大吉の妻となり、男子を産む。

(三) 七編より十五編に至る

主要人物

徳若屋萬左衛門（質、兩替にて有福の暮し）　おへみ（はじめの名はおみの、萬左衛門妻、剃髮してへ妙と稱す）　小糸（藝者、萬左衛門の圍はれ、萬太郎の母、後に萬左衛門の本妻）　おちよ（浪人から四郎の娘、徳若屋の下女、後に湯女千代吉、遂に半次郎の妻）　半次郎（星の井家の浪人の悴、徳若家の小僧、後に二代目から四郎）　おてい（浪人羽打から四郎妻、おちよの實母）　およく（おちよの養母）　寺岡平六（小糸の叔父、秩父家の家來）　だいばの仁三（およくの情夫）　廣田小太夫（秩父家の家來）　黑星眼

二、主要人物

染付屋佐良右衛門(有徳の瀬戸物屋、前名佐良太郎)　おかね(佐良右衛門妻、近江屋の娘、)　おいな(染付屋の下女、佐良右衛門が手をつけし女)　ぼら吉(おいなの兄にて正直一遍の魚屋)　竹吉(おいなの情夫、無頼漢)　大吉(茶道具屋とゞや、おいなが亭主)　おへそ(おいなの叔母、欲心深き女)　金神長五郎(かしら)　持丸屋長次郎(長左衛門伜、おとくの夫)　おとく(金升屋娘、持丸屋長次郎妻)　おかつ(長五郎妻)　お花の幽靈(金升屋の娘、長次郎と契りし女)

事件の梗概

㈠ 鎌倉に瀬戸物を手廣く商ふ染付屋佐良右衛門といへるあり、ひとり息子佐良太郎の嫁を求む。
㈡ 第一の後補者りんず屋の娘は、佐良右衛門の兄黑石といへる隱居の言によりて、其不品行を知り止めとなる。
㈢ 依て黑石の妻おいしが插花の教子近江屋の娘おかれ、桃の井家に奉公せしを佐良太郎の嫁とす。
㈣ 後兩親は死し、佐良太郎今は佐良右衛門とて四十七、おかれは四十二、伜は二十八にて嫁もあり、本編の事件は端を茲に發す。
㈤ 佐良右衛門、下女のおいなに手をつけ、おいな姙娠す。
㈥ 妻おかれ自ら其兄ぼら吉を談じて妾の證文させ、やがて女子を産ませて後ひまを遣す。
㈦ おいな家に歸りて後身の行ひよからず、叔母おへそに預けらる。
㈧ 叔母のさしがねにて、再び佐良右衛門を呼出し、頓て茶道具屋喜の八方に圍はる。
㈨ この事また本妻おかれに知られ、おかれが計ひにて更においなを妾宅に住ましめんとす。
㈩ おいなは情夫竹吉と駈落し、竹吉元の親分金神長五郎の家に行く。折から長五郎夫婦は出入場の婚禮に出かけ、留守を預る長五郎の叔母に恥

谷橋渡（附人の重役）　横島眞雁（志賀の山の家中）　栅浪右衞門（谷橋の下役）　おりつ（浪右衞門の妻。一時のかへ名おいと）　峰松琴次郎（梅月院に仕へる料理人、一時のかへ名次郎吉、後浪右衞門同役）　おふで（はじめ浪右衞門の後妻、後琴次郎の妻）　尼君梅月院（志賀の山左衞門の太夫はるのぶの母君、谷橋渡等の主人）

事件の梗概

㊀ 足利室町の頃、都の近郊に住む志賀の山左衞門の太夫はるのぶの母に梅月院といへるあり。
㊁ 其附人の重役谷橋渡の下役に栅浪右衞門とて年は五十に近き男、亡妻の妹おりつとて二十三四の才女を妻とす。 ㊂ 梅月院家の料理人に峰松琴次郎とて二十五六の男あり、浪右衞門の家族の如く出入す。 ㊃ 同じ家中に横島眞雁とて三十五六の男、不圖おりつの艶色を見かけ横戀慕せしも、おりつに恥しめられ、却ておりつと琴次郎との密通を讒構して浪右衞門に說く。 ㊄ 浪右衞門其言葉を信じ、且偶然疑はしき兩人の振舞を見つけ大に怒る。 ㊅ 兩人刃の下を逃れて春日社に兄妹の誓をなし、有馬の湯に身を潛む。 ㊆ 舊主梅月院保養に來り、藥師にあげたる貞節の額を見ておりつならん事を推し、遂に谷橋渡をして兩人を搜し出さしめ、兩人の潔白を浪右衞門に說かしむ。 ㊇ 浪右衞門が後妻おふで此事を聞きておりつに義理を立て、自ら離緣を求めて髮を切り、おりつ亦髮を切る。 ㊈ 尼君梅月院の計ひにて、竟におりつはもとの浪右衞門の妻となり、おふでは琴次郎の妻になりて共に子孫を儲け繁榮す。

（二）　三編より六編に至る

あり、一日金之助と乳母とをつれて向島の姉―今は尼となりて紫雲といふを訪ふ。㊂其夜金之助と乳母とはそこに泊り小さん一人歸る。㊃その翌早朝、金五郎來りて小さんの自害を知る。㊄漸く野邊の送りもすまし、金之助と乳母とは紫雲の許に移る。㊅白翁は金五郎の態度の激變せるを見て深く心配し、遂に小三を訪れて近隣の口よりその死を聞き、更に紫雲を訪れて、始めて小三の身の上を知り悉す。㊆依りて金之助は乳母もろともに引取りてお雪の子となし、小さんを先妻と呼做したり。㊇小さんが百ヶ日、金五郎寺まゐりに行きたる留守、ふと金五郎の煙草盆中より小さんの書置を發見し、お雪母と共に之を讀みて其貞烈に泣く。㊈金五郎忠孝を勵み、家内も和順に、お雪の腹にも子を儲けていよ〳〵家富み榮えぬ。㊉金五郎の實父文之丞も年來の勘氣遂にゆるされ、都の家には養子をなし、其身は東へ下りて一同に對面し、又小さんの身の果を聞きて、悲歎の餘り深く無常を觀じ、剃髪出家して諸國行脚に出づ。

女房形氣内容細目

(一) 初編より二編に至る

主要人物

怒りて勘當し、文次郎に家を讓りて嫁を迎へ、自分は隱居して白翁といふ。文次郎夫婦の間に女子一人を儲く。これを發端とす。㊅ 金五郎十七歲、お龜十五の春、金五郎は文次郎方に引取らるゝ事となり、兩人後年を誓ひて別る。㊆ 其後金五郎より音信なきを歎き、お龜は家出して生死も知れず。㊇ 金五郎、後に此事を知りて面白からぬ日を送りしが、ある日醉狂といへる友にさそはれ、大磯の燈籠見物に行きて、圖らずもお龜の姉、今は千歲屋の抱へ眞名鶴を相方とす。㊈ 後また額俵屋といふ茶屋の新規抱へ小さんが、お龜なりと知れ、その苦衷を聞きて深く契を交し、眞名鶴と姉妹の對面をもさす。㊉ 斯くていよ〳〵しげく通ふ中、小さん身おもになりてはや三月なり。

二　編

㊀ 眞名鶴はさる有德の商賈の隱居に請出され、向島の邊に住む。㊁ 金五郎は小三請出しの金策に苦心する內、額俵屋夫婦の深切にて、小三は無事に子を產み金之助と名づく。㊂ 金太郎腰の物購入のためと僞り實父より金一包を得、小さんを請出し、母子を青柳橋のほとりに住ましむ。㊃ 小さんは金五郎がまだ部屋住にて金の不如意なるを氣の毒がり、再び藝者をなす。㊄ 金五郎の留守勝なる不身持止まず、隱居白翁之を愁ひ、小さんに逢ひて、一時の緣切を賴む。

三　編

㊀ 小さんは煩悶の極、ぶら〳〵病氣にかゝる。金五郎憂慮して止まず。㊁ 小さん心に決する所

娘節用内容細目

主要人物

假名家文字之進（斯波家の藩中、後隱居して白翁）　文之丞（文字之進の長男）　玉章（奥づとめの御側）　文次郎（文字之進の次男）

金五郎（文之丞の一子、後文次郎の養子）　おつる（珠數屋町古鐵買六兵衞の長女、後遊女となりて眞名鶴、終に、尼となりて紫雲）　おかめ（六兵衞の次女、文之丞の養女、金五郎の幼なじみ、後藝者となりて小さん、金之助の母）　おゆき（文次郎の娘、金五郎の妻）　金之助（小さんが生みし金五郎の一子）

事件の梗概

初編

㈠ 斯波家の藩中に假名家文字之進といへる者あり、長男を文之丞といひ、次男を文次郎といふ。㈡ 文之丞奥づとめの女玉章と契り、玉章懷姙の身となりて共に館を忍び出で、遂に都三筋町のほとりにて學問劔法の指南をなし、相當に暮す中男子出生す、卽ち本篇の主人公金五郎なり。後玉章は死去す。㈢ 又珠數屋町に古鐵買の六兵衞といふ者あり、其妻四十にあまりて女子を儲けお鶴と名づく。其次の年また女子を擧げ、産後妻死去す。㈣ 文之丞、六兵衞の難澁を聞き、其當歳の子を親知らずに貰ひうけてお龜と名づく。これ本篇の女主人公也。㈤ 文字之進は、文之丞の不孝不義な

目録

最良の法となせども、甚しく浩瀚にして、到底その理想を實現し得べくもあらず。されば今本文庫に收むるに當りては、或は表紙の繪、或は表紙裏の繪、或は前書きの繪、或は本文の繪等、各方面に渉り、成るべく畫面の多趣にして原本の面影を偲ぶに足るべきもの若干を添へたり。

以上の二書を併刊するに際し、假節用は假名遣を統一し、會話に鈎識を施したる外、用字句讀等概ね原本のまゝにして、甚しく意義の通達を害するものの外、敢て改訂を加へず。女房形氣は原文殆んど總假名にして句讀なし、よりて意義の上より努めて平正の漢字を配し、句讀を施し、會話には鈎識を加へ、以て閲讀に便じたり。本書の校訂校正は主ら星野亮太郎氏の力に頼る。玆に特記して深謝の意を表す。

大正三年五月　　校訂者　塚本哲三

て、第十九編の稿は安政五年京山九十歳の四月に成り、その間實に十四年の久しきを歴て續刊せられたるもの也。而して京山の死は十九編稿成るの九月、その發兌は翌年の春なるを以て、嚴格の意味よりいへば、十九編は彼の遺稿と稱すべく、二十編は其草稿を採りて秀賀の補訂せる所なるべきか。原本十九編に京山九十一歳と署し、二十編以下最初一二編の緒言に京山の遺艸と稱するものは、蓋し前作の惰力を利用し、以て從來の好評を持續せんとせる書估の一手段に過ぎざるべきか。二十五編の緒言には、更に二十六編の刊行を豫告せりと雖も、未だその版本の世に流布するものあるを見ず。京山は京傳の弟にして、戲作者の第二流に位する者、秀賀は更に下りて、其傳亦明確ならず。されば本書が同種の小說たる田舍源氏の如きに比して遙かに遜色あるは固よりなれども、亦よく當時の時好に投じ、多大の好評を博したるものの一なる事論を俟たず。本書の如き合卷の類は、讀み本、人情本、洒落本の類と異なり、每葉悉く畫にして、文句は寧ろ其畫の解說とも稱すべく、文と畫と相俟つて始めて其趣を爲せるもの也。されば此種の覆刻は、本文庫黃表紙の如く、全部寫眞製版となすを

緒言

娘節用三編九卷は曲山人の筆に成り、人情本中最も出色あるものの一に居る。曲山人の傳は未だ世に詳ならずと雖も、其脚色の比較的自然にして、よく當時の世相を寫せるが如き、又その描寫の清新にして、人物の個性を表現せるに近き等より觀るに、蓋し當時の隱れたる一大作者たりしを疑はず。本書は他の人情本と等しく、事多く狹斜花柳の巷に關すれども、其ヒロインとして捉し來れる小三といひ、又其姉眞名鶴の如き、金五郎の妻お雪の如き、何れも當時の社會道德よりすれば、所謂烈女貞婦の鑑にして、彼の徒に淫靡蕩奢の風を寫し、以て無學者流の低級趣味に投ぜんとしたる滔々たる人情本とは、自ら其選を殊にすと稱すべし。文亦流麗滑達、よく情景に伴へり。殊に小三の遺書の如き、寔に人情の極美を現し、讀者をして思はず涙潸然たるものあらしむ。

女房形氣は草雙紙の合卷と稱するものにして、其二十五編中、一編より十九編迄は山東京山の作に係り、其餘は鶴亭秀賀の補訂又は述作に成る。第一編の稿成りしは弘化二年の夏にし

娘節用

教草女房形氣

全

